

《竜》の満ちる世界

UNKNOWNと戦いたい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

竜帝の愚行が招いた、災厄の一つ——八欲王が、一夜にして滅びた。

その夜を境に、世界は《竜》で満たされた。

目次

設定	1
設定（地理等）	7
IF — 未知の溢れたセカイ	
IF. 1 — 『もしも』の彼ら	15
IF. 2 — 仲間	22
IF. 3 — 『冒険』の一幕	29
IF. 4 — 南方の大地	36
IF. 5 — 砂海に座す紅の楼閣	44
本編 — 竜の満ちる世界	
00 — 《龍》	51
01 — 死の支配者	59
02 — 未知なる脅威	67
03 — 強敵の対価	76
EX — 潜む脅威	84
04 — 空の襲撃者	91
05 — 学ぶ智者	99
06 — 決戦前夜	107
07 — 決戦	116
08 — 決着	124
09 — 勝利の宴	132
EX — 隔てる領域	140
10 — 竜王国	147
11 — 竜王	155

3 5	—	変わる姉妹	350
3 4	—	備え	342
3 3	—	来たる龍とは	334
3 2	—	束の間の	326
3 1	—	続く襲撃	317
3 0	—	人間たちの	309
E X	—	超越者たち	302
2 9	—	悔恨と進捗	295
2 8	—	襲来の餓竜	286
2 7	—	新たな武器	278
2 6	—	強いられた変化	270
2 5	—	変化の一手	262
2 4	—	覇種の力	255
2 3	—	襲撃者	247
2 2	—	動く	240
2 1	—	超越者たち	232
2 0	—	大陸閉鎖	225
1 9	—	黒く染まり	217
1 8	—	予兆	209
1 7	—	トブの大森林	201
1 6	—	森の賢王	193
1 5	—	身近な脅威	186
1 4	—	数多の障害	178
1 3	—	厄災の予兆	170
1 2	—	過酷な世界	163

36—来たる狂竜

37—鳴神狂奔

38—恐れぬ者、恐れる者

39—覚悟の時

40—集結の時

41—破滅への抵抗

42—龍群、激突

43—邪棘降り立つ防衛線

44—龍を喰らい、闇は光に転ず

45—終わりへと向かう

46—淵源に挑む『英雄』

47—決着のその後

48—ナザリックの変化

49—白からの祝福

50—変化した従者たち

51—変化の証たる『街』

52—《竜》の満ちる世界を生きる

その後——

AFT. 01—課題探しと

AFT. 02—北国にて

AFT. 03—北国の窮地

AFT. 04—襲撃の銀刃

AFT. 05—未知の先へ

AFT. 06—戦うメイドたち

AFT. 07—灼熱の地に眠る未知

358

367

375

383

391

399

407

415

423

431

439

447

455

464

472

480

488

496

505

513

522

530

538

546

A F T.	0 8	異世界からの遺物	554
A F T.	0 9	危険地帯に眠るモノ	562
A F T.	1 0	拓かれていく世界	570
A F T.	1 1	確たる生存のために	578
A F T.	1 2	齎されたモノ	585
A F T.	1 3	変わろうとする者	592
A F T.	1 4	『外』へと踏み出すために	600
A F T.	1 5	最も古き伝承	608

設定

★転移後世界

『竜帝』の行動により、『祖なる者』が導かれた世界。

祖の存在を呼び水として、他のモンスターも転移していたが、60年前時点では何事もなく、六大神と称えられた者たちも大事を起すことなく、辺境の守護を行っていた。しかし、500年前に八欲王が現れ、ドラゴンたちと竜の虐殺を成したことで、世界の在り方を歪めんとしたことで『黒龍』が世界の敵と見做し、彼らが築き上げた国、共に転移してきた空中都市諸共亡ぼした。

その活動に呼応した『赤き王』が大地を変質させ、『始種』が活性化。環境の変化に伴い、現地の生態系が狂ったところに竜たちが食い込み、一気に勢力を拡大。知恵ある者は敵対していた者たちと手を組み、知恵無き者は竜に、敵対した勢力に滅ぼされていき、現地の生態系、勢力図は根本から狂っていった。

・竜王（ドラゴン）

ある意味、最大の被害者たち。

八欲王により勢力を大きく削がれたところで、個として遙かに格上の『黒龍』を始めとする者たちが出現し、八欲王とその拠点を壊滅。その後、勢力を削がれていたが故に『赤き王』『始種』の活動に手出しが出来ず、世界が変わるのを指を咥え眺めるしか出来なかった。

更に200年前、『朽棺エルダーコフィン・ドラゴンロードの竜王』が現状打破を求め、始原の魔法により数多の国を破滅させてから、状況は悪化。当事者は滅尽龍に喰い殺され、事態を重く見た強大な竜が、真なる竜王たちの監視を行うようになり、一層窮屈な思いをしている。

尚、ワールドアイテムによる世界改変の影響は和らいであり、難易度は上がったが、始原の魔法を習得すること自体は引き続き可能。ただし、力を得ることは即ち古龍に目をつけられることも同義であり、知見を持つ者なら余程のことが無ければ手を出さない。

ワールド・マジック
・『始原の魔法』

真なる竜王が行使する、世界級にも匹敵する強大な力。龍による世界の変化、八欲王による改変との相克により、現在でもドラゴンの血を引く者ならば習得自体は可能。ただし、難易度の高さに加えて、習得とほぼ同時に古龍が動くため、やろうとする者は非常に稀。

ワールドアイテム以外にも、古龍種モンスターや、ごく一部の非常に強力なモンスターには通用しないなど、対抗も増加。反面、始原の魔法を使えるならば、これらの力の一部の影響を遮断することが出来る、通じるモンスターに対してならば強力な対抗手段になるなど、有用であることに違いは無い。

・モンスター

異世界からの侵略者、或いは新たな生態系の基盤。最初に転移した祖を呼び水として、この世界に流れ着いたモンスターたちであり、500年前の騒動を機に爆発的に勢力を拡大。また、彼らが根付く環境が、どこまで『彼らの世界』に近いかで、周辺の法則の歪み方が変わる。

レベルでは、80未満が簡単、下位若個体に相当し、80～89が下位、90～95が上位にあたり、

その先のレベル100までに位置するのが変種個体、或いは剛種個体や、ナンバリングのG級個体となる。特異個体などの場合、レベル+5前後の強さとなるほか、純粋な現地環境ではレベル100相当辺りがモンスターの限界となる。

言い換えれば、現地より『彼らの世界』側に近い環境となった場所では、それより更に強い個体が発生する可能性が高まる、という事でもある。辺境では肥沃な土地であるリ・エステイーゼ近郊でも剛種等止まりなのは、これらの栄養条件が大きく関与している。が、大陸全土で見てもレベル100クラスの出現頻度はそう高くない為、この辺境が地獄であることに違いは無い。

また、そのラインを超える個体ともなれば、更に異なる強みを有するようになり……………

・特殊個体

覇種、烈種、始種や至天、歴戦、迪異種などの総称として、ここでは表記。本編では明確な登場は無いも同然だが、基本的にここに属するモンスターは難易度300オーバー、つまりはレベル100以上であり、武具の質が低い現地戦力では基本的に勝ち目無しも同然。ユグドラシルプレイヤーであろうと、レベル100は当然として武具の質、技量双方が非常に高い水準で要求される。

そして、この域にあるモンスターの多くは魔法を行使可能であり、更に一部は魔法系職業レベルを獲得しているものも。ただし、現地人以上に職業レベルによる補正が激減しており、エレメンタリストなどの特化職以外では魔法を使える、以上のメリットは薄め。だが、長所を伸ばす、短所を補う等バラバラの目的で習得、行使される魔法は不意打ちとして非常に厄介。

・法則（ルール）

現地においては、大きく三つのルールが存在している。

かつてから存在する現地のルール、八欲王の改変によるユグドラシンのルール、そして古龍たちに適した環境へと改変されたことで根付いたルールの三つであり、それぞれが競合、或いは調和している。その度合いは土地の侵食具合によるが、全域の共通点として

- ・位階魔法の習得、行使が可能
- ・基本ステータスの時点で、レベル80〜90相当。その代わり職業補正が大きく減少
- ・職業補正が減少している分、レベル差が絶対的なものではなくなっている

・全員が即死への完全耐性を有するのに対し、攻撃属性への完全耐性は消失

- ・一部状態異常には、完全耐性を貫通する強力なものが存在
- ・時間系は、古龍及び一部極めて強力な種以外には有効。ただし、使用の度耐性がつく

など。また

★ユグドラシルのルールが強い程

- ・ 職業補正が大きくなる
- ・ レベルの差による優位を取りやすくなる
- ・ 反面、職業により出来ることが縛られやすい

★竜の世界のルールが強い程

- ・ 職業補正が大きく減少する
- ・ レベル差による優位が薄れる
- ・ 職業による縛りが緩和され、出来ることが大きく広がるなどの利益、損失が存在している。

・ ワールドアイテム

基本的には、烈種以上の特殊個体などにとっての監視対象。

嚴重な警備が成されているなら兎に角、そうでない場合は監視が置かれ、場合によってはその場を龍が住処とする。一例としては、南方で『聖域』とされていた地に安置されていたワールドアイテムに対し、『古龍の王』がその場へと来襲、地形そのものを根幹から改変する規模で力を振り、現在では彼の聖域へと作り替えられている。

ナザリツクが『悪』として暴虐を成した場合、『禁忌』『極み』が来襲する原因がこれ。

ユグドラシル時代、全ギルド中最多のワールドアイテム保有数を誇るだけあり、純粋な戦力として脅威と見做すのではなく、10種を超えるそれらを守り切ることが可能とする存在として、超越者中の超越者たちに白羽の矢が立つのだ。

・ 『禁忌』

『祖龍』『黒龍』『紅龍』『煌黒龍』『煉黒龍』に『赤龍』を加えた古龍たちの総称。

ワールド級に匹敵する存在である古龍の中でも、文字通り次元の違う存在。基礎的な能力も非常に高く、全ての個体が事実上の防衛不可、軽減不可の超高火力攻撃を有している上、世界に災いを齎す存在

でありながら、世界を守護する者でもあるが為に『ワールド・デザイナー』に加えて『ワールド・ガーディアン』まで有し、『始原の魔法』をも行使できるバランスブレイカー。

更に、八欲王を亡ぼした『黒龍』に、『紅龍』『祖龍』までもが、第二の姿を有している。

・『極み』

『暴餓』『雷刃』『龍帝』『迅瞬』『灼零』『紫雷』『爆煙』『紅輝』が分類。文字通り、生物としての極致へと達した存在たち。始種、辿異種、歴戦王すら軽々蹂躪可能な怪物たちであり、能力抜きで純然たる実力では禁忌をも超える存在。能力込では禁忌の次に位置する超越者たちであり、大陸全土に散らばり監視を行っている存在でもある。北西地域の監視は『紅輝』の役割であり、そこと隣接するエリアで『灼零』が竜王の監視を行っている。

・辺境

本編の舞台、大陸北西の端部。

西には海原、真南にはエイヴアーシャーとその先の死の森、南東には竜王国とその先に広がる砂海が立ちはだかり、東には未開の大森林……と、綺麗に外部との交流の術が途絶えている。過去、何とか外部との交流を成そうとした者たちが『冒険者』として立ち上がり、補助組織としての組合が成立したものの、紆余曲折の末、国境を越えた軍に近い役割となるなど、不運なまでに徹底的に交流の芽が摘まれている。

その分、各勢力間の繋がりは強固であり、北方で隔絶された評議国以外は交易も盛ん。反面、環境の変化に乏しく、結果として苦境に追いやられてもいる。

・『聖域』

歴戦王へと至った強者たちの出生地。『古龍の王』座す領域であり、ワールドアイテムが眠る地。

森林、荒地、溶岩、氷雪、湿地など、本来あり得ない形で複数の領域が集まり、それぞれで生態系が形成されている、特異な場所。亡き国が聖域指定していた事から、周辺諸国も同様に聖なる場所と見做し、同時に常に最大限の警戒を向けている。

生存競争は熾烈の一言で、来る者拒まず去ること叶わず、といった様相。歴戦王クラスとは即ち、この熾烈極まる生存競争の中で力をつけ、この地に溢れる莫大な生命エネルギーに順応し、更には数多の障害を蹴散らし外部へと旅立てるだけの強力な個体、という事になる。

設定（地理等）

・リ・エステイーゼ王国

試される大地、修羅の国。肥沃な地で育つモンスターには亜種も多く、変種、奇種のみならず、剛種まで出現する地域。アゼルリシア山脈とその麓に広がるトブの大森林の西々南部地域を擁していることもあり、モンスターによる被害、並びに強力な個体の出没率は辺境随一。

その分ヒトも精強であり、対応力も高め。リザードマン、ダークエルフ、トードマンなどと共生関係を構築しており、彼らの力も借りて生を勝ち取り続けた。また、襲撃頻度も多いが、生産力は辺境随一であり、食糧事情は良好な部類。ただし、周期的に極端な寒冷化が起こり、その年は農業面で大打撃を受けやすい。

国内の主なモンスター生息域は、トブの大森林、アゼルリシア山脈近郊をはじめ、点在する森林、リ・ボウロロール、リ・ブルムラシユール近郊の山岳地帯。北部、西部の海岸域は海のモンスターにも注意が必要であり、たびたび漁業被害を受けている。特に北部では、グランセルに生息するモンスターが陸海問わず現れることがあり、精強なモンスターに頭を抱えている。

尚、ヒトが到達できない海の深淵には、黄金の龍が座している。

・バハルス帝国

不遇な国。東方のモンスター、亡国の亜人残党が主な仮想敵となる国家。王国と比較してだが、モンスターは弱い。が、あくまで比較してであり、時折王国周辺並みに強力な個体が現れ、甚大な被害を齎すことも。近年、それにより帝国四騎士より二名、死亡者を出している。

襲来モンスターの質で劣る反面、量、種類で勝ることから、個々の戦力より集団での対応力が求められやすく、そのため突出した個が出現した場合に被害が拡大しやすい。また、王国と比べモンスターの主な生息域が国内に点在しているため、軍より行動速度が速い冒険者から、更に手続きを一部簡略化できるワーカーの需要が高い。

国内におけるモンスターの生息域は、アゼルリシア山脈と、その麓に広がるトブの大森林に始まり、国内に点在する山岳部、ボウン沼地など。北部の海岸部でも時折被害はあるが、グランセルのモンスターが現れることは稀であり、その分モンスターの強さも控えめ。が、先述の通り生息域が点在している上、東方からのモンスター、亜人の来襲があるため、王国と比べ経験の量を稼ぎやすい環境である。

・スレイン法国

人類の守護者（真）。辺境最古の国家ゆえ、膨大な知識を有しており、周辺諸国への支援を惜しまない。その知識を基にした国内防衛用の軍のほか、優れた武具を優先的に配備した精鋭部隊『六色聖典』を有し、辺境最高のモンスター討伐率を誇る。が、聖典部隊の主な活動圏は国外であり、モンスターの生息域の少なさと併せ、辺境諸国では最も国力がある。

軍は国内に専従させている反面、それ以上の精鋭である聖典部隊は積極的に国外に派遣しており、危険な土地の偵察、要監視モンスターの情報収集、ならびに『占星千里』が視たものの調査から、危険なモンスターとの交戦、他国の窮地への増援などを行っている。

国内にモンスターの生息域は少なく、質もそこまでではないが、それでも防衛軍を動員し、数日かけて討伐、もしくは撃退することがほとんど。また、エイヴァーシャー大森林、およびその南方に広がる、瘴気に包まれた『死の森』からモンスターが流れ込む場合があり、その際には聖典部隊も動員して対処に当たる。

・アベリオン聖獣連合

アベリオン丘陵に広がる、亜人と人間の共生勢力。聖は旧聖王国の民を示し、獣は獣の特徴を持つ者が多い亜人を示す。西には人間たちのかつての故郷、ローブルの地が変じたローブル熔山帯が鎮座し、南にはエイヴァーシャー大森林、北は山岳地帯と、過酷な立地で逞しく生きる勢力。二つの危険地帯に面した地であるが、幸いにも流入する個体は縄張り争いに敗れた手負いなどの比較的弱い個体が殆どであ

るため、両地帯の危険度に反し被害は少なめ。

軍は人間、亜人の混成であり、主に亜人種が前衛、人間種が後衛、支援という形を取る。中には種族の域を超え、亜人と肩を並べる人間もいるが、ごく少数。また、土地柄から索敵を主とする者たちの練度が高く、危機察知能力では連合の一般偵察兵が各国の精鋭に次ぐ程のものを持つ。

過去、エルフ国が原因となった災禍により、アベリオン丘陵の全亜人のうち、三割が流れ弾一発で死滅しているほか、その後人間と手を結ぶか否かで割れたことで、モンスターが入り乱れた紛争状態となり、聖獣連合に属する亜人の種族は大分減っている。

・竜王国

辺境南東の、弩岩竜に食い荒された不毛の地を流浪する民。砂上を進む船を開発しており、居住域の大部分が超大型船上に建築された都市となっている。ビーストマンとの共存が成されているほか、彼らを恐れた先人の努力から、辺境でも有数の畜産地となっており、草食種の肉の質では辺境随一。また、辺境で唯一、一部の竜を従えている国であり、生息するモンスターが弱いことを抜きにしても、戦力は豊富と言える。また、スレインと共同開発した設置型の大型武装の試運転を積極的に行う、他国に食糧を輸出するなど、他国との関係を重んじている。

これは、土地由来の資源に乏しいことが大きく、国家の要となった大型船の材料も含め、多くの国の支援を受けたことに起因する。そのため、国家としてみれば辺境随一の貧乏であり、発展したマジックアイテムの製造業を始めとする諸産業で頑張つて稼いでいる。そんな中でも数少ない一獲千金の機会が、周期的に来る山の如き巨龍を相手取る、収穫祭。祭で得られる龍の鱗や、彼らに由来する鉱石の数々は非常に高値で取引されており、それらが主な資金源ともなっている。

土地が枯れている分、モンスターたちも強くはないが、この地の者は船という抛の防衛戦、並びに竜というパートナーと共に戦う術に長けており、他の国と異なる非常に独特なものとなっている。また、こ

の辺境の竜王でありながら、古龍による監視を逃れている『黒龍の巫女』フエイタリス・ドラゴンロード『破滅の竜王』、ドラウディロン・オーリウクルスの秘める力は、他の真なる竜王と比べても遜色ないものであり、対竜、対龍においては他の竜王をも凌ぐ力を発揮できる。

・ドワーフ国

アゼルリシア山脈内部に座す、ドワーフたちの国。古龍の生息域へと限界まで集落を近づけており、軍事力では他より格段に劣る。が、安全な環境でその鍛冶技術を存分に振るっており、周辺諸国の武器の大部分を供給しているなど、軍事力の低さが気にならない程、その貢献度は大きい。

・エルフ国

森を巻き込む大騒動を引き起こした末に滅びた、愚者が王であった国。

邪な欲を起こしスレイン法国との戦争を始めた末、邪毒の棘竜を侮り、彼の竜を強引に叩き起こそうと愚行を繰り返した末、南方の『死の森』の主を引き込もうと画策したことで、その怒りを買った。『竜魔事変』解決の立役者である先代と異なり、竜を侮ったことで愚王は滅び、エルフたちと、森に住まう竜、アベリオン丘陵の亜人と多くの命が犠牲となった。

この時、望まぬ子を産んだばかりの、当時の法国の切札が死力を尽くし、その命と引き換えに生きていたエルフたちを逃し、邪毒の竜の猛威が法国に、我が子に及ばぬよう、竜を森の奥へと誘導した。その亡骸と武器は未だ発見されていないが、時期を同じくして、邪毒の竜の寝床が変わったとか。

・カルサナス都市国家連合

亜人の脅威がモンスターの脅威へと置き換わった国。元々の脅威であった亜人の一部が迎合したことで、国力自体は増強。帝国と比べればマシであるが、東方からのモンスターによる被害も無視できない

規模であり、東部の都市で優れた者が育つ傾向にある。

・アーグランド評議国

始種たる凍王の座すグランセル氷原により、南方から隔絶された亜人国家。

過去、調査隊が縄張りを侵したことにより、不定期に司銀龍の襲撃を受ける他、氷龍が縄張りを有するようになって以来、定期的に更なる寒冷化に晒されている。そんな過酷な環境の中、永久評議員のスヴェリアー||マイロンシルクが独自に編み出した始原の魔法、寒冷化した国土に根付いた草食種モンスター^{フレスト・ドラゴン}の牧畜により、評議国の食糧事情を余裕あるラインにまで回復させている。

反面、グランセル氷原という特大の危険地帯に隔絶されていることから、交易を含め南方との交流は皆無。竜王以外に南方に直接転移できる者がほぼ無いことに加えて、余程のことが無い限りは常にモンスターへの警戒が必要な為、外部に戦力を派遣する余裕があまりないことが要因として挙げられる。

戦力は亜人の冒険者、軍隊のほか、一部のドラゴンと、武具の質を除けばスレインを軽く凌ぐ程。中でも、永久評議員に属するドラゴンたちは、全員が始原の魔法を修めた真なる竜王であり、国家の安寧に尽力している。また、たった数名ながら、独自に始原の魔法を修めた竜王も現れており、^{フレスト・ドラゴン}霜の竜のオラサーダルクはその筆頭として名を馳せている。反面、先の厳しい戦力事情から、永久評議員たちが国外に力を貸すことは皆無。中でも、スヴェリアー||マイロンシルクは独自の始原の魔法の存在から、国内の食糧事情の生命線である為、離れること自体が不可能に近い。

・かつて存在した大国

アゼルリシア山脈を隔て、存在していた国。

『竜魔事変』に際し、刻竜の来襲を受けたことで東西問わず甚大な被害を受け、相互の連絡すらままならなくなった結果、それぞれが独自に復興を目指し続けた末、異なる二つの国として成立した。

・エイヴアーシャー大森林

辺境三大危険地帯の一つ。邪毒の棘竜こと、迪異種エスピナスが住まう場所。

他二つと比べると比較的マシながら、深部では王国領内クラスの個体がしのぎを削るなど、地獄のような有様。加えて、過去に邪毒の棘竜が暴走した際の被害もあり、周辺諸国から強く恐れられている。その件もあり、環境的には他二つと比べ平穏ながら、調査の手は全くと言つていい程入っていない。

尚、この南方には常に瘴気に包まれた『死の森』が存在している。

・ローブル熔山帯

旧ローブル聖王国の地で、熔山龍が命を終えた後に生じた、辺境三大危険地帯の一つ。

覇竜を始めとする凶悪なモンスターに加えて、龍の亡骸より生じた火山に住まう覇種と歴戦王の炎龍夫妻や、迪異種リオレウスなど、魔境ぶりと言えばグランセル氷原にも並ぶ。加えて、かなり広範囲が灼熱地帯と化しており、人間亜人間わず長時間の活動が難しい上、生息するモンスターはどれも過酷な環境に適応した強力な種であるなど、調査すらままならない程。

その分、深部では熔山龍の生命エネルギーの残滓から生じた龍脈炭や、外殻の残骸から得られるユグドラシル外由来の鉱物、灼熱地帯に適応した植物など、得られるものも上質。ただし、そこまで到達できた現地民は存在していない。

・グランセル氷原

アーグランド評議国とエ・アナセルの間に広がる極寒の地。

始種たる凍王の力により変じた土地であり、極寒に適応した、強大なモンスターが数多く根付く大地。大型飛竜から超大型飛竜、果ては強大な古龍まで生息している上、その中の一体である司銀龍は極めて縄張り意識が強く、過去にその縄張りを侵したことにより、アーグラ

ンド評議国は数百年にも渡り襲撃を受け続けている。

また、ローブルと異なり、轟竜や暴鋸竜などの一部のモンスターは、リ・エステイーゼ北部

へと来襲し、被害を及ぼすことも少くない。特に暴鋸竜は、空陸海と活動域が広いため、寒冷期にはリ・ウロヴァールやエ・ナウイル等の内陸部で活動していることも確認されている。その反面、比較的寒冷なエ・アナセル等北部の地では、野生のポポ、ガウシカ等の狩猟とその珍味であるポポノタン、ホワイトレバー等が特産として知られている。

・アゼルリシア山脈とトブの大森林

リ・エステイーゼ王国、並びにバハルス帝国にとって身近な危険地帯。魔樹は出現からほどなくして滅びているが、同時に竜たちが飛来し始めたことで、リザードマンやダークエルフといった、森に棲んでいた知性ある者たちは人類に合流。現在、森に亜人等の集落は存在していない。

アゼルリシアの内部には爛輝龍が生息している都合、余程の強者以外は接近すらない為、外縁部の洞窟以外では、生態系があまり発達していない。幻獣が生息するエリアより下の山嶺部では、起伏の激しい土地や比較的寒冷な土地に適応したモンスターが生息しているものの、トブの大森林の存在から、山嶺部のモンスターが麓に降りてくることも、森林を抜け被害を齎すことも稀。

トブの大森林は、大きく外縁部と深部に分かれており、外部に被害を齎すのは主に外縁部の個体たち。中でも、北西部と東部の被害が殆どであり、南部域では外部への被害は皆無。これには、南部の長として高度なコミュニティを構築している、森の賢王の手腕によるもの大きい。

また、彼女のコミュニティが水源となる湖等の要所を確保し、山嶺部付近に住まう強力なモンスターとのコネクションを構築していることにより、あらゆる意味で安全な領域と化している。ただし、彼女たち自体はそう強くなく、地形を活用したゲリラ戦術などが本領であ

り、防衛戦に滅法強い反面、侵攻戦にはとことん向かず、その勢力圏の拡大は極めて難しい。

尚、魔樹を滅ぼした存在については、伝承の類が遺されていない。が、朧月の如く詳細を掴めぬこのモンスターは、確かに実在している。

・大砂漠

原作でいう、亜人種国家のあつた土地を飲み込み存在する、砂の大漠。中央には、八欲王の居城であつた空中都市エリュエンティウの残骸が鎮座しており、彼の地の真相を求める者を始めとする、多くの人々の心をへし折つた領域でもある。

大陸中心部から極めて広い範囲に存在しており、三種の巨大古龍を中心に、砂漠地帯に適応したモンスターの中でも、砂中での活動に秀でた種が多く生息している。巨大龍たちの回遊により砂に流れが生じており、特に龍の周辺では砂嵐も発生する為、地上での活動を主とするモンスター、飛行能力が高い部類でないモンスターには厳しいエリア。

主に生息するのは、砂海に適応した魚竜種モンスターとモーラン種の巨大古龍であるが、大砂漠と他の地の境界となる砂漠地帯等では、また異なる生態系が構築されている。中でも、南方では一定周期で休眠と活動を繰り返す尾晶蠍、弩岩竜などの強力なモンスターが生息している。中でも、最南端の地は『聖域』に通じているともされている。また、かつてエリュエンティウ近郊にあつたとされる国の残党が集つた周辺では、未知の巨大な存在による破壊、略奪活動も確認されているとか。幸いなことに、彼女に大海原が如き大砂漠を安全に渡る手段は無く、その脅威が北上する可能性は低いと言えよう。

IF——未知の溢れたセカイ
IF. 1——『もしも』の彼ら

竜たちが羽ばたく空の下を、二人が歩み進む。

「お、あれだ。あの歪な山が、大蛇の痕跡だな」

一見粗雑なローブを纏うスケルトン、サトルが見上げるのは、歪に
抉れ、形が崩れた巨大山脈。

「おー………なんというか、どれだけの巨躯なのか、想像したくない
な」

似たようなローブを纏う吸血鬼、キーノもそれを見上げ、苦笑を浮
かべている。

「まあな。けど、俺たちは戦うわけじゃないだろ？」

そう笑い、サトル——『ナザリック』という重責を背負うことな
く転移を果たしたユグドラシルプレイヤーは、偶然出会ったアンデッ
ドの少女、キーノ・ファスリス・インベルンと共に、この広い世界を
放浪していた。双肩にのしかかる重圧は無く、未知への好奇心と、そ
れを後押しする『出会い』の存在が、彼らに自由を齎していた。

「無理無理、絶対勝てないって！だからまあ、逃げる準備万端で出発
！」

咲くように笑い、少女が駆ける。その威勢に負けまいと、骸の青年
も駆け出し、競うように抉り削られた山脈へと向かう。広く大陸を旅
して回った彼らは、今や大抵のことでは物怖じしないだけの胆力と、
それを蛮勇に貶めぬだけの実力を得ているのだ。

だからこそ、未知の環境に対し過度に恐怖するでもなく、真っ向か
ら突っ込んでいける。

「『飛行』——」

息ぴったりに魔法を使い、浮かび上がる。そんな鈴木悟……サト
ルの手中には、私物の手帳。その中身は、彼らの冒険の成果そのもの
であり、二人が訪れた様々な地の生息モンスターやその他の生物、植
生、更には大まかな地形までを記した、文字通り情報の宝庫。その価

値が判る者であれば、大枚を叩いてでも欲するだけの、文字通り宝の山の凝縮とすら言える逸品に仕上がっている。

「お、ケルビか。アプトノスといい、こいつらはホントどこにでもいるなあ」

「それくらいじゃないと、今頃絶滅しているんだらうね」

サトルが面白く無きそうにモンスターの名を書き記す中、キーノはしゃがんで植物を探る。特有の物の有無を調べるのが第一であり、言ってしまうえばそれ以外への興味は薄めだ。というのも、サトルもキーノもアンデッドである為、薬草などを用いた回復薬を始めとするモノを必要としていない事が大きく、兎に角二人には需要が無いのだ。

「んー、あまり変わり映えしないな……サトルー、そっちはー？」
「とりあえず、『雷狼竜』と『火竜』辺りの足跡があったな。他は――
――隠れるぞ」

サトルと同時に、キーノも接近に気付き、物陰へ。草食モンスターたちが次々退散する中現れたのは、重厚な鎧に身を包む大型飛竜。灰白色の甲殻に身を包む、飛行能力があるのか疑問を抱いてしまうような巨竜、『鎧竜』グラビモスが何かを探るような動きを見せれば、二人はこれまでの経験より、ある推論を立てていく。

「もう少し留まるついでに、色々調べてみるか」
「そうだね。もしかしたら、良質な鉱物なり、そのある場所に続く道なりあるかもしれない」

それ以上の言葉を交わすことも無く、二人はグラビモスの追跡を決定。幸いにも、見た目通りの重量を有する鎧竜の飛行能力は低く、長時間の飛翔はほぼ不可能。懸念があるとすれば、地面を潜航されてしまうことであるが、そうなってしまったなら、大人しく諦めればいい。何はともあれ、ここでの最初の目標が出来たことに違いは無い。

縄張り意識の強い飛竜から距離を取ったアンデッド二人は、魔法による遠隔視を交え、周辺地理の調査と鎧竜の追跡を並行して行うことに。サンプルがたら、植物に茸類などを忘れることも忘れず、こまめに他モンスターについても書き記しながら、二人は未知の環境を堪能

している。

「あ、あれ……………」

「あの竜が住んでいるとは、随分と珍しいな」

緑白色の体躯を持つ、翼から伸びる一对の触手と、一对の副尾が特徴的な飛竜。降りてくる気配がないことに胸を撫でおろしたキーノは、サトルの手記にさきつと『ドラギュロス』の名を書き加え、自身の懐から取り出した手記には『高度のある土地を好む可能性あり』と、モンスターについて個別に纏めたページに書き加えていく。

冒険のついでに、と始めたものであるが、こうした考察なども二人の趣味となっており、今では生息域の広いモンスターについては詳細に、狭いモンスターでもかなり充実した情報が記載されている。二人して興が乗った結果であるのだが、200年もの歳月をほぼ丸ごと冒険の旅へと費やしてきたこともあり、情報量、密度共に馬鹿にならない。多くの生存圏が防戦中心となる中、この二人は嬉々と冒険をしているのだから、当然ではあるのだが価値は桁外れ。

弱点となる属性から状態異常の通り具合に加えて、目撃例が多いモンスターならば、どこが弱点部位となるか、視覚、聴覚、臭覚のどれが発達しているかなどの情報も豊富に取り揃えており、彼らの活動の根幹を支えるモノともなっている。気付いた情報を小まめに纏める、それらと過去の情報を精査するなど、弛まぬ努力が、彼らを現在まで永らえさせているのだ。

「奴が住んでいる辺り、ここはそこまで暖かくはならないみたいだな。となると、グラビモスは他の場所から出向いていると見るべきか……………出向いている、となれば、それだけ良質な鉱脈がある可能性も高まるな」

「問題は、わざわざこんな場所の近辺に踏み込める能天気は、そうそういな——」

———— イイイイイイイイ ————

奇妙な、甲高い音。それと共に、モンスターたちの行動が一変する中、空はより騒然となった。

「見ろ、あれ！」

逃げようと力強く羽ばたく『冥雷竜』ドラギユロスへと、赫光を纏う銀星が急接近。

「キュアツ、キュアオオオツ!？」

飛竜の中で上位に位置する飛行能力を持つドラギユロスだが、赫光はそれを歯牙にもかけぬ超高速で飛来し、そのまま拘束、拉致される。あらゆる飛竜を超越した劇的加速を行うそれを目で追うアンデッド二人は、大型飛竜を拘束した赫影の向かう先が一際鋭く聳え立つ險峰の、頂であることまでは何とか知覚。

間強力な飛竜である冥雷竜が成す術無く敗れたことを受け、二人は真剣に視線を交える。

「どうする?。」

「調べたい半分、この情報だけでも先に持ち帰るべきというのが半分。ただ、あの場所を調べるにしたって、どのルートが安全かわからないから、大雑把に道を調べるのはありだと思う。当然、それだって逃げる準備だけは万全にした上でだけだ」

「俺としても、退路は転移魔法でどうにかするとして、少しでも周りを調べておきたい」

真剣な声のサトルは、逃げ出すグラビモスを目で追い、続けて空を見上げる。

「突然の出来事のお陰で、モンスターたちは大混乱だ。危険は承知だが、幸い俺たちにはこれまでの冒険で調べ上げた情報がある。どんなモンスターがいるかささえ判れば、一度戻ってそいつらに遭遇しないルート取りなり、計画を立てやすくなる」

強硬策であり、同時に今後への布石も考慮したプランだ。利点は、突然の古龍来襲による混乱の中だからこそ、モンスターの活動の活発化が予想され、それによりより詳細な生息モンスターの情報が得られるであろうこと。欠点は、その活発化した、言い方を変えれば『気が立っている』モンスターとの遭遇率が上がり、その分リスクも跳ね上がる。こと。

二人は暫し言葉を交わした末、軽い探索を行うことを決定。

キーノは異様な空気を纏う本を、サトルは黒基調に紅で彩られた太

刀を手に取り、戦闘態勢に。気にする必要は無いのだが、それはそれとして寒暖対策にと羽織っていたマントを脱げば、その下の装備が姿を現す。サトルが纏うのは、アクセントに紅の入った金属鎧であり、太刀と同一の色彩が、新たに身に着けた仮面が、スケルトンの躰と、半分だけ露わとなる骸骨顔と併さり、禍々しさを加速させる。

対し、キーノは黒鎧と赤い衣類の複合装備を纏っている。幼さの残る肢体ながら、二の腕、肩口に加えて、内腿や脇腹まで露出しているそれは、幾らか煽情的過ぎやしないかとも思われるだろう。尤も、サトルにそういった趣味は無い上、元々はキーノも文句たらたらだったのだが。

「さて、行くか」

「サトル……………本当に、ソレで行くの？」

黒と紅の輝きを宿す太刀『フォロージャー』……………その刀身が宿すのは、烈火の輝き。

ざっくり言ってしまうえば、相手も判らない状態で、炎属性の武器を使おうとしているのだ。

「……………それもそうだな」

背の鞘に太刀を納め、両腰から双剣『サイレントスクリーム』を抜く。属性を宿す光は無いが、それとこの武器が弱いこととは繋がらないものであり、彼が選んだことからそれは察せられるだろう。器として選んだ理由は兎に角として、これらの武器はサトルが命を預けるモノとして、この世界で生きる上での力として選択し、鍛え上げてきたモノなのだから。

「さて、それじゃあまず」

「あの頂までの道から、だね」

二人は目的地を定め、そこへと向け大地を蹴る。草食モンスターたちが怯え、集まり身を潜める中、捕食者にあたるモンスターたちは警戒、或いは逃走の為にそれぞれが動き回り、あちらこちらで邂逅と激突が繰り広げられる。火竜を下す轟竜、氷狐竜に襲撃される碎竜、桃毛獣と接触事故を起こし斜面を転がる岩竜、……………生態系が断片的に見えてくると共に、その騒々しさも見えてくる。

「情報量多……………」

「鉱脈の記録は後回し、とてもじゃないけど手が回らない！」

情報としての優先度は、生息モンスターが第一。どの属性への対策があれば生存率が高まるか、またどの属性の攻撃が通りやすい傾向にあるか、などの情報は、彼らが再び訪れる前準備の為に、必要不可欠なモノとなる。属性でなくとも、傾向が判れば安全な場所の探索もやりやすくなるし、安全な場所が判れば、そこで一息吐くことだってできる。

危険ばかりの世界だからこそ、情報の価値はより高いものとなっているのだ。

「っ、サトルー！」

「今度は何……………はあ!？」

そして、二人が謳歌するのは、この広大で危険で、強大な世界の冒険。唯一といっても過言ではない、未知の開拓者である二人は、未知を切り拓くが故に多くの驚愕を経験する。この巨大山脈を縦横無尽に挟り、削った痕跡の内、大地の深くまで続く大穴の底。溢れ出す輝きは、灼熱を纏う溶岩のそれであり、見ているだけで暑さを覚える程。

「マジか……………いや、だからグラビモスが居たのか」

「ただ、アイツにこの穴を飛んで抜けるだけの飛行能力は無いだろうから……………」

別の、通路となる穴がある。

二人同時にその結論を出し、頷き合う。サトルはメモに地理情報を書き加え、キーノは急ぎ火山地帯のような灼熱の領域に生息するモンスターを調べる。過酷な環境に育てられたモンスターはその分強力である為、尚の事詳しく調べる必要がある。二人も相応のデータを蓄積しているが、やはり万全でないモンスターも多く、その分取れる対策は万全にする必要がある。特に二人はアンデッドであり、炎を弱点とする以上、余計に対策を充実させる必要が出かねない。

「また、とんでもない場所だな、これは」

そう口にしながらも、サトルの声は弾んでいる。

「ああ——冒険のし甲斐があるな！」

キーノは満面の笑みで、死の危険に満ちた魔境を見下ろす。

死にたいわけでも、戦いたいわけでもない。だが、未知へと挑むこともまた、やめられない。

「そうだな。けど、引き際も大事だぞ」

顔を上げたサトルはそう口にし、ここまでで集まった現地情報を纏める。

「溶岩地帯と隣接して、古龍と思しき存在が住んでいて、強力なモンスターも多い」

「……………その上、今は荒れている、と……………そうだね、一度退こう」

状況を反芻し、冷静になったキーノは一步身を引く。

「ああ。一度戻ろう」

《ゲート転移門》の魔法を発動し、二人は一度引き上げる。

その先にあるのは、彼らと『仲間』たちとで作り上げた、小さな拠点。

「戻ったぞー」

「ニヤ！旦那様方、お疲れ様ですニヤー！」

ドアを開け、最初に声をかけてきたのは、猫に近い小柄な獣人。ユグドラシルに無い種族の獣人は素早く二人のもとへと駆け寄り、戦闘用の武具などを受け取る。キーノの本、モモンガの玉は別として、二人とも物々しい装備を脱ぎ去ると、ユグドラシルアイテムである『インフイニティ・ハウアサツク無限の背負い袋』のショートカット機能を使い、身軽な部屋着へと早変わり。

「いつもありがとうな」

笑顔で応じる獣人、アイルーの厚意に感謝を告げ、サトルはソファに腰掛ける。

「ふうー……………相談は……………あとでいいな」

そこは、広大な湖の畔に座す安息の場所。

彼とキーノが出会った、彼らと意気投合した数名と共に作り上げた、彼らだけの拠点。過去のものと思えた記憶の残滓から、消え失せた未練の残り香から名付けられた冒険者チーム『ナインズ・オウン・ゴール』の、小さくて立派な城だった。

I F. 2―仲間

ナインズ・オウン・ゴールは名の通り、九人で構成されている。

その望みは『未知の探求』と凡そ一致しているが、その先の望みはそれぞれ微妙に異なっている。

「ツ―」

狼にも似た、しかしそれより遙かに精強な獣が起き上がり、傍らの乙女が目の色を変える。

「あら、戻られたのですね」

透き通るような、淡い金髪を持つエルフの美女が微笑みを浮かべる。途中の作業を切り上げた彼女は精強な牙獣『ガルク』を伴い、部屋を出る。それとほぼ同時に両隣の部屋のドアが開け放たれ、ダークエルフ、冷気を纏う妖精の二人が転がり出る。一瞬呆気に取られたものの、それを過度に気にする事もなく、彼女はガルクと共に目的の部屋へと向かっていく。

そして、目的の部屋に到着する頃には、既に他六人が集まっていた。

「みんな、早いなあ……何も伝えてないのに」

「ウチらの勘、舐めたらアカン言うてるやろ？」

「ケマリが飛び出したお陰で、ボクたちも気付けたんです」

「黙らっしやいツ―」

中性的なヒトの姿を取る妖狐が顔を赤くして怒鳴り、少女………に見える少年が肩を竦める。

集まった面々は、種族が関係の無い者たちだ。アンデッドのサトル、キーノに始まり、かつては貴人御用達の仕立て屋一族の神童、純粹な技量では間違いなく最高峰の武人に始まり、一介の商人に、秘境の部族の裔、流浪の薬師、サトルとは異なる『異邦人』とその友人たちまでと、その幅は広い。

そして、その目的が『未知の先』にあることが、彼らの共通点だ。「それで、サトル。今日はどんな発見があったんだい？」

物腰柔らかに問うのは、エルフに似た青年。違いは、膝下の構造と手指の数。

「あー……………それについてなんだけど、その前に悪い報せだ」

空気が変わる中、サトルは臆することなく事実を告げる。

「古龍の影有、だ。それと、あそこは思った以上に複雑そうだし」

「まず、内部か地底部かに、灼熱地帯が広がってて、生態系も愉快なところになってるの」

と、端的な情報をキーノが黒板に羅列していけば、必然的に知識人は表情を陰しく変える。

「ドラギュロスが成す術無く……………つつーか、本体が正確に見えない速度ってアリかよ」

「え？神獣様はそれくらいできましたけど」

「うん、アンタんとコは色々例外だからな？な？」

世間知らずの妖精少女に、この中でサトルたちに並ぶ戦歴を持つダークエルフがツツコむ。超がつく箱入り娘の妖精、名をレナという彼女は、適応力こそ高いものの、基準を彼女が出身地で崇めていた『神獣様』にしているせいで、認識のずれが多大なのが欠点だ。が、言い換えればこの面子の中で最も思考停止を起こしにくく、その点では間違いなく優秀だ。

「シルヴィは知らないのか？」

「知らねえ……………ああいや、赫い光だと『凶星』の伝承があったな。アレ絡みか？」

そして、ダークエルフのシルヴィ。歴戦の猛者であり、知識の量、質共に優秀だ。何より、魔法込でも真っ向勝負であればサトル、キーノペアをボコボコに出来るだけの實力を持つアマゾネスである癖、流浪の経験から伝承などにも詳しく、頭もキレル優れ者。欠点は口の悪さ、超がつく悪筆、そして脳筋と食への無頓着くらいか。

「飛行能力と凶暴性を考慮して、あの子たちの同行は控えるべき、ですかね」

「いや、灼熱地帯の探索なら可能だろう。その辺りの采配は、ハクに任せよう」

ハクと呼ばれた、元人間の少年は真剣な表情で考え込む。

「難しく考えないで大丈夫だ。モンスターたちの様子も考慮して、数

日開けるつもりだからね」

キーノが優しく声をかけ、続けて他の面々に意見を求めるべく、視線をやる。

「私も、^{わたくし}反対意見はありません。最大限の安全確保は、常に心掛けませんと」

「ウチも同感や。あっち行って色々探したいけど、ウチらはそう強くないからなあ」

エルフの淑女ソフィア、妖狐の薬師ケマリが同意を示せば、他から反対意見は出ない。

「ゴルドはどうだ？意見があれば、躊躇わず言ってくれて平気だぞ」

「うんにゃ。俺もケマリらと同じで、戦うのは苦手じゃからな。反対も何もないわ」

「僕も同意見だな。危険なモンスターが確認できている以上、安全には最大限配慮しないと」

獣人の商人ゴルド、異世界の種である『竜人族』の青年タツミが方針に賛同し、方針を決める会議は完了。ここからは、最大の生命線である情報の共有から、探索方針の決定などについて話し合う事となる。

個々の願望が発露するこの場合は、サトルが一番大好きな時間でもあった。

「つぱ、ウチとソフィアは幅広く調べたいわなあ」

「ですね。植物、昆虫もそうですが、好奇心は尽きませんから、ね」

ケマリ、ソフィアの共通点は、求めるモノの幅広さ。ケマリは薬剤の原料として、ソフィアは布の材料、或いはそれを染める染料として、幅広いモノを求めているのだ。

特に、ケマリは毒も薬も等しく求めており、マッドサイエンティストと呼んでも差し支えない程度には節操なしにアレコレ作り、その癖実用的なものはしっかりと量産体制を考慮して。加えて、被害が出る時は自分一人で完結している為、身の安全に気を付けると釘をさすくらいしかできないのだ。

「なら、序でに特産や鉱脈も調べたいところじゃな」

「そうだな。僕も皆の役に立てるよう、微力ながら協力しよう」

商人として、財を成すことを夢見ると共に、未知を求める姿に感銘を受けたゴルドは、金銭面で彼らを支え続けている。そこに積極的に協力する姿勢を見せるタツミが目指すのは、未知の世界を解き明かす事。サトルとはそれぞれ異なる世界について語らう友でもあり、女性であれば、キーノの嫉妬を買っていた事だろう。

「暑いのはやだ」

「知ってるから大丈夫だ」

種族柄、彼女は熱気を嫌う。尚、十分な対策を施している為、心情を除けば活動に問題は無い。

「お嬢は暑い嫌いやからなあ。せやけど、一気に下まで調べるんか？」

「行くなら、あたしも下に回るぞ。対応力を考えると、ハクもこつちに欲しいな」

「ボクは構いませんけど」

「レナ、お留守番希望」

消極的にも思える発言だが、この中で魔法を使えるのはサトル、キーノ以外だとハクとレナだけであり、他の者では緊急時の連絡が行えない。しっかりと土地を吟味した上で成立している彼らの拠点だが、当然絶対ではない以上、備えは必要。そして今回、情報の足りない溶岩地帯の調査にハクが不可欠に近い以上、レナが留守番する他ないのだ。

「わかった。それじゃあ、チーム分けは俺とキーノ、ソフィア、ケマリ」
「それと、僕とゴルド、シルヴィ、ハクだな。それで、レナは連絡要員も兼ね待機と」

そこまで纏めてから、皆一様に大きく肩の力を抜いた。

「えーつと、確認できているモンスターは……」

「深く考えず、いつも通りで行こう。その方が気が楽でいい」

と、ある程度大雑把に出来るのは、皆マジックアイテムに武器等を収納している為、いざとなればその場で即座に切り替えることが出来るから。無論、ある程度幅広い対応力があるに越したことは無いが、

未知の環境においては臨機応変な対応が求められる以上、やむを得まい。

「じゃあ、そういうことで………出発は五日後にしたいけど、構わないか？」

大事を取って、長めに準備期間を設ける。古龍が去っていればよし、そうでなくとも準備を万全にすることが出来る。文字通り次元違いの化物を知るナインズ・オウン・ゴールの面々であるが、それを理由に過信できる程、世の中が甘くないことはよく知っている。ここに集う者たちでさえ、絶対なんてモノは存在しないのだ。

当然、準備期間があるに越したことは無く、反対意見は無し。

その決定を最後に、会議の場は雑談の場へと変わる。

「しかし、古龍とはなあ………ツいてんだかツいてないんだか」

「シルヴィが戦った『奴』よりはマシだろ？」

「あん畜生クラスがポンポンいてたまるかよ」

苦々しい顔で思い出すのは、彼女とサトルたちとの出会い。キーノも表情を引き攣らせており、そうそう思い出さたくない部類の記憶であるのは事実だろう。それはサトルも同じなのか、かなり本気のトーンで謝罪し、咳払いと共に場の空気を切り替える。

「あ、そうだ！」

そこで強引に空気を切り替えたのは、精神的な意味で一番若いハク。

「新しいマジックアイテムが出来たんですけど、あとで見て貰って大丈夫ですか？」

「え、マジで!? どんなのなんだ？」

「武器に組み込むタイプです! ……まだ低位階だけだし、何回か使おうと壊れちゃいますけど」

「いやいや、凄いやないか!」

サトル、キーノの二人で様々なことを教授した少年の、試行の産物をサトルは賞賛。魔力切れを考慮して、重弩使いとしてもやれる彼だが、その実アイテム作成にも高い素質を見せていた。職業レベルという軀が大きく緩んだ大陸の内部だからこそ、各々が専門職でなくと

も、努力と才能があれば新たなモノを創り出すことが出来るのだ。

この拠点作成の際もだが、この少年のそういったセンスははずば抜けていた。

「ぜひとも見せてくれ！俺も学ぶことが多いからな」

「ネーミングとかね」

キーノのツツコミにサトルが顔を背け、笑いが巻き起こる。

「ウチとしては、お姫様も絵心を学ぶべきや思うわあ」

「……………私が悪かったから、その話はこの辺りで」

「シルヴィも字が……………アレですし、気にしないでいいと思いますよ？」

「こっちに飛び火したあ?!」

ダークエルフのアマゾネスが悲鳴を上げれば、再び笑いの嵐。チーム三大戦力であるが、同時に三人それぞれ結構な欠点を抱えている。それこそ、サトルとキーノを慕うハクですら、真顔になり無言で首を横に振るレベルであり、チーム名決定に際しては偽物疑惑まで出た程だ。とはいえ、そんなわかりやすい欠点など、人間味に溢れているからこそ、こうして慕われている訳だが。

「そう気にする必要は無いさ。欠点の無い人間などいないのだから」

「せやせや。ウチなんか見てみい、顔と体がエエ以外取り柄無しや！」

ケマリがおちやらけ、再び軽い笑いに包まれる。

「てなわけでや、旦那はん。あとでちよっちウチの新薬に名前つけてーな」

「絶対弄られるだろそれ!?!」

「安心せえ、注意書きはシルヴィ、絵はお姫さんをお願いするさかい」

『安心できる要素が無い!?!』

はぐれ狐の冗談で笑いに包まれ、何となしに各々が自由に話題を出し、盛り上がっていった。

*

冒険者チーム『ナインズ・オウン・ゴール』の拠点『ソウセイ』蒼星

それは、ただの平和な場所、というだけに留まらない、特異な地に座している。

「キュル？」

「キュアアツ！」

ワイバーンにも似た小型のモンスター……ホルク。異なる姿の六体が集う湖畔では、穏やかな時間を微睡んで過ごす『泡狐竜』たちの姿が散見できる。湖を囲うように広がる森林の、彼らの城とを隔てるように小高い柵が並び、その内外をモンスターが闊歩している。ただそれだけならばまだしも、草食のモンスターと肉食のモンスターとの争いが無く、それどころか被食者である筈の存在たちが一切怯える様子を見せていないのは、異常が過ぎる。

「ニャー……飯の時間ですニャー……ニャアアアアツ!?ボクは違うニャ!？」

モンスターたちに追い回される、綺麗な毛並みのアイルー。

そう、この地のモンスターは、ほぼ全てが人為的に移住してきた個体。何を馬鹿な、となる事実であるが、そもそもこの島自体が、常人では到達すら叶わない海原の、更に先に座す孤島なのだ。ヒトの痕跡すら無い荒地を踏破し、その先の大海原を乗り越え、漸く辿り着くことが許される、文字通りの秘境にあるのが、彼らの城だ。

モンスターたちのことなど、これらの事実を前にすれば些細なことに過ぎない。

『絶島』……『赤き大蛇』とも語られる巨竜が最初に現れ、全てを喰らい尽くした跡地。

そんな、文字通り不毛の大地と化した孤島を再び芽吹かせたのは、怪物たちの怒りを買った異邦の者たちが有する力。絶島主が去ったこの島を発見し、最初に到達したのはユグドラシルからの来訪者であり、大陸南端の荒地以上にどうしようもなく喰らい尽くされた島を再生したのは、彼が有していた超位魔法だった。

それを知る者は、彼ら一行を除けば、超越者たちしか存在していない。

もつと言えば、地下空間で育つ龍の危険性は、一行もまた、理解していないかった。

IF. 3 — 『冒険』の一幕

鋭い咆哮の中を、二つの影が疾駆する。

「ギュガアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

「氷狐竜とは、また珍しいものですね」

「キツネはウチだけで十分やけんなあ」

灰色と白で彩られたドレスメイルを翻し、双剣を手にしたエルフが冷気を躲す。

妖狐はバツクラァで防いだ冷気の裏で刃に薬液を塗布し、摩擦で発火させ、熱で氷を破壊。

「っしやあー!」

力強く叫ぶケマリの隣を、美しい剣二振りを手にとファイアが疾駆。

「ふッ!」

紫水晶を思わせる結晶から削り出した刃が、分厚い甲殻を切り裂き、麻痺毒を流し込む。荒い気性の持ち主である氷狐竜はその華奢な体を引き裂かんと発達した前脚を振うが、その間に大剣を構えた白骨が割り込み、分厚く強固な刃で強引に受け止める。不死者は大きく吹き飛ばすが、その体で視界を遮ったエルフは、その双剣で的確に竜の肉体を切り裂いていく。

「ギユッ、ガアアアアアアアアアアアッ!!!」

「あら、そう怒りっぽくては、レディのエスコートは出来ませんわよ?」

「はん! 旦那はん以外にや、手え取らせる気はない癖に!」

鋭利なレイピア状の剣がその頭を乱れ突き、気力を奪っていく。

「よし、下がれ! ド派手なの、喰らわせてやる!」

キーノの編み出した創作魔法——赤黒い雷が収束し、光線となり放たれる。

「——《瘴龍滅光》、いくぞッ!」

極めて強力な、龍殺しの光芒。その威力も折り紙付きであり、龍殺しを苦手とするモンスターであれば、喰らうことすら避けたい一撃。事実、氷狐竜も全力で逃げようとするが、味方からの攻撃を掻い潜り

迫ったソフィアが双剣で腹を切り裂き、麻痺毒を蓄積。僅かに動きが鈍り、数多の竜を喰らってきた怪龍のソレを模倣した光線が甲殻を貫き、肉を灼き、氷狐竜が思わず絶叫する程のダメージを負わせる。「ホンマ、ソレ見ると、地底湖のイカちゃんが大人しくしとるんが有難くてしゃーないわ！」

高濃度の毒を塗り込んだ使い捨てナイフを、傷跡に的確に突き刺し、より多くの麻痺毒をその身に巡らせる。これまでの蓄積と併せ、モンスターの高い免疫力でも抵抗し切れぬ量に達したそれが肉体の自由を奪えば、キーノは魔力回復薬を飲み干し、再び古龍の力の模倣を発動。

「お前らは龍属性が弱点だからな。存分に喰らえッ！」

「あらあら、私では踏み込めせんわね」

「まあ、賢明だな。属性攻撃を打ち消す龍属性攻撃を受けたら、強みが消えちゃうし」

その間に、強靱なドスキレアジのヒレでさきつと刃の損耗をケアし、サトルと共に恐ろしく軽い動きで龍光の合間を縫うケマリと、彼女が用いた『滅気の刃薬』により眩暈を起こし倒れた飛竜を見やる。続けて、キーノがガス欠を起こしたのを確認し、二人は頷き合う。

「さて、参りましょうか」

「ああ」

硫斬剣を構えたサトルに続き、ソフィアが疾駆。重量に加速を乗せた一撃に続けて、強固な甲殻に刻まれた深い傷跡へと、冷酷無情な連撃が叩き込まれ、ワイバーンレックスを祖とする飛竜が悲鳴を上げるが、彼ら四人が容赦する理由にはならない。容赦できる程、氷狐竜は可愛げのあるモンスターではなく、容赦してやれる程、余裕のあるスケジューリングでもない。

目撃例が稀有であるのは、その警戒心の強さと、極めて高い凶暴性によるものであると、彼らは冒険で蓄積した経験から知っている。だから、その怒りが頂点に達した今でも、感情の昂りに応じた肉体の変調を強引に抑え込み、速攻をかけているのだ。

「とどめ、もらうでー！」

ケマリの美しい細剣、ルナティックローズが氷狐竜の急所を貫き、息の根を止める。

武器の質は、大陸全体で見ても最上位。更には、発動スキルに関してもサトルが廃ゲーマー時代の知識と経験をフル活用しており、それぞれが得意とする武器、戦法、更には扱う武器に応じた微調整を加えており、かなりのハイスペックに仕上がっている。比較的若い個体には、荷が重すぎた。

「ひとまずおしまい、だな」

「氷狐竜のお陰で、人手がほぼ入っていないことは確定したな。後は……………」

顔を上げ、目的地を見上げる。

「ここまで近い場所で活発に動いている辺り、確実に不在でしょう」

「有難いつちや有難いけど、ちよつち残念やなあ」

「なら、お前の言うイカちゃんとも戯れてきたらどうだ？」

「堪忍、堪忍や！古龍バリバリ喰ろうとる子とか、おっかなくてかなわんわ」

四人が想起するのは、いつの間にか地底湖に住み着いていたモンスター。あらゆる意味で異質な癖して、その性質は古龍と呼ぶほかない存在であり、恐暴竜以上の旺盛極まる食欲を有する怪物。最初こそ、ハクの『友達』すらも喰らおうとしていたが、いつの間にかやら番犬代わりと化した、あらゆる意味でよく判らないモンスターだ。

「……………レナの奴、気軽に演奏を聞かせてた気がするんだけど」

「あの嬢ちゃん、肝据わり過ぎてんねん」

ちなみに、時にモンスターに合わせ即興で作曲し、様々な楽器を魔法で奏でるなど、その技巧はメンバー周知の事実である。同時に、故郷ではその才覚で編み出した曲、先祖が編み出した曲を『神獣』への奉納として奏でていた経験から、肝の太さもずば抜けており、周囲をひやひやさせることもしばしばだ。

もつとも、地底湖で危害を加えようものなら、次の瞬間には消し飛ばされるのだが。

「それじゃあ、魔法を使うぞ」

「それしかないな。あの高さまで地道に登るとか、ある種の拷問だし」
「ま、あらウチでもキツツイわ。楽々いけるんは、シルヴィくらいやない?」

「彼女のことをなんだと……なん……申し訳ありません、否定できませんわ」

「大丈夫、俺たちも否定できないから」

凶悪無比なる古龍を相手に、片目片腕を喪失する程の満身創痍の癖して、気合一つで喰らい付き続けていたアマゾネスの姿を思い出し、二人は何とも言えない空気に。その時に与えた傷が格段に深く、更には勝機にも繋がったのだから、余計に何とも言えない。それを察知したのか、二人はぎこちなく笑い、肩を竦める。

「……まあ、シルヴィさんは最強、ということだ」

「やー、地下探索組は安泰やわあ」

「安泰な地下組との合流の為に、早めに調査しないと」

彼らの活動、特に2チームに分かれて行う場合には、時間を厳密に決めている。この制限時間は、過酷な環境、危険が予測される場であればある程短くしており、この時間が来たなら、どんな状況であろうと即時撤退、合流すべしと定めている。単独であろうと複数名であろうと、それは変わらず、その為に特殊なアイテムの常備を義務としている程だ、

これは、互いの身の安全を考慮したものであり、違反した場合、厳罰等は無いのだが、他の皆にきつくられることになる。主な理由としては、当然相互の安全確認が第一で、撤退も伝言による連絡も出来ないような窮地にある、或いは『最悪』の可能性を考慮したものであり、皆がきつく叱るのもそれが理由だ。本当に危険なのか、ただのミスなのかの判断が必要となるだけで、初動に大きく遅れが生じてしまうのだから、生存率にも大きく影響が出かねない分、真剣に怒るのだ。「それじゃあ、皆集まって。一気に飛ばすよ」

サトルが、キーノが魔法を発動し、柱の如く聳え立つ岩峰の頂を目指し、残り二人を連れ飛翔。

龍の住処に近いこともあり、飛竜の襲撃もなく頂まで到達。そこに

あるのは、幾らかの竜骨と、赫く輝く岩肌。その原因までは読めないながら、異質さは龍の痕跡として十分過ぎるものであり、四人はすぐ散開。それぞれ痕跡について調べ、思い思いの視点から情報を記録していく。

(この骨は……種類が多いな)

「鱗?……とりあえず、確保」

「お?見たことないモンめーっけ。持ち帰り確定やな」

残された骨からモンスターの特定を試みるサトルと、剥離したと思しき鱗等を次々回収していくキーノの背後では、地形等をスケッチするソフィアと、奇妙な石を確保するケマリが忙しなく動いている。彼女の場合、薬品の材料となり得ることもあり、サンプルとしても大量に確保したい、という思惑が透けて見え、事実尻尾もご機嫌に暴れている。

「しかし、こんな光景は初めてだな」

「ですけど、この色から察するに、龍属性の力が強いモンスターの可能性が高そうですね」

「たーだ、それにしちや、随分色が特徴的なんよな。赤黒い、やのうて赫色って感じで。この龍の力に由来するモンか、土地柄によるモンか………下じゃこないな特徴見られへんし、たぶん龍の方によるもんやろな。そーなると、この龍はある程度定期的に戻ってきた可能性が高うなる訳で」

それでいて、確かに特徴を捉えている辺り、抜け目は無い。

「ま、変質した臭い石ころの一つ二つ程度じゃ、それっぽいこと言うしかできひんけどな」

「流石の慧眼だね。日頃やかかしているのも、無駄じゃないんだ」

「じゃかあしやあー」

耳、尻尾を逆立て叫ぶも、キーノは大して相手にせずメモを続ける。スケッチを取らないのは、その凄惨な絵心から、情報としての価値が皆無という悲しい現実があるから。尚、相方のサトルに関しては、変に捻ろうとしない限りは大抵わかりやすい名前になる為、ネーミングセンスの無さは置いておいて、そこまで危険視されてはいない……

それはそれとして、生暖かい目を向けられるため、サトル自身ヘンに命名しようとはしないが。

「甲殻一枚にしても、かなり強固ですね。それと、銀色が綺麗です」

「銀色………そういえば、天翔龍も銀色だったな」

「もつと言えば、金塵龍も光を反射するような鱗だな。高高度に適應した結果かもな？」

冒険の中で目撃した龍を例に挙げ、推察を続ける。

が、程なくしてタイマーアイテムが音を響かせ、時間切れを告げる。元々時間を短く設定して、且つ交戦も避ける方向で動いていたのだが、氷狐竜との遭遇場所が悪すぎた。本来なら、キャンプの設営に適した地の把握までしたかったのだが、今回は古龍の存在、並びに棲家と思しき場所の調査を最優先としたため、叶わなかった。

音が鳴るや否や、ドキドキノコと呼ばれる不思議な茸を、魔法的に加工した玉を地面に叩きつけ、緑色の煙を発生させる。別途メーカーとなるマジックアイテムが必要になるとはいえ、瞬間的に、且つお手軽に指定の場所まで転移できる、非常に便利な代物だ。材料も手軽で、大陸の南端付近の国家では大体利用されている。

その便利アイテムで戻ると、既に地底調査組四人が戻っており、レナから濡れタオルを渡されている。中でも、ハクは随分と疲れた様子を見せており——不安げに腹部をさする姿から原因を察し、サトルとキーノは顔を見合わせる。彼にしてみれば特大のトラウマであり、事実二人が運よく出逢わなければ、間違いなく凄惨な最期を遂げていたのだから。

「ハク以外、無事みたいだな」

「ま、ありや不幸な事故だわな。あたしらの方は、とりあえずモンスター分布確認が出来た程度だが、紅ヴオルに宝纏がいた辺り、いい鉱脈が眠ってそうではあるな。ゴールドはどう思うよ」

立派な髭を持つ獣人に話を振れば、険しい表情を浮かべる。

「ま、難しいじゃろうな。立ち入るにしても、安全面を考えりゃあ、まづナシじゃわな」

「それには同意だ。僕たちはモンスターと違って、溶岩に落ちた時点

で申し訳ないだからね」

「足場が少ない分、採掘にや不向きじゃわい」

語られる詳細な地形については、まず溶岩が流れている場所が圧倒的に多いこと。またともに戦うことが出来る広さの足場が少なく、遠距離戦闘が出来る者であっても、かなり危険であるということ。シルヴィとハクの二人を選出したのは、奇しくも大正解だった、という訳だ。

「……………何事も無くてよかったよ、本当に」

「大抵の相手は、シルヴィが牽制で撃ち込んだ一撃で退いてくれましたからね」

「流石というか、相変わらずというか、なんというか」

「どういう意味だゴラアツ！」

「冷静に考えい。弓でバリスタ以上の破壊力を出してる方が可笑しいんじゃないぞ」

半ギレのシルヴィだが、悲しいかな、味方は無し。

「だが、お陰で皆無事に帰って来れた。ありがとう」

「———つ、そう、かよ。ま、お前がそう言うんなら、そうなんだろうよ」

言葉に詰まったシルヴィは、一瞬だけ誇らしげに笑い、そっぽを向く。

「それじゃあ、次はサトルたちの話を聞かせてくれないかい？」

「そうだな。と言っても、あまり大きな成果は得られなかったんだが

———」

四人が得た情報を共有している間に、レナは双方の話を纏めた二つの冊子を作成し。猫の獣人、アイルーたちは帰還した主人たちを労うべく、彼らの荷物を受け取る者、準備を進める者とで別れる。約三名ほど、食事が出来ない者はいるのだが、悲しいことに半数以上は健康的な食事を必要とするため、アイルーたちの仕事に変わりはなく。

情報共有はいつしか雑談に変わり、穏やかな時間を生んでいた。

I F. 4―南方の大地

大陸は広い――ナインズ・オウン・ゴールでも、未だ三割も把握できていないだろう程だ。

「あ！見てください、これ！初めて見る物ですよ！」

「確かに……店主さん、これはどちらから？」

そんな大陸に存在する、生存圏の一つ。そこに赴いていたハクは、サトルとキーノ、シルヴィイという、凡そ常識の範疇に収まるメンバーであればほぼ確実に葬ることが出来るメンバーと共に、街を散策していた。他五人も別の場所を散策しているなど、ある意味この大陸で最も安全な場所と化していると言っても過言ではないだろう。

「珍しいだろ？北の国家群に流れ着いた、素性不明の商人からさ」

「流れ着いた？あの場所に、ですか？」

男らしさと女らしさが絶妙に同居する不死者の疑問に、商店の主人も真面目に頷く。

「ああ。転移の魔法だそうだが、あちこちで似たような連中が大量に売買していったそうさ」

「大量に？それもあちこちで？」

「そうなんだよ。その上、移動は全部魔法ときた。ヘンな連中さ」

サトルが考え込む中、キーノの顔に苦笑が浮かぶ。

「…………どこから来たんだ？」

「さっぱりだ。一応、中央連合に來た身なりのいいお嬢様は、ドラウつて名乗ってたそうだが」

サトルたちが知っているのは、主に大砂漠南端より更に南の地域。彼らが少数精鋭であること、拠点が大砂漠南端より、更に離れた絶島に在る事も一因だが、やはり常に死と隣り合わせということ、中々進展していない。ハクのタレントの都合から、思わぬ同行者が増える可能性が高く、それがトラブルの種となりかねないことも、理由の一つだ。

事実、彼が手懐けたモンスターであるガルク、ホルクは街に連れ込めていない。

「是非とも会ってみたいなあ……………」

「サトル？」

「わかりますー！どんな技術者を抱えてるのか、気になりますもんね」

キーノのやや硬い声に対し、ハクは明るい声で、その意図を見事に汲んで見せる。

その様子に必死に笑いをかみ殺すシルヴィは、串焼きを串ごとバリバリ食べていた。

「面白れえの」

「うん、あんさんも大概やで？」

明らかな危険物の数々を買い込んだ人影に、チーム最強のダークエルフは動じない。

「いい変装だな。重心の運び、歩き方、呼吸の癖を消せてりや完璧だ」
「……………やっぱバケモンやわ、あんた」

串まで完全に噛み砕き、嚥下した最強にドン引き、姿を戻すケマリ。この場合、ドン引きしたのは串を噛み砕いたことより、自身の重心の運びや歩き方、呼吸の癖を把握していたことに対してだろう。かれこれ100年以上の付き合いがあるとはいえ、普通はそこまで把握できないのだから、その感想も当然だろう。

「で、随分と稼いだみてえだが」

「……………そこまでバレルんねんな」

「貨幣と雑貨じゃ、重みの質が違うだろ」

躊躇いなく言い切るが、普通は判別できない。

「ま、稼いだのはホンマや。丁度『深淵』のがおったさかい、諸々を取引させてもろてな」

「へえ。このタイミングとなりや、件の掘り出し物が目当てかね」

鋭い血色の瞳を細め、サトルたちの買い物に向ける。コレクター氣質から、モンスターから稀に得られる希少品……………逆鱗や玉石などを、研究者集団『深淵なる軀』に教授された技術を使い保管している彼だが、こうして街に繰り出した日には、更にマジックアイテムの発掘にも精を出している。

高い観察力と思考の早さ、知能の高いモンスター相手にはブラフや

演技も織り交ぜ、かなりあくどい騙し討ちを食らわせるなど、その実力は本物。そんな窮地で見せる顔と、八人の纏め役として音頭を取り、各々の要望等に合わせた冒険プランを立案する姿、そして街ではしゃぐ姿と、禍々しさしかない見てくれに対し、あまりに見せる顔が多かった。

「買い漁るのは構わねえが、後どうなっても知らねえぞ？」

呆れ混じりに笑う先で、仲良く未知のマジックアイテムを爆買するアンデッドの師弟。

師の方はコレクションとして、弟子の方はコレクション兼、新発明の参考として、未知の技術で作成された品をホクホク顔で収納する。知る者たちがサトルたちを恐れぬ理由の一つであり、ある意味彼らの人徳であろう。

「やー、大漁大漁」

「ですね。是非とも、本隊とお会いしたいです」

サトルたちと対称的な、蒼玉のような瞳を輝かせ、若くして不死者となった少年は頷く。

「まったく……相変わらず、お前たちはそういうのに目が無いな」

「色々買い込んでるヤツが言っても、説得力ねえぞ？」

シルヴィの言う通り、サトルたち程でないが、キーノもちやつかり色々買い込んでいる。

「いや、だって出処不明だぞ？ 今日を逃したら、もう買えないかもしれないんだぞ？」

「出会いには偶然なんです。チャンスは一度、しっかり掴みませんと」

明るく笑う少年は、師と肩を並べ、早速次の店へと向かおうとする。が、仄かに響く音色に足を止める。雄大な自然を感じさせる壮大な音色の中に、そこに生きる全てを包み込むような温かさを秘めたその曲は、極寒の秘境より外界へと旅立った妖精が、色彩豊かな自然に抱いた感動を奏でたもの。

その旅立ちに際し感じた開放感、疾走感を奏でたものと並び、多くの人に好まれる曲でもある。

「相変わらず、いい曲だな」

「はい。ボクもこの曲……大好きです」

壮大な中に温かき、柔らかさを有する音楽に惹かれ歩を進めれば、広場の一角を占拠する楽団が視界に飛び込む。魔法により召喚した、氷の精霊モンスタ―たちの一糸乱れぬ統率と、それと並行した演奏は、レナという天才児だから成せる神業。多種多様な楽器を用い、自身も緻密な演奏を行いながら、異なる楽器、異なる旋律を奏で続け、成立する美しきハーモニー。

各国の宮廷楽団から誘いを受ける程の演奏であるが、これは彼女なりの鍛錬。親しい者たちとの時間に奏でるものと、公の場で不特定多数に向け奏でるものとは、当然挑むに際した心の持ち様も大きく変わるもの。後者の環境は、かつての『お役目』に近い環境である為、自己を律する意味でも必要なものであった。

「普段の楽しそうなのもいいが、こういう場での演奏も悪くないな」
「……この連中は幸運だな。宮廷楽団の比じゃねえ演奏なんざ、そういう聴けるもんじゃねえ」

キーノは目を閉じて聞き入り、シルヴィも上機嫌に耳を傾ける。一見何の反応も示さぬケマリでさえ、尻尾と耳をブンブン揺らし、その音色を耳にした者の多くが手を止め、歩みを止め、美しい旋律に耳を傾ける。魅了の魔法を疑う程の音楽だが、魅了を無効化する不死者たちまでもが聞き入る様を目の当たりにすれば、そんな疑念も消し飛ぶだろう。

長年、極寒の秘境の『神獣』に愛されたその技巧は、間違いなく世界最高なのだから。

「こうなると、酒でも欲しくなるのお」

「まだ昼間ですよ、ゴールドさん」

「……………折角なんだから、あの子も誘ってあげてくださいよ」

酒が欲しくなる、という点を否定しない美女エルフに、苦笑を浮かべる竜人族の青年。

雄大な音楽が終わりを迎えれば、手向けられるのは拍手喝采。白雪の妖精は静かな一礼で応じ、並行して召喚モンスタ―たちに撤収を開始させる。惜しむ声も上がるが、少しすれば人々も元通りの活動に戻

り、活気の声が徐々に大きくなる。南方諸国の中でも、比較的『聖域』から離れた国ということもあり、かつての活躍はあまり知られておらず、過度に絡む者もない。

「お疲れ。いい演奏だったよ」

「……………ありがと」

労いの言葉を受け、純白の美貌を持つ妖精は柔らかに微笑み、最後のケースを閉じる。

「いい物、買った？」

「キーノもハクも、ホクホク顔だ」

「師匠もでしょうか？」

「サトルもだろうか？」

「勿論！……………いや、もうちよつと回りたいかも」

アンデッド二人からの間髪入れぬ指摘に堂々と言い切り、かと思えば別の方角に目を向け、未練がましい言葉を零す。三人から軽い笑いが起こる中、離れている他五人もそろそろと集まりつつある。

これが『聖域』に最も近い北の国であつたなら、サトルとキーノを見かけたという報せにより、場合によつては国の重役がすつ飛んで来ていただろう。そこから北西に位置する国であれば、大敵たる『墟城』を打ち碎き、積み上げた叡智を略奪する『女王』を葬った英雄たちにもつと多くの人が押し寄せたに違いない。

「それじゃあ、次はゴールドの友人の店に……………おや？」

小さな、小さな獣人——徐々にネットワークを広げ、この周辺諸国にも根付いたアイルーたちが、明確な目的を持って現れた。一糸乱れぬ動き、統一された装備品からして、国が召し抱える精鋭であるかわかり、それが迷わず向かってくることから、何かしらの依頼であることも看破できた。

「失礼しますニヤ。ナインズ・オウン・ゴールの方々でよろしいですかニヤ？」

アイルーという種の最大の強みは、適応力の高さ。小柄な体躯により、人間と比べ小さい空間に居を構えることが可能である上、知能も高い。その上、まだマジックキャスターは少ないとはいえ、鍛えられ

た者たちが数を成せば、飛竜を退けることも容易い。

そんな彼らの中には、国に認められ、雇用されるエリートも存在する。彼らの役割は、そのネットワークの広さを生かした迅速な情報伝達が主であり、今回のように彼らが主人の代理として依頼を行うケースは、基本的に緊急事態だ。

「ああ。俺がサトルだ」

「こちら、正式な依頼となりますニヤ。場所を変えたいので、こちらへ」

誘導に黙って従い、案内されたのは冒険者組合。だが、入口には国直属の騎士が待ち構えていることに始まり、中はもぬけの殻。この為だけに貸し切りにしたのだろうことから、相当にろくでもない、少なくとも一般人には洩らせないような事態が起きていることも、なんとなく察してしまふ。それも、『墟城』と異なり、突発的に起きたと思しき脅威だ。

「まず、東方の砂漠に『弩岩竜』が上陸しましたニヤ」

「……………冗談だろうか？」

弩岩竜の存在自体に、驚きはない。問題なのは、それが東方に渡っていたということ。

『聖域』を超える程の個体が？」

弩岩竜が脅威とされてこなかった理由は、大きく二つ。

大砂漠の流れの都合と、『聖域』の存在。凡そ時計回りに近い大砂漠の砂流は、如何に超大型の飛竜といえど、容易くは逆らえぬものである。無論、それにより砂海を泳ぐ巨大龍にありつけるだけであるなら、彼らは喜んで逆らっていたらう。覇種と呼ぶべき強大な個体であれば、上手くやればその血肉を喰らうことが出来るのだから。

だが、その蛮行を許さぬのが『聖域』の存在。サトルとキーノがかつて踏破した領域の北端域にある砂漠地帯を通じ、一部のモンスターが大砂漠へと顔を出すことがある。深部に座す龍の力に当てられ変質したモンスターは、それこそ歴戦の猛者でさえ、覇種個体と対等以上に渡り合える存在であり、歴戦王個体と遭遇した日には、大抵の場合成す術なく屠られる。

それ故に、聖域を挟む東方に弩岩竜が現れること自体、異常なのだ。「不明ですニヤ。ただ、一体だけ確認されている為、例外と見ておりますニヤ」

「各国による会議の結果、非常事態と判断。こうして、皆様に依頼をさせて頂いておりますニヤ」

本来なら、聖域南部の諸国家連合が、軍から冒険者までを総動員した討伐作戦を組むべき事態。だが、幸運にもサトルたちが、かつて北西域より来襲していた『墟城』を討ち果たした者たちが現れたのなら、そちらに依頼するのも当然だろう。

優秀な人材は相応の経験が無くては育たないが、今回の相手は荷が重すぎる。

「報酬につきましては、冒険者様宛に用意していた全額を、とっておりますニヤ」

「太っ腹じゃな」

「軍を別件に宛てるようになっておりますので、当然ですニヤ」

「別件、ですか？」

「冷静に考えろ。あたしらが前に出る以上、下手な援護は邪魔でしかねえんだ。だったら、余所に回して貰う方がよっぽど効率的だろ。巻き添えが出ねえだけ、こっちにとっても利点しかねえんだ」

口は悪いが、言っていることは悪くない。ハクも直ぐに納得し、険しい顔を和らげた。

「わかりました。俺たちナインズ・オウン・ゴールで、弩岩竜を討伐しましょう」

「ああ。だが、すぐにとは無理だ」

「承知しておりますニヤ。ですが、こちらも具体的に提示して欲しいですニヤ」

「一週間以内に、討伐を開始しましょう。皆、それでいいかな？」

キーノを含め、八人も異を唱えることはしない。大砂漠の形成の一因となったとされる超大型飛竜について、詳しく知る年長組ほどその表情は険しく、しかしそんな危険なモンスター相手だからこそ、万全を期するための時間が必要であることも理解している。脅威の度合

いから許容できる時間を加味しても、サトルが提示した一週間という条件は次善に近いものだ。

「感謝いたしますニャ。それでは、こちらに署名を」

依頼書にサインをするサトルの記憶を過るのは、到達した廃城で交わした約束。

『広く知り、明かし、思う存分探究しなさい』

『ただ、これは我儘だけれど』

『この世界のヒトを、助けてあげて』

ヒトの形をした、ヒトならざる者。伝説の黒龍をも従える存在との、些細な会話。

『彼らは、私たちの世界のヒトとは違う』

『生まれながらに我らと共に在った、彼らとは違う』

『だから、生き延びようとしていたら、力を貸してあげて欲しい』

蹂躪された竜たちの為、世界を変えたモノの願い。八欲王が欲望のままに世界を穢したのに対して、彼女は己の為ではなく、この世界でひっそりと生まれつつあった竜たちの安住の為、この世界を彼らに棲み良い世界に変わるよう、手を下した。当然、この世界でかつてより生きる命を滅ぼす意図など、欠片もない。

欠片も無いからこそその切実な願いを蹴ることが出来る程、鈴木悟は冷血漢ではない。

(……………ま、今回も、頑張るさ)

その対価として譲り受けた、キーノが有する魔導書へと目を向け、サインを書ききる。

「では、一週間以内に」

躊躇いはない。この周辺諸国には、散々世話になったのだから。

「はいですニャ……………どうか皆様、よろしくお願いいたしますニャ！」

その嘆願を、不死者の王は優しく受け入れた。

I F. 5—砂海に座す紅の楼閣

砂が爆ぜる——余波に飲まれ、人型の竜王の体が小石のように吹き飛ばす。

「が、ごほつー……あー、こりや、罰が当たったかねえ」

軽く抉れた脇腹に手をやり、血反吐を吐くドラウディロンIIオーリウクルスが自嘲する。

「送り出された矢先、このザマとは……飛行船、さつさと実用化するやよかつたなあ」

眩暈はひどく、あらぬ方向に折れ曲がった腕が、半ばから欠損した足が激痛を訴え続けるが、それだけだと割り切り、なんとか立ち上がる。自国の民を護る為、根付いていた地を捨て、同じ大地に住まう他の者たちの窮地の中逃げ出した女王は、ここを死に場所と定め、忌むべき大敵を睨む。

その外殻の所々が融解し、炭化した巨大竜。『弩岩竜』オデイバトラスを。

「私の命など、幾らでもくれてやるわ。代わりに、お前の命も貰うがな——ッ！」

始原の魔法——破滅の運命フェイタリスの名を持つ黒き龍、最大の力が、その命を対価に顕現せんとした刹那。

「いい根性してるじゃねえの。が、そこまですることあねえぞー！」

その声に驚き、魔法の発動を中断した直後、砂漠を一陣の突風が貫いた。

「ッ、グオアアアアアアアアアアアアアアアアアッ」

「……………はっ？」

!?!?!?!

その一矢は、融解し脆くなっていたとはいえ、その外殻を粉碎し、骨にまで届いた。

「キーノ！あそこの回収して、治療してやれ……………お前ら！」
「わかつてます！」

口笛と思しき甲高い音が響けば、数体の翼竜が空を舞い、灼炎、水流、雷光、冷気、龍雷などをブレスとして放ち、注意を引く。それに

目を奪われている女を衝撃が襲えば、四足で地を蹴る牙獣はその体を背負い、颯爽と戦場に背を向け、疾駆。それと入れ替わるように、幾つもの影が砂漠を駆け抜ける。

「今回はサトルも後衛に回ってくれ」

「わかった」

そう口にししながら、サトルは幾つもの強化魔法を発動し、味方を強化していく。

「気をつけろよ。あいつの攻撃、直撃は死に繋がると思え」

「いやはや、改めて見ると、おつかないわい」

「食べられないでくださいね？」

「あれが、セクメーア砂漠を生み出した……改めて見れば、それも納得だな」

異邦での恐ろしさを知る竜人族が零す中、戦端が開かれる。

「——グルオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!!!!」

咆哮の音圧により砂が沸騰したかのように暴れ狂い、誰もが即座に距離を離す。

トリブレット・マジック
リアリティ・スラッシュ
「魔法三重化、《現断》ツ！」

三発の不可視の斬撃を、時間を置いて飛ばす。結果、砂の大爆発の直後、破壊力を喪失した砂塵の中へと刃が吸い込まれ、弩岩竜の外殻に傷を刻み込んだ。第十位階最強の魔法、職業補正が落ちている分を装備で補って余りある現在でも尚、その傷は浅い……浅いが、無視できない程度の威力は有している。

「グルアア………！」

エクスブロージョン!
「《爆裂》」

「こつちも終わった!・とりあえず、一発かますぞ!」

空高くまで飛翔したキーノは本を開き、オリジナル魔法の中でも一際凶悪なモノを発動。

レッサー・メガフレア・バースト
「《酸毒の爆裂》——喰らえツ！」

それはまさしく、渾身の一撃。位階魔法の域に留まって尚、その破壊の力は弩岩竜の甲殻表層の炭化箇所を吹き飛ばし、そこから重酸で溶かし、その下の肉を毒で蝕む。大地すら炎熱と酸に蝕まれるが、そ

の一方で当の超大型飛竜は健在なまま。位階魔法の範疇に収めてしまったことも、原因の一つであろう。

「けど、鎧は大分脆くなった……………ハズだ」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ——ツ
!!!!!!」

弩岩竜の咆哮が轟き、再び地面が沸き立つ。

「おつ……………そろしいな、こりゃあ」

「全く、地上で戦うのは御免被りたいところだね」

そう嘯く人獣、竜人族の顔には、言葉と裏腹な笑みが浮かんでいる。

「本当に、冷や汗が止まりませんわ……………!」

「お嬢。そういうんはな、ご令嬢がやっちゃあかん顔して言うもんやないで」

紅の双剣を握り、獰猛に笑うエルフの令嬢。深窓の令嬢とは思えぬ姿は、100年余りの歳月で磨き上げられたものであり、それを諫めるケマリ自身もまた、妖狐の本性を隠しきれぬ笑みを浮かべている。これ程途方もないと感じる壁にぶち当たるのは、随分と久方振りだからだ。

「燃えてきましたね……………!」

「強い……………けど、勝つのは——私たち」

確たる闘志と共に、気焰を上げる。標準装備のスキル『いたわり』により、味方の攻撃の余波を気にする必要が無い、味方への流れ弾を恐れる必要が無い者たちは、怒れる弩岩竜へと臆することなく、氣勢のままに大地を蹴る。受けた依頼を完遂する為——何よりも、生きて帰る為に。

「ああ、そうだ——勝つのは、俺たちだ」

金色に縁取られた、漆黒の鎧——『秘術・玄武』を纏うサトルが力強く宣言する。

「ここからが本番だ——トリプレット・マジック エアストライク・オブ・クリムゾン魔法三重化《紅蓮滾る大空爆》ツ!」

空より降り注ぐは、時間と共に紅蓮を通り越して、蒼白と化した魔力塊。その全てが、弩岩竜の背甲へと吸い込まれ、激烈な爆発が連鎖的に巻き起こる。流星の超大型飛竜といえど、悲鳴を上げる程のダメージが通る一方、明確な最優先排除目標を認識した弩岩竜の姿がほ

んのり黒みを帯びる。怒りと共に甲殻の隙間の排出口が開いたことで、更に大量の砂を取り込み、排出することによる砂嵐までもが巻き起こる中、キーノは自身へのターゲットが外れたのをいいことに、位階魔法を超える力を使用する。

「地形を変えるぞー！」

「なら、儂らで注意を引くだ、なアツ！」

「シィ——ッ！」

ゴルドの振う剛槌が前脚を打ち抜けば、大槍を構えるタツミが力強く疾駆し、速度と武器、盾、自身の全ての重みを乗せた突進を叩き込む。分厚い甲殻を貫くには足りない一方、漆黒の剛角を加工した槍の力を『覚醒』したことによる爆裂が、確かな傷を刻む。そこに、極寒の秘境を襲っていた、怒り喰らう恐暴竜の素材を用いた一撃が叩き込まれれば、徐々に外殻の亀裂が広がっていく。

「ゴツ、アアアアアアアアッ!!!」

「ゴルド、僕の後ろに！」

「お可愛い攻撃、ですね！」

「この程度で、止まるかよッ！」

地面をめぐりあげ、足元の敵を一掃せんとする弩岩竜であるが、荒れ狂う砂津波の中を疾駆する者が二人。幾重にも襲い来る砂津波を全て躲し続け、蒼い稲光と沸き立つオーラを纏うエルフト、砂津波を切り払い、時に余波を受けながらも前に進み続ける、紫炎と禍々しいオーラを纏うダークエルフは、それぞれ闘志を？き出しに、巨大竜へと躍りかかった。

「参りましょう、シルヴィー！」

「おうさッ！」

漆黒の刀身に紅の刃を持つ、絶極冥雷刀が易々とその外殻を切り裂き、飛毒竜の致死毒を宿す刃がその傷から内側の肉まで突き刺さる。怒りに身を任せた前脚の薙ぎ払いを、ソフィアは軽々と躲し、令嬢が回避した爪を、シルヴィーが放つカウンターの斬撃で切り飛ばし、怯んだ隙に揃って攻勢に転じる。

「ゴ、オオオオオ……ッ！」

「後ろ、がら空きですよ」

「その武器、潰す」

そして、その視界外へと回り込んだハク、レナがそれぞれ重弩、軽弩を構え、その巨大な背甲を完全に機能停止させなるべく弾丸を撃ち込んでいく。ハクが徹底的に貫通弾を叩き込み続ける隣で、レナは軽弩の速射機能により徹甲榴弾、拡散弾を連射して、既に生じている甲殻の傷を広げていく。

一方で、その火力自体はそこまで脅威と見做す程でないのか、弩岩竜は依然、足元の二人の排除を優先とするように暴れている。無論、その余波だけでも重傷を負いかねない程の大事を引き起こしているのだが、ソフィアは徹底的に盛り込んだ回避補助スキルにより完全回避を続け、シルヴィは傷を負った分を装備スキルで強引に回復し続けている。

「——いくぞ、《ザ・クリエイション天地改変》ツ！」

砂漠の中心に生じるのは、砂塵が舞うことのない大湿原。

ワールドアイテム『ネームレス・スペルブック無銘なる呪文書』より引き出した力により、弩岩竜の肉体が適した砂漠地帯を改変したことで、まず相手は砂塵の吸入、利用が不可能となった。砂漠地帯の乾燥した砂塵に適応した器官では、水分を多く含む土砂を処理できないのだ。

「グオオツ?!?!」

「よしっ!?!?!いでに喰らえ、《クラック・イン・ザ・グラウンド地割れ》!」

「ッ、ゴアアアアアアアアアアアアツ?!?!」

ついでとばかりに大地を引き裂き、弩岩竜の足を奪う。未知の環境への混乱も手伝い、巨大竜は正常な判断も叶わずもがく。砂漠では生じる筈の無い地形の変化に、それに囚われるという初めて尽くしの経験が、行動に如実に表れていた。

「ナイスだ、キーン!?!魔法三重化《トリプレット・マジック万雷の撃滅》ツ！」

スキル『魔法技・秘術』による威力・効果量の最大値固定の恩恵。マキシマイズ最強化不要で大火力を発揮可能な、魔法職特化でレベル100までビルドした実績のあるサトルだからこそ得られた秘伝の力の極致。高い実用性の中に、確かなロマンを交えた彼らしい構成の装備が高火力

魔法を乱発していく中、前衛たちは喜々と呐喊していく。

「つしゃあ！暴れんぞ、てめえらアツ！」

「おうさー！」

「全く、僕は攻勢より守勢の方が得意なんだが………ねツ！」

絶刀が深々とその身を切り裂き、剛槌が頭蓋を揺らし、鋭槍が突き刺さる。刃を経由して鮮血を吸い上げ、暴れる前脚とその余波に構うことない捨て身同然の猛攻による傷を癒していくのは、シルヴィの装備スキルの一つである『吸血』。彼女の場合、加えてHP自然回復力を底上げする『超回復』、苛烈な攻勢により発動する『剛心』『連撃』等々を交え、リスクの伴うスキルを複数搭載。

一見テクニカルながら、使用者がタフすぎる為脳筋装備と化していた。

「はいはいはい！ボス、そろそろ強化切れまつせ！」

「あつぶね！ケマリ、助かった！」

「お代はお高い実験器具で、よろしゅうなツ！」

ソフィア共々、極めて強力な『劇物取扱皆伝』スキルを保有するケマリが加わることで、弩岩竜を蝕む毒の量が、その身に害を成せる域まで到達。瞬間、ソフィアが有する『攻勢』スキルが効果を発揮し、『フルチャージ』『纏雷』『獅子奮迅』でブーストされた能力を更に増強すると共に、『状態異常追撃』が効果を発揮。もがき暴れる腕を躲すことで『巧撃』『刃鱗磨き』の効果を維持し、勇猛果敢に攻め立てる。

対し、支援寄りのケマリは大人しく引き、アイテムによる味方への強化を施す。

「チツ、冷静になるの早いっちゅーねん………ホンマ、タフ過ぎるわ」
そして、一歩引いているからこそ、その動きの変化に気付く。

その能力を十全に発揮できない地形に引き摺り込んだとはいえ、いつまでも混乱し続けてくれるほど、頭の弱いモンスターばかりではない。砂漠という地形に由来していた攻撃の多くは使えなくなるだろうが、最後に残されるフィジカルこそが最も恐ろしいこの竜を相手に、油断なんて真似が出来る筈も無い。

ここで油断するようなら、皆とつくにこの世を去っている。

「出てくるで！下がりにゃ！」

「クソツ！魔法最強化《大樹の束縛》！」

「まあ、長続きはしないよなあ」

混乱が晴れたことで、弩岩竜はそのフィジカルを駆使し、強引に地割れの行動阻害から脱出。

相手の武器を多く奪った一方、最大の武器が残されている以上、これまで以上に油断出来ない。

「……………厄介」

「ですよ。とはいえ、流石にここに下手な子は連れて来れませんし」

ハクの『友達』には非常に強力な者もいるが、ここは『聖域』からほど近いエリア。

強者を呼ぶリターンは絶大だが、それを押し通すリスクもまた、絶大なのだ。

「一旦下がってくれ！」

「はっ？——つ、わかった！皆、一旦退け！」

「皆を回収、急いで！」

サトルの指示を受け、ハクが空を舞う翼竜たちに叫ぶ。ホルクたちは素早く降下し、それぞれの足で五人を掴み、弩岩竜から離れていく。そこから程なくして、禍々しい黒焔が奔り、超位魔法により形成された大湿原諸共、弩岩竜を焼き払う。傷が増えている分、その灼熱はより深くまで届き、流石の覇種といえど悲鳴を上げる程のダメージを与えた。

「……………すっげえ」

「あれも、魔法なのか……………奥が深いんだな」

「いや、位階魔法やと、あないなバ火力は無理ちやうか？まあ、後で訊けばええやろ」

黒焔に飲まれて尚、暴砂の巨城は未だ健在。

だが、大陸で最も冒険を繰り返した九人は、それがどうしたと絶望を笑い飛ばした。

本編——竜の満ちる世界

00——《龍》

——竜帝による、世界の汚染。最悪のソレに呼応したのは、同じく最悪の存在だった。

「なんなんだよ！なんなんだよお前！！炎は完全に——」

砂漠が、築き上げられた都市が——瞬く間に焼け落ち、形を喪つていく。巻き込まれた者たちが瞬く間に蒸発していく中、数名は直ぐ形を取り戻す。しかし、絶対の自信を持つ防御を貫かれた恐怖でか、その存在が呼び起こす恐怖でか。どちらにせよ、戦闘の意思はほぼほぼ潰えていた。

「い、嫌だ！死にたくない！死にたくつ」

グシャリ、と。強靱な顎が戦意を喪つた者を食い殺す。

「あ、ああああああ！！」

直ぐに蘇ったソレは我武者羅に叫び、使える限りの魔法をその体へと叩き込んでいく。明確な傷が刻まれたことで、恐怖に吞まれていた者たちは希望を見出し、表面上は威勢を取り戻し、無謀にも躍りかかる。

「死ね、クソドラゴンッ！」

その手で握り締められた武器は、その甲殻を容易く斬り裂く、ことは無く。

「グルルウウ……ルアアアオッ！」

ボディプレスにより、斬りかかった者が逆に下敷きになる。

「あづつ、あづいいいいいい！！なんつ、あああああああッ！！」

奔るのは、喉が裂けんばかりの絶叫だ。

「あづいあづいあづいあづい！！たすつ、たすけつ」

その身に纏う鎧がドロドロに溶け、纏う者諸共、その指に収まる指輪諸共、絡み付くように黒龍の体軀を流れていく。何故か、男が蘇る事は無く、虚勢と共に挑みかかっていた者たちは一様に沈黙した。

「ルルウ……ルアアアアアアアアアッ！！」

或いは、信じたくなかったのだろう。苦勞して得た蘇生アイテムが、全くの無意味などと。

その数秒の硬直の間に、漆黒のドラゴンはこれまでの比ではない劫火を放つ。世界を焼き尽くすかにすら思える獄炎に吞まれた者たちは数秒でその形を喪い、その場で蘇生と死を繰り返す。音を伝えるモノすら失われた中で、苦痛と恐怖、絶望の断末魔を誰かに届けることなく、七人は空に浮かぶ居城と共に、その生涯に幕を閉じる事となった。

「ルルル………ッ」

勝利者のその姿は、まさしくドラゴンだった。蛇を思わせる細い体軀、蝙蝠を思わせる翼に、体軀に不釣り合いとも言えるサイズの四肢。漆黒の鱗が織り成す甲殻を持つソレは、紛れもないドラゴンでありながら、この世界に住まうそれらより遥かに異様で、異質であった。

「……………なんという……………」

のちの白金の竜王、若き日のツアインドルクスⅡヴァイシオンは、遙か彼方より知覚した、世界を汚した悪鬼……………後に、八欲王と称される八人の存在が迎えた惨状に、それを成し遂げた、たった一匹の龍に、恐怖を抱いた。大地を焼く業火に照らされ、鈍く、暗い光を放つ黒き龍の金色の瞳が、遙か彼方からその存在を探るこの世界の竜を知覚し、鋭く吼える。

「ルアウ、グルアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

心臓を鷲掴みにされたかのような、原始的且つ本能的な恐怖を呼び起こす、恐ろしくも雄々しいその咆哮を、生き残った竜王たちは決して忘れないだろう。数多の同胞を素材呼ばわりし、屠り続けた邪悪を、醜悪を一匹で滅ぼしてみせたその存在は、その夜を以て世界を塗り替える切っ掛けとなった。

彼らは、彼の惨状を目の当たりにした者たちは、主犯たる龍を、後にこう呼称する。

『伝説の黒龍』——と。

*

時は流れ——異常な暴風雨の最中。

「急げッ！」

鋭い怒号の中、人々が逃げ惑う。

「皆さん、落ち着いてこちらに！無闇に逃げては却って危険です！」

「お前たちは避難誘導に加われ！ガガーラン、もしもの時はヤツを食い止めるぞー！」

フード姿の少女吸血鬼ヴァンパイアが叫び、森の奥へと目を向ける。

「オレもいよいよ、お終いかねえ……………」

「我々陽光聖典が援護する。最悪の場合、我々の召喚天使を囿にして逃げるぞ」

「それは、何とも有難い事だな……………」

表情を引き締めた、鎧姿の戦士二人の背後で、衣服鎧の男がそう告げる。類似した装束の者たちが次々天使と思しき異形を召喚する中、前に出てくる者たちは、森林をかき分け現れた『ソレ』を正常に知覚し、息を呑み、手中の武器を強く握り締める。

「ルル……………」

それは、龍だった。四肢を持ち、体躯に対し極端に大きなボロボロの翼を、その体躯相応に細くしなやかで、独特な形状の尻尾を、角を有するドラゴン……………その全身は、鋼鉄の鱗とそれが織り成す屈強な外殻が覆い隠し、肉と呼べるような箇所は殆ど見えない。赤茶けた外殻の中で鋭く光る青の瞳で眼前の人間を捉えたソレは、有り余る苛立ちをぶつけるかのように前足で地面を蹴り、その体躯を持ち上げる。

「ギュルアアアアアアア——ツ!!!」

瞬間、身構えていた者たち諸共、村が消し飛んだ。

「ぐ、《飛行》ッ！」

空で体勢を立て直したフードの吸血鬼は、眼下の惨状を、それを生んだ龍を、赤い瞳で睨む。

「《錆鋼龍》、クシナルダオラ……………」

その身を錆に蝕まれたドラゴンは、自身に纏わりつく錆びた外殻の残滓を撒き散らし、巻き起こした暴風により体勢を崩された者たち目

掛けて大地を蹴る。そうはさせまいと、フードの少女イビルアイは手をかざし、鋭く叫ぶ。

「結晶散弾」シャード・バックショットッ！」

放たれた拳大の結晶による散弾は、しかしその身に纏う暴風を貫けず、そのまま反射。

「チィッ！魔法抵抗突破最強化」ペネトレイトマキシマイズ・マジック《水晶騎士槍》クリスタル・ランスッ！」

魔法的貫通力、並びに威力を底上げした一撃は、確かに風を貫き――砕けた。

「これでもダメか……?!？」

そして、その事実故に、クシャルダオラは小さなアンデッドを明確な『脅威』と見做した。

「ルオオオオオオッ!!」

翼を広げ、翔ぶ。明確な敵と見做した存在へと目掛け、極低温の風を纏い飛翔する龍と比べて、イビルアイの飛行能力はあまりにも拙い。だが、この世界の古き力を、竜帝の失策により広まった力を有するドラゴンではなく、異物の身から世界に定着した存在であり、あくまで異物であるが故の、デイスアドバンテージは確かに存在している。

「ぐ、《次元の移動》ッ！」ディメンショナルムーブ

「ルウツ!？」

ごく短い距離の転移であるが、相手の速度に合わせれば確実な回避ができる。

飛行能力に優れていたが故の欠点であり、それ故に生じた微かな隙だ。

「《重力反転》！」リヴァース・グラビティ

「ルウツ、ギョルアアアアアッ!!」

重力に干渉し、一時的に行動を阻害できたものの、即座に風による姿勢制御に移行した鎗鋼龍は、仕返しとばかりに強烈な風を口元に収束させ、一気に解き放つ。その威力は、咆哮と共に生じた暴風の比ではなく、無策で受ければ文字通り即死だろう。

「っ、《転移》ッ！」テレポーション

上位の転移魔法で大きく距離を取り、先と同じ水晶騎士槍を叩き込む。

「感謝する、蒼薔薇の！」

そして、その間に立て直したらしい地上から、無数の天使が飛来する。

「天使で動きを止め、《毒》^{ポイズン}の魔法を叩き込め！奴は毒に弱い！」

交戦経験は、そう多くは無い。しかし、鋼龍と、類似した骨格を持つある龍は、毒に弱い。厳密に言うならば、耐性を上回る毒に蝕まれた場合、その能力を十全に発揮できなくなると判明しているのだ。鋼龍の場合、風の鎧を形成することが出来なくなることが、記録として残されている。

「こりゃ、オレたちは見学だなあ」

「地上に下ろせれば、我々でも戦えるものを……！」

空でイビルアイが、炎の^{アークエンジェル・フレイム}上位天使が果敢に挑みかかるも、天災の現身たる龍を相手に、明確な隙を作り出すことが出来ない。天使を使役する一団、陽光聖典が次々天使を呼び出すも、彼らにはクシヤルダオラに毒を打ち込む役割も残っており、魔力の損耗は抑えねばならない。

そう、長期戦は不利——故に隊長、ニグン・グリッド・ルーインの決断は早かった。

「副隊長！最高位天使二体を解放する！古龍が相手だ、出し惜しみは出来ん！」

「ハッ！」

「俺たちに出来る事は?!」

「盾もないお前たちでは、防御も無理だ！次に備えておいてくれ！」

焦燥からか、叫びによる応酬となるが、互いに不信や不快は見られない。

「ッ、天使を散開させろ！ウチのボスが構えてるぜ！」

そして、その叫びだ。

「来たれ、^{ドミニオン・オーソリテイ}威光の主天使！」

ニグンの、彼の副官たる副隊長の手中の水晶——魔封じの水晶が

砕け散り、秘められた魔法が効果を発揮。激烈な暴風雨の中、翼の集合たる異形でありながら、神々しさを放つ神秘的な存在が降臨する。

陽光聖典が所属する国の切札天使——その魔法火力だけであれば、文字通り最高峰だ。

「ルアアアアアアアアアアアアオツ!!」

「させるか! 魔法最強化、《水晶防壁》ツ! 魔法最強化、

《水晶防壁》ツ!」

転移魔法で回り込み、水晶による防壁を展開。一撃受ける度に何枚も纏めて砕け散るソレを、必死に短時間で連発し続けていけば、当然イビルアイの魔力はどんどん減っていき——その僅かな時間の間に、多くの状況が整うのだ。

「超技——『暗黒刃超弩級衝撃波』オツ!」

「ギョルツ!」

莫大な魔力を注ぎ込んでの、強力な衝撃波がクシャルダオラを襲う。

「畳み掛けるぞ! 《善なる極撃》を放てツ!」

天使の手中にある錫杖が砕け、威力を底上げされた魔法が二発、叩き込まれる。立て続けにこれまでより格段に重い攻撃を受けた鎧鋼龍は、大きく体勢を崩しふらつく。そして、その隙を逃すまいと、バラバラに待機している天使を足場に果敢に飛び掛かる男が。

「おおおおおおおッ!!」

鎧姿の戦士、ガゼフ・ストロノーフが、雄々しい咆哮と共に飛ぶ。

『閃光烈斬』ツ!」

一撃——しかしそれは、この辺境における最強の一角たる男がある、最強の武技だ。

そして、その手に握られる剣は【剃刀の刃】。魔法による強化を施した武具であろうと、軽々切り裂くことが可能な魔法の刃は、武技による一撃と共に強固な鎧鋼の外殻を切り裂き、クシャルダオラに確実なダメージを与えた。

「ギユアアアアッ!」

それが最後の一押しとなり、クシャルダオラは墜落。

「今だ！《毒》^{ポイズン}を叩き込め！ガガーラン殿は、終わり次第天使と共に！」
大地にその巨軀を叩きつけた龍を目掛け、莫大な量の毒魔法が殺到。風の鎧の消失を確認次第、天使が、ガガーランと呼ばれた戦鎚使いが躍りかかる。天使が生み出した光の剣が、【鉄砕^{フェルアイアン}き】の名を持つ戦鎚から放たれる武技『超級連続攻撃』の容赦の無い猛攻が、鋼鉄の龍を攻め立て――

「ギュルアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

「ぐ、おおおおおおお!!」

「ぬぐ、おおああああ!!」

咆哮、それと共に生じた暴風により、纏めて吹き飛ばされた。

確かにダメージはあるが、それだけ。致命傷に届かないどころか、眩暈を起こす事すら出来ていない。毒が通じると言っても、絶え間なく浴びせ続けなければやがて耐性が上がり、通じなくなる。何より、よく通じるからと言って、それだけで仕留められる程、古の龍は脆弱ではないのだ。

「ッ、逃げるおおおおお!!」

イビルアイが叫ぶ中、彼女は疎か、反撃に転じるべく構えたアイクエンジェル・フレイム炎の上位天使を、それを少しでも長持ちさせんと構えるプリンシパリティ・オブ・ザ・ベイシジョン監視の権天使を、次なる魔法を準備していた二体のドミニオン・オーソリティ威光の主天使を、途方も無く巨大な、鍔鋼混じりの竜巻が飲み込む。

そして、その暴威は必死に勝算を探っていた陽光聖典を、ガガーランを、そこに加わらんと駆けてきたガゼフを飲み込まん、大地を抉り突き進んでいく。アンデッドであり、肉体へのダメージを交換する術に長けたイビルアイでさえ、ギリギリで脱した頃には五体の大半を喪失するソレに、人間である彼らが耐え切れる筈がない。

(クソッ！アレに飲まれれば、間違いなく蘇生は出来ない！ああ、ああああああ!!)

無力感に、絶望感に飲まれ、イビルアイが骨剥き出しの口を噛み締める。そして、竜巻が――

トリプレットマキシマイズ・マジック「魔法三重最強化、《現断》！」

三つの斬撃に裂かれ、霧散。その斬撃が、そのまま鍔鋼の龍へと深

い傷を穿った。

「ギユアアアアアアアツ?!?!?!」

「な……………」

片方を喪失した赤い瞳が、地上へと向く。続けて、硬い骨の感触と衝撃。

「がふっ!?!」

「おっと、すまない。落下の衝撃を考えていなかった」

余裕の感じられるその声に驚き、顔を上げる。

『誰かが困っていたら、助けるのは当たり前』だからな」

そこに居たのは、死を体現したかのような、不死者の王であった。

01―死の支配者

それは、明らかな異常であった。

「いきなり降ってきたな」

「何の前触れも無く……全く、不敬な空です」

（いや、天気になんか事言っても仕方ないだろ……ああ、けど）

鎧の隙間から流れ込む水の感触……新鮮であるが、同時に吹く暴風が邪魔だった。

「しかし、風が強すぎるな。どれ、魔法で変えてみるとするか」

そう口にして、第六位階魔法《コントロール・ウエザー天候操作》を発動した。

そう、発動したのだ。アイテムを一つ消費して、習得していない魔法を使った、その筈だ。

「な……!?!」

たった今、スクロール巻物が消え失せた白骨の手中を見下ろし、アンデッドがそう零す。

「何故……!?!」

眼鏡の悪魔、デミウルゴスが愕然となる中、モモンガと呼ばれたアンデッドは外からの足音に気付く。突然の暴風雨に加え、魔法が通じない未知の事態を前に警戒心を高めていると、先が視認し難い程の雨の中を、小柄な影が突き破り、転がり込んでくる。

「わ!?も、モモンガ様!?!」

「マーレ!無事だったか!?!怪我は無いか!?!不審な人影は!?!なにかに見られたとかは?!」

マーレと呼ばれたダークエルフが赤面する中、モモンガは過剰なまでに彼を慮る。

「も、モモンガ様?あ、ああの、僕はただ、大丈夫です、から」

「なら、急いで戻るぞ!魔法で変わらない天候となれば、最悪もあり得る!」

ワールドアイテム。彼の居たゲーム、ユグドラシルにおいて、最強の力を有した200種の品。それによる効果であれば、魔法が通じないことも納得できる。そして、そうだとするならば、現在ソレを持た

ないNPC……かつて栄華を誇ったギルド『アインズ・ワールド・ゴウン』の拠点たる墳墓に、役割を持って創造された者たちは、最も危険なのだ。

全く未知の世界であることの再認識、そして警戒が、自身が感じていた重責をも忘れさせ、その身の安全への配慮を第一とする思考へと切り替わる。第一から第三階層まである墳墓エリアの全NPCに退避命令を下し、防衛拠点を第六階層に定める指示を続けて下した彼は、急ぎ宝物殿へと向かい、多大な精神ダメージと共にワールドアイテムを守護者の人数分回収、配布した。

——それが、昨夜の出来事である。

そして現在、ナザリック地下大墳墓、第六階層の闘技場。

「勝負ありましたね。ここまできて、このドラゴンが敗ける道理がありません」

「流石、矮小な人間では、全く以て役に立ちませんねえ」

そんな声と共に、モモンガの白骨の肉体に体を押し付ける二人の美女。

対し、モモンガの内心は穏やかではない。原因は、彼が操作する【遠隔視の鏡】へと映し出された存在。風を自在に操り、瞬く間に村一つを消し飛ばして見せた、錆びたドラゴンにある。そしてそれは、他の者たちも察していた。

「このドラゴンが、異常気象の原因と見て間違いないでしょう」

「ドラゴンノ咆哮ニ合ワセテ、暴風雨が激化シテオリマス。間違イナク、強敵カト」

そう、強敵——何より、未知の存在なのだ。

(ユグドラシルには居なかったモンスターだ………対応を見るに、毒は有効だったんだろうけど)

と、思考と共に他の者の意見に耳を傾けようと、顔を上げる。そして、気付く。

「セバス、コキュートスよ。どうやら、思うところがあるようだな」

支配者として振舞い、老執事と巨蟲の異形に語り掛ける。その表情には微かな苦悩が見え、同時に彼らの創造主………モモンガの旧友た

ちの姿が、幻影の如く背後に見えた、気がした。無論錯覚であるのだが、彼らが何かしら思っている事は、創造主である二人を思えば明らかだった。

「……………」『誰かが困っていたら、助けるのは当たり前』

「っ!？」

「モモンガ、様……………」

「たっち・みーさんの言葉だ。そして、武人建御雷さんが居れば、きつと首を縦に振っただろう」

重い腰を上げ、武器である杖を手取る。

「行くぞ。最悪、あの連中を回収して撤退する」

「しかし、栄えあるナザリックに、人間を連れ込むなど……………」

「私たちに無いのは、情報だ。彼らはそれなりの知識を持つようだ、喪うには惜しい」

(最悪、蘇生魔法の実験を……………って、いかんいかん!人間相手に何考えてるんだ、俺は!?)

自身の思考に冷や汗を流しながら、モモンガは魔法を発動。

「《^{ゲート}転移門》」

その先から吹き込む風に、雨に激戦の予感を覚え、彼は意を決し身を投じる。

——そして、鋼鉄のドラゴンへと最強クラスの魔法を叩き込み、少女を回収したのだ。

「酷い怪我……………待て。まさか、アンデッドか?」

「そ、そうだ。けど、それより、今は——ッ!？」

続けて、鈍い打撃音と金属音。

「むう……………ッ!」

「硬イ、ナ……………!」

セバスの拳打が、コキュートスの斬撃がその身を捉えるも、鋼殻を砕くには、翼を斬り落とすには至らない。そこに至り、イビルアイは先程までの事象から判明した情報を伝えるべく、既に声を出すのすら辛い程に損耗した肉体を酷使し、力の限り叫んだ。

「そいつは特異個体の剛種だ!難易度にして300を超える怪物!そ

れと、そいつの鎧は——」

言い切る前に、暴風と共に鎧鋼が撒き散らされる。最初に異変に気付いたのは、コキュートス。

「ナ……………!?我方武器方!?!」

「そいつの鎧は、刃を朽ちさせる! 研ぎ直せば済む程度だが、油断はするな!」

「命令、するなあッ!」

そして、モモンガに抱き止められ——俗にいう『お姫様抱っこ』状態のイビルアイへの嫉妬の激情を、アルベドが戦斧に込めて振り抜く。その正体はワールドアイテム【真なる無】ギンヌンガガブであり、破壊不可能の性質が刃の摩耗をも防いでおり、剛腕と併せてクシャルダオラへと痛烈な一撃を叩き込むことを成功させる。

「ギユアアアアアッ!?!」

『清浄投擲槍』、喰らえッ!」

「あたしだって!」

神聖属性の光槍が、デバフスキルを乗せた矢がその身に突き刺さる。驚愕、続けて憤怒を露わにした鎧鋼龍は、燃え上がる激情と共に咆哮。その音量に離れた守護者ですら思わず耳を押さえ、付近の者はその暴風で吹き飛ばされる。

イビルアイが称した通り、このクシャルダオラは特異個体にして剛種。特異個体というだけで、難易度が上がるというのに、加えて剛種……………難易度300、つまりレベル100を超える強敵だ。ユグドラシルで言うレベル100ボスにも近い存在であり、如何に武具が整っていないようと、ここまで攻め切れない存在なのだ。

「奴の弱点は殆ど無いも同然だ!魔法より物理で攻める方がいい!」

そして、イビルアイの豊富な知識の通り。剛種と称されるに至った龍たちの多くは、通常の個体より肉体的な耐性が強化されており、戦う側が泣きを見る程……………とはいえ、それを彼女が知るのには、長く生きていくからこそ。そもそも、目撃例から剛種と判別する事すら難しい。

「死ねえッ!」

『羅刹』ッ!」

「ふんッ!」

その情報をもとに、戦士組が苛烈に攻めるも、中々に倒れてはくれない。

「ここまでとは………《グラス・ハート心臓掌握》!」

焦り、即死魔法を放てば、クシャルダオラは一瞬動きを止める………が、それだけ。

「流石に効いてくれないか。止むを得ん、お前たち!」

「ハッ!」

「12秒だ!」

(奥の手、効いてくれよ………!)

モモンガの叫びに、ナザリック最強戦力の全てが、力強く応答。

『ハッ!』

そして、奥の手たる切札を発動する。

『The goal of all life is death』
!」

死の支配者の背後に、巨大な時計が浮かび上がる。

『トゥルー・デス真なる死》!』

被害を抑えるべく、単体最強クラスの即死魔法を発動。そして、それを理解したクシャルダオラの攻撃が、抵抗が激化する。風の鎧が無くとも、古龍としての強さが衰える事は無く、その強さは間違いなく脅威そのもの。モモンガが奥の手を使う、という選択をしたのは間違いなく正解である反面、堂々と使ったのは大きなミスであった。

「ギュルアアアアアアアッ!!!」

「っ、しまっ!?!」

「モモンガ様ッ!」

激化する暴風により行動を制限しながら、自身は飛翔。空のモモンガが流される程に強力な暴風の中を、クシャルダオラは平然と翔ぶ。地上から飛ぼうにも、風が強すぎて真つ当な飛行も難しく、追い付ける程の速度など出せる筈もない。

「させるものかッ!」

そこに飛び出したのは、デミウルゴスだ。

「デミウルゴス?!」

『悪魔の諸相：豪魔の巨腕』『おぞましき肉体強化』『鋭利な断爪』――

「ッ!」

マキンマイズ、マジック 『魔法最強化、《魔法盾》』

その身を盾にしてでも、主を護り抜くという気概。それにマールも応じ、デミウルゴスへと魔法による防御強化を施す。それでも尚、ステータス的に脆いデミウルゴスでは不安が残り、モモンガがその肩を掴み、反射的に自身を盾にせんと手を伸ばし――

「やらせる、ものかあああああああッ!!」

それは、最早根性でどうこうなる領域ではなかった。だが、その男はやってみせた。

「ガツ……………ぐ、武技『閃光烈斬』ッ!」

「ギョルアアッ!」

その腹を大顎で噛み潰されながら、クシャルダオラの頭に激烈な斬撃を叩き込む。

個として最強の、その武技による一撃は確かな手応えと共にクシャルダオラを怯ませ、ガゼフは先んじて落下、地上に叩きつけられる。デミウルゴスが、アルベドが、多くのNPCが驚愕、そして屈辱を抱く中、モモンガの背後の時計が最期の時を刻む。

「時間だ」

そして、鏑鋼龍の目から光が消え、大地へと叩きつけられる。嘘のように暴風雨が止み、雲が急速に晴れていく中、モモンガは静かに地上へと降り立つ。悠然と、或いは超然とした振る舞いに多くの者が目を奪われる中、彼は急ぎ足で、血反吐を吐き笑う男のもとへと向かう。

「ハ、ハハ。助け、られましたな……………」

「お互い様だ。それよりも、その怪我を」

と、虚空に手を伸ばし、アイテムボックスから赤いポーションを取り出す。

「それ、は……………」

「いいから……………いや、飲める状態では無いか」

と、瓶を開け、ガゼフへと振りかける。ユグドラシルでも上に位置するソレは、見事ガゼフへと刻まれた致命傷を塞ぎ、完治にまで至らしめた。鎧が碎ける程の傷を受けていたガゼフが目を剥き、自身の体を見下ろす中で、モモンガは続けて手中のイビルアイに意識を向ける。

「それと、お前もだ」

「え?」

「グレイター・リーサル
《大 致 死》」

莫大な負属性の力が、アンデッドであるイビルアイの傷を急速に回復させる力となる。

「あ、ありがとうございます………」

「気にするな。こちららも、色々と言いたいことが出来たからな」

「ふれいやーだから、ですか?」

その言葉により、NPCたちが最大限の緊張と警戒を見せ、ニグンたちが驚愕の視線を向ける。

「知っているのか?!」

「は、はい。私の知る者はありませんが」

「そうか」

ふと思案する中、傷が癒えたガゼフが、静かに跪く。

「モモンガ殿」

その姿勢と呼称に、NPCたちが少しばかり気を良くする中、モモンガは視線を下げる。

「私はリ・エステイーゼ王国戦士長、ガゼフ・ストロノーフと申します」

「リ・えすていーぜ王国?」

「この一帯を取り仕切る国です」

イビルアイが補足する中、ガゼフは言葉を続ける。

「この度の恩義、言葉では到底足りません。どうか、王都にて返礼させて頂けないでしょうか?」

「どうか、来て欲しい。あちらの方が、多くの情報が揃っていて、私たちならそれを開示できる」

その提案に乗り、モモンガは首を縦に振る。

「いいだろう……デミウルゴス、コキユートス、セバス」

「二は、ハッ！」

「お前たちを供として、王都とやらに向かう。他の者たちはナザリツクに戻り、警戒に当たれ」

本来ならば、全員を連れて行きたい。だが、未知の脅威がある以上、ナザリツクを空ける訳にもいかない。戦力的には、今回ナザリツクに待機させた者も含めて、ナザリツク側の方が多く配置しているが、それでもどこまで保つか。

「我儘に付き合っていたき、感謝する……そうだ、ニグン殿」

ガゼフの視線を受け、ニグンは首を横に振る。

「いや、我々は一度、本国に戻る。この度の件、急ぎ報告せねばならぬいからな」

「だろうな。特異個体であればまだしも、古龍の剛種だ」

「それほど珍しいのか？」

モモンガの疑問への回答は、想像を絶するものだった。

「ああ。何より、今回のせいでヤツ以上の……覇種や烈種への懸念まで出来たからな」

今回倒した、鏑鋼龍以上……その言葉に、モモンガの顎が外れんばかりに、カクンと落ちた。

02―未知なる脅威

城塞都市、エ・ランテル。

「戦士長！」

「蒼薔薇の方々も、よくぞ生きて！」

門へと接近するや否や、兵団が総出で出迎える。

森に近い村々からの避難を行っていた、エ・ランテルの兵団と王国戦士団の二つだ。

「随分と慕われているのですな、皆様は」

「モモンガ殿には劣りますよ」

はははと笑い合い、しかし直ぐに、ガゼフは意識を切り替える。

「皆、ありがとう。だが、私たちが生きているのは、この御方々のお陰だ」

と、ガゼフは堂々とした振る舞いで、モモンガたちを部下たちに紹介。

口々に感謝の言葉を述べる彼らにデミウルゴスたちが気を良くする中、モモンガは背後の者たちへと振り返る。ガガーランと、蘇生兼回復役として残っていた神官戦士、ラキユースが左右に退けば、大仰な台車とそれを引くアンデッドに運ばれるクシャルダオラの姿が。

「な!?こ、古龍を!？」

「ああ。凄まじい方々だよ、本当に」

「しかも、特異個体の剛種ときた。私たちだけなら、全滅は避けられなかっただろうな」

イビルアイの言葉に、王国戦士団の顔色が青くなる。

「も、モモンガ殿………本当に、本当にありがとうございます！」

「貴殿が居なければどうなっていたか………想像もしたくありません」

打算ありきななので大丈夫です、と馬鹿正直に口にできる程、モモンガも無神経ではない。だが、同時に心からの感謝に対し、そんな自身への恥じらいや罪悪感を抱かない程厚顔無恥でもなく、一言一言がその心に突き刺さっていく。

「そ、それよりもだな！今回の件、早急に報告するべき事態なのだろう？」

強引に話題を変えにかかれば、イビルアイの纏う空気が一変。

「そうだ。特異個体というだけでも問題なのに、その上剛種ときた」

「それほどまでに、希少なのか？」

「希少というのもそうだが、危険なんだ。特に剛種は、見た目で判別がつかないから、尚更」

違いが判らない彼らでも、あのクシャルダオラの強さは理解できた。

「成程……強弱の区別が難しい、というのは問題だな」

「ああ。何より、古龍自体強力なせいで、尚更に難しいんだ………歴戦王は、また別なんだがな」

不穏な単語にモモンガが凍り付き、ラキユースたちが呆れる。

「それは大陸南東の話でしょう？」

「だが、滅尽龍は古龍を喰らう古龍だ。行動圏も広い以上、油断は出来ない」

猛烈に嫌な予感を覚え、モモンガはその話題を無視して話を続ける。

「王都まで、案内できる者は居るか？居るのなら、私が先行して転移魔法でこちらと繋ぐが」

「そんなことが出来るのですか!？」

ガゼフたちが驚く中、沈黙を保っていたデミウルゴスが大きく頷く。

「当然です。至高なる御方ならば、その程度造作もない」

「よせ、デミウルゴス………それで、出来る者は？」

「私が転移魔法で送ろう。それが一番確実だ」

と、イビルアイが名乗りを上げれば、モモンガも同意。共に転移してから、数秒程してから漆黒の靄が生じ、そこからイビルアイが飛び出してくる。

「これは凄いな………と、ついて来てくれ！」

その指示に従い、王国戦士団はエ・ランテルの者たちに礼を述べて

から、過半数がデミウルゴスたちと共に続く。そこにあるのは、荘厳ながらも、それ以上に確かな実用性を併せ持つ見事な宮殿であり、分厚い城門、城壁を含む諸々を駆使すれば、空からの敵襲以外であれば大きく抑えることが出来るだろう。

その出来栄えには、人間にしては素晴らしい、とデミウルゴスが笑みを浮かべる程だ。

「お前たちは、ここで古龍の警備を。私は蒼の薔薇の方々と共に、陛下に報告に向かう」

そう告げ、ガゼフたちの顔パスで城内に踏み入った四人は、彼らの先導の下奥へと通される。

ガゼフが会議室の扉を開けば、視線が一気に集まるのを視覚と雰囲気気の双方で察知できた。

「ガゼフ・ストロノーフ、只今帰還いたしました！」
『蒼の薔薇』、同じく依頼を完了、帰還致しました」

瞬間、貴族たちから歓声が上がリ、最奥の老王は思わず立ち上がり、体勢を崩す。

「よくぞ無事で……おおっ!?!」
「父上!?!無茶はなさらないでください!?!」

慌てて諫めるのは、屈強な体格の第一王子、バルブロ。
老王には、左膝から下が無かった。

「それで、そちらのアンデッドは……」
「我らの恩人、モモンガ殿でございます」

「異常気象の原因がクシャルダオラ、というのは当たっていたが、錆びていた上特異個体の剛種、と最悪のオンパレードでな。私たちと、現地で共闘した陽光聖典だけでは、確実に全滅していた。彼らが居なければ、そのままエ・ランテルが滅びていたやもしれない」

イビルアイの言葉を、疑う者は居ない。
「イビルアイ殿が仰るのならば、その通りなのだろう。改めて、礼を言いたい」

「このような場で、満足なもてなしも出来ずに申し訳ない。終わり次第、改めて準備を」

「いえ、そのような気遣いは必要ありません。今私に必要なのは、この周囲の情報ですのぞ」

それは、幸運であり、不運でもあった。

幸いなのは、過酷極まる環境の最中にある彼らは、真つ当な人間であるということか。

「そうだ、それを忘れる訳にはいかなかったな……ガゼフよ、モモンガ殿の席を」

「それなら、ご心配なく。《上位道具創造》クリエイト・グレート・アイテム」

と、モモンガが人数分の椅子を用意。驚嘆が場を支配する中、促された者たちが腰を下ろしてからすぐに、謎の大マジックキャスターについて何を言うでもなく、会議が再開される。それにデミウルゴスたちが不快感を示すも、彼らを軽視しているのではなく、それだけ重大な事態が起きている、ということなのだ——

「ではまず、我がリ・ボウロロールの南東……最悪に近い報せとなりますが」

「構わぬ。教えてくれ」

暫しの躊躇いを見せ、意を決した隻腕隻眼の貴族、ボウロロール侯が口を開く。

「岩蟹が、目撃されました。しかも、報告が正しいならば剛種であります」

「なんと……!?!」

「私からも、申し上げねばならないことが」

険しい表情を向けるのは、ボウロロール侯と並ぶ大貴族のブルムラシユー侯。

「アゼルリシア山脈近郊にて、多数の爆発が確認されました。砕竜、或いは爆鱗竜と思われ、現在採掘作業を全面的に停止中。我が領地の選りすぐりの冒険者による調査の準備を進めておりますが、最悪数年は閉鎖となるかと」

「むう……」

リ・ブルムラシユーの鉱山の主産物は、金とミスリル。剛種相手に心許ないとはいえ、一般的な冒険者たちには貴重な武具の原料とも

なる。それを採掘できないとなれば、それだけ軍に次ぐ対モンスター戦力である冒険者にとって、苦しい事となる。

「悪いことは重なる、と言うが……リンデ海で、海竜の影だ。しかも、白いな」

騒然となる会議の中、モモンガはおずおずと手を挙げ、疑問を投げかける。

「申し訳ない。こちらについて、大分疎いものでな。出来る事なら、それぞれ教えて貰いたい」

聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥という。何より、情報は重要なのだ。

「これは失礼した。砦蟹というのは、その名の通り砦の如き巨躯を誇る甲殻種モンスターだ。またの名を、シエンガオレンとも呼んでいるが、厄介なのは単純に大きなことと、アダマンタイトを大きく凌駕するその甲殻の強度、そして比類なき強酸のブレスだ」

アダマンタイトは柔らかいんだけどなあ、と思うモモンガだが、馬鹿正直に言いはしない。

何より、それで悔えることが出来る訳ではない、というのは、剛種との交戦経験で学んでいる。

「目撃例は非常に少ないが……もしや、山に隠れていたのやもしれんな」

「何より、撃退しか出来ていなかったのが痛いな……まさか、剛種にまでなられるとは」

イビルアイが苦々しく表情を歪め、続けて他のモンスターについて語る。

「次に、碎竜だな。こいつはブラキディオスとも呼ばれて、爆発により胞子を散す特殊な粘菌との共生を成し遂げている獣竜種だ。こいつらの前足は腕同然に発達していて、他の獣竜種より攻撃に特化した形状だ。どの程度の個体かによるが、大都市でも危うい」

「爆発とはまた……」

「で、これ以上に厄介なのが爆鱗竜、バゼルギウス。名の通り、爆発する液体を固めた特殊な鱗を形成する能力を持っていて、狩りや攻撃の

際にこれを撒き散らし、攻撃に転用する。飛竜種と呼ばれる、かつて存在していたワイバーンに近いモンスターで、飛行能力もかなり高い。この二種に共通しているのは、灼熱から寒冷まで適応できる生命力だな」

成程、聞くだけでも頭が痛くなりそうなほどに、面倒な能力を持っている。

「で、次に海竜。名の通り海竜種を代表するモンスターで、ラギアクルスとも呼ばれるが」

そこで言葉を切り、ウロヴァーナ辺境伯、ナイウーア伯爵へと目を向ける。

「確かなんだな?」

「うむ。現場に残された鱗も、持ち寄っている」

と、テーブルに白い鱗を置く。

「……………亜種までか。肥沃な土地というのも考え物だな」

「亜種とは?」

「その名の通りだ。体色や攻撃手段が通常と異なる連中だが、白海竜は別の意味で厄介だ」

と、付近の貴族から会議用の地図を拝借し、リンデ海を指さす。

「まず第一に、海竜の多くは名の通り、海を含む水辺に生息している」
「ふむ」

「この時点で、水中での戦闘に長けた者でなければ対処が難しい場合が殆どだが、十分な実力さえあれば、地上に居る間に仕留めることも出来る程度には、地上での活動が苦手な者が多い。無論、例外は居るが……………中でも厄介なのが、ラギアクルスの亜種、白海竜。こいつは地上でも高い戦闘力を発揮できる上、原種同様水中でも凶悪だ。その異名は、『双界の覇者』」

たった二百年といえど、蓄積された知識は莫大であるし、大陸中央部に居た為、こちらには無い知識なども多い。だからこそ、三人組の精鋭冒険者『蒼の薔薇』はここまで上り詰めることが出来たし、この過酷な王国で生き残り続けることが出来ていた。

「双界の、覇者……………」

「ただのラギアクルスなら、水揚げして空から攻撃すれば終わるんだが、亜種はそうはいかない」

「それは、確かに厄介だな……………」

「ああ。恐らく、漁業は当面できないし、港も閉鎖だろう」

「……………我々なら、勝てるか?」

イビルアイにモモンガが問えば、期待の視線が集まる。

「恐らくは。だが、どれ程の相手か不明瞭である以上、単独は避けるべきだ」

彼は知らないが、この世界に無効耐性というものは殆ど消えている。アンデッド固有の一部耐性は兎に角として、基本属性や物理、魔法への無効耐性は単純な防御力強化としてしか機能しておらず、炎や電気、冷気への無効耐性があったところで、それが齎す副次効果を打ち消せるのみだ。

「成程。この中で最たる脅威は、シエンガオレンとやら、ということではないんだな?」

モモンガの確認に、イビルアイの表情が一気に暗くなる。

「ああ、そうだ……………剛種、古龍級生物の剛種、それも二体目……………ああ、最悪だ」

頭を抱える彼女に、ラキユースとガガーランの二人が顔色を変える。

「まさか、とは思うけど」

「そのまさかが、実現しかねないんだ。ヤツは古龍以外にも、強力なモンスターを狙う存在だ」

これについて、王国側は緊張する以上の反応が出来ない。

なにせヤツは、この辺境に現れたことの無い存在だ。

「おいおい、そのヤツってのは」

「滅尽龍、ネルギガンテ……………私の故郷インベリアを滅ぼした、真なる竜王を喰い殺した古龍だ」

インベリアが何なのか、知る者は皆無。だが、これまでと違い、年頃の少女のようにか弱く儂いイビルアイの様子から、緊急事態であることだけは、モモンガですら理解できた。気になる単語の山である

が、モモンガが優先するべきは、その滅尽龍の詳細だ。

「嫌な事を思い出させるようですまないが……私たちでも、勝てないか?」

がぼりと顔を上げたイビルアイは、白骨の顔を見上げ、静かに語る。「クシャルダオラを仕留めた奥の手を使えば、或いは。だが、そこまで凌ぎ切れるかが問題だ」

「私たちでは、不足と?」

セバスの声は、しかし覇気に乏しい。クシャルダオラに不覚を取り、モモンガを護り切ることが出来なかつた事実が重くのしかかつており、デミウルゴスもそれを弱気とは言えず、コキュートスも神妙な空気を纏い沈黙している。

「奴は歴戦王、と私たちの国で称されていた個体だ。全身に輝きを帯び、黒銀の金剛棘を持つ古龍で、災害規模の影響力を持たない代わりに、身体能力と再生能力を極限まで高めた古龍だ。危険なのはこの再生能力と、それが主に発揮される棘が肉弾戦での脅威になる事と、奴自身の機動力も侮れないことだ」

「……………そこまでか」

「あの光景を見せることが出来れば、納得もしてくれるさ」

巨大なドラゴンを相手に、体格差を物ともせずその剛腕一つで組み伏せ、その爪牙と腕力のみで一方的にねじ伏せ、叩き潰し、その末に殺害、捕食し尽くした怪物。この世界における究極の力である、始原の魔法による悍ましい吐息^{ブレス}すら物ともしないその姿を目の当たりにすれば、折れてしまうのも当然と言える。

「あれに並び得るのは、王国と帝国を割る原因となった、刻竜くらいなものだ」

「その来襲を抑える為にも、早々にシエンガオレンを討伐しなければなりませんな」

強引にそう纏めたレエブン侯へと、視線が集まる。

「かの超巨大モンスターを相手に、近接戦は無意味だ。遠距離武器の使い手を集めるぞ!」

「魔法はどうする?マジックキャスターなら、空からも攻撃できるの

ではないか？」

「奴の剛種は理論上予想されていたが、耐性含め未知が多い。数を集める他ないだろう」

「過去の移動ルートを洗い出すぞ。レエブン侯、ブルムラシユー侯、手を貸して欲しい」

第一目標が決まり次第、会議の方向性も定まる。

「モモンガ殿、どうか手を貸して欲しい。我らに可能な範囲であれば、如何なる報酬も出そう」

「水臭いすな、王よ。これは我が国未曾有の危機、我らもまた、財を惜しみませんぞ！」

「私も、愛する妻と我が子の為、叶う限りの報酬を用意いたしましよ
う」

そして、その結びつきも非常に強固だ。

「では、そうですね……私が仕留めた、あの古龍の亡骸を頂きたい」

そんな彼が吹っ掛けた条件は、普通に考えれば、絶大にも程があるものであった。

03—強敵の対価

ナザリック地下大墳墓——第十階層、玉座の間。

「面を挙げよ」

静かな、威厳に満ちた声が響く。

「揃っているようだな。では、我らがリ・エステーゼ王国で得た情報を………デミウルゴス」

「ハッ」

確認の意味を兼て、旧友が作り出したナザリック最高の智者の口から、情報を開示させる。

「まず、モモンガ様はこの世界に確たる地盤を築くべく、『砦蟹』シエングオレンと呼ばれる超巨大モンスターの討伐戦に乗り出す事となった。この個体もまた、我々が苦戦を強いられた強大なる古龍、クシャルダオラと同様に剛種と称される存在であり、ナザリックの総力を以て当たるべき事態と考えられる」

「お待ちください。まさか、下等生物如きの為に——」

「この討伐戦最大の目的は、奴ら以上の脅威とされる『滅尽龍』の襲来を阻止する為のものだ」

ぞつ、と留守番組から血の気が引く中、デミウルゴスは険しい顔で話を進める。

「まずこの世界だが、ユグドラシルとは似て非なるものだ」

その通り、とモモンガが頷く中、デミウルゴスは衝撃的な事実を暴露。

「まず、人間たち。レベルにすれば非常に低いにもかかわらず、ステータスは異常に高い」

「え」

(レベル、低かったの!?)

「そんな!?あれで、でありんすか!?!」

「彼らのレベルは、ユグドラシルのルールに則るならば30前後。イビルアイと名乗る吸血鬼ヴァンパイアは突出していたが、それでも装備の質という前提を抜けば、プレアデスが後れを取りかねない程だ。ステータスと

「いう一点で見れば、高いものではレベル90にも匹敵する」

「でも、レベルにすれば、って言ってたってことは……」

「そう。ステータスへの補正がその分低くなっているという訳です」と、デミウルゴスが締め括り、一層表情を陰しく変える。

「それはつまり、人類がそこまで成長する程の脅威が満ちている、ということですよ。そして、剛種と称されたあの古龍と並ぶ存在、それすらも喰らう『歴戦王』なる滅尽龍となれば、その脅威は計り知れません」

「でも、あたしたちなら！」

「あのクシャルダオラ相手にさえ、後れを取りかけたのをお忘れですか？」

その事実が重くのしかかる中、多くの者が無力を噛み締める。

「だが幸い、砦蟹なる甲殻種は大型だ。その分厄介だろうが、弱点も多い筈」

よって、お前たち全員の力を借りたい——

その言葉を、ナザリックの者たちは慈悲だと判断し、感激と共に深々と頭を下げる。

「我々『アインズ・ウール・ゴウン』は今後、リ・エステイーズ王国領内であるこの辺境を中心として、情報収集と脅威への備えを行う。何にせよ、相手の手札が判らなくては、手の打ちようが無いからな」

(何より厄介なのは、剛種の性質だ)

剛種——古龍のような強力なモンスターが至る、ある種の進化に近い変異体。他種が至る場合は変種と呼ばれ、また亜種モンスターの変種を奇種と呼称するという。攻撃手段が増えるなどは、ユグドラシルでも種族レベルが上がった敵にあつた事であるが、耐性の激変は勘弁願いたい、というのが正直なところだ。

「それと、アルベド」

「ハッ」

「あとで、私と王都に戻り、共にイビルアイから情報の聞き取りを行う。準備しておくように」

「畏まりました」

この状況では、『世界征服』だと誤解する事も、それを訂正せず推し

進める事も出来はしない。

それは賢者ではなく、愚者未満の思考。その果てにあるのは、八欲王同様の破滅なのだから。

*

「来てくれたか。早速で悪いが、前置きは無しでいくぞ」

デミウルゴスに代わり、アルベドを供としたモモンガが席に着いたのを確認し、イビルアイは手中の地図を広げる。その振る舞いにアルベドが微かに殺気立つ中、続けてこの辺境で確認されたモンスターの数々が記された書物を積み重ねていき、幾つかの石を用意していく。「まず第一に、今回の戦場となるリ・ボウロロールがここ。で、過去に確認されたシエンガオレンにまつわる情報を纏めたのが、この書のこのページだ。ああ、この冊子自体は冒険者向けに販売されている物だから、持ち帰ってくれて構わない」

「助かるな………と、通常なら炎と電気がよく通じるのか」

「ああ。それと、背負う老山龍ラオシャンロンの頭骨には、龍殺しがよく通じるな。わかっていえると思うが、それはあくまで通常種の話で、剛種は確認も初めてだから未知数だ。組合に呼び掛けて、全国規模で冒険者を募っている事もあり、間違いなく総力戦になる」

その言葉に、アルベドが辛辣な返し。

「雑魚が幾ら集まったところで、蹂躪されるだけでしよう?」

「アルベド!」

「普通の古龍ならな」

モモンガが語気強く叱責する中、イビルアイは構わずそう応じる。「シエンガオレンが人間に興味を示すことは、殆ど無い。戦士は裏方支援以外出来ないだろうが、マジックキャスターや弓使いの類ならば、通じるかは別として攻撃できる。それに、クロスボウの技術を応用した大型バリスタのような、彼らでも使える武器の類も、各都市に多数配備されているからな。アレを使えば、馬鹿げた額がぶっ飛ぶ代わりに超大型モンスターにも痛手が入る」

モモンガの叱責で精神的ダメージを受けたアルベドだが、同時に人間が考え無しに動いているのではない、ということもわかり、少しば

かり感心した様子を示す。事実、四百年以上前からその脅威に晒され続けてきたのが、この世界の住人だ。異形種にとって短い時間でも、極めて濃密なその歴史の中で、少なくとも対処法を編み出してもいる。

「申し訳ございません、モモンガ様。それと、人間を少々侮り過ぎていたようです」

「貴女の言う通り、詳細を知らなければ無駄と思うのが当然だ。なにせ、相手はアダマントタイトの矢でも傷一つ負わない怪物だ。鳥竜種モンスター、牙や、大型モンスターの骨を加工した矢を莫大な数用意するだけでも、苦労は凄まじい以上、そう簡単に使える手でもないしな」と、肩を竦める。アダマントタイトを比較に挙げていることに失笑しかけるが、続く言葉を見逃すことなく、アルベドは疑問を口にする。それは、ある意味で非常に重大な問題でもある。

「待って。まさか、骨がそれだけの強度を？」

「ああ。朽ちて空洞ができた小さな骨なんかも、詰め物をして矢の代わりに使われている」

「それを、武器に転用したりは？」

「出来なくも無いが、数を集めるのが大変な上、強度のせいで加工も一苦労だ。ただ、小型で弱い鳥竜種や甲虫種モンスターの類だと、話も変わってくる。特に、森で見られるランポスや、平原を住処とするジャギイの鱗や皮は、強度こそ心許ないが、武器として使えば、下手な魔法武器を超える力を発揮してくれる」

その言葉に、モモンガが強い興味を抱く。

「それでは、大型のモンスターのものでは？」

「残念ながら、加工できるだけの設備がない。かといって、ジャギイやランポス、甲虫種の素材を用いた武器だと、今度は強度の方に不安が残ってな。上の冒険者となると、殆どがより強度のあるオリハルコン以上の武器に切り替えている」

まさかの情報に、モモンガは反射的に思索し、ある案を出す。

「ふむ……アルベドよ、鍛冶作業が可能な召喚モンスターの貸し出し等、どう考える？」

「何事も、調査が先決かと思われれます。どこまでの質なのか、確かめるべきかと」

至極真つ当な返しに、モモンガは頷く事しか出来ない。

「まあ、その通りだな……しかし、バランスが判らんない」

「大体、小型鳥竜種、中型鳥竜種、アダマンタイト、大体の大型モンスターと思えばいい」

本当に大体の指針であるが、凡そ間違いではない。ここに、魔化による属性付与や、外殻の薄い腹部への集中的な攻撃、武器重量を乗せた攻撃など、単純な攻撃より効果の出る立ち回りを要求されることが多い為、全体で見ると戦果はイマイチ。それこそ、『蒼の薔薇』『朱の雫』以外の冒険者では、マジックキャスター込でも討伐に苦労するのだ。

「成程……シエンガオレン一体で、どこまで取り戻せるやら」

「素材価値は高いのだろうが、如何せん加工が難しいのがな」

『ンモモンガ様アツ！』

「うつひゃあああ!?!」

イビルアイが難しい顔で唸った直後、モモンガの聴覚を滅茶苦茶にハイテンションな声が、唐突に震わせる。思わず悲鳴を上げれば、二人から奇異の視線が向けられ、大急ぎで手振りで待機を指示して、応答する必要がある。

『お・ま・え、なあああああ!!!いきなりハイテンションで話しかけるなよ!?!』

『し、失礼しました……いえ!?!ですがこれは、報告せねばなりません!?!』

『あー、もう!?!いいから、教えろ!』

『クシャルダオラの全身、素材の宝庫です!?!それも、データクリスタルに近い性質を併せ持つ!?!』

「はあああああああ!?!?」

思わず演技を忘れ、素で叫び返す。

「おまつ、それ本当か!?!本当なのか!?!」

『事実ツ!?!ですツ!?!武器として使うか、それ以外に使うかで効果に変

動が見られるようですが』

そこで言葉を切り、ハイテンション極まるパンドラは衝撃的な事実を告げていく。

『少々拝借したところ、武器の方は、極めて高い切れ味と強度、僅かな冷気属性を帯びました』

「そこまでか」

『神器級でも、相当特化しなければ実現できない要素二つを併せ持つております』

「うええ……………」

『ガントレットに限定し作成したところ、こちらは武器耐久値減少の大幅抑制、及び疲労軽減に加えて、マイナス効果として毒への脆弱性を。その他にも、セバス様のような防衛より回避に主体を置いたビルドに適した効果を二つ発現致しました。また、データクリスタルでは不可能ですが、何かしらの形で彼らの素材を加工できれば、更にスキルを付与できると思われれます』

「マジか……………」

『マジです。その上なんとなんと！これ、たち・みー様の鎧に匹敵する強度でございますッ！』

「マジかあ!?!」

尚、これは剛種の素材であるからこそ、である。他でどうなるかは、現状不明瞭。

何より、剛種一体討伐するのに、あの総力戦。だが、貴重に変わりはない。

「と、とりあえず、残りの素材は保管だ！いいな！」

『Wenn es meines Gottes Wille!』

「ぐほっ!?!」

不意打ちのドイツ語を最後に、パンドラからの通信は途絶。そこに来て、漸く精神作用の抑制が効果を発揮し、強制的に思考をクールダウン。衝撃的過ぎる事実の数々を冷静に再認識してから、大きく息を吐き、二人へと振り返る。

「えっと、何があつたんだ？」

「あのクシャルダオラの素材を加工したところ、私のこの武器に匹敵するモノが出来たそうだ」

「な、はああああああ?!」

啞然とする他ない事実には、イビルアイの大きく開いた口から嫌な音が響く。

「あ、あが!？」

「あ、顎外れたあ!?!アルベド、治せるか!?!」

「お任せください」

と、普通に治してから、イビルアイは大きく息を吐いた。

「はああああああ………そうか、それくらいはいくのか………」

「とりあえず、他のモンスターが気になるが………後回しだな」

コレクターの性が悲鳴を上げるが、ここで順序を誤るような愚者ではない。

「シエンガオレンの討伐が最優先、次は………」

モモンガが思案する様子を見て、イビルアイが助言。

「鉱業への影響を鑑みるなら、爆発の調査がいいだろう。が、そちらも何かしら未知の存在である可能性も捨てきれない以上、正体がほぼ確定している白海竜に向かうのも悪くはないかもしれん。何より、こちらの方が前者の異変の元凶とされる二種より、難易度で言えば多少下だ」

「では、そうするとうしよう………と、すまないな。大分話が逸れてしまった」

同時に、その結果次第であるが、モモンガはナザリックの方で鍛冶に長けた傭兵モンスターの、召喚と派遣をほぼほぼ決定していた。こちらの武器の質が大きく上がれば、それだけ脅威への対処難度も下がり、自分たちナザリックの安全確保にも近づくのだ。それをしない理由がない。

「シエンガオレンの討伐に関して、まずは目的地の地形や地理情報を把握したい」

「わかった。まず、現状ボウロロープ侯が定めているのが――」

イビルアイの説明に、モモンガが頷き、アルベドが時折質問と、そ

の原因となる欠点難点を指摘していく、という形で、三人だけの会議は進行。頭の回転は悪くない上、情報さえあればそれなり以上の強さを発揮できるモモンガが、地形を始めとする情報とNPCのビルドをすり合わせていき、より確実に勝利する為の戦略を構築していく。

「飛行能力は無し、四足で全体重を支えている、一对の鋏とヤドから放つ強酸以外武器は無し」

その情報を口に出し、その紅の眼光を奔らせる。

「カギとなるのは、マールか」

当人が聞けば卒倒しそうな事を口にして、一人厳かに頷いた。

EX―潜む脅威

アベリオン丘陵と呼ばれる、広大な丘陵地帯に広がる国『アベリオン聖獣連合』。

50年以上前、本来の国土を捨てることを余儀なくされた際、追い詰められた亜人たちと成り行きで手を組み、近郊の『エイヴァーシャー大森林』を原因とする大騒動へと対処した末に成立した、亜人と人間の共存する国家の一つ。『聖』はかつての聖王国を、『獣』は勇猛なる亜人たちへの敬意を表するモノであり、狭い土地で確かな繁栄を築き上げていた。

「いつか、帰りたいものですね」

「うむ……だが、果たして叶うものか」

『聖王女』カルカ・ベサーレスの呟きに、バルフォク山羊人の『豪王』バザーが難色を示す。

その視線の先にあるのは、溶岩で赤く光る半島。

「灼熱の地……彼の地に踏み入るだけならばまだしも、その先に進むのは難しかりう」

『七色鱗』の蛇ナレガラージュ王ロケシユが渋い顔になり、過去の惨劇を浮かべ
る。

「伝承に曰く、『熔山龍』ゾラ・マグダラオスの来襲、そして死が引金となった、と」

神官団団長、ケラルト・カストディオの説明と時を同じくして、激烈な咆哮が響く。

「……今や、『黒き神』覇竜アカムトルムまで住まう、地獄と化しておりますが」

アカムトルム——『黒き神』と呼ばれる程の力を有する、超大型飛竜。過去、周辺の海を回る形で行われた偵察、及び上陸の試みを、想像を絶する衝撃波により船団ごと消し飛ばすという規格外の攻撃を以て阻止してしまった存在。内部へと探索に向かった精鋭、その生存者が齎した情報により、存在を確定させた怪物である。

「帝国、竜王国よりはマシだろう。一度カルカ様の護衛として行った

が、あちらの方が酷い」

そう口にするのは、この国の人間で最強を誇る聖騎士、ケラルトの姉レメデイオスだ。

「お主がそこまで言う程か」

「東には食い散らかされたトロールの残党、そこから少し南下すれば、かつて『弩岩竜』による、甚大な被害を受けた竜王国。タチが悪いのは、隔てるモノが無いせいで、そこからのモンスターの流入がある事だ。幸いというか、殆どは縄張り争いに敗れた連中だが」

多くの亜人が手を取る事を選んでいるが、その判断を出来ない、或いはする余裕がない亜人も、確かに存在している。帝国東のトロールは最たるものであり、小規模な集落の数々が安全と食糧たる人間を求め帝国に侵攻しては、殺されるか追い返され続けている。南東のビーストマンにも、似たような者が多い。

そして、彼女が口にした『弩岩竜』。アカムトルムとも近いと思われる体格として伝承される『覇種』は、200年前に現れた、本来南方の砂漠に住まう災厄。ビーストマンを食い散らし、竜王国の国土と山々を食い荒らした末、当時のスレイン法国最強が秘宝一つと己が命を代償として消滅させた怪物であり、その進路上の山々は食い荒らされ、ビーストマンは国を喪っている等といった形で爪痕を残している。

「エイヴァーシャー大森林といい、本当に悩みは尽きませんね」

「かの森の、『邪毒の棘竜』…………二度と見たくないものじゃよ、本当に」

過去を知る魔現人マーギロスのナスレネ・ベルト・キュールが身を震わせれば、その時からの古株たちはこぞって頷き、かつての災厄への恐怖を思い出す。それを言伝でしか知らない三人の人間にとって、興味を抱くと同時に、触れていいものかと悩むべき問題――

「それなのだが、通常の『棘竜』エスピナスとどう違うんだ？」

「姉様……………」

なのだが、レメデイオスは無遠慮に問う。しかし、ナスレネは年長者の余裕を以て応じる。

「なに、簡単じゃ。あ奴はエスピナスであり、エスピナスを超越している」

「どういふこと？」

「そも、あの惨劇は奴が激昂し暴れた故に起きただけじゃ。そして、丘陵の亜人の三割が即死した毒炎の炸裂とて、流れ弾に過ぎん……あのおぞましいまでに肥大した角、全身に纏わりつく蔦、どれかを思い出すだけで、震えが止まらん」

『邪毒の棘竜』……当時、エルフ国の王の蛮行により生じた戦争、その余波に怒り狂った、森の長老に当たる強力無比な『棘竜』エスピナスのことだ。この暴威により、エルフ国は王含め壊滅的打撃を受け、僅か数パーセントの生き残りはスレイン法国に避難。そして、激昂し暴れ狂っていたこの竜を恐れたモンスターの一斉逃亡が、アベリオン丘陵を襲った惨劇の原因なのだ。

スレイン法国が『迪異種』と称し、一般に対し秘匿を厳命した老個体は、未だ森に眠っている。

「亜人の三割が、即死……？」

「断末魔の悲鳴も無く、一瞬で息絶えおったわ。全く、恐ろしい事この上ない」

ナスレネの言葉に、三人の顔色が青を通り越し白く変わった。

——人間、亜人共に、その生存圏は決して広くない。

古龍の来襲、天災などの要因で、築き上げた平穏など一瞬のうちに消え果てるのだ。その点、彼女たちの先祖たるローブル聖王国の先々代聖王、及びその部下たちは、最悪の中から最善を掴み取った上、この繁栄を築き上げてみせた。その偉業を、改めて三人の人間代表は噛み締めるのだった。

*

ナザリック地下大墳墓が存在する辺境には、大きく三つの危険地帯が存在している。

灼熱の地と極寒の地、そしてエイヴァーシャー大森林……

「ルルウ……」

灼熱の地、ローブル熔山帯……超巨大古龍『熔山龍』の秘める莫

大なエネルギーが、背負われた鉱床が、死と共に根付いたことで生まれた火山地帯。旧ローブル聖王国の領土であつた半島全土に渡る変化の末生まれたそこは、そのまま数多のモンスターが飛来し、生息する危険地帯へと変貌を遂げている。

「ギュルルアアアアアアアア——ツ!!!」

そこに座す者たちの一角が、ケラルトが挙げた『黒き神』アカムトルム。ローブル熔山帯の北部から、大地の果てまで轟かばかりの咆哮を放つ巨竜は、その巨軀を大地へと叩きつけるように本来の姿勢に戻ると、眼前の新参者へと青い瞳を向け、低く唸る。

「ルルルウ……ギユアアアアアアアアアアアアツ!!!」

応じるのは、金属に似た甲高い響きを帯びた咆哮。大地を二足で踏み締めるその竜は、紅の鋭利な外殻に身を包み、漆黒の剣山を思わせる覇たる者を睨む。真紅の眼光と青の眼光が交錯する中、おもむろに獣竜種モンスター、『燼滅刃』デイノバルドは赤熱した金属が織り成す刃に覆われた尻尾を、その全身を使い口へと含む。そして、鋭利な牙を以て研ぎ澄ますと共に、喉奥に溜め込んだ爆発性の高い粉塵をまぶす。

それを好機と見たアカムトルムが飛び掛ければ、研ぎ終えた尾刃をそのまま叩きつけ、その衝撃による爆裂により攻撃。強靱な外殻越しの衝撃にアカムトルムが悲鳴を上げる中、デイノバルドは軽快なフットワークで距離を置くと共に、その脚力で大地を蹴り、大きく跳躍。質量を乗せた剛刃を連続で振り下ろし、爆裂と共にその外殻に確かな傷を刻んでいく。

「ギュルルツ、キュアアアアアアアアアアアアツ!!!」

そして、ソニックブラスト——大海原の果てまでも届く、龍殺しの音波振動攻撃。

「ルアアアアアアアツ?!?!」

それに飲まれた燼滅刃は大きく吹き飛ばされ、砕けた破片と共に大地を転がる。それでも尚原型を保ったうえ、致命傷には至らず立ち上がるそのタフネスは、彼が無謀な愚者ではなく、れっきとした強者であることを示すには充分。しかし、その戦闘を喧しいと感じた者も存

在しており、れつきとした強者であるからこそ、その文句に従わない、という扱は選べない。

「グルル……ルアオアアアアアアアアアアツ!!」

二体の視線が向いた先にあるのは、文字通り燃え盛る獅子の如き龍。

炎を纏う覇たる龍の、金色の視線を受けた二体は格の違いを理解し、片や大地を砕き、片や踵を返して、その場から退散する事を選択。気性の荒い筈の古龍、『炎王龍』テオ・テスカトルは、しかしそれを追うことをせず、翼を広げ飛翔。

途中、同じように燃え盛る翼と尾を持つ飛竜とすれ違っても、互いに敵対の意思を持たぬようで、そのまま何の行動も起こさず、半島中部、ゾラ・マグダラオスの亡骸の上に来た火山の一角に存在する寝床へと戻る。

生態系の頂点がそんな騒動を未然に防いでいた一方で、西部等では、普段の営みが続く。

「クアア………」

「ルオオオオオオオツ!」

「ツ!」

甲高い獣の如き雄叫びが響けば、餌場である甲虫の住処を大方漁り終えた『赤甲獣』がその身を丸め、大慌てで転がり逃げていく。それのみならず、草食種と称される、比較的無害なモンスターであるリノプロスやアプケロスも逃げ出し、小型鳥竜のイーオスなども同様の反応。

「クルルツ、クルルツ!」

それを笑うように眺めるのは、紅の色彩を持つ怪鳥……南方で『紅彩鳥』の名を与えられた、『彩鳥』クルペッコと呼ばれるモンスターの亜種である。この火山のヒエラルキーにおいては下部に位置するモンスターながら、その脅威的な『鳴き真似』により、他のモンスターの誘導するなどする狡猾なモンスターだ。

「ルルル………ツ」

「クルアツ!」

しかし、真似をしたからといって、そのモンスターが味方になるとも限らないが。

「ルルルツ、ルオオオオオオツ！ルルツ、ルオオオオオオツ！」

吼える、吼える。黒と白で彩られた、獣の如き四足の竜が吼える。それと共に、無数の赤黒い、禍々しい光の球が収束。その正体は、龍殺しの力を秘めた存在であり、それを纏う竜を知るクルペッコ亜種は、そそくさと退散。しかし、縄張りを侵す別なる同族の存在を危惧した竜は止まらず、集まった龍殺しの力を纏い、自身の力を成す。

「ルアオオオオオオオオオオツ!!」

天まで響かんばかりの咆哮と共に、莫大なエネルギーを帯びた一部の甲殻が開くように変形し、純白の体毛が逆立つ。同時に放たれる、莫大な龍殺しの黒雷を纏い、赤と黒の禍々しい光を纏う獣の如き竜……『獄狼竜』ジンオウガ亜種は、静かに己の外敵を警戒する。その力の源たる『蝕龍蟲』もまた、共生者の意思を汲み龍殺しの黒雷を散し飛ぶ中、溶岩の流れから顔を出す存在が。

「ルア？」

「ルウツ!」

「ギユイツ?!」

『溶岩竜』ヴォルガノスは、しかしジンオウガの敵意を受けた瞬間、そそくさと溶岩の中へ。

結局、そう時間もかからず徒労に終わったとわかり、ジンオウガ亜種は大人しく住処へと退散。当の紅彩鳥は、そんな混乱と恐怖に興味が無いのか、はたまたジンオウガ亜種から逃げる為か、ローブル熔山帯から離れた領域へと飛び立っており、少しの間は別の場所で混乱と混沌を齎していくだろう。

「グラララ………」

そんなトラブルメーカーを見上げるのは、特殊な液状油の沸き出す寢床に住まう煌びやかな竜。鋼鉄の鈍い輝きに混ざるのは、市場に出せば高い値打ちがつくであろう見事な宝石の数々であり、その姿はまるで、宝を纏っているよう。世が世ならば、さぞかし狙われたのであろうが、その煌びやかさに反した重厚な姿は、獣竜種『爆鎚竜』ウラ

ガンキンのソレだ。

『宝纏』ウラガンキン……その全身の宝石に催眠性の強いガスを溜め込んでいる上、ウラガンキンという竜のタフネスと、様々な鉱物が混ざり合った強固な金属甲殻、宝石という凶器を纏い一層強固且つ重厚になった大顎とを併せ持つ、間違いなくこの一帯でも上位に位置する竜だ。

そんな竜も座す領域であるが、他にも溶岩を、大地を泳ぐ海竜、鎧の如き重厚な外殻を纏う竜。比較的自然が豊かな東部には、『空の王者』の異名を持つ飛竜からそのつがい、天敵、それらが特異な変化を遂げた個体に、歳月の積み重ねにより更なる高みへ至った個体まで。その全域を通して、多種多様なモンスターが根付き、その力を示している危険地帯だ。

アベリオン聖獣連合にとって幸いなのは、この過酷な地での生存競争における敗者は、そのまま屍と化し、戦える状態で逃げ出すことが、殆ど無い事だろう。未知なる脅威に溢れた大地と隣り合わせた、この小さな生存圏でも、人々は日々を必死に生き続けているのだ。

生命の力を示しているのは、何も竜たちだけでは、無いということだ。

04―空の襲撃者

リ・ボウロロール——ボウロロープ侯の意向のもと、リ・ブルムラシユールとの密接な交易と共に発展させた武具の生産が盛んな大都市。豊かな土地と、それに比例する脅威へと対抗するべく育成された精鋭たちは、しかし驕る事無く、全国から集められた者たちと共に忙しなくあちこちを駆け回っていた。

「オヤジ！発注してたモンは?!」

「あと少しだ！お前ら、気合入れろよ！」

「まだなら急がせんな！急いで雑にされるよか、多少時間食ってもしつかり作らせてくれ！」

「おつちゃん、これで全部か？まだあるなら遠慮せず言ってくれ、まだまだ運べるぜ！」

「バーカ、体が資本の連中に余計な体力使わせられるかよ！年寄りだからって、舐めんなよ？」

領主ボウロロープ侯が、惜しまず資材を注ぎ込んだ特注武具を、バリスタを、皆が運んでいく。

「坊ちゃん、怖いか？それでいいんだよ、ヤバい時はまず逃げて、それで生き延びろ！生きて、情報を届けるんだ。いいか、絶対自棄を起こして特攻なんざするなよ。俺たちに、無駄死に出来る余裕なんざありやしねえんだ」

「は、はいっ！」

「おいおい、そう硬くなんなよ！お前さんが死んじまいや、お姫さんが泣いちゃうぜ？」

そう笑い、外部からの参戦者の緊張を解す者も。

そして、そんな彼らが運んだ物資が集められるのは、街より離れた、地形も利用した即席の迎撃拠点だ。予め小型のモンスターを排除したその場所で、熟練の兵と冒険者による嚴重な警備の元、様々な備えが進んでいた。その中には、このような事態にならねば有用性を見出されなかっただろう物から、伝来しなかったであろうモノもある。

「よし、火薬は敷き詰めたな？なら、ここは立ち入り禁止だ」

「そうそう、その補強だ……よし、これで緊急時の避難経路その1
2、完成だ」

「なんでそんなに作るかって？そりゃあ、少しでも多く生かして逃がす為に決まってるんだろ」

ドワーフの『トンネルドクター』の技術を身に着けた者たちが輸送経路兼避難経路を確保、その他にも、足止め用、攻撃用、牽制用含め様々な箇所に火薬を敷き詰め、起爆用のマジックアイテムと併せて、湯水の如く使い捨てるつもりで設置していく。

「…………ヤハリ、違ウナ」

「何が、ですか？」

その様子を見ていたコキュートスの眩きに、レベル差的に危険はあるが、懇願の末外部での支援活動を許可されたナーベラルが問う。その護衛も兼ねるコキュートスの続く言葉は、彼らを感じ取ったからこそのものであるが、ナーベラルを始めとする人間蔑視のNPCには受け入れがたい言葉だ。

「コノ者たちハ、カツテナザリックヘト攻メ入ツタ者たちト、大キク異ナル」

「…………本気で言っているんですか？」

「アア。彼ラニハ、奴ラニ無カツタ、輝キガアル。死ヲ恐レヌ勇猛ガ、他者ヲ想ウ慈愛ガ」

ナーベラルが唸る中、コキュートスは彼らに混じり、手伝いを始める。

「コノ物資ハ、ドコヘ？」

「む、すまないな。それならば——」

と、人間に混ざる^{リザードマン}蜥蜴人が指示した先では、^{ダイクエルフ}闇妖精が、トードマンが、ナーガが人間と共に、人間に出来ない場所での作業を行っている。どれも、トブの大森林にて過去に起きた事態から逃げ延び、人類との共存を選択できた者たち。最早、この世界を満たす脅威は人間だけの問題ではないのだ。

(ユグドラシルの頰を思い出す作業だ……俺一人じゃ無ければ、色々楽だったろうに)

そんなことを思案しながら、モモンガは持ち寄った
【遠隔視の鏡】ミラー・オブ・リモートビューイングを使い、現場の状況を確認しながら、集った貴族
たちの輪に混ざる。彼らの会話に耳を傾けつつ様子を窺えば、主な参
戦者は被害が生じ得る近隣の貴族であるが、中には王族の姿もあつ
た。

「では、手筈を確認しましょう」

そう取り仕切るのは、年若いながらも並外れた叡智を持つ少女――
―ラナー第三王女だ。

「まず、迎撃地点に誘導が完了次第、足場と周囲に仕込んだ爆薬を用い
て、強襲」

その視線が、モモンガの連れたマーレへと向けられる。

「その後、彼が魔法で足場を崩し、移動を封じる。その後、総攻撃を仕
掛ける、と」

「その通りとなるな。そうするのが、攻撃を封じる意味でも一番だろ
う」

モモンガの言葉に、マーレの表情が硬くなる。

「そこから、私の部下たちで鋏を封じ、残りで総攻撃となるだろう」

「では、背後のヤドへの接近について、広く警戒を促そう」

「それが宜しいかと」

ヤドの下は脆弱であるとはいえ、そこから吐き出される酸は強烈の
一言。跡形も無くては、蘇生魔法の使い様がない。そして、下手な者
がそれを浴びてしまえば、最悪貴重な武器まで喪われる。武器も実力
者も等しく貴重である以上、使い捨てるような真似は言語道断だ。

「全てが失敗に終わった場合、各経路を用いて撤退。第二迎撃地点の
準備を急ぐ形となります」

「うむ」

「失敗なんて、絶対しません!」

マーレが語気強く否定するが、モモンガはその頭を撫で、諫める。
「絶対など、ありはしない。出来るのは、最悪を形にしないよう足掻く
事だけさ」

「そ、そんなことありません!」

マーレが否定する中、モモンガは静かに手元の地図を見下ろす。
「それに、イレギュラーも起こり得るからな。それが最悪を齎す可能性も、捨てきれん」

ラナーが力強く頷き、同じように地図を見下ろす。

「現在、付近で目撃されているのは蛇竜種のガブラス程度ですが、油断は出来ません」

「うむ。現状目撃情報は無いが、だからと言って油断も出来ん」

ボウロロープ侯も厳かに同意し、地図と睨み合う。

「万全を期す為にも、監視網は私の方で構築しよう」

「いや、そこまで頼むわけには……………」

「見ての通り、私は死ネクロマンサー霊術師でな。使い捨ての兵力なら、幾らでも用意できる」

ここに来て最も輝いたのが、モモンガのキャラクタービルド。幾らでも生み出せるアンデッドを幅広く配置できる彼のスキル構成は、その死を以て危険を報せるという役割にうってつけなのだ。それを事細かに説明したことで、モモンガのアンデッドを用いた警戒網の構築が採用され、会議はさらに進展していく。

そして、その間にもNPCたちは、襲撃予定者の監視を続ける。

「巨大でありんすね……………ガルガンチュア並に」

「ですが、外殻の強度は彼を大きく上回りますね」

大地を踏み締め、突き進む仙高人を見下ろし、シャルティアとデミウルゴスがそう評する。

「進行は遅いようですが、余程の強度を秘めているのでしよう」

「わたしが一撃、叩き込み測るといえるのは」

「モモンガ様の作戦を乱すおつもりですか？」

デミウルゴスの言葉に、シャルティアは即座に前言を撤回。呆れ混じりに肩を竦めた彼は、その直後に強烈な殺気に表情を引き締め、振り返る。シャルティアも同時に反応し、視線を向けた先から飛来するのは——鳥。いや、違う。一見するとそう見えるが、そうではない。

「キュルアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

「ッ、デミウルゴス！」

咄嗟にシャルティアが庇いに入れば、細い足がその体を掴み、回避を封じた上で、下から強烈な一撃を叩き込む。『ミストフォーム』を使えば避けれる一撃も、デミウルゴスという庇うべき相手がいる状況では使えず、シャルティアはその一撃をもろに受け、飛行能力の制御を喪い落下。

「シャルティアッ!? な、くう——ッ!」

そして、黒き鳥竜はデミウルゴスに見向きもせず、シャルティア目掛け急降下。その狙いに気付いても尚、デミウルゴスに取れる択はそれ以外無く、身を挺して庇いに入り、衝撃で動けないシャルティアを狙うその鋭利な嘴を受け止めることを強いられた。

「っ、デミウルゴス?! ぐ、《内部爆散》ッ!」

「キュオアッ!?!」

第十位階魔法は、しかし抵抗レジストにより大幅に効果を喪い、甲殻が僅かに吹き飛ぶのみに留まる。

しかし、肉が爆ぜ鮮血が舞い散る苦痛により動きは明確に鈍り、デミウルゴスを強引に後ろに引いたシャルティアは、続けてスキル『不浄衝撃盾』を発動。衝撃波を攻撃に転用した一撃で、鳥竜を弾き飛ばし、強引に地上に。

「大丈夫でいんすか?!」

「何とか……しかし、あれは」

シャルティアの鎧を僅かに伝う、紫の液体……一目で毒とわかるそれを放ったモンスターへの警戒から、彼女はスキル『眷属招来』を発動。それを偵察に向かわせようとすれば、今度は地上から火球が飛来。眷属たる古種エルダー・ヴァンパイア・バット吸血蝙蝠が一撃で焼き払われると共に、無効耐性が機能しないことを伝えられている二人は急ぎ回避。

「まだ生きてるの!?!」

「地上に降りましょう! 空では他のモンスターを警戒する必要が出てくる!」

デミウルゴスは速やかに決断し、急降下。シャルティアもそれに続き、飛来する火球を回避。

幸運なのは、魔法による追尾効果が付与されていないことで、スキ

ルを使つての防御の必要が無いお陰で、使用回数のあるスキルやMPの消費を節約できている。が、相手は未知のモンスターであり、幾ら用心してもし過ぎるということはない。如何に、至高の存在により創造された自己への絶対の自信があるうとも、後れを取った経験が、事実がそれによる慢心を許さないのだ。

「キュルルル………キュアアアアアアッ!!」

吼えるのは、鳥を思わせるワイバーン。その体は全体的に細く、体を覆う甲殻は暗い紫色。鋭利なソレに身を包む竜の頭は、鳥を思わせる大きな嘴が大半を占め、申し訳程度に鋭い眼光を走らせる瞳と大きな耳、アクセントとなる白銀の鬣が。そして目を引くのが、細くしなやかな尻尾の先に立ち並ぶ、鋭利な棘。

『黒狼鳥』イヤンガルガ………『黒き凶風』とも称される、戦鬪行為そのものを好む攻撃的な鳥竜種モンスターだ。最早狂気的とすら言える鬪争本能を有し、時には自身より弱いものを惨殺し、時には自身より格上に挑みかかり、手傷を負いながらも勝利、或いは敗死するなど、兎にも角にも異質な怪物。

「モモンガ様、厄介なことになりました。現在、未知のモンスターの襲撃を受けております」

冷や汗を感じながら、デミウルゴスが報告を行う。同時にシャルティアが、黒狼鳥が動いた。

「はあああああアッ!」

「キュアアアアアアッ!!!」

歡喜を滲ませる咆哮と共に、無茶苦茶に体を揺らし疾駆。それにより単調な刺突を避け、その足でシャルティアを蹴り上げると共に、再びサマーソルト尻尾攻撃。毒こそ通じず、またフル装備のシャルティアはダメージを抑えられたものの、手応えの薄さを感じ取ったイヤンガルガは翼をはためかせ、再度距離を詰め尻尾攻撃。

「ぐっ、舐めるなッ!魔法最強化、《朱の新星》ッ!」

「っ、いけません!」

すかさず魔法を叩き込むが、当然炎には滅法強い。物ともせず突破し、その強固な嘴を以て鎧を穿たんと、頭を叩きつけるように振り下

ろす。しかし当然、シャルティア側もやられっぱなしではなく、総合力最強の名に恥じぬポテンシャルを發揮していく。

『ミストフォーム!』

「ッ!」

その姿が非実体となり、嘴は大地を抉る。それを抜くのに手間取れば、背後に回り込み、手中の槍を以て、先の魔法により甲殻が抉れた箇所を貫く。彼女の神器級武器であるスポイトランスがその効果を發揮し、シャルティアの負っていたダメージを回復。ガルルガの絶叫が響く中、デミウルゴスはモモンガに敵の特徴を報せていく。

「ええ、鳥のようなワイバーンです。尻尾に棘を持ち、炎を……名前が判ったのですか!」

デミウルゴスが驚嘆する中、シャルティアは『ミストフォーム』を駆使し、上手く戦いの流れを掴んでいた。その攻撃を躲し、スポイトランスによる攻撃を叩き込み続ければ、それだけでこれまでのダメージがどんどん回復していく。強固な甲殻を貫く手応えは悪いものの、上手く先の攻撃による傷を狙えば、的確なダメージが入る……

「ルルルッ、キュアアアアアッ!!」

しかし、彼女たちは知らない。この世界固有の脅威の一つを。

「キュオオオオオオオオオッ!!」

「っ、ぐう……!?!」

激昂を示す火炎の吐息と共に、鋭く咆哮。現地で纏めて『バインドボイス』と称されるその咆哮を直に受けてしまえば、アンデッドであろうと例外なく耳を抑え、行動を阻害されてしまう。そう、行動を阻害——『ミストフォーム』は、その効果を喪失している。

「っ、シャルティアッ!ぐ、《閃光》ッ!」

デミウルゴスが魔法を叫ぶと共に、イヤンガルルガの眼前で閃光が爆ぜる。

「キュアアアアアッ!」

その目晦ましで動きが止まったのを確認し、ダメ押しに普段なら使わないスキルを發動。

『ジュデツカの凍結』ッ!」

時間停止スキルが、黒狼鳥を凍り付かせる。それを理解してからの動きは速やか。

『悪魔召喚』！影シャドウ・デーモンの悪魔、奴の影に潜りなさい！」

調査と、保険。影シャドウ・デーモンの悪魔を探知できるのか、そして出来ない、撃破出来ないなら、そのまま忍ばせた眷属を経由して居場所を探ることも出来る。何より、時間が止まっている今ならば、相手に気取られることも無い。

「撤退しますよ、シャルティア」

「何を弱気な……………」

「私が居ては足手纏いです。かといって、完全に単独というのは認められません」

「そう、単独行動は不可能……………剛種がレアケースだとしても、だ……………チイツ！」

確かな屈辱を胸に、シャルティアが舌打ちすると共に。

「キュオアアアアアアアッ！」

黒狼鳥を凍てつかせた力が消失。

「転移門！」

「閃光！」

それぞれが魔法を発動し、黒狼鳥の視界を封じ、撤退。

残された黒狼鳥は、無念と憤怒の咆哮を響かせ、どこかへと飛び去った。

05―学ぶ智者

襲撃者がイヤンガルルガと判明してすぐ、デミウルゴスとの通信が途絶えた。

「デミウルゴス？デミウルゴスツ！クソツ！」

冷静さを欠いたモモンガは、しかし直ぐに精神的な乱れを鎮静化させ、イビルアイに貰った、現地のモンスターに関する資料――を、パンドラに翻訳させた写しを開き、黒狼鳥についての情報を調べ出すとする。そんな中、それをいち早く察知したラナー王女は、持ち得る限りの情報を口にしていく。

「黒狼鳥は、非常に好戦的で狡猾なモンスターです。主な武器は、吐き出す炎と尻尾の毒」

「炎………ということは、炎に耐性を持つか」

「はい。加えて、非常に狡猾で知られております。アダマントイト級冒険者でも無ければ対処が困難な程の実力に加えて、高い知能を持ち合わせているのが厄介です。恐らくですが、どちらを主に狙えば相手の行動を制限できるか、などを学習しているのでしょう。最悪、戦いの中で交戦経験の有無を見抜かれ、手札を切る機会まで考え抜かれている可能性もあります」

黒狼鳥の最大の長所は、その狂的な獰猛さを支える高い知能。アダマントイト級でも無ければ対処困難、という評価も穿ち過ぎでも何でもなく、その知能故に単純な実力以上に高い難易度を設定せざるを得ない竜なのだ。何より、炎と毒という、シンプルに凶悪な危険物を扱う上で知能が高い、というのが、危険そのもの。

「更に、強固な外殻が非常に厄介です。そして、水属性を除く殆どの効きが非常に薄いので」

「………そんな危険なモンスターが居て、よく平気だったな、この一帯は」

モモンガが呻くと、ラナーはそっと目を逸らし

「………生き死により、戦いが好きという危険生物ですのぞ」

「………え、なんで絶滅してないの？それ」

「私が聞きたいくらいです、全く」

素で聞き返してしまうモモンガに、ラナーは深く溜息を吐く。

狡猾、且つ好戦的でプライドも高い、というモンスターの為、成熟前に命を落とすことも多く、成熟しても繁殖前に命を落とすことも少なくない。それでも生き延びれるのは、突出したという程ではないにせよ高い戦闘力と、高い知能の賜物なのだろう。

「ですが、その活発さのお陰で消耗も激しく、その隙を狙えば」

「た、只今戻りました！」

ガチャリ、と音が響き振り返れば、肩で息をするシャルティア、デミウルゴスが。

「シャルティア！デミウルゴス！無事か!？」

「はい、なんとかか……しかし、油断しました」

「恐らく、それだけではないと思います」

と、ラナーが断じれば、二人が怪訝そうにその顔を見つめる。

「あの竜は高い知能を持ちます。恐らく、自身を知らないと判断し、そのように対応したのかと」

「……許されざる失態ですね」

「何を……お前たちが生きて帰った、それ以上の成果があるとしても言うつもりか」

モモンガが語気強く口にすれば、二人は静かに俯き、涙と共に平伏。「モモンガ殿の仰る通りだ。黒狼鳥が近隣に居る、と判らねば、最悪迎撃中に強襲されていた可能性もあります。内心は複雑だと思っていますし、私の言葉に悪意を感じるやもしれませぬが、どうか礼を言わせて欲しい。貴方方が得た情報のお陰で、より確かな策を組み立てられるでしょう。本当に、生きて帰って来ていただき、ありがとうございます！」

一人の貴族が立ち上がり、頭を下げる。他の者たちも同意と共に頷き、口々に彼らを称える言葉を続ければ、デミウルゴスたちからの印象も激変していく。シャルティアはやや単純故に、その素直な感謝と称賛に驚きを隠せず、デミウルゴスは頭が回るからこそ、彼らが打算抜きで感謝し、称賛している事を理解し、驚きに目を？いている。

「あの竜が居るとなれば、それに備える必要も出てきたな」

「何より、奴のことだ。地形や仕込みも利用されると見るべきだろう」
貴族たちが口々に対策を提案していく中、悪魔は静かに拳を握り締め

「…………モモンガ様、挽回の機会を頂きたく思います」

「ふむ？」

そして、奮起した。

「イヤンガルルガなる竜の討伐、どうか我々にお任せ頂きたい」

「…………では、この本を持っていけ。失敗は許容しよう、だが死は許さ
ん。そして、失敗したならば即座に報告しろ。そして、お前たち二人
だけでのリベンジは許さん。そして、最低でもあと一人は連れて行
け」

（失敗自体は悪い事じゃない。最悪、俺も現場に居る以上、失敗したな
ら纏めて転移させることも出来る。今回は情報不足を理解し、撤退
できただけでも最善に近いのに、それを失敗と見做すのはちよつとア
レだけど…………これをバネに成長してくれないと、俺以外も苦勞する
羽目になるからな）

現在、モモンガが最も求めているのは頭脳だ。既に高い知能を持つ
デミウルゴスが更なる成長をしてくれるのなら、それだけ彼の負担
は軽減されるし、ナザリツクの限られた戦力の運用も楽になる。何よ
り、信頼できる司令塔が増えれば、それだけ活動可能な集団数も増や
せる。

「ハッ！」

「では、我々はシエンガオレンに集中させていただきます。宜しいで
すね？」

「無論です。必ずや、貴方方が死力を尽くせるよう、場を整えましょ
う」

雪辱の機会を得た上、貴重な戦力を割くことまで許された。

その事実を噛み締めるデミウルゴスに、シャルティアに、この機会
をふいにする選択は無い。

「では、『朱の雫』と取り次ぎましようか？彼らは一度、我が領に現れ

た奴を倒した経験がある」

「いえ、そこまで手を煩わせる訳にはいきません。ここは、私たちだけで」

「いいや、軽い情報交換だけでもするべきだ、デミウルゴス。経験に勝るものはないぞ?」

これ以上人間の手を借りる訳には、と意固地になりかけたデミウルゴスを、モモンガは出来得る限り、最も穏やかな声で諭す。現状、最も身近で欠かせない情報源、兼戦力である人間との関係は友好的であるに越したことはなく、カルマ値極悪の彼がどう打ち解けるのか、調べたいという意図もあった。

「……………では、お言葉に甘えさせていただきますましょう」

「わかりました。では、申し訳ありませんが、席を外します」

と、レエブン侯が席を立ち、デミウルゴス、シャルティアと共に部屋を出る。

「……………不安要素は、彼らに任せるとしよう」

「よろしいのですか?」

「ああ。なにせ彼らは——」

その骸骨の顔に、自慢げな笑みが浮かぶ。錯覚なのだが、その場の誰もがそう確信した。

「私の、親友たちの子なのだからな」

*

リ・ボウロロール北西——エ・アナセルが見える、その一帯の荒野の上空。

「……………なによ、あれ……………」

こちらに動員されたアウラ・ベラ・フィオーレの視線の先にあるのは、エ・アナセルの更にある領域。白で覆い尽くされた、その一点だけが隔絶されたかのような銀世界だ。あまりにも唐突に切り替わり、広がる領域に対し、アウラは無意識に意識を集中……………探知スキルを使ってしまう。

そして、『ソレ』を認識し、同時に認識される。

「ひっ?!」

単純な索敵能力とは別に、探知能力に優れた彼女は、その圧を感じ取り、相手の姿を幻視した。

凍てつくような青の瞳、純白の体軀。氷の如く鋭利な鬣、角を持つ、獅子の如き龍の姿を。

「な、なによ、あれ……………」

凍てつく大地の王は、直ぐに興味を損ねたのか、その圧は瞬く間に消える。だが、少女の心へと残した傷跡は深く、先のクシャルダオラの比でない存在を知覚してしまったこともあり、その思考は大きく乱されている。それこそ、共に空からの波状攻撃を目論んでいた使役モンスターたちが、心配し寄って来る程に。

「あ、ああ、ごめんね、皆……………うん、アレに比べれば、これからのなんて」

そして、彼女はその絶対たる圧のお陰で、これまでの緊張が綺麗に和らいだ。

その存在を忘れるまいと、あとで伝えなければと考え、それでいて即座にスイッチを切り替え、眼下の動きに目を凝らす。シャルティアの召喚した吸血モンスターの群れが、デミウルゴスが炎、毒への耐性に重きを置き召喚した悪魔たちが殺到する先に、アウラはスキルによるデバフを宿した矢をつがえる。

「雪辱、果たしてよね！」

激励を叫び、持てる全デバフスキルを注ぎ込んだ一矢を放つ。

完全な死角から飛来した矢が、イヤンガルルガの背の傷跡を穿つた。

「キュアアアアアアッ!?!」

強烈な痛み、そして体を襲う脱力感に驚愕する中、吸血モンスターの群れを突き破り、紅の鎧に身を包むシャルティアが強襲。その顔面へとスポイトランスによる刺突を放ち、深々と先端を突き立てた。黒狼鳥が絶叫する中、シャルティアは『朱の雫』より得た情報の手応えを感じ取った。

『野郎、ガワはひたすら硬いからな。狙うなら顔と腹だ。特に、顔面はよく効くぜ?』

「ついでに、こいつも持ってきんさいなッ！魔法最強化、
フォース・エクスプロージョン
《力場爆裂》ッ！」

「キュオオオオツ?!?!」

意趣返しとばかりに、怯んだ隙に顔面へと至近距離から力場の爆裂、乱流を叩き込む。その暴威に直接顔面に浴びたイヤンガルガは大きな悲鳴を上げ、そこに次々吸血モンスターが、炎と毒に耐性を持つ悪魔が殺到。そして、それを合図に空のアウラが叫ぶ。

「さあ、一気にいくよ！」

水属性攻撃を持ち、且つ飛行能力を持つモンスターで統一された軍団による、波状攻撃。召喚されたモンスターを容赦なく巻き込んだの猛攻は、そのまま黒狼鳥を襲い続け、その肉体へと痛烈なダメージを叩き込み続ける。その発生源が空であると即座に理解した彼は、翼をはためかせ大地を蹴り、即座に空へと舞い上がり――

「閃光」
フラッシュ

「キュアオオオオツ!」

デミウルゴスが放つ閃光により目が眩み、墜落。再び集中砲火に晒される。

『ヤツはプライドが高いからな。追い込み過ぎなけりや、逃げより反撃を優先する』

「火力を控え目、と依頼したのは正解でしたね。ナイスチョイスですよ、アウラ」

命の危機を感じさせず、しかし闘争心を煽るべく、アウラのシモベたちの火力は低めにさせている。

それにより、デミウルゴスの目論見通りイヤンガルガは激昂し、空へと舞い上がり、大きな隙を晒してくれたのだ。間違いなく狡猾で強力なモンスターではあるが、知恵という一点ではデミウルゴスの方が遙かに上。十分な情報をもとに、雪辱の一点に重きを置いたのであれば、この結果も当然と言えた。

「いい意趣返しになったでしょう?――『ジュデツカの凍結』」

そして、時間停止による拘束。逃げを封じた上での集中砲火の中、シャルティアも奥の手を。

『死せる勇者の魂』

魔法、一部スキルを持たないながら、それ以外はシャルティア同等の分身の生成。

「ぶっ殺すッ！」

分身が突撃し、シャルティアはスキル『清浄投擲槍』を始めとする、この世界に定着した竜たちが弱点としない代わり、特別な耐性を持たない神聖属性、負属性の攻撃を連発。着実なダメージが蓄積する中、黒狼鳥は自身が嵌められたことに激昂しながらも、生存への道を探り続ける。

『それと、搦め手もいわず。麻痺毒やらなら、ちゃんと効くからな』

「——シャルティア！」

朱の雫のアズスの言葉を頭の中で反芻し、デミウルゴスが叫ぶ。

「魔法最強化、《麻痺》！」

そして、総合力最強が総合力最強たる所以である、攻撃から補助まで幅広い習得魔法。

それでいて、一般的なモンスターの多くは、無効耐性を持たない……状態異常が通じるのだ。

「キュアウオ?!」

「さっさと終わらせるでありんす」

その能力をフルに発揮できる指揮者が居るだけで、彼女の實力は大きく底上げされる。

そして、得た情報をもとに、デミウルゴスが組み立てた、その作戦に従う。ただそれだけでも、ペロロンチーノというガチビルドプレイヤーが組み上げた吸血鬼ヴァンパイアの秘めたポテンシャルは、その暴威を存分に振るうことが出来るのだ。それこそ、このように麻痺を無効にできないモンスターであれば、しつかりとした準備と併せ、ここまで追い込める程に。

「キュオオ………キュアアアア………ッ」

力尽き、黒狼鳥が死に絶える。

その亡骸は、苛烈な攻撃で死に絶えたとは思えぬほどに、綺麗に原型を保っていた。

「ふん。なんだ、大したことないじゃない」

「ああ!？」

「少々、拍子抜けではありませんが……成程、これが情報のアドバンテージ、という物ですか」

アウラの呆れにシャルティアが激昂する中、デミウルゴスは先の敗走を、今回の勝利を分析。

勝敗を分けたのは、やはり情報……ユグドラシルの最上位者たちがステータスを設定していた為、彼らは基本的に必須耐性から状態異常耐性、弱点の補強などが徹底されており、無意識にそれを前提に考えていたのだ。クシャルダオラという、毒が通じる敵を見ていながらも、モモンガ程冷静な分析が出来ていなかったことの表れでもあり、自身の浅はかを呪うばかりだ。

「アウラも、助かりました」

「どういたしましたー……って言いたいけど」

「あ?なんか、文句でもありませんか?」

シャルティアが睨む中、アウラは恐る恐る北西を見やる。そちらにある場所は、デミウルゴスも知っており、彼女が何かしら思うのも理解できる。出来るのだが、その怯えようは、少々彼の予想を超えており、興味よりも危惧が強く沸き上がる。

「なにか、見たのかい?」

「見た、っていうか、見えた、っていうか……あの龍より、格段にヤバいのがいた」

二人が明確に動揺し、そして振り返る。

あるのは、ただ静かに連なる白銀の山々のみ。だが、今はその静けさが、異様に恐ろしかった。

06―決戦前夜

イヤンガルルガ、討伐――

その報せが届いたのは、シエンガオレンが迎撃地点に現れると予想された日の、丁度前日。

「マジかよ！あのガルルガを倒したってのか!？」

「この土壇場でんな三流ジョークかませる訳ねえし、大マジだろうよ！っしや、明日は勝つぞ！」

「リ・エステイゼの底力、見せてやろうぜ！」

冒険者が、兵が盛り上がる中、パンドラの報告を受けたモモンガは一人思案する。

（あのイヤンガルルガ……長いからガルルガでいいな。奴の素材の武器は基本性能は良好と）

パンドラが確認した武器の効果を頭の中で反芻し、伝説級レジェンドには足りない、と結論を出す。

問題は、それがガルルガという種の限界なのか、あの個体が弱かっただけなのか、という点。

「モモンガ様」

と、長考していた事に気付き、顔を上げる。

「ああ、大丈夫だ。アル、ベッド……よ……」

そして、彼女が手にする大きなトレーに並ぶ、巨大な料理の数々に度肝を抜かれる。

「えと、それは？」

「こちらの料理というのを、試しに頂いてみたのですが……」

困惑するアルベドに『まあ、その量は戸惑うよな』と思うが、実は違う。

「その、私はアンデッドだから、手伝うとかは」

「え？」

「え？」

「……え、ああ、いえ！別に、食べきることは問題ございません。ですが、食材が」

そう、別に平らげる事は簡単なのだ。『ギャップ萌え』タブラ・スマラグデイナがそう設定した彼女は大食漢であり、これだけの量もペロリといけるクチ。しかし、彼女の言う問題はそこではない。

「これらの料理、調理過程は雑の一言です」

「……………まあ、ナザリックと比べれば、な」

「なのに、未知の食材ということ抜きにしても、その……………とても美味しそうですねです」

「ほう……………そこまでか」

好奇心が沸くも、直ぐに上がった歓声に気を取られ、そして啞然となる。

「いい飲みっぷりだぜ、コキュートスの旦那！」

「セバス殿も、見事な食べっぷり！ 私たちも敗けてはいられませんな！」

アルベドに盛られた量を、殆どの者がガツガツと平らげている。質量保存の法則どこ行った、と突っ込みたくなる光景であるが、驚くべきことにセバス、コキュートスも混ざり、彼らと同様の、悪く言えば品が無い食べ方で、その莫大な量を平らげているのだ。それも、まともな食事の経験がないモモンガですら、間違いなく『美味しい』と確信できる程真剣に。

「……………」

「どうやら、あの食べ方がこちらの流儀のようでした」

「冒険者であれ兵士であれ、戦う者は皆ああだ」

と、いじけ気味に現れたのは、イビルアイだ。

「イビルアイか」

「見てみる。令嬢のラキユースですらあの喰い方だし、ガガーランに至っては三倍喰ってるぞ」

目を向ければ、イビルアイの言う通り。百年の恋も、という感想は不思議と湧かないが、それはそれとして、ギャップが凄まじい。何より、あの量を平らげる事が出来る、というのが、ロクな食べ物が無いリアルを生きたモモンガには羨ましくもあるし、少々恐ろしくもある。

「えっと、お前の故郷でも？」

「ああ。幼い頃、一度だけ食べた幻獣チーズを挟んだロイヤルベークは絶品だった」

「いや、それは訊いてないんだが」

隣のアルベドが大真面目に訊こうとする中、それに気付かずモモンガは唸る。

「なんというか、場違い感が凄いな」

「諦める。食事の場は、そのまま交流の場ともなるからな。主力やリーダーが抜けるのは不味い」

飲食不可の二人が立ち尽くす中、アルベドはラキユースらのテーブルへと向かい、腰を下ろす。

「失礼」

テーブルにトレイを置き、改めてガガーランが貪り食う量を際立たせる。

「えっと、アルベドさんでしたっけ？」

「ええ。食事の場は交流の場でもある、とお聞きしましたので」

と、アルベドが情報を得ようと動く中で

「ウム、コノウイスキー、マコトニ美味ダナ」

「だろ？ちと値が張るのが難点だが、緊急とはいえ格安で振舞うたあ、領主サマも太っ腹だよな」

「だが、これだけの便宜を図って貰った以上、何としても勝たねばな」
「然り。我が主ノ、創造主ノ名ニ泥ヲ塗ラヌ為ニモ、我が死力ヲ尽クソウ」

大きなジョッキを空にしたコキュートスが奮起する中、リザードマンのゼンベル、ザリユースも大きく頷く。武人肌の彼の琴線に触れたらしい者たちが同じテーブルに集まり、同時にコキュートスは彼らへの敬意を忘れず、自身に不足する情報について、幾つか問いを投げかける。

「強大ナ竜ガ多イヨウダガ、何時モコウナノカ？」

「いいや？普段はランポスやジャギイみたいなのが殆どさ。それよりデカいの相手だと、何十人も戦えるのを集めて、何度も何度も情報を

整理して、策を立てて、相手によつちや十何日もかけて休む間も与えず、交代交代で攻め立て続けて、つて感じだな」

「ムウ……………イヤ、正面カラデハ勝テヌカラ、カ」

「ああ。我々の武器では、脆弱な部位を正確に狙わなければ中々な。マジックキャスターを何人も用意できても、第三位階魔法では中々効かないものでな……………隣の帝国には申し訳なく思うが、スレインの聖典部隊による支援は、これ以上無いくらい有難い」

ふむ、とコキュートスがその情報を咀嚼する中、セバスは……………

「魔化した武器でも、厳しいのですか」

「ええ。我が国の五宝物に数えられる剣であろうと、斬り裂く以上の痛手は中々……………」

ガゼフたち王国戦士団——リ・エステイーゼ王国最精鋭の者たちと、肩を並べていた。

「ふむ……………」

「武器は入って来るのですが、アダマタイトでは切れ味も強度も……………」

「入って来る、と言いますと?」

「アゼルリシアのドワーフです。リ・ブルムラシユールが主な交易窓口ですな」

ふむ、と思案するセバスが分厚い肉にかぶりつき、改めてその質の高さに驚く。そして改めて、その身に力が漲るのを感じ取り、静かに拳を握り締める。そして、その結果を齎した肉へと強い興味を示し、疑問を口にする。

「ところで、この肉は?」

「草食種のアプトノスの物ですな。温厚なモンスターで、竜王国では家畜化もされております」

また新しい国名に驚き、同時に疑問も浮かぶ。

「王国では、家畜化されていないのですか?」

「無論、されております。ただ、食肉として育てると、今度はモンスターが……………」

「成程。我々にとって美味な物は、モンスターにとっても美味という

ことですか」

「ええ。こちらのレウスウイスキーのような酒類は、まだマシなのですがね。野菜や果実、肉、魚介となると、我らが好むモノはモンスターも好むものでして。酒類を除けば、高級品と呼べる品は非常に希少で、今日振舞われた料理の素材も、殆どが一般市場で流通しているものです」

「なんと!？」

ナザリックの物程でないにせよ、間違いなく上質な食材。それが一般流通というのだから、驚くのも当然だ。その上、調理もナザリックのそれより雑だというのに、その味わいはあちらでの料理に次ぐ、と言っても過言では無い程。だというのに、この更に上があるという。

「……………」

「どうかなされたのですか?」

「いえ…………高級な品がどれほどなのか、気になりましたな」

「でしたら、落ち着き次第、竜王国に向かってみてはいかがでしょう?」

と、また別の戦士が提案し、口々に教えてくれる。

「二度、王都の商人の護衛として向かったことがありましてな。カツツエ平野の恐暴竜のせいで、通行がひたすら難しくはありますが、あそこを抜ければ悪食野郎が見向きもしない枯れた土地ですからね」

「おい、言い方…………ああ、枯れたつてのは間違いじゃないんですね。国土の殆どが砂漠地帯になってまして、ホント湖周り以外は不毛の地なんですよ。その原因である200年前の『覇種』は討伐済みなんです、その爪痕は酷い有様で……………」

「まあ、モンスターが弱くて比較的安全なのと、街が見応え満点なことで、他にも色々毛色が違うのは、最大の見所ですかね。俺も、無事引退出来たらもう一回観光に行きたいですもん」

「おいおい、そういうコト言う奴から死ぬんだぜ?」

「……………覇種、ですか」

静かに、驚愕を込め呟く。イビルアイ曰く、剛種より上——それを討伐できたとは、驚きだ。

「…………その、見所というのは？」

しかし、古い伝承となれば、彼らよりイビルアイの方が知っているだろう、と考えたセバスは、そちらより竜王国について訊くことを優先した。すると、出るわ出るわ。

「まず、街だな！砂漠を移動する街！」

「……………なんと」

「おいおい、飛竜乗り忘れんなよ。確か、あっちだと竜騎手^{ライダー}だっけ？」

「!?」

「それと、祭だな」

と、そこに加わるのはバルブロ王子。

「ぶっ!?で、殿下?!」

「そう構えるな。私も一介の戦士として、セバス殿と話してみたくてな」

と、隅の席に腰を下ろし、話を続ける。

「私も見たことは無いが、竜王国より南東の大砂漠を、一定周期で古龍が回っていてな」

古龍、という単語に身構えたセバスは

「その度に、国を挙げての祭になるのだ」

続く言葉に、思わず愕然となった。

「こ、古龍の襲撃が、ですか?」

「襲撃ではない。あの地は資源に乏しい為、巨大龍から得られるモノを売り捌いているのだ」

そして、続ける。

「しかし、タイミングが悪く、それらの収穫物は見れなかったがな。いや、実に無念だ」

しかし、砂海を泳ぐ魚竜種のキモや、食肉は絶品だ、と告げる。

「ほう…………それは、また」

「一度は、行ってみる事をお勧めしよう。必要とあらば、紹介状も用意しようではないか」

その言葉に、セバスがふつと笑みを零す。

「どうやら、また一つ敗けられない理由が増えてしまったようですね」

「何を今更。敗ける気があったとでも？」

「ほんのジョークです」

軽い笑いが巻き起こる中、それとは綺麗に異なる空気を醸し出す場があった。

それは、ナザリック地下大墳墓。

「……………事実なのですか？」

「嘘言う訳ないでしょ!? ホントにヤバいのがいたの!」

パンドラが険しい顔で問い掛け、アウラが怒鳴り返す。

「アウラの言葉が真実であると考え、私は一度調べるべきと判断しました」

「それ自体には賛同しますが、人員の派遣は反対しますよ？」

「いえ、幸いにも今回は緊急ではありません」

デミウルゴスの言葉を訝しむパンドラは、続く言葉で納得を示す。

「モモンガ様の計画に、現状直接関与しない以上、我々が直接監視する必要はありません」

「その通りですな。成程、ニグレド様を頼るのですね」

「ああ。彼女の調査能力は一級品だからね」

頷き合い、一行は第五階層の氷結牢獄へ。

調査能力に特化したNPC、ニグレドに事情を説明すれば、即座にクリスタル・モニター《水晶の画面》を併用しての調査を開始。そうして画面全体に映し出された銀世界に、そこを闊歩する存在に、デミウルゴスたちは思わず息を呑んだ。その獣は、それほどまでに大きく、屈強だったからだ。「山、ですね……………」

所々が銀に染まる体毛に身を包む、山の如き威容を誇る巨大な象。東方の寒冷地帯で『巨獣』の名で呼ばれ、『不動の山神』とも称される牙獣種モンスター、ガムートの老齢個体だ。その二つ名『銀嶺』の名の通り、山の如き威容は所々白銀に染まり、長い鼻や前足に纏う氷雪は鋭利に固まっている。

「でっ、かぁ……………」

「絶対、戦いたくないサイズでありんすね……………」

その巨軀は、アウラなら余裕で踏み潰せる程。シャルティアの言葉

に同意するように頷きつつ、その巨躯の近くに群れる毛深い獣の群れに興味を抱き、ダークエルフのビーストテイマーは周辺のモンスターに気を配る。そして、多くが草食であろうことに気付いた。

「もしかして、他のを護ってる?」

「さしずめ、守護者といったところですか……ニグレド、別の場所を」

巨獣の在り方への考察を打ち切り、デミウルゴスは本命を探るべく、ニグレドに指示。

「では、一度広い範囲を見渡してみましよう」

と、視点を引き上げ、広域を見渡す。連なる山嶺の合間に広がる氷原と、それを辿る先に広がる流水混じりの海岸線まで綺麗に見える中、先程の箇所から大きく離れた氷原が、爆ぜたのが画面に映る。何事か、とデミウルゴスたちが叫ぶより早く、ニグレドはその場所を拡大表示。そこに居たのは、四足で大地を踏み締め、一對の翼を持つ存在……即ち、古龍だ。

「馬鹿な……」

それが、三体も……デミウルゴスですら、声が震えた。

白銀の凶星が赫光と共に飛翔すれば、激突していた二体が離れ、片や激流を、片や銀流を解き放ち、その星を追跡。しかしその攻撃を、凡そ翼をはばたかせる生物では不可能であろう急上昇により躲したソレは、そのまま天空で軌道を変え、二体を同時に狙える位置まで弧を描き飛翔してから、再び方向転換し急降下。それに対し、氷の鎧を纏う龍は幾重もの氷壁を作り出し、銀流を操る龍は流体金属を大地に広げ、凍て固まったソレを強引に軟化させ、泳ぐように地中へと消える。

その氷壁による視線遮断の間に氷龍が飛翔して軌道を脱すると共に、氷槍を無数に配置。その数々に加え、機を見計らい新たに放たれた一撃の直撃を受け、墜落と共に天彗龍は氷原を転がる。更にその無防備を、地中に逃れていた司銀龍が下から強襲し、そのまま無数の流体金属を槍状に射出し、その体躯を攻撃。地獄絵図の如き古龍たちによる縄張り争いを目撃した守護者たちは、そのシンプルに不可思議な能力の数々に目を奪われていた。

「あの龍が氷を使つて、あつちが銀を使つて……あの銀色のは、一体……？」

シャルティアが困惑する中、痛手を受けた鳥を思わせる銀龍は特徴的な姿勢で何かを吸入。それを終えるや否や、その特徴的な翼を構え、赫色の光とも焰とも取れる何かを噴出し、飛翔。

「ッ、ニグレド！追跡を！」

「は、はい——駄目です、逃げられます！」

そして、その龍はそのまま、瞬く間の超絶加速を以てニグレドが追跡の魔法を使う間も与えず、彼女の視界から、索敵圏内から姿を消した。その劇的な加速による急上昇は、生半可な生物では殆ど即死同然の負荷がかかるだろうものであり、その飛翔方向が南東で無かったのが、不幸中の幸いだ。

「……地獄ですか、この世界は」

知恵が回るからこそ、デミウルゴスは三種の龍の實力を冷静に判断し、頭を抱えていた。

そして、この世界の人類に対し、心の底からの敬意と畏怖を抱いた。

07―決戦

明け方。ほんのりかかる霧の中で、峡谷に近い地形の只中を、巨体が進む。

龍のモノであると思われる頭は、よく見ればただの骨。その左右に伸びる足も、龍の太く強靱なそれではなく、細い細い、甲殻に包まれたモノだ。途方もない重量を支える、青銅器を思わせる鈍い色彩の甲殻が一步、また一步と大地を踏み締める度軽い揺れが周囲を襲い、崖の一部が崩落していく。その様は、まさしく天災であろう。

「報告は受けていたが……改めて、凄まじいな」

サイズで言えば、ガルガンチュアが近いだろう。しかし、そういった理屈ではない威圧が、そこには確かに存在している。何より、これがかつて対峙したクシャルダオラと同等の剛種であるという事実が、自身の命がかかっているという事実が、重く双肩にのしかかる。

「モモンガ殿、伝令だ」

そこに現れたのは、王国最強のマジックキャスターであるイビルア
イ。

「スレインより、漆黒、火滅、陽光の三大聖典部隊が援軍に来た」

「……………それはまた」

「剛種である、と判っているからだろうな。そして、強くなることが判った以上、これ以上撃退で留める訳にはいかない、と判断したんだろう。そして、それを成し得る戦力がある、というコトも」

その言葉の重みを実感しながら、モモンガは傍らで震えるマールを見やる。

「安心しろ、マール。私たちも、全力でサポートするのだからな」

「は、はい……………」

そうしている間にも、現地の者たちが必死に作り上げた迎撃地点へと、仙高人は大地を踏み碎き進んでいく。周辺に潜む者たちに気取られぬよう、装備による隠蔽効果を全解除したモモンガたちレベル100勢がそのまま囷となり、かの巨大蟹の意識を引き付けている中、目論見通り龍頭骨を背負うモンスターは、巨軀から予想も出来ない速度

で彼らを目掛け、大地を進む。

「では、始めるか」

と、自身を中心とする巨大な魔法陣を展開——超位魔法の発動準備に入る。

「離れている」

「わかった。その攻撃が、合図なのだな？」

「ああ」

イビルアイが《飛行》^{フライ}で離脱する中、モモンガは目前の火薬地帯を睥む。

（そう、合図だ。この一撃が何処まで通じるかもわからないが、起爆も纏めて行える筈だ）

そう判断し、手中に忍ばせたアイテムを握る準備をする。

「……………」

静かに、冷静に機を待つ。視界を遮らぬ位置に立つアルベドが、いつでも迎撃できるように盾を構える中、シエンガオレンはひたすらに進み続ける。そして、シエンガオレンが火薬地帯に踏み入るのを確認次第、ユグドラシル時代から魔法発動のタイムラグを熟知しているモモンガが、手中の即時発動アイテムを使用。

「開幕の一撃だ、派手にいくぞ——超位魔法、《失墜する天空》^{フォールンダウン}ッ！」

炎とは異なる、純然たる超高熱が蒼白の光柱として降り注ぐ。その熱波をモロに浴びた砦蟹から悲鳴の如き呻き声が響く中、周辺に仕込まれた火薬がその熱量により一斉起爆。崖までもが大きく崩れその巨軀を襲い、地下に仕込んだ爆薬の炸裂により、足場も崩壊。その体軀が地面に沈む中、隣のマーレもそれを合図に魔法を発動。

「魔法効果範囲拡大化、《地割れ》^{ワイドデン・マジック}ッ！」

大地が大きく裂け、その体軀を一層深くへと沈ませる。

「魔法最強化、《大樹の束縛》^{マキシマイズ・マジック}ッ！」

そして、行動を阻害するべく大樹を生み出し、嚴重に捕縛する。

数少ない武器である鋏を大地に縫い付け、背部の頭骨も嚴重に戒める。最強化により植物の強度も大きく底上げしたことで、そう容易く抜け出すことも出来ないでいる。ここまでが下準備であり、ここから

が本番。予め発動していた《生命の精髓》ライフ・エッセンスで視ていたモモンガは、ここまで撃ち込んで尚、消耗が10%にも届いていないだろうことに気付いていた。

「やるわよ、コキユートス！」

「ウム。才前タチハ、側面カラ攻メロ！」

「正面は、私たちが！」

「おうよ！」

「ゆくぞッ！」

アルベドが、コキユートスが、セバスが回り込み、シエンガオレンの正面から果敢に挑みかかる中、現地勢力は左右の側面から攻撃を仕掛ける。その体躯の殆どが大地に埋まっているというコトもあり、抵抗はほぼ不可能であるが、現地の武器を思えば、ダメージはそうそう出せないだろう。だからこそ、モモンガも消費を厭わず、使える魔法を片っ端から使っていく。

「魔法三重最強化、《現断》ッ！」トリプレットマキシマイズ・マジックリアリテイ・スラッシュ

属性の無い魔法攻撃の斬撃を、植物による束縛の隙間へと叩き込む。関節を狙った攻撃ながら、しかしその厄介な鋏を切り落とすには至らない。刻んだ傷を狙いコキユートスが、アルベドが攻撃スキルを叩き込み続けるが、中々切り落とすことが出来ず、改めてその強固さに辟易とさせられている。

「チッ、硬すぎるでしょう?！」

「ムウ……………ッ！」

「魔法三重最強化、《朱の新星》ッ！」トリプレットマキシマイズ・マジックザアーミリオーン・ノヴァ

「ハアアッ！」

「負けちゃいらねえなあ！」

「超技ッ！『暗黒刃ッ！超弩級ッ！衝撃波』オッ！」ダークブレイド

「おおおおおッ！『閃光烈斬』ッ！」インパクト

と、四人の超越者が攻撃を叩き込む中、アズスが、ラキユースが、ガゼフが、各々の武器で放てる最大の攻撃をひたすらに叩き込み続ける。それでも尚、その強固な外殻を貫けるのは極僅かな衝撃程度であり、それは左右から攻め立てる者たちも同様——いや、彼らの方が、

その減衰は大きい。

「《火 球》！ 《火 球》！」

「弾切れだ！バリスターの、頼む！」

「あのヤド、硬すぎんだろおい！」

そんな戦士たちに配慮し、崖上や崖内部をくり抜いた場所から攻撃する者たちの標的は、大樹で地面へと縛られたヤド。魔法位階が低いお陰で燃える心配は無いながら、それは言い換えれば、決定打には程遠いことを意味しており、消耗に反しダメージは芳しくない。竜骨から削り出した矢であろうと、ただでさえ強靱な巨大龍の頭蓋が基盤であるシエンガオレンには効果が薄いのだ。

「頭から離れる！魔法効果範囲拡大最 強化、《砂の領域・全域》ツ！」

そして、イビルアイが自身のオリジナル魔法を発動。本来なら対領域のそれで巨大蟹の頭部を、丸ごと覆い尽くすことで、強引且つ長期的に負属性のダメージを叩き込む。そして、上位者たちの活躍に、王国の者たちの雄姿に敗けていられるものかと、援軍であるスレインの者たちもまた、動いた。

「ハアアアアアアアアッ!!!」

スレイン法国の切札。武器の質と併せて、辺境における討伐実績最高の女戦士、『絶死絶命』が大地を蹴り、その大鎌で外殻を切り裂く。上質な武器である事に違いは無いというのに、この理不尽な硬さを見せつけられれば、成程『剛種』と定義される存在が危険視されるのも納得というものだ。

六大神の遺産を纏う漆黒聖典のポテンシャルは、番外以外の者たちも、間違いなく現地における最高クラスだ。ユグドラシル基準で見れば、伝説級手前の聖遺物級装備といったところであるが、アダマンタイトが最高である彼らの基準とは比べるべくもない。そんな彼らを、レベルでもスキルでも、装備の質でも大きく上回る筈の守護者ですら苦戦する外殻強度といい、間違いなくこの世界は異常と言えよう。

「っ、下がれ！」

そう鋭く叫んだのは、果たして誰だったか。

空から攻撃を続けるモモンガが、イビルアイが、老山龍の頭骨から漏れ出す液を、それによつて恐るべき速度で侵されていく樹木を、大地を目にした。脱兎の如く逃げる者たちを責めよう、などとは思わない。寧ろ、今のうちに逃げねば――

「マーレツ〜く、グレイター・テレポーション《上位転移》！」

モモンガは即断し、連続転移でマーレを連れ脱出。瞬間、莫大な量の酸がぶちまけられ、周囲の大地を蝕み、大樹の束縛を打ち破る。成程、これだけの酸は確かに脅威そのものだ、そして無効耐性が機能していないとなれば、マーレが浴びていれば――

ぞつ、とモモンガの背筋を、寒気が奔る。

「あ、ありがとう、ごぎいます……………その、ごめんなさい」

「謝る必要はない。寧ろ、生への執着を甘く見過ぎていたな」

莫大な酸により地形が変わり、戦士たちの接近はほぼ不可能。緩やかでないにせよ、縦穴を斜面へと変えられたことで、脱出もまた時間の問題ときた。幸い、感知が早かったお陰で死者は出ていないが、周囲への被害も出ている以上、現地の人間による援護は、本当に僅かにしか期待出来まい。

「……………止むを得ん、か」

別に、それを足手纏いとは思わない。何故なら――

「クソ！後衛は持てるモン持つて下がれ！次の迎撃地点まで退くんぞ！」

「急いで伝令を出せ！第二だけじゃない、第三以降にも準備させろ！」

「爆弾は置いてつてくれ！俺たちだって、それくらいは使える！」

「戦士たちは後退しろ！ここは我々と、召喚天使で食い止める！」

「火滅聖典は第二以降の迎撃地点へ急行！トラップの設置を急げ！」

彼らは、魅力にあふれ過ぎていた。

自分に無い、死を厭わぬ覚悟。それでいて、生へと喰らい付かんと足掻くその姿。

「……………ふ、はははは」

少しばかり……………そう、きつと少しばかり、魅了されているのだろう。

自分が持たない物を、当たり前のように持つ人々に。

「も、モモンガ、様？」

「マーレ、お前も第二拠点とやらに行け。そちらで、お前に出来る事をするんだ」

「え、え？」

と、無事な場所に転移し、マーレを降ろす。

「も、モモンガ様!？」

「すまないが、余裕が無さそうだな。【強欲と無欲】、少しばかり借りるぞ」

そう口にし、続けてマーレから、一時的にワールドアイテムを借り受ける。

そして、離脱、移動するべく方向転換したシエンガオレンの正面へと転移する。

「モモンガ殿、どうか撤退を！ここは我々が」

「いいや、その必要はないさ。この戦局を覆せるのは、私だけだからな」

だから、と。絶望に満ちた世界で、ただ惰性気味に生きてきた男は、戦士たちに目を向ける。

自分に無い、自分たちの世界に無い輝きを秘めた、心惹かれる勇士たちに、堂々と告げる。

「お前たちは先に行け。さもなくば、巻き込まれるぞ」

そう告げ、一振りの杖を手にした。

瞬間、支配者が纏う気迫が膨れ上がったのを、その場に居た誰もが認識した。

(実戦で使うのは初めてか……ああ、これでいい。ここで躊躇ってたら、皆に怒られるよな)

七匹の蛇が絡み合い、のたうち形作られる黄金の杖。蛇たちの口に収まる七つの宝玉の輝きが、その杖を形作る黄金の輝きが……それを握る、絶対なる死の具現たる支配者の姿が、この場に居た者たちに、希望の光を示した。たった一筋の光から、より強大な光へと、彼らの希望を変化させた支配者は、その杖を誇示するように、高らかと掲げ

る。

「『スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン』——そう、アインズ・ウール・ゴウン」

ギルド武器……ギルドマスターのみが扱える、ギルドマスター専用の逸品。

その性能はワールドアイテムにも匹敵し、モモンガ本来の主武装を大きく凌駕する。

「これを手にさせたんだ。あの世で、存分に誇るがいい」

その力により、モモンガの全能力は劇的に向上している。そして、杖自体に組み込まれた七つの神器級アーティファクトにより、モモンガが使えないものから、通常的手段では使えないものまで、様々な魔法が使用可能となるのだ。

「精霊たちよ！」

全ての宝玉の力を使い、通常の召喚魔法では決して召喚出来ない、根源系の強力な精霊を七体召喚。このステータスだけで見れば、現地人でも対処できないう程度であるが、彼が求めたのは使い潰せる強力な手札だ。そういう意味では、一日一度の制限はあるながら、強力な属性攻撃が可能な彼らは非常に優秀だ。

『『上位アンデッド創造』——『暗黒儀式習熟』』

そして、一日四回までの『上位アンデッド創造』スキルを二度で使い切る代わりに、より強力なアンデッドを召喚する。レベルにして90弱ながら、物理の効きが薄いと判断したモモンガにしてみれば、手札を選べるだけ有難いというもの。ここで選ぶべきは、強固な物理防御を貫ける手段……即ち、魔法を主体とした存在。

「ただの死の支配者だが……生憎と、こちらのスキルは別枠でな」
そう笑い、経験値を消費するスキルを、ワールドアイテム【強欲と無欲】のストックで肩代わりして発動。作成するアンデッドは、より魔法の扱いに長けた死の支配者の賢者を二体と、指揮官職を持つ死の支配者の將軍を一体召喚。そして、アンデッドである彼らは、モモンガのスキルによる多大な強化を受けている。

「では、景気づけに行くとしようか——魔法最強化、

《グラビティメイルシュートローム重 力 渦》ッ！」

仙高人を重力の渦が襲うと共に、強力無比な魔法の数々による波状攻撃が開始された。

08―決着

莫大な高位階魔法の波状攻撃が、仙高人を襲う。

(とはいえ、軽く見積もってもレイドボス級……どこまでやれるか) 冷静に自身のMPを、相手の体力を確認したモモンガは、改めて眼下の怪物を睨む。

「さて、続けるぞ」

見たところ、炎の通りは悪くない。電気は劣悪で、水土風もそこまですぐでいい訳でも無し。

最も良く通るのは龍殺しなのだが、甲殻種故の先入観でそれに気付かず、モモンガは炎中心に高位階の魔法を連発していく。三重化、最強化も欠かしてはいないのだが、如何せん元の体力が莫大故に、そのタフネスには唾然とさせられる。クシャルダオラの時に使った奥の手を、と思わないでも無いが、連発し過ぎてもっと危険な存在が現れた際に使えない、では話にならない為、兎にも角にも全力で魔法を打ち込み続ける。

「神話の類……などと言っている場合ではない、か」

その姿に目を奪われながらも、ガゼフは周囲に意識を向ける。

「弾ありっただけ持つてこい！あそこまでやって貰って、おめおめ引き下されるかよ！」

「クソ、何かないか！俺たちにできる事は無いのか!？」

そう叫び、冒険者たちが、兵たちが必死に援護の手段を探る。

「つたく、ああ言ってくれたんだし、素直に引きやあいいのによお」アズスもまたそう口にしながらも、視線は鋭く砦蟹を、その周辺を探っている。それはアルベドたちも同様であり、そして現在の砦蟹の背後……つまり、彼女たちの方へとヤドが向けられているからこそ、その事態に気付くことが出来た。

「あれは………試す価値はありそうね」

視線の先には、あちこちから煙を上げる巨龍の頭骨。

「ウム………デアルナラバ」

コキュートスが前に出る。同時に、他守護者に防御力で劣る彼を庇

うべく、アルベドもその隣を進み、盾と戦斧を構える。四本腕全てに武器を構えたコキユートスは、大きく息を吸い込むと共に、敬愛する創造主より賜った、かつての彼の愛刀を握り締める。

「——『羅刹』ッ！」

放たれる強力無比な斬撃が、その強固な筈のヤドへと深い傷を穿つた。

「——ッッッ?!?!?!」

それを感知したシエンガオレンは驚愕の悲鳴を上げ、即座に迎撃せんと背部に意識を向ける。

「ッ、逃げる、コキユートス！」

それに気付いたモモンガの叫びに、コキユートスは守護者としてではなく、武人として返す。

「才氣遣イハ無用！ソレヨリ、攻撃ヲッ！」

その身を飲み込まんと迫る超強酸の液塊に対し、飛び出したのはアルベド。

「『ウォール・オブ・ジェリコ』ッ！」

全体防御スキル——そこに、被ダメージを鎧に肩代わりさせるスキルを重ね、強引に防御。

「ぐ……ッ、セバス！」

「ハッ——『鬪気功』、『猛虎硬爬山』ッ！」

モnkの自己強化スキルの後、攻撃スキルによる痛烈な打撃。ただでさえ自己の酸に侵され脆弱になったヤドに、その一撃は良く響き、コキユートスが叩き込んだものと併せてかなりの亀裂が入る。が、それだけの強酸により、セバスの手袋も、コキユートスの刀も相応の耐久ダメージを追ってしまう。

「貴方たちは下がりなさい。あとは、私がやるわ」

と、前に出ることが出来るのは、アルベドの現在の主武装が破壊不可の性質を持つ故。

「うおらああああッ!!」

そして、彼女が最も単純な防御力とタフネスに優れているからこそ、スキル構成と耐久極特化の鎧による継戦能力を有するが故の、酸

による負傷を厭わぬ苛烈極まる猛攻。その剛腕と併せ、無茶な酸の行使による浸食に加えて、二人の高い物理火力を有する守護者による攻撃で脆くなつたヤドを徹底的に攻撃していく。

そのような真似は出来ないながらも、この場に居る誰もがその意図を理解した。

「俺たちも続け！あのヤドにありつたけぶち込むんだ！」

「アルベドさんに当ててるなよ！」

「わーってんよ！」

「戦士長！叔父様！」

「ラキューは回復魔法を使つてやれ！俺はありつたけぶち込む！」

「回復魔法を使える者は、アルベド殿に使えッ！」

その奮起の中、それらを援護するように、死の支配者の將軍が叫ぶ。

「回復魔法はアルベド様へ集中せよ！それ以外のマジックキャスターは、ヤドではなく本体へ攻撃を、それ以外の者は、アルベド様に当たらぬよう注意の上で、ヤドへ総攻撃を仕掛けよ！」

將軍の名の通り、有する指揮官系スキルが効果を発動。

その指示通りに動く者たちへと強化効果を齎し、僅かながら攻撃の威力を強化した。

「魔法は炎を使え！魔法最強化、《マキンマイズ・マジック焼夷》ッ！」

巨大蟹へと叩き込むのは、火柱が上がる程の猛火。火力は落ちるが、狙いは魔法名の由来である長期的な燃焼ダメージ。更に、隠された効果に燃焼中の炎魔法威力強化もあり、このようなダメージを稼ぎたい場ではうってつけであり、他の低位階マジックキャスターによる《ファイヤーボール火球》のダメージを少しでも上げることが出来るのだ。

「……………ふん」

そして始まるは、総攻撃。モモンガたちだけに負担をかけまいと、これ以上先に進ませまいと、各々が出来る最善を探り、それを力の続く限り実行し続ける。次があるから、まだ迎撃地点があるからと樂觀視するのではなく、それらしか無いからと死力を尽くし、誰か一人だけに全てを頼る訳にはいかないと足掻くのだ。

「それじゃあ、指揮は任せるわ」

「ハッ！……………(´)武運を」

「誰に言ってるのよ」

ウオーサイス
戦 鎌を手に、番外席次が大地を蹴る。

『絶命斬刺』ッ！」

強力な武技が、龍頭殻に近しい外殻を切り抉る。

「流石、神人と言うべきなのか、それでも倒れぬこの地のモンスターを恐れるべきか」

「言ってる暇があつたら、戦えッ！」

グレートソードを構える者が、巨大斧を手にした男が闘気を取り込み、その眼光を紅に染める。

「『獣宿し』ッ！」

長く辺境で戦い続けた、漆黒聖典の者たちが編み出し、継承し続けた武技『獣宿し』。

単発威力に重きを置く武器に特化したその性質は、取り込んだ闘気を武器に宿し、一撃に全てを乗せて叩き込むパワースタイル。そしてそれを、多くの竜の外殻を貫ける『神の遺産』を纏う彼らが用いれば、その一撃は大きな脅威となる。

「——ッ！ッ！」

それを、外殻の傷に集中させることで、砦蟹剛種の強靱な外殻を貫くことに成功する。

「感謝するぞ！魔法三重最強化、トリプレットマキシマイズ・マジック《隕石落下》ッ！」

轟音と共にシエンガオレンが傷ついていく中、コキュートスは静かに己の武器を見やる。

「ムウ……………」

たった一撃だというのに、その刃は激しく酸に侵されている。その強烈さを物語る結果が示しているのは、あと数度斬撃を叩き込めば、最悪武器そのものが駄目になるという事実。如何に彼が武人であろうと、創造主より賜った品が破壊される危険を前にすれば、躊躇いも抱く。

「コキュートス！」

そんな彼を見かね現れたのは、ナザリックで待機していた智者。

「デミウルゴス？」

「パンドラが新たに作った物を借り受けた。勝手は違うだろうが、その刀の代わりに使える筈だ」

「そう口にし、特異な外観の太刀を差し出す。」

「……………コレハ」

「あの鋼龍の素材を使った代物だ。使えるかい？」

「それを握り、軽く振う。」

「……………感謝スル」

「では、万一咎められた時にでも、フォローして貰えると有り難いね」

「フ……………心得タ」

「そう口にし、顔を上げる。」

「デハ、往クカ」

「ああ——シャルティアッ！」

デミウルゴスの号令と共に、紅の鎧を纏う戦乙女が飛来する。

「モモンガ様、助太刀いたしんすッ！」

その手にあるのは、デミウルゴスと交換したワールドアイテム——

——【幾億の刃】。

「喰らい、やがれッ！」

肢に刻まれた傷跡に刃を押し込み、効果を発揮。名の通り億にも達する莫大な数の刃により放たれる斬撃が、シエンガオレンの肢へと刻まれていた傷を内側からごり押しで広げ、一方を切り落とすことに成功した。これが古龍であれば、ワールドアイテムの力は借りられないかっただろう。

「見事……………デハ、デミウルゴス」

「ああ。頑張れよ」

「無論」

クシャルダオラの素材を用いた刀を握り、マジックアイテムを使い《飛行》^{フライ}を発動。シエンガオレンの正面へと舞い降りた彼は、『武器戦闘最強』の名に恥じぬ力強い攻撃の連続により、着実にもう一方の鍔による行動を阻害しながらダメージを蓄積させていく。

「お前たちは……………全ク！」

その様子を喜び、モモンガは更なる魔法を発動。更なるダメージを叩き込む。

「ッ、こいつ、また！」

そんな中、シエンガオレンはヤドから強烈な酸を吐き出そうと、予備動作を開始。

「——皆さん、全力で逃げてください！」

その口が徐々に開く中、マーレが崖上から全力で叫ぶ。

「死んでも知りませんよ！——シャルティアさん、口の中に魔法を！」

「承知しんした！魔法最強化、《力場炸裂》ッ！」

「魔法最強化、《大樹の束縛》ッ！」

シャルティアが龍頭骨の口腔内へと魔法を叩き込んだ瞬間、マーレが大顎を、大樹を用いた束縛で強引に閉ざす。自身の酸に加え、シャルティアの魔法による衝撃波を逃すことが出来なくなった龍頭骨は、アルベドによる執拗な攻撃のダメージもあり、その形を維持することが出来ず——

「…………マジか」

莫大な酸を撒き散らし、老山龍の存在を示す遺骨が爆ぜる。酸と骨片が周辺に多大な被害を齎すも、マーレの忠告を受けて早々に退散した者たちは皆難を逃れている。自身の酸を浴びたシエンガオレンの外殻こそ、影響は大して受けていないものの、そこに刻まれた傷口の奥からは煙が上がり、何より大きいのは——

「隠し通していた弱点が剥き出し、という訳か」

見るからに強度が低い、ヤドに隠れていた部位の露出だ。

「我々は援護に移るとしよう——コキュートス！」

「ハ、ハッ！」

「お前たちがトドメを刺せ」

そう指示する間もなく、最強格の戦士の一人、番外席次は酸に侵された大地を駆けていた。

「『絶命斬刺』ッ！」

その戦鎌の斬撃はすんなり通り、シエンガオレンから悲鳴の絶叫

が奔る。

「おおおおおッ!!!」

「死ねやあああッ!!!」

アルベドが、シャルティアがその武器による攻撃を叩き込む中、モモンガも敗けてはいない。

「さて、仕上げだ。動きを止めるぞー!」

「ハッ!」

召喚した副官アンデッドたちと共に、行動阻害を主軸に置いた攻撃魔法を叩き込む。

「魔法三重最強化、《現断》ッ!」

狙うのは、下。酸による溶解で大きく抉れ、露わとなったシエンガオレンの脚だ。精霊たちと、死の支配者たちに加えて、先の爆発から逃れるべく退いた者たちも出来得る限りの手段を講じ、背後に居る戦士たちが攻撃できる時間を少しでも伸ばさんと足掻く。

「オオオオオオオオオオオッ!!!」

攻撃スキルをありつたけ使い、脆弱な部位を深々と切り裂いていく。一点に対し過剰な戦力集中であるが、それを可能とするサイズに加えて、そうでもしなければならぬ、と判断させるだけの耐久を持つ巨大蟹の生命力を考えれば妥当以外の何者でもない。

「いい!加減ッ!くたばれえっ!」

そうしている間にも、シエンガオレンは刻一刻と移動の準備を整えていく。このままでは、討伐より先に地上に出られてしまうだろう。そこから逃げに徹されれば、著しく消耗しているだろうモモンガたち以外では、まともな攻撃を通すのが絶望的になる。

「くっ、このままじゃ……………」

番外の顔に焦燥が浮かぶ中、異様にハイテンションな声が。

「こんなこともあるのかと——ガルガンチュア!」

転移魔法で現れたのは、シエンガオレンに並び得る巨躯のゴーレム。

「ば、パンドラズ・アクター!?!」

「相談無き行動、お許しを。しかし、これでもなお——やはり、不足

ですか」

一転して冷静に振舞うパンドラの視線の先では、ガルガンチュアを押ししているシエンガオレンの姿が。単純なステータスだけなら、レベル100NPCをも超える筈のそれを相手に、肢を片方喪った状態で尚押し勝ちつつあるそのパワーは、本当に呆れざるを得ない。

「お手をお借りしますよ——紅蓮様ツ！」

瞬間、シエンガオレンの頭上から超巨大奈落スライムアレサルの領域守護者がのしかかる。溶岩の川に住まう超巨大スライムは、その体躯を駆使してシエンガオレンの身動きを封じながら、器用に攻撃が良く通る背部を露出させる。単純な強さでは一部階層守護者を超える存在は、そこに加え物理に対し滅法強いスライムというコトもあり、シエンガオレンも攻撃を通せずにいる。

「そ、その手があつたか!？」

単純なレベル差、ステータス差だけではない戦い方。

何より、パンドラの戦力投入タイミングが、本当に絶妙だった。

「……………神々のお力は、本当に恐ろしい……………筈なのですがね」

漆黒聖典の隊長がそう零す中、シエンガオレンから徐々に力が失せていった。

09―勝利の宴

砦蟹が、倒れる。

「……………今回のふれいやーは、随分とやるようだね」

それを遠目に見ていた白金鎧は、加勢せずに済んだことにひとまず安堵の息を零した。

「しかし、あの武器は……………一度、接触してみる必要があるかな？」

「そうね。かの大戦の再来は、私も勘弁願いたいもの」

純白の少女がそう口にした瞬間、白金鎧の主——ツアインドルクスⅡヴァイシオンは最大の警戒と敵意、殺意を以て武器を展開。声のした場所へと全力で叩き込むが、既にその場所には何も存在していない。声を発することが出来るような存在も、その痕跡も、何も……………だ。

「酷いわ。折角、貴方たち古き民の力を真似て、作り出して動かしているのに」

「な……………っ!？」

くすくすと笑う少女を、しかし絶句するツアインドルクスは認識できない。声は知覚出来ても、それ以外は全く以て知覚できないのだ。まるで、存在としての格そのものが違うかのように、この世界において最強に違いない竜王を手玉に取る少女は、彼の認識の外から声だけを届ける。

「古き民は、順当に力を増している。異邦の民がそれに手を貸す事自体、悪いとは思わないわね」

真紅の瞳に白金の鎧を映し出すも、白金の鎧がその姿を知覚することとはできない。

「……………キミは、何者だ？」

「さあ？あちらの世界では『祖なる者』、『白き王』なんて呼ぶけれど、誰も知らないのね、と寂しそうに笑い、白の現身は振り返る。

「なに？」

「こちらでは、誰も知らないわ。ええ、死した者であろうと、例外無く、ね」

それを最後に、古き民の力……………即ち、始原ワイルドマジックの魔法を真似たという少女は、姿を消した。

*
そして、周辺地域——そこに座す者たちも、それなりに強かった仙高人の死を感じていた。

氷原の主たる凍ての王は蒼白の瞳を戦地へと向け、銀を纏う龍、氷を纏う龍、共に戦闘を一時、中断。警戒とも、称賛とも取れる視線を向け、しかしそれもほんの数秒の事。直ぐに銀流が、氷塊が激突する熾烈な縄張り争いが展開される。

そして、古龍は何も彼らだけではない。

「オオオオ……………」

昏く、深い水面の遥か下。深淵にて、黄金が声を響かせる。そこにあるのは警戒か、感嘆か。

「キュルイイ……………」

アゼルリシアの険峰より、白き獣が大地を見下ろす。青い瞳で彼方の事変を見届けた、蒼雷纏う幻獣は静かに踵を返し、白い雪で包まれた大地を駆ける。興味が無いのか、それとも脅威と見ていないのか……………

「……………」

その遥か下、アゼルリシア山脈内部の洞窟では、白い輝きを纏う皇金を纏う龍が、それを察知。

ドワーフたちに崇められる古龍は、周囲の者が何事かと狼狽える中、未知なる存在への警戒と共に視線を向け、その瞳を細める。見事な皇金の鎧を身に纏う古龍は、暫しの間そこに佇み続け、少ししてから身震いと共に動き出す。

その行動と共に幾らか剥離する皇金をドワーフたちが拾い集める中、皇金の龍は地脈に沿い形成した己が住処を進む。200年前より、ドワーフたちに崇められる歴戦の王は、外界の脅威に対し確かな警戒を抱きながらも、しかし強者として取り乱すことはせず、悠然と振舞うのだ。

*

リ・ボウロロール——その夜、そこはお祭り騒ぎにあった。

「いやあ、モモンガ殿には本当に、頭が上がりぬ！」

「義父上の言う通りだ。改めて、礼を言わせて欲しい」

「いえ、礼なら私ではなく、あそこまでヤツを追い込んだ部下たちに言つて頂きたい」

ボウロロール侯、バルブロ王子が頭を下げ感謝する中、モモンガは苦笑気味にそれを窘める。

「彼らもだけど、貴方のお陰であることも事実よ」

そう柔らかく笑うのは、ハーフェルフの少女、番外席次。

「撃退に留めてきたツケとはいえ、私たちだけでは足止めも出来なかった。ただでさえタフさだけは難易度より遥かに上、とされてきた怪物だったけど、剛種になってそれも底上げされてたんでしょうね。本当に助かったわ」

「この地は王国でも特に広大な上、鍛冶業の街でもあります。喪失の痛手を思えば、モモンガ様のお力添え程喜ばしいことはございませんし、この結果以上に素晴らしいモノは、恐らく何があつても掴めないでしょう」

死者、ゼロ——どれ程望んでも難しいソレが、最大の危機の中達成されたのだ。

「本当に、ありがとうございます。この過酷な地で育った戦士たちは、何物にも代え難いもので」

「ん？過酷な………？」

モモンガの中では、この辺境のモンスターがデフォルト基準と化しているのだ。

その事実気付いた番外席次は、どうしたものかと軽く額に手を当て………

「ええ、過酷な。このリ・エステイーゼ近郊はとても肥沃な土地なのだけど、育つモンスターたちもその分強靱になるの。この一帯だと凡そ難易度285前後………大体、あの超巨大スライムに匹敵するモンスターが育ちやすいけれど、帝国辺りになると難易度270が時折現れる程度になって、竜王国一帯だと難易度240の個体ごく稀に出

没、程度になるわ」

「……………」

「補足いたしますと、我々の目測でモモンガ様たち御一行の大半が、難易度300相当となります」

早い話、ゲームに例えた場合、モモンガは転移地ガチャで最悪の次くらいの立地を引いた訳だ。

「マジか……………」

「無論、これらもあくまで普段の話になりますが。200年前、竜王国を襲った『弩岩竜』、この国を二分する惨劇を起こした『刻竜』は、それぞれ限界まで低く見積もって尚、難易度330を大きく超えるときれておりますから」

モモンガがざっと計算した結果、要するにレベル110相当という

「双方、覇種と定義される怪物だな。これを上回るとされているのは、ツアー……………評議国最強の竜王、ツアインドルクスⅡヴァイシオンの全力を刻竜共々受け止め、尚もヤツと共に健在だった輝界竜が定義づけられた『烈種』くらいか」

「機械竜？」

「『輝界竜』ゼルレウス……………黒き竜が国諸共魔神を焼いたのと異なり、こちらは魔神のみを正確に滅ぼした存在ですね。『刻竜』ラ・ロが『雌火竜』リオレイアに類似しているのに対し、こちらは『火竜』リオレウスに類似しているのですが、如何せん情報が少なすぎまして」

続々聞きなれない情報が、聞き逃せない情報が出てくる中、バルブロとボウロロープ侯は真剣に話を聞き続ける。この辺境で最も長い歴史を持つスレイン法国、その最精鋭である二人が持つ情報は、イビルアイとは異なる方向に充実している。

「それと本題ですが、刻竜の所在ははまだ不明……………しかし、『占星千里』の予知によれば、暫くの間は大事も起こらないようです。現在、王国で確認されたというモンスターたちの出沒地近郊に、それぞれ調査の人員を送っておりますので、詳細はまた後日となるでしょうが」

そこで言葉を切った隊長は、安堵を見せるバルブロへと目を向け

る。

「現状非公式ではありますが、我が国は近々、合同会議を開くことを決定致しました」

「承知した。私から、父上に伝えよう」

「近く、正式な書状が届くと思われまますので、どうかお願いしたい。それと」

そこで、視線がモモンガへと向く。

「モモンガ様。貴殿らにもご出席を願いたいのですが、宜しいでしょうか？」

その申し出に、モモンガは無条件で頷く。なにせ、合同というコトはそれだけ多くの人物が集合するというコトであり、多くの情報が一気に手に入るチャンスなのだ。ユグドラシル以上の強敵がゴロゴロしている世界だからこそ、情報を手にする機会を逸する訳にはいかな

い。「それで、詳細は？」

「後日、正式な文書が王国に届けられます。ですので、可能なら王国に人員を置いて頂ければ」

「わかった。では、そうだな」

モモンガが視線を向けた先には、酒盛りの只中にある守護者たちの姿。

「マール様のあの魔法、凄かったです！」

「あの、出来れば私たちにも教えていただけませんか？」

「え、いや、あの、えっと……………」

ダークエルフたちに尊敬の目を向けられたマールレが助けを求める視線を彷徨わせる。

さりとシャルティアが適当な女冒険者を連れ席を外す中、それに気付いたパンドラは

「マール様、あちらのプレデターハニーに漬け込んだという唐揚げ、とても美味ですよ」

「ほ、本当ですか?!あの、僕取りに行くので！」

マールレに美味しい料理を振舞っている場所を教え、そちらに行くよ

う暗に示す。

「……………パンドラに任せるとするか」

(なんだかんだ、普通に優秀だしな、アイツ……………時折、胸が痛くなるけど)

やや遠い目をするモモンガだが、直ぐに意識を切り替え、視線を下げる。

「となると、その内に他二体のモンスターも撃破する必要があるのか」「そっちは私たちに任せて。沢山手を借りた以上、このまま終わる訳にはいかないわ」

そう口にした番外席次の目には、確かな信念が見て取れる。しかし、未知の素材という好奇心を刺激する数々の要素である上、この辺境の過酷さの度合いを測る意味でも、そう易々と領けるものではない。が、不確定要素の塊ゆえ、そういった私情を抑える必要があるのも事実。

「むう……………」

「シエンガオレンの亡骸でしたら、喜んでお譲りしましょう。どうか、ここは退いて頂きたい」

そう口にしたのは、驚くことにバルブロだ。

「確かに、モモンガ殿もその部下の方々も精強。しかし、それに頼り切る訳にはいかんのです」

「その通りではあるな。あいつらも、私に頼り切らないよう、適度に手を抜かせて貰っているし」

その言葉で、モモンガもその意図を理解できた。

確かにモモンガたちは強い。強いが、それに頼り切って墮落してしまう、と言っているのだ。

「……………はは。叶わないな、全く」

自分であれば、喜んで手を借りてしまっていただろう。

この世界の人間は、自分が思うより遥かに強かで、逞しい。

「わかった。そちらの要望に従おう——それと、お二方。少々、人を貸してくれないか？」

彼が脳裏に思い描くのは、ナザリックにあるモンスター二体と、今

日討伐した砦蟹。

「貴殿のことだ、何かしらあるのだろうか？」

「買いかぶり過ぎですよ、ボウロロープ侯。私の部下が、モンスターの鱗、甲殻等を加工した武器が優れている事を発見しまして。その性能が如何程かを、貴方方の兵に試して欲しいのです。数を揃えるには厳しいでしょうが……」

「なんと！あのモンスターたちの鱗、皮を加工できるのですか!？」

「ええ。私の手元にある物となりますので、クシヤルダオラとガルルガ、それとシエンガオレンの三体になりますな。無論、どのような武器になるか調べてから、となるので少しお時間を頂くこととなりますが」

二人は真剣に考え込んでから、顔を上げる。

「では、我が最精鋭に話を通しておきましょう」

「私の方から、王国戦士団に打診いたしましょう」

武器というのは重要だ。何より、生存率を高められるのは最高と言っている。

「流石ですね……いやはや、貴方様方のような方々と会えた我々は、幸運という他ない」

信心深い隊長が静かに祈りを捧げるような所作を取る中、番外は難しい顔をしている。

「ただ、武器の力と己の力を勘違いしないよう、適度に叩き直す手段はあるといいかもね」

「……嫌味ですか？」

「さあ？」

心当たりのある隊長が一変し顔を引き攣らせる中、番外はグラスを傾ける。

「その通りだな。武器に頼り過ぎれば、それが無い時、或いは変えた時、あっさり死にかねん」

イビルアイの言葉は、モモンガにも突き刺さる。

ユグドラシル時代、武器を新調したはいいものの、これまで頼っていたスキルが無い、或いは低ランクの物になっているのを忘れ、それ

が原因で倒された仲間を知っている。なんなら、モモンガ自身も経験はあった。うっかり炎無効と神聖属性無効の装備を取り違い、仲間迷惑をかけたのも、今となっては笑い話の一つか。

「その通りではあるな。私も昔、色々しでかしたものだ」

「なんと、モモンガ殿も!?!」

「完璧な存在などいない、という当たり前のことですよ。私だって、皆さんが当たり前に持つものを持っていないのです。私は皆さんより優れた力を持っているのかもしれませんが、同時に皆さんは、私に無い信念と覚悟を持っている。お互い様ですよ」

そう笑い、ガルガンチュアに運ばせた、リ・ボウロールの城壁外にあるシエンガオレンの亡骸を見上げる。アレを使いアンデッドを、と試したい欲求も無くは無いが、それをやって万一のことがあつては困るし、素材としての価値を見れば勿体無い、どころではない。

「む、紅蓮殿はこれが気に入りましたか。では、こちらを。俺なら、自分で取ってきますので」

「あー！まだだ！アルベド殿、もう一勝負！」

そんな彼らの真剣な会話の合間にも、ナザリツクの者たちは現地の人々と交流を重ねていた。

EX―隔てる領域

リ・エステイーゼ王国北西部――エ・アナセルからアーグランド評議国までの領域。

そこそが、この辺境における三大危険地帯の一つ。『極寒』の『グランセル氷原』だ。

「……………ルルウ」

凡そ400年前その一帯を氷雪地帯へと作り替えた存在は、とある山の頂に座す。

インベリアとは異なる地で『始種』と名付けられた一体、『凍王龍』トア・テスカトラだ。

そのお膝下である大地は、文字通りの銀世界。人間、亜人では生きて通る事すら難しい。

「オオオ……………？」

しかし、そんな世界に生きる草食種、ポポを目の当たりにすれば、そんな印象も薄らぐだろう。

この地で生活するポポの群れの只中を静かに歩むのは、マンモスにも似た巨大な獣だ。

「ルウウ……………」

甲高い唸り声と共に、その長い鼻で少ない植物を掴み、口へと運ぶ『銀嶺』の二つ名を有するに相応しい獣は、『巨獣』ガムートの老齢体。氷原の内陸部に住まうこの草食獣は、しかし草食種ではなく、強靱な『牙獣種』に属する存在であり、この過酷な地における弱者、草食種の守護者に当たる存在でもある。

そして、氷原南方の、比較的穏やかなエリアの強者でもある。

「――アアアアアアアアアアアアツ!!!」

「ルウウツ、ルアアアアアアアアアアアアツ!!!」

咆哮と共に飛来した影へと、こちらも咆哮と共に突貫。重厚な足が大地を踏み砕き進み、大山を連想させる巨躯が飛来者と激突。鈍い音と共に激突したソレを近場の岩壁へと、自身の体重も乗せて叩きつければ、年若い竜はオレンジと青の鱗諸共血肉を散し、絶命。必死に突

き立てられた爪牙も、その分厚い毛皮と脂肪を貫くには至らず、無意味にその命を落としただけに終わった。

「ルウウツ、ルアアアアツ!!」

雄々しく叫ぶ南方の強者へと、無為に牙を剥く愚か者は早死にするのみ。

南方の強者たちは種族にかかわらず、無闇矢鱈と喧嘩を売る真似はしない。ガムートのタフネスは指折りであり、ただ挑んでは勝てないどころか、無為にエネルギーを消耗するだけで終わる事が大半。それを理解している者たちは、敢えてガムートの庇護下にある群れを狙いはしないのだ。

「……………ルウウ」

別の箇所、ポポを貪り食う飛竜。その姿はワイバーンと異なり、四肢で地面を踏み締めているその竜は、前足の先や口元を豊かな体毛で覆われ、鋭利な氷晶に覆われた鋭い二本の牙を剥き出している。純白のその体軀を獲物の血で赤く染め空を見上げれば、異なる飛竜が飛来してきたところだ。

「……………」

『氷牙竜』の特異な老壮個体『氷刃佩くベリオロス』は、その存在の所作から状態を理解したかと思えば、大人しく引き下がる。この広大なグランセルの氷原地帯の中でも、彼ら通常のモンスターは生存圏は存外狭く、長く生きそれを理解しているからこそ、彼は自身の食べ残しを新たな客人に譲ることを決め、翼を広げ飛び立つ。

「キュアアオオ……………」

そして、歓喜と共にその食べ残しへと向け、顎を広げ覆い被せる異形の怪物。

『毒怪竜』の異名を持つ飛竜は、その特異な構造の口内で死骸を削り、細かくして飲み込む。本来ならば、それを凍らせ、住処へと運ぶべきなのだろうが、悲しいかな、この飛竜は長らく獲物にありつけておらず、その知能を発揮する余裕も無い。漸くありつけた獲物を自らのエネルギーへと変えるべく貪り食い、飢えを満たすのだ。

そんな過酷な生存競争を強いられる南方だが、アーグランド評議国

へと続く海水域もまた、似たような過酷な環境。寧ろ、主な被食者であるポポ、ガウシカが立ち入らない分、捕食者の獲物は大きく限られる……即ち、ヒエラルキー下位の捕食者が、彼らの餌食となるのだ。

「オオオオオオオオオッ!!!」

「ギュルアアアアアッ!!!」

獣に近いふくよかな海竜と、青白い鱗に身を包む獣竜が激突。そこに、数多の影が飛び掛かる。

『凍海獣』ポカラドンと相對する『氷凜竜』ギアオルグへと、果敢にも躍りかかる小型海竜たちの正体は、ポカラドンの雌であるポカラ。関係は被食者と捕食者であるが、ポカラ種も決して喰われるだけでは終わらない。雄のポカラドンを筆頭とするハーレムを形成するこの種は、長であるポカラドンが死を厭わず外敵へと立ち向かい、ポカラたちもそれに続く形で果敢に戦うのだ。

「オオオオ」

「キュアアアアアアッ!!!」

そして、そんな彼らの争いに横入りし、弱く小柄なポカラたちを幾らかかつさらう存在が。

素早く絶対零度の海へと潜り込んだそのモンスターは、すかさず多量の海水を飲み込み、ポカラたちを溺死させ次第、その海水を排出。両生種、という独立した種に属するモンスター『化け鮫』ザボアザギルもまた、この氷海域の被食者側に当たるモンスターであるが、成長した彼らは立派な捕食者。その特異な体質も相まって、都市国家連合の国土にある北方の海では、相応の被害を叩き出している。

「ッ!?!」

しかし、ここはリ・エステイーズ国土の肥沃さに由来する、豊かな海。古き龍により大地が凍てつこうが、その事実を覆すには至らず、それ故にこの環境に惹かれたモンスターが、時に自身に合わない環境に身を投じてでも来る価値がある、と判断し、住み着くこともある。

「オオオオオオオオオッ!!!」

そして、その際たる者が——このグランセル氷原、沿岸部の『帝王』。鋭利な鋸状の刃を持つ翼で、背鰭で海水を割き飛び出したその

竜は、鋭利な刃で貫いた化け鮫を氷上へと投げ捨て、その裂創へと顔をつ突つ込み、その腹に収まるモンスター諸共、その肉を貪り食う。

鋸を思わせる鼻先の角から『暴鋸竜』と称される飛竜、アノルパティス。空陸海全ての領域での活動が可能な怪物であり、同じようにこの氷海域で活動する水蛇竜も、時折現れる氷鱗竜は疎か、それ以外のモンスターですら食糧と見做す凶暴なモンスター。更には、その活動範囲の広さでリンデ海にまでその魔手を伸ばしており、その所々焦げた外殻が、ここ最近で行われた捕食活動の存在を、その生存が勝敗を示していた。

その手にかかった化け鮫は、最後その胃袋の中で貪り食われたポカラたち諸共、亡骸を海中へと放り捨てられる。海中のモンスターの、魚の餌食となるだろうそれを放り捨てた暴鋸竜は、その角と翼を駆使し海水を砕き、再び海中へと消える。

そんな、熾烈な生存競争の場である南方であるが、これでも中部と北方の中継点よりはマシだ。

「ルアオオオオオオオオオオオッ!!!」

「ルアアアアアアアッ!!!」

銀流と水流が激突し、氷槍となったソレを銀刃が切り裂く。

「ルオオオオオオッ!!!」

赤く巨大な角状の箇所を中心に、兜の如く流体金属を纏うのは、『司銀龍』ハルドメルグ。

「ルアアアアアアアアアアアッ!!!」

相対するのは、鳥を思わせる姿の上から氷の鎧を纏う古龍、『氷龍』イヴェルカーナ。その身を包む輝きが、ただの古龍でない事を雄弁に語ると共に、それと対峙している司銀龍もまた只者ではない、という事実を強く物語る。グランセル氷原中部域に縄張りを有する司銀龍、そして北方に縄張りを持つ氷龍共に、縄張り意識が強く排他的な古龍であり、それ故縄張り争いもまた、幾度となく繰り返されているのだ。

「ルアオオオオオオオオオッ!!!」

流体金属による攻撃は、氷の防御を容易く貫く。

「ルアアアアアアアアアアアッ!!!」

対し、過冷却水を用いた変幻自在の冷氣攻撃は、あつという間に流体金属を凝固点まで冷やし、その鎧を無力化。双方とも、数瞬とせず再発動可能な程度であるが、互いに相性は悪い。本気で殺し合うにはリターンが割りに合わない、と知能が高い双方とも判断しており、全力には至らない。

が、遊びというには少々苛烈が過ぎる行動であり、双方の縄張り意識の強さが窺える。

いや、事実として、非常に縄張り意識が強いのだ。それこそ、司銀龍に至っては400年程前の領域への侵入の報復として、未だ北の評議国を襲撃し続ける程に。その苛烈さたるや、転移魔法以外での移動を全面的に禁じられる程であり、王国に対しても、そんな評議国の惨状を知る法国からの嚴重極まる警告が行われ、人類の手による調査は一切行われていない。

万一襲撃される国が増えれば、如何に法国といえど対処が出来ないからだ。

「——オオオオオ——」

しかし、人類にとつての不幸として。

この二体の古龍すら絶対者ではなく、警戒せざるを得ない存在がいる、という事実。

「ルアオオ………！」

「ルウ………ッ！」

龍に並ぶとされる、古龍級生物。その苛立ちを込めた咆哮が雪崩を引き起こし、二体の戦闘を強制的に中断。迫る豪雪の激流から逃れるべく宙を舞った二体の龍は、その咆哮の主が座す地を睨む。

そこは、山々の連なりの只中にある小さな盆地。『白き神』は一人、そこに座している。

「オオオ………！」

強靱な四肢に似合う巨躯と、シャベルの如く発達した下顎。その鋭利な縁と、鋸染みた巨大な鰭を有する体躯から、その肉体が強固な氷床を割き、泳ぐ為の物であるとわかる。咆哮の音圧による衝撃波で周辺に雪は綺麗に吹き飛んでおり、その屈強な四肢で大地を踏み締める

と共に微かな地震が生じる。

「ギユオオオオ………」

評議国とを隔てる危険地帯の名に恥じず、この地も強力なモンスターが数多く生息している。

何故なら、この地は強大な古龍の住まうお膝下。『始種』と称されるのも、伊達ではないのだ。

「……古き、始まりの龍の一角。キミは、何を思つてそこに居るんだい？」

アーグランドの永久議員が一人。『白金の竜王』、ブラチナム・ドラゴンロードツアインドルクスⅡヴァイシオンは、多くを知っている。彼の父、『竜帝』の手により異邦より招かれた、数多の存在………その中でも、『ゆぐどらしる』の者たちより先に現れたのが、彼らの一部だったのだ。

最初は、彼らもただ生きていただけだった。この世界を乱すことも、歪める事もせず、時に人類と敵対する者はいいても、生存競争で済まされる程度。何より、今ほど数多くのモンスターは生息していなかったのだ。竜王たちが目を光らせていた、というのもあるのだろうが、思えば彼らは、彼らなりに弁えていたのだろう。自分たちが、異物であるのだと。

「ぶれいやーを招いた父に対する恨み、なのかな」

それが崩れたのが、五百年前………八欲王による竜王の討滅と、未知の存在であった彼らの虐殺とも、乱獲とも取れる愚行。遊び感覚で命を奪い続けた彼らに対し、弁えていた古龍たちが奮起した。そして、その先にあつたのは虐殺だった。

最初に、黒き龍が八欲王の築き上げた国家を、彼らと彼らの拠点たる空中都市諸共滅ぼした。竜王たちを滅ぼし続けた八人を、そんな彼らと対等の力を有する30の守護者を物ともせず、蘇生すら許さず滅ぼし尽くした黒き龍は、今も尚その空中都市『エリユエンティウ』の残骸に座している。

「大蛇が大地を耕し、命を喰らい………赤き龍がこの世界を造り替え、浮かぶ峰が種を蒔き」

二本の脚を持つ大蛇が大地を砕く様を見た。紅の鱗を持つ巨大竜

が命を喰らう様を見た。地底で覚醒した、王と呼ぶべき赤き龍を知覚した時には、その力の影響を感じ取った時には、恐ろしくて仕方が無かった。力ある竜王の多くが滅んだその時点で、最早止める術は無かったのだろう。

『始種』の一角たる異形の龍が種を蒔き、大陸の随所に彼らに適した環境が作られた。凍王龍の活動により形成された寒冷地でもまた、多くの種がより精強に育った。塗り替えられた大地は徐々に彼らの生息圏へと変わり、百年としない間にこの世界は彼らの天下へと成り果てた。

竜王たちも、彼らに並ぶふれいやーたちも、普通の個体は兎に角、より古くからある龍に、或いは竜には勝てず、中には命を散す者もいた………かつて、共に魔神の暴拳を止めんと肩を並べた者たちも、その多くが刻竜と、魔神諸共国を焼く暴拳を止めんと命を懸け、最終的には彼らのリーダーの命と引き換えの足止めの中、ツアーは断腸の思いで最強の攻撃を解き放ち、徹底的に滅ぼし尽くした………そうしようと、していたのだ。

「………本当に、変わってしまったんだね」

南の竜王、キュアアイリムは既に滅ぼされた。彼ら竜王は、最早強者の一角に過ぎない。

「せめて、イヴェルカーナがいる間に、彼らの真意を測らないと」

だからこそ、最早私情を挟んでいる余裕は無い。彼らの生存の為に、この世界を完全に彼らのモノとしない為にも。何より、この世界に生き、抗い続ける為にも。

「手早いのはスレインか………と、その前に皆に伝えないとね。ホウ、レン、ソウだったかな」

白き竜王は、静かに行動を開始する。

10—竜王国

合同会議——その通達を受け、数日後。

「……………なにもありませんね」

リ・エステイーズ王国南東……………その先に広がる砂漠を、ナーベラル・ガンマがそう評する。

(これが、覇種とやらの爪痕か……………)

山々も微かな原型を残すのみで、大地は殆ど砂漠化している。

その惨状に言葉を喪つていると、鎧の音が隣から聞こえる。

「初めまして、かな」

白金の鎧を纏う存在に、今回は荒事になるまい、と連れ出したユリ、ナーベラルが身構える。

「よせ」

それを手で制し、モモンガはその眼光を鎧へと向ける。

「初めまして、だな。私はモモンガという者だが」

「ツアインドルクスⅡヴァイシオン。キーノから聞いているかな？」

「アーグランドの竜王だ」

覚えの無い名に首を傾げれば、ヴァイシオンを名乗った鎧はああ、と苦笑の気配を零す。

「すまない、王国ではイビルアイと名乗っていたね」

「ああ、彼女か……………というコトは、貴方がプレイヤーを知っている？」

「ああ……………と、来たみたいだね」

「来た、つて……………え？」

啞然となるモモンガの視線の先には、遠目にも判る超巨大な影。

「も、モモンガ様……………！」

「ああ、心配しないで大丈夫だよ。あれは——この国の、首都だ」

ユグドラシルにも確かにあった、しかし決定的に違うモノ——巨大な船舶だ。

そう、巨大なのだ。シエンガオレンなど、比では無い程に。

「で、デカ……………」

「この砂漠地帯で、ああした形で不定期に移動しているんだ。砂地は他に比べ、モンスターが活動域が地中にも及びやすいからね。他に比べ枯れている分、モンスターが強く育ち難い、強力なモンスターが居着くには旨味に欠けるとか要因は様々あるのだけど、それでも脅威はいる」

「どんどん巨大になる船は、リアルでも見る機会が皆無のタンカーとは大きく異なるとわかる。」

縦ではなく横に大きく作られたそれは、よくよく見れば一隻ではなく、無数の船の連なりにより大都市を形成していると判る。大型船舶の上に建築された建築物の群れが多数集まる事により、一つの大都会市となっているのだ。

「それから安定して逃れた上で、定住基盤を作るのも難しいこの地に適応してみせた訳だ」

「成程……それで船か」

「らしいね。幸い、技術自体はかなり発展していたらしい」

そう話している間に、超大型船は無事接岸。改めてその威容に目を奪われていると、都市の一つから地上へと続く橋がかけられ、同時にビーストマンの衛兵が次々現れる。二人が警戒を示す中、ツアーは悠然と進み、懐から今回の合同会議の通達書、及び正式に招待された事を示す招待状を提示。モモンガもそれに倣えば、彼らも直ぐに姿勢を正す。

「確認いたしました。ようこそ、竜王国へ」

「入ってすぐが、商業区画となります。会議場、及び宿を用意した行政区画は中央となります」

「わかっているよ。と、君は初めてだったね。案内はいるかい？」

そう振り返れば、モモンガは暫し黙考。

「いや、折角の申し出で悪いが、自分の足で散策してみるところ」
「そうか。じゃあ、気を付けて」

と、ツアインドルクスはそのまま一人乗り込む。二人が不満を示す中、モモンガは欠片も気にすることなく巨大都市船へと乗り込み、商業区画と呼ばれた賑わいの街へと踏み入る。人間とビーストマンで

賑わう街中では、枯れた土地の国とは思えない活気に溢れた声が響いている。少しばかり驚いていると、見覚えのある人影に気付く。

「む、イビルアイか」

「その声は……モモンガか。随分と早い到着だな」

何時の間にやら、互いに呼び捨てするようになっていた人物。現地ヴァンパイアの吸血鬼ヴァンパイアがこちらに気付き、何かしら買い込んだと思しき袋を片手に駆けてくる。意外に思っていると、背後から殺気。恐らく、呼び捨てが気に食わないのだろう。とはいえ、どちらも気にした様子は無い。

「ああ。竜王国がどういいうものか、気になってな。しかし、随分と活気があるようだが」

「この国がどういいうものか、わかるだろう？」

足元を軽く示してから、イビルアイは露天に並ぶ品々を指さす。

「お陰で、製造業が発展していてな。輸出も相応にあるが、こちらの方が安く買える」

「ふむふむ」

「加えて、今年は霊山だそうだな。いつも、霊山が来るときはこの活気だ」

「ここで、知識にある単語ながら、聞くとは思っていなかった単語が飛び出す。

「霊山？」

「ああ。『霊山龍』と呼ばれる、ジエン・モーランの亜種が来るんだ。見た目も美麗だし、収穫物も希少価値が高い。背中から採取される鉱石類は誰一人として加工できていないが、単純な美術的価値だけで鑑賞用に高い値が付くし、霊水晶に至っては質が悪い方が売れる始末だ」

「質が悪い方が？」

「というのも、美し過ぎてな。質が良すぎると、却って値をつけるのが躊躇われるんだ」

未知への好奇心、そしてコレクターの血を全力で騒がせる情報に、モモンガの心が躍る。

「それはまた……私も参加したいものだな」

背後の二人がぎよつとした顔になるが、二人は気付かず話を続け

る。

「まあ、討伐ではなく採取が目的だからな………というか、アレを討伐とか無理だし」

「そんなにか」

「シエンガオレンより格段にデカイ、砂海を泳ぐ龍だぞ？」

「無理だな、うん」

シエンガオレンですらあれだったのだ、出来る訳がない。

モモンガは即座にその結論を出し、全力で頷いた。人間であったなら、冷や汗だらだらだったであろう。あそこまで全力を出した上、こちらが有利な場所に誘い込んで尚あそこまで苦戦したというのに、相手のフィールドで戦うなど到底勝てる訳が無いだろう。第一、アレより巨大などと想像もしたくない。

そして、シエンガオレンと守護者の死闘を聞き及んでいたユリ、ナーベラルともに顔面蒼白だ。

「というか、よくそんなの相手にできるな………」

「戦いはしないさ。そもそも、奴はこちらから手を出さなければ無害だ」

そう笑い、イビルアイは転移魔法でその場を後にする。《飛行》^{フライ}の魔法も使える彼女は、この移動都市をある程度自由に行き来することが出来る為、転移魔法と併せて気軽に往復ができる。そして、接岸したことで位置も決まり、今なら仲間たちを連れて来れる、と一度戻ったのだ。

「しかし、霊水晶か………一度、見てみたいものだな」

美し過ぎて、値段をつけることが躊躇われる逸品。見たいに決まっている。

「それなら、後日幾らでも見せてやるから。今はこの国を満喫していってくれ」

「うおわっ?!」

驚き飛び上がりかけるモモンガが振り返れば、ラフな格好ながら高貴さを感じさせる女性が一人佇んでいる。ユリ、ナーベラルが全力で攻撃せんと身構えるが、モモンガは慌ててそれを制止。冷や汗の錯覚

を拭いたくなるのを堪え、その女性と目を合わせる。七彩にも見える虹彩を持つ独特な彼女からは、僅かながら人間と異なる気配が感じられる。

「ええと、どちら様で？」

「あー、今はお忍びでな。下手に名乗れんのだ」

カラツと笑えば、ユリとナーベラルは『なんだこいつ』と別の意味で警戒。

「それと、祭に加わりたいたなら構わんぞ。多少は差っ引くことになるが、霊山龍由来のモンの希少価値を考えれば本当に微々たるもので済むし、我が国としても人手が多いに越したことは無いからな。ただでさえ食糧やら各種原料を輸入に頼りつきりなんだ、稼げるときにトコトン稼がねば後が辛くなつてなあ」

実感の滲み出す言葉に、モモンガのみならず、背後の二人もその正体を察する。

「……………まさかとは思うが」

「言うなよ？いや本当に」

お忍びの竜王国女王、ドラウディロンⅡオーリウクルスが懇願が入ったトーンで静かに告げたかと思えば、綺麗に思考を切り替えたように、ちらちらと町中に視線を彷徨わせる。その先を追えば、次々と魅力を感じる店やその看板が目に入っていく。それこそ、王国の方で工面した外貨で足りるか不安になる程だ。

「……いらはウチで一番賑わってる場所だからな。存分に楽しんで、金を落としてくれよ、客人」

「無論、魅力的なものがあんなら、財は惜しまぬさ」

(惜しまないには、色々心許ないけどなあ……………！)

余裕を以て応じるが、内心は涙目である。ユグドラシル時代のインフレ感覚とリアルの貧困層の感覚が絶妙に噛み合い、何とか金銭感覚は崩れていないが、そのせいで却って不安が激増。自身の性分が最大の敵となるのだ。

「それは有難いな……………つと、宰相め、わざわざ精鋭を呼びおったな。では、また後程！」

と、仕事の山をほっぽり出し、プレイヤーの確認に来た女王はその場から逃げ出す。

「……………捕まえなくてよかったのですか？」

「まあ、色々教えて貰った礼だ。それで、お前たちはどうする？」

モモンガが振り返れば、当然二人はだんまり。自分たちの望みを口にするなど、不敬とでも考えているのだろう。ここまで散々頭を悩ませてきた要素であるが、今回に限れば、対ナーベラルにいい切札が用意できていた。

「そう言えば、コキュートスには希望通り、新たな武器を与えたな」

シエンガオレンの外殻を加工した刀……………パンドラ曰く、潜在能力はもつと凄まじい筈なのに、それを引出す術がないと嘆いていた逸品。それでいて、ユグドラシル基準でも十分な純物理攻撃性能と、コキュートスに有難い防御ボーナスを併せ持つ優れた一振りを与えたことを告げれば、ナーベラルの顔色が変わる。

なにせ、彼女の創造主である式式炎雷と、コキュートスの創造主である武人建御雷は非常に仲が良かった。NPCの人間関係はギルドメンバーのそれに準じた面も少なくない為、彼女に対し彼の名を出せば、それなりの変化がみられる筈、と判断したのだろう。

「……………いえ、ですがコキュートス様は、先の戦いで多大な戦果を挙げております」

(ああ!?!そうじゃん、ナーベラルたちは戦えてないじゃん!)

そして、ここで痛恨のミス。彼女たちプレアデスは、現地レベルの都合、マトモに外で活動させられていないのだ。リ・エステイーズ近郊は特に強力な個体が多いというコトもあり、活動は専ら市街地での後方支援等に留まっているのだ。そして、欲を出すことを『報奨』と捉えられてしまえば、彼女たちは一層私心を殺してしまうだろう。

「……………だが、お前たちは現地の者たちの手伝いもしていただける? それへの報奨だ」

「いえ、あの程度では……………」

「構わん。それに、コキュートスが求めた武具は最上級、お前たちはこの街で済む程度に留まる」

そのグレード差が成果の度合いに対するモノである、と強引に繋げ、反応を窺う。

「……………でしたら、その」

「構わん、言ってみろ」

一瞬ユリを気遣うように視線を向けた彼女は、意を決して口を開く。

「ゴキユートス様が美味と仰っていた、レウスUISキーなる美酒を味わってみたいです」

（アレか！あの高級品とか言ってた……………こつちでなら安く済むか？）

内心冷や汗をかくが、言い出したことを今更撤回も出来ない。

「では、探してみるとしよう。ユリはどうする？」

「私は……………セバス様が聞いたという、現地の竜を従えるという者について、知りたく思います」

ユリの願望は、モモンガをしても予想外だった物。

（こつちのモンスターってタイムできるのか!?てかセバス、教えてくれても……………あいや、今後の動きが未定の状態で変な情報を貰ってたら、下手したら俺がやらかしてたかもしれないなあ）

同時に、アウラがそれをできるのか、と思案するモモンガを、ユリは真剣な表情で見据える。

彼女に、彼女たちプレアデスにしてみれば、強力な竜を従える事が叶えば、それだけでも主たちの役に立てるかもしれない、という一縷の望みでもあるのだ。『戦闘メイド』という役割で創造されながら、敵がより強大である、というだけで本来の役職を遂行できない現状は、それほどまでに辛く、苦しく、同時に恐ろしいものなのだ。

「では、そちらについても調べてみるとしよう」

「ありがとうございます—」

「御慈悲、誠に感謝いたします—」

往来の只中で跪く二人に慌てながら、モモンガは彼女たちが見せた望みを叶えるべく、雑踏へと進んでいく。人間とビーストマンが混在する中、人間に対し警戒、或いは蔑視の色がまだ残る二人であるが、多

少なりともナザリツク外に出していたお陰か、そこまではない。
その一点に密かに安堵しながら、モモンガは未知の塊たる国の、最
大の街へと意識を向けた。

111—竜王

行政区画——竜王国最大の砂上船『七彩』に内包されたそこにある、要人向け宿泊施設。

「ふうー……………」

嚴重な警備のそこで、モモンガは密かに安堵の息を吐いた。

（船もそうだけど、色々独自に走りまくってるなあ……………いや、来てよかった）

竜王国の大部分である砂上移動都市船を支えるのは、発達したマジックアイテム製造技術。この国を支える重大産業の一つであるこれらの産物は、王国で一般流通するものと比べると大分趣が異なっている。この世界独自の発展は見てきたつもりだが、この地は群を抜いていた。

（この過酷さが成長の秘訣、なのか……………いや、けどリアルはあれだったしなあ）

一概に比べることが出来ないのは、百も承知だ。それでも、やはり羨ましく思ってしまう。

「モモンガ様？」

「ん？ああ、いや、なんでも無いさ」

脅威に溢れた世界に生きる者たちと、死に絶えた世界に生きた者。環境の違いは大きいと理解していても、やはりこちらの人々の方が好ましく思ってしまう。仲間たちも、彼らを見れば気に入っただろう、などと思案しながら、月明かりに照らされる街並みへと視線を移す。

行政区画ということで人影はまばらであるが、意外と物寂しさは感じない。

「さて、明日はソリュシャンとエントマが担当だが」

二人の纏う空気が変わる中、モモンガは続ける。

「お前たちには、自由を与える……………と言いたいが、最低限守護者の護衛は付ける必要がある」

「承知しております」

ユリの返答に頷き、続ける。

「言い換えるなら、それ以外の制約は設けん。お前たちが思うがままに、未知を探索するといい」

休暇を根付かせたいという打算と、自分と異なる視点から新たな情報を得られる可能性がある、という打算の入り混じりに、気遣いの心を山盛り乗せたプラン。二人は思ったより乗り気の様子。というのも、この間に情報を得ることに加え、自分たちが戦線に貢献する手段を発見できるかもしれない、という期待が芽生えているからだ。

「畏まりました」

「うむ。護衛はユリにセバス、ナーベラルにコキユートスでいいか？」
「御心遣い、感謝致します」

二人の反応に一先ず安堵し、テーブルに並ぶ購入品の数々と、自身の財布を見比べる。

(……………ペース配分、少しミスったか?)

王国より報奨、及び謝礼として提示された額が規格外過ぎて、尻込みの末、大分減らして貰ったモモンガだったが、それを今更になって少しばかり後悔する。とはいえ、剛種二匹という素材の宝庫を丸ごと引き取っていた事もあり、それを込で考えると過剰に思えてしまい、良心が咎めた。

「……………頑張るかあ」

二人に届かぬ独り言と共に、綺麗な月が浮かぶ空を見上げた。

*

純白の鎧と、貴人が通りを歩む。

「マジで? 剛種を?」

「ああ。キーノから聞いた限りでも、錆びたクシャルダオラとシエンガオレンを倒している」

愕然とするドラウデイロンを尻目に、ツアインドルクスは周囲の気配へと意識を割く。

「何より厄介なのは、全く未知の存在が興味を示していることだ」

「全く未知、という?」

「そのままの意味だよ。キミが生まれた時と同様に、姿は疎か気配すら掴めなかった」

その言葉に、ドラウデイロンはその端麗な顔を強張らせる。

『赤衣の』か……………成程、それは恐ろしいな」

「民にのみ知られた、素性不明の男……………そして、キミという先祖返りの存在を予言し、国の未来は明るいものだと言ったと祝福した存在。何より、キミの両親が何も掴めず、どこから来たのか、どこへ消えたのかも定かではない、あらゆる意味で異質な男だね」

高い知覚能力を持つ竜王たちの認識をすり抜けた、何者か——その出で立ちから『赤衣の』と称された存在は、文字通り正体不明の存在だ。ドラウデイロン生誕前に竜王国へと現れ、彼女が『先祖返り』……………『真なる竜王』、即ち始原の魔法を扱える存在と同等である、と予言し、この国の未来を祝福した存在だ。

そして、知られていないながら、八欲王の国にも現れ、破滅を予告した存在でもある。

「改めて口に出してみると、ほぼ確実に関連があると思えるね」

「というか、确实だろ、ソレ……………古龍の動きへの警戒といい、やってらんねー！」

「あー、うん……………本当に申し訳なく思うよ」

評議国のすぐ南に凍王龍、司銀龍が居を構えたのが、約400年前。

そして、氷龍の来襲は200年前……………この時、何が起きたか。

『エルダー・コフィン・ドラゴンロード朽棺の竜王』が、南の国複数を攻撃したんだっただか」

「ああ。キーノがああなる原因で……………当のキュアイーリムは、滅尽龍に喰い殺されたそうだ」

凄惨な過去であることに違いは無い筈なのに、彼女にあの地獄以上の恐怖を植え付けた存在。真なる竜王を殺し、喰らうという異例の事態を契機に、各地に古龍やそれに並ぶ強者が移動、或いは定住を始めたのだ。グランセルの氷龍もそんな変化の一角であり、結果として司銀龍による評議国襲撃への抑止力となっているが、その縄張り意識の強さから、余計に手が付けられなくなったことに違いは無い。

『ヘブンリー・ドラゴンロード天聖の竜王は光を放ち翔ぶ龍に監視されているというし、東方も古龍の影有り、だ」

「あー、ヤダヤだ。200年前の、500年前の再現は勘弁願うぞ、本

気で」

口振りこそ軽いが、仄かに色が変わった目には、王としての格たる信念が宿る。

「……………そう、だね」

その様子にツアインドルクスが言い知れぬ、それでいて覚えのある寒気を覚える中

「モモンガ様あ！このお肉、とっても美味しいですう！」

「え？これだけの物が市販品？え……………え？」

無邪気に喜ぶ蟲のメイドと、戸惑うシヨゴスのメイドの声が響く。

「……………探す手間が省けた、かな？」

「みたいだな。おーい！」

と、そこにフレンドリーに突っ込むドラウデイロン。

「む？ああ、昨日の」

「今は普通にオフだし、気にしないでいいぞ。と、そちらのメイドはそうもいかんか」

竜王の中でも、特にプレイヤー由来の恩恵を受けた国の長だからこそ、と言うべきか。

若輩ということもあり、ドラウデイロンからプレイヤーへの印象は悪くないどころか良好な部類であり、自身に向く敵意に関しても『仕方ないか』と笑って済ませていた。彼らが信用に足る、と判断したからこそその好意的な振る舞いなのだろうが、少々フレンドリーが過ぎる気がしないでも無いか。

「ドラウデイロン、先に挨拶するべきじゃないのかい？」

「む、それもそうか。すまん、昨日顔を合わせてたもんで、すっかり頭から抜けてたわ」

ツアーが諫めれば、更なる警戒を呼び起こす。が、ドラウデイロンは構わない。

「それで、ウチの国の肉はどうだ？」

笑顔での問いかけに毒気を抜かれた二人は、困惑気味に口を開く。

「とつても美味しいですけど……………これ、高級品とかじゃないんですか？」

「露店でんなモン使える訳ねえって。なあ、陛下」

狼を思わせるビーストマンが肩を竦めれば、ドラウデイロンも同意するように笑う。

「そうだな。人肉の代替として力を入れた代物だ、市販品でも絶品だぞ?」

異形種である事を考慮した発言であるが、三人とも揃って身を強張らせる。

何を隠そう、この国の食肉の質の劇的な向上には、人肉食の亜人、ビーストマンへの恐怖が大きく関与しているのだ。弩岩竜の来襲と共に、同族の大部分が貪り食われた彼らであるが、その食性は人間にとって恐怖そのもの。当時の王との取引にしても、何時反故にされるか、と恐れた。故に、彼らは人肉より遥かに上質な食肉を用意しようと足掻き、結果として現在の食肉の質へと至ったのだ。

人肉食の種にその味を忘れさせる程にまで至ったのは、間違いなく快拳だろう。

「——とまあ、そういう歴史があつてな」

「それは、また……」

その過去を掻い摘んで説明すれば、モモンガは感嘆し

「……………」

かくあれかし、と創造された二人は、自己の根底を崩しかねないソレに、恐怖していた。

「本当に、この国は遅しいな」

「曾爺さんが作った国だからな。影も形も無くなっても、絶やすことはしたくなかったんだろう」

どこことなく誇らしげな彼女に、その祖先に、モモンガは少なからぬ親近感を抱いた。

積み重ねたものを無為にしたくない……アインズ・ウール・ゴウンというギルドが潰えることをよしとしなかった、自身と重なったのだろう。その末、ここまで至った彼らを尊敬すると共に、自分にそこまでの気骨があるかどうか、という劣等感もまた生じる。

「素晴らしいな……本当に」

「ああ。大概無茶振りであったが、応えてくれた民に、感謝してもし足りないくらいだ」

笑うドラウデイロンの隣、ツアインドルクスはそんな話題を打ち切るかのように、咳払い。

「と、すまんすまん。少しばかり、私的な用事があるんだが……付き合って貰っていいか？」

そして、本題。

「むう……お前たちはどうする？」

「モモンガ様の決定に従います」

「私たちはあくまでメイド。モモンガ様の決定に異を挟む権利はございません」

ソリュシヤン、エントマ共に自身の意向は二の次……モモンガは暫し悩み

「それは、緊急の用件か？」

「早いに越したことは無いね。現状の君たちを見るに、問題は無いんだろうけど、確信は出来ない以上は尚更だ。君たちがどう思っているかは別として、僕たちにしてみれば、警戒せざるを得ない理由があるからね」

「…………ツ」

ツアインドルクスの言葉にソリュシヤン、エントマが殺気立つ中、モモンガ、ドラウデイロンがそれぞれを制する。とはいえ、過去を思えば当然のことであるし、ドラウデイロンと異なり直接惨劇を、変化を見てきた彼だからこそ、その思いも強い。

「まあ、待て。だが、私は警戒されるようなことは…………」

「君個人というより、君たちという総体が危険視されている、たとえば判るかな？」

総体——ギルドか、はたまたプレイヤーか。恐らく、後者だと当たりをつけたモモンガは

「わかった。そういう事ならば、早めに済ませるとしよう」

警戒されている理由も気になるし、敵対の意思が無い事を早々に表明しておきたい事もある。

意を決し、モモンガは二人の申し出を承諾。二人の竜王の力によって、彼らが用意した場所までソリュシャン、エントマと共に転移。その未知の力に驚いていたモモンガだが、続けて視界に飛び込んできたモンスター姿と、奥に点々と飾られた美しい水晶に目を奪われる。「ああ、大丈夫だぞ。彼らは客人だからな」
「オオ……………」

鉱物質の、所々金色に染まった鱗を纏うその竜は、ドラウデイロンが宥めると共に警戒を解き、特異な結晶体……………魅玻璃と呼ばれるソレを纏う体躯を床に落ち着かせ、静かに身を揺らす。その赤い瞳に射貫かれた戦闘メイド二人が身構える中、モモンガは庇うように移動しながら二人を宥める。

「落ち着け。お前たちではどちらにせよ無理だし、敵意が無いというのに刺激する必要も無い」

そう、無理——そう判る程度には、彼は異質だった。

「その竜は？」

「昔、湖畔で拾ってな。『晶竜』だったか、そう呼ばれている」

「この国に住まう竜の中では、間違いなく最強だと思うよ」

最強……………その言葉にモモンガが警戒レベルを跳ね上げる中、ツアードラウデイロンは平然としており、そのまま用意されているソファに座るよう、手振りで促してくる。二人が座った背後には晶竜と呼ばれたモンスターが横たわり、静かにその瞳を三人へと向けている。

「……………では、お言葉に甘えとしよう」

「ですが……………」

「構うな。敵意が無い、と言ったのはあちらだ。それに、わざわざ戦うメリットが無い」

「その通りだ。そして、その必要が無い事を確かめるのが、今回の目的でもある」

ツアインドルクスⅡヴァイシオンの言葉は、穏やかなようで棘がある。

当然だろう。彼は、見てきたのだ……………世界の変化を、そして最悪

の存在の暴威を。

ブラチナム・ドラゴンロード
白金の竜王と呼

「改めて、ツァインドルクスⅡヴァイシオン……ばれている」

「竜王……成程」

「そして、この世界の変化を見てきた者でもある」

最悪にして最大の脅威を知る者は、その再臨を阻止する為にも、彼らに率直に問う。

「だからこそ、訊きたい。君たちは、あの龍たちで満ちたこの世界で、どうするんだい？」

あまりに抽象的な問いであるが、それだけで十分だと、ツァーは判断している。

「……どう、と言われてもな。あんな化物ばかりでは、出来る事もそう多くはあるまい」

彼にとつての幸運は、彼がリ・エステイーゼ近郊という危険地帯に転移していた事だろう。

「龍から作り出した武器に、魅力は感じないのかい？」

「魅力的ではあるが、リスクを考えれば釣り合わん」

「……ふむ」

その言葉を咀嚼するように数度頷き、ツァインドルクスは安堵と共に肩の力を抜く。

「虐殺の類をしない、というのなら、心配はいらないね」

「だから言ったろ？お前さんはちよいと心配し過ぎだ」

「黒龍の力を目の当たりにした以上、二度とアレが振るわれないよう警戒するのは当然だろう」

怯えを隠さぬその言葉に、モモンガは強い興味を示す。

「こくりゆう？それは、リ・エステイーゼを焼いたという……」

「ああ、そちらも同じ音で刻竜だったね。黒龍というのは、この世界を変えた存在だ」

今では御伽噺扱いだけど、と前置きしてから、白金の鎧は過去の災厄を語り始めた。

12―過酷な世界

ツアインドルクスの脳裏に、かつての惨劇が昨日のここのように鮮明に浮かぶ。

「本当に、奴の出現は突然だったよ。突然空が暗くなって、奴が……『黒龍』が現れた」

そこから彼は、記憶のままに語る。

現在で言う難易度300前後の竜王たちを滅ぼした八人のプレイヤーは、それまでに多くの黒龍たちの同胞、現在この世界に満ちているモンスターたちを虐殺していたというコト。当時は彼らの勢力圏も広くなく、強力な個体も表に出ることが無かった、と前置きしてから、それが過去の惨劇の引き金になったのだと。

「傲慢だった彼らの街は、あつという間に火の海さ。が、彼らは退かず、挑み……皆、死んだ」

「それほどまでに強いのか」
「強い、なんてものじゃない。彼らの武器ですら、深い傷は一つとして刻めていない」

そして、あの瞬間から世界の理が歪んだ、と彼は静かに告げる。
ユグドラシルの、この世界のルールであった『完全耐性』……それが消失したのだ、と。

「彼らは焼かれ、喰われ、殺され続けた。一人が武器諸共体温で焼け死んで、他は消し炭さ」

黒龍の放った劫火はそのまま、大地を、空中都市を焼き払い、一人と残さず滅ぼした、と。

「く、空中都市だと?!待て、拠点には、相応のNPCがいた筈だ!」

「誰一人として、生きていなかったよ」

ゾツ、とモモンガを強烈な寒気が襲う。

「そ、蘇生は!?蘇生はしなかったのか!」

「数秒で焼け死んで、蘇生してもまた数秒で死んで、さ」

数秒……どんなビルドであれ、レベル100プレイヤーのHPを削り切るには、あまりに少ない時間である。それこそ、炎ダメージ倍

という特大の弱点を持つモモンガですら、炎属性特化、対悪特化のワールドエネミー級でも無ければ、そこまでの瞬殺はされない。そんな手段で不特定多数を瞬殺するとなれば、それこそ馬鹿げた基礎ダメージ量が必要となる。

そこまで考え、自身がユグドラシルの尺度で考えていた事に気付く。

「そう言えば、先程の口振りからして……………」

「ああ。この世界を満たしているモンスターは、元々この世界に居た存在ではない。君たちと同様に、僕の父である竜帝が招いた存在……………なのだけど、その中にまさか、始原の魔法やゆぐどらしるのわーどあいてむに並ぶ力を持つ存在が数多居たとは思わないよ」

「ホント、八欲王共はどれだけ恨んでも怒りが収まらんわ。死んでるのが、尚更腹立つ」

ドラウディロンが激情を露わにするが、当然だろう。

彼らが愚を犯さなければ、今頃竜王国は砂漠とはなっていない筈なのだから。

「……………ええと、その黒龍は、今どこに？」

「エリュエンティウ、と呼ばれていた空中都市の残骸に居る筈だ。流石に踏み込めないから、もしかしたらこちらが目を離れた隙にどこかに移動しているのかもしれないし、新たなナニカが住み着いている可能性もあるけどね」

溜息混じりにそう零し、彼らの最警戒の理由について追及。

「君たちに求めるのは二つ。この辺境、或いは竜王の監視下を離れない事と、モンスターを不用意に多数殺傷するような真似は控える事だ。この世界には、南の大地を耕した大蛇と、大地を喰らう巨竜、他にも僕たち竜王どころではない脅威がまだまだ潜んでいるんだ。不用意にそれらの活動の引き金とならば、最悪——」

「世界が減ぶ、と……………ああ、わかったさ、わかったとも。私も自殺願望は無いからな」

そう口にするモモンガには、これまで以上に生気が見られない。

それほどもでに、この世界の『上』は桁外れだった。ギルド拠点ご

と壊滅させる攻撃、無効不可の属性攻撃に加えて、空中都市のギルドメンバー……恐らく、レベル100にフル神器級ゴツズとまではいかなくても、それに近い高水準装備とガチビルドだった筈の者たちに加えて、拠点NPC作成可能レベルの3000をフルに使ったであろう30人のレベル100NPCが、抵抗できずに滅ぼされるような馬鹿げた火力の持ち主。

それに比肩する存在まで居るとなれば、冒険どころの話ではない。

「ああああああ………」

それはもう、アンデッドですら出せない程に生気の欠片も無い、酷い呻き声だった。

「なあ、なんかすつごいショック受けとるんだが………」

「も、モモンガ様!?!」

「そ、ソリュシャン、どうしよう!?!」

モモンガもまた、ユグドラシルという『未知の探求』を主題とした世界に魅せられた一人。未知という存在がゴロゴロ転がる世界を冒険したい、という欲求は確かにあるのだが、自身の命とギルドの安全どころか、世界の命運すら揺るがしかねないとなれば、そんなことが不可能である、と堂々と突きつけられたようなものだ。すぐ目の前に最高の娯楽があるのに、世界の命運という壁がそれを阻むのは、中々に辛いものがある。

とはいえ、ギルドという重荷が無ければ、そして転移場所が違えば、彼はごく普通の旅人となっていただろう。そうであれば、潤沢な人員と設備、資材という強みは失われるものの、それらと引き換えに確かな自由が保障される……果たして、どちらが幸せだったのか。

「……ちなみに、この辺境に居れば安全なのか?」

「いや……北の氷原だけでもかなりの強者がいるし、南も熔山帯、大森林は特に危険な領域だ」

「うげえ」

「北の凍王龍は温厚だけど、この世界に数多の寒冷地帯を作り出した存在でもある。司銀龍は縄張りを侵した存在を許さず、400年前から氷龍が現れるまで、延々と評議国に襲撃を仕掛けていた。外敵を増

やしたくないのなら、あそこに立ち入ることは勧めないよ」

実感の籠った忠告を聞き、改めて世界の過酷さを知らしめられる。

「あー、胃が痛い……………」

「いや、君胃どころか骨以外無いよね？」

全力で落ち込んでいたかと思えば、今度は空っぽの腹をさするモモンガに、ツアインドルクスも流石に呆れた様子を見せる。とはいえ、その狼狽えように過去の知己を思い出したのか、少しばかり態度が軟化した様子を見せる。

「まあ、言い換えれば、その二体を除けば、温厚な者が多いということだ。最悪、危険地帯三カ所さえ避ければ、この辺境でも行ける場所が多い。特に、アゼルリシアの地底の主なんかは温厚だし、何よりあそこは煌びやかで綺麗だ。過剰に荒らすようなことをしなければ、彼女も許してくれる筈だ」

と、過去の仲間の出生地、そして強大なる龍に守護された地の情報を齎す。

「アゼルリシアの地底には、ドワーフの国があるんだけどね」

「そういえば、そんな話も小耳に挟んだな」

「そこに200年前襲来した魔神を瞬殺したのが、今のあそこの地底の主なんだ」

六大神の従属神の墮落、並びにその暴走により数多の強者が来襲する事態となった『竜魔事変』に大きく関与していた彼から語られるのは、200年前にこの辺境で認知されることとなった強力なモンスターたちの存在。

「まず、北の『冰龍』イヴェルカーナ。瞬時に凍結する水を扱い、評議国全域に及ぶ寒冷化を引き起こした古龍だ。キーノ曰く、その身に纏う輝きから歴戦王と呼ばれる最上位強者の一角らしい」

「……………嘘だろ」

「幸いなのは、縄張りを侵さなければまだマシということだね。僕の鎧一つで済んだのもだけど、上手い具合に凶暴な『司銀龍』と縄張りが重なってくれたお陰で、評議国への被害は抑えられている」

寒冷化のダメージは重いけどね、と苦笑するツアインドルクスだ

が、看過できない情報もある。

「その、司銀龍とは？」

『司銀龍』ハルドメルグ。400年前の調査団を壊滅させて以来、彼らを送り込んだ評議国への襲撃を続けている古龍だよ。名の通り、銀色の流体金属を自在に操ることが出来る古龍で、縄張り意識が強い上、知性も高い。中でも厄介なのが縄張り意識の強さで、君が万一踏み入ろうものなら、君たちの拠点まで攻め入る事も辞さないだろう」

「…………ツ」

拠点に、攻め入る。考え得る中で最悪の事態であり、何が何でも避けるべき事態でもある。

「忠告、感謝する。その忠告が無ければ、最悪の事態を招く可能性もあった」

ソリュシャン、エントマ共に、震えて声も出ない様子。自分たちが手も足も出ないような怪物がナザリックに、となれば、自分たちより更に弱い者たちでは太刀打ちすら出来ない。塵殺される同胞を想像してしまつたが為に、破壊される栄えある地下大墳墓を蹂躪される様子を幻視してしまつたが為に、その身を襲う恐怖は格別のものとなつていた。

「それは何より。八欲王の暴拳を見た身としては何とも言えないけど、君たちがリクのような善きゆぐどらしるの者たちであることを願うよ。そうでなければ、最悪の事態になりかねないからね」

「…………善処させて貰おう」

煮え切らない答えであるが、それを咎めることをせず、ツアインドルクスは続ける。

「それで、他に君たちに必要な情報は……………」

「では、山脈の主とやらについて」

身近な脅威という意味でも、好奇心という意味でも、欲しい情報だ。

『爛輝龍』マム・タロトと呼ばれている歴戦王古龍なんだけど」

「またか?!この辺境は地獄なのか!？」

「…………ああ、うん。まあ、そうなるよね」

「ぶつちやけ、弩岩竜のお陰で今じゃ一番平和まであるからな、……」

ドラウデイロンが苦笑する中、モモンガは頭痛を堪えるように頭を抱えている。

「まあ、こちらはかなり温厚な部類だ。敵対しなければ………と言いたいところだけど」

ツアインドルクスが三人の装備に目を向け、真剣に告げる。

「君たちがそのまま会いに行くことは、絶対にやめておくべきだ」「なに?」

「彼女の能力は二つあってね。その一つが、『金属を引き寄せる』………君たちの装備は?」

「………あつ」

そう、そうなのだ。

ユグドラシルにおける、装備作成の工程は二つ。使用素材のランクに応じた器を作成、そのランクの上下に応じ付与されるスロットにデータクリスタルをセット………そして、問題なのは器の作成。ここでランクを上げる際、必ず相応量の希少金属素材を用いる。

ランクが高ければ高い程、希少金属の要求量は増大。それが、万一その能力に反応すれば?」

「………想像したくも無いな」

彼の言葉からして、被害者が居たのだろう。二重の意味でそう零し、モモンガは身を震わす。

「幸い、彼女はある程度意図的に制御できるようだけど………うん」「いや、絶対この装備は着ていかない。絶対にだ」

この装備の完全再現など、二度と不可能。その上、思い出の塊でもあるのだ。失いかねない環境が存在しているとわかれば、わざわざこれを装備していこうとは思わない。実利の面で見ても、現状プレイヤーマイド最高峰の神器級ゴッズですら太刀打ちが厳しい相手もいるというのに、それをわざわざ手放すなど、リスク以外の何者でもない。

「とはいえ、その能力で形成された地下空間は壮観の一言だ。ドワーフの聖域でもあるから、立ち入りは兎に角、それ以上のことは難しいかもしれないけど………そこは、今回の会議に来るドワーフたちと相談してくれ」

「気になるが、それ以上に恐ろしくてなあ……………なんなんだよ、この世界」

「まあ、両国を焼いた刻竜、ローブルを火山に変えた熔山龍と比べれば、まだマシじゃないかな」

「比較対象ツ!？」

長年生きている彼らにしてみれば、温厚であるというだけでも儲けもの。対し、一カ月も滞在していないモモンガたちにしてみれば、ユグドラシルのレベル100ボスも真つ青な怪物が相応数蔓延る世界、というだけでも恐ろしいのに、それが近隣に集まっているとなれば、クソゲーと叫びたくもなる。

「悉くが物騒過ぎるだろ……………」

「それには同意させて貰うよ。君たちぶれいやーが脅威となっていた過去に対し、今では君たちですら、最悪成す術無く滅ぼされるような存在が数多居るんだ。僕たち竜王も、過去に同族が一人やらかしたせいで監視されていてね……………正直なところ、結構気が滅入る」

事実、強力な『始種』に加えて、『迥異種』『歴戦王』まで集まる地が間近にあるのだ。明確な敵意と共に攻撃してくるのは迥異種のみとはいえ、何時その牙が剥くか判らないというのは、精神に強烈な負荷をかけていた。それは、『迥異種』という極秘事項抜きにしても、評議国の民にも同じことが言える。

大陸で最も多くの竜王が集う国故、その対応も強ち間違いとは言いきれないのだが……………

「……………苦労、しているんだな」

モモンガの同情に、ツアインドルクスは大きく肩を落とし、本音を口にする。

「本当にね。なまじ、彼らが起こした変化を目の当たりにしているからこそ、余計にだよ」

最も多くを識る竜王は、多くを見てしまったが故の重圧に耐えかね、深く溜息を吐いた。

13—厄災の予兆

合同会議——— 辺境国家のトップが一堂に会するその場に、モモンガは居た。

(き、気まずい……………！)

当然、元一市民に過ぎない彼には、非常に荷が重い空気である。「まずは、急な招集に応じていただけましたこと、感謝致します」

老齢の神官長たちの代理として出席している、漆黑聖典隊長が一礼。

「詳細は訊いています。二体もの剛種の出現を確認した為、ですね？」
そう告げるのは、冷たく鋭い空気を纏う女傑、リ・キスタ・カベリア。カルサナス都市国家連合に内包される都市、ベバードの長であり、カルサナスの代表として出席した人物でもある。そんな彼女が口にした召集内容に、リ・エステイーズの隣国であるバハルス帝国の長、ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルⅡニクス帝が肩を竦め、軽く溜息を吐く。

「ああ、あの最悪の報せか。確かに、我らが逃した個体がそうなれば、それこそ一大事だからな」

アゼルリシアを隔てているとはいえ、隣国は隣国。そして、強力なモンスターが育つ場所が減びるようなことになれば、数の東、質の西と八方塞がりに近い最悪の状況となりかねないのだ。そして、シエンガオレンの例からわかる通り、過去に撃退したモンスターがそうなるようなことがあれば、それこそ死活問題だ。

「ええ。幸いにも、そちらのモモンガ殿と、その臣下の方々のお陰で、事なきを得ました」

集まる視線の圧に思わず硬直するも、それが却って悠然とした姿に見えたらしく、周囲の者たちは一様に納得し、その視線を進行役へと移す。隊長は特に気にした様子も無く頷き、諜報型の聖典部隊『風花』『水明』が集めた情報をもとにした資料へと視線を落とす。それと共に、他の者たちもそれらの情報が詰まった冊子へと目を向ける。

「では、最初にですが——— 『迦異種』。老衰ではなく、より強靱な成

長を遂げた三体の動向に關しましては、当面安全とみてよいでしょう。グランセルの司銀龍は現在冰龍との縄張り争いの最中にあり、ローブルに住まう黒炎王も同様。エイヴァーシヤの棘竜はその氣質から、警戒する必要は無いでしょう」

(迥異種つて、また知らないのが……要するに、老いて強くなつた、つてことか)

さらりと開示された情報であるが、今回初めて代表として来訪した二人は、告げられた名に愕然となり、信じたくない、といった様子で僅かに首を揺らす。その中で口を開けたのは、都市の長としての職歴が長いキスタ。

『黒炎王』……まさか、二つ名を得るに至つた存在が、更に高みへと至つたとても?!」

「む、ベルン殿から聞いておられませんでしたか。最悪な事に、彼の地に住まうリオレウスは、仰る通り『黒炎王』の迥異種。かの地の最上位の一角ですが、老齡であるからか、行動範囲は広くありません。その点では、非常にありがたい事です」

「……ああ、もうなんか、ウチに被害が来なければなんでもいいや」
王国代表のザナツクが突つ伏す中、他の支配者たちも同意を示すように頷く。

「つまりのところ、問題は無いという訳じゃな」

ドワーフの代表が大雑把に纏めれば、隊長は苦笑と共に否定。

「そうなります、と言いたいのですが……『占星千里』が予知をしました」

瞬間、空気が引き締まる。

「どちらからだ？南か、東か」

死活問題であるバハルス帝国のジルクニフがピリピリする中、隊長は真つ直ぐ見つめ

「東です。予言によれば、数多の傷付いた、黒く染まった竜と亜人が来襲する、と」

ジルクニフが盛大に舌打ちし、キスタが静かに頭を抱える。

黒く染まった、とは何か。何故傷付いたのか、とモモンガの内から

疑問が沸き上がる中、同様のモノを抱いたらしい面々が困惑、焦燥といった感情を露わにし、一人の女性の護衛として控えていた騎士が声を上げる。

「待て、何故そうなったのかは不明なのか？」

レメデイオス・カストデイオの疑問に、隊長は首を横に振り回答。

「不明です。ただ、東の空が荒れ、黒く染まっていた、とか」

「……………古龍、だね」

それに一つの推論を出したのは、ツアインドルクス。

「だろうな。しかし、黒く染まるか……………迂闊にウチから戦力は出せんな」

「臆したか？」

ドラウデイロンが考え込めば、ジルクニフから軽い挑発。

「黒く染まり、何が起るのかが判らねば手も打てん。万一、敵に回ればどうなる？」

「……………」

「女王の言う通りだ。未知を相手には、逃げに徹し動くべし……………生存の鉄則であるぞ」

ジルクニフが黙り込む中、連合代表の護衛の一人、バザーが鋭い視線を向ける。彼の背後の騎士と老人が微かに身構える中、モモンガは静かに手を上げ、それを制する。眼下に浮かぶ紅光が隊長へと向き、続けてその場の数多の集団へと移動する。

「この場で重要なことは、いがみ合う事ではなく、未知の事態にどう対処するか、なのだろう？」

「その通りだ。無論、全戦力を回す、とはいかないが、我が国からも人員は派遣しよう」

ザナツクがそう口にすれば、続けて隊長からモモンガへと、王国の現状が報告される。

「王国にて確認された白海竜ですが、暴鋸竜の手で滅ぼされた事が確認されました」

「あいつか……………こりゃ、どつちにせよ当面は漁業停止か」

ザナツクが肩を落とす中、続けて驚愕の情報。

「爆発の件ですが……調査隊が発見したのは、既に討ち滅ぼされた
砕竜だったそうです」

その目は鋭く、告げられる情報も相応に重大だ。

「……………アングラウス、か？」

「刻まれた裂創から、可能性は高いかと」

気になる情報であるが、今はそれよりも重大な事態が迫っている。

「では、そちらは問題無いのだな。となると、問題は東からの来襲か
……………」

「予知によれば、黒く染まる竜には火竜、電竜、轟竜のような強力なモ
ンスターも存在していたとのことです。これらの竜がどのような状
態にあるかも不明である以上、戦力は可能な限り万全に近づけておき
たく思います」

火竜、電竜、轟竜……………どれも、強力なモンスターとして知られる
存在。

モモンガが警戒レベルを跳ね上げる中、それは他も同様。寧ろ、こ
の世界で生きてきた為、その警戒度合いは彼らより数段上。同時に、
そちらに面している勢力に属する二人からは、長年の経験からその情
報が有する違和感に気付き、それを口にしていた。

「待て、奴らが纏まって来襲だど？あり得んだろう」

「彼の竜たちはいずれも、かなり気性が荒い筈だ。集まり次第、殺し合
いに発展するのでは？」

「我々も疑問に思いましたが、彼女からは『そのような光景を視た』と
しか聞いておりません。恐らくですが、彼女が視たのは、本当にそれ
だけなのでしょう。我々にできるのは、齎された情報から対策を立
て、備える事のみです」

隊長が冷静にそう告げれば、モモンガは静かに頷き、対抗手段を思
索。

（帝国側はモンスターも弱め、って話だけど、それでもレベルがなあ
……………）

戦力として派遣するとなれば、ナザリックだと守護者クラスでなけ
ればならない。

そして、それ以外の支援要員を派遣するには、あまりに情報が足りないのが現状だ。

「それなら、もうちょい早くこの話題を切り出すべきだったかのお」
そう口にしたドワーフの代表が円卓に置いたのは、幾つもの鉱石。

青、緑、紫……と、色とりどりのそれは、モモンガたちも見たことが無い代物だった。

「それは？」

「儂らドワーフの坑道が、かなりの深度に達したようだな。そこから発掘された代物じゃ」

深い場所——その意味を考えるより先に、手が伸びていた。

「申し訳ない、どのような物なのか、鑑定させて頂いても？」

「構わん。儂らには、既存のどの鉱石とも異なる、という以外はさっぱりだな」

それらを受け取ったモモンガが鉱石へと鑑定魔法を使えば、周囲から彼へと視線が集まる。

「……………どれも、アダマントイトより良質な鉱石素材だな」

（これ単体には特に効果が無いようだけど、組み合わせると劇的に変わるみたいだな……………これが深いところから得られた、ってことは、これまで確認されていなかっただけか？それとも、ヴァイシオンが言ってみたみたいに、世界が変わった結果、地底に生まれて、表出するまで時間がかかっていたのか……………）

静かに思索し、手元の鉱石を睨む。

（恐らく、後者だな。でない、と、正確な命名までわかる訳がない）

「マカライト、ドラグライト、カブレライト——」

ドワーフが発掘したという鉱石の名を告げていけば、ツアインドルクスが静かに唸る。

「……………君が命名したのかい？」

「いや、そのような名である、と判明したんだ」

「となると、竜たちの世界の……………加工は出来るのかい？」

彼の問いかけに、ドワーフは静かに首を横に振る。

「無理じゃ。儂らの設備では、熱量が足りん」

「パンドラよ、どう見る?」

副官として連れてきたパンドラに意見を求めれば、少し考えた様子を見せてから

「後日で構わないのですが、そちらに私が向かっても宜しいでしょうか?」

「まあ、来た方が早いからのお。構わん、全責任は儂が負うとしよう」
厳かに頷いたドワーフの了承を受け、パンドラは再度口を開く。

「この場で何かを断言するには、情報もサンプルも少なすぎますからね。直接多くの例を見てからでも、遅くは無いですよ。それと、我々からも、皆様に少々お力添えできることがございます。それについて、まずはこちらをご覧いただければと」

そうパンドラが提示したのは、コキュートスに渡す前に作成した試作品。クシャルダオラの外殻を始めとした諸々を素材として用いた強力な武器。それこそ、これまで現地で作成されてきた武器の質から考えれば、間違いなく神話に語られるモノにも匹敵する存在だ。

「これは……ッ!?!」

「……………」

その質に多くの者が目を剥く中、パンドラは構わずにやや質で劣る武器……ガルルガの武器を取り出し、同じように提示。ランクは幾らか落ちても、やはり上質であることに違いは無く、同時にその武器を包むモノが少しばかり馴染みのある物へと変わった事で、一部の者はその正体に気付く。

「まさか、モンスターの?!」

「その通り。こちら、既存のそれを大きく上回る質を有しております。しかしながら、我々の保有するモンスターの亡骸だけでは、ごく一部の精銳に回すので精一杯でしょう。そこで、皆様にはお手数ですが、シエンガオレン剛種の武器を預けるに足る人物を数名、見繕って頂きたいのです」

剛種の――

その一言だけで、一人を除く者たちは過去最大級の緊張に襲われた。それこそ、預けるべき者は本当に信頼すべき者にするべきである

し、同時に前線で動けるだけの、生存できるだけの能力も要求される。その中で、一人だけ動揺していなかったザナツクは、改めてそこに少しばかり踏み込む。

「それなんだが、防具の方はどうにかできないか？」

「難しいですね。シエンガオレンの物ならば、と言いたいところなのですが、如何せん重い上に大型の盾を構えるような手合い向けの物でして。個々に合わせたモノにできる武器と異なり、防具の方は効果が一律で、変えようが無いのです」

武器については、属性が無く、防御値に加算補正が入ると悪くはない。が、防具は護りに向き過ぎている上、やはり重くなってしまうのだ。その為、軽装戦士タイプには不向きとなりやすく、かといってイャンガルガの素材は、既に殆ど使い尽くしている。クシャルダオラも悪くは無いのだろうが、数を用意できるかが不安なのだ。

「うむむ……………やむを得んか」

「ですが、武器の質が上がるだけでも十分です。では、凡そ三カ月後と予測される事態に備えるとしましょう。それだけの時間があれば、慣熟にも十分でしょうからね」

『……………三カ月？』

その場の空気が死んだのを、反射的に問い直したモモンガも理解した。

「はい。三カ月『もある』と解釈されないよう、申し訳ありませんが謀らせて頂きました」

「まあ、そんな気はしていました……………確かに、そう解釈されてはたまりませんからね」

パンドラが肩を竦める背後で、シャルティアはここまでの情報の処理に必死になっている。

「それなら、一安心かの。ウチの祭りも無事に開催できそうだ」

「そちらにつきましては、こちらから言うことはありません。国の一大行事ですからね」

隊長が鷹揚に頷く中、モモンガは静かに思案……………この事態への対処と、まだ見ぬ未知なる一大イベント、どちらを優先するべきか、だ。

当然、前者が優先順位としては非常に高いのだが、如何せん後者も後者で希少価値という点からも、非常に魅力的。本心としては後者に重きを置きたいところであるが、前者も捨て置けない訳で――

「……………やれやれだ」

先程までとは別の意味で緊迫した空気の中、不死者の王は独り言ちた。

14 | 数多の障害

会談を終えた竜王国首都船は、そのまま竜王国国土『入り江の砂海』を進む。

既に各国重鎮は下船、各国へと向け帰還しており、残った部外者はモモンガたち一行程度だ。

「これが……………」

リフレツシユも兼ねた見物であったが、その成果は十分過ぎた。

「うむ。霊水晶……………霊山龍より得られる、極上の宝物よ」

触れる事すら躊躇われる程、見事な輝きを放つ紫の水晶……………至高、という言葉が良く似合う美しさに見惚れたのも束の間、秘められた途方もないエネルギー量に気付く。ただの宝石ではないということをよく知らしめると共に、それだけの力を秘めたものが、あくまで産物に過ぎないということが、古龍の強大さを物語る。

「今回の祭りで、これを得ることが出来る、と」

「ああ。これ一つで国が傾くぞ」

行われているのは、細かな砂塵による自然研磨のみ。それで、この輝きだ。

成程、値がつけられないというのも納得できてしまう。

「これはいいな、ぜひとも欲しい……………欲しいん、けどなあ」

「あー、とびっきりの問題がなあ……………ウチからの援助も、兵站以外は難しいからなあ」

黒く染まった竜たちの襲来……………現在、モモンガの護衛であるパンドラ、シャルティアを除く、全NPCがその対策をより確たるモノへと変えるべく、ナザリック内で可能な準備の為奔走している最中。これまでの敵より弱い可能性が高いとはいえ、油断など出来る筈も無く、外部での戦闘経験がある者程積極的に動いているのが現状。

立場的にも、精神衛生的にも、祭に参加などと言っているのが現状ではないのだ。

「ですが、霊山龍とやらについて詳細に調べる、またとない好機。逃す訳にもいきませんな」

そう口にしたのは、モモンガ同様アイテムコレクターのパンドラズ・アクターだ。

「それに加えて、上手くいけば我々の抱える問題を一つ、解決出来得るのです。尚更、逃す訳にはいかない筈です。総力を以て、という訳にはいかないでしょうが、各々の職務等を考慮した上で、数名を割く価値はあるかと思われませんが、如何でしょうか？」

パンドラの言葉を数秒咀嚼し、モモンガは彼が言わんとすることに気付く。

（まさか、これを金策に当てるのか!?……………いや、惜しくないくらい掘ればいいだけか、うん）

拠点の維持費だ。ナザリックは規模も膨大である分、維持費も莫大。これまで考える余裕が皆無であったお陰ですっかり頭から抜けていたが、死活問題の一つである。現状問題無いにせよ、何時NPCに死者が出るか、また襲撃が起こるかわからない以上、資金はあるに越したことはないのだ。前線に出るNPCが必然的にレベル100クラスに限定される以上、そちらの蘇生費用も莫迦にならないのだから。

「ああ、それも重大だな。となると、こちらにも相応の人員を派遣するべきか……………」

「それですが、祭はどれ程の間行うので？」

パンドラが問えば、ドラウディロンは気軽に応じる。

「長くても一週間、短ければ二日で終わるな」

「では、初日に私たちが出ますので、その状況次第で他のシモベをお連れしては如何でしょうか？」

何故、自分からこうも優れたNPCが出来るのか。

モモンガが生身であれば涙が出るだろう程に感激する中、ドラウディロンは数度頷き

「では、そのように手配するでしょう。幸い、人手はあるだけ欲しいからな」

「人手不足……………いえ、それだけ利益が見込める、という訳ですか」

「そういうこと」

カップを傾ける竜王国女王は、しかしある事を思い出し、その表情を陰しく変える。

「ん？どうかしたのか？」

「ああ、いや……………我々が向かっている大砂漠の奥に、エリユエンティウがあつてな」

エリユエンティウ——滅ぼされた、八欲王のギルド拠点だ。

「黒龍、か……………」

「奴が動くことはそうそうないだろうが……………その、な」

数多の生物の生存圏を飲み込み拡大した大砂漠……………モーラン種の古龍が回遊するその奥に存在するその場所に向かう者は、皆無と云つてもいい。砂海に浮かぶ数少ない安全地帯でありながら、しかしその実態は凶悪無比な古龍が住まう、とも言われる地。

その存在はあくまで伝説でありながら、この世界に住まう者の多くは、それを一笑に付すことが出来ない程の脅威に絶えず晒されている。だからこそ、伝説を恐れ、多くの者はそこに向かうことをせず、大砂漠から外れた地に居を構えるなどして、必死に生を掴んでいた。

「確かに恐ろしいな……………では、先に一度、大砂漠とやらに出て確認するか」

（怖いけど、こういう時に体を張るのがリーダーの役目だ。一応、転移魔法もあるしな）

そう思考する間にも、幾多もの生存、逃走策を考え出し、それに使用優先順位をつけていく。

現状ある情報は、レベル100でも数秒で死ぬほどの継続超火力攻撃と炎属性、神器級^{ゴツ}クラスの装備でも貫き切れない圧倒的防御力。あまりにも不安が多いが、戦うことを考えず逃げに徹すれば、或いは……………そんな希望を抱くモモンガであるが、それをよしとしない者が。

「ならん。万一奴が動けば、最悪霊山龍の移動ルートが変わりかねん。そうなれば、我が国は」

「……………すまない、配慮が足りていなかったか。だが、そうなる……………むうう」

参加、不可能……様々な方面への配慮を考えると、それが最善。その現実には、モモンガは盛大に肩を落とす。ここで私心と一国の大事、どちらを優先すべきかの分別はつくし、だからこそ、これ以上無く心躍る事態を前に何も出来ない、という現実が、辛く、重くのかかってくるのだ。

「いや、本当に申し訳ない……モノだけでよければ、冒険者を雇うという手もあるんだがな」

「冒険者……ああ、そういえばそんなのもあったな」

この世界の情勢のせいですっかり忘れていた職を思い出せば、ドラウディロンから補足説明。

「冒険者というのはまあ、元々この世界の状況に対し、打開策を求める者たちが立ち上げたものが発端でな。だがまあ、当然あちこち過酷極まりない上、優秀な者を遊ばせておく余裕などありはしない。結果として、情報の少ない地域の調査が時折、他は兵より動きの自由が利く点を活かした防衛活動が主軸なんだ。が、調査の名目であれば、相手が領く限りはかなり融通が利く」

夢が無い、と思う反面、確かにそう遊ばせておくわけにもいかないか、と領いたモモンガだが、同時に彼女が言わんとしている事を理解し、少しばかり思案する。要は、冒険者たちに祭への参加を依頼し、彼らと上手く交渉して産物を手に入れる、ということだ。

利点は、自分たちが赴かずに欲しい物が手に入り得ること。問題は、信用できる人物でないと、様々な不安が残る事か。特に、得られるものが悉く高価である以上、桁違いの額を吹っ掛けられる可能性もあれば、持ち逃げされる危険もある。現地のレベルが高いせいで、秘密裏の処分にも守護者クラスを動かさざるを得ない以上、かなり危険な賭けになりかねない。

「それに、十分な伝手もあるようだし」

「えっ？」

「……あれ、まさかとは思うが……『蒼の薔薇』、知らんのか？」

「……あつ」

そして、モモンガは考え得る限り最も安全で、確実な伝手を有して

いた。

*

「――成程、理由はわかりました」

そして、思い立ったが吉日とばかりに。

モモンガの姿は、王都リ・エステイーズの冒険者組合にあった。

「本来ならば、時期を考慮してお断りしたいところなのですが」

三対三の面談の中、『蒼の薔薇』リーダーのラキユースは、歓喜を隠さず笑みを浮かべる。

「受けます！というか、受けさせてください！」

「お、おうっ!？」

目を輝かせ、身を乗り出す彼女に、思わずモモンガが身を引く。

「あー、ラキユースの言う通りだ。霊山龍の来訪というのは、非常に稀でな」

「な、成程」

「一生に一度、とはいかないが、今を逃せば次まで生きていられるか、不明瞭だからな」

この世界の過酷さが垣間見える言葉に納得し、続けて残りメンバーである巨女、ガガランへと視線を移す。年齢不詳の女戦士は、ラキユース程明確な反応を示してはいないが、特段乗り気という訳でもないことが判る。

「ま、オレは二人に任せるぜ。稼ぎもそうだし、経験としても悪くねえからな」

「私は受けようと思うのだけど、イビルアイはどう思う?!」

「……………まあ、息抜きには丁度いいだろう。そういう訳だ、モモンガ」
イビルアイの同意により、彼女たち三人はモモンガの依頼を受けることを決定。

依頼料の交渉に入ってみれば、そこではイビルアイからの助け舟が入る。

「それと依頼の件なんだが……………報酬は二人の武具、ということにして貰えないか？」

「構わないが……………わざわざ報酬という形を取らなくても」

モモンガが私物を売り払ってでも資金を確保しようと考えている中で、その提案だ。特にイビルアイの知識に助けられている身としては、悪くない提案であるのだが、そちらは別の謝礼という形で報いたい。そう考える彼には、少々領き難い提案でもあるが、これも気遣いあつての提案。

「私たちはアダマンタイト級……こちらでは最上位のせいで、組合を通した場合の依頼料が莫大な額になってしまふんだ。そちらに気を遣って貰った手前、余計な負担までかける訳にもいかない。そこで一番負担が軽く済むのは、この世界で作成されたことの無い武器を報酬として渡す、という形になるんだ」

「何から何まで、すまないな」

「いえ！二人を救って頂いた恩を思えば、まだ足りないくらいです！」
モモンガが感謝する中、ラクユースはとんでもないとばかりに手を振る。

蘇生魔法には死体が必要である為、文字通り跡形も無く消し飛ばせるクシヤルダオラを相手に、二人が追い込まれていた事態は文字通り最悪中の最悪。そこで二人を助けてもらった上、最大の脅威二つを討伐までして貰った相手だ。その恩義は、モモンガが思っている以上だ。

「そ、そうか……あー、んん！では、前払いで武器を渡すとしよう。後払いの方は、そうだな」

「それでしたら、祭で得た品の三割程度で構いません」

「え、いやいや！流石にそれはこちらが申し訳ない、せめて半分は持つていってくれ！」

そして、その認識の差異が、モモンガに罪悪感という形で襲い掛かった。

「私たちも祭を楽しませていただきますので、それで十分です」

「いや、せめて半分だ。それくらいは持つていって貰わねば、そちらに申し訳ない」

人間であつたなら、汗だらだらだろう程に慌てて、モモンガは徹底抗戦の姿勢を示す。

「……………では、お言葉に甘えて四割程を」

「ああ、それでいいや……………んんっ！では、パンドラ。早速だが、武器の見繕いを」

「ハッー」

心の中で一息を吐き、モモンガは来たる事態への備えをどうするべきか、思考を巡らせる。

そしてその頃、彼が一つの小さな冒険を断念せざるを得なくなつた、その理由たる地で。

「今回のゆぐどらしるぷれいやーは、随分と慎重みたいね」

眠れる白き龍に寄り掛かり、その意識を宿す純白の少女が笑う。

「あーあ……………一人だけだったなら、楽しめたかもしれないのにな」

残念そうに零したかと思えば、その目を眼下——黒き龍の座す廃街へと向ける。

その体温で溶けた武具が漆黒の甲殻と混ざり合い、溶け込む中、八欲王を滅ぼした災厄の化身は外部などどうでもいいとばかりに、この地でかき集めたユグドラシルの装備品の残骸を纏い続ける。データクリスタルの力は損なわれていながら、しかしそれらの武具は確かな重みと共に、その身を包む鎧へと変じていく。

「やっぱり、退屈ね」

憂うような、嘆くような言葉と共に、空を見上げる。

その視線の先、遙か北東に広がる曇天の中。紅の瞳が捉えたのは、二体の異形と空中で激突する漆黒の影。彼女を祖とし、彼女と同じ血を有する者たちと、将来そうなる者との激突という、本来ならばあまりにも不利な戦局でありながら、しかし優勢なのは、毒々しい紫の光を放つ結晶を纏う、黒き竜——その力はある種の規格外であるが、それもまた一つの命として認められた種としてのものであるのだ。「貴方たちは、果たして越えられるのかしら？」

意図して起こしては、いない。ただ、あの竜が彼らの東方にある山嶺に目をつけ、そこへと居を移さんと動いたイレギュラーであるというコト。そして、それと偶然遭遇した一對の龍が、一切の加減無しに迎撃を行った結果、周囲のモンスターへと多大な影響が及んでしまっ

たに過ぎないのだ。

距離を考えれば、まだ数カ月の猶予はあろう。だが、その先には何があるのか——

「確かめなさい。その為にも——黒く蝕み、地を染めなさい」
慟哭の如き禍々しい咆哮を、少女の感覚が捉える。

それに負けじと、風を、雷を操る龍たちが、鋭く吼え叫んだ。

15―身近な脅威

エ・ランテルから離れた、トブの大森林付近。

かつて消えた『カルネ村』は無事復興を果たし、その様子を観察していたナザリックの者たちは、ある疑念と共に、小規模な計画を立てていた。何より、モンスターの格好の住処となり得る土地に隣接した村が複数ある、というだけでも異常なのだ。故に彼らは――

「この森に、古龍……：或いは、それに並び得る強大な存在が隠れ潜んでいる可能性があるわ」

その言葉に、集まった守護者たちの表情が強張る。

「故に、早急な調査が必要なのだよ」

「現在、姉さんの手で探査が行われているわ。私たちは今後、三カ月後に備えた準備の傍らに、このナザリックに最も近い森林内の脅威に対する備えもしなければならぬ。苦しいとは思うけれど、このナザリックを手放さない為にも必要な事よ」

そう。ギルド拠点をも滅ぼせる怪物が居る以上、最悪への備えは必須なのだ。

彼女らにとって、このナザリックの安否は自分たちの命より、はるかに重いのだから。

「も、モモンガ様に報告は……」

「最低限、周囲の安全を確認してからの予定です」

そして、その頃。トブの大森林では、彼が放った影の悪魔シャドウデーモンを探知している者が。

「む……」

蠢く影を察知し、身を起こしたのは白銀の毛に包まれた巨獣。

「何者にござるか？ 某の縄張りに踏み入るとは、随分と勇敢なようにござるが――」

その目で睨まれた影の悪魔は、瞬時に力の差を理解した。

「弱い。あまりに弱過ぎでござるな。某に気付かれた幸運に感謝するにござる」

そう告げた獣の左右から、青い鳥竜がそれぞれ飛び出す。

「ギユオツ、ギユオツ！」

「ギユアアアッ!!!」

赤い目をした二体に吼えられ、シャドウデーモンはすっかり竦み上がってしまった。

なにせ、どちらも守護者クラスの力を有していると、瞬時に理解できたのだから。

「其方らの主に伝えよ。其方に敵意があるのであれば、某らは持てる総力を以て応戦する、と」

これで尚、総力では無いのだと暗に示す存在……『森の賢王』の前に、影シャドウデーモンの悪魔は少しでも多くの情報を届ける為の撤退を選択。洞穴を抜ければ、先程まで居なかつた筈の様々なモンスターが現れており、肝を冷やす、どころではない恐怖の中、焦燥と共に撤退。

「追う必要はないでござるよ。それより今は、龍の来襲により、大きく乱れた縄張りを整えるのが、先決にござるからな。特に湖の方に下手な竜が居座るようになっては、たまらないでござる」

そう口にした『森の賢王』の異名を持つ巨大な魔獣は、二体の鳥竜、特異個体のドスランポスとその配下たちへと手振りで指示を下す。この魔境の中で、数多のモンスターとの協力体制という形で強かに生存圏を確保している知恵者は、隔絶されているが故に独自に編み出した魔法を用いて、自身の領域を事細かに確認していく。

先の古龍の来襲に伴うモンスターの大幅移動に加えて、嵐で乱れた環境を再度事細かにだ。

「やはり、余所者も相応に居るでござるなあ………穏当に済めばよいのでござるが」

『森の賢王』の異名を持つ魔獣は、この南部に支配域を有する者として、密かな溜息を零す。彼が従えるモンスターたちは、その多くが温厚、或いは強弱を理解できるだけの経験値を持つ者であり、同時にそこまで突出した強さを持たない者が大半を占める。

その為、総力を以て侵入者へと対処できない今、北部の、或いは西部の強者の襲撃を受けるようなことがあるれば、最悪この一帯を手放さざるを得ないだろう。無論、そう簡単に敗ける程弱くは無いが、単独

で他方の強者に勝てる程強くも無い、というのが、賢王の自己評価だ。「まあ、仕方ないでござるか。さあ、はたらくでござるよー！」

ひとかどの強者として、森の賢王が意気込む。

その知恵により多くのモンスターが外敵に備えるべく纏まる事で、結果的にエ・ランテルの近郊に位置する多くの村落の安全を確保していたほか、北や西の森林部に住まう強力なモンスターの流入も防いでいたのだ。その恩恵は、東端の大都市エ・ランテルの発展に一役買っており、一部からは厚い信仰に近いモノを向けられている。

が、双方にとつて不幸なことに。賢王はその強大さから同時に恐れられることで、人々がトブの大森林へと踏み入る事が激減し、知識を得る機を失った。それにより、同時に独自に様々なオリジナル魔法等を編み出したわけだが、今度はその中から有益なものを人々が学ぶ機会が無くなったのだ。それは同時に、モンスターたちが数多住みついたことでより繁栄した、この世界に由来しない植生を知る機会を失ったということでもあるのだ。

*

「……………おおお……………」

「これが、ドワーフの聖域か……………」

同刻。ドワーフ国へと来訪していたモモンガ、パンドラ、シャルティアの三名は、彼らの許可を受け踏み入った『聖域』の輝きに魅了されていた。皆、金属素材を極力用いない装備へと切り替えており、装備の質というアドバンテージは損なわれていながら、しかしそのことを忘れる程に、ドワーフの一部の活動域である『聖域』は美しかった。

『『皇金』と儂らは呼んでおつてな。白金より、更に美しい上、強度も桁外れでな』

と、皇金の欠片を集める者たちの一人が、僅かな欠片を見せ笑う。「だが、未だ加工法は成立しておらん。それまでは、ただの観賞用よ」そう辛辣に零したドワーフは、その皇金の欠片を革袋に放り、溜息を零す。

「これ、ゴンドー！」

「事実じゃろう。儂らでは、加工の目途すら——」

その言葉を聞きながら、モモンガは岩肌に転がる皇金の欠片を拾い上げ、パンドラに見せる。

「どうだ？」

同様に皇金の欠片を拾っていたパンドラは、珍しく渋い表情を見せる。

「これはまた……凄まじい力を秘めていますね。ですが、これ単独では……？」

パンドラに続き、シャルティアが無言で警戒を露わにする。最初、首を傾げたモモンガだが、奥から慌てた様子で駆けてくるドワーフたちと、その奥に見える巨影を目の当たりにすれば、否応なしに事態の凡そを理解する。いや、そうせざるを得なくなるのだ。

「ま、mam・タロト様!」

山羊の如き大角を持ち、皇金をドレスとも鎧とも取れる形に纏う、巨大な古龍。

強靱な足で大地を踏み締める龍が纏う輝きは、生物が有するには明らかに異質なもの。そのお陰で、モモンガたちも即座に目の龍が只者ではないと、即座に理解できた。今の彼らの装備であれば、容易く屠られるだろう。それ故、NPC二人はいつでも盾となれるよう、モモンガはいつでも皆で転移できるよう、身構えている。

「ルウウ……アアアアアアアアッ!!」

咆哮。三人が竦み上がる中、灼熱により皇金の鎧が剥がれ落ちる。露わになるしなやかさと屈強さを両立させた体躯は強烈な圧を放ち、眼前の異邦人に対する確かな警戒を示している。敵意とまではいかないながら、しかし確かな圧を受け、モモンガは戦闘態勢に入ろうとする二人を手で制する。

「言葉が通じるかは知らないが……私たちに、交戦の意思は無い」

両手を挙げ、武器指輪の類が無い事を示し、静かに訴える。その静かな訴えが届いたのか、古龍は静かに彼らを一瞥し、灼熱で岩盤を溶かしどこかへと去る。たっぷり時間を置いてから、三人は周囲のドワーフたちと共に、揃って大きく安堵の息を吐いた。なにせ、揃って

心当たりが殆ど無いのだ。中でもシャルティアは、万全でも尚太刀打ちできるか怪しい怪物が攻撃に移らなかつた事に、最も安堵している。

(びつつつくりしたあ!?!なんなんだよいきなり!っていうか、明らかに敵意持ってたよな?!)

一通り焦り、驚き、怒ってから、一度精神が沈静化。冷静な思考が可能となる。

(もしかして、俺がプレイヤーだからか?となると、マジで移動にすら苦勞するぞ……)

そんなモモンガの懸念であるが、実際はプレイヤーだからではなく、彼がエクリプス職を有する最高位の死ネクロマンサー霊術師であるから。その最大の原因は、クシャルダオラを撃破する際に用いたエクリプス職最高位

『The goal of all life is death』
あ ら ゆ る 生 あ る 者 の 目 指 す と こ ろ は 死 で あ る
ル
という規格外にある。なまじ、相手が歴戦の、それも高い知能と野生の本能を併せ持つ古龍たちだからこそ、その本質に気付いてしまったのだ。

あらゆる防護を無視した『絶対の死』——それそのものを恐れるのではなく、それが影響する範囲を理解したからこそ、強大な力を有する者たちは彼の、彼らの動向に強い注意を払っていたのだ。そう、モモンガのスキルが影響を及ぼすのは、生物だけではないのだから。

「あれは一体……」

「mam・タロト様じゃ。2000年前、この国に來襲した魔神を滅ぼしてくださった古龍じゃよ」

様付けで信仰される古龍……彼らに強烈な危機感を抱かせるに足る力を秘めた存在であるが、その事実は同時にその思慮深さと、本来の氣質が比較的温厚であることを意味している。それを理解できずしまえば、彼女の警戒の理由も凡そが説明できてしまう。それだけのことを、愚かな先人はしていたのだから。

「すまないな。どうやら、我々は歓迎されざる存在だったようだ」

「そのようですね。最低でも、この聖域とやらへの立ち入りは控える

べきでしょう」

あまり頭が良くないシャルティアですら、異を唱える必要が無い程よく理解できた。彼女の全力を以てしても敵うか怪しい怪物に、何時牙を剥かれるかもわからない場所に、愛しの主が踏み入るのを許容できる筈も無く、彼女も素直に頷く他ない。

「そのようじゃのお……って、お主らはなにしておるんじゃ!」

ドワーフの責任者が叫んだ方へと目を向ければ、灼熱の残る皇金の鎧の残骸を、ドワーフたちがどうにかして運ばんとしているのがわかる。その輝きはユグドラシルにおける超希少金属の数々にも勝り、モモンガとしても幾つか欲しいもの。手伝うついでに交渉するべきかと真剣に悩み始めたところ、隣のパンドラが何かに気付き、大声を上げた。

「お、おおおおおおお!」

「うおっ!? な、なんだ一体!」

駆け出した彼に驚き、その姿を視線で追う。シャルティアにドワーフまでもが呆気にと取られている間に、彼は皇金の塊が織り成す隙間から僅かに除く突起を慎重に、灼熱を帯びた皇金の塊の合間から引き出していく。その姿が露わになると共に、呆気にと取られていたドワーフたちの顔に驚愕が浮かび、モモンガもまた、驚愕を隠せずに叫んだ。

「武器だど!」

駆け寄り、見下ろしたそれは、武器だった。それも、ユグドラシルの素材を用いた中でも極めて上位の伝説級レジェンドに位置する代物という、マム・タロトの過去の交戦経験を暗示する代物。皇金塊が付着している為、詳細は不明であるものの、皇金によるものか、マム・タロトの力によるものか変質しているのは明らかだ。

「お、おおおおお!」

「これは、初めて見るな……急いで上に運ぶぞ! 鑑定魔法が使えるモンを集めさせろ!」

モモンガたちにとっても想定外であるが、ドワーフたちも同様。理解が広まると共に、聖域へと降りていた全てのドワーフたちが忙しなく動き出し、その殆どが作業を中断し、未だ灼熱を帯びている武器を

上に建設された街へと運ぶ為の準備を始めている。モモンガが何とか一枚噛めないかと思案する間に、パンドラは抜け目なく一手を打つ。

「我々も、高位の鑑定魔法を使用できません。お手伝い致しましょう」
「お、おお？それは有難いが……うむ、まあよいか。では、急いで準備をするでしょう」

悩む素振りを見せた責任者は、しかし高位の、というフレーズに興味を持ち、パンドラの申し出を承諾。マム・タロトの動きという予想外はあれ、彼女が敵意を見せながらも、しかし攻撃をしなかった分、彼らへの不信感の類もマシであるようで、人手が欲しい現状も合わさり、そのまま彼らも皇金塊、及び皇金を纏う武器の運搬の為駆り出されることに。

それを不快に思いつつ、しかしモモンガとパンドラが共にノリノリであるせいで殺気立つことも怒ることも出来ず、燻るシャルティア。不承不承ながら、皇金塊を運搬する為、飛び散った塊をそれぞれ確認しようとして進んでいると、不意に何か硬いものを踏んだ感覚。

「あん？」

荒み気味の声と共に、足元に転がる何かを手にとれば、今度は体に奔る奇妙な感覚に驚き、反射的に手を引く。明確な警戒があるながら、同時に体を満たした感覚が不快なものでないことに遅れて気づき、再度恐る恐る手を伸ばす。

「な、なんでありませんか………？」

その手のひらに収まる程小さなソレは、一見するとただの石だろう。だが、シャルティアの体を満たす不思議な力の感触が、その石がただの石ころでないことを雄弁に物語る。少しの間、どうするべきか悩んだシャルティアだが、自身が役に立つまたとないチャンスと判断し、その石を握り締め、皇金塊の確認も忘れ、モモンガのもとへと駆け出した。

16―森の賢王

「本当に、凄い物が多いな……………ここは」

居室でそう零したモモンガは、ドワーフたちから貰った皇金の塊を眺め、遠い目をする。

「けど、敵も相応に凄い訳で……………ああ、頭が痛い」

まず、古龍に警戒されている。ツアインドルクスに聞いていたマム・タロトと対峙して理解した、その強大きさもだが、アレに並び得る存在……………つまり、レベル100レイドボス級の存在が、この辺境に複数いるという事実が、何よりも痛い。物理的にはなく、精神的に。「酒にも逃げられないし……………はあ」

精神作用抑制効果だけでは、精神的疲労を完全に癒すことはできない。それに加えて、種族特性による数多の制限が非常に厄介で、飲食できない、眠れない、感情は抑制されると、トコトンマイナスに働き、彼の精神を蝕んでいた。加えて、対等に悩みを吐き出せる相手が居ないのも、非常に辛い。

「……………まあ、これらを貰えただけでも、よしとするか」

シャルティアが拾った、マム・タロトの鎧に飲まれていた一つ。シンプルな攻撃力強化効果を持つ上、あと少し何かしらの手段で補うことが出来れば、近接武器の耐久値減少を大きく抑制する効果を発揮するというソレは、身に着けているだけで効果を発揮するという。一人につき一つまでしか効果を発揮しないとはいえ、数を確保できれば現地人の大きな助けとなる筈だ。

それだけではなく、特に装備枠を使用する訳でもないのに、一つは確実に効果を発揮してくれるという、モモンガたちユグドラシル勢にも有用な代物だ。あの後、総出で漁った中からこれ以上の発見こそできなかつたものの、そこそこの数はあつた為、ドワーフたちを上手く説得できれば、生存圏安定の大きな一歩となるだろう。

「本当に、宝の山だったな、あそこは……………けどなあ」

最高に魅力的なのに、マム・タロトの存在のせいで気軽に立ち入れない。

「あああああああ………」

静かにベッドに身を投げ、現状を嘆く。

「ナザリックの戦力は嬉しいけど、NPCたちの対応が………はあー………」

ありもしない胃が、痛みつばなしだ。兎にも角にも、精神的な疲労が全く癒えないのだ。

「人間化………ああ、けど俺アンデッドだからなあ………」

そして、最悪なのがアンデッドという種族の、特性の一つ。如何なる種族からも、アイテム一つで転生が可能な代わり、アンデッドから他種族への転生は、原則として不可能なのだ。例外がワールドアイテムであるが、言い換えればそれ以外では、希少な割に種族レベル喪失という特大デメリットを持つアイテムを使い一時的に、くらいしか方法が無い。

「使い切りは不用意に使えないし………うわ、マジで八方塞がりじゃん」

自身の現状に軽く絶望し、突っ伏す。

「………いや、どうにかする方法を考えねば。頑張れ、俺！」

と、意気込むも束の間。ドアをノックする音により、意識を引き戻される。

「モモンガ様、宜しいでしょうか？」

「うえ?! あ、んんっ! 問題無いぞ」

急ぎ取り繕い、アルベドを迎え入れる。一瞬物凄い表情になるも、モモンガが気付く前に上手く取り繕った彼女は静かに入室し、一礼。淫魔の本能を抑え込み、己の職務を成すべく、口を開く。暴走する暇も無く事態が動いていたせいで溜まりに溜まっている為、万一抑えることが出来なければ、モモンガはそのまま捕食されていただろう。

「我々で行っていた森林調査の結果、驚くべきことに、人語を介するモンスターの存在を確認することが出来ました。また、そのモンスターに意図的に逃された影の悪魔シャドウドデーモンによれば、我ら守護者に並び得るモンスターを従えている他、非常に理知的であったとのことです」

「………まあ、森林の調査については、必要な事だ。報告が無かったこ

とも、大目に見よう」

（報告は欲しかったけど、現状が現状だからな。ここは自主性に感謝する場面だろう）

報告の有無については、現状の忙しきへの配慮に加えて、モモンガ自身がすっかり忘れていた事もあり、マイナス評価には繋がらない。付け加えるならば、問題が発生したことに独断で対処しようと思わず、しっかりと報告に来たのはいい傾向だと言えよう。特に現状、未知の要素が多すぎるこの世界で、少数による独断は避けねばならない事態だ。

「しかし、理知的か……一度会ってみるべきか？」

「危険です。シモベを派遣し、代理とするべきかと思われまます」

アルベドの反応は想定通りであり、同時にモモンガも少なからず懸念していた事項だ。

（まあ、そうだよな。知恵が回るってことは、それだけ危険な訳だ）
「では、少々様子を見てみるとしよう。頼ってばかりだが、ニグレドの力を借りるとしよう」

幾ら対策をしても足りない現状、ニグレドのビルドは最高クラスの効果を発揮している。

こと索敵においていえば、スクロールを始めとした消耗品を抑えることが出来る上、豊富に搭載された索敵特化スキルの数々でモモンガを大きく凌駕する能力を發揮できるのが、アルベドの姉であるニグレドだ。特に、現状逆探知対策は幾ら積んでも困らない為、彼女の存在は非常に有り難いのだ。

そして、そのせいで下調べなどについては、彼女の手を借りる事ばかりになってしまう。

「手間をかけるな、ニグレド」

「滅相もございませぬ！」

そんな彼女が観測した映像は、《水晶の画面》クリスタル・モニターで表示される。

そこに映し出された存在に、モモンガとアルベドが警戒を露わにした。

「イヤンガルガ……！」

シャルティアが、デミウルゴスが一度追い詰められた、黒い鳥竜種モンスター。

それが今、一体の鳥竜種モンスターを追い森の中を疾駆していた。「…………あのモンスター、賢いですね」

細身の体躯を駆使し、イャンガルルガに減速を強いるルートを選び駆ける。体格差を活かした、相手の行動選択肢を狭める巧みな逃走に、アルベドは気付いていた。狡猾な黒狼鳥とて、それを理解していない訳ではないのだろうが、大した相手ではない、と警戒より闘争心が勝っている様子。森の中を、所狭しと駆け、格段に弱い小型鳥竜を追い続ける。

「あの地面は……………?」

そんな中、アルベドは青鳥竜が向かう先の地面に違和感を覚え、目を凝らす。小型鳥竜がするりと駆け抜けたそこをガルルガが踏み締めれば、蔦に草葉を絡めたトラップが機能し、大きく沈み込む。が、イャンガルルガはそれを見切っていたようで、体が沈む前に飛び退き、そのまま滑空し――

「ぬおっ!」

「くうっ!」

「ああああ!」

視界を塗り潰す、光量の暴力。三人がそれぞれ苦悶の声を上げる中、画面の向こうから黒狼鳥の情けない悲鳴が響き、続けて穴に落ちたことを示す、何かが崩れる音。くぐもった悲鳴が響く様子から察するに、頭から落下したらしいことが判る中、三人は回復した視界で事態を目の当たりにし、改めて森に住まう存在の危険性を理解した。

「これは……………!」

「そんな?!」

穴に嵌り、赤い粉塵が散る中でもぐくイャンガルルガを取り囲む、モンスターの数々。

それらを率いるかのように異色を放つその魔獣は、モモンガの知識にもある姿をしてこそいたのだが、放つ威圧も、眼光の鋭さも似ても似つかない。何より、所々を蒼く染めた白銀の体毛が、傍らに脱ぎ捨

てられた蔦に草葉を絡めた迷彩外套の存在が、その獣が非常に高度な知恵を持つ存在であることを雄弁に語るのだ。

『起爆(ごうばく)するよー』

「イヤン(いあん)ごー!」

まさかの口調に唾然とする間もなく、イヤンガルルガによく似た鳥竜数体が液状の何かに引火した炎を吐き出し、その付着を皮切りに大爆発が発生。しかも恐ろしいことに、魔獣と他のモンスターたちは適切に距離を置いており、爆発の熱波の影響すら受けていない様子だ。そしてなにより、爆音に疎んだ様子を見せる一部鳥竜を除き、欠片も怯んでいないどころか、絶えず警戒を続けているのだ。

『黄金の泥で爛れた体に、熱茸の粉塵を用いた爆破はよく効くでござろう?』

穴の底を注視すれば、魔獣の言葉通り黄金色の泥に包まれ悶えるイヤンガルルガの姿が。その強靱な筈の外殻は煙を上げ溶けており、動きも鈍いことから、相当な準備を重ねていたことが判る。それだけする必要のある強敵、というガルルガへの認識も然ることながら、そこまでの策を練り上げることが出来る知恵も、舌を巻く他ない。

『生憎と、貴殿と某らでは、共に歩むことは叶わぬ。故に、死んで貰う他ないのでござるよ』

最早イヤンガルルガに動く余裕は無く、泥中目掛け華美な鳥竜が放つ蒼白の液体に、青い鳥が噴霧する青い液に含まれる催眠成分により意識を落とされ、外殻を侵す強酸の泥へと沈んでいく。それを皮切りに、周囲の地面が崩され、黒狼鳥を泥ごと生き埋めにしていく。

より確実に息の根を止めるべく、何より犠牲を大きく抑えるべく立てられた作戦は、彼ら三人に驚愕と警戒をさせるのに、十分過ぎた。いや、これだけ周到な計画を見せつけられれば、誰であろうと警戒せざるを得なかったであろう。何よりも、ここまで油断ならない存在が身近にいるという事実には、モモンガは否応なしに危機感を増大させる。

『やはり、北から流れてきてござるな………翁殿たちも心配でござる』
音声を拾っていたお陰で、魔獣の言葉から『翁』なる存在を知ること

とが出来た。

「攻め入られる分には問題無いが、攻め入るとなると確実に難敵、か………あつ」

敵対する意図は現状無いが、無意識のうちに分析の結果を口に出していた。

「如何なさいますか？」

「敵対する理由もあるまい。何より、時期が時期だ。無駄な消耗に繋がり得る以上、穏便に済ませるべきだろうな。それに、あの作戦に使われただけでも、我々が知らない物が豊富にあるんだ。ユグドラシルのアイテムではないが、代用になり得る物を発見できる可能性もある」

明確な利益があるのだと口にして、今近くに居る面子を確認。一度領き、モモンガは決断。

「アルベド、供をせよ。あの魔獣と接触するぞ」

「き、危険です！」

「だが、数を連れ過ぎれば、警戒される。なら、少数で敵意が無い事を示さねばな」

アルベドのカルマ値が懸念事項であるが、ビルドで考えれば間違いない。なく当たりだ。

「有事の際は転移で離脱する。交戦は考えるなよ」
「ハッ」

その返答に領き、モモンガは転移魔法を発動。目的のモンスターたちの只中で姿を晒した。

「何奴にバグってる!？」

警戒を露わにする巨大ジャンガリアンハムスターという、何とも気の抜ける絵面なのだが、幸いにも先程の戦闘を見ていたお陰で、油断や慢心は生まれない。寧ろ、そのギャップがあるからこそ、モモンガも全力で警戒しつつ、しかしそれを表に出さぬよう細心の注意を払い、口を開く。

「こちらに敵意は無い。戦う理由が無いからな」

「ふむ？其方らが敵対せぬというのなら、某らも戦う理由はござらん

が」

魔獣はふむと頷き、手振りでも周囲のモンスターを制す。

「それと其方らの侵入を許与するかは、別問題にござる。故に、その意図を問いたい」

「同盟、或いはそれに近い友好関係を結びに来た、たとえば、納得して貰えるかな？」

可能な限り穏やかに口にすれば、森の賢王は静かに腕を組み、その言葉を咀嚼。

「成程。ならばまず、其方らの得る利をお教え願おう」

（こいつ、本当に頭が回るな……ユグドラシルプレイヤーです、つて言われても信じられるぞ）

驚きつつも、しかし予想していた質問だ。

「私たちの拠点が、この辺りの付近でな。我々は拠点の安全と、森の物資を得ることが出来る」

「物資、物資でござるか。成程、確かにヒトの寄り付かぬ一帯故、自然は豊富にござるな」

頷くも、その眼光に油断の色は欠片も無い。

「しかし、某もはいそうですかと頷くわけにもいかないのでござる。この一帯に居を構えるのは某らだけではござらぬし、某の縄張りにあつても、支配下という訳ではない場もあるのでござる」

少しばかり圧が増すと共に、側近と思しき鳥竜種モンスターたちが唸る。特に、青鳥竜二体から放たれる圧は尋常ではなく、反射的に庇いに前に出たアルベドでさえ、無意識に武器を強く握り締める程。対し、他のモンスターたちは力の差を理解してか、そそくさと退散していく。

「故に、そちらの思う程自由な活動、というのは許容できぬのにござる。それでも、同盟を望むのであるならば、某は構わぬでござる。某が欲するのは、数と知識の二つ……某の縄張りに踏み入った影を扱うのが其方ならば、前者も解決は容易にござらう？」

「数、ということとは人手か。そちらでも十分だと思いが？」

用意できることを否定せず、同時に相手の意図を窺う。

「生憎、そういったやり取りの経験は皆無故、直球でいかせていただくでござるが。某の配下たちでは、数もいて身軽でござるが、如何せん隠れるに向かず、非力ゆえ。対し、あの奇怪なる影は隠密にも優れてござる故、より確実に異変を報せる事が叶う筈にござるからな」

部下を把握している上、たつた一度の遭遇から影の悪魔シャドウデーモンの強みを見抜いている賢王の言葉に、流石のモモンガも驚かされる。同時に、これだけ知恵の回る存在であるならば、野放しにするのではなく、何とかして友好関係を構築したい、とも。

「いいだろう。そちらの方は、望み通り工面できるよう努力しよう」

「モモンガ様!？」

「ほう、モモンガというのでござるか。感謝するでござるよ、モモンガ殿」

まずは、一歩。

数多の未知なる脅威に溢れる世界の中で、モモンガは確実な手応えと共に、最寄りの未開を解き明かす為の前進に成功。そして後に、この和平と共に人の手に渡る未知の多くが、この辺境に生きる者たちにとっての、大きな希望の光となるのだ。

17-トブの大森林

青々とした森を、二人と一体が進む。

「この先に、某らの生命線である湖がござる。が、同時に某の支配下に無い場所でもござるな」

些細な情報も逃すまいと、モモンガが意識を集中。

「縄張り意識が強い竜もおる故、不用意な動きは厳禁にござるよ」

「わかった」

「逆に言えば、縄張りさえ侵さねば、某らがついておらずとも、ある程度安全でござるな」

と、賢王の案内の中、森を抜ければ、湖が広がる。蜥蜴人^{リザードマン}、トードマンの居住地として非常に良好な条件が揃ったその場所は、数多のモンスターが居住地とする場所でもある。アゼルリシア山脈から流れ込む水により形作られたそこは、それだけの価値がある場所なのだ。

「キュアオオオオオオオオッ!!!」

「キシヤアアアアアアッ!!!」

そこに響いた咆哮に続き、彼らの視界の端で雷光が弾けた。

「ぬああっ!?!やはり来て御座ったか!某はあちらの加勢に向かうでござるー!」

血相を変えた賢王が駆け出し、少ししてからモモンガはアルベドへと顔を向ける。

「助けに行くか」

「……………そうですね」

話の通じる魔獣と、通じない竜。どちらが残る方がいいかは、アルベドも理解できている。

「では、ナザリックより」

「いや、今は我々だけでいい……………が、備えは必要だな」

と、アルベドの援軍要請を許容。移動と並行して備えをさせた二人が向かえば、そこでは大空に翼を広げるワイバーンと、地上からそれに対処せんと必死に足掻く賢王と海竜の姿。昆虫のような鋭利な飛竜と、麗しさを強く魅せる細身の海竜であるが、モモンガは前者の情

報を、知識という形で有していた。

『電竜』ライゼクス……アルベド、電気と、空からの攻撃に備えろ！」

『電竜』ライゼクス……『電の反逆者』いなま『空の悪漢』とも評される、高い攻撃性と戦闘能力、そして飛行能力を兼ね備えた凶暴な飛竜。先の会議にて、三カ月後の襲撃に姿を確認されていた事もあり、モモンガも書籍から可能な限りの情報は漁っていた。

「ハッ！」

威勢よく返事したアルベドが飛び出し、海竜を狙っていた雷球に対し『ミサイルパリー』に加え『カウンター・アロー』のスキルを発動。非実体の属性攻撃に対する防御は正常に機能し、弾き返すことにこそ成功したものの、相手は卓越した飛行能力を以て回避。紅の瞳で新たな敵を捕らえ、鋭く吼え叫ぶ。

「キシヤアアアアアアアアアアッ!!!」

ライゼクスが羽ばたく中、賢王が鋭く叫ぶ。

「奴を湖に落とすにござる！某らに、空での戦いは不可能故！」

「勝算があるのだな？」

飛来したモモンガの問いに、賢王は静かに頷き、静かに警戒する海竜に叫ぶ。

「其方はなんとか湖の上へ誘導を！マドシヨット・アシッド《酸泥射出》ッ！」

森の賢王が扱うのは、森に住まう者たちに着想を得たオリジナルの魔法。酸を練り込まれた泥が直撃すれば、大抵の竜の外殻を侵すことが出来るのだが、当然機動力のある相手にはそうそう通じない。だからこそ、機動力を制限できる森での戦いが基本であるが……今回のような環境では、それなりの使い方がある。

『魔法三重最強化』トリプルレットマキシマイズ・マジック《現断》ッ！」

モモンガが放つのは、無属性最強の攻撃魔法。三重に発動したソレを叩き込まれたライゼクスの外殻には相応の傷が刻まれ、墜落しかける。が、高度があった事でギリギリ持ち堪え、湖への墜落は避ける。同時に、激昂を告げる荒い吐息と共に鋭く吼え叫び、モモンガを標的に一気に飛翔。

「チィッ！」

そして、それこそ『空の悪漢』の異名の由来。卓越した飛行能力は、マジックキャスターの行使する《飛行》^{フライ}では到底振り切れぬ程。
リアリティ・スラッシュ
《現断》で十分なダメージを叩き込める程度の………それこそ、レベルにして90弱程度の個体ながら、その機動力はモモンガを越えている。

「シヤアアアアアッ!!!」

^{テレポーション}
《転移》ッ！」

転移魔法でギリギリまで引き付け離脱し、湖側へ。

(遠距離攻撃に徹されたら不味いが………どう来る?!)

「キシヤアアアアアッ!!!」

咆哮と共にモモンガ目掛け飛来したライゼクスは、雷球を無茶苦茶に放つ。

「がつ?!ぐ、ううう………!!」

(なんて、な)

さも効果抜群です、といわんばかりに呻くモモンガだが、それは演技。

そもそも、モモンガのユグドラシルにおける電気耐性は完全。つまり、本来は無効なのだ。無効耐性が機能しなくなっているといつても、元の耐性が高ければそれだけ減衰も大きく、モモンガは元の魔法防御力の高さも加わり、ダメージを大きく抑え込んでいた。それこそ、危機感を抱く必要が皆無な程に。

そうして相手をおびき寄せ、確実に湖に叩き落とす………算段、だったのだが。

「クウツ、クズがああああああアッ!!!」

アルベド、激昂。その忠誠心の高さに『モモンガを愛している』という文言まで加わった彼女の眼前で、モモンガが手傷を負ったとなれば、彼女が激昂しない筈が無いのだ。ここで冷静に、彼の意図を理解するだけの精神的余裕があればよかったのだが、二重以上の愛を向ける彼女にそれを求めるのは、酷というものだろう。

「アルベド?!」

激昂したアルベドが翼を広げ飛翔し、振り向いたライゼクスの頭部を全力で殴り飛ばす。結果、攻撃を続ければ落とせそうな骸骨よりも、より攻撃的で危険な淫魔へと標的を変更。帯電した角を叩きつけ、それを躲されるや否や羽ばたきを止め一回転し、逆サマーソルトで尻尾を叩きつける。

体格差と不安定な空中という条件により、その剛腕を存分に振えぬアルベドが下に弾かれれば、その隙を逃すまいとライゼクスが飛翔。それを黙って見ていられるモモンガではなく、異なる種類の転移魔法を連続発動。強引にアルベドを引き連れ、ライゼクスの攻撃範囲を逃れる。その直後、アルベドが居た場所をその翼が大きく薙ぎ、そのまま大地を深く抉った。

（あれが、武器として使えるレベルに発達した翼か………っ!?!）

その爪で大地を抉った翼の、透き通る翼膜が緑色に光る。

「あれは………」

「不味いな、帯電されたか………」

（確か、脆くなる代わりに攻撃力が上がるんだっただか。狙えればいいんだが………!）

動きを見切り、対応できるだけの経験値があれば、チャンスと言えるのだろう。

が、当然二人は初遭遇であるし、モモンガは純魔法職。アルベドならば、と考えるも、防御特化の彼女の機動力では、ライゼクスに追従するのは少々難しい。武器についても、「真なる無」ギンナンガガブは破壊不可の性質を除けば戦闘特化の神器級ゴッズに劣る代物。無論、このライゼクスが相手であれば問題無いのだが、そこまで把握できる程の経験値は、彼らに無かった。

「シヤアアア——ッ!?!」

威嚇するように唸っていたライゼクスへと、紫の液体が叩きつけられる。その先に視線を向けてみれば、毒々しい紫の鬣に、乳白色の鱗を持つ海竜の姿。四肢で大地を踏み締めるその竜は、明確な敵意を以て眼前の侵入者を睨み、鋭く吼える。

「キュイアアアアアッ!!」

『紫水獣』ロアルドロス亜種……湖近辺を根城とする海竜種の中でも、強力な部類に入る大型モンスターであり、同時にこの場に現れたという事実が、その力を暗示する。事実、ライゼクスは外殻を伝う毒液に侵されたのか、口端から毒々しく染まった唾液を零している。

「キシヤアアア……！」

「キュオオオ……ッ！」

睨み合う両者に構わず、横合いから飛び掛かる影。

「キュアオオオオッ!!」

「ッ!」

即座に応戦せんと動くライゼクスだが、『泡狐竜』タマミツネの方が、地上では上。蛇にも似たしなやかな体躯と、その下部を覆う紫毛、それにたつぷり含ませた滑液を駆使し、刺々しい黒の巨体を泡で包み込む。その瞬間に、形勢は一気に逆転していくのだ。

「な、あ……!?!」

「あれは!?!」

ライゼクスの細い足では、踏ん張りが効かない。その翼を、尻尾を使い何とかバランスを取るので精一杯で、飛翔するなど到底できない中、森の賢王はロアルドロス亜種、タマミツネの二体の動きを見極め、適宜攻撃を挟んでいく。

「《キュア! バブル浄化の泡沫》！」

毒素の浄化作用を持つ泡により、外殻に残留するロアルドロス亜種の猛毒を中和しつつ、同時にタマミツネにより奪った自由を継続して奪う。タマミツネが体捌きと尻尾によりライゼクスを湖畔へと追い詰めていく中、森の賢王から追加の魔法攻撃。

「《アネステイシーシャ・バブル麻醉の泡沫》にごさるよー！」

麻痺成分を含んだ泡が迫り、タマミツネが飛び退く。それが無数に弾ければ、ライゼクスの踏ん張りが弱まる。そこにダメ押しとロアルドロス亜種が飛び掛かり、押し出されたその体躯を、今度はタマミツネの尻尾が下からかち上げる。綺麗に尻尾の一撃が頭に入り、ふらふらと押し出されたライゼクスが覚束ない足取りで揺れ、そして――

「キュアアアアアアオッ!!」

「キシヤアツ!？」

巨大なワイバーンに似た竜が湖を飛び出し、無防備な尻尾へと噛みつく。泡によって踏ん張りが効かず、また麻痺毒により力も入らないライゼクスは、成す術無く湖へと引き摺り込まれ、必死に翼をはためかせもがく姿を最後に姿を消す。モモンガ、アルベドの両名が啞然と見つめる中、水中に僅かに見えた翼膜の輝きも消え、最後には沈黙が残される。

賢王がライゼクスを狙い打ち込んだ泥弾だが、湖に落ちれば当然水を濁らせ、広がる。それこそが、この湖の生態系の上位に位置するかの竜への合図であり、賢王たちがそうまでする必要がある、と判断するモンスターは大抵大型である為、食べ応えのある御馳走来襲の合図でもあったのだ。

「……………確かに、アレなら湖に落とせば勝てたか」

少しして、冷静になったモモンガは納得し、頷く。

ライゼクスを水中に引き摺り込めるだけの体躯を持つモンスターが居るのなら、湖にさえ落としてしまえば、あとは巨大な水棲の竜が仕留めてくれる。水棲の魚竜ということで、モモンガが重要視して調べていなかった事ではあるが、この『水竜』ガノトトスは牙に睡眠毒を有しており、噛みつかれた時点でライゼクスに命は無かった。

「御二人とも、早く降りるにござるよ!ヌシ殿に敵と見做される前に!」

賢王の叫びを受け、二人は急ぎ地上へ。敵を増やすのは避けたいのもそうだが、二人とも水中戦は不得手なビルドである為、引き摺り込まれれば最期、となりかねないのだ。モモンガはアンデッド基本特性で酸素不要だが、それだけでどうにかできる程、この世界は甘くない。

「ふう……………つと」

降り立ち次第顔を上げれば、タマミツネ、ロアルドロス亜種共に既に姿を消している。

「いやあ、タイミングが悪かったでござるなあ」

「タイミングの問題か?」

「実のところ、先の龍の襲来による混乱が抜けきってないのでござる。

そのせいで、余計にこの湖を狙う襲撃者も増えているのにござる。元々住まう者たちは、比較的温厚というか、不用意に近付かねば安心なのでござるが、時折ああいいう厄介なのが暴れに来るのがひたすらに大変なのでござるよ」

大抵湖に叩き落とせばどうにかなるのにござるが、と賢王が零し、軽く肩を竦める。

「御覧の通り、某が居合わせた場合、加勢しているのにござる。が、常々こう上手くいくとも限らないのでござる。それ故、こちらの状態を把握する為にも、人員が欲しいのでござる。某の配下も弱くは無いのでござるが、恐らくあの影の方が小回りは優れてござろう故」

モモンガも水の大切さは理解しており、その危惧へと理解を示す。

「成程。それは確かに、その通りだな」

「うむ。特に、下手なモンスターが湖を汚してしまえば、水路もおじやんでござるからな」

「水路!?!」

森の賢王は頷き、ちらちらと軽く手招き。湖から離れる形になるものの、驚きのあまりややぎこちないながらもついていけば、フクロウに似た青い巨鳥から、発達した脚を持つ華美な鳥竜などが、程々のサイズの池で水を飲んでいゝ。催眠攻撃を行っていた二種のモンスター、『夜鳥』ホロロホルルと『眠鳥』ヒプノックは驚くも、賢王は構わずそちらへと歩いていく。

「実はこれ、某が何カ所か地面を掘って繋げたのにござる。湖まで出向くのは骨にござるからな」

尚、地下トンネルについては、蜘蛛の巣にツタの葉を絡めたモノなどで補強されており、簡単には崩れないよう工夫されている。支配域を確固たるものにした上で、自身に有利な環境を維持する為の工夫であるが、成程。これは間違いなく、森の『賢王』であろう。

「……………ただ掘るだけでは、トンネルにはならないでしょう?」

「ああ、それは——」

啞然となるモモンガの隣で、アルベドはこの魔獣の知恵を測るべく、質問を開始。

対し、森の賢王は対人経験の乏しさからか、最低限戦闘に直接関与しない情報に限りつつ、躊躇いなく多くの情報を開示していく。そして、この支配域で活用されている諸々に用いられる素材について、大層驚くことになるのだった。

18—予兆

森の賢王との接触から、時は流れ。

「いや、凄いな、本当に……………」

ナザリック地下大墳墓、第六階層……………そこに広がる森林では現在、トブの大森林から採取した様々なモノの栽培が、試験的に行われていた。というのも、兎に角有用なものが豊富であり、今後の備えとして量産体制を整える準備が進んでいるのだ。

なにせ、あと二カ月で襲撃の時を迎えるのだ。備えておくに越したことは無い。

(順調に増えてる、とは言い難いが……………何が悪いんだ?)

そんな中で、モモンガが疑問を抱いたのは、その収量。

マールを始めとした高位のドルイドが手を加えて尚、その収量は安定しているとは言い難い。彼は知る由も無いが、トブの大森林を始めとした、大陸随所に広がる魔境の植生を支えているのは、そこに住まうモンスターの排泄物という天然の肥料なのだ。

そして運の悪いことに、モモンガのリアルはサラリーマンであり、且つリアルの世界では植物栽培はごくごく一部の業者の手で行われているのみ。ブループラネットならばまだしも、モモンガには生物の排泄物を肥料として利用する、という知識などありはしない。また、ユグドラシルに由来する存在であるNPCたちも、高位のドルイドであるマールでどうにもならない理由がそんなものである、などとは露ほども思わず、故に収量が中々上がらないのだ。

「失礼します」

「む、入れ」

報告書に目を通していたモモンガが顔を上げ、ドアをノックした人物の入室を促す。

「先程、『蒼の薔薇』の者たちとの連絡役である影の悪魔シャドウデーモンより、祭の日程についての報告が上がりました。そちらの方を表に書き出しましたので、そちらの提出に参りました次第でございます」

デミウルゴスは淀みなく報告し、書類を提出。受け取り目を通せ

ば、竜王国にて行われる祭の、日程情報が書き記してある。とはいえ、報告として挙げた情報量が少ないのか、情報量自体はそこまででもない。デミウルゴスはしっかりと私情を廃しているようで、本当にシンプルな情報だけだ。

「素晴らしい出来栄えだ、デミウルゴス」

「いえ。この程度、お褒めに頂くほどのことではございません」

そう謙遜するデミウルゴスは、続けてモモンガの手元の報告書に目を向け、気付く。

「おや、その数値ですと……もしや」

「ああ、察しの通りだ。マールでもどうにもできない、となれば、我々が知らない未知の法則の類が働いているのだらう。だが、その法則がどのようなものなのか、皆目見当がつかなくてな」

これについては、先述の通り、リアルの環境を思えば仕方の無い事だ。

「しかし、マール以上のドルイドとなれば、それこそブループラネット様以外にはおりませんまい」

「ま、まあ、そうなる訳だな」

ギルメン神聖視に苦笑しつつ、同時にマール以上にドルイド職に特化しているのは、名を挙げられたブループラネットくらいであるのも事実だ。同時に、自然に対する深い造詣から、現在最もいて欲しいギルメンの一人でもある彼の名を聞き、ふと考える。彼に教えられた中に、こういった時の打開策は無かったか、と。

「……………」

「ところで、アウラから報告は来ていますか？」

「む、アウラから？」

そこにデミウルゴスから告げられたのは、これまた驚くべき内容。

「はい。湖から森内部の貯水池に流れ着いていた魚なども、これまた特異な物が多く見られたとの報告がありました。現在、アウラが調査に向かっているのですが……………成程、詳細が確定するまで、不用意な混乱を招くまいとしていたのでしょうか」

と、フオローする文言を述べてから、モモンガに対し現状上がつて

いる情報を説明。

それから数日後。中間報告も兼ねた会議の中で

「森で捕まえた魚たちですけど、第四階層で森の植物とか虫を与えて育ててみたら、上手く育ってきました！……ただ、今後もあつちに行つて、虫とか捕まえてこなきゃですけど。それと、あのハムスターも魚については詳しくないみたいだから、育てたはいいけど、使い道は模索していくことになりそうです」

最初意気揚々と、しかし後半は肩身狭そうに告げたアウラだが、その情報には非常に有益なものが含まれていた。本来の守護領域を外れた場所で成果を上げた彼女を、弟のマーレは恨めしそうに睨み、シャルティアは先んじて成果を挙げられたことに焦燥を見せ。アルベド、デミウルゴス、そしてパンドラの三名は、彼女の取った手法に興味を示した。

「ふむふむ、森の虫を……ユグドラシルのものではなく、ですか」

「うん。育ちは、その、外のに比べると幾らか劣ってたけど……」

「ということは、あの森の環境に要因があるのかしら？」

「あの森とナザリックの違い、となると……山ほどあるな」

そう零したモモンガだが、それを素直に受け入れるとなれば、有用なアイテムを得るのに、わざわざトブの大森林へと踏み入る必要が出てくる。質の劣化もそうだが、数を得られないとなれば、リスクも跳ね上がる上、下手に根こそぎ採り尽くすようなことをしてしまえば、森との関係悪化も考えられる。

これは、この世界が『彼ら』の世界のルールに塗り替えられ尽くしていないことが、悪い形で作用してしまつた結果と言える。強力なモンスターが数多住まう場所ほど、『彼ら』の世界に近い領域へと塗り替えられていくのだが、『ユグドラシル』由来のギルド拠点内部や、モンスターの生息域から離れた都市部等では、当然侵食も非常に緩やか。

安全な領域というのは、言い換えればこの世界由来の物資以外の入手が困難であり、その分だけモンスターたちへの対抗手段も貧弱になつていく。逆に、危険な領域ほど良質な資源が生じていき、その地

域の者たちの尽力次第ではより確たる対抗が可能となるのだ。一例として、ドワーフ国はマム・タロト以外のモンスターが存在していない為、地底部で未知の鉱石類を得ることが出来たものの、かつて天然の要害として用いた『溶岩の川』付近では、そういった資源が一切確認されていない。

「となると、栽培区画に森の土を運び込むべきでしょうか？」

「やむを得ないでしょう。至急、森の賢王に許可を取った上で、必要量を調べましょう」

「では、茸類の栽培にも、森の樹木を使えないか、かけ合う必要がありますね」

三人は速やかに、どうすべきかを決定。

「ああ。では、可能な限り早急に必要量を纏めておいてくれ。私の方で、頼んでおこう」

(それくらいはやらないと、な)

モモンガはそう告げ、同時にNPCたちに、現地の人間に無い視点から思考を広げる。

(訊いた話によると、森の賢王や、その支配域外部の強力なモンスターが存在から、人類は中々トブの大森林に踏み込めていなかったとか。だが、それにしたって森の中だけ、毛色が違い過ぎている。例えとしてはあれだけど、まるで別ゲーのダンジョンをぶつ込んだみたいなの……………)

ユグドラシルを知り尽くしているからこそ、そして賢王の支配域を調べ尽くしたからこそ、辿り着いた疑問。外部ではそれなりに見られる、ユグドラシルのものと類似した植物などといったアイテムが、森の中では綺麗さっぱり消え失せているのだ。生命力が違うにしても、それならば何故外部を侵食していないのか……………

「ところで、モモンガ様」

「ん？」

「竜王国の祭ですが、冒険者たちに一任するだけで宜しいのですか？」
アルベドから言及されたのは、参加を断念した竜王国の祭について。

「ああ、それなら大丈夫だ。遠隔視ミラー・オブ・リモートビューイングの鏡を用いて眺めるつもりだからな」

苦肉の策であるが、それならば誰にも迷惑が掛からない。そう考えた案であったが、アルベドが目を妖しく光らせる。舌なめずりは堪えたものの、モモンガは強烈な悪寒に襲われ、瞬時にシャルティアが殺気立ち、他の面々が一齐に身構える。

「ですが、万一ということもあります」

「え」

「その為、有事に備えて、二人つきりツクリで！視察するというのは——」
「それならば！第六階層の闘技場で、戦闘が可能なシモベを集め、行うべきでしょう！」

「ええ、その通りかと！現地に出れぬ者たちの理解を深める、いい機会となるでしょう！」

シャルティアの殺意が最高潮に達する前に、デミウルゴス、パンドラズ・アクター両名が大急ぎで割り込む。この場での不幸は、帝国とのパイプ作りも兼てセバス、コキユートス両名が外部に出払っていたことだろう。二人が万一殺し合いを始めれば、止めることが出来る者がいない以上、やむを得ない。

「そ、そうだな、うん。では、パンドラよ。そのような段取りで予定を組め」

「ハッ！」

「予定が出来ましたら、私から皆に通達しましょう。それでいいね？」
「勿論ですとも。お願いしますよ、デミウルゴス様」

シャルティアがどや顔でアルベドを見上げ、アルベドは般若の如き形相でそれを睨み。

そんな空気の中、モモンガは安堵の溜息を零し、アウラとマーレは二人に感謝の視線を送った。

*

時を同じくして、バハルス帝国東部………来たる襲撃に備え、数多の拠点が作成されている地。

「オオオオオオッ!!!」

「だあ、クソッ！こういう時くらい大人しくしてろよなあ！」

その作業の中、現れた襲撃者たちへと、バハルス帝国のワーカーが一人毒吐く。

「いいから斬る！妖巨人トロールにぶつ壊されたら、洒落になんないんだから！」

ハーフェルフの弓使いが叫ぶ中、襲撃者である亜人……妖巨人トロールたちを火球が襲う。

「しかし、この数……間違いなく、スレインの予言は真実でしょう」「ああ。これまでの散発的なものは、明らかに違う」

そんな集団の先頭に立つ帝国騎士、『激風』ニンブル・アーク・デイル・アノックと、『不動』ナザミ・エネツクの二人が険しい顔で敵集団へと斬り込み、ナザミが攻撃を防ぐ間に、ニンブルが妖巨人トロールたちの息の根を止めていく。再生能力が高い亜人種であるが、急所を的確に穿たれば再生も間に合わず、即死せずとも後続に仕留められる。

彼らは、かつて栄華を誇ったトロールの大国の残党。国を喪ったことでバラバラになった中で、この辺境へと辿り着き、しかし人類と手を取り合おうとする事無く餌と見做していた者たちと、その子孫だ。過去の襲撃失敗で大きく数を減らして以来、不定期に散発的な襲撃を繰り返すのみだった彼らは、何故かこのタイミングで、これまでにならぬ規模で襲撃を仕掛けてきたのだ。

「ドウ見ル？」

「武人はおらず……ですが、何かに怯えているのでしょうか」

その群れと対峙する……事無く、拠点から避難する者たちの護衛を任された二人は、遠目からその戦闘を眺め、分析する。加勢しない代わり、戦う術を持たない者たちの護衛を任された彼らは、自らの意思で戦線に向き、果敢に戦う者たちの雄姿を目に焼き付ける。

武器の質の為、妖巨人トロールの一撃でも致命傷であろう軽装の戦士たちだが、率先して前に飛び出し、的確に攻撃を叩き込むことで亜人の直接的な脅威となり、無視することが出来ない状態を作り出す。そうしている間にも、図体が大きな妖巨人トロールという狙い易い目的掛け、後方の遠距離職が物理魔法問わず攻撃を叩き込んでいく。

「勝負アツタナ。練度カラシテ、比較ニモナラナイ」

「ですが、油断は禁物。今の我々は、彼らの護衛なのですから」

眼光鋭く二人が睨む先では、次々トロールが仕留められ、崩れ落ちていく。

彼ら妖巨人種トロールの長所が巨体と高い筋力、再生能力であるのに対し、バハルス帝国のあるこの一帯には、アゼルリシアの麓に広がるトブの大森林に加えて、ボウン沼地、東方の国境より先からの来襲など、強力なモンスターとの交戦経験は、質こそ王国に劣れど、量では勝っている。その殆どが大型、且つ凶悪なパワーと強固な外殻を併せ持つ為、それらを相手にしてきた猛者たちとの相性が、ひたすらに最悪なのだ。

剛腕は避けられ、攻撃は届かない。それでいて、相手は確実に当たってくる。それが出来る腕前が無ければ、モンスター相手に生き延びることが至難なのだから当然だが、それ故に巨躯の亜人たちは次々斃れ、息絶えていく。元よりモンスターの襲撃に備え、優秀な人材を集めていたのが、これ以上無く吉と出た形と言えよう。

だが。その血臭が、死臭が、更なる脅威を呼び込むことになる。

「ム——セバスッ！」

「わかっていきます！」

コキユートスの声より一瞬早く、セバスが駆ける。

「っ、ヘツケラン！」

悲鳴に近い警告が飛んだ直後、ヘツケランと呼ばれた剣士は眼前のトロールと共に、地中からの強襲を受けた。ギリギリでガードしたものの、武器は砕け、衝撃で骨どころか内蔵にまでダメージが及んでいく。口からは血が溢れ出す。

(やべ………っ、こいつは?!)

襲撃者たる、見覚えのある黒く染まった蛇竜に目を剥く間に、牙を持つ鋭利な嘴がその体目掛け迫る。死を受け入れ、目を瞑ろうとした彼は——しかしその寸前、鉄拳がその頭を殴り飛ばすのを目の当たりにしたことで、逆に見開かれる。その実行者たる老紳士は、そのまま空中で体勢を整え、重傷者であるヘツケランを抱え、後衛たちのも

とへと跳んだ。

「彼の治療をお願いします。ここは、私が引き受けましょう」

そう口にして、四肢を持つ蛇の如き竜を睨むセバスに、それを知る者たちから情報が。

「そいつはガララアジャラよ！けど、そんな色は見たことが無いわ！」

「亜種、とも思ってたけど、明らかに違う。何かあるかもしれない」

「尻尾の先と背中がひたすら硬いんだ！飛ばされる甲殻にも気を付けてくれ！」

「それと、牙！麻痺毒があるぞ！」

口々に叫ぶ中、明らかに異常な光を放つ赤い目が、セバスへと向けられる。

「……………情報、感謝致します」

静かに身構えるセバスを睨み、ガララアジャラ……………『絞蛇竜』はとぐるりを巻き、吼えた。

「キュシヤアアアアアアアアアアツ!!!」

19―黒く染まり

セバスが飛び出して直ぐ、コキュートスから報告が行われた。

「モモンガ様、緊急事態デゴザイマス」

『何があつた!?』

「モンスターノ、襲撃デス。ソレモ、明ラカニ異質ナ」

そう告げたコキュートスの視線の先で、セバスとガララアジャラが
激突――しなかつた。

「……………ナント」

『な、なにが起きた?!』

「息、絶エマシタ……………襲撃者タル、モンスターガ」

そう、息絶えたのだ。いざ戦わんとした、その目前で。

「何が……………」

動揺を隠せぬセバスは、静かに黒く染まった竜へと触れ、気系スキルによりその体軀を探る。

「む……………ッ！」

すると、強烈な寒気と共に、その体内に違和感を認める。本能が強烈な警鐘を鳴らす中、放置するわけにもいかないかと手刀でその体軀を貫けば、手先に何か硬質な感触。体を蝕む悪寒に顔を顰めるセバスが手を引き抜けば、異様な紫の輝きと共に、禍々しさを放つ美しい結晶が握られている。そしてそれは、恐怖等の精神作用を無効化している筈のセバスに、一瞬未満ながら理性が消え失せるといふ強烈な精神作用を与えた。

「これは……………不味いですね」

完全耐性を持つセバスですら、一瞬にも満たない間理性を消した未知の結晶。急ぎセバスはそれをハンカチで包み、他者の目につかぬよう隠す。怪しまれるのは百も承知であるが、耐性を有するセバスですら精神作用を防ぎ切れぬ以上、仕方のない処置と言える。

「だ、大丈夫ですか？」

「ええ。このモンスターの死因は恐らく、病か呪いでしよう。不用意に触れない方が宜しいかと」

あくまで穏やかに対応するが、内心は決して穏やかではない。

「この死体は、私が見張りしましょう。皆様は、他をお願いします」

「見張る、といたしますと?」

怪訝そうな視線を受けるも、セバスはその程度で気分を害さない。

「この死体が病、或いは呪いの媒介となる危険がありますので」

場の空気が最大限の緊張を帯びる中、セバスは静かに、彼方を睨む。

(地中からも来襲するとなると、非常に厄介ですが……………)

黒く蝕まれたモンスター……………その来襲は、果たして何が起こしたもののなのか。

それを思案する間もなく、セバスを猛烈な寒気と共に立ち眩みが襲い、その場に膝を突かせる。

「ぐ……………ッ!」

(油断、しましたか……………!)

病、及び呪いへの対策は万全だった。問題があるとすれば、その力が耐性を無意味に変える世界に等しい力、ワールドアイテムに匹敵する力に由来するものであることだろう。気功系に由来する自己回復スキルを発動するも、効果は芳しくない。吹き出る冷や汗の感触に顔を顰めながら、惜しみなく自己回復スキルを総動員し、回復力を底上げする事で強引に動けるようにして、職務を果たさんと立ち上がる。

幸か不幸か、その数秒は見られておらず。セバスは平静を装い見張りを続け

「無事か!」

急ぎ飛んできたモモンガが現れたことで、その護衛のアルベドの目に留まるまで、その体の変調は察知されることが無かった。言い換えれば、その間で完治する事が無かったことにより、事態の根幹に存在する異常が早期に発見されることとなった。

「モモンガ様、お下がりにください」

「む?」

「セバス、何があったのか、詳細に報告しなさい。貴方の今の体調も含めて」

鋭い視線を受け、セバスは元々報せるつもりでいた事実を口にす

る。

「そのモンスターの亡骸を調査しましたところ、呪い、或いは病と思しきモノを受けました」

「待ちなさい。貴方には完全耐性があつた筈でしょう?」

「ええ。ですが、症状からそのどちらか、としか思えず」

「そんなことはいいい!アルベド、急ぎペストーニヤを呼べ!」

モモンガが怒鳴るように叫べば、離れた場所の者たちも驚き、彼らへと視線を向ける。

「魔法範囲拡大最強化、《要塞創造》!」

発動したのは、第十位階の建造物作成魔法。消費度外視で規模と強度を底上げすることで、疑似的な隔離施設としても運用することを考えたソレにより、東方と作成中の拠点とを隔てる。その内部にガララアジャラの死体を、セバスとアルベドを収めたモモンガは、強烈な緊張を威圧として放ちながら、焦燥混じりに詰問。

「症状は?!」

「倦怠感と——」

完全耐性を整えるのが容易な病であるが、それを無力化するモノが存在している、という可能性が生じた時点で、モモンガの中の警戒心は最大を通り越した。状態異常系の完全耐性を貫くことが出来るのは、それこそ一部の極特化職か、ワールドアイテムしか無いのだ。警戒するのは当然であるし、ユグドラシルの通常力が通じない脅威を、既に彼は知っていた。

「……………古龍の仕業か?」

位階魔法による天候操作を無力化した、鋼龍の力。それに近いものであると判断したモモンガであるが、同時に病、或いは呪いを広げる存在という未知に対し、強烈な警戒を抱く。警戒を抱くからこそ、襲撃を仕掛けたというモンスターが、何かしらのアクションを見せることなく息絶えたという事実が、重くのしかかってくる。情報らしい情報を得ることが出来なかったというのは、それだけで今後の対応に遅れ取りかねない。

「予定を大幅に変更せねばならないな。セバス、お前はペストーニヤ

の診断後、暫くこちらに待機して貰う。今後複数回の診断を行い、問題無いと判断されてから、ナザリツクに帰還して貰うことになるだろうな」

「……………ハッ」

事実上、当面の帰還禁止だ。が、それもやむを得まい。情報が少なく、どの段階まで感染力が持続するのか、どの種族まで感染するのか、どこまで症状が重篤化するのか、など不明瞭であることを踏まえれば、感染拡大を防ぐためにも出入りは制限せざるを得ない。

それを理解していても、やはり精神的なダメージは大きいらしく、目に見えて落ち込んでいる。

「とはいえ、こうなると人員の移動も制限せねばならないな」

「と、仰いますと?」

「戦力の分散を行う。私とアルベド、コキュートス、セバスを中心に、役職的なバランスを考慮してこちらに留まる、という形でな。戦闘職に偏り過ぎてしまうが、ここの拠点拡充をより迅速に行う為にも、悪い判断ではあるまい」

病か呪いかも不明であるが、拡散を防ぐ上での最善手はこれであろう。

(本当に、大変だな……………というか、本当にただの状態異常か? 仮にも古龍由来だろう物だぞ)

頭痛を覚える現実の中、モモンガは事態の中の断片的な情報を冷静に吟味。こういう時に、強制的に思考をクールダウンしてくれるアンデッドの精神的特性は非常に有り難い。特に、イビルアイにより齎されたものを除き、情報らしい情報が大きく限られているこの辺境においては、そのアドバンテージのお陰で動揺を抑えて事態を俯瞰でき、より冷静に事態を調べられる。

「……………それと、遅ればせながら」

「むっ」

「死亡したモンスターの体内より、このようなものが」

セバスがハンカチの包みを開いた瞬間、戦士職二人は全力でその場から飛び退き、仲間たちから距離を置いた。元一般人のモモンガはそ

ここまで反射的な対応こそできなかつたものの、何かが起きたことは、精神作用の抑制効果のお陰で理解できた。

「何が起きた!?!」

「ワカリマセヌ。デスガ、アレガ危険デアルトイウコトハ、今ノ一瞬デ判リマシタ」

「精神耐性を無効……………たったこれだけで、それを成すとは」

戦慄を隠せぬ二人だが、実のところ、まだ上があるのだ。

襲撃者であるガララアジャラがそこまで強靱で無かつた為、体内で結晶化したモノの純度もそこまで高まる事が無かつたからだ。幸いというべきか、帝国に流入するモンスターたちの基本的な強さは、王国に出没するモンスターや三大危険地帯の個体に比べれば平均値で劣る。この理性を奪う結晶体の、より上位の品が早々お目にかかれるものでない、という一点は、間違いなく救いになるだろう。

「危険、なんて物じゃないな……………アンデッドにまで通じるって……………」

幸いなことは、このランクであれば、完全耐性を貫くのは一瞬程度であることか。

「黒く染まった竜……………黒化と仮称するが、これの出現の際には、我々で対処に当たる事とする」

「この結晶を早急に確保する為、ですね?」

「そうだ。完全耐性を持つ我々でこれである以上、耐性も備えていない者たちに及ぶ影響がどのような物なのか……………我々より酷いことになるのは容易に想像がつく以上、詳細が判明するまでは我々で対処するべきだろう。だが、問題はこのような個体が、どの程度の頻度で来襲するか、だ」

頻度、個体数が多過ぎれば対処が難しく、かといってこれが少な過ぎれば情報を得る機会がそれだけ激減する訳で、来たる襲来への備えが万全から遠のいてしまう。実に絶妙なバランスを要求される、クソゲーという他ない超高難易度……………そこに未知の状態異常、という要素が付加されてしまっているのだ。

ただ幸いなのは、ことモンスターの知識において、帝国の戦士たち

は東方からの来襲にも対応してきた経験から、王国の戦士と比べ知識の幅が広い。その分、個々への知識の深さはまちまちであるが、それらも法国が総括し、情報としてまとめ、幅広く出版している為、経験から敵を早期に割り出して貰えるだけで、対応の難易度は大きく下がる。

「それで、モンスターは……………」

「帝国の者たちは、ガララアジャラと呼称しておりました」

セバスの報告と共に、ペストーニヤが転移してくる。彼女による診断の付き添いをアルベドへと任せ、モモンガは手持ちの書籍から該当するモンスターの記された箇所を開き、真っ先に生態についての情報を調べる。モンスターを示すアイコンの、一目でどのモンスターなのかを判る見事な出来栄えに軽く感嘆しつつ、しかしその感嘆も直ぐに失せ、警戒レベルが跳ね上がる。

「基本的な生息地は湿地帯？だが、ここは平原だぞ……………となると」（何かしらから逃げていて、或いは逃げていた、と考えるべきか）

冷静な思考を積み重ね、モモンガは決断を下す。

「リスクはあるが、マーレを呼ぶ。時間をかけて、地形も含めた防衛ラインを整えるぞ」

地中を掘り進めるモンスターも居るようだが、打てるだけの手は尽くす。

そう決定したモモンガは、早速戦力をどう分散するのが最適かと、全力で思考を回した。

*

それは、遙か東の大地にて――

「グルアアアアアアアアアアッ!!!」

爆裂と共に、漆黒のオーラを纏う巨躯が嵐の中を舞う。

「ギユオオオオオオオッ!!!」

「キュルオオオオオオッ!!!」

暴風が、稲妻が荒れ狂う中、それを物ともせず、極限へと至った禍威の竜は爪牙を伸ばす。

「キシヤアアアアアアアッ!!!」

慟哭の如き咆哮が奔れば、数多の爆発が嵐の中で巻き起こり、二体の龍諸共乱入者を襲う。

「グウツ、ルガアアアアアツ!!」

しかし、それでも尚翼を持たぬ竜は堕ちない。紫炎を爆裂させ、強引に推力と変えることで荒れ狂う天空を舞い、その身を極限へと至らしめた竜へと目掛け、鋭牙を突き立てんと飛翔。強靱な翼を以てそれを躲した黒き竜だが、魔竜は諦めることなく紫炎の爆裂を駆使し、その身を追い立てる。

そこを一網打尽にせんと一対の龍が暴風を、稲妻を放てば、諸共に巻き込むことこそ出来れど、片や堕ち切る前に暗黒翼で体勢を整え、片や逃げ惑う竜たちを喰らい蓄えた紫炎……鬼火の爆裂を以て強引に空を舞う対の龍へと躍りかかる。

それは、異様という他ない光景だ。超越者たる古龍、その対を相手に、漆黒のオーラを纏う竜は欠片も臆せず、それどころか自らの爪牙を以て、その血肉を喰らわんと襲い掛かってさえいるのだ。大半のモンスターは、古龍が現れては逃げる外ないというのに、あまりに異質が過ぎる。

「キシヤアアアアアアアツ！」

「ギユオオオツ!!」

「キュルアアツ!!」

激闘の最中にある三体を狙い放たれる、莫大な量の鱗粉。それが一斉に粉塵爆発を巻き起こし、更にそこへと数多の流星の如き禍々しい攻撃が雨霰と降り注ぎ、三体へと痛烈なダメージを叩き込んでいく。風で、磁力で宙を舞う対の龍が、一時的に能力の制御が覚束なくなる程の攻撃を叩き込まれ、流石の魔竜も墜落——しかし、寸でのところで身を翻し、しっかりと着地を成功させる。

「グルウウ………ツ」

そして、空いた胃袋を満たすべく、先の災禍より逃げる者たちへと狙いを定め、大地を蹴る。

他の生存圏にて、『怨虎竜』——マガイマガドの名を与えられた竜は、極限へと至ったその体を以て、自らの糧を求め地を蹴る。ある者

は天災より逃れんと、ある者はその恐れを忘れぬまま狂いて、結果群れの体を成してしまったモンスターたちを、その爪牙を以て屠り、喰らわんと疾駆する。

西の辺境に知られることの無い脅威は、紫炎の鬼火と共に、確実に接近していた。

20—大陸閉鎖

当面の、モモンガ不在が決定したナザリツク。

「では、これよりの方針を報告しましょう」

デミウルゴスのもとに集められたのは、シャルティア、アウラ、そしてパンドラ。

「あちらからの報告によれば、未知の病の発見と共に、モンスター襲来の危険性が大きく跳ね上がったとのことです。そこで、リスクを承知でより多くの人員を投入し、この世界の調査を行うことを決定しました。これは、モモンガ様の許可も得ております」

最大限の緊張の中、デミウルゴスは真剣に、勿体ぶる事無く決定事項を口にしていく。

「まず、現在人間の手で栽培が行われていない植生の、生産体制の拡充。これについては、近隣の村の手も借りるつもりです。それと共に、森の賢王……あの魔獣が有する知識をより引出す必要もありません。その交渉は私が、森の調査は引き続きアウラが担当する形となるでしょう」

そこで言葉を切り、重大極まる決断を口にする。

「そしてですが、その調査などにプレアデス、及び一般メイドも加わる事となります」

「なっ?!正気でありんすか!?!」

「無論、森の浅い領域に限定します。それと、彼女らにやって貰うのは、ナザリツク地表部の付近の大地を用いた栽培実験など、比較的安全なものに限りますよ。私が、彼女たちを不要な危険にさらす卑劣漢にでも見えますか?」

デミウルゴスは、悪魔らしく悪趣味で悪辣。しかし、それは敵対者に対してでしかない。

仲間に対しての彼は、間違いなく善良で慈悲深い男だ。そしてそれは、末端も末端である一般のメイドたちに対しても、例外ではない。そんな彼が、モモンガにこの案を通して貰ったのは、可能な限りリスクを低く見積もった上で、ナザリツクに貢献することを可能とする為

の、そして動ける人員の不足という現状を打開する為の、苦肉の策でもあるのだ。

「……………ごめんなさい」

「いえ、私も無謀だとわかっています。ですが、それだけ現状が危険、ということですよ」

万一モンスターの群れが雪崩れ込めば、如何にナザリックといえどどうなるかわからないのだ。

「パンドラ、シャルティアは周辺諸国に赴き、未開の地などを調査して貰います」

「この時期に、でありんすか？」

「そう思うでしょうが、トブの森のような状態の場所が無いとも限りません。現在の我々が必要としているのは、安定供給困難なユグドラシルの高ランクアイテムの代替となり得る代物であり、トブの大森林でも少なからず見られたモノです。そして、その安定供給の可否が、今後を大きく左右する事となるでしょう」

それこそが、最大の目的。現地の物品で代替可能なものは代替せねば、ナザリックの備蓄の限界もすぐに訪れる。それは、モモンガと智者たちの共通の見解であり、他にもアイテムを用いる者の多くが薄々勘づいている事実だ。巻物の供給源もない現状、この方針は早々に展開しておくべきであった。

それが出来なかったのは、一重に命がかかった現実であることと、この世界の脅威レベルの高さが原因だろう。後者に関しては、レベル100のダンジョンボスクラスからレイドボス、ワールドエネミークラスがあちこちに居る、というこの辺境の魔境具合も大いに影響しているが、何にせよ慎重を期す必要があったのも事実だ。それらへの警戒が、対応の遅延へと繋がったのだ。

「私はナザリックの管理、並びに市場に流通している物品の調査などを任されています」

「それについては、私たちでは対応できませんからね。デミウルゴスに任せんす」

「あたしも。そういう難しいのはお仕上げ」

適材適所。二人はしつかり割り切っている。

「そう言って頂けると助かります」

以上を以て、彼らの会議は終わった。

「では、他のシモベへの通達は私から。貴方方は、それぞれ準備を」
あくまで、一時的なもの——だが、主が長く不在という事実は、彼らに大いによく効いた。

自分たちがしくじれば、最悪最後の御方たるモモンガまで喪うこととなる。その事実を理解できない者はおらず、故にこそ、彼らは万全でも尚満足せず、更に先を求める。悪の側面が強い者が大半を占める集団であるが、この世界は、その悪性を発揮させぬ程に過酷なのだから。

*

夜。バハルス帝国、東——から、カルサナス東までは、綺麗に変わり果てていた。

「丸々一日かかったな……だが、それだけの価値はある筈だ」

モモンガの腕の中では、共に働いていたマールが安らかに寝息を立てている。

その視線の先にあるのは、ドルイドの魔法と超位魔法により作り出した險峰。いや、山よりも壁と称するべきだろう、急斜面の大地……：地中を移動するモンスターに備え、厚みを持たせた為、東部の地形は大きく抉られ、そこへと海水を流し込み、要害としている。唯一、ガララアジャラの襲撃があつた地点周辺は意図的に地形を険しくしておらず、代わりにあの場所に集中的に拠点建設を行うことで、戦力の一点集中を可能にしているのだ。

「感謝する、帝国の方々」

「感謝などんでもない！ 私たちはただ、足の代わりとなっただけです」

そんな彼ら二人の足となったのは、バハルス帝国の直属マジックキャスターたち。拠点襲撃の報を受けたことで派遣された彼らは、モモンガが実行せんとしていた案をより確実にするため、彼らの消耗を抑えるべく、自分たちが足となる事を申し出たのだ。そのお陰で、移

動速度は落ちたものの、その分モモンガもスクロールを惜しまずに使え、広範囲に渡る地形の改変に成功していた。

「いや、ここまでこちらに尽力できたのは、貴方方のお陰だ」

「それでよかったら、私たちも多くの強大な魔法を見ることが出来ました。それでおあいこ、ということにしていたみたいです。モモンガ殿たちの尽力が無ければ、戦力をより広く分散させざるを得なかった……：……：うなれば、間違いなく我が国は滅びていたでしょう」

険しい顔で巨壁の先を睨む姿を前に、モモンガは一人想像する。

大挙して押し寄せるモンスター群れを、より広い範囲で迎撃……：間違いなく、物資や人員の不足が起こり、そのまま戦線を維持できず崩壊していただろう。たとえ大規模ギルドだったとしても、単独では戦線を維持できないだろう程には、この世界のモンスターの上限は際限ない。変に高位のモンスターが分散して現れれば、最悪そこから崩れていく……：一長一短であるが、一点に脅威を集中させる方が利が多いことに、違いは無い。

「だが、これで貴方方も戻る事は出来ないが」

「問題ありません。我々が欠けた程度で立ち行かなくなる程、この国は軟弱ではありませんよ」

そう話している内に、より多くの人員を集め建設が進む、迎撃拠点の大砦が見えてくる。

危険な外部寄りでの建設作業にはゴーレムを多く動員し、細かな作業の多くを現地人に任せる形で進められる工事の中、モモンガは手持ちの地形操作系魔法の巻物スクロールをほぼ使い切って作成した要害の外へと目を向ける。どこまでもシンプルな、質量任せの巨壁であるが、東の大地を大きく抉り土砂を確保した事もあり、厚さ、高さ共にかなりのもの。

更に、抉れた大地に海水を引き込むことで陸路を制限しており、空からの襲撃者もそうそう突破は出来まい。ここが新たなモンスターの温床となる可能性もゼロではないが……：……：今一時を凌がねば、そんな心配もしていられない。

（あとは、各所の補強をしっかりとしていこう。超位魔法も目一杯使え

ば、いける筈だ)

マーレもMPが尽きるまで頑張ってくれたが、やはりまだ不安は残る。これから暫くは、MPが回復次第、再び使い尽くすまで方々を回る事となるだろう。モモンガは巻物スクロールの在庫をほぼ使い尽くしてしまったこともあり、今後は超位魔法による補強以外は出来そうにない。

「モモンガ様」

「む、セバスか」

拠点から大分離れた場所で一人思案に耽っていると、すっかり回復したセバスが現れる。

「丁度いいところでした。そろそろ、時間ですのぞ」

「時間？」

「竜王国の祭ですよ」

そこに至り、漸く心待ちにしていた筈のことを思い出す。

「モモンガ様も、マーレ共々お疲れの様子。休憩がてら、眺めてみては如何でしょうか？」

そつとセバスが視線をやった先では、コキユートスと共に肉体労働に勤しむアルベドの姿。

「……………では、その言葉に甘えとしよう」

「ハッ。こちらの方は、私どもにお任せを」

セバスの言葉に甘える形で、モモンガは仮拠点へと転移魔法で移動。マーレをベッドに運ぼうと歩を進めていると、腕の中から可愛らしい唸り声。視線を降ろせば、ダークエルフの少年が眠そうに瞼を上げ、オッドアイの瞳で支配者を見上げていた。

「ももんが、さま……………」

「む、起きたか。体の調子はどうか？倦怠感などあるようなら、無理はしないぞ」

本来なら疲労無効に飲食、睡眠等を不要とするマジックアイテムを有しているマーレたちギルドNPCたちだが、多くはアンデッドでないため、不要であつて不可能ではない。マーレのように、モモンガと肩を並べて、ひいてはナザリックの存亡にかかわる一大事を任される

というプレッシャーによる精神的負担等までは軽減できないため、何かしらのケアは必要となる。

彼の場合、それがモモンガの腕の中で眠る、という事だったわけだ。

「え、あ、だ、大丈夫、です……………で、です、けど……………」

「ん？」

そして、そんな口実を得た彼は、少々大胆な真似をしでかした。

「あの、えっと……………このまま、もう少しお願い、できますか？」

「それくらい、お安い御用だとも。では、マールも一緒に見ようか」

と、モモンガはマールが罪悪感を覚える程すんなり了承し、彼を抱きかかえたまま準備を始めていく。マジックアイテムを一通りと、念の為の逆探知対策を施してから、それらを駆使して竜王国より南東、大砂漠を【遠隔視の鏡】にて映し出す。

月明かりに照らされる砂海を進むのは、砂上船の数々。その上を舞うのは、強靱な翼を持つ数多のワイバーン……………飛竜種モンスターだ。高い飛行能力を持つリオレウス、セルレギオスなどに驚くモモンガたちだが、実のところ、強さ自体は大したことが無い。彼らの利点はその数と、人と共に生まれ育ったことによる、戦略的な行動が可能という点に集約されているのだ。

「改めて、凄いな……………」

小柄なモンスター……………人為的に育てられた翼竜種モンスターを駆使し、砂上船を行き交う人影の大きさから、そのスケールが一目でわかる。少し視点を遠ざけ、より広い範囲を眺めてみれば、それらから大分離れた場所を航行する、より大型な船の数々も見える。その形状は、リアルで殆ど廃れてしまった航空母艦を思い起こさせる……………最大の違いは、発着するのが航空機ではなく、飛行能力に長けたモンスターである、ということか。

そして、その視界の奥。砂海に埋もれる小さな小さな廃墟の影を隠すように、山が浮かぶ。

「お、おとおお……………ッー」

「わあ……………！」

月光に照らされ、神々しく輝く紫の霊峰。砂海を割って現れたその

下の体軀もまた、月明かりにより美しく照らされ、その更に先に延びる巨大な牙もまた、神秘的な輝きを放っている。が、一番はそのサイズ……：優に100メートルはあろう巨軀は、広大な砂漠と遠近差によるサイズ感覚の狂いから、より巨大に見える。

「……………餡ころもつちもちさんが言つてた、鯨みたいだな」

海が綺麗だった頃のリアルに居たとされる海棲の巨大哺乳類、鯨。写真を見せられたのみであるが、モモンガは広大な砂漠を泳ぐ巨大な龍に、その面影を見た。違いがあるとすれば、モモンガが見た写真に写るクジラが複数頭居たのに対し、巨龍……………：『靈山龍』ジエン・モーン亜種は単独。強いて言うならば、そのお零れを狙う魚竜種モンスター、デルクスの群れが豆粒の如く見える程度か。

吐き出す砂塵が大きな流れとなり、大砂漠へと注ぐ光を遮りつつある中、砂上船の人々の動きが変化。飛竜たちも一斉に、離れた場所の大型船へと戻っていく中、『蒼の薔薇』を始めとする少くない人間たちは、靈山龍の美しさと威容に目を奪われ、ただただその姿を眺めている。それもやむを得まい。

「直に見たかったなあ、本当に……………」

悔しそうに零し、砂の大海を往く靈山を静かに眺める。リスクを考えれば、仕方の無い事……………

「……………エリユエンティウ、だったか」

悔しさを噛み締めたことか、モモンガの意識がそちらに向いた。(ギルド武器破壊、ギルド維持費滞納のペナルティは知っているけど、拠点そのものを破壊された場合だと、どうなるんだ？ユグドラシルの場合、拠点へのダメージはあっても破壊は不可能だった訳だし……………)

「……………少し、調べてみるか」

無謀だが、好奇心と、少しばかりの反骨心が勝ってしまった。

鏡に映し出される世界が、朽ちた都市を捉える寸前——突如、月明かりが失せた。

21—超越者たち

一瞬、紅の光が映し出される——否、それは光ではない。こちらを捉える『目』だ。

「——ッ！」

「ひっ!？」

次の瞬間、力を喪失した魔鏡をナニカが包み込むと共に床に落ち、共に砕け散る。

「……………ッ！」

鏡に纏わりついていた赤い氷もまた砕け散り、鈴木悟にんげんの残滓が本能的な警告を響かせたことで、即座にマーレを連れ退避。大急ぎで部屋を出たモモンガの腕の中から奔った引き攣った呼吸音に驚き振り返れば、先程まで彼らが居た部屋の内装、その大部分が赤い氷に飲まれていた。

「な、あ……………!？」

自身の浅慮を全力で悔い、同時にこの未知の現象を引き起こした何者かの存在と、伝え聞く限りの情報を擦り合わせていく。黒龍については、炎以外の情報は皆無であり、炎と冷気は相反する属性ということもあり、モモンガはこの犯人が黒龍でない、と当たりをつける。

(まさか、冷気系を使うモンスターも居るのか?それも、こちらを探知、攻撃が可能な)

何が不幸かと言われれば、沈静化が起こる程の感情の揺れ動きが無かったことだろう。中途半端な後悔が沈静化されなかったが為に、情報収集を言い訳とした反骨心が顔を出し、冷静さを取り戻した今無謀が過ぎる、と全力で自省せざるを得ない事態になってしまった。

「……………ツアーには、土下座するべきかもしれんが……………」

だが、予想できなくとも仕方の無い事だろう。これまで彼が遭遇したモンスターの多くに対し、これは明らかに異常が過ぎた。アウラの存在を逆探知した存在を知っていたとしても、ここまで桁外れの攻性防御……………いや、たかだか睨んだだけでここまでの芸当を可能とする存在が居るなどと、予想も難しかろう。

(でも、これは一体……)

溶けることなく形を保つ、毒々しい赤い氷……それが纏わりつく調度品を持ち上げようと、氷から覗く端を掴み持ち上げようとする、なんと調度品が氷の重みに耐え切れず、端だけが千切れ、残りはそのはずみにバランスを崩し、倒れると共に細かく砕け散ってしまう。

「…………マール、触れるなよ」

「は、はい」

自責も加わり、恐ろしいまでに低い声を零したモモンガは、未知の氷をただただ睨む。

そして、そんな不審な『目』を睨み返した青き龍は、氷に包まれた元空中都市の下層部……ユグドラシル最高難易度のギルドホームダンジョン、その一部である地下ダンジョンエリアの最奥、地表部へと続く広間に座している。その姿は、クシャルダオラなどのような四足に一对の翼を持つドラゴン体系であるが、纏う空気は遥かに異質だ。

「…………」

輝く紅い瞳が、探知魔法を放った彼方を見やる。取るに足らない、といわんばかりに興味の薄い反応であるが、もとより外部への興味、関心が非常に薄いのだ。皇氷龍、とても呼ぶべき桁外れの冷気を操るこの龍にとつて、そもそもステータス、装備への重きが大きいユグドラシルプレイヤーたちなど、単純な耐性を踏み潰せる以上は取るに足らない。

では、何故それを妨げるのかといえ、この地に眠る規格外の逸品を隠し通す為か。

「あら、残念」

それを知覚して、一冊の魔本を閉じた少女はつまらなそうに呟いた。

「まあ、確かにこれは、少々危険かしら？」

【無銘なる呪文書】…………始原のそれを除く、全ての魔法を記すと共に、ネームレス・スペルブック装備者に記されたその全てを、思うがままに使用させることが出

来るワールドアイテム。思うがままに、とある様に、職業や種族による制約、MP消費の増加補正を無視して、回数制限もリキャストタイムも無く乱発可能な、世界級の名に恥じぬ危険な逸品だ。

「けど、果たしてここに至れる者は、どれだけいるのかしらね？」

眼下に広がる、空中都市であった地……そこは、過酷という言葉も生温い危険地帯だ。

「かつての者たちは、時に独りで数多の者を打倒せしめたけれど……」

雷光が散り、龍光が奔り、劫炎が爆ぜ、冷気が膨れ、飛沫が舞う。蠱毒とも取られかねない苛烈極まる激闘が繰り広げられて見えるが、その実その殆どは、彼らなりの戯れであったり、自己鍛錬の一環に過ぎない。モモンガが、彼含む『彼女ら』の世界の者以外が目の当たりにしていれば、別方向に甚大な被害を受けていたであろう光景だ。

その意味では、皇氷龍の守護と探知阻害は、これ以上無いファイインプレーと言えなくもない。

「まだまだ、あと数百年……いえ、数千年は無理かしら」

北東へと視線を向け、再び巻き起こる闘争の光を瞳に映し出す。

「極限に至った存在が数多居る夜行……少々、苛烈が過ぎるけれど」
顔を上げ、南の地を眺める。

「和を乱す程、莫大な力であるなら、当然滅尽龍も気付く。ヒトが滅ぶのが先か……」

滅尽龍——古龍を脅かす獣牙、ネルギガンテ。真なる竜王をも喰らう圧倒的な強さは、まさに『悉くを殲ぼす』と言っても過言ではない。そこに、大陸南方に存在する『聖域』を中心とした領域の影響が加わり、歴戦の中の王とも呼ぶべき域へと至ったことで、その実力は覇を超える。

「……………あ」

そこで、何かを感じ東方へと目を向けた少女の顔が引き攣り、背後の白龍が紅閃眼を見開く。

「至天の刻竜まで来るの……？となる、閃槍者も降り立つし……………」

そこで表情を消し、静かに紅眼を北西に向ける。

「あのふれいやーは、間違いなく『あの力』を使う。使わざるを得ない」
白い少女の姿がぶれ、白き龍が起き上がる。純白の体軀を紅雷が包み込んだかと思えば、王冠の如く左右に伸びる黒角は形を変え、蒼く輝く後頭部の一對と額から伸びる一本へと形を変える。翼を始め、その身体の随所が大きく形を変えており、放たれる圧もまた、尋常でない程に高まっている。

「——それだけは、許容する訳にはいかない」

その声に、少女らしさは疎か、人間らしさは欠片も無い。

「アレは何も生まない、純粋な破滅。理を、世界を殺す力を、許容するわけにはいかない」

だが、その口から零れる言葉は、何処までも世界を慮ったモノ。

同時にそれは、強大な力と高い知能を併せ持つ強者たちが有する、共通認識だ。

「けど、安易に滅ぼせば、再び停滞が起こる………本当に、厄介なニンゲンね」

辺境に限った話ではないが、この世界の元々の住民たちは、未だモンスター素材の加工技術を、完全には確立できていない。それだけでなく、彼女たちの世界の法則が深く根付いた領域に踏み入る者も皆無で、更にかつての亜人種天国が原因でそれぞれの生存圏が小さく、また大きく離れており、集落ごとの交流も皆無。大陸中央部の亜人国家も、大砂漠の拡大に伴い壊滅、離散している為、尚更人々の移動経路は制限されているのだ。

それなりの強さ、思慮深さと戦力規模を併せ持つお陰で、これまで人々の手に渡らずにいた諸々が発見された。更に、それを利用しようとして動いている事もあり、人類の滅亡より発展を望む彼女にとっては、まさに天恵にも等しい存在なのだ………その死の力と、配下の精神性を除けば。

「刻竜の襲来は、あの力への警戒によるもの………運がないわね、あのニンゲンも」

すっかりと元の振る舞いに戻り、龍も元の姿へと戻る。

「けど、このまま滅ぼさせる訳にはいかない。少し、手は打たせて貰うわよ」

個に入れ込んでいる、のではない。どこまでも純粹に、利害を勘定しているだけなのだ。

*

その夜、モモンガは部屋の対応と部下への謝罪に追われた——それが、功を奏した。

「ッ！」

けたたましい鐘の音が響き渡る。焦燥を示すかのような乱雑な響きが、急を報せる。

「コノ音ハ……………！」

「アルベド」

「ええ——セバス、マーレ。貴方たちはモモンガ様の護衛を。私たちが迎撃に出ます」

と、フル装備となったアルベド、コキュートスが飛び出す。

続けてモモンガも外に出れば、迎撃の為の広場から猛烈な土煙が上がっている。

「何事だ？」

「襲撃です！皆様はどうか、後方で……………っ、遅かったようですね」
駆け込んで来る帝国のマジックキャスターだが、人数と続けて響いた轟音から、事態を察する。

「黒く染まったモンスターと、通常のモンスターですが……………後者が、群れておりまして」

「なに？」

急ぎ、モモンガたちも事態を知るべく向かえば、思わぬ局面。

「ギユアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

熊を思わせる、赤く光る傷を無数に刻まれた、紅色の腕甲と頭部の毛を持つ獣。

その咆哮に呼応するように、彼の獣……………『紅兜』『主青熊獣』ヌシ・アオアシラと共に、三龍による暴威の魔の手から逃げ惑うモンスターたちが奮い立つ。そこに躍りかかるのは、黒く染まった獣竜種モンス

ター、『蛮顎竜』アンジャナフだが、その大顎が開く前に、紅兜の強靱な前腕から繰り出されるアッパーカットが決まり、その頭が大きくかち上げられる。

「キュアオアアアアアオッ！」

そこに『迅竜』ナルガクルガの尻尾による、強烈な叩きつけ。すかさず尻尾を引けば、追撃。

「ルアアアアアアオオオオッ!!!」

空中で回転し、『金獅子』ラージャンが全体重をかけアンジャナフの首へと激突。首が折れても可笑しくない一撃であるが、相手は腐っても食物連鎖の上位種。即死することは無いが、しかし立ち上がることを許さぬ為、ラージャンと共に紅兜がその剛腕で頭を掴み、力任せに投げ飛ばす。

「っ、退避——ッ!!!」

建造途中の多くをなぎ倒し、巨軀が転げ回る。多くの戦士が一斉に退避する中、守護者二人は臆することなく前に出て、ここまでの成果を無碍にするわけにいくまいと、体を張ってその巨軀を抑え込まんとする。二人がかりでも大きく減速させるので精一杯ながら、確かにその体軀が齎す破壊を食い止めることに成功している。

「ぐ、うううう……!!」

「コレハ、重イ……ッ！」

しかし、押し留めたということはつまり、相手の行動を妨げるものも消えたということだ。

「グルアアアアアアッ!!!」

「ぐうっ?!」

「ヌグッ!」

暴れ狂うアンジャナフに弾かれ、二人が後退。毒々しい紫の涎を零し、異質な赤に染まった瞳が二人を捉える。敵と、餌と見ている、とは違う異質な視線に少くない生理的な不快感を覚える二人であるが、それだけでは終わらない。

「ギユアアアアアアッ!!!」

「グアアアアアアッ!!!」

紅兜の殴打が、狂竜アンジヤナフを襲う。体格差を物ともせぬ桁外れのパワーに加えて、本来であれば上位に位置する捕食者に対し、欠片も臆さぬその凶暴性。そして、その咆哮に呼応するかのように活性化し、それなりに統率された動きで、暴れ狂う狂竜へと襲い掛かるモンスターたち……異質揃いであるが、それは同時に、黒く染まったモンスターがどれほど危険であるのかを、端的に示す結果となっている。

「これは……手を出さない方が、よさそうね」

アルベドが冷静に判断する中、紅兜はアンジヤナフを凌駕する剛力を以て、攻撃の一切を許さず攻め立てる。毒々しい紫に染まる血が撒き散らされる中、しかしそれをものともせずヌシの牙獣は剛爪で獣竜の体躯を引き裂き、トドメとばかりにその大顎の間に両腕を突っ込む。

「ガッ、オアアアアッ!？」

「ギユウウツ、アアアアアアアアアッ!!!」

突き刺さる牙を物ともせず、その顎を上下に引き裂く。致命傷を受けても尚、その肉体を強引に動かし抗わんとする狂った蛮顎竜は、しかしすかさず飛来する数多の猛攻。突撃、斬撃に可燃液、火炎、電光、気光といった強烈な攻撃の数々を、その鱗と外皮だけで防ぎ切れることは叶わず。程なくして失血で動きが鈍ったところを、ヌシの剛腕により完全に息の根を止められた。

その凄絶な激闘の結末に一喜一憂する間もなく、獰猛に光る赤い眼光が、戦士たちを捉える。

「ギユウツ、ギユアアアアアアアッ!!!」

咆哮——バインドボイスが響き渡り、一様に耳を塞ぐ。

そしてそれは、同時に数多のモンスターたちを活性化。ヌシたる牙獣を抜きにしても、強大な力を秘めたモンスターである迅竜、金獅子が奮い立ち、それ以外にも様々なモンスターが必死さを露わに、眼前の脅威を排除せんと牙を剥く。

「不味いわね……これは」

「セバスガ居テモ尚、少々難シイヤモシレヌ」

超攻撃的生物、ラージヤンが先んじて飛び出す。狙われたアルベドが咄嗟に構えれば、振り抜かれる剛腕がその体を軽々吹き飛ばし、続けて気光——強烈な電気属性攻撃を放つ。それに対し援護する間も与えず、コキユートス目掛けナルガクルガが飛翔。

「ム、グウツ!？」

(重クハ、ナイ……………ダガ、速イツ！)

刃翼を防げば、すかさず尻尾による追撃。兎にも角にも、四足という姿勢とその翼を駆使した、素早い動きが曲者だ。森林という環境に適応、進化する過程で得られた体躯と、その細くしなやかな体格に似あつた俊敏な動きは、平地であろうと遺憾なく発揮される。

「……………勘弁して欲しいんだけどなあ……………つ!？」

モモンガから嘆きの声が漏れる中、空から蒼光が飛来。光線が大地を抉り、アルベドたち諸共、モンスターたちの侵攻を阻害、巨壁の一部を消し飛ばしながら一気に撤退まで追い込んだ。

空を見上げてても、そこには分厚い雲に反した明るい空以外、何も見えなかった。

22—動く

トブの大森林奥地に住まう世捨て人は、『ソレ』を察知した。
「なんだ、これ……賢王、どころじゃねえぞ」

鋭く目を細め、凄まじく風化した太刀を、程よく手入れされた普通の刀を手に取り、立ち上がる。

「不味いな、間違いなく桁違いにヤバい……修行なんざ、してる場合じゃねえか」

男——ブレイン・アングラウスは一人、アゼルリシアの先に広がる空を睥む。

二振りの得物を、この世界に存在しない筈の植物——竹で編み上げた鞘へと納め、同じ物を乱雑に切り刻み作り上げた粗雑な住居が出る。知られざる大森林北西部奥地の大竹林は、しかし徐々に勢力を拡大する『龍』の領域。しかし、人が踏み入るにはあまりに危険なトブの奥地ということもあり、この剣士以外に知る者はいない。

「どんなバケモンが居るんだか」

眼光鋭く空を睥み、この世界で有数の実力者は一人駆け出す。

そんな中、アゼルリシアの頂より下界を睥睨していた獣もまた、それに気付いていた。

「キユウ……」

豊かな鬣を持つ、白き獣……だが、秘める力の強大さは、獣ではなく龍のソレ。

そう、龍なのだ。『幻獣』キリン……古龍の中では比較的低位の存在であるが、アゼルリシアの山嶺に住まうこの個体は、発達した強靱な四肢と鬣、より美しく発達した白銀角を有する特異な個体。その角を護り抜き、ここまでの高みへと至った、真正正銘の強者である。

その青い瞳は、雲より高い領域を舞う蒼白の飛竜を、確かに捉えていた。

*

強大な存在の来襲を察知し、ジエン・モーラン亜種は速度を上げ、早々に竜王国近隣を去った。

その為、例年と比べ収量こそ少なからず落ち、祭も早々に切り上げとなった。靈山龍に由来する品々の希少価値を考慮すれば、収量低下に反して利率自体は悪くないのだが、その動きに不穏なものを感じた者も居り、僅かばかりながら暗い空気が漂う帰還となる………筈だった。

「——ッ!?!」

果たして、最初に気付いたのは誰だったか。

「アアアアアアアアアアアアッ?!?!」

耳をつんざくような咆哮が、警告より先に響き渡る。

「これって、ジエン・モーランの!?!」

「おいおい、何が起きてやがるってんだ………!?!」

広大な砂の海原で繰り広げられるのは、巨龍と紅の生存競争………被食と捕食であった。

「な、な、な………!」

「鐘を鳴らせ!最悪の事態だ!全船を即座に回頭させろッ!」

イビルアイが慄く中、古参のビーストマンたちが血相を変え叫ぶ。

「忌々しい赤………またお前が来るか、弩岩竜!」

祭事における旗艦、竜王国首都船に座すドラウディロンが憤怒の形相で睨むのは、紅。

がっしりとした体躯を持つ紅の巨竜は、数倍以上の巨躯を誇る峯山龍の厚鱗を、重殻をその口で噛み砕き、嘔き出す血でその身を一層赤く染める。2000年前、竜王国を今のような砂漠と化すまで食い荒らした災害そのものは今、彼の国の豊穡の象徴たる龍を喰らわんと、その巨躯を大砂漠へと繋がる入り江へと押し込みつつあった。

「イビルアイ、あれは」

「恐ら………ッ」

「弩岩竜だ!2000年前、この竜王国を食い荒らしたモンスター同族!」

答えようとしたイビルアイは、しかし途中で不自然に竦み上がる。それにビーストマンの老兵が怒鳴る様に応じ、忌々しいとばかりに回頭しつつある船の上から、災厄そのものたる砂上の楼閣を睨む。そん

な中、怯えるようにその場にへたり込んだイビルアイは、恐怖に顔を歪め、空を見上げた。

「くる……………」

「は？おい、来るって、まさか——」

ガガーランがその原因を察し、信じたくない、と空を見上げた直後。

「ギユアオオオオオオオオツ!!」

「ツ!!」

重く響く咆哮と共に、飛来する影。ジエン・モーランの捕食を即座に諦め、砂中に逃れんとする弩岩竜だが、砂そのものを大きく巻き上げ、美しい銀の輝きを帯びた黒き影が落下。一回り以上巨大な弩岩竜の、強靱な外殻を純然たる膂力のみで打ち砕き、金剛棘を以て内部をズタズタに破壊し、更にはその飛翔能力を以て、強引に空中へと引きずり出してみせたのだ。

「な、あ?!」

「嘘だろ、おい……………」

驚愕に包まれる空気の中、ガガーランだけは『信じたくない』とばかりに頭を振った。

「ネル、ギガンテ……………」

入り江の淵、数少ない砂海の流れに囚われぬ場所へと墜落した弩岩竜の息の根を、完全に止めた存在を赤い瞳に捉え、イビルアイは静かに呟く。彼女の故郷を滅ぼした竜王を、容易く屠り、喰らった古龍は、今度はかつて竜王国を滅ぼした災禍を喰い殺し、その強大さを示した。とはいえ、覇種たる竜は数度齧られたのみで、肝心の滅尽龍の標的は、逃げるように南へと向け潜っていった峯山龍へと移った様子。「ギユルアアアアアアアアツ!!」

逃げた峯山龍を追い、滅尽龍は南へと飛ぶ。難易度にして300超の巨大龍が、成す術無く襲われ、喰られる覇種を、意図も容易く惨殺し、喰らう歴戦王の滅尽龍……………パワーバランスの様子がよくわかる。同時に、今の人類が如何に脆弱で、矮小であるかを知らしめるかのような光景に、誰もが愕然となり、沈黙する。

「……………あ」

そんな沈黙を破ったのは、何かに気付いたかのようなラキュースの声。

「あのモンスターの亡骸！アレを何とかして回収できませんか!？」

そこで思い至ったのは、ナザリック……より厳密には、彼らが有する加工技術。今まで加工が叶わなかったモンスター素材の武器を作る彼らならば、あのモンスターの亡骸も立派な武器と出来るのではないか。そんな打算は、しかし自身の利益の為ではなく、未知なる脅威に備えているこの辺境の、大きな希望となることを確信しているからこそのものだ。

「……ほかの船に連絡だ！悪いがアンタら冒険者は、デルクスども
の露払いを頼む！」

その意図がどこまで理解されたかは不明ながら、幸いにも彼女たちを乗せた船の長は、その提案を飲むことを決定。単独ではアレを積み込み切ることは不可能と判断し、他の船へと連絡の為の人員を送り出す。過去、竜王国を滅ぼしかけ、スレイン法国の秘宝と切札が命と引き換えに滅ぼした存在が、今度は彼らの希望となるなどと、誰が予想できただろうか。

そして幸運なことに、弩岩竜の生息域は南方寄り……このままいけば、大半が竜王国へと到達するより早く滅尽龍に捕捉され、喰い殺されることとなる。わざわざ捕食者の来襲方向に逃げる事もない以上、弩岩竜による被害が起こる事はほぼ無いと言っているのだ。

「剣を持つてる連中は纏めて駆り出せ！アレを上手く切り分けて収容するんだ！」

報告を受けたドラウディロンが、他船への連絡要員にそう指示を飛ばす。

モンスターの体躯に、これまで知られる武器はそうそう通じない。だが、亡骸であるなら、強引に刃を通すことも不可能ではないのだ。無論、リスクは多大にあるが……剛種をも超えた覇種の亡骸ともなれば、それが小さく見える程絶大なりターンが保証されているのだ。「ああ、胃が痛い……最悪、国単位で大砂漠を放浪する事も考えねばならんか？」

その一方、弩岩竜来襲という災厄が起こり得る事実には、ドラウディロンは頭を抱えていた。

*

ローブル熔山帯……その調査に赴いていたパンドラ、シャルティア両名は、揃って息を殺した上での活動を余儀なくされていた。灼熱の空気は幸いなことに、炎熱系フィールドエフェクトへの対策がそのまま効果を発揮するお陰で無害化できているものの、それに有難みを感じる余裕など、ありはしなかった。

「ルオオオオオッ!!!」

「ギユアアアアッ!!!」

強靱な四肢で大地を蹴り、黒銀の竜が紺藍の竜と激突する。牙竜と獣竜の戦闘は凄烈で、激しく舞う黒光が空気を焼く音と地を砕く爆音が耳をつんざく。更に質の悪いことに、二人が調査中だったエリアから脱そうにも、飛び散る黒光……『蝕龍蟲』が激しく飛び交うせいで、隠密と防御を魔法で両立している現在、下手に動けないのだ。

「じ、地獄でありんす……!」

「いや、本当に……しかし、あの緑色の物体は……」

『碎竜』ブラキディオスの剛腕は、しかし『獄狼竜』ジンオウガ亜種を捉えることは無い。強靱に発達した四肢と、起伏に富んだ地形を駆使し三次元戦闘を展開する牙竜は、共生者である彼の意思に従い龍雷を放つ『蝕龍蟲』を駆使し、ブラキディオス最大の強みが最大限効果を発揮する間合いに踏み込むことなく、攻撃を続けているのだ。

「ギユアアアアアアアアッ!!!」

激昂と共に、ブラキディオスの紺藍の体躯が緑に染まる。何事か、とシャルティアが目を剥き、パンドラはその様子と先程まで拳打の度散された緑の粘体の様子から、何かしらの生物である可能性を想起。そこから、爆発する事にメリットがあるのかを短時間で思考し、その答えを導き出す。

「粘菌、といったところでしょうか……爆発するとは、また面白い生態をしていますね」

「言ってる場合でありんすか!?!……あ」

そんなシャルティアのツツコミの怒号が響き、当人が慌てて口を押える。

幸い、丁度いいタイミングで発生した多重爆発により、怒号は掻き消されたものの、その爆発の余波で二人を隠していた遮蔽物が崩壊。周辺地形にまで行き渡った粘菌が幾重にも爆ぜ、周辺の崩壊が始まる中、二人はなりふり構わず防御、隠蔽を解除し脱兎の如く疾走。

獄狼もまた、闖入者に構うことなく逃走を選択し、碎竜は二人を追おうとして、自らの起こした爆発で崩壊した数多の岩片、岩塊にその道を阻まれ、生き埋めに。だが、それを確認する余裕も無ければ、必要も無い。何故なら、その状況を打開する術を持つことなど、とつくに理解できているのだから。

「ギユアアアアアアアアアアッ!!!」

大爆発と共に、岩塊、岩片が一層細かく吹き飛ばされる。

「やはりそう来ますよねえッ!」

「ふっ、ぎけるなああああ! 大人しく死んでろよお前ええええ!!」

予想していたパンドラが、本気で死んだと思っていたシャルティアがそれぞれ叫び、全力疾走。魔法で飛ぶこともしない様子は、その方法を忘れていたのではないか、と思わせてしまうが、実は違う。最低限の情報収集の末、『空』が非常に危険である、と理解しているからこそ、その択を選べないのだ。

だからこそ、走る。地道に、必死に、駆け続け、碎竜から逃げ続ける。アゼルリシア西部に近頃出現していたものと同種である、と知識量故勘づいてしまっていたパンドラは、この怪物を相手に単独で撃破を果たした『アングラウス』とは如何なる存在なのか、戦慄しながらも走り続ける。

「っ、何かくる!」

そう叫ぶシャルティアが空を見上げると、無数の鋭く光るナニカが飛来。

「反転しますよ! 上手くヤツに擦り付けます!」

「は、はあ?! ああもう、どうにでもなれえ!」

一瞬驚いたシャルティアだが、自身の頭の出来を理解している以

上、パンドラの指示に従うのが賢明と判断。全速力で反転し、鋭い音と共に地面に突き刺さる数多のナニカから逃げ、同時にブラキディオスの剛腕の隙間を掻い潜るべく、突撃していく。

そして、先んじて疾駆するパンドラが不定形異形種へと姿を変え、その隙間を掻い潜つたのを目の当たりにしたシャルティアは、自身もスキルを発動し非実体化。結果、ブラキディオスは何事かと驚愕と共に足を止め、続けて飛来したナニカが黒曜甲へと突き刺さり、炸裂。「ギシュオツ!?!」

驚き、怯んだ碎竜が見上げた先には、鋭利な鱗に身を包む飛竜の姿。「キュルオオオオオオオオツ!!!」

『千刃竜』セルレギオスの咆哮が響き渡り、双方が敵対者を入れ替え、激突を開始。

その戦闘音をBGMに、熔山帯の奥へと逃げ込むこととなった二人は戦闘から遠ざかるべく、ひたすらに足を動かす。レベル100異形種、そしてユグドラシル装備のお陰で耐性面が充実している二人は、アペリオンの精鋭たちの命を奪った大地の奥地へと、限りなく無事に近い状態で踏み入る事に成功したのだ。

「あー、死ぬかと思いましたが……………」

「も、モモンガ様の為とはいえ、これは、辛いで、ありんすえ……………」
肩で息をするシャルティアと、共にへたり込むパンドラは、静かに周囲を目視で探る。

「……………これは」

その中で、シャルティアの知覚が『それ』を捉えた。

「パンドラ、ここの奥に何か……………」

「む?では、少々……………つと、ありましたね」

パンドラが姿を変え、スキルによる探査を行い存在を確認してから、その場所を丁寧に破壊し、奥に眠る物を回収するべく作業に移る。同地域のモンスターに不要な刺激を与えぬよう、慎重に慎重を重ねた繊細な作業の果てに発掘されたのは、美しい水晶にも似た謎の鉱物。それを知覚していたシャルティアは、直に見える秘められた生命力の強さに目を剥き、無意識に溢れ出した涎を飲み込んでいた。

23―襲撃者

謎の結晶を調べていた二人は、ふと接近する気配に気づいた。

「隠れますよ」

「ええ」

即座に声を潜め、隠密魔法を行使。身を隠し、接近する者を待ち構え……………絶句。

「グルルル……………」

何かに勘づいているのか、警戒と共に唸る青炎纏う龍。その身の輝きが、秘めた力を雄弁に示す。

(絶ツツツ対ヤバいでありんすよね、アレ)

(あの光、ママ・タロトに似てますね……………歴戦王、という事でしょうか)

熔山の王妃は不機嫌そうに喉を鳴らし、蒼炎を消し去ると共に、屈強な前足で岩盤を破碎。

この地を形作るに至った巨大龍の死後、残された生命エネルギーの残滓が宿る特殊な燃石炭である『龍脈炭』を喰らう。炎龍たちの主な食糧である燃石炭であると同時に、炎妃が生まれ育った大陸南方で、彼女が歴戦王と呼ばれる精強な存在に至る手助けとなった莫大なエネルギーを秘めるモノでもあるそれを噛み砕き、飲み込む。

(え、アレ食べれるの?!)

(いやあ、あのモンスターは食性が特殊なだけかと……………)

と、二人が揃って、宝玉の如く輝く牙を有する『炎妃龍』歴戦王ナ・テスカトリを観察し続けてみれば、食事を終えたらしい彼女は身を翻し、空へと舞い上がる。姿を変えたパンドラが高性能な索敵スキルを用いてその動向をギリギリまで追い続け、探知できなくなり次第、急ぎ食事場へと駆けていく。

「パ、パンドラ?!」

「あれだけのモンスターがわざわざ食すとなれば、相応の物である筈……………ビンゴー!」

鑑定を行ったパンドラは、その結晶が秘めた性質に、静かに歓喜を

見せる。

『龍脈炭』ですか……………燃烧時の熱量が凄まじいですね。これを確保できれば……………」

彼らの不幸があるとすれば、これの原型である『燃石炭』を発見できなかつた事だろう。

というのも、火山という環境に適応したモンスターは強力な種ばかりであり、凶暴性も高いものが多くを占めている。現状、この灼熱環境もあり交戦経験等が絶望的に足りておらず、対処しようにも相手の攻撃属性、弱点属性や攻撃手段など、情報が無さ過ぎる故、迎撃という手段を選ぶリスクが非常に高いのだ。

強いて言えば、ブラキディオスなら空から魔法による波状攻撃で撃破できるが……………空の脅威への警戒からわかる様に、その選択を取ることは難しい。乱戦となつた場合、空から狙われ、叩き落とされないとともに限らないからだ。《飛行》^{フライ}の魔法では、飛翔能力に長けた飛竜を相手にするには、機動力が足りない。その為、こういった場所で無ければ、満足な調査もままならない。

「幾らか確保しましょう。取り過ぎれば、あの龍に気付かれてしまうので、程々に」

「了解しました。アレと敵対は御免願いんす」

「いや、本当に。青い炎の性質は不明ですが、間違いなく難敵ですからね」

そう肩を竦め——視界の端を舞う、暖色のナニカに気付く。

「これは……………ッ?!」

警戒した時には、既に手遅れ。

炎国の王妃は、索敵範囲外からこちらを睥睨している。

「グルルル……………ルアオアアアアアアアッ!!!」

鋭利な牙は、それ自体が発火石に近い性質を併せ持つ。その打ち合わせが火花を起こし、大気中を舞う微細な、極めて高い発火性を有する塵粉に着火。それが瞬時に二人の居る領域まで、まるで見せつけるかのように激烈な爆破を連鎖的に引き起こし迫るのだ。小さくしか見えない蒼炎から、猛烈な速度で迫る爆発というのは、視覚的インパ

クトも劇的だ。

「《転移門^{ゲート}》ッ！パンドラ、逃げるでありんすッ！」

「ええー流石にこれは無理ですねッ！」

出来得る限りの龍脈炭を抱え、即座にゲートに飛び込む。

その結果、精々餌場から追い払う程度のもりであつた炎妃は拍子抜けし、つまらなそうに鼻を鳴らしたかと思えば、貴翼を広げ番と共に住まう深部へと飛翔。本来ならば、こことは異なる場所まで追いつて、適当なモンスターの手をさせるなり、灼熱環境でよく育つ植物なりを手にすることが出来たのだが……如何せん、転移魔法という存在に対し、彼女の認識が甘かったと言わざるを得まい。

そして、そういった魔法を完全に無効化できる存在は、『禁忌』の存在以外居ない。

「あー、死ぬかと思つた……結局、収穫はこれだけでありんすか」「ですがまあ、アベリオンの方で大まかな地図は購入してあります。これをもとに、次は別口からのアプローチを試みるなり、直接ではなく魔法を用いて遠隔で探査するなり、手段を選べますよ。少なくとも、東部から馬鹿正直に溶岩地帯に踏み入るのは、悪手中の悪手と判りましたし」

炎妃に狙われた経験以前に、獄狼竜と碎竜、千刃竜の戦闘に巻き込まれた事が響いたらしい。

幸いなことに、アベリオン聖獣連合の過去の調査をもとにした大まかな地図で、既に複数の探索経路を考案していた事もあり、『また次回』という形で、今日の調査は切り上げる事に。肉体的疲労の抑制は出来ても、精神的疲労はどうにもならず、緊張が過ぎる現状で再び潜り込めば、何かしらのミスを起こすことも予想できる。

その為、探索については一度帰還した場合、その日の残りは休息に当てるよう、モモンガに厳命されているのだ。事実、今回の探索で、ローブルの危険性を身を以て理解した二人は、わざわざそれを無視しようなどと、到底思えない。

「デミウルゴス様に報告してから、お互い休憩しましょう」

「そう、でありんすね……ああ、早くお風呂でさっぱりしたいであり

んす」

二人とも、冷や汗で非常に気持ち悪いことになっており、パンドラも無言で同意を示した。

*

帝国東部の迎撃拠点建設が進む中、同時に襲撃の頻度も増加を始めていた。

それと並行して、王国辺境の大都市エ・ランテルは、一つの災厄との対峙を強いられていた。

「女子供が先だ！急いで逃がすんだ！」

「だ、ダメです！城門もこれ以上は！」

「ああ、クソッ！お前ら、死んでも足止めする気でいくぞー！」

「お前たちは避難を優先しろ！こんな時くらい、老いぼれにも格好つけさせろよ」

城門が粉碎される轟音を耳にし、冒険者たちが覚悟を決める。

地獄絵図の中、幸か不幸か、情報交換に出向いていたデミウルゴスが、気付かない訳がない。

「これは……………」

「恐暴竜……………カツツエ平野のアンデッドを食い荒らしていたモンスターが、何故今更……………」

都市長のパナソレイが呻くように零しながら、しかし鋭く目を細め、事態をつぶさに観察。

「いや、あれはおかしいですな」

「そうなのですか？」

暴虐の限りを尽くす獣竜だが、その生態を知る者からしてみれば、違和感のある姿でもある。

「暴食の権化であるあの竜が、一切を喰らっていない。ただ破壊するだけ、なのです」

「……………家屋も喰らう、とは記載されていませんでしたが」

「ええ、精々生物やその亡骸、アンデッド程度です……………が、獲物が居るのに、狙わないのです」

獲物とは、住民のこと。事実、人間であろうと容赦なく貪り喰らう

怪物が、それを狙うことなく暴れ狂っているのだ。偶然、避難ルートと移動ルートが重なってしまったっていると見抜いたパナソレイは文官にそのことを報告、避難ルートを変えるよう指示させるべく、そのまま走らせる。

「わざわざ、アンデッド多発地帯という餌場を捨てるとなれば……………」
「……………逃げている?」

そう、逃げているのだ。少しでも遠くへと……………わざわざトブの大森林に踏み入る事を選ばず、だだっ広いだけの西に進む理由は、それ以外あるまい。そこで疑問として浮かぶのは、パナソレイたちが知る『恐暴竜』イビルジョーの強さ。古龍種に次ぐ、或いは匹敵すると目される程の存在が、ここまでなりふり構わず逃げ惑う程の脅威とは何か……………当然、その疑問に対する回答は用意されている。

「帝国の災厄に伴い、古龍でも近づいている、と考えるべきですかな」
間抜けに見せる為の風貌からは想像もつかない、冷静な声と結論。

「古龍……………」
「それも、鋼龍より更に上位の。そうでなければ、あれ程までの振る舞いは想像できません」

その判断は正しい。正しいと、情報が少ないデミウルゴスですら納得できてしまう。

「確か、電気属性に弱いとのことでしたが……………
《メッセージ伝言》」

この街に愛着がある、などということとは、欠片も無い。だが、この街を喪う事となれば、彼らの貴重な最寄りの情報源の喪失に加え、モンガの信頼を損なう可能性も出てくる。決して主を侮る訳ではないが、最低でも街の外まで撃退。可能ならば、討伐しておきたいというのが、本音であろう。

「パンドラ、シャルティア、緊急事態です。至急、エ・ランテルに」
それだけ簡潔に告げ、竜王国へと出向中の二人への連絡を切り上げる。

「ではパナソレイ殿、私はこれで」

「どうなさるおつもりかな?」

「なに、私の役職は、ナザリックの守護者です」

静かに眼鏡を直し、神妙な表情で、しかし自慢げに口端を吊り上げる。

「防衛戦一つ果たせなくては、名折れというものでしょう？」

スキル『ゲヘナの炎』を発動すると共に、悪魔系モンスターを無数に召喚。魔法攻撃に長けた者を優先的に召喚しつつ、死亡時にデバフを撒き散らすタイプを攪乱兼肉壁として前線に放つ。それと並行して、貴重な回数制限スキルを惜しみなく発動。忠実な配下である魔将を召喚する。

「まずは足止め、移動経路の変更です。貴方たちは避難誘導の補助を」
「宜しいのですか？」

暗に、戦力とならないでいいのか、という異議。だが、デミウルゴスは理解している。

「貴方たちでは、足止めすらままならないでしょう？」

あのモンスターが、魔将たちでは太刀打ちできない存在であると。

「……………承知しました」

「足止めならば、家屋を通路に向け倒壊させるといいでしょう」

思わぬ言葉を訝しめば、パナソレイは街を静かに睨む。

「トブの大森林と近いのですからな。万一の侵入に備え、家屋の建築に際しては、それらを大通りに向けて倒せば、そのままバリケードの代用と出来るよう、徹底しております。空からの襲撃に無力、という欠点はございますがな」

拠点とは、無傷で守り切るべきもの。その認識が非常に強いデミウルゴスが瞠目する中、切れ者都市長は荒廃していく都市を見下ろし、鋭い目でこのままで起こり得る事態を思索。都市中枢への突入は当然であるが、その先の最悪だけは回避したい。

「……………不味いですな」

「不味い、ですか」

「都市中枢部には、有事に備えた大型食糧庫もあります」

その生態について、人類が有する断片的な情報を持つデミウルゴスは、それだけで察した。

「……………食い荒らされますね」

「ええ、食い荒らされますな。そうなつては、非常に不味い」

そう、不味いのだ。幸い、既に都市を諦める前提の避難ではあるが、戦闘を行うならば食糧庫の存在が大きく響く。消耗の激しい恐暴竜に対し、豊富な食糧のある場所で戦うなど、自殺行為もいとところだ。何より、食糧庫の防衛を果たさねば、万一撃退できたところで、その後を凌ぐことが難しくなる。

「そうなるか……ッ!?!」

そこで、空から紅が飛翔。恐暴竜の背へと、鋭槍を突き立てた。

「ギユアアアアツ?!」

「早速、仕留めにかかりんす!」

翼を広げるシャルティアの有する、獣竜種のようなモンスターに対する絶対のアドバンテージ。飛行能力持ち相手は分が悪いが、飛行できないモンスターが相手であるなら、その優位性を崩すことは困難。それを理解しているからこそ、紅の戦乙女^{ワルキューレ}は獰猛に笑み、スキル、魔法を総動員して攻撃を開始する。

「全く、シャルティアは」

苦笑を浮かべ、デミウルゴスは彼女の主軸スキルの補助の為にモンスターを動かす。彼女の目的は討伐へと傾いているようだが、それくらいで動いて貰う方がポテンシャルを余すことなく発揮できる、と考え、敢えてそれを訂正はしない。

「パンドラの所在は判りませんが……今はいいでしよう」

知患者の動向を探るより、目先の事態へと意識を傾ける。

「最善としては討伐、次善は撃退。更に言えば、都市中枢から遠いところがベスト……」

「いやはや、申し訳ない限りですな」

パナソレイの謝辞に、デミウルゴスは微かな笑みで応じる。

「なに、我々の手を伸ばしやすい街を失いたくない、というだけですよ」

それに加えて、少しでも経験を重ねたかったこともある。

現地にあり、彼らに無い最たるものが経験であり、この先の脅威に対処していくうえで、欠かす事の出来ないものだ。そして、防衛戦の

経験……シエンガオレンを相手に経験はしているものの、あれは特殊な事例であり、参考に出来るか怪しい。だからこそ、この機会を逃すまいと動いたのだ。

「それに、まだ完遂できると断言できませんので」

絶対の自信を持ってぬデミウルゴスの不安を煽るかのように、恐暴竜の怒号が轟いた。

24―覇種の力

竜王国——輝きの異なる武具を纏うパンドラ的手中には、それをも凌駕する輝きを放つ杖。

「あまのまひとつ様の武具を用いて、漸くですか……………」

紅の甲殻で形作られたソレをイビルアイに渡し、同時にパンドラが大きく肩を落とす。

あくまで、ユグドラシルの法則に強く縛られる彼らでは、加工一つにも限界があるのだ。

「あのお方が居れば……………いえ、無いものねだりをしている場合ではありませんか」

「ああ。だが、この杖……………恐ろしいくらいの力を感じるな」

イビルアイの握る杖、弩岩竜の素材を加工して生み出したソレは、青紫のオーラの輝きを纏い、同時に尋常でない力を放っている。その凄まじさは神器級ゴッズを凌ぎ、ワールドに次ぐギルド級にも匹敵するであろう。

それを生産可能とする覇種の強大さもさることながら、それを容易く屠ったという滅尽龍の強大さもまた、頭痛のタネとなっている訳だが。根本のルールが異なる以上単純比較は出来ないものの、これもまたユグドラシルの法則、及びそれに近い法則の影響が強いが故の弊害か。

「それでは、皆様準備のほどは」

「問題ありません」

新造された紅の大剣を背負うラキユースが答え、同じ甲殻を纏う剛鎚ゴッズを手にガガーランが頷く。

「では、《転移門ゲート》でエ・ランテルに参りますよ」

あまのまひとつの八割では、フル神器級ゴッズ装備によるブースト込で漸く作成可能となる最高峰の武器……………覇種武器であるが、これでもまだ真価には至っていない。それを知るパンドラとしては卒倒したいところであるが、そうも言っていない為、平常運転を心掛ければ、彼女らと共に戦場へ。

「グルオオオオオオッ!!!」

「ぐ、このおッ!」

そこにあつたのは、赤黒い稲妻に纏わりつかれたシャルティアと、彼女が留まる空目掛け赤黒いガス状の攻撃を、瓦礫の投擲を行う恐暴竜の姿。その姿から、皆緊急事態の意味を即座に理解し、戦闘態勢に入る。イビルアイが赤い瞳でその背を鋭く睨めば、残る二人に素早く指示。

「私が背中の中傷を抉る。その隙を逃すなよ」

「ええ」

「おうよ!」

そして、低位悪魔の舞う空へと、イビルアイが飛ぶ。地上に目を凝らせば、無惨にも食い千切られた悪魔の亡骸や、龍殺しのガスに焼かれ死んだ悪魔の亡骸が転がっている。デバフを撒き散らす死亡時スキルを持つ個体ばかりであるが、その暴れ振りを見る限り、どの程度効果を発揮しているのか、イマイチ判断できない。

それもそのはず、怒り狂った『健啖の悪魔』は自らの筋肉の隆起により、古傷が開いてしまう。その性質上、当然猛烈な苦痛が生じる為、より一層凶暴性が増すのだ。自らより巨大なモンスターにすら襲い掛かる獰猛さと、アンデッドから竜までを貪り食う食性、それらを支える単純な強靱さに、更に怒り時の凶暴性が加わるからこそ、『恐暴竜』の討伐に対し、どの勢力も積極的なアクションを起こせなかったのだ。

「っ、イビルアイとやら!このバチバチはなんなんでありんす!?!」

そこで、シャルティアから疑問の叫び。

「龍殺しの後遺症だ。属性を宿す魔法の類は、一切使えなくなるぞ」

属性封じの力。それこそが、『竜』たちの用いる龍殺しの力の一端であり、危険性。こと厄介さで言えば、間違はなく最上位だろう。マジックキヤスターであれば、『魔法の矢』^{マジック・アロー}のような無属性攻撃魔法以外が実質封じられてしまうのだ。幸いなのは、この現象を引き起こせるだけの龍殺しを用いるモンスターは、目撃も稀有な種ばかりであることだろうか。

「暫くすれば自然回復する——《水晶の短剣》ッ！」

クリスタルダガー

と、筋肉の隆起に伴い押し広げられた、過去の戦闘による古傷へと、短剣を叩き込む。アース、即ち大地に類する属性、中でも水晶系に特化したイビルアイだが、そこで大いに役立つのが弩岩竜の力を宿す杖。弩岩竜の武器が有するのは、何処までもシンプルに高い物理性能であり、比較的物理寄りの性質である水晶系は恩恵も大きい。

「ギユアアアアッ!？」

鋭い水晶の短剣の一部が、見事古傷を抉る。威力が増幅されている事もあり、ダメージも相応。恐暴竜の注意が空へと向き、その隙にと、地上の実力者二人が一気に動いた。ラキユースが細くも強靱な足を狙うのに対し、ガガーランは彼女を信頼し、頭を狙う準備を進める。

「はあああああアッ!？」

豪快に振り抜かれた弩岩獄大剣【重オモサデ何ナシ断デモタツ】の一撃が、その巨大な

体軀を支える細い足を撃ち抜く。切断には至らないながら、分厚く強靱な外皮を切り裂き、その下の肉にまで傷を穿つことに成功。その切れ味に改めて驚くと共に、確かな手応えに表情を引き締め、続けてもう一度振り抜く。

「ギユアアアアアッ!?!グルアアアアアアアオッ!!！」

明確な痛みから、即座に足元のラキユースを危険な存在と判断し、そちらを喰らわんと鋭牙並ぶ大顎を開く下顎に突起という形で突き出した鋭牙の数々が迫るも、そこを見逃すベテランではない。

「待ってたぜえッ!？」

弩岩獄鎚【粉塵砕】による痛烈なアッパーが決まり、下顎の牙を粉碎し、脳を揺らす。

「ギユアアアアアッ!？」

「ついでだ、これも持っていけッ!魔法最強化、《水晶騎士槍》ッ!？」

マキシマイズマジック

クリスタルランス

強靱な水晶槍が深々と古傷を抉り、一際悲痛な咆哮。さしもの恐暴竜といえど、ただでさえ筋肉の隆起に伴い開かれた古傷を攻められてはひとたまりもなく、強靱な筋肉のお陰で致命傷には至らないものの、ダメージは絶大。ガガーランによる激烈なアッパーによる軽度の脳震盪、ラキユースの斬撃による足へのダメージも加わり、立ち続け

ることが出来なくなり、近隣の家屋を粉碎して転倒。

「今のうちに金級以下は避難誘導を進めろ！俺たちは逃げてきた道を塞ぐぞ！」

「え、援護はいいんですか？」

それを察知したイグヴアルジが怒号を飛ばす中、避難誘導中の鉄級冒険者から疑問。

「あそこに効果的な援護など出来やしねえんだ、邪魔しねえでやれる事やんだよ」

少しばかり拗らせているところはあるが、彼は自身の武器と前線で振られる武器の質の差を理解していた。彼らの武具……アダマントタイトですらないソレでは、恐暴竜の古傷をピンポイントで狙撃でもない限り、ダメージすら与えられないと。そして、自分たちが不用意に邪魔をすれば、避難に支障が出かねない、とも。

「……武器だけ、じゃねえんだよな」

非常に上質な武器の存在がより際立たせているが、三人の連携は見事の一言。上空のイビルアイと地上のラキユースが絶えず注意を引き、隙が出来次第ガガーランが頭部に重い一撃を叩き込み、徐々に徐々に行動力を奪っていく。無論、個々に危険が伴うが、この連携精度こそが、彼女たちがアダマントタイト級に数えられるだけの成果に繋がっているのだ。

転倒し、藻掻くイビルジョーの頭部目掛け炸裂する武技『超級連続攻撃』が吸い込まれるように直撃し続ける。獄錘による破壊の嵐が恐暴竜の牙を砕き、頭殻を割り、頑強な頭蓋に護られた脳を無茶苦茶に揺らす。それにより、転倒から復帰するどころか、強烈な脳震盪によりその場で伸びてしまう。

「……………ええ……………」

「見ての通り、奴の体を支えるのは二本の足だけだからな。上手く崩せば、隙を作ることが出来るんだ。とはいえ、やはりこれらの武器のお陰だろうな。魔法にしたって、位階そのものが上がったような気さえする程だ」

相性もあるにせよ、剛種を超える覇種の力を宿す武器の性能は、間

違いなく極上。事実、彼らの誇るナザリックにさえ、覇種武器を超える性能のモノはそうそう存在しない。現状、サンプルとなるものが弩岩竜の武器のみながら、これらを超える断言できる物理特化武器は存在しない程だ。

そして、この恐暴竜は安定した餌場を得てしまったが為、実質的な難易度は280ちよつと程度まで抑えられている……要は、経験が足りていないのだ。カツツエ平野の弱いアンデッドを数喰らう、という安定を選んでしまったために、栄養状態と併せて、今以上に至る事が出来無いのだ。

「しかし、これだけの武器があっても、尚健在とは……恐ろしいモンスターだ」

NPC指揮官と定義されていただけあり、デミウルゴスによる悪魔の用兵は見事の一言。総合力最強であり、且つ飛行能力というアドバンテージ込みながら、シャルティアひとりで進軍を抑え込ませていた事からも、それはよくわかる……が、言い換えればデバフを多量に盛りながら、足を止める以上のことは出来ていなかった。

だが、対モンスター戦の経験が豊富な三人が、更に強力な武具を纏ったことで、形勢は逆転。

『蒼の薔薇』が纏うのは、ナザリックの鍔鋼龍素材の在庫全てを注ぎ込んだ、鍔鉄色の鎧。それが内包する力は、激しい運動による消耗を抑制する『体術』、回避を補助する『回避距離UP』と、無傷の際攻撃力を底上げする『フルチャージ』……そして、近接戦士職である二人の場合、武器耐久値減少を抑制する『業物』が、遠距離職であるイビルアイの場合、MP消費を僅かに軽減する『反動軽減』が発動している。

どれも、防御能力は神器級ゴッズに並ぶし、スキルによる強化量も決して低くはない。弩岩竜武器の高い攻撃性能を更に引き上げた上、しっかりとした役割分けと連携で畳み掛けたのだ。デミウルゴスの召喚悪魔によるデバフも加わり、脳震盪のダメージが抜けた恐暴竜がその体と尻尾の筋力で強引に飛び起きる頃には、既に虫の息にまで追い込めていた。

「グオオ…………ツ」

命の危険を察知した恐暴竜は、そそくさと逃走を図る。ダメージの深刻さからか足を引き摺り、西ではなく北……………一時凌ぎが出来るだけの食糧がある、トブの大森林を目指す。その意図に気付いた者たちが急ぎ止めんと動く——より早く。

「なにっ!？」

一陣の雷光と共にその巨軀が宙を舞い、轟音と共に建物を粉碎し、大地へと叩きつけられる。

ペロロンチーノの姿を模倣し、空から退路を断つべく放った炎は空振りに終わり、綺麗に抉れ、焼け焦げた地面を更に熱するのみに終わる。スナイパー型らしく広大な索敵範囲を持つ筈の、ペロロンチーノのビルドですら捉えられなかった超高速の主は、その青い瞳で忌まわしき暴竜を睨む。

「キュアアアアアアッ!!」

「ギユアアアアッ!」

「な、なにっ!？」

「二体、何が——ッ!？」

続けて、数多の落雷。圧倒的強者の手で齎されたソレは、第九位階魔法《「コル・グレター・サンダー」万雷の撃滅》が可愛く見える超火力と共に雨霰と降り注ぎ、虫の息であった恐暴竜は瞬時に絶命。それを成し遂げた白き幻獣は、戦場の只中で静かに佇み、自らの領域の一端へと手を伸ばさんとした愚者の亡骸を見下ろす。

「……………おいおい、冗談じゃねえぞ」

ガガーラン、ラキユース、イビルアイは、一様に死を覚悟した。

「……………ギユルウ」

カルマ値マイナスの

静かに邪悪な吸血鬼を、続けて遠方の極悪の悪魔を睨んだかと思えば、しかし白銀の幻獣は戦う意思を持たないのか、雷鳴と共に姿を消す。瞬間移動、などではなく、何処までも純粹に発達した脚力のみでの、超高速移動……………レベル100クラスでさえ、臍気にすら知覚できない神速を発揮した存在が立ち去ってから、その場の者たちが警戒を解けたのは、数分後のこと。

「ぶっ、はあああああッ!? なんなんだ、ありやあ?!」

「…………一度だけ、インベリア周辺で見たことがある。『幻獣』キリンで間違いないだろうな」

あそこまで強力ではなかったが、と付け加えるイビルアイだが、細部の違いには触れない。

(目の色もそうだが、細部が大分違っていた…………単なる個体差、ではないだろうな)

ツアインドルクスに聞かされていない、強大極まりない存在。イビルアイも目撃した経験のある古龍であるが、格があまりにも違う。纏う空気と言えば、滅尽龍にこそ劣れど、覇種と同等、あるいはそれ以上の力を秘めている、と即答できてしまう程。風貌に多少の差異はあれ、纏う神々しさはこちらの方が遥かに上だ。

「…………敵視されて、いんしたねえ」

敵視、ではなく警戒なのだが、如何せん圧が強すぎたため、綺麗に誤解されている。

純白の幻獣もまた、この北西部の辺境に集う『竜王』を警戒する存在であり、『始原の魔法』というワールドアイテム級の力を、不用意に振われぬよう監視する者の一角…………パンドラを警戒しないのは、その本質が中立であるからか。

「…………恐暴竜を滅ぼす為に? それとも、北上させない為でしょうか?」

敵意、と誤解しながらも、しかしデミウルゴスは冷静に思考を巡らせる。

北、と口にした彼は、静かに北方——トブの大森林と、アゼルリシア山脈を睨んだ。

25―変化の一手

エ・ランテルが復興に取り掛かる中。

「――武器の封印？それはまた何故……………」

竜王国での『依頼』の品のやり取りを始めんとした、丁度その時だった。

「あれは強すぎます。使い続ければ、武器ありきの人間になりかねません」

そう、強すぎる…………分不相応、と感じる程に、武器が強いのだ。

あくまで攻撃性能に特化しているものの、その一点だけでも、過剰な程に。

「それでは、そちらの意見を尊重しましょう。ですが、封印の件は竜王国とも話し合わなければ」

「あくまで、女王陛下の厚意で借り受けただけだからな。とはいえ、あちらも理解してくれる筈だ」

イビルアイが言い終わると共に、タイミングを見計らい、ユリ・アルファが入室。

「失礼します。パナソレイ都市長様より、この度の防衛戦の謝礼についてです」

曰く、暫くは復興に取り掛かる事となる為、金銭的の支払いは待つて欲しいということ。凶暴竜の亡骸の処遇は、蒼の薔薇とナザリツク両者に任せる、という判断とのが告げられる。後者を告げられるや否や、ラクキュースたちは互いに顔を見合わせ、ある申し出を行った。

*

「うあ…………と、とんでもないことになっていたようだな。ご苦労だった、パンドラよ」

「お褒めに預かり、光栄でございますッ…………そちらも、苦労されていたようで」

迎撃拠点が完成して、早数日。

エ・ランテルの襲撃事件からは、更に長い時間が経ったバハルス帝国東部の城塞と、来たる襲撃へと備えた者たちが拠点とするそこを訪

れているのは、パンドラズ・アクター。これまでの出来事を簡潔に纏めた報告書と共に赴いた彼と異なり、モモンガの纏う空気は渋い。

「やはり、武具の問題か？」

「恐らくは。私たちに無い『経験』と『知識』を正しく運用できるので、相応の武具があれば討伐効率も上がりましょう。とはいえ、デミウルゴス様が大きく関与され、『蒼の薔薇』が規格外品を用いた防衛戦や、我々の持てる戦力を総動員したこれまでが例外に近いのか」と

原因は、これまでの戦績。あくまで拠点作成が中心であったこと、属性攻撃の要であるモモンガも知識ばかりで経験を伴わない為、多種多様なモンスターが入り乱れた混戦との相性が悪すぎたこともある。討伐より撃退に重きを置いていた事も重なり、討伐成功例はかなり少ない。

「ですが、《ブリザベーション保存》を使って頂いていた事もあり、加工自体にはそう手間もかからないでしょう。武器を最優先とすれば、防衛の難度も下がるでしょうし、それで討伐数を地道に増やしていければ、戦力の増強にも繋がるかと」

「それが最善だろうな。その方向で頼もう」

「ハッ！」

『鎌鼬れんゆう』オサイズチ、『青熊獣』アオアシラ、『毒狗竜』ドスフロギイのような比較的小型のモンスターたちから、れっきとした大型モンスターでも『毒妖鳥』プケプケや『毒怪鳥』ゲリヨス、『水獣』ロアルドロス、『傘鳥』アケノシルムのような比較的弱い部類のモンスターが討伐され、亡骸を保存されている。

それらのリストを受け取ったかと思えば、パンドラは新たに幾つかをテーブルに置く。

「随分と武骨な………これらは一体？」

パンドラは紅の武骨な塊を開く。すると、それは砲と見紛う姿に変わる。

「竜王国よりお借りしました、弩岩竜の素材を用いた武器でございます」

『彼ら』の世界の呼称を用いるなら『ヘビィボウガン』が正しいのだが、ユグドラシルの者には銃の一種とも見える。名を『弩岩獄重弩ネライアツクウテ』というこの武器の作成は、ある意味一つの転換点となり得るだろう。なにせ、この世界で初めての、弓以外の物理遠距離攻撃手段なのだから。

「こちらですが、ユグドラシルの弾丸が使いません」

「……………いや、それでどう戦うんだ？」

「尤もな疑問であるが、パンドラはその回答も用意している。

「森の木の实や、アウラ様が育てた魚を用います」

「はい?」

「いえ、実はですね?」

パンドラが取り出したのは、螺旋状の溝を持つ『ツラヌキの实』と、爆発成分を内包した特殊な『ハレツアロワナ』の鱗、それと中身の無い文字通りの『カラの实』の二つの計四つ。それぞれをカラの実に詰め、少しばかり手を加えると、驚くべきことに綺麗に形が変わり、ツラヌキの实を用いた物に至っては、弾丸型となったそれが三つも出来上がっているのだ。

「はい!」

「こうなるんですよ。しかもこれ、ぴったりとこの銃と合っています」

と、パンドラが見せる通り、完成した『LV1貫通弾』は弩岩獄重弩の規格と合致し、すんなり装填することが出来てしまった。弾丸を作成するその過程も然ることながら、一発しか作成していない筈が三発に増える、などの現象も併さりモモンガに抑制が発動。少しして無事平静となつてから、可能な限り冷静に勤め、パンドラに問うていく。

「ええつと、これ、適切な職業持ちならば使えるのか?」

「はい。シズ様、アウラ様に試して頂いたところ、問題無く」

これは竜王国から借りている為、使えませんが、とパンドラは軽く笑い、別のものを取り出す。

「こちらは、黒狼鳥の残り素材を用いたモノとなりますね。シズ様に運用試験をしていただく予定となっております。とはいえ、弾薬については未知が多く、手探りの面が強くなってしまいかと思います」

取り出したのは、『カホウ【狼】』。イヤンガルルガの素材を用いた重弩だ。

「……………あまり言いたくは無いが、やはり不安は拭えんな」

部下たちの思いにこそ、理解を示すモモンガ。だが、NPCたち、中でもこの世界基準では戦力としても非常に厳しいプレアデスの中で、最も低レベルのシズということもあり、武器を渡し戦闘力の補強を図るのは判るが、それでもレベル制度の概念が強く残るモモンガとしては、難色を示さざるを得ない。装備の質で多少のレベル差は覆せても、多少以上のレベル差はどうにもならないのだから。

「私も同じです。が、かといって前面に出れぬ仕事ばかり回し続ける訳にもいかないのです。彼女たちの精神衛生を考慮すれば、尚更……………これはデミウルゴス様も同意見ですな」

「判つてはいるのだが……………」

そつと額に手を当て、嘆息。悪く言えば社畜思考なNPCたちは、それこそ自らの命を投げうってでもナザリックに貢献したい、という思想の持ち主であり、これまで裏方仕事以外回せていないことに、やはり少なからず不満やストレスが溜まっている。そして、与えられた役割にそのような悪感情を抱く自身への嫌悪、と悪循環に至ってしまったのだ。非常に難しい問題である。

「まあ、仕方ないか……………では、こちらに保管しているモンスターたちの加工は」

「それならツ―持ち出せる物は持ち出しているので大丈夫です！」

「そ、そうか」

準備の良さに驚くやら、いきなりテンションが上がったパンドラに呆れるやら。

「いやあ、モンスターの武具なんですけど、形がある程度決まっているらしく。こちらから手を加えるのは難しいのですが、その分秀逸なデザインの数々を目の当たりにできるので、どうしてもテンションが上がってしまうのですよね……………」

「え、マジで？」

「マジです。これらも、加工していくうちに勝手にこの形になって

いったんですよね」

さりと口にしたパンドラは立ち上がり、帽子をかぶり直す。

「では、保管場所まで案内を——ッ！」

腰を上げたモモンガは、不意に響いた警報の鐘に反応し、椅子を蹴倒す。

「このタイミングでか!？」

「襲撃という事ですか……!？」

パンドラと共に迎撃地点へと向かえば、気光の奔流が門を貫く瞬間を目の当たりにすることに。

『『金獅子』か!』

「間違いありません。モモンガ様は」

「いや、私が前に出る。電気耐性は私が一番高いからな」

アルベドが下がるよう進言するも聞かず、モモンガは空から超攻撃的生物の気を引くべく、即座に飛翔。金色に染まった鬣を振り乱し、激情のままに暴れ狂うその牙獣の異変に気付くと共に、即座に魔法攻撃へと移行。

「魔法最強化、《マキシマイズマジック現断》ッ！」

単発最高威力の魔法を最強化し放てば、流石の古龍級生物はそれを感知、回避。

「《レアーシング・アイシクル穿つ氷弾》ッ！」

その着地点へと放たれる冷氣属性魔法の直撃が、金獅子に浅くない傷を穿つ。

「ギュアオオオオオオオッ!!」

それに激昂し、鬣が逆立つと共に咆哮。その変化以前から体毛が金色となっていた事と併せて、モモンガはその状態が明らかに異常であると気付く。よりよく目を凝らせば、その尻尾に損傷、欠落がある事に気が付き、不確定要素が増えたことに舌打ちしながら叫ぶ。

「明らかに異常な状態だ! アルベド、セバスは前に出て侵攻阻害に専念! コキュートス、俺が隙を作るから、そこに冷氣攻撃を叩き込め! 他の奴らは、後続への警戒と撤退支援の準備だ! 出てきたら確実に死ぬと思え!」

鋭く叫び、大地を割り砕いた塊を持ち上げる『金獅子』……………生命維持の為のリミッターが壊れてしまった個体『激昂したラージヤン』とでも呼ぶべき災禍は、その巨塊をモモンガ目掛け投擲。視界そのものを塞ぐそれを忌々しく思うと共に、ラージヤン自身の姿が見えない現状に危機感を抱いたモモンガは、即座に一つの手を打つ。

「魔法三重遅延化、《魔法の矢》」

静かに告げ、三つの魔法を遅延発動設定にしたかと思えば、続けて魔法により転移。

巨大な岩塊が魔法により破碎されると共に、その中心を目掛け気光ブレスが放たれ、モモンガが居た場所を貫通。しかし、そこに既に彼の姿は無く、とつくにラージヤンの真上へと移動している。知恵が回るのか、と警戒レベルを跳ね上げた彼は、早急に仕留めるべく、MPを惜しむことなく攻撃する。

「魔法三重最強化、《現断》ッ！」

真上からの三連斬撃が、綺麗に背中中に傷を穿つ。極めて高い攻撃性と攻撃能力と比べ、その防御能力は高くないラージヤンには痛手であり、鮮血が噴き出し、その傷の深さを物語る。大きく怯んだそこに、更にコキュートスから氷柱の攻撃が放たれ、更なる傷となる。激昂と共に気光ブレスを放つも、防衛に専念しているアルベドのスキル防御で防がれ、空のモモンガからの攻撃を許してしまう。

「ギューアアアアッ!？」

「タイプとしては式式炎雷さんのビルドが近いんだろうが……………あの
人よりマシだな」

紙装甲の高速高火力アタッカーを思い出し、しかし彼の忍者ムーヴを知るモモンガは、金獅子をそう評する……………この世界に存在する『魔法』の存在は、適切に運用出来れば、超攻撃的生物をここまで一方的に抑え込むことも、不可能ではないという事か。

それとも、長期的な戦闘による肉体的、精神的疲労とダメージの累積がプラスに働いたのか。

(追い詰めている、ように思えなくも無いが……………ッ!?)

「ぬおっ!? 《光輝緑の体》ッ！」

飛来する岩塊による物理殴打ダメージを魔法効果で強引に無効化し、続く気光を回避。防御面が比較的脆弱であることに違いは無いが、反比例するように攻撃能力は極めて高い。殴打ダメージに弱いモモンガや、種族特性から防御能力が低めのコキュートスでは、攻撃されないよう立ち回るのが最善手なのだ。

結果、余裕に見えて、モモンガはコキュートスに接近させないよう攻撃を続け、アルベドが容易に防ぐことが出来る遠距離攻撃以外をさせないよう引き付ける。アルベドとセバスが加わらないのは、連日の襲撃で相手の手の内が読めつつあることに加え、ラージヤンの攻撃力の高さから、あまり直撃リスクと隣り合わせの環境に置きたくない、ということもあった。

「チィ……………ッ！」

そして、如何に身を護る術に乏しいとはいえ、生命力は脅威の一言。不用意に近付けば、如何にリ・エステイーゼ近郊のモンスターに比べ生育具合が良くないとはいえ、充分に発達した膂力の餌食となるのは、日の目を見るよりも明らか。そしてそれは現在、肉体のリミッターが外れたことで、更に凶悪に変貌を遂げている。

「本当に、神経をすり減らすような戦いだな……………！」

アンデッドの、異形の精神でなければ、耐えられなかったかもしれない極度の緊張。空中に居る分危険は少ないとはいえ、地上に引きずり降ろされれば、最悪その剛腕により、成す術もなく髑髏殺しにされるだろう。殴打に弱いスケルトンである分、尚更だ。

「ぬあっ!？」

そして、その危惧を実現するべく、ラージヤンは強靱な脚力で跳躍。回避行動も間に合わない、かと思われたその巨軀の肉薄へと、二つの攻撃が突き刺さる。一方は灼熱の炎が形を成した矢であり、もう一方は高質で無機質な弾丸。

「間に合いましたね」

「これ、反応が強い……………！」

バードマンの姿へと変貌を遂げたパンドラの隣には、地上にしゃがみ込んだ状態で重弩を構えるシズ・デルタの姿。大きく踏ん張るその

姿から、反動の強さがよくわかる。とはいえ、これは知識不足から来るものであり、しっかりと準備が出来れば、幾らでも軽減は出来る。

「ギユオオオ………ッ！」

「私は空に移動します。貴女も気を付けて」

「……………わかった」

立ち上がったシズは、静かに遥か格上の金獅子を睨む。

新たなアタツカーの参加と共に、対金獅子の防衛戦は次の段階へと進んでいく。

26―強いられた変化

弾丸を切り替えてから、シズ・デルタを襲う反動は一気に軽くなった。

(弾によって違う? 炸薬は無かったはずだけど………わからない)

カホウ【狼】を抱え、シズは迎撃拠点外周部を駆ける。

「ッ!」

そして、隙を見つけ次第、反動の軽い通常弾を装填した重弩を構え、撃つ。

『アサシン』職のスキルが注意を逸らしたところで、『スナイパー』職の補正で素早く狙いを定め、撃つ。反動が軽い事もあり安定した弾道と共に、放たれた弾丸はラージャンの傷口へと吸い込まれ、焼け爛れた傷を広げ肉を抉る。

「ギユアアアアアッ?!」

「ふっ!」

「リアリテイ・スラッシュ現断ッ!」

怯めば、そこに空から畳み掛けられる。シズに意識を向けさせまい、という一念からの過剰火力による飽和攻撃が金獅子の注意を引き、再びシズの安全を確保。素早く物陰へと隠れたシズの次の行動は、カラの実へと毒々しい紫色の茸を詰める作業。『毒テングダケ』との調合により完成した『LV1毒弾』を装填しようと、通常弾の時以上に重いレバーを引く。

ほっと一息吐いた彼女は、物陰から静かに機を窺い………隙を見つけると共に、飛び出す。

「――ッ」

オートマトン自動人形の冷静な思考が、照準を傷口へと合わせる。そこから反動を考慮した修正を加え、引き金を引けば、強烈な反動と共に弾丸が放たれる。金獅子の無防備な背中へと突き刺さった弾丸は、肉を抉りながら毒素を放ち、その身を毒で侵していく。

が、金獅子はその屈強な四肢を使い、強引にシズ・デルタを目掛け跳躍。

「ツ!?シズ、逃げろお——ツ!!!」

モモンガが、パンドラが、コキュートスが道を阻もうと遠距離攻撃を放つも、金獅子は足を止めない。その剛腕に、その機械の体躯が碎かれるか——絶望、悔恨、憤怒に包まれた外野たちが気付かない中、シズ一人は自身の体躯に奔る紅い雷に気付き、明確な驚愕と恐怖を抱いた。

『あら、あの悪趣味な肉人形とは違うのね。まあいいわ、少しばかり『実験』させて貰うわよ』

未知の存在のその声が、力が、自動人形の体躯に、その更なる根底に干渉する。

ユグドラシルという異邦の存在に、『彼女たち』の法則が何処まで馴染むのか、試す為に。

「——あ」

その思考に紅雷が奔れば、この場を切り抜ける最善手が、予想だにしない形で導き出された。

「っ、ハッ！」

振り抜かれた拳を踏み、大きくラージヤンの後方に抜ける形で跳躍。

「狙い、よし………！」

そして、空中で発射。三連発の毒弾が背中へと叩き込まれ、金獅子から絶叫が響く。着地と共に振り返ったシズは続けて、通常弾へと弾丸を切り替え、素早く撃ち込んでいく。他ならぬシズ自身が驚くほどにスムーズな所作であるが、当然金獅子とて怯んでいるだけではなく、彼女を狙い突撃もする。

(これで………ううん、これしか、ない!)

迫る剛拳に対し、錐揉み回転と共に飛び込む形で回避。武器を畳んだシズは地面を転がり、金獅子から大きく距離を置くと共に、紅雷により叩き込まれた知識を実践するべく、最低限のチェックもまだの弾丸片手に、この世界で生まれ育った金獅子へと跳ぶ。未知の体術により攻撃をやり過ぎされた事で、動揺する金獅子の尻を踏み跳んだシズは、その衝撃を利用し重弩の展開と素早い装填を済ませ、金獅子の顔

魔法が、業火が叩き込まれる中、シズも的確な援護射撃を行う。スナイパー職の恩恵を、大いに受けた精密射撃の数々を、しっかりと傷へと叩き込んでいるが、やはり経験不足からか、連携としてはやや拙いところが目立つ。それを、モモンガの経験とパンドラの頭脳が補うことで、その火力と併せ強引に金獅子を抑え込んでいる。

ラージャン自身もかなり消耗しているが、まだ絶命には至らない。その生命力は伊達ではない。

「しづといな……………」

生物としてあるべきリミッターが壊れた金獅子は、絶命の瞬間まで暴れ狂うのみ。弱みすら見せないのは、最早後がないと察知しているからか、迫りつつある絶対者への本能的な恐怖を和らげる為か。

炎は消え去る刹那が最も眩いというが、その言葉を実感させんばかりの暴れ様だ。

「こいつ……………ッ！」

シズはカホウを畳み、小脇に抱え全力で逃げる。気光ブレスを放つエネルギーも枯渇したのか、ただただ暴れ狂う狂獣であるが、その膂力に巻き込まれれば、現地人以下の耐久力しかない彼女では粉々確定。強烈な一撃に対する対処は出来ても、嵐の如き連撃に飛び込むのは自殺行為。

半端に距離を詰めていた事が仇になっているが、そこにアルベドがすかさず割り込む。

「やらせるものですかッ！」

【真なる無^{ギンマンガガブ}】の破壊不可属性を利用した防御と、その筋力を組み合わせた防御でも尚、その体はどんどん後退させられていく。が、言い換えれば攻撃は一切受けておらず、また武器の性質をも駆使することで、暴風雨の如き乱打を完全に凌いでいる。そして、如何にリミッターが外れていようと、体力には限界があり、その底が見え始める。「くっ、たばれええええええッ!!」

その僅かな動作の鈍りを見逃さず、横つ面を鉄拳で殴打。その衝撃で角が折れ砕け、後足で踏ん張っていただけの体躯が綺麗に転がっていけば、立ち上がる事も難しいその体躯に、一斉に攻撃が集中。モモ

ンガの魔法、パンドラの業火、コキュートスの斬撃、アルベドの剛力が一斉に集中すれば、瀕死の金獅子に耐え凌ぐ術は無く、瞬く間に命火は消え去る事になった。

「ギユアアアアアアアアアア……ッ！」

力尽きた金獅子から一度離れた一行は、それぞれ身構え………大きく肩を落とし、安堵。

「終わったか………しかし、こいつだけとはな」

「不自然ではありませんが………以前にも増して凶暴でしたし、妥当と考えるべきかと」

長く襲撃を見てきたアルベドが冷静に分析し、門の奥へと視線を向ける。

「セバス、共に見張りに立つわよ。コキュートス、申し訳ないけど、城門の予備を」

「ウム。取換ヲ急ゴウ」

比較的戦闘に関与しなかった二人が率先して動き、コキュートスも連日の襲撃に対応するべく編み出した手法を実行するべく、疲労を押して動く。過ぎ去る刹那、一瞬だけ鋭い視線をシズに向けるも、二人はそれを自身の役割でないと割り切り、主の裁量に一任し、淀みない足取りで拠点外部へ。

「………さて、シズよ。手を借りた手前申し訳ないが、幾つか訊かせて貰いたいことが出来た」

モモンガが赤い眼光を鋭く光らせる中、シズは緊張の面持ちと共に、静かに跪く。

「………はい」

「まず、無謀な参戦だが………これはパンドラが許可した事だ、追及はせん」

「いえ、これは私が望んだ事です。罰されるべきは、パンドラ様ではなく私です」

堂々と、主に意見できたことに驚くシズであるが、それはモモンガも同じ。

「………ではシズよ。何故、あの時逃げるのではなく、立ち向かうこと

を選んだ？」

「……………御方のお役に立ちたい、と思ったからです」

そう告げると共に、静かに顔を上げる。その瞳には、確たる意思があった。

「無謀とはわかっています。ですが、こうして力を示さねば、私たちはモモンガ様のお役に立つ事すら許していただけません。私たちは『戦闘メイド』プレアデス……………戦場でお役に立つ事こそ、至上の喜びなのです」

そう、戦闘メイド。メイドである以前に戦闘員である彼女たちが真に臨むのは、前線で戦うことなのだ。モモンガの手を煩わせる事無く、自分たちで事を片付ける……………この世界では、困難極まりないとわかっていても、そう望んでしまう……………その筈、だったのだ。

(あ、れ……………？私、なんで……………)

しかし、シズは言い終えた瞬間、自身の違和感に気付いた。

あれ程渴望していた役目を遂行できたというのに、それに対する喜びが沸き上がらないのだ。

「あ、あれ？なんで、私、確かに……………」

「し、シズ？どうした、シズ!？」

この世界を侵す法則に侵され、個として独立させられた彼女は、最早ナザリツクに囚われない。そう、シズ・デルタという存在のアイデンティティが、根幹から揺らいでいるのだ。ギルドに仕えることを、ギルドの役に立つことを至上とするギルドNPCの枠組みから強引に引き剥がされたという事実を認識するには、まだ少し時間がかかるだろうが……………それを知らなくとも、彼女たちの主が対応を変えはしない。

「そ、その、すまなかつた！別に、そんな責めている訳では……………」

「ちが、違うんです、モモンガ様……………私、わからない、けど……………」

泣きそうなのに、自動人形故涙を流せない。それでも、その苦しみ様から事態の深刻さを察したモモンガは、素早くパンドラと目配せし、《転移門^{ゲート}》を発動。素早く立ち上がり、復旧に取り掛かる者たちにラージャンの亡骸の移送を任せ次第、パンドラと共に仮拠点へと移

動。

詳しく聞けば聞くほど、二人は事態の深刻さが予想以上であることを知らしめられた。

「いきなり聞こえた声と、流れ込んだ知識……どう思う、パンドラ」
「かなり不味いですね。しかし、情報自体はかなり有益なのがまた……」

渋い顔を突き合わせる親子の前では、シズが今にも泣きそうな顔で頭を抱え、蹲っている。

「……………シズよ」

「っ、はいー！」

どこか怯えが見え隠れするのは、染み付いた御方至上思想によるものか。

「お前の全てを赦す。だが、お前自身がそれをできるか判らん以上、当面はこちらに残留して貰おうと思う。パンドラが新たに発見した武器が普及するようならば、その使い方やレクチャーや弾丸作成の補助をして欲しい。それに忌避感があるのなら、罰と想ってくれても構わない」

そう告げてから、モモンガは思わぬ重大情報に内心頭を抱えながらも、立ち上がる。

「では、パンドラは当初の予定通り。シズには事が動くまで、私の手伝いをして貰おう」

かなりのショックを受けているシズを慮り、モモンガはそう指示を下す。

パンドラの退室を確認してから、モモンガは腰を下ろし、シズに座るように促す。

「さて、それでは早速で悪いのだが」

ビクツ、とシズが姿勢を直す中、モモンガは至極真剣に、現状強く惹かれるモノについて質問。

「あの武器、使い勝手はどうだった？」

「……………へ？」

「いやなに、ガーネットさんのように、銃を使う仲間も居たからな。そ

れと似た武器ではあるようだが、微妙に色々と違うみたいだからな……あ、それもだが、森の方も色々ど気になつていてな。もし新発見の類があつたようなら、是非とも教えて欲しいのだが」

少しでも気を紛らわそう、という思惑もあるが、同時に自信の欲求も満たす話題のチョイス。

とはいえ、その欲求が顔を出しているお陰か、支配者ムーヴも幾らか和らいだように感じ、シズはふと表情を綻ばせ、自身と姉妹たちがアウラと共にやってきたことや、森の賢王に教わった諸々などについて、楽しそうに語っていった。

27—新たな武器

シズ・デルタの新生……：厳密には、金獅子の討伐から早数日。

予言の時が近づいている事もあり、徐々に外部からの人員流入が増え始めた頃。

「『魔法の矢』^{マジック・アロー}」

静かに口ずさめば、シズの意のままに魔力の矢が放たれる。

「職業レベルの概念が消えた……：いや、薄れたのか？流石にそこまでは判らないか」

基礎中の基礎の攻撃魔法であるが、遠距離純戦士であるシズが使える事自体、異常なのだ。

その事実を噛み締め、思索するモモンガに意識を向けず、シズは指示通り、カホウも用いての訓練を淡々と進めていく。随分と慣れてきたのか、動作も洗練されていく一方、物資の問題から実際に撃つのは何故か無限に生成される通常弾LV1のみであり、実戦とは程遠い形式だ。

「……：やっぱり、こっちの方が早いかも」

そして、そんなでも、付け焼刃の魔法より最低威力の弾丸の方が威力がある。

「むう……：魔法ガンナーって、浪漫があると思うんだけどなあ」
(待てよ？シズに起きた異変が俺に起きれば、魔法無しで好きな武器を……：いや、リスクがまだ不明瞭なんだ、変な気は起こすな。万一、使える魔法が使えなくなる、なんてことになったら目も当てられないんだからな)

一人物思いに耽る中、シズは訓練を切り上げ、モモンガのもとへ。畳んだ重弩を小脇に抱える姿は可愛いすが、表情にはやはりまだ不安などが見え隠れしている。というのも、精神レベルで大きく変質しており、ナザリック第一主義が消え去った結果、彼女が思っている以上に優先順位が変動しているのだ。

結果、不敬を働いていないかどうか、ひたすらに不安になっているのだ……：モモンガは疎か、他ならぬシズ自身の心の奥底すら、不敬

だなんだということ、気にしなくなりつつあるというのに。結局のところ、彼女が過剰に恐れる原因はナザリック時代の、NPCとしての在り方であり、敬意こそあれ、過剰過ぎた分が綺麗に抜け落ちているのだ。

その欠落が、結果として余計に不安を掻き立ててしまっているという訳だ。

「ところで、近頃随分と討伐数が増えているようだが」

「単純に、武器の質が上がったお陰だと思えます。皆、対処自体には随分手馴れてました」

モモンガの言うように、パンドラの手による武器生産が行われてから、襲撃による損害が大きく抑えられているどころか、討伐数が増えているのだ。無論、そこまで強力でない個体が大半であるが、徐々にであるが確かな成果ということもあり、士気は確実に大きく向上している。

「成程……我々が手古摺っていた事を考えるに、やはり経験の差から乱戦の経験が豊富、という訳でもないのだが、ナザリック側の情報が知識頼りであるのに対し、現地の者たちは経験も伴っている分、乱戦でもある程度対処が容易となる。そこに、これまでと違い確かな手傷を負わせられるだけの武器が伴えば、それだけでかなり効率が上がるのだ。

そして、着実に経験を重ねているシズには、もう一つの選択肢が。

「新しい武器は試したか？」

「試しました、けど……その、酷いといえますか……ええと」

ちらり、と視線を向けたのは、金獅子の角二本をそのままくっつけた大筒のような重弩。

反動自体は問題なく、威力も同様。装填自体は寧ろ軽々出来る程なのだが……

「ああ、うん。見ている限り、ブレ方が酷いからなあ」

「いえ、本当に。近づかないと当てられないので、その……はい」

補正手段は確かに存在するのだが、それを探り当てるだけの知識と

余裕が存在していないことが、一番の不幸だろうか。しっかりと整えて運用出来れば強力なだけに、惜しいところだ。

シズの訓練が終わってからは、モモンガの付き添いで拠点内部の散策になる。人員の移動を解禁したことに加え、予言の日が刻一刻と迫る事もあり、短期間で活気が増したそこを回るだけでも、存外新鮮なのだ。

「お、これはいいんじゃないかの?」

「え?あの、何をどうしてこうなったんですか?」

「いやあ、あのデカブツの機構を他の武器に組み込めんか、と思つてのお」

「サイズ的に槍の形がええかのお、と思つて色々試しておつてな」

「「そしたら、こうなった」」

そんな会話が聞こえてくるのは、ドワーフや現地人も加わった鍛冶場の区画。

「いや、あの、これ使える人」

「すまない、それなのだが、俺に試させてはくれないか?」

いるんですか?と続けようとしたパンドラに、そう依頼する人物。

「貴方は……………帝国のナザミ殿でしたか」

「ああ。腕力には、それなりに自信がある」

そう告げる彼の視線は、浪漫を形にした結果、偶然完成したことで発見された大型の近距離武器『ガンランス』へと向けられている。砲撃機構内蔵のランスという大型武器と、大型故の隙をカバーする為の大盾をセットで運用することを前提としたそれは、奇しくも竜たちの世界でも普及している代物だ。

「……………一応、こちらでテストをしてから、という形にしたいのですが」

「では、お前たちが付き添いという形でテストしてはどうだ?」

そう提案したのは、偶然訪れていたモモンガ。その目には、未知なる武器への好奇心で満たされており、上質な鉱石を多量に用いた鋼鉄の銃槍を興味津々に見つめている。すると、帝国出身の鍛冶師がそれを持ち上げ、神妙な顔を彼らに向ける。

「それなんです、先にお伝えしたい事がありました」

と、銃槍を半ばから折る。機構に則った動作と共に薬莖に収まったままの砲弾が吐き出され、床に落下したかと思えば、乾いた音を立てながら光の粒となり消失。アイテム破壊のエフェクトと同様のそれに驚くのも束の間、見せられた薬室にしっかりと収まる砲弾が存在することが判り、驚きの声。

「えええ………どうなっているんですか？これ」

「さっぱり判りません。それとこれ、実は砲弾だけじゃなくてですね………」と、続きは外で」

そこで切り上げたのは、屋内でやるには危険だから。それを了承したパンドラ、モモンガにシズとナザミ、ガンランスを完成させた鍛冶師たちは、最寄りの訓練場——主に新調した武器の感覚を試す為の場——へと移動。そこで魅せられたものは、色々な意味で驚くべき者であった。

「では、まずは私めが試しに」

「いや、俺がやろう。優れた鍛冶師に何かあつてはならん」

と、ナザミはガンランス……彼の立場から『インペリアルガーダー』と名付けられるそれを、鍛冶師の手から受け取る。確かな重みをもつ鋼鉄の銃槍と、それと合わせたデザインの鋼鉄の大盾を構えた彼は、静かに訓練用ターゲットへと、まずはその鋭利な刃による刺突を叩き込んだ。

「手応えは悪くない。それと、これは刺突より………ふっ！」

そこから、二枚盾で多くの攻撃を凌ぎ続けた剛腕により銃槍を振り上げ、上段から叩きつける。

「この方が威力は出るか。だが、そこからどうカバーするかが問題だな」

ターゲットを粉碎した銃槍を持ち直し、ナザミは持ち手の引き金に指をかけ、引く。

「むうっ!？」

「おおー！」

強烈な反動にナザミが驚く中、モモンガもまたその光景に感嘆の声

を上げた。

「これはまた……しつかり踏ん張らねばならないな。扱いても難しうだ」

「まあ、複雑な機構ですからね……というか、何故こんなものを」「いや、だが悪い事ばかりではない。この砲撃を至近距離から浴びせれば、かなりの痛手となる筈だ。無論、扱うのは簡単ではないが、習熟できれば攻防一体を高いレベルで体現できるだろう。どうか、俺に試験運用をさせて欲しい」

静かにナザミが頭を下げる中、モモンガは見るからに浪漫に溢れた武器をじつと見つめ、内心の欲求と静かに格闘を繰り広げる。純魔法職であり、且つ現在ユグドラシルのルールの影響以外を殆ど受けていない彼では、装備すら出来ない武器である以上、その葛藤は無意味なのだが。

「両盾と比べ、防御力は下がるだろうが……使いこなせれば、あちらより戦線維持は楽だろう。守るだけでは、この先で通じるか判らん以上、何としてもこれをモノにしなればな」

モンスターと人間とでは、当然前者の方がほぼあらゆる面上。それが数多攻め込む防衛戦の中では、耐え凌ぐ以外の手段が極端に少ないこれまでのナザミのスタイルだと非常に不利なのだ。なにせ、眼前の脅威を取り除くにも、仲間の協力が不可欠であり、乱戦でその協力をどこまで得られるかも不確かなのだ。

だからこそ、彼は程々の火力と高い防御能力を併せ持つことを可能とした、この最新武器へと目をつけ、使いこなさんと決意を固めたのだ。自らの生存もそうであるが、彼は立場も加わりその存在が士気に関わる人間でもある。その意味でも、これは非常にタイミングが良かったと言えよう。

「では、モモンガ様。私はエネック様の試運転に付き合うので」「ああ、わかってるさ。少しばかり、見学させて貰うだけだ」

静かにその場を後にしたモモンガとシズは、その足で工房へ。新造された重弩や、その新造過程で新たに発見された軽弩などを筆頭とする武器の調整の為の人員、設備などが置かれたそこで、パンドラたち

が作成した武具のデザインを眺めるのが、ある種の楽しみでもあった。

「……………あ」

そんな声が隣から聞こえたかと思えば、シズは適当な道具を手にする。何を、と呆気にとられる間もなく、彼女はカホウを展開。道具を器用に駆使し一部を分解したかと思えば、抜いていいのかも不明な機構を引っこ抜き、再度組み立てる。唾然となる周囲に対し、シズはマイペースに武器を構え、少しばかり顔を顰める。

「やつぱり、重心が……………」

「えーっと……………あれは、抜いても大丈夫だったのか？」

モモンガが恐る恐る指さすモノを一瞥したシズは、何とさえいいかと口籠る。

「あれは……………なんて言えば……………」

説明が難しいと判断したシズは、一度弾丸を装填。

「んん？」

「さっきのは、一気に大量に装填、連射する為の機構でした。けど、この反動だと活かし切れなと思ったので、それを取り払って機構を単純化したんです。重心が変わって取り回しが難しくはなりませんが、発射機構周りが単純化した分、威力の減衰も抑えられている……………筈」

「おお、成程。では、早速試してみようじゃないか」

歯切れの悪いシズだが、モモンガはそれが何者かに与えられたものである、と判断。深くは追及せず、どの程度変化したのかを確かめようと提案。好奇心の見え隠れするその弾んだ声に面食らうシズは、直ぐにカホウを抱え、共に訓練場へ。

その姿を遠目に眺め、嫉妬の炎を燃やす影が二つある事に気付かぬまま。

「シズ・デルタああああ……………!」

「態度もなんかおかしいであります……………!」

アルベド、シャルティアの両名だ。とはいえ、シャルティアの言葉には、アルベドも正気になり

「ええ、そうなの。先日の防衛戦以来、様子がおかしくて……モモンガ様は、そのケアと共に原因を探るべく、ああして彼女を傍に置いているのよ。今でこそ落ち着いているけど、直ぐ後は本当に見てもらえなかったわ」

そこで、シャルティアからとても常識的なツツコミ。

「……………それに嫉妬するのは、ちよつと違うんじゃないやありませんか？」

「けど、それはそれとして妬ましくない？」

「妬ましいでありんすねえ」

それはそれとして、妬ましく思う気持ちも本物なのだが。

「……………ああ、プレアデスと呼ばない理由はそれでありんすか」

そして、理由を整理したシャルティアが結論付ければ、アルベドが驚く。

「貴女、そこまで頭よかったかしら？」

「失礼な!? わたしだって、あんな魔境に放り込まれりや賢くなるっつーの!」

語気が荒くなるのは、過酷な経験を思い出したストレスでか。最後、若干涙声になっていることに気付いたアルベドは目を丸くし、シャルティアをまじまじと見つめる。彼女がそこまで追いつめられる程過酷な環境、というのが予想できないアルベドが口にしたのは……………

「な、なにがあつたの? 貴女の討伐経験を考えると、そこまで酷いなんてことは」

「アルベド」

いつそ寒気を覚える程、穏やかな笑顔と声色に、淫魔の顔が引き變る。

「あとで、熔山帯に行きんしょう。あそこの石炭が一番良質なんでありんすよねえ」

「却下で」

「いいから行くぞー! あそこに行けばこの世界がどんだけヤバいか一発でわかんだからな!」

与えられた設定を投げ捨て、シャルティアはアルベドに掴みかか

る。

翌日、アルベドが与えられた部屋から出てこなかったかどうかは、定かではない。

28―襲来の餓竜

アルベドが多大なメンタルダメージを負った翌日。

彼女とシャルティアが偶然採取した植物は、シズの手に移った。

「……………できた」

「……………え、これどうなってるんだ？キノコと葉っぱで、これが？」

彼女の手中にあるのは、爆薬……………そう、爆薬。

現地で知られる製作法より、格段に楽な手法で完成したそれは、量も十分。

「やっぱり……………ってことは、もしかして」

同じ葉をカラの実に詰めれば、次の瞬間には一発の弾丸が。

「マジか!？」

「……………これ、栽培できれば、きつとすごいことになる」

そう呟き、シャルティアがこれまでの経験から回収した種子と、アルベドの力で地盤ごと引っぺがして持ち帰った数株へと視線を向ける。根が一部千切れてしまっただけだが、ナザリックとカルネ村の共同農場で徐々に手を加えていけば、それなりの生産は可能になると思われる。それが叶えば、爆薬を始めとした諸物資の流通に大きく関与も可能となるだろう。

この世界に根付く上での利益として見ても、この世界で生きていく前提で見ても、非常に上等と言えよう。無論、不用意に独占しようとするれば反発は必至。だが、カルネ村という、良くも悪くも『恵まれた土地』はそうそうなく、また『森の賢王』の支配域に農場を設えることが出来たことを思えば、他より優位に立つことは容易いだろう。

……………とはいえ、モモンガはそこまで頭を回していないが。

「しかし、面白いな。どんなものなのか、試してみたいな」

「それなら、少し待ってください」

と、シズは細かく刻んだ葉……………『火薬草』のそれをカラの実に詰め、『L V 1 火炎弾』を量産していく。そうして完成したソレをカホウに装填していけば、連射機構を取り除いた分莫大な量が収まる。しか

し、それでも尚余る余剰スペースに。シズは無言で目を細め、少し操作を加えられた後、余剰スペースに装填した火炎弾を回し、他の弾丸を続けて装填していく。

「……………よし。終わりました」

「大量に入るな、それ」

「それだけ大きな装置を取り除きましたから」

と、カホウを畳む準備に入ったところで、けたたましい鐘の音が響いた。

「っ！」

「お供しますー！」

弾かれたように《飛行》^{フライ}の魔法で飛翔したモモンガに、シズが追従していく。

その先に居たのは、黒く染まった火竜リオレウス——『黒炎王』の名が過るも、紅い龍殺しの残滓を放つ傷が、無数に刻まれた体躯が、灼熱の輝きを放つ胸部が。そして、引き連れられたモンスターが存在が、その先の思考を許さない。鋭く響き渡る、本能を強く刺激する咆哮が、全身全霊を以て望まねば死ぬのみだと、現実を突きつける。

「ギユアアアアアアアアアアアッ!!」

「ぐうッ!」

「っ!」

モモンガ含む、迎撃用の広場に集まった者たちが竦み上がる中、雄火竜の前の黒い塊が蠢く。

「——ッ!!」

鳴き声にも聞こえる、軋むような破裂音。その主の名は『影蜘蛛』ネルスキュラ。

『毒怪鳥』の外皮を纏い、自らが苦手とする電撃への耐性を得た鋏角種モンスターは、その肢で大地を踏み締め、黒く染まった体躯を以て雷顎竜へと躍りかかる。それを阻止するようにヌシたるリオレウスが飛翔し、強靱な脚でその体躯を掴み、持ち上げる。

武器である前肢も、致死の猛毒を宿す鋏角も届かず、腹部に形成された猛毒の結晶も、催眠毒を宿す毒針も届かせることが出来ない中

で、その体に叩き込まれるのは灼熱の劫炎。ゴム質の外表皮が最も苦手とする攻撃を、至近距離から叩きつけるように浴びせられ続けたことで、悶絶したネルスキュラはリオレウスの拘束を逃れ、墜落。

「ギユアアアアッ!!!」

「グルアアアアアッ!!!」

叩き込まれる灼熱の刃が、黒染めの体軀から前肢を斬り落す。そこへとすかさず、猛烈な雷光を纏った剛顎が喰らい付き、外殻をバリバリ破碎し、電撃を叩き込んでいく。悲鳴染みた金切り音が響く中、とどめを刺さんと構えた三体のモンスターは、しかし何かを察知し大きく身を引く。

「グルオオオオオオオオオッ!!!」

「ッ!?!」

「なにか、来る……………ッ!」

慟哭染みた咆哮と共に、紫炎を纏い飛来する影。息も絶え絶えの影蜘蛛へと喰らい付いたその影は、激突によりその体軀を弾き飛ばし、鋭利な尾を以て息の根を止める。ヌシたる火竜が威嚇するように吼え叫ぶ中、『雷顎竜』アンジヤナフ亜種と『斬竜』ディノバルドは左右に広がり、凶悪無比なる餓竜より距離を置きながら、警戒を続けている。

「な、んだ、あれは……………」

「不味い、不味いぞ、ありやあ……………!」

一目でわかる、その脅威度。モモンガは即座に空のヌシより少しばかり劣る程度であると目星をつけ、経験は豊富にある冒険者たちも警戒レベルを跳ね上げる。三体を獲物と見做した牙竜へと、ヌシ・リオレウスが咆哮を響かせ、三対一の激闘の幕が切つて落とされることに。

そこに、彼らが介入する余地は無かった。

「ギユアアアアアアアッ!!!」

「グルオオオオオオオオオッ!!!」

激しく激突し、取っ組み合う二体の戦場は、空へと移る。圧倒的不利に見られた『怨虎竜』の名を持つ牙竜、マガイマガドは、莫大な紫

炎を放ち、それを炸裂。その衝撃を利用して『空の王者』の領域へと舞い込み、爪牙を以て強力無比なる天空の竜との激戦を繰り広げる。放たれる業火を、猛毒を宿す鋭爪を、紫炎こと『鬼火』を用い巧みに躲し、圧倒的機動力を持つ飛竜種を相手に果敢に挑みかかるせいで、地上からの手出しは困難を極める。

「まずっ、火が！」

「チイツ！私が防衛に回る！お前たちは戦局から目を離すなよ！」

しかし、戦火は空からも容赦なく降り注ぐ。現地の魔法位階では威力不足である事から判るようだが、彼らの用いることが出来る魔法防御では、火竜クラスの攻撃を完全に防ぐなど夢のまた夢。故に、魔王ロールを求めたことで豊富な魔法を有するモモンガ以外、満足な防衛が出来る人間は居ないのだ。

『不浄衝撃盾』ッ！」

だが、NPCであれば。

「はあああああッ!!!」

シャルティアの、アルベドのスキル防御が、飛来する戦火を霧散させる。

「ああもう、何なのよあれは!？」

「ペロロンチーノ様なら……いや、流星にあの御方でも、あんな馬鹿げた芸当は……」

そして、二人のみならず、多くがその激突を目の当たりにしていた。空中で炸裂する紅炎と紫炎、その元凶たる灼熱の光を放つ火竜と、それを喰らわんと躍りかかる鬼気の餓竜。帝国の冒険者、ワーカーの多くが知る火竜より数段格上と化したヌシに対し、臆することなく挑みかかった挙句、対等に近い激突を繰り広げる存在は、彼らに強烈な恐怖を刻み込む。

だが、怨虎竜とて、無敵ではない。

「ルウツ!？」

「ッ、ギルアアアアアアアアアアッ!!!」

纏う紫炎が途切れ、その体を空中に留まらせていた爆発が起こせなくなる。

それを好機と見た火竜は毒爪をその身に幾度となく突き立て、生半な金属を消し飛ばすだけの超高温を秘めた灼炎を叩き込む。炎熱への高い耐性を持つ禍威の竜も、流石に不安定な空中で直撃を受けてはどうしようもなく、地上に真つ逆さま。激突の衝撃でその体はバウンドし、炎に包まれたまま地面を転がり、死んだかのように投げ出された。

「不味いな、これは……………」

モモンガたち、人間側が空の王者への警戒レベルを跳ね上げ、死を覚悟する中。

「……………不味い」

シズ・デルタはただ一人、竜たちと共に禍威の竜から視線を外さず、叫んだ。

「あの竜を総攻撃して！」

カホウを構え、死んだかと思われているマガイマガドを撃つ。

「シズ!? 一体何を……………!?!」

そこで初めて、モモンガは気付く。

（ああ、クソ！ 気付かなかった！）

「あの竜を狙えッ！ あいつは——まだ、生きている！」

アンデッド種の基本特性が、死んだかのように倒れ伏す怨虎竜の生を知覚。

何故気付けなかったかと言われれば、凶悪無比なるヌシたる空の王を警戒し過ぎた故か。

「急いで、急いで仕留めない……………」

戦士の多くが近付けない中、モモンガ、シズらによる遠距離攻撃に、二つの火炎が加わる。

そこまでして滅ぼさんとされている牙竜の体軀からは、禍々しい靄が立ち上っている。

（っ、なんだあれは!?!）

「総員、構えろ！ 何かが来るぞ！」

その目が開かれ、狂気的な赤に染まった瞳が露わとなる。その外殻は瞬く間に禍々しい黒紫へと染まっていき、傷口から滲み出す血も紫

色へと変わる。生物と見做すには、あまりに悍ましい姿へと変わったモンスターは、禍々しく変質した咆哮をとどろかせる。その姿を前に、人類とモンスターの意思が一つになる。

アレは、生かしておいてはいけない——と。

「——ッ!!!」

禍々しい咆哮を前に、モモンガは後悔する。

実力、人格を併せ持つセバス、コキュートスを、使節に出すべきではなかった、と。あと一日、予定を遅くしておけば——と。強力な前衛というのもそうだが、見るからに炎耐性が高い相手に対し、冷気属性に長けたコキュートスの存在が、強く響いた可能性も高いのだ。

「あ」

そして、狂気に飲まれた牙竜は、間近なエサ——軽装の冒険者の一人へと躍りかかり、その命を食い潰した。文字通り、一撃で息の根を止めたかと思えば、その身を包む軽装鎧ごと、骨肉を諸共に噛み砕き、飲み込んだのだ。

「……………な」

ヒトを喰らう光景を目の当たりにするのは、モモンガにとって初めてのこと。

「冗つ、談じゃねえぞ！」

「軽装の者は下がれ！重装の者は構えを緩めるな！」

「後衛は大人しく逃げろ！」

だが、辺境のはぐれ亜人を知る冒険者たちは、それが危険とは思えど、思考停止には至らない。ヒトを喰らうはぐれ亜人もいれば、弱り果てた末に貪り喰われる者もいる……………現状、積極的に人間を喰い殺すモンスターは確認されていないが、連日のモンスターの襲撃と、帝国東方の亜人集落の存在、そして亜人の襲撃頻度の劇的な低下を関連付けて考えることが出来る者なら、最悪のケースとして考慮もしている。

「——ッ!!!」

「……………ッ！」

飢えた竜は、糧代わりにヒトを狙う。それを阻止せんと、復帰した

モモンガは動く。

「こ、の……………」

シズが撃ち込む弾丸では、決定打足り得ない。足を止めることが出来ない。

「その足を止めるろ！ 《リアリテイ・スラッシュ現 断》 ツ！」

「—— ツ！」

理性なき牙竜は、その身を深々裂かれようとも止まらない。が大きくバランスを崩したことで標的から大きく逸れ、どす黒く染まった涎を零す牙竜は地面を転げていく。そこへと叩き込まれるのは、人間の魔法より格段に強力な、灼熱の渦と劫火球だが、如何せん相性が悪すぎる。鬼火を物ともしない耐熱性が、火属性ダメージを大きく減衰しているのだ。

「チイ…………… ツ！」

「お待ちせ致しましたッ！」

しかし、それ以外の属性であれば。

「っ、そう来るか！」

水、冷気、電気の一通りが叩き込まれ、狂気の牙竜より悲鳴が奔る。モモンガのソレを超える大火力を叩き出した魔法を行使したのは、彼の親友の一人であるバフォメットの姿を模したパンドラズ・アクター。再現できていないワールド職により大分火力は落ちているが、それでもモモンガより高い威力の魔法を湯水の如く叩き込んでいく。

モモンガも続く中、街の防衛を済ませた二人も遅れて参戦。

「一気に叩くわよ！」

「えらく必死でありんすねえ。まあ、モモンガ様の敵を滅ぼすという点には同意いたしんす！」

アルベドの剛腕が、今まさに飛び掛かったマガイマガドを大きく吹き飛ばす。鬼火を使える程は回復していない彼の竜は地面を転がり、そこへと次々魔法が飛来。それだけでなく、モンスター二体も積極的に火球を叩き込んでいく。狂竜と化したモンスターがどのような存在であるのか、端的に示す中で、狂ったが故にダメージ認識が壊れた怨虎竜は立ち上がり、眼前最大の脅威へと向け大地を蹴り駆けてい

く。

「させぬでござるよー！」

「ちよ、いきなり!？」

そこに、横合いから突進する巨影。

「も、森の賢王!?!それに、アウラも!？」

「助太刀にござる!」

そう声高らかに叫んだ、丸々とした喰い応えのあるであろう魔獣へと、餓竜は狙いを定める。

「さあ、任せるでござるよ——ナールベラル殿!」

取り出した何かを、地面に何かを叩きつける。刻一刻と迫る狂竜を恐れすらない偉大なる魔獣は静かに、確かな信頼と共に、この戦場まで自身を送り届けた者の名を叫ぶ。その名にアウラ以外が驚愕する中、魔獣の隣へと鎧と一体化したメイド服に身を包む美女が降り立つ。

「失敗したら承知しませんよ……!」

そして、魔法によりその場より転移。瞬間、置かれた機材からネットが広がり、小規模な爆発がその下へと空洞を穿つ。結果、そこ目掛けて飛び込む形となった牙竜はその穴に落下し、突然のことによる混乱も加わり、何事かと藻掻くのみになる。そこに、アウラのスキルによる弱体付与の狙撃が着弾次第、彼女の口よりモンスターたちへと号令。

「今なら炎も通るはず!だから、一気に畳み掛けちゃって!」

ビーストティマー職がそうさせるのか、それともなんとなく意図が伝わったのか。

ヌシたる火竜と、付き従う二体の精鋭獣竜は一斉に怨虎竜へと最大火力の攻撃を叩き込み。その残滓が残る中でも、モモンガらマジックキャスターたちが総出で攻撃を叩き込む。凶らずとも、マガイマガドを蝕んだ狂竜ウイルスの蔓延防止に最も効果的な手法となったそれにより、狂竜の悪影響もあつた怨虎竜は、魔法飽和攻撃の中絶命。

本能的に察知した竜たちと、種族特性で把握したモモンガが攻撃の手を止めた、数十秒程の後、他の者たちも牙竜の絶命を認知。非常に

高い戦闘能力を有するモンスターの討伐であるが、ここまでで初の死者を出してしまった事、何よりこれが最後であると限らない。その事実を誰もが理解してしまっているのか、雰囲気は決して明るいとは言えないものであった。

29—悔恨と進捗

ナザリツク地下大墳墓、深層部。

「クソがッ！」

先の防衛戦の結果に、自己嫌悪とやり場のない怒りを抱き、怒鳴り声で強引に出力。その胸中に渦巻くあらゆる負の情念は中々沈静化されてくれず、延々とモモンガを苛み続ける。他ならぬ己自身への怒りが、それを増長させるのだ。

「ああ、クソ！何を自惚れていたんだ俺は！」

捕食——考え得る限り、最悪の死に方。それも、偶々冒険者たちだけであったが、あの場には、シズ・デルタもいたのだ。万一彼女が狙われたとして、あの状況で一切反応できなかった自分は彼女を守れたか？……答えは、否だ。あの場でシズが狙われていれば、成す術無く彼女は貪り喰われ、彼はそれを黙って見届けるしか出来なかっただろう。その可能性を考えていなかった己自身が、何よりも許せない。

「蘇生できる出来ない、じゃないんだよ……！」

そして、死者を出した事実。幸いというか、高位の蘇生魔法を使えば蘇生できたものの、そういう問題ではない。最早、この世界はゲームでなくなっている以上、蘇生の可否で凶るのは許されない。それを平然と受け入れた自身に対しても、過度に動揺しない点は評価できているものの、人命を軽視してしまった点はどう考えてもアウトと判定を下している。

ゲームのルールが一部通じるだけで、ここは現実。弱肉強食の世界なのだから。

「あの時、アレを使っていればよかったのか？」

『The goal of all life is death』
ス キ ル

だが、その思考は悪手そのもの。それをすれば最後、竜たちは彼を、彼らを八欲王を超える異物と見做し、排除しにかかるとも、彼らによる、北西地域の人類の発展を喜ぶ超越者たちであろうとも、その一点だけ

は決して覆らないし、覆すことはできない。生命のみならず、その骸が還るべき大地すらも死滅させる力など、生ある者が許す筈がないのだ。

「……………どうすればよかったんだ、俺は」

想定外の強敵ではあったが、剛種と比べれば非常に弱いモンスターであったことに違いはない。それを相手にイチイチ切札を切る訳にはいかないし、それをし続ければ敵が増える云々以前に、経験値を積むこともままならない。情報の有無というのは非常に重要で、今回の場合も未知の復活現象に対する事前知識が無かったからこそ、何もできない内に死者を出すという最悪の結果に至ってしまった。

この件でモモンガを強く苛むのは、彼は種族特性であるモンスターの生存を知っていたにもかかわらず、目先の脅威に気を取られるあまりそれを見逃していた事だ。ヌシとでも呼ぶべき強大な火竜は間違はなく脅威であったし、そちらを警戒した判断も決して間違いではなく、それ故に彼を責める者もないのだが、だからこそ一層、モモンガは自身を責めていた。

「……………皆なら、こうなる前にかできたのか？」

浮かべるのは、ギルドの仲間たち。各々が思い思いのロマンに従い割り振ったビルドの、その癖してユグドラシル云千のギルドの中でも最上位にまで上り詰めた、あらゆる意味で心強かった友人たち。彼らならば、死者を出すことなくあの戦闘を終わらせられたのか――

「……………いや、無いものねだり出来る余裕もないんだ。しっかりとしない」と

そう、無いものねだり。ここに居るギルドメンバーは、モモンガ一人なのだから。

(……………けど、皆が残してくれたものはある。あるものは、使えるだけ使えばいい)

だが、その悔恨もいい一歩になった。彼のもとには、仲間が残したモノが数多くある。

そして、それを活かす術も、モモンガは持ち合わせている。魔王ビルド様様である。

「最悪ではあるけど、食えない俺が前に出る、つて手もある。その時は、頼みますよ」

手元の課金アイテムに刻まれた名に目を落とし、モモンガは静かに零す。

彼自身は純魔法職であるし、ステータスも相応の物である。あるが、それを多少誤魔化す手段が存在する上、その状態で使える上等な武器も数多く持っている。使いこなせるかは不明だが、参考に出来る相手もいれば、教えを乞える相手もいるはず。無論、貴重な魔法火力を失うのは宜しくないが、緊急時の手段の一つとして悪くはない。

「となると、課題は緊急時か……課金アイテムは貴重だし、考えないとな」

我が子のような者たちを守る為にも、手段は選ばない。

長がそうであるように、配下たちもまた、手段を選ばず、戦い方を探していた。

「む、むううう………!」

「ナーベラル、不器用」

「いやいや、シズ殿が器用なだけではござらぬか?」

「そもそも!お前は何故その手でそんな器用なことが出来るのですか!?!」

ナーベラル、シズ、森の賢王は、それぞれ手元で何かを弄っている。ナーベラルが失敗を繰り返す中、シズは木箱の中で木、石を削り出した細かな部品を組み合わせると共に、そこにネットを、小さな虫を仕込んでいく。森の賢王手製の小道具、トラップツールとも呼ぶべきソレを組み合わせ、組み上げて完成したモノは、そのまま罠として使うことが出来る。

これは、シズ自身の職業構成も上手く働いての事だろう。

「しかし、ナーベラル殿も、そこまでムキになる必要はないのではござらぬか?」

「お前には関係のないことです」

「あの時の、罠への誘い方……アレを使いこなしたいんでしょ?」

シズの冷静な分析に一瞬動きを止めると共に、加減を間違えて工具

を破壊。

……プレアデス最高レベルのナーベラルですら、この世界の戦闘では足手纏いに近い。そんな中、森の賢王と共にマガイマガドを罠に嵌めた、設置し誘い込み、転移で離脱するという戦法は、彼女が皆の役に立つための、数少ない画期的な手段でもあるのだ。その為にも、必要な罠から数を持っておかねばならず、こうして作成に一枚噛んでいるのだ。

「あ」

「まあ、某が幾らでも作れる故、気にする必要は無いでござるよ」

と、森の賢王の名に恥じぬ手際で、人間ですら扱いに苦心するであろう細かな道具を作り上げていく。彼女以外でこれを作る者は恐らく、ナザリツクに数名程度であろう。そして、これらの道具の有用品の高さを考えると、需要と供給の釣り合いが悲惨になる事請け合いである。

「……………いえ、そもそも！何故、こんな虫一匹で……………痛っ!？」

草を編んだ籠の中の虫、雷光虫を豪快に掴んだナーベラルは、その放電の直撃を受け手を引く。

「それは、某にもわからぬでござるなあ」

苦笑し、魔獣は組み上がった工具を箱に詰め、地面に置く。

「これらは、某らが強者を退ける為、試行錯誤する中でできたモノにござるからな。ネットを組み込んだモノもそうでござるが、やはり万能ではござらん。痺れ罠は電気を通さぬ毒怪鳥には効かぬでござるし、落とし穴も地面を掘り進める竜や、落ちた後に絡み付くネットを強引に無力化できる竜などには無意味にござる。それに、地面の状態次第では仕掛けることもままならぬ故」

軽く伸びをして、森の賢王は別の作業に移る。ナーベラルが作り出した失敗作と、大森林に自生する植物の一種であるトウガラシを持ち出し、数秒程するとそれらが光り輝き、一枚の葉として地面に落ちた。ナーベラルがその現象に、シズが産物に驚く中、賢王はその作業を淡々と続けていく。

*

その一方、他プレアデスたちが管理の一端を担う、大森林内の農場、及び生け簀では……………

「……………ねえ、ルプー？」

「あたしのせいじゃないっす」

「目を逸らさないで」

「あたしのせいじゃないっす」

畑には巨大なカボチャが無数に転がり、巨大なトウモロコシが立ち並ぶ。他の植物の生育への悪影響は、現時点ではないようだが、悪戯好きのルプスレギナの性格と、カボチャの異様な大きさから疑われてしまい、少しばかり後ろめたい好奇心もあつた為か、ルプスレギナは目を逸らしている。

名を『ペピポパンキン』、そして『オオモロコシ』というこれらの植物は、文字通りの巨大なカボチャとトウモロコシであり、見た目通り食用にもなると共に、また他の用途にも使うことが可能なのだ……………彼女たちだけでは、後者の用途を知る術も、そのように運用する術も持ち合わせていないのだが。

「とにかく、これは撤……………収穫ね。明らかに異様ですし、モモンガ様に報告しないと」

「まあ、そうなるっすよね。にしても、こんなの植えた覚えは無いんすけどねえ」

ぎっしり実の詰まったペピポパンキンを軽く叩き、ルプスレギナは首を傾げる。事実、これらはここに植えられたものではなく、元々埋まっていたものが農場として整えられた広い土地で無事発芽、成長したものだ。自然の中では中々万全な生育が可能な環境が整わないのだが、森の中に作られたこの農園は綺麗に条件が揃っていたわけだ。

そんな、イレギュラーな作物の収穫に二人が移る中、生け簀では。

「えーっと……………なんだろう、アレ」

「刃物、みたいな感じだけとお……………おさかな、だよねえ」

「そ、それもだけど……………大きいのが、多くない？」

拡張され、生け簀へと作り替えられた元ため池。湖と繋がっている

水源は、地上での魚類の飼育などの為、栄養価の高いと思われるエサの供給などを積極的に行っており、それが湖に生息する魚の来訪に繋がったようだ。その中には、刃物のように鋭い体を有する異様なモノから大きな口吻を持つ巨大魚、竜のソレに近い質感の鱗に覆われた魚など、初めて見るものも。

「これ、獲った方がいいんじゃない？」

「けど、私たちじゃ、万一のことがあったら」

「えーい！」

「エントマ様!？」

一般メイド二人が驚く中、重しのつけられた網をエントマが投擲。大量の魚を確保、となるかと思われたものの、鋭利な体を持つイチノタチウオによりネットを切り裂かれてしまい、見事目論見はご破算。イチノタチウオ、カジキマグロはそのまま武器に加工できた他、ヨロイシダイの強固な鱗は防具の素材となった為、勿体無いと言えれば勿体無いのだが……生半可な刃物より鋭利なイチノタチウオの危険性を鑑みれば、この結果でよかつたというべきか。

「あううう……」

「ネットではダメ……ここは素手で！」

「いやいや、危ないからやめよ!？」

れつきとした効果を持つ装備品とはいえ、一般メイドたちのレベルは最低の1。最大限の安全を確保しているこの農園の内側でのみ活動を許されている事もあり、無茶は許されない。徐々に、本当に徐々に、本人が自覚できない程徐々に変化が起きているものの、当然心許ない程度でしかなく、戦闘能力などある筈もない。

賢王が離れていても、この森において確立された安全圏は損なわれない。彼女に従う者たちには裏切るだけの利益が無く、また強大な敵から縄張りを護る為にも、彼女の知略と知恵が不可欠。また、ナザリックも確かな益を森の住民に与えており、そうそう害をなされることもない。ある意味では、人間の街以上に安全と言えなくもない。

「ええ……どうしよう?？」

「ユリ姉、ちよつと来て！」

エントマが首を捻る中、ソリュシヤンの叫び声。各々が作業を切り上げて向かうと、そこには

「し、痺れて動けませんん……」

「ああ、ホワイトブリム様あ……」

いろいろな意味で、大惨事。茸栽培の為の設備で、文字通り一大事である。

「暫くの間、ここは立ち入り禁止にしましょう。そして、これらの駆除を」

ビン詰にされた、二種類の茸……触れるだけで大の大人をも麻痺させるオオマヒシメジ。それに加えて、吸い込むだけで竜にすら幻覚を見せる猛毒の混沌茸と、文字通りの一大事である。実際、耐性を持たぬ一般メイドたちに被害が出ており、更に混沌茸の場合、その作用が別の意味で危険極まりない。

創造主に会いたい、言葉をかけて貰いたいという願望は、多くのNPCが抱くモノ。前線に出ている為にそんな願望に浸る間も無い上位NPCならばともかく、戦闘能力に乏しく、そのせいで苦しんでいるNPCたちにとっては、文字通り劇物にしかならない。二つの意味で、早急に対処しなくてはならないモノだ。

「モモンガ様、デミウルゴス様にご報告っすね。っつーか、孢子だけでコレっすか……」

「それどころか、コレに至っては触れただけで麻痺させられたわよ」

ブループラネットが居れば、『カエンタケみたいだな』など？気な感想を述べたかもしれないのだが、当の本人はここに居ない。どちらにせよ、危険であることに違いはない以上、サンプルを確保した後は駆除の徹底が成される事だろう。

そして、この報告から十分とせず、茸の栽培所への立ち入りに際し、各種状態異常への完全耐性確保が絶対条件として下され、モモンガの私物からそれを可能とする装備品が支給されることとなるのだが、至極当然の結果と言えよう。

EX―超越者たち

大陸、南方――エリユエンティウより、更に南。

「キュアアアアアアオオオオオオオオ――ツツツ!!!」

標高の高い山嶺が立ち並ぶ領域を移動する、巨大な積乱雲。

警戒と警告の咆哮が轟く空を舞うのは、美しき金色。一部結晶が析出した、鋼龍に近い姿を持つ古龍は暗雲へと消え、荒れ狂う空の中の激戦が幕を開ける。禍群を生み出す対龍をも退ける嵐に挑む、金塵纏う美しき龍を見上げ、異邦からの来訪者、ヒトならざる異形は静かに零す。

「自然、ヤバいわ。思ってたより、遙かに」

「言ってる場合じゃないだろう!?ほら、さつさと逃げるよ!天神様の争いに巻き込まれる!」

森でひっそりと暮らすヒトたちは、そんな客人を急かし、嵐の勢力圏外を目指し、急ぎ移動。この一帯に住まう者にとっては、外部からの危険な存在の侵入を妨げる、ある種の守護神であることに違いは無いが、同時に在るだけで害を齎す神でもある。あくまで、その力が結果として益を齎すだけであり、彼らは何処まで行っても、無力な存在であることに違いは無いのだ。

その信仰は、龍に届くことは無い。ただ、あるだけで振われる力による益を享受し、害を避け続けることで、生存を続けるのみ。幸いなことに、空は大荒れで、古龍の気配によりモンスターたちも戦闘より逃走を優先する状況であり、この領域に住まう者たちが逃げるには充分だ。

「ほれ旦那、コレ被るときな!」

投げ渡されるのは、この一帯の重木を加工した外套。非常に高い強度と、衣類としての快適さを併せ持つ逸品でありながら、この一帯では当たり前のように用いられるモノでもある。それこそ、北西の辺境地に知られれば、喉から手が出るばかりに求められる程上質なモノだ。それを雨風を凌ぐため被った異形と共に、森に住まう者たちは嵐龍の力による暴風域から逃げていく。

一見、何かの前触れに見える激突であるが……その実、この戦闘はただの偶然。金塵龍が好む水源が存在するこの地に戻った時、不運にも嵐龍が鉢合わせただけ。というのも、この一帯の河川には砂金などが多く含まれており、適切な技術と安全の確保が叶えば、ソレで栄えることが出来る程。そしてその砂金は、この山林地帯のすぐ外部で得られる特殊な鉱物と共に、金塵龍という種の特徴を形作る重要な要素のひとつ。

この地を好む一個体に過ぎないながら、全体で見ても上位に位置する実力者同士である為、なあなあで済ませる訳にもいかない双方は、一層激烈な戦いを繰り広げる。暴風が、舞い散る結晶が爆ぜ、龍雷を纏う激流がそれらを切り裂き、金色の体躯に、漆黒の体躯に傷を刻みながら、大地を切り裂き、吹き飛ばす死闘は幕を開ける。

「退散退散。冗談抜きに、命が幾つあっても足りませんね」

「そりゃそうさ。だから、こうやってできることを最大限やるのさ」

巫人の男が静かに笑い、空の暴威を見上げる。

そこでは、光の球体に身を包むガルバダオラと、それに対抗するように多量の水と龍殺しの力を宿す竜巻を身に纏うアマツマガツチの姿。同時に、雲の消し飛んだ一帯を尋常ではない輝きが満たしていき、地上の生命は一目散に逃げを選ぶ。

微細な結晶を風に乗せ、金塵龍自身を包むように、球状に薄く展開したソレの正体は結界———天空に撒き散らした結晶により、陽光を乱反射させ続け莫大な熱量を生み出し、周囲一帯を文字通り蒸発させる絶技より身を護るための、彼の龍唯一の防護手段。微細な結晶が光を増幅していき、水が形を保つことすら難しくなる中、嵐龍は凄絶な竜巻を以て、大地を満たす水と土砂を巻き上げ、それにより熱量から身を護る。

成程、これは災害だ。人知の及ばない、逃げるしか無い天災。抵抗などとんでもない。

「ワールドエネミーどころじゃありませんね、アレ」

文字通り、地形を丸ごと変える程の激突。真つ当な生物が巻き込まれれば、命は無い。

だが、彼らの超越者と呼ぶに相応しい怪物の多くは、あくまで爪を隠しているだけで、大陸各地に散らばっている。その根幹にあるものが『ユグドラシルプレイヤーへの警戒』であるのか、はたまた『真なる竜王への警戒』なのか。それともただ好ましい地に根付いているだけなのかなど、違いは多々あれ、この世界は未知と、それを遥かに超える脅威に満たされているのだ。

*

その、脅威の数々……中でも最たるモノは、遙か東方の水底に。水という物質の常識を覆すかの如く、赤熱した海域。並の生物は生育すら困難であろう領域は、大陸と巨大な構造物を隔てるかの如く広がるソコの深奥に、『厄災』は住まう。不死者の王が秘めたる、使えば龍に排斥される死の力でのみ、完全なる殺害が可能となる大地の現身は、灼熱と共に紅光を放ち続ける。

その領域に踏み入る事が叶うのは、ごく一握りの超越者のみ。

水の中を伝う音に、不死とも称される絶大な生命力を有する『煉黒龍』は顔を上げる。

水底を四肢で歩む異質な龍は、それを静かに見上げる。

そう、異質。生物としては、明らかな欠陥であろう。その身を包む鱗は全て逆立ち、水の、空気の抵抗を欠片も受け流すことは出来ないというのに、その体軀は煉黒龍程でないにせよ巨大。その胴体をも包み込めるであろう巨大な翼も、水中という環境に住まう生物としては不要と言わざるを得ない。

何より、ただ在るだけだというのに、赤熱した海水中を黒雷が奔り、水中だというのに無数の火の粉が舞い散る。ただ見ているだけならば『幻想的』と口にすることも許されたかもしれないが、これは現実。しかも、起こっている現象は異常そのものなのだから。

「——ッ」

黒き巨龍が立つ。後足で水底を踏み締め、太く強靱な尾で大地を揺らし、火山の如き形の各器官から、溶岩にも似た赤熱する体液を噴出する姿は、最早龍というより火山の化身。そして何より、巨大……

仙高人が小さいのではないか、と誤認する程だ。そして何より、深海の闇の中、赤熱する体液の流動により輝く姿は、見る者に恐怖を刻み込む。

最古の龍に連なる『黒龍』の一角、『煉黒龍』グラン・ミラオス。

最強の竜王の、旧友が眠る地を守護し、同時に監視する怪物は、終焉の現身とも呼べる同胞を、静かに睨む。生物として異端であると共に、同じ古龍としてすら異質を通り越して異常とも呼べる怪物が、何故わざわざ動いたのかを問い詰めるように。

「――」

対し、もう一方の禁忌『煌黒龍』は臆することなくその巨影を見上げる。無数の角が折り重なり形作られた『天を統べる角』を有する古龍は、水の中響く声と視線の交わりのみで意思疎通をこなす。そこにあるのは、共通の懸念であつたらしく、一つの世界など容易く滅ぼすことが可能な怪物たちは静かに領き合い、巨龍は静かに倒れ込み、翼龍は水底を蹴り、光の届かぬ領域から空高くまで、瞬く間に飛翔する。

「――キユアオアアアアアアアアアアッ!!」

そう、飛翔。

そこに適応した生物が住まう深海域から数秒とせず、海の更の上に広がる空へと舞い上がった。体にかかつていた強烈な水圧が、瞬く間に消え失せたことによる不調も無ければ、全身を包む逆鱗による水の抵抗、空気の抵抗による負荷も、疲労も感じさせない。そうある事が当たり前であるかのように、終焉の現身は空を舞い、空気を打ち高くへと翔ぶ。

それと共に、空は瞬く間に暗雲に包まれる。巨大な雹、大粒の雨、そして荒れ狂う雷轟の中心を飛翔する『煌黒龍』アルバトリオンは、それらの全てを意に介さない。紅黒から蒼白へと纏う光の色彩が変化している事も、その変化に伴う余波で、赤く染まる『厄海』の表層が丸ごと蒸発したことも。それにより、厄海が荒れ狂った事も、その余波が大陸にまで波及することも、恐らく欠片も気にしていないのだから。

龍とは、そういうものだ。在るだけで災いとなるからこそ、そこに

悪意など介在しない。そんなものとは程遠い、何処までも純粹な天災。生命でありながら、生物として規格外の存在。そして何よりも、『黒龍』の名を持つ、始原の龍に連なる古龍とはそういうものだ。規格外の規格外、理不尽という言葉すら生温い理不尽……世界を滅ぼす厄災とは、そういうものだ。

「奴まで動く、か……ツアインドルクスめ、何をした？」

それを遥か彼方より知覚したのは、真なる竜王が一角
フライトネス・ドラゴンロード
『七彩の竜王』。

強大なる竜王の一角は、忌むべき存在と、何を以てしても超えられぬ怪物とへ視線を向ける。

「私に言われても、何もわかりませんよ。既に、スルシャーナ様たちがお造りになられたスレイン法国は、とつくに我々を必要としなくなっております。だからこそ、私は彼らのもとを離れ、世界を彷徨ったのですから」

柔和に笑うのは、スレインが信奉する神の石柱『死の神』の第一従者とされたNPC。逞しく変わり続けたスレインを離れた、唯一生き残っている従属神は、己を敵視する竜王にすら柔和に接する。あくまで温厚な振る舞いに対し、変に敵対的になる訳でもなく、七彩の竜王は溜息を零す。

「そうだったな……ああ、忌々しい。忌々しいが、奴らが無ければ、我が子孫は……」

真なる竜王を超える、数多の脅威。覇種なる弩岩竜に至っては、始原の魔法であろうと、単純な攻撃魔法では容易く屠ることも出来ぬ強敵であり、スレインを立ち上げた六大神の遺産無くして撃破は不可能であったろう怪物。彼らの世界ではギリギリ対処可能な存在であろうと、この世界にとっては危険極まりない大災害となる。

そう、七彩の竜王を監視する、灼熱と極冷を纏う神々しい龍もまた、ひとかどの厄災となる。

「貴様は動かぬのか？」

その行動原理を知る竜王の皮肉に、極致に至った灼零龍が動じることは無い。

「……………相変わらず、わからぬ奴だ」

忌々しそうに吐き捨て、多くを知る竜王は西方を睨む。

「今更、私に出来る事はありませんが……………言葉が通じるのなら、理由を知りたかったですね」

自分たちの手を離れはしたものの、スレイン法国に深い思い入れのある身として、禁忌が動く程の脅威がある、という現実に思うところはある。力になる事は難しくとも、何かしらを伝えるくらいは可能な筈なのだ。が、あまりに情報が無いが為に、何もできないというのが現状だ。

それこそ、何が龍たちを警戒させるのか、それを伝えることが出来れば、最悪の結末の回避だけは確実となる。だが、それを知る手立てが存在していない以上、伝える事も出来はしない。現状、北西の辺境に現れたプレイヤーと直に会った訳ではない超越者が、わざわざそれを伝えてやるだけの慈悲を示す理由も、ありはしないのだから。

「フン……………龍よ。我が曾孫が戦うとなれば、私も出向かせて貰うぞ」
竜王の言葉に、彼を監視する超越者『灼零龍』エルゼリオンは静かに頷く。

高い知性に加え、炎の如き情熱と氷の如き冷静さを併せ持つ古龍は、決して薄情ではないのだ。

300—人間たちの

リ・エステイーゼ王国、国王直属の戦士団が、馬を駆り野を駆ける。

「——戦士長！」

その先頭を駆る男、ガゼフのもとへと、焦燥を隠さず接近する者が一人。

「北方、交戦中のモンスターの群れあり。南方に回るべきかと」

「モンスターの？」

怪訝そうなガゼフへと、続けて接近する者が。

「南方より、スレイン法国、及びアベリオン聖獣連合の部隊が接近中ですよ」

「ということは、あちらの安全は粗方確保された、ということか」

スレイン、アベリオン共に、危険地帯と隣接する環境にある国家だ。

その為、帝国が事態に対処する間にも、自国への影響を考慮し、中々に動くに動けなかった。その点では、強大な古龍が存在するアゼルリシアを始めとする、周辺環境が防波堤代わりとなる王国は比較的古龍の影響を受け難く、事実としてアゼルリシア以西の大森林などのモンスターは特に恐慌を起こすでもなく、多少警戒心が強まる程度に留まってくれている。

「キュアアアアアアアアツ!？」

「ツ！」

「ストロノーフ殿！」

そこに響く、モンスターの悲鳴。それに警戒レベルが高まる中、戦士団のもとへと両国の精鋭が集う。それこそ、古龍クラス以外であれば一日以内の討伐も可能であろう、実力者の集まりであるが、この状況であるからこそ誰もが油断することなく、最大限の警戒と共に戦力を集結させることを選んだ。

「我々が魔法で偵察しよう」

「では、我々は戦闘に備えよう。術師隊、強化魔法を」

スレインの魔法等がユグドラシルのモノを基調としているのに対し、アベリオンの部隊は巫人の知識、技術を人間に扱えるよう調整し

たものなど、比較的独自のものが多い。かつての亜人たちによる凄絶な争いの中で発展した知恵、技術の数々を組み合わせ、混ぜ合わせ形作られた独自のソレを、惜しみなく行使していけば、彼らは十全を更に超える力を得る。

「……………そんな馬鹿な」

その中で、呻くような声を零す偵察部隊の一人。

「なにがあった?」

緊張を孕んだ声に、信じられないとばかりに応答。

「推定難易度、270前後の怪鳥が、二匹のドスランポスに一方的に撃破されました」

「……………なに?」

「詳細を。特異個体の可能性もありますので、なるべく細かく」

聖獣連合のケラルト・カストディオが険しい表情で詰め寄る中、突如咆哮が響く。

「キュルアアアア……………キュアオオオオオオオツ!!!」

「っ、咆哮!?!」

驚愕し、上空を見上げるも、声の主の姿は既に無く。

僅かに漂う金色の鱗粉が陽光で煌く中、青鳥竜を中心とする大森林南方の精鋭が動く。

「ギユオツ!ギユオツ!ギユアアアアツ!」

数にして、二十に届くかもギリギリの鳥竜たち。戦士団にも匹敵する統率力を発揮し、速やかに移動を開始したモンスター群は、綺麗に人間の集落を避けるルートを選び大地を駆けていく。本来恐れるべき古龍の脅威が迫る中、彼らは忌べき災厄の在る東方へと進軍していく。

何故なら、古龍が迫るだけで、実際に出現している訳ではないと理解しているから。

古龍が現れたのなら、彼らの王が自ら出向くことは無い。そうであれば、生き残れていない。

「警戒を続ける。ストロノーフ殿、我々も」

「ああ。北方への警戒を絶やさず、進軍するぞ」

「その前に、先んじて連絡を行うべきでしょう」

ケラルトの指示のもと、移動速度に優れた巫人たちが先んじて伝達の為に発つ。そして、そちらに過度な警戒を持たれないよう、ニグンら陽光聖典は追加の天使を召喚、群れへと偵察に向かわせようと動く。その判断は、決して間違いではない。間違つては、いなかっただなのだ。

「キュルオオオオツ!!」

「っ!」

「またこの声か!」

空から響く咆哮と共に、鳥竜の群れが加速。その中、ガゼフは一人弓を構え、空を射抜く。

「キュルオオツ!」

その矢を翼で弾き、姿を現したのは、一体の鳥。一見すると竜の特徴があまり見られない鳥竜種モンスターは、大きく発達した翼で空に浮かび、赤い瞳で地上を見下ろしている。赤く染まった翼に、対照的な藍色の羽毛。金色に染まった頭部の羽毛と翼爪が、まるで道化師のような雰囲気を作り出している。

何より恐ろしいのは、このモンスターは先程まで、完全に透明化し、姿を消していたことだ。

「な、あ!」

「そのようですね。悔つていたつもりはありませんが、これは……」
「斥候としては、最優という他あるまい。友軍であれば、心底喜ばしかったのだがな」

静かに地上の人間を睨む『朧隠』は強く羽ばたき、高空へと消える。高い知能を持つ鳥竜の一体は、あくまで人間たちと戦う事ではなく、知恵ある魔獣を主とする仲間たちの、安全の確保を目的としているのだ。警戒はあれ、敵意や害意が無い事を察知した以上、警戒されている事を伝えたからには用もなくなった。透過鱗粉を纏い姿を消せば、もう人間の知覚では追跡できない。

その意図が伝われば兎に角、人間側は知りようがない。

「不味いな……これは、不味い」

「追うぞ！あそこまで吼えられたんだ、今更隠れても意味はあるまい！」

レメディオス・カストディオが叫ぶも、ケラルトは首を振りそれを否定。

「いえ、距離は置き続けます。迎撃拠点まで追い込み、挟み撃ちにするのが理想的でしょう」

「我らはあくまで援軍。本来の目的は、東からの襲撃への備えであることを忘れるな」

バザーの戒めるような言葉に猛省するレメディオスを余所に、彼らの方針は決定される。

「天使を召喚せよ。距離を置き、奴らの警戒と監視を行う。撃破されたなら即座に報せろ」

「心得がある者は、弓を常に手元に置いておけ。空を制されては敵わんからな」

精強なモンスターたちを警戒し、三国の合同部隊は進軍を続ける。

*

その頃、帝都アーウィンターでは、国内の調査結果が報告されていた。

「——以上となります」

「チツ……ああ、すまん。ご苦労だった」

ジルクニフにしてみれば、優秀だからこそ理解できてしまう『最悪』だった。

「よりによって、あの『響狼』どもまで静まっているとなれば、確定では無いか」

「古龍、ですな。こうなつては、不平不満も零せませぬわい」

心底うんざり、という感情を隠さぬジルクニフに、フルーダは大真面目に頷く。

「周期的な巡回狩猟が止まっている事からも、間違いないかと」

「ロックブルズ家の者として、この事態は異常だと断言できますわ」

帝国四騎士が一人——使命として、一族代々強大な牙獣を監視し続けるロックブルズ家の令嬢であるレイナースがそう断じれば、誰も

異を唱えることはできない。何より彼女の言葉には、彼女が四騎士に数えられるに至るだけの武勇に裏打ちされている。一族の使命と真摯に向き合い続けた彼女の言葉を否定できるのは、同じロックブルズ家の人間以外に存在しないのだ。

「監視は必要か？」

「いえ。既に危険と判断した地は完全封鎖しておりますので、心配には及びません」

力強く断言したレイナースを一瞥し、ジルクニフは続けてフルーダへと視線を移す。

「儂からも、それは断言できますな。他のモンスターたちも、移動経路は西方に集中しております故、現在帝国騎士団には各村落の住民の、都市への避難誘導を行わせております。事後報告となつてしまいました」

「構わん。元より、有事に備え各都市への支援を行うことは決定していた。少しばかり必要な物資が増えるだけし、お前たちの判断が間違っているとも思わん。間違っていたとしても問題無い以上、何も言うことは無い」

ジルクニフも王族として、バハルス帝国で確認されている、されていたモンスターやその生息地などの知識はしつかり有している。だからこそ、より深い知識を持つ者たちの決断であるのならば、相応の信頼を以て認める。特に、魔神騒動の時より生き続けるフルーダと、強力無比なる『響狼』について誰よりも深く知るロックブルズ家の者の判断なら、異を唱えるのは無能のする事であるとすら思っている。

「調査の結果は理解した。そちらからも、捕捉や訂正は無いのだな？」

しかし、完全に鵜呑みにはしない。こと知識量で彼らを超える『協力者』がいるのだから。

「問題ありません。ですが、『爆狼』の行方が不明である以上、早急な避難は必要かと」

その名が出たと共に、空気が一変。

「あのモンスター………陛下」

「ああ、奴が現れたようならば、モモンガ殿に協力を仰ぐさ」

隻腕の女騎士は、その返答に頷く。

「賢明ですな」

「あれのせいで、四騎士二人と精鋭騎士団一つ、お前の弟子の七割が殺されたのだぞ。我が国の手に負える次元でない以上、他の協力を仰ぐ他あるまい。万が一現れるようなことがあれば……………」

ジルクニフの視線に動じることなく、スレイン法国からの協力者は頷く。

「現在、『一人師団』と『疾風走破』が、我が国の精鋭たちと共に調査を行っております」

「……………苦労をかけるな」

帝国に知らぬ者は無い、過去最大級の被害を齎した怪物。

ただでさえ古龍が迫る今、再び現れようものなら、それは最悪中の最悪となる。故に、刺激せぬよう細心の注意を払いながらも、漆黒聖典まで動かしている事実からも、その危険性はよくわかるだろう。

しかし、彼らがそのモンスター……………スレインが『爆狼』と命名した、一度のみ確認された牙獣を発見することは、恐らくないだろう。レイナースから左腕を始めとする多くのモノを、帝国からは最精鋭の四騎士二人と、彼らの率いた精鋭騎士団の実に七割を奪い去った獣が、まさかドワーフたちの住まうアゼルリシアの、深部に居を移したなどと、誰も思うまい。

「だが、お陰で問題も粗方片付いた」

「では！」

明らかな私心混じりのフルーダを無視し、ジルクニフは指示を下す。

「フルーダ以下、帝国魔法省の者たちには、東部の防衛戦に加わって貰う」

敗北は、国の滅亡を意味する。戦える者には、命を懸けて貰わねばならない。

『ハッ！』

そして、それを躊躇う者は、ここに居ない。

「レイナーズらには、陸路の確保と商人の警護にあたって貰う。お前たちが生命線だ」

「承知しております」

頷く精鋭騎士たちを見据え、同時に冷静な思考で計算を重ねていく。

(あとは、どれだけ確保できるか、か)

戦えぬジルクニフとて、ただ命ずるだけではない。国庫は疎か、私財も使い潰すつもりであり、現在文官たち総出で、あらゆる物資の確保のため各地を奔走している。彼に出来る事は、頭を使う事と力ネを使うコトくらいである以上、その双方で出来得る限りのことをする他ない。

不確定要素があろうと、それは変わらない。

「物資なら幾らでも工面してやる。それ以外は、お前たちに任せるぞ」
できる事に全力を尽くし、出来ない事は出来る者に任せる。この世界の為政者に必要な素質だ。

そしてこの局面、ジルクニフのような戦力を持たぬ王族に可能なのは、物資などの支援のみなのだから、歯痒いものだ。策を弄したところで、敵も規模も曖昧である以上大した意味は無いため、本当に財力に物を言わせた物的支援しか出来ない。竜王国の女王であれば、始原の魔法による攻撃なども行えるのだが、ジルクニフにそんな心得がある筈もない。

だが、その政治手腕とカリスマは、紛れもない一級品。彼にしか出来ないことも、確かにある。

「さて、では私はそろそろ発つぞ。方々に頭を下げて回らねばならんからな」

冗談めかしてはいるが、それだけ莫大な量をかき集める必要がある、ということだ。陸路の安全も重要であるが、そもそも物資を確保できなければ、徒労でしかない。部下の働きを無駄にしない為にも、何より戦う者たちの士気を保ち、犠牲を抑える為にも、ジルクニフは全力を尽くさねばならない。軽い口調に反し、その肩にかかる責任は重大。

それを感じさせぬ足取りでジルクニフが立ち去れば、残された者たちも動く。

「弟子たちを集めよ！早急に！」

魔法狂いのフールーダがハイテンションに騒ぐ中、レイナースは冷静に部下たちに指示を出す。

「まずは、輸送路の周辺地理と生息モンスターの情報を。情報が無ければ話になりません」

帝国騎士として召し上げられる前から、多くのモンスターを退けてきた女傑。隻腕となろうと、知識も技巧も衰えることは無く、情報を求めた次の瞬間には、別の部下へとあらゆる環境で用いることが可能な戦術を可能とする物品の手配を指示するなど、見事という他ない手際を見せつけている。

「各都市で運用される主要街道と、その周辺で確認されるモンスターも調べねばなりませんね」

ロックブルズの当主としての領地運営の経験に、戦士としての戦闘経験が加わり、貴族家の次男であるニンブルとは視点から異なる思考を可能とした彼女を選んだジルクニフは、間違いなく有能だ。彼女が任命されたからには、陸路の安全は確約されたも同然なのだ。

「我らも合流を」

スレインの者たちも、帝国のマジックキャスターたちと共に出立するべく、準備の為退出。

前線から離れた場所でも、確かに人々は動いている。それぞれが、同じ目的を果たすために。

31—続く襲撃

地図に書き加えられていく、モンスターのアイコン。

「よろしいのですか？」

「無論、よろしくはありません」

魔将の疑問に、デミウルゴスは即答。しかし、パンドラの手もデミウルゴスの思索も止まらない。

「ですが、前線で死者が出てしまったのであれば、そうも言っていないかもしれません」

「死者は士気を下げる原因になりますし、単純な手数減少にも繋がりますからね」

二人が見下ろす地図は、ローブル熔山帯のもの。龍の亡骸より生まれた、灼熱の地だ。

「やはり、空白が多いですね」

「無茶を言わないでいただきたい」

「冗談ですよ。この辺境でも最上級の魔境なのですから、やむを得ないでしょう」

その内情は、驚くほど知られていない。住まうモンスターは断片的に知られていても、内部の地形などは、まず情報からしてない。なにせ、過去の数百人規模の、人間亜人混成の精鋭調査隊の生存者は僅か数名であり、彼らも命からがら帰還したため、地形など頭に入る訳も無い。

ではなぜ、そんな魔境を調べ直しているのか。

「鉱脈があるとすれば……いや、けどなあ」

「便宜上、過去の地名からプラートと呼びますが、そこだけは行きませんからね？」

「いや、わかっていますよ？ですが、鉱脈の心当たりがそこしかないんですよね」

鉱脈……つまり、鉱物資源。

「でしょうね。つまり、そこが最も『深い』場所と言えるのかもしれないません」

「プラートより離れたとなると、ホバンスやデボネ周辺が狙い目か、或いは……………」

「ロイツはダメですね、アルベドとシャルティアが言っていましたし」

「ああ、赤い飛竜と黒い巨竜が争っていたという……………よく生きてましたね、あの二人」

そんな二人の交わす言葉に、魔将は諫めることを諦めた。覚悟は固く、同時に自分たち程度では助力すら出来ない、しても意味を成さぬであろう魔境のことなのだろうと察し、その先の補助を行う方が有益だろうと判断を下したのだ。万一のことがあろうと、この二人がどちらも死亡する可能性は低いと考え、より確実に『次』へと動けるよう、備えることを選んだ判断を、即座に言葉として投げる。

「それでは、我々はどのように準備を？」

「迎撃地点、及びドワーフ国の鍛冶師たちに通達と支援を」

「拠点側の鍛冶師が拡張を求めているようでしたら、そちらのサポートもお願ひします」

淀みなく即答しながらも、二人は地図を睨み続けている。

「では、手始めに旧カリンシャ周辺の調査から、ということまで」

「そこから南回りに進み、旧リムン、旧ホバンスを目指しましょう。北部は危険です」

ドワーフ国だけでは、そう多く産出しない未知の鉱物。その殆どが、かなりの深度からのみ産出して、そこより浅い場所では一切産出していない。その為、試行に使う分を抜くと武器一つ作る事すら贅沢であり、量産に使うには到底足りない。それ以外にも、問題は山積みなのだ。

しかし、二人の知者は気付いた。これらの鉱物資源と、森の資源の源流は何か、と。

そして何故、ローブルでは『龍脈炭』などという未知の鉱物が得られたのか、と。

「……………有事の際には、私が殿を務めましょう」

「自分で言うのもなんですが、そうした方が効率的ですからね」

結論だけ言えば、彼らはローブル熔山帯に、まだ見ぬ鉱脈が眠る可

能性を把握した。

そして良質な武具を求められている今、ユグドラシル産でも高位のものを人数分、そこに予備も加えて量産しようというのは無謀にもほ
どがある。ナザリツクの在庫を把握しているパンドラがそう判断し
た以上、デミウルゴスも別の手を探らざるを得ず……揃って、この
危険地帯の存在を思い出したのだ。

危険すぎるが故に人の手が加わっていない、古龍の骸より生まれた
大地。見返りは十分の筈だ。

「では、善は急げです」

「とはいええ、長居せず定期的に戻るようにはしましょう。その方が安
全ですので」

と、二人は早速場所の目星をつけ、過去の転移地点を利用して旧聖
王国へ向かう。

*

事情が変わろうと、モンスターたちを取り巻く環境が変わることは
無い。

迫る災厄と、それから逃れんとする本能行動が、大きく狭まった陸
路とが、攻撃以外を選ばせることなく、モンスターたちを導き続ける。
ヒトの生存圏を侵される以上、人間も攻撃という手段で応じるほかな
いが、そうしなければ自分たちが死ぬ以上、モンスターが妥協する事
など出来はしない。

「キシヤアアアアアアアアアアアツ!!!」

鋭い咆哮が響く中、逃げるようにモモンガでも覚えのある異形たち
が転がり込んでくる。

「オーガにトロールかよ?!」

「こんな時に………ッ?!」

黒く染まり、赤い光をその目に宿す亜人たちは、次の瞬間に命を奪
われる。

「シャアアアアアア………ッ!」

両翼を地に着け、翼膜に角とを鳴らし威嚇する、狂える電竜。その
翼が、亜人たちの命を一撃で奪い去り、地面に紫に染まった鮮血と共

にその身を構成していた残骸をぶちまける。残虐なる捕食者である電竜は、しかしそれらをエサと見做すことなく、狂気と本能の入り混じった攻撃性のもと、障害物を排除すべく碧雷を纏う。

「来るぞー！」

(不安はあるが……やれなくはない、筈！)

と、モモンガが号令。一斉に身構えた中、野伏職を持つ数名が、異音に気付く。

「待ってー！」

「奇妙な音がする！いつでも避けられるよう、警戒してくれ！」

ギシ、ギシと軋むような、そこに呻きが混ざるような、奇妙な音。

その音が消えて数秒——身構えていたモモンガは、超高速で飛来したナニカの直撃を受けた。

「」

断末魔の声はない。彼の知覚を大きく上回る速度で飛来したナニカは、死の支配者の肉体へと直撃し、諸共に砕け散ったのだ。ビルド上の防御能力の低さを加味しても、これまでで群を抜いた一撃……：幸いなことに、マジックアイテムにより即時蘇生されたモモンガであるが、事実を理解するまでには時間を要した。

「………なんだ、何が起きたというんだ?!」

叫び、その身を濡らす毒々しい液体に気付く。

「う、えええええ!? な、なんだこれえ!? いや待て、そういえばぶつかったのは!?!」

沈静化も間に合わない、驚愕の連続。そこに至り、周囲の時間が動き出した。

「ツ、門の外だ! 外から」

「そこかあああああああああッ!!」

激昂したアルベドが駆け出す中、シズは急ぎモモンガのもとへ。

「モモンガ様!」

「シズはモモンガ様を! わたしはあの馬鹿を止めてきんす!」

激昂したアルベドを追いシャルティアが飛び出す中、泣きそうなシズに縋り付かれたモモンガは反射的に取り繕い、しかし結局理解が追

い付かないのは事実である為

「いや、大丈夫……ではないが、今はそれより！」

再度身構えんとするモモンガだが、幸いなことに電竜の注意は彼らから失せていた。

——キシユアアアアアアアアアアッ!!!

何かが噴出するような音に続き、大地を踏み締める音が響く。

「この虫ケラがああああああッ！」

激昂したままのアルベドは、毒々しく染まる巨虫へと躍りかかる。彼女の腕力を以て振るわれる刃は重厚な外殻を切り裂いていくが、効果があるようには見られない。が、鬱陶しく思われたのか、その四足で大地を踏み締め、力をため体当たり。すると、アルベドの体はボールか何かかと錯覚する程に、軽々と吹き飛ばされた。

「ぐげッ!」

「っ、ぶねえ………! 頭空っぽにして突っ走んな、この脳筋ゴリラ!」
「ぐ………!」

危機意識の差……アルベドも知識は有していたが、短期間で本能レベルに刷り込まれるまでの経験はしていない。対し、シャルティアは辺境の三大危険地帯の一つで、何度も命に係わる危険を体験してきたことにより、本能レベルで怒りより警戒を優先するよう、刻み込まれていた。

無論、双方の主へ向ける情念の重さの差異もあるのだろうが、この差は小さくない。モモンガが直々に設定を書き換えたことで、彼の潜在意識に感化され他のギルメンに対する忠誠、敬愛が綺麗さっぱり抜け落ちたアルベドであれば、尚の事。

「ああもう、クソが!」

「ッ!」

翼が振り抜かれ、二人の居た場所を過る。碧雷纏う狂竜が現れると共に、狂える重甲冑が動く。

「——ッ!!!」

蒸気を噴出し、大地を踏み砕き突撃する巨虫。その姿はさながら、大地を走破する重戦車。重量感と、不相応な機動力、そして不気味な

色彩を纏う巨大な虫……蒸気の噴出に伴う音と併せ、迫力満点どころではない。アルベドを軽々吹き飛ばせる膂力と併せ、普通に恐ろしい。何より、パワーのほどは既によくわかっており、巻き込まれれば只では済まない。

「チイツー！」

「クソがッー！」

片や激情を露わに、片や密かに激情の炎を燃やし、流線形の甲殻に身を包む巨大甲虫の進路から退く。それにより、凶暴な電竜の標的は巨大な甲虫へと移り、激突が巻き起こる。巻き上がる土砂の合間を雷光が奔り、細身ながらも強靱な筋肉を秘めた飛竜と、見た目通りの膂力と頑強さを発揮する甲虫の戦闘から距離を置いた二人は、広場へと続く門の手前に陣取る。

どちらも紫に染まり原色は不明であるが、肉弾戦で優勢なのは甲虫の方。巨軀に見合う重量は、さしもの電竜といえ容易く押し退けられるものではなく、圧倒されてしまっている。が、電撃を交えることで強引に『砲甲虫』を怯ませ、その膂力から脱するなど、一筋縄ではない。

「キシヤアアアアアッ!!!」

「っ、上!?!」

「なにを——危なっ!?!」

金切声染みた異音に気付いた二人は、上空から降り注ぐ液体に気が付き、咄嗟に回避。

地面に落ち弾けた毒々しい液を浴び、電竜は動きを止める。麻痺毒と二人が悟ったのも束の間、巨大甲虫は異臭を放つガスを噴出し、それに誘われるかのように空の甲虫が飛来。身構える二人を余所に、甲虫はその尻尾で宙を舞う甲虫を掴み、自身の頭上に押し付ける。そして、軋むような異音と共に口元にナニカ——体液を収束、圧縮していく。

「……………なにをしているの?」

「アルベド、構えなんし。多分だけど、あれが——」

より過酷な死線を掻い潜った経験が、シャルティアの中にナザリツ

クでも有数の危機察知能力を与えていた。お世辞にも頭がいい、とはいえないものの、この経験値と豊富な手札を有するビルドとが噛み合い、個としての完成度を高めていた。

「きたッー」

結果、ほぼ反射での『不浄衝撃盾』展開は、完全に相手の攻撃を防げるタイミングであった。

「——ッ」

しかして『甲虫撃砲』の次発を受けたのは、狂える電竜。

その頭を粉碎され、辛うじて音となった掠れ声を断末魔に絶命。彼女たちレベル100の戦士でさえ容易くは砕けぬ竜の頭を、一撃を以て破碎するその威力は、攻撃に転用するソレより更に圧縮した体液に、斧の如き形の大角を持つ甲虫を砲弾とすることで実現されるモノであり、モンスターへの命一つと引き換えの火力は絶大そのもの。その直撃がなにを意味するかは、眼前の飛竜が物語っている。

成程モモンガが不意打ちで即死したのも納得というもの。それはそれとして、許しはしないが。

「成程、テメエが……アルベド、こいつを拠点まで引き込みんすよ！」

「っ、そういうことね！」

アルベドが意図を理解し、守護者の中でも特に防戦に秀でた者として与えられたスキルを発動。巨大な甲虫……偶々北上した結果、不幸にも狂竜化してしまった未知なるモンスター、『砲甲虫』ゲネル・セルタス亜種は蒸気を噴き、アルベドの意図通りに彼女目掛け突進。

「あとは拠点まで走れば」

「走って逃げ切れる相手でありんすか？」

「……いいから走る！」

そして、二人は逃げる。大地を踏み締める重厚感たつぷりの音が、巨大甲虫が蒸気を噴出する事により発せられる甲高い音が、何より巨躯が猛スピードで迫る現実が、時間と共に二人の焦燥を加速させていく。

『お前たち、ワールドアイテムは持っているな!』

そんな声が頭の中で響き、驚愕で足を止めかけるのをギリギリ堪える。

「む、無論ですが、何故今!？」

「つべ、距離が——」

そして、その一瞬の失速で随分と距離を詰められてしまう。

だが、モモンガの返答のお陰で、気兼ねなく動ける人物が増えていた。

『恨み言は後で私に頼むぞ! とりあえず、全力でこっちに跳べ!』

「は? なにを——ツ!？」

「今はそれどころじゃ——ツ?!」

閃光、爆音、続けて衝撃。だが、不思議と苦痛は無い。

「よしっ!………と言いたいのが、コレ本当に大丈夫か?」

「一応、低位のモノなのだけど………あ、きた」

ゴロゴロと転がってきた黒と紅の鎧を、白金の鎧が見下ろす。

「えーつと………無事かい?」

「死ぬかと思つた!」

力強く、非難混じりに叫ぶ二人は、すぐに気付き背後へと視線をやる。

「……………ツ!」

「アレ、恐らくリ・エステイーズ近郊のモンスター並だね。幾ら万一に備え低位の魔法を使ったにしても、あそこまで動けるとなると、そうなんだろう。モモンガの気配が一瞬可笑しくなったから飛んできたけど、正解だったみたいだね」

外殻が焼け焦げ、しかし立ち上がれるだけの余力を残した甲虫の前に、ツアインドルクスは警戒を露わに言葉を零す。先の一撃を思い出してか、モモンガが微かに身震いする中、その一撃を目の当たりにしたアルベド、シャルティアが続げざまに見た事実を口にする。

「っ、そうだ! あの一撃ですが、あのモンスターの砲撃です!」

「砲弾はアレよりだいたいぶちっこい虫で、現状ここにはおりません! つまり、今のうちに!」

不意を打つように現れた、推定難易度300前後の、巨大甲虫——

この辺境では未確認の『砲甲虫』を前に、不死者の王はすっかり冷静さを取り戻した。

「なら、これ以上の被害が出る前に、仕留めねばな」

頼もしいまでに堂々と、モモンガは眼前の強敵を睨み返し、宣言した。

32—束の間の

『砲甲虫』とでも呼ぶべき巨大モンスター、ゲネル・セルタスの亜種。

「——ッ!!!」

「来るぞ！絶対に巻き込まれんじやねえぞ！」

設定として与えられた廓言葉を投げ捨て、シャルティアが叫ぶ。

種として通常のゲネル・セルタスを超える巨軀を有するモンスターの突進は、破壊力も絶大。更には砂漠地帯に適応した走破能力も加わり、一度疾走を開始すれば止めるのも至難の業。巨体と重量、速度と全ての要素を加味すれば、誰でも危険であると理解できる。

「ッ、あれで小回りまで効くってマジかよ!?!」

「厄介な要素のオンパレードだな……………ッ!」

強靱な脚力で縦横無尽に駆け回る姿を睨み、モモンガは思索する。

（死んだのが気にならないのは置いておくとして、まずは動きを止めないと……………と、なると!）

『《テンポラル・ステイシス時間停滞》ッ!』

対個人の、時間停止——すぐに効果が発揮され、砂漠の重甲冑は動きを止める。

「ありがとうございます!」

そこにシズが駆け寄り、罾を設置。時間停止が解けた砲甲虫は、突進の勢いのままソレを踏み、発せられる強烈な電流により拘束される。動きが止まれば、如何に強大なモンスターといえども出来ることは限られる。距離を取っていた戦士たちが一斉に動く中、ツアーなどのように遠距離攻撃手段を持つ者は、そちらを優先する。

『『清浄投擲槍』、喰らえッ!』

「はああああッ!」

シャルティアのスキル攻撃が穿った傷を、数多の武器が集中攻撃。

「いやあ、出遅れてしまったでござるなあ。某も働かねば!」

その言葉と共に飛び出した森の賢王は、同時に敵を睨み、思考を回す。

「虫……………あそこまで大型のは初めてでござるな」

賢王の生息域で、甲虫種モンスターは殆ど見られない。が、昆虫自体は生息しており、光蟲など日頃から利用している種もある。それらの十倍、どころでは無い体軀から、常識が通じないことを念頭に入れて、懐から次なる罠を取り出し、起動準備を整えると共に投擲。

「そんな戦士殿、これを！そのまま地面に叩きつければ使えるでござるよー！」

「感謝しますー！」

地面に叩きつけければ、ネットが広がり、続けて小規模な爆発が穴を穿つ。そこに甲虫が落下し、広がったネットが絡み付き行動を阻害する事で拘束手段として機能する。落とし穴に巻き込まれていない足と、頭部を護るように閉ざされた爪を除けば、攻撃手段など無いも同然のその体へと、戦士が攻撃を叩き込む中、後衛は彼らが手を出せない足を狙い、低威力や効果範囲の狭い攻撃魔法を叩き込んでいく。誤射の心配はあっても、それを気にする余裕は無い。

「消耗を考えねば、これが最善手にござるが……ぬっ?!」

魔獣の聴覚が、東方から飛来する複数の、虫の羽音を捉えた。

「皆の衆、散開を！」

察知した異変は、即座に伝達。勢力圏を、犠牲少なく維持し続ける上では不可欠な芸当だ。

「何かが迫つてござるー！」

獣の聴覚に由来する指示に従い、戦士たちが散逸。そこ目掛け飛来したのは、緑の弾丸。

「なんだ?!」

「あの時の……いえ、角が違う」

「どつちにせよ、危険に違いありません！」

防御能力に長けたアルベドが、防御手段をバランスよく有するシャルティアが警戒する中、飛来した甲虫は二対の肢で砲甲虫の外殻を掴み、何と落とし穴から引き摺り出して見せた。それに驚いたのも束の間、恩など感じていないのか、巨大甲虫は背に乗る、鋭く尖った角を持つ『徹甲虫』へと尻尾を叩きつけ、抑え込む。その動作に二人は身を強張らせ、続けて響いた異音により最警戒状態へと移行する。

「わたしらの後ろに回れ！死ぬぞ！」

「冗談じゃないわよ……………」

不運にも、北上していた『砲甲虫』。本来の配下である『斧甲虫』こそ二匹しかいないものの、森林部には原種である『重甲虫』、そしてその雄個体である『徹甲虫』が生息しており、当然彼らも古龍の脅威から逃れるべく西へと移動していた。そして、原種と亜種とは、生息環境や体格に差異があるものの、発するフェロモンはほぼ同一であり、それ故に本来無関係な徹甲虫までもが誘引され、こうして複数が現れる事となったのだ。

(何かを貯めてる……………それなら)

シズは拡散弾をカホウに装填し、持てる全てを使い狙いを定める。

(今……………ッ！)

スナイパー……………その名の通り、超長距離での射撃戦闘を前提とした職業であり、スキルを見ても長距離射撃戦向けのスキルも揃っている。それらを総動員すれば、シズ・デルタが狙った展開を引き起こすことも、不可能ではない。純粹な個人の腕前、武器性能の二つの要素を更に幅広く、事細かに補強できるのが、ユグドラシルの者の強みなのだ。

「……………ッ!？」

圧縮水弾を放たんとした口腔に弾が突き刺さり、炸裂。同時に圧から解放された体液も炸裂し、その頭を自らの力で吹き飛ばす事となった。強靱な外骨格を有する巨大な甲虫種モンスターをも粉碎するだけあり、それを撃ち出す水弾もまた非常に強力で、それが行き場を失い暴発した以上、砲甲虫もただでは済まず、その命を喪うこととなった。

「……………」

巨体が崩れ落ちる中、事態を飲み込めない徹甲虫は可愛らしく小首を傾げる。

だが、複数体飛来していることに加えて、その卓越した飛行能力を以ての突進攻撃の危険性に、紛れもない敵意を有するモンスターである以上、対処は決まっている。比較的小型だからといって、見逃す事

など出来はしないのだ。

「つ、ツアー！シャルティア！奴らを叩き落とすぞ！」

思考の復帰したモモンガが叫べば、他の者たちも口々に指示を飛ばし動く。

「あの羽虫どもを落とすぞ！攻撃を集中しろ！」

「突進と飛び道具に注意なさい！それ以外の攻撃手段は、見たところ持っていないわよ！」

アルベドが己の持つ情報を叫ぶ中、徹甲虫たちは飛来する矢、魔法から逃れるので手一杯。

そもそも、彼らの強さ自体は、砲甲虫に及ばない。種としてもそうだが、難易度の点で見ても、彼女たちを下回っており、森のヒエラルキーでも比較的下位に位置する存在。そしてアルベドの見立て通り、腐蝕液と突進しか対応手段がなく、その腐蝕液を撃つ暇もない以上、それこそ成す術がない。

彼らの不幸は、苦手とする電気、炎属性攻撃が、スタンダードな攻撃魔法として存在している事に他なるまい。その腐蝕液、鋭利な鎌、突進攻撃と粒はしっかり揃っているのだが、如何せん砲甲虫という大敵の後であることに加え、彼ら自身は比較的弱い部類であるのが災いしている。

「ハアッ！」

ツアーの操る武器が翅を裂き、甲殻を破碎し、深緑の甲虫を叩き落とす。地に落ちた瞬間、甲虫モンスターの死は確約され、冒険者や騎士の猛攻に晒されていく。その間にも、次々と空の甲虫が撃ち落され、その寿命を終えていく。狂竜症に侵されていない、或いは発症するに至っていないことも、一方的な印象を加速させてしまう。

「死ねやあああああッ！」

ついでに、アルベドとシャルティアはモモンガを殺された憎悪もあり、格段に苛烈な攻撃を叩き込んでいるせいで、余計に一方的に見える。それでも、素材として利用可能な程度 of 原形は留めている辺り、彼らの強度の高さと、それを木っ端微塵に粉碎する『甲虫激砲』の恐ろしさがよくわかるというもの。

改めて、一人異様に波の立たぬ精神のモモンガはそれを客観的に理解し、戦慄していた。

(怖っ……………マジでヤバいな、アレ……………ていうか、なんで俺はこんなに冷静なんだ?)

その要因は、彼がアンデッド……………死者であるが故に、死の実感が薄まっているのが原因だ。そこに精神作用の抑制などの要因が加わる事で、驚くほどに冷静な思考を維持できてしまうのだ。言い換えれば、先の死で『鈴木悟』にあった、人間らしい生存本能に由来する死への忌避が薄れてしまっている、ということでもある。

そして、不運なことにそれを察知できる者もいなければ、モモンガ自身もそれに気付けない。

「……………終わり、か」

来襲した甲虫たちは、討伐された。勝鬨の中、遠くを見つめるモモンガの横に、白金が立つ。

「一時、凄いだろうだね……………だけど、気を付けた方がいいだろう」「それは判っているさ」

「東方だけど、気配から判るだけでも、過酷な生存競争が繰り広げられている。恐らく、今後來襲するモンスターたちは、相応の強さを身に着けている事だろう。古龍の力も、相応に強大なもの判断していい筈だ。心配ではあるけれど、ボクもそう長く離れている訳にはいかなくてね」

グランセルの地に住まう『司銀龍』と、飛来する『冰龍』の存在は、アーグランドにとって最大の警戒対象。永久議員であると同時に、真なる竜王でもある彼は強大な戦力であり、他国の窮地といえどもそうそう動けるものではない。人間国家の窮地は理解しているのだが、自国の存亡がかかっている以上、他国も強く責めることはできない。

そして、当のグランセルの古龍二体は、迫る脅威へと最大限の警戒を抱いている訳だが。

「本当に、苦労しているんだな」

「ああ。ボクたちの主な武器は始原の魔法なんだけど、古龍にはそれが通じないからね。位階魔法を学んでいる者もいるにはいるけれど、

始原の魔法程の力を発揮するのが難しかったりと簡単ではないから、やはり強大な古龍を相手取るのは難しいんだ」

位階魔法の欠点は、まさしくそこだろう。高位階魔法を使える者が限られているせいで、手数確保さえできれば、帝国辺りの一般的なモンスター相手ならば十分に通じる筈のところ、全体的な威力の低さのせいで数を揃えてもジリ貧となってしまうている。無論、それらの要素が揃っていても尚、強大極まる壁となるのが『古龍種』なのだが。「その、強大な古龍が迫っていると思うと、頭が痛いな」

「そう、だね。最低でも二体はいる訳だから、尚更ね」

「……………え?」

最大の幸運は、他の者たちが甲虫の、拠点外の電竜の亡骸の搬送に駆り出されていた事のみ。

「え、え?」

「これまでの来襲者の気配を探っていたところ、大きく三つに分かれていたんだ。一つは普通の、そこらに居るようなモンスターの気配で、これ自体は大した問題じゃない。次に、今回のような狂ったモンスターで、その身を何かに蝕まれているのは確かだね。ただ、これについては少しばかり気になる場所があった……………」

含みのある言葉に、モモンガは無言で続きを促す。

「……………どうも、不完全な気がするんだ。何故、と言われると、上手く説明できないんだけど」

「それは、後程改めて尋ねさせてくれ。それよりも、最後の一つだが」「ああ、最後の一つは、また異なる力を宿したモノだ。こちらは、蝕まれている印象は無いのだけれど、気配からも恐怖が伝わって来ている。そして、この力は竜を蝕む力を拒絶しているようで、その身に毒々しい力が侵入した傍から打ち消している。恐らくだけど、この二つがそれぞれ異なる龍に由来する力なんだと思う」

見事な推察であり、年の功を感じさせるものでもある。そして、ほぼほぼ的中している。

「……………うわあ」

「ただ、恐らく友好関係は無いだろうからね。上手くいけば……………」

ん、上手くいけば、漁夫の利を狙えるかもしれない。あとは、龍殺しの力を宿した攻撃手段を揃えておくとか……ごめん、あまりいい案が浮かばないや」

「いや、そこは俺たちがどうにかするべき課題だから……けど、きつくないなあ」

「本当にね。古龍二体が住まう地が近いお陰で、今回の事態の危険性もよくわかるよ」

ツアーの実感の籠った声に、モモンガは静かに頷く。彼も、この世界に転移して早々に剛種古龍と対峙する羽目になり、更には悉く絶大な力を秘めた個体の情報にばかり触れていることもあり、その言葉に賛同する他なくなっている。対策を立てようにも、その前提情報からして足りていないこの状況は、モモンガにとって最も忌むべき環境であるのだから、尚の事だ。

「それじゃあ、ボクはそろそろ行くよ」

「ああ、助かった。そちらも、気をつけてな」

「そうだね、お互い気をつけよう」

そう軽い挨拶を交わした二人が、視線を門の更に分へと向けたところ

「……………」

大地を削り、木々を巻き上げる巨大竜巻が見えた。ツアーの知覚範囲の、更に外側で起きている現象であるのだが、それ故に規模が判つてしまう。言い換えてしまえば、途方もなく離れた先で起きた竜巻であるというのに、その規模が理解できてしまう。それはまるで、彼らの抵抗の意思を嘲笑うかのようなものであり――

「前言撤回だ。他の竜王に報せ次第、すぐ戻る」

焦燥を隠せぬ声と共に、ツアーが転移。そんな中、モモンガは大真面目に金銭勘定。

（あれらを総動員する場合の消費額が……で、あの時のダメージ量での消費量が――それらを合計して、万一倒された場合の消費額は最大で……だとすると、全滅の場合の必要金額は）

かつて、1500人のプレイヤーによる討伐隊を全滅せしめた、切

札の一つ。成果も莫大であったものの、同時に消費も莫大で、結果として損失の方が大きくなってしまったモノであるが、あんな災害を見せつけられれば、検討せざるを得まい。

フレーバーテキストを実直に再現すれば、レイドボス級もあんな芸当が出来るのだろうか。

そんな現実逃避気味の思考を即座に打ち切り、モモンガは生存の為に記憶を漁り続けた。

333―来たる龍とは

――対よ、対よ――

空舞う龍は歓喜する。その歓喜のままに地を薙ぎ、巻き上げた命を喰らっていく。

その理由は、逃げ惑う餌たちを追う最中で知覚した、西方の強大な力。

――対よ、対よ――

対なる龍、風神と雷神は歓喜を分かち合い、雷轟と狂飆を以て迫る二体の敵を吹き飛ばす。

「オオオオオオオオオツ!!!」

龍殺しの赤雷を竜巻に乗せ、風と雷を纏う神龍は新天地へと明確な目的を以て移動を開始する。

より強大な糧を目指し、対なる古龍は舞う。次代の、その更に先の子孫の為にと目指す彼らは、これまでより格段に速く飛翔している。そして、風と磁場で浮かぶ古龍たちがその力を強めることで、空は一層荒れ狂い、大地は裂けていく。そして、逃げ惑うモンスターたちはより明確に西へと流れていくのだ。

「キシヤアアアアアアアツ!!!」

「グルオオオオオオオオオツ!!!」

そこに黒蝕龍が、怨虎竜が飛来し、道を阻んだ敵へ、至高なる美食へと牙を剥く。あくまで個人的な意図に基づく攻撃行動であるが、双方とも確かな実力を有しているが故に、確実な遅延としても働いているのだ。本心はどうあれ、無辜の民に助力する形となるのは、運命のいたずららというべきか、何と言うべきか……………

「……………ウウウ」

そして、龍の歓喜による力の余波が、辺境の猛者たちを目覚めさせる。竜たちの足止めが、結果として彼らの備えを盤石にする猶予を作り出す。その目的が生物として当然のものであるろうとも、古龍の中でも上位に位置する種である対なる龍のそれは、決して座して見過ごすことのできるものではないのだ。

「ルアア………ッ！」

南西の大森林、エイヴァーシャーの最強が目覚める。毒々しく、また禍々しい紫の極絶角四本を有する飛竜は、不快だとばかりに紫棘に包まれた緑の巨軀を揺らす。種として、一部を除く古龍に匹敵する力を有する『棘竜』が、歳月と共により強大な存在へと至った………『異を辿りし者』は、迫る脅威を前に過去最大の警戒を抱く。

邪な欲をかいた王の国を亡ぼし、アベリオン丘陵の亜人たちの多くを余波で殺戮してみせた死毒を宿す竜は、静かに立ち上がる。気質自体は温厚なモンスターであるが、一度激昂すれば古龍を凌ぐ力を持つて暴れ狂う、災害級の力を見せつける存在でもある。

そして、秘めたるは絶死の劇毒。南方の強者にさえ北上を躊躇わせる程のそれは、彼自身が体内で、中和剤たる『抗毒液』を生成しなければ命が危うい程の劇物であり、スレインの有する毒無効の力、即ちユグドラシルの毒無効では軽減で精一杯という代物。単独で戦う分には兎に角として、戦線に乱入されてはたまらない。

そして、それは他の超越者たちにも言えること。

「ルウウ………」

「ギユアアア………ッ！」

グランセル氷原北部。平時、対立関係にある二体の古龍は、揃って南東を睨み、唸っている。

異を辿りし『司銀龍』と、大陸南方にて鍛え抜かれた『氷龍』………この領域を形作る元凶たる始種『凍王龍』にこそ劣れど、紛れもない怪物たちは、同じ存在を脅威と見做している。それ故にか、敵の敵は味方として一時休戦とし、共に英気を養っているのだ。それこそ、単独であれば彼らの一方でも容易く屠れるのだが、それが二体に加え、不確定要素も感じ取っているからこそ、万全を期す必要がある事を、年月と共に力と知性を高めた龍は理解している。

「グルアアアアアアアアアアアアッ!!」

そして、そんな災厄に挑まんとする超越者は、ローブルにも在る。

旧プラートに聳え立つ巨山の西部にて、黒き火竜は燃え盛る極絶翼を広げ咆哮。そこに住まう竜たちは、もう一人の王たる黒き火竜を見

上げ、思い思いの感情を乗せた咆哮を以て呼応する。期待、信頼、義憤——それこそ、覇種と称される域の、歴戦中の歴戦王の、同じく異を辿りし存在でもなければ、対等に立ち並ぶことすら叶わぬ絶対者へと、西方の脅威を感じ取った全てのモンスターが、今だけは肩を並べ嘆願していた。

自分たちでは勝てないからこそ、力及ばないからこそそのソレに、番の龍もまた呼応する。

「グルルルル………ッ」

「ルルル………ッ」

煉獄の主、炎国の王妃。黒炎王共々、この旧プラートの巨大火山に住まう支配者。

紅炎、蒼炎を纏う番が姿を現せば、本来逃げ出す筈の竜たちが視線を上げる。燃え盛る炎に呼応するように火山活動が激化する中、炎帝は『この世の終わり』とばかりに抱き合い、ガタガタと小さくなって震える異形二人を視界の端に捉えるも、欠片も気にすることなく翼を広げる。

「ルルル………」

目障り、とばかりに唸るも、それだけ。

ヒトが生き延びる可能性を手にするならば、それでよし。牙を剥くのであれば、己が力を以て、その全てを焼き尽くすまでのこと。強者たる古龍である以前に、超越者たる覇種の域に至りし古龍は、対等の領域にある者たち以外を、それこそローブルに集う竜たちすらも、等しく下に見ているのだ。

そして、そんな傍観者たちの振る舞い一つで判ることは、今更言うまでもないだろう。

*

その頃、迎撃拠点では。

「魔法で祓えず、時間経過で消失する………これは一体、なんなんだ？」

徐々に砂色を取り戻す亡骸を睨み、モモンガは独り言ちる。

ここは、モンスターの亡骸の保管場。中でも、《保^{ブリザベインジョン}存》を用いた場

合に除染されない可能性がある、狂竜化モンスター^の亡骸を保存する為、わざわざ冷氣属性のフィールドエフェクトを発動可能なアイテムを配置した専用の地下室だ。普通の人間は立ち入り厳禁、レベルに気温が低いその場所も、冷氣無効の名残で大幅減衰される彼には無関係。

「ツアーは古龍の力って言ってたけど……狂わせたとして、何の意味があるんだ？」

モモンガには、生物にまつわる専門知識などない。だが、大自然をこよなく愛する仲間の蘊蓄のお陰で、専門的でなくとも掻い摘んだ知識はある。なんなら、ナザリックの最古図書館^{アッシュユールパニバル}を漁れば、専門知識を書き連ねた書物も見つけられる筈だ。それくらい、彼……ブループレネットは、大自然というものを、その中であつたとされる営みを愛していた。

（いや、リアルの生物を基準に考えるのも可笑しいか？……いやいや、先入観に捕らわれるな）

思考を打ち止めかけるも、彼が心に留める^{ぶにっ}えげつない^とさんの^{萌え}言葉を思い返し、自身の先入観を無視して思考を続ける。参考資料も無く、うる覚えの会話でこそあるが、ブループレネット以外にも、住居^{恐怖}最悪の作者を始め、生き物に詳しいプレイヤーも相応数が居た為、記憶をひっくり返せばそれなりの情報が出てくる。

「んー……」

生物の進化の法則云々、環境への適応云々と、次々話題が浮かび上がり、それらを整理し続け

『餓食狐蟲王の元ネタはですね』

改めて思うと、仲間たちに深刻な精神的ダメージを刻みかねない会話の始まりを思い出し。

『やめやめ！体が痒くなるから！ていうか、寄生虫はカマキリの動画見て以来ダメなんだよ！』

幸いなことに、その時のモモンガは、その詳細を知る事無く終わった。その後、自分から調べてしまい、暫く体が痒くなる羽目になったのだが……その会話の先を思い出した時、ふと思考が冴え渡るよう

に感じた。

『ああ、ハリガネムシですか。寄生虫って面白くて、生殖の為に宿主を操ったり——』

『やーめーろーよー!』

「宿主を、操る………待てよ、そういえば」

医療関係者だった仲間の雑学を聞いていた事を思い出し、必死に記憶を漁る。

『この薬はアレと併用すると副作用が——』

(違う)

『そうそう、この病原体の発見のきっかけはですね?』

(違う)

『この時期に猛烈に流行ってあっさり収束したこの病気なんですけど、感染力が強すぎると却って大流行し難いんですよ。病原体が広まり切る前に宿主が死んじゃうと、それ以上増えることが出来なくなりますし、病原体単体では外部で長生きできませんし』

「………つてことは、病気としてはイマイチなのか? いや待て、これが病気じゃないとすれば」

セバスの回復スキルが作用したのが、龍の力に対してではなく、肉体に対してであれば?

魔法の効果が薄いのが、病に対してのものだからであり、相手の本質が違う可能性は?

「………寄生虫となると、それをばら撒く古龍ってことになるのか………」

ふと、どんなものなのかをイメージしてしまい………

「キモッ!」

思わず、吐き気を催した。吐くもなにも、胃の内容物どころか胃そのものがないというのに。

「うわー、うわああああああ………いや、この世界にそんなキモい奴もいないだろ、多分」

などと現実逃避気味に樂觀視し、一度肩の力を抜く。

尚、『生殖目的』という点は強ち間違いでも無いのだが、別に寄生虫

ということはない。

「敵情視察……いや、前にやらかしたし、ここは慎重に」

（剛種のクシャルダオラは反撃も逆探知も無かった辺り、誰も彼もが出来る訳じゃない。となると考えられるのは、あのモンスターが例外的なのか、ワールドエネミー級に強いのか。恐らく後者だと考えると、ワールドエネミー級でなければ反撃は出来ないか？……となると、俺一人になれる場所で試すのはアリか）

そしてモモンガ自身、知恵比べとなると多くの者に後れを取るが、頭の回転が悪い訳ではない。寧ろ早い部類であり、だからこそ冷静に情報を整理する時間と、一人静かに思考を回せる環境とがあれば、十分に優秀な男だ。

問題なのは、一度死んだことで死への抵抗が薄れ、自爆まがいの真似を考えていることか。

「ワールドエネミー級なら、俺の方から説明して……ナザリックの総力戦だな」

最悪、オーレオールに『あれら』とルベドを指揮させることも視野に入れている。

そうなれば、現地人の大半は巻き添えを食わないよう、退避して貰うこととなる。

「となると、場所は……」

熟考の末、一番被害が少ないと思われる宝物殿の、入口広間へと転移。ユグドラシルの一般入手アイテムの中で五指に入る超強力品により保護された領域で、モモンガは『遠隔視の鏡』を起動。続^{スクロール}けて、情報対策系の巻物を使い、前回と同レベルの情報防御、前回と異なり各攻撃への対策を施してから、マーレと共に構築した防壁の、更に先を観察していく。

その手元には、しつかりこの辺境で知られるモンスターのリストも用意されている。

「えーっと……よし、まずは森から」

新たにノートを用意して、鏡に映し出される影を一匹たりとも逃すまいと注視。

「火竜、雌火竜、斬竜、蛮顎竜——げっ、あの虫の緑のが……………ッ！」
そこで、見た。

狂える黒狼鳥へと躍りかかり、首を噛み砕き仕留める牙竜の姿を。これまでの狂竜化モンスターとは明らかに異なる体色の変化に加えて、それらがオーラの如く溢れ出す始末……………それだけならばまだしも、そのモンスターの姿が問題だった。

「あの時の……………」

即座にその存在をノートに書き記し、より注意深く周辺を探る。その結果判ったのは、あまりに多くのモンスターが喰い殺されているというコト。その中には、ヌシと呼ぶべき威容を放っていた、あの紅兜のアオアシラまでもが含まれており、対峙した経験とが、そのモンスターの危険性を強く訴える。

「不味いなこれ……………っ、竜巻！てことは、この先に——ッ！」

そして、モモンガは目撃する。

荒れ狂う竜巻を、それを生み出す禍つ風神を。その対なる雷神を、相対する黒き竜を。

「おいおい……………」

信じたくはない。だが、目を背けることも許されない。

荒れ狂う暴風の中を確かに翔ぶ黒き竜が四肢と翼を持つことを確認し、余計に憂鬱になろうと、古龍三体の来襲という現実は変わらなしいし、その内の似通った二体……………逆さに浮かぶ、どことなく不気味な容姿の古龍たちが、木々を大地から引き抜くほどの竜巻を起し、大地そのものを何らかの力で引き裂き、浮かべ、攻撃に転用している事実が覆る訳でもない。

「……………いや、いや！前向きに考えろ！少なくとも、こいつらが黒いの媒介者じゃない事は判明した訳だから、元凶はこっちの黒いのだな！それと、この二体とは対立関係にあるから、そこを上手く利用できれば……………」

尻すぼみになる声が消え、暫くしてから眉間を指で揉む……………揉む肉も無いが。

「で、反撃が無い、序でにこっちに気付いてないってことは、強くても

剛種級、と思おう」

最低限の、しかし確かな安心があつた。事実、種としての格は鋼龍以上であるが、レベルに換算してしまえば100にギリギリ届かない程度。それと相對している黒蝕竜こそ、現・状・で・す・ら・あ・の・時・の・鋼・龍・に・並・び・得・る・力・を・有・し・て・い・る・が、実のところその氣質を除けば、争う理由は無い。

「……………一端、休もう」

モモンガが得た情報を他に共有したのは、そう口にしてから三時間後のことだった。

34—備え

「——ぶっ、はあああああつ!!!」

《ゲート転移門》の魔法でナザリック表層に戻った二人が、大きく息を吐き出す。

「し、死ぬかと思った……………」

「あれだけピリピリしているとは……………この量では、正直釣りあつてないような」

「あの場にあれ以上いるつもりで？」

「冗談！冗談ですから！パンドラ、真顔で迫らないでください！」

間違はなく多大な成果であるが、味わった危機と比べ物足りない感
は否めない。

だが、パンドラもデミウルゴスも、あの場にあれ以上居合わせるの
は、死んでも御免だった。それこそ、自身が最大最高の忠義を捧げる
創造主からの命令であったとしても、命を賭し全力で再考、或いは撤
回を求めることを厭わぬ程。それだけ、あの環境を生き抜いた個体は
精強であるという事の証左であり、事実彼らが強く記憶したモン
スターの殆どは、レベルにして100超のみ。

「とにかく、これらの加工を急ぎますよ。防衛戦力は万全に整えねば」
彼らが古龍種二体と未知の強敵二体の来襲を知るまで、あと2時
間。

*

凶報が届いてから最も早く動いたのは、帝国ではなく法国であつ
た。

「全ての工房に通達し、設置型兵装の生産を——」
「流通する金属の買い取りを急がせている。冒険者も可能な限り、そ
ちらに割く」

「南方のモンスター^の動向から察するべきでしたね。急ぎ、ワーカー
を」

「最早、数でどうにかできる規模でもあるまい。火滅、陽光、漆黒以外
は支援に回す」

「ケイ・セケ・コウクはどうする？龍に通じずとも、他を従えることは可能な筈だ」

「残念ながら、カイレ殿の後継が見つからぬことには……………」

「やむを得ん、聖王女に使いを。彼女か神官団団長ならば、使えることは確認できている」

「この辺境の人類に遺された、最後の至宝……………」
『ケイ・セケ・コウク』。

真なる竜王、そして古龍以外であるならば通じると判明している代物であるが、使用者の高齢化を始めとする諸事情により、長らく使えずにいた代物。それでも、今回の件は古龍以外のモンスターも出没している、また人手が欲しくとも、質が相応でなければ役に立たない状況では非常に有用だ。

「漆黒の状況は？」

『疾風走破』と『一人師団』が帝国の調査中です」

「帝国には悪いが、急ぎモモンガ殿のもとに向かわせよう」

『絶死絶命』ならば、恐らく我々の動きから勘付き動いているだろう。連絡は無用だ」

「志が立派なのは構わんが……………もう少々、休んで貰いたいものだ」

「これも、後進育成の為に抑えていた反動だろう。節操を教えなかったのは、先達の失態だな」

軽い笑いが起これば、少しの間肩の力を抜き、程よく経ってから最高神官長が咳払い。

「努々忘れるな。この度の襲来は、凡そ200年振りとなる『侵略』だ」
緊張は、とうに最高潮を通り越している。

『刻竜』の来襲もあり得る、という訳か」

「モモンガ殿というぶれいやーに数多の従属神が居ても尚、恐るべき脅威となるだろう」

「イビルアイ殿の証言、及び竜王国からの報せから、『滅尽龍』来襲の可能性も浮上している」

「成程、この世界は我々を亡ぼしたいようだ」

「御勤めを終えたら、先代様や六大神様方と一緒に、抗議にでも向かい

ますかな」

「それはまた。古い先短いと思っていたが、楽しみが増えそうだ」

楽しそうに冗談を交わし、しかし直ぐに神妙な表情に変わる。

「だが、それも帝国を、六大神様が守り通したこの地を護り抜いてからだ」

「無論だとも」

決意は一つ。信仰はあれど、過度にのめり込むことは無く、驕ることもない。

「祈るしか出来ぬとは、何とも虚しいことだな」

しかし、どれだけ決意を固めようと、彼らが前線に立つことは叶わない。

故に、自嘲する。ご大層な名目を掲げておきながら、結局は他人に任せるしかないのだから。

「なに、立場だけはあある。最悪の時の責任は、すべて我々が被ればいいだけのことだ」

「あとは、方々に頭を下げるのか。老いぼれなりに、出来ることをやるだけだ」

若手の戦士たちが動く中、老齡の為政者たちはそのバックアップに全力を尽くすのだ。

その後、二日としない内にスレインの主要都市から、支援物資が運送されることとなる。迅速な対応にも程があるのもそうだが、同時に国内に残留していた各聖典部隊がその護衛を務めることで安全性を底上げしたことで、到着も迅速に済まされることとなった。

*

一方、帝国とて凶報を受け、ただ待つわけではない。

「早っ」

「近隣都市からのですね。設置を急ぎましょう」

迎撃拠点では、近隣の都市から届いたバリスタなどの設置作業が急がれていた。

古龍の強大さを思えば、凡百の戦士は無力である以上、彼らも後方支援できるように、という訳である。事実、相手が剛種特異個体でこ

そあつたものの、ガゼフに『蒼の薔薇』、陽光聖典が束になつても勝算すら碌に見えないのが古龍であり、一般的な冒険者、ワーカーでは本当に出来ることなどない。

残酷ながら、それが現実。彼ら全員分の強固な防具を用意できれば違ふのだろうが、それが無理である以上はどうしようもない。精鋭の邪魔とならない為にも、支援を可能とする手段は必要不可欠だ。その為に現在、森の賢王も頭脳をフル回転しており、森の中で培った技術を惜し気もなく伝授している。

「お、いけたいけた!」

「これを、こうして……よし!」

「俺らより格段に早いな……流石、森の賢王つてどこか」

薬草と青い茸を磨り潰し混ぜ合わせ、完成した薬液を容器に移す。それだけの作業ながら、手際は早いどころではなく、他の手伝いが瓶十本分を完成させる間に、樽一杯分を完成させている。そのように作業を進める賢王の隣には、プレアデスの手で大量に搬送された材料が、文字通り山積みみされている。

「この量を捌くのは骨でござるな……とはいえ、薬はあるに越したことはござらぬし」

ややげんなり気味の賢王だが、そもそも彼女たちはこれほどの量を使わないし、作らない。

「これって、飲まなくても効果はあるんだよな?」

「うむ。というか、そもそも皆、わざわざ飲もうとはしないでござるよ」

モンスターがわざわざ薬液を飲むかと訊かれれば、まず間違いなく否だ。そもそも、自然治癒力の高いモンスターがわざわざ使うような状況は稀であるし、薬草とアオキノコを調合する程の知恵を持つ者も少なければ、それが出来るだけの器用さを持つ者も少なく。わざわざ手間暇かけずとも、似た効能を持つミツを作るミツムシを襲うなりしてそれを被れば、そこで済むのだ。

部下の為にとわざわざ用意を整える賢王の方が、自然界では異端と言える。

「成程。ってことは、ピンを放り投げて撃ち抜けば、回復支援になるか」

「おいおい、ビンじゃ欠片も振って来るだろ」

「それに、しくじると脳天直撃になるかもな」

そんな会話が繰り返される中

「——エンリごめん、この瓶に薬液を補充しといて！ネムはその棚の一番下の取って！」

カルネ村。エ・ランテル薬師組合が設立した小さな工房では、街一番の薬師リイジーの孫であるンファイレアが、忙しなく指示を飛ばし、機材と向き合っている。彼以外にも、複数の薬師が別室でそれぞれの研究を行っており、ンファイレアもまた依頼を受け、その為に動いていた。

「えっと、これくらいいい？」

「ありがとう。今は試行錯誤の段階だから、そんな多くなくていいんだ」

彼が受けたオーダーは、乱戦の中でも使えるような回復支援手段の作成。

「一番簡単なのは散布だろうけど………初めてのことだから、ね」

どの程度の濃度まで効果を発揮するのか、どの程度から効力が低下するのか。個人差を考慮して濃度をできるだけ高く維持する必要、乱戦の中で使えるようにとのことなので、携行に難があるサイズや形状では駄目だし、使い勝手もよくなくてはならない。

難問に難問を重ねたような注文であるが、国の存亡もかかっているからには、本気にならざるを得ない。個人に背負わせるにはあまりに酷な重責であるが、それは他の薬師も同じ。デミウルゴス、パンドラ両名が全責任を負う形で、出来得る限りのバックアップを行っているが、実際に出来るかどうかは個人の想像力と、それを形にする技術力にかかっている。

何故ナザリツクの者がやらないのかといえば、卓越した個人ではなく、習熟した複数人に作成ができるようにして、量産性を高める為。現地のステータス基準が高いとはいえ、技術の方は低位職相応である

為、基本高位職業を取得しているナザリックの面々では、技術力に差が出過ぎてしまう。

そこで、現地の人間の手を使う、という訳だ。彼らの基準で完成すれば、量産も容易となろう。

「さて、次は——」

想い人が手伝いを申し出てくれたこともあり、やる気は充分以上。

エ・ランテル最高の薬師の孫、ンファイレーアの放つ気迫は、一流の戦士にすら迫ったという。

そして、別の意味で暑苦しい場所が……ドワーフの国、最大の鍛冶場だ。

「一丁あがりい！」

「次だ、次持つてこい！」

「うおおおおお！燃えろ、儂の鍛冶魂！」

彼らが行っているのは、鉱石の精錬。より武器に使いやすいよう、加工している最中だ。

「元氣、いいですね」

「未知の鉱石を加工できる、とテンション上がっているのでしょうか。羨ましい限りです」

苦労に苦労を重ねて戻れば、とびっきりの凶報を聞き届けた二人である。

ドワーフたちの熱心極まる仕事ぶりに感心しながら、どことなく痛む胃をさすっている異形種の知恵者二人だが、そんなことをしている間にもしっかりと思考を回している。なまじ、古龍という存在の中でも最上位を知るからこそ、その思考を止めることが出来ないでいる。「で、勝算は上がりますかね？」

「無理でしょうね。精々、余波として来襲するモンスターの足止め程度かと」

そして、冷静に戦力を分析できるからこそ、酷い状況だと理解できしてしまう。解決策も判ってしまうし、それを実行する難易度もまた理解しており、どうしたものか、と悩んでいるのが現状なのだ。強力な武器を揃えるのが手っ取り早いですが、ナザリックの備蓄については独断

で動かせないし、モンスター素材を用いた武器を作ろうとすれば、相應に強力な個体の討伐が必要となる。

前者の場合、データクリスタル素材共に高位品はそう在庫が無く、高ランクのものはそう多くは作成できない。後者であれば、武器性能はある程度保障されるとはいえ、データクリスタル程性能の調整が利かない上、求める性能相応に強力なモンスターとの戦闘が必要となる。前者は補給が実質不可能であり、後者は命懸けの戦闘が必要となる。

「……………あ」

「モモンガ様のもとなら、モンスターの亡骸も集まっているでしょうね」

そこで思い出したのが、迎撃拠点。最も多くの亡骸を保管している場所。

言い換えるならば、上質な武器の素材となるモノが大量に保管されている場所でもある。

「先に戻って、武器の作成を急ぐべきかと」

「では、序でにモモンガ様に、ナザリックの備蓄を使うか相談しましょう」

「流石に、背に腹は代えられませんからね。冷静に考えられる者は、反対もしないでしょう」

事態の深刻さを理解しているからこそ、渋ることはない。ナザリックの立地上、しくじれば次に被害を受ける羽目になる以上、それを防ぐ意味でも、協力を惜しむわけにはいかない。この世界の人間よりも、ナザリックに住まう数多のシモベの方が、遥かに脆弱なのだから。

「……………ええ、そうですね」

「デミウルゴス様？」

その内にある人間への悪感情を捨て去ると共に、己の守護階層の同胞の存在に思いを馳せる。

「パンドラ、シエンガオレンとの戦いに参加した守護者には、誰が居ましたか？」

珍しく唐突な問いかけであるが、その意味は一瞬で伝わった。

「…………モモンガ様に、聞いておきましょう。とはいえ、あの時よりリスクは高まりますが」

「しかし、悪くない作戦だと思いますよ。無効化が不可能である以上、幾らでもやりようはある」

こと守護領域内においては、デミウルゴス以上の強さを発揮する
アビスサル 奈落スライム、紅蓮。

守護領域の外では地の利を失いこそすれ、その巨体と高いレベルとの二つだけでも、ある程度の相手なら倒し得るポテンシャルを秘めている。スライムだけあり物理攻撃には強いし、溶岩エリアを守護する都合、炎耐性も非常に高い水準。得手不得手は非常にはつきりしているが、その巨体を駆使すれば飛行能力持ち以外の足止めも可能だろう。

シエンガオレンという巨敵相手に力を振った彼を、今一度起用しようというのだ。

「しかし、そうなると改築の必要が出ますね」

「ガルガンチュアで不足でしたら、他のゴーレムの用意も整えておきましょう」

アルベド抜きで話が進むが、本人が居ても同じような結論が出されただろう。

どちらにせよ、残された時間はそう多くないというのは、すぐに思い至る現実なのだから。

35—変わる姉妹

「ギュルアアアアアアアアアッ!!!」

咆哮——雌火竜が突撃する。その体躯の質量、大地を蹴り生み出す加速とが生み出す破壊力は、生身の人間であれば容易に死に至らしめる程。完全装備の人間といえども、無策に巻き込まれてはひとまわりも無い……そう、人間ならば。

「ギュアアアッ!!!」

「ギユオツ、ギユアアッ!」

真つ向から駆け寄り、大きく跳躍する二つの影。蒼の双影がその翼を、首を力強く踏みつけ、大地へと叩きつけければ、大地が砕け、揺さぶられ、それだけの力がかかった屈強な火竜の頸椎は折れ砕ける。呆気なく絶命した雌火竜の亡骸に目もくれず、鳥竜率いる小隊は移動を再開。

「……あの鳥竜、モモンガ殿の側近の方々に匹敵するな」

「戦うのは勘弁願いたいところだ」

それを遠目に視ていた一団は、苦い顔を突き合わせる。冷静に力量を測れるからこそ、余計に重い現実を直視せざるを得ず、空気も重いものとなる。彼らはどちらかといえば、共通の敵を持つ理性的な『味方』でもあるのだが、そんなことを理解できる程、彼らの思考は異常ではない。

その一方で、その不気味な立場に警戒心を抱きながら、利用せんとする者も。

「あの群れに手出しは無用です。明確な異物、且つ強力な竜なのです、存分に利用しますわ」

そう指示を下すのは、帝国騎士のレイナース。善悪敵味方ではなく、損得で事態を俯瞰する者。

外敵としての優先順位において、人間が下位に位置していると理解しているからこそ、こちらに害意の無い、或いはこちらを認識していない第三勢力は、敵意を逸らすいい囲になる。それをよく知るからこそ、彼女は不用意に接近することなく、自由に泳がせ続ける。

「し、しかし、それでは……………」

「おう、新入り。俺たちの役目はなんだ？」

渋る新米に対し、経験と見識に勝る先達が戒めるように険しい声をかける。

「陸路の確保と、商人の……………つてより、物資の護衛ですよね？」

「そうだ。モンスターと戦う事じゃない。何より、安全を考えるなら、戦わない方が得策だ」

愚直に戦うだけが、術ではない。それをよく知る先達は、後進に現実を伝える。

「俺たち帝国軍の役目はな、モンスターを倒す事じゃなくて、国民の安全を守る事だ」

「それくらい、言われなくても」

「いいや、判ってねえぞ。いいか、守る側が勝ったつて言えるのは、護衛対象を護り抜いてから、なんだよ。守り抜く前に死んじまえば、守り切れたかもわからねえし、その後が続かねえんだ。だから、印象は悪いだろうが、戦いは可能な限り避けるんだ。なんなら、余程の相手でもない限りは、冒険者やワーカーに投げるもんだ」

組合がバックアップを行う代わり、ワンクッションを挟む都合初動に難がある冒険者と、独自に動くが故に初速が早く、代わりに情報面などに由来するリスクも相応に高まるワーカー。国が一番に頼る相手であるが、軍が劣っているという訳ではなく、国の直属たる彼らの本来の役目が役目だから、という面が強い。

その分、復興支援や避難誘導においては、軍属の者の方が厳しく叩き込まれており、彼らの役割が民間人の保護であることを強く物語っている。

「それに、お前が言った通り、今回の仕事は物資輸送。荒事になって物資がおじやん、なんてことになっちゃあ、俺らだけの責任じゃあ済まなくなる。なら、敵意を集めてくれる連中がいるなら、最大限利用させて貰って、こいつらを無事に届けるのが最優先、つてことよ」

まだ納得し切れていない様子ながら、続く号令により強引に切り替えざるを得なくなる。

「進軍を再開します！総員、隊列を切り換えなさい！」

隻腕の騎士の鋭い号令に、防衛を前提とした隊列が進軍の為のものへと切り替わる。

「っし、行くか。気をつけろよ、一人のミスが、俺たち全員の命運を左右しちまうんだからな」

そして、最後に釘を刺す。この世界において、個人で動ける実力者なんてものは無いも同然で、本当にごくごく僅かな超越者ですらそう容易ではない。必然的にチームを組んで動くのが定石となる訳だが、そうなるも個人の勝手がチームの命運を別つ、という最悪も多々起るのだ。この関係から、モンスター被害を被りやすい農村出身者が多いチーム程生還率が高く、都市出身者が多いチームは死傷率が高い、という傾向も見られている。

年若い者たちが緊張で息を詰まらせる中、経験を重ねた者たちは黙々と行動に移る。

そのぎこちなさに懐かしさを覚えるレイナスだが、柔らかな表情も長続きはしない。己が守ることの出来なかつた暖かさを、少しでも長続きさせる為にも、冷たく振る舞い、空気を引き締めねばならない。大切なヒトを、仲間を喪った傷は、体以上に心に深く刻まれているのだ。

*

その一方。無用なリスクを避けんとする者がいる中、危険を冒さんとする者たちもいる。

「——待ちなさい、シズ」

鋭い、射殺さんばかりの視線が降り注ぐ中、シズ・デルタは態度を崩すことなく佇む。

「それはつまり、モモンガ様直々の護衛の任を放棄する、と？」

「許可は得ています。それに、このままでは不味いことは、アルベド様も理解している筈です」

欠片も退かず、殺意溢れるアルベドと言葉を交わす。その現実を理解しているアルベドでも、否、アルベドだからこそ、シズの判断を容認できずにいる。ナザリツクに属する者である以上に、モモンガ個人に

帰属する者となった彼女は、全体の利益よりモモンガ個人の利益を、無意識に優先してしまう。

対し、同じようにナザリツクに属する者という枷が緩んだシズは、現況を憂い、思索し、答えを一つ、導き出していた。出しているからこそ、その提案を主が許容しているからこそ、この場を集められた者たちが一様に、彼女を視線で咎めている……咎めて、居たのだ。

「そこまでにしんさい、アルベド」

「シャルティア……貴女、まさか」

「一瞬でありんしたが、返答に詰まった時点で負けでありんしょう。ですが、シズ」

少しばかり殺意を緩めたシャルティア……その変化に、仮説に至った疑問が確信に近いたシズの表情が少しばかり引き締まり、相手からの疑問に備える形で思考が回る。多少の変化が見られたとはいえ、相手は苛烈な性格のシャルティア・ブラッドフォールン。何か一つ間違えた瞬間、己の命は無いものと思わねばならない相手だ。

「東方の偵察、でありんしたか。姉妹を指名して、勤めを放棄してまで強硬するのは何故？」

予想に、限りなく近い質問。口にするのは、用意していた回答——ではない。

「それは、シャルティア様が一番よくご存知ではないですか？」
「……………なに？」

空気が凍る。そう錯覚する程の殺意の中、シズは少しばかり笑みを浮かべ、続ける。

「だって、これまで通りのシャルティア様なら、私を庇うなんてしませんから」

「心外な……いえ、確かにその通りでありんす」

殺意の霧散。本来のシャルティアならば、既にシズは死んでいるだろう。実にわかりやすい。

「私も同じです。いえ、きつと、私が一番大きく変わっている」

もしかしたら、この思考自体が自身のものでないのかもしれない。そんな恐怖もあるが、主を、姉妹を、仲間たちを喪うことに比べれば、

遙かにマシだと。恐怖に打ち克ち、己を奮い立たせ、彼女はここに居る。すべてを賭けて、生存への道を掴もうとしている。

「ユリ姉も、ルプーもそう。ナーベラル、ソリュシヤン……メイドたちも、変わってきてる」

特に、一般メイド。人間への忌避が薄れているし、心なしか力も増している。

「変わった原因を考えて、私は一つの仮説を立てました。モンスターたちが豊富に生息し、根城としている地……中でも、人間の手が極端に入っていない場所であれば、私たちに何かしらのプラスの変化を齎してくれるのではないか、と」

たとえば、トブの大森林——外縁部も外縁部なら兎に角、深部はほぼほぼ未知の領域だ。彼女らが農場、或いは生け簀として利用している土地は、比較的浅い位置ながら、確かな影響を及ぼしている。ローブル熔山帯に至っては、人間が踏み入るなど自殺行為レベル。階層守護者クラスでさえ、可能な限り立ち入りたくないと思う程に、過酷な大地だ。

共通点は、モンスター以外の生態系も独自のものとなっていること。トブの場合、浅い領域だが長時間の滞在が多く、ローブルは深い領域ながら、滞在時間は可能な限り短くするように心掛けている。それが原因であるとすれば、理由付けとしても悪くは無い筈。

それを順序立てて説明すれば、アルベドも渋い顔ながら納得の様子を見せる。

否定できない程度には、自身以外に心当たりがあつたのだ。肝心のアルベドもそうだが、セバスやコキュートスも含めて、直接的な戦力としての行動が多いことも原因だろう。対し、単騎である程度活動可能なシャルティア、裏方として動きがちなパンドラ、デミウルゴスなどは機会も多く、プレアデス程でないにせよ、未知の領域との接触が多い為、それなりに『変わった』ところも多いのだ。

「……言い分は理解したわ。だけど、そのままでは死に行くようなものでしょう?」

「それならば、問題は無い」

その声と共に、《転移門^{ゲート}》の魔法による暗黒環が形成。支配者が君臨する。

「も、モモンガ様!？」

「すまないな、盗み聞きをさせて貰っていた」

(シズが気になったのもそうだし、折角の我儘である以上、できる限り叶えてやりたいからな)

無論、姉妹が拒むのならば、そこで終いにするつもりではある。だが、それ以外の要因で彼女の願いが却下されることは、モモンガ自身許すつもりもない。万一武力行使に移ろうものならば、即座に介入できるよう準備もしていた。そして、否定意見に対処できるよう、名目も用意していた。

「彼女たちには、私の方からも少し協力して欲しいことがあつてな——そうだろうか?」

「ハッ!」

彼に続くのは、パンドラズ・アクター。そして

「まさか、ただの我儘ではなく、あそこまで考えていたとはね」

デミウルゴスだ。智者三名の内、二人が彼女の側に回った以上、勝敗は決まったと言えよう。

「…………モモンガ様の護衛が減るのよ?」

「ガルガンチュア、紅蓮をこちらに回す予定です。近いうち、改築することになるでしょう」

「それに、彼女たちの武具では」

「それについても、こちらに用意がございます」

パンドラが用意したのは、武具…………プレアデスが同意した場合、試験的に供与する予定の品々であり、質も相応。創造主に与えられた装備への愛着があることに違いは無いが、同時に武具を賜うことを榮譽と捉えるNPCたちには、大分刺激が強いものであった。

「無論、無理強いはしない。お前たちが否と言うのならば、私はそれを尊重しよう」

最初に踏み出したのは、エントマだった。

「シズがやりたい事をやれば、強くなれるんだよね?」

「確約は出来ない。けど、なるべく深くまで偵察するつもりだから、可能性はあるはず」

「いいっすよ。戦闘メイドとしてモモンガ様のお役に立てるなら、可能性が低くてもいい」

ルプスレギナが追従。その思いは、彼女たちプレアデスの奥底に秘められた願望でもあった。

力不足は承知している、それでも、どうか——死を厭わぬ者と、死なせることを快く思わぬ主との、意識の差から来るすれ違い。不満は無くとも、やはり秘めた願望は肥大し続けており、妹の華々しい活躍と併せて、押さえつけるだけでも苦勞する程に大きくなっていった。

「ボクも………いえ、私も！やらせてください！どうか、我らにご命令を！」

「ならぬ」

ユリの、皆の表情に絶望が浮かぶ中、モモンガは優しく、我が子を諭すように口を開く。

「決めるのは、お前たちだ。お前たちが望むのならば、私は喜んで許可を下そう」

生死は自己責任、などと無責任なことを言うつもりはない。

だが、命令に従うだけ、などという、これまでと変わらない関係を続けるつもりもない。

「お前たちはどうしたい？シズは己の望みを口にして、自由を勝ち取ったぞ」

（俺が命令しちやダメなんだ。この機会に、NPCたちが少しでも自立していかなければ）

そう、自立。モモンガが欲しているのは、絶対服従の部下ではないのだから。

「………どうか！私たちプレアデスに、東方の偵察をやらせて頂きたいと思えます！」

「許可する。それと同時に、お前たちにいくつか頼みたい事もあってな」

まず、モモンガ含む三名から厳命されたのは、定時連絡。続けてパ

ンドラからは、植物等に未確認のものがあつた場合の優先的採取と、武器に不具合が生じた場合の即時撤退を。デミウルゴスからは、交渉等が可能と思われる相手を発見した際の対処、また危険と判断される存在との接触時の即時撤退を指示され、更には

「では、これは餞別だ。お前たちが、新たな一步を踏み出したことへのな」

モモンガが、自身の持つ蘇生アイテムを一人に一つ与える。

結果、シズ以外は歓喜と畏れ多さでキヤパオーバーし、卒倒するこ
ととなった。

36―来たる狂竜

広がる森林地帯の奥――

「あー、予想以上にきつついッス……………」

「武器は強いけれど、過信は出来ないわね」

各々が深くも無いが浅いとも言えない傷の治療に取り掛かる中、シズは一人周囲を警戒している。ナーベラルはいつでも転移魔法を使えるよう、手当中の姉妹たちの傍にて、黒を基調に緑の光を放つ杖を握り締め、表情険しく構えている。

彼女らの中でも、与えられた武器との相性が格段にいいナーベラルだが、安心できる材料にはなり得ない。第一に、彼女が与えられたライゼクス武器は電気属性を有しており、彼女が得意とする魔法属性と一致している為に威力も相乗効果で上昇。ただし、あくまで属性魔法である為、その属性が通らない相手には滅法弱い欠点もある。

現状メイン火力を担当できてこそいるが、安心もしていられない。「けど、戦えてはいるわ。それだけでも大きな進展ね」

普段使う籠手ではなく、随分と物々しいトンファーにも似た武器――パンドラ曰く『こちらの素材で籠手を作ろうとしたらこうなった』とのこと――正式には『穿龍棍』という武器を軽く振り回して、ユリは静かに力を込める。変形機構を持つ等、籠手とは大分異なるモノであるが、モンクである彼女は難なく使用できるし、複雑さには驚かされたが、予想以上に難なく使いこなせている。

全貌は理解できないまでも、使いこなせる。モンク職の対応武器であるお陰だろう。

「あたしらが食い下がれるようになってる辺り、多少マシンと聞いたいっすけど……………」

「多分、弱い個体。手傷も多かつたし、攻撃も単調だったから」

ルプスレギナの希望的観測は、この中で交戦経験最多のシズにバツサリ切り捨てられる。

「うへえ……………マジっすか」

「交戦した火竜より炎の熱が弱かつたし、一撃の威力も低い」

一番実戦慣れしているシズは、ユリより前に出ていたにもかかわらず無傷。モンスターを踏み、軽快に宙を舞い注意を引く姿は、彼女の成長を感じると共に、姉たちは何があつたのかと表情を険しくしてしまふ。なにせ、レベル的な意味でのプレアデス最弱は、間違いなくシズなのだから。

「シズく、なにがあつたの？……お姉ちゃんに教えてよ」

気の抜けた声から一転、静かに重い声でエントマが問う。

「……わからない。私も理解し切れてないから、答えられない」

「……そっか」

回答に窮する様子から、本当にわからないのだと判断し、エントマは口を閉じる。わざわざ挑発の言葉も交えたというのに、反応しない辺りで重症だ、と判断を下したのだ。それは他の姉妹も同様で、その視線が労わるようなものへと変わった。

「無茶はしないでね、シズ」

「大丈夫。それより、ユリ姉たちもしっかり休んで」

あらゆる意味で『慣れて』いるシズに対し、他の面々は殆ど初めてのことばかり。それでも完全な野戦は初めてであり、彼女の声も若干ながら硬く、緊張を孕んでいる。王国を基準とすれば十分マシな部類といつても、彼女たちはほぼ初めての実戦であり、シズもまた心得がある訳でもない。

というよりも、ナザリックの者で心得があるのは、精々シャルティア、デミウルゴス、パンドラといったローブル探査に赴いた経験のある三人だけ。それにしたって、環境が違い過ぎる以上は的確なアドバイスも難しく、やはり彼女たちが自力でどうにかするしかない。が、ここで成果を残すことが出来れば、彼女たちは与えられた以上の結果を残したと、確たる自信を持つことが出来るだろう。

「……定時連絡の時間ね。報告するべきことはあるかしら？」

ナーベラルが確認を取るも、特に意見は無し。今日もまた、彼女の報告が一日の締めとなった。

*

多数のゴーレムを動員した拠点改築は、どんどん進んでいく。

「どんどん進んでくけど、これの殆どが壁にしかないのよね」

「いや、手厳しいな」

「ああ、悪くはないわよ。あれだけ壁があれば、余程の相手じゃ無ければ逃げ果せられるもの」

モモンガの隣で改築風景を眺めるのは、スレイン最強の番外席次。自制しているが、その実力は文字通り現地最強と呼ぶことが出来、彼女が前線に出れば大抵のモンスターは容易く屠ることが出来た。襲撃の激化に伴い、専ら襲撃者の内上から数えるべき強敵を彼女含む実力者で押し留め、他を残る冒険者、ワーカーに任せる、という形を取り続けてきた。

武器のみならず、防具もある程度揃い始めたお陰で、敵が徐々に強くなるのに反し、死傷率の方は下がり続けていた。適切な属性で攻める、というのは難しいにしても、武器の性能が上がる分攻撃の通りもよくなり、防具の質が上がったお陰で致命傷を負い難くなった。完全な討伐、と行く前に逃がすこともあるが、防衛戦という観点で見れば勝利であることに違いは無く、士気も高い状態を維持していた。

「オオオオオ」

そんな中、背後から轟く咆哮。これまで無かった事態が突然起これば、当然騒然となる。

「この声はー！」

森の賢王が飛び起き、道を進んでいく。

モモンガが転移魔法で、番外席次が徒歩でその場へと向かえば――

「ああ、もう！消えるな、鬱陶しい！」

「ストロノーフ殿、そちらに奴はおりません！」

「！だのいなかきをとこういがだらか、がだ！るいてっかわ」

空中で現れては消える巨大フクロウと、それに翻弄される者たち。

「えーっと……ストロノーフ殿？」

「をらかちなうよみきらやにな、ータスンモのこー！のどガンモモ」

「すまない、何を言っているのかさっぱりわからん」

「あはは、あはははははははははは！！！」

意味不明な動きと発言を繰り返すガゼフに、モモンガは困惑し、番外は思わず爆笑。

「おお、奇術師殿ではござらぬか！ここまで遠路はるばる、ご苦労にござるー！」

そして、敬礼する森の賢王の姿により、空気が一瞬で変わる。

「……………え、知り合い？」

「うむ。奇術師殿……………山間に住まうお方にござるな。某も戦いたくない相手にござる」

うむうむ、と頷く彼女のもとへと、二つの蒼影が駆け寄る。明らかに格の違う二体のモンスターだが、その姿は森林地帯ではありふれたモンスターであるドスランポスと大差ない。が、赤く染まった眼、凶悪な形状に変化した嘴、発達したトサカ、前足の爪と、細部と纏う空気は大きく異なる。

「おお、お主らも来てござったか！」

森の賢王の側近格、ナザリックの階層守護者クラスに匹敵する竜が、二体。

生きた心地がしない者が大半の中、賢王はフクロウの如き鳥竜、『朧隠』夜鳥ホロロホルル相手に見事意思疎通を果たし、目を丸くして凍り付く。二体のドスランポスが呆れたような、同情するような視線に宿る知性に他の者たちが驚く中、森の賢王は絶望を露わに、魂が抜けるような細かい声を零した。

「お終いでござる……………」

「へ？」

「ここはもう終わりでござるよ。もう、纏めて西に避難するべきでござる」

まさかの弱音に驚く中、一転してまくし立てるように叫ぶ。

「龍にござるー！判っているだけでも、六体もの龍が迎撃準備を整えているのでござるー！」

厳密には、古龍四体と飛竜二体なのだが、そこまで詳しくはわからない。まい。

「な、あ……………!？」

空気が死ぬ中、番外席次だけは不自然なまでに平然としている。

「薄々予想は出来ていたけれど、根拠は？」

そんな中、冷静な番外席次が問えば、新たな実力者の名が。

『「天眼」殿にござる。盲目ではござるが、他の感覚は某が知る中でもズバ抜けてござる故』

「信憑性はあるのね」

「無論。あのお方と近しい奇術師殿が出向いたこと自体が、その証左にござる」

どちらも、モモンガたちが踏み入った湖より、更に深い場所に住まう竜。言い換えれば、そんな深部に座すような実力者ですら警戒する程、事態が深刻であるという事。事実として、繁殖に向けて活性化した対の古龍、在るだけで災禍を撒き散らす竜、そしてそれらを餌としか見做していない竜。古龍は当然として、それに並ぶ大禍を引き起こす存在など、踏み入らせるわけにはいかない。

「……………まあ、南方からの襲撃が異様に減ってたし、想定は出来てたかな」

「成程。道理で……………この勘の鈍さは、どうにかならないものか」

スレイン出身として飲み込みが早いニグンは、自身、というより人間の感覚の鈍さを嘆く。

「迎撃準備、となると……………やはり？」

「恐らく、グランセルの龍たち、ローブルの炎龍、辺りでしょう。可能性としてはありますが、エイヴァーシャーの棘竜もあり得ます。問題は、どのモンスターであろうとも、帝国が被る被害は絶大となる事です。ですね」

誰もが顔面蒼白になる中、番外席次だけは静かに頷き、ニグンに問う。

「今から帝国の住民の避難、出来ると思う？」

「不可能でしょう。我が国、王国くらいしか受け入れ先がありませんし、何より圧倒的に、時間が足りません。モンスターの襲撃も考慮する必要を考えれば、余計に時間が足りなくなる。こうなっては、私たちに出来ることなど……………」

「貴方たちにはなくても、私には……………いや、私とモモンガたちにはあるよ」

そう口にする彼女の瞳は、ある種の決意を宿している。

「なに？」

「前線を押し上げる。古龍との戦場が前になればなるほど、国が被る被害を軽減できる」

合理的な案だ。合理的、だが――

「それは、モモンガ様に死ねと言っているのかしら？」

「そうまで言っているせん……………が、あまりいい顔は出来ないでありんすね」

アルベドが強く、シャルティアはやや弱いながら、しかししっかりと難色を示す。

「じゃあ、仲良く死んでみる？ 迪異種はエスピナスしか知らないけど、間違いなく貴女たちと比較しても、格段に上よ？ それクラスが最低でも一体、それと肩を並べるのが複数来るとなると、前線を押し上げる以外の手段で被害を抑える手段は無いわ」

迪異種、という存在は、現状この辺境では三体のみ。何れも超級の危険地帯であることからか、基本的に知る者は少ないものの、アルベドたちの実力者が束になっても敵わない、と暗に断言した上で、それに並ぶ怪物が多く来襲するという地獄を想起させる。多大な恩義から、馬鹿な発言をする者こそいないながら、空気は絶望的に悪化する。(逃げたい……………いや、この一帯が無茶苦茶になったら……………)

「いいだろう。だが、総力を以て、とはできんぞ」

しかし、モモンガは冷静に思考し、その上で彼女の提案を、条件付きで是とした。

「わかっている。漆黒も私以外は置いてくつもりだったしね」

総力を尽くせば、今度は後方に不安が残る。古龍が齎す災禍を思えば、人員は別けざるを得ず、どちらかに強力な戦力を注力、とはできず、拳句近隣の龍たちの攻撃、その余波を考慮した場合、より前線を押し上げる必要が出てしまうのだ。文字通りの災害、竜ですら逃げるソレにヒトが巻き込まれれば、当然待つのは死である以上、下手に前

線を下げることが出来ない。

個体としての難易度は、モモンガらが最初に対峙した鋼龍より幾らか下であるのだが、二体揃っている事、種としての強大さ、その力が及ぼす影響規模で鋼龍を超えているせいで、ちつともそうは思えないのも、彼らの焦燥に拍車をかけている。

「前線を押し上げるにせよ、こちらの備えも不可欠、か」

モモンガは背後に振り返り、パンドラへと命令。

「一度ナザリックに戻れ。拠点防衛に使えそうなものがあれば、ランクを問わず全て持ってこい」

「ハッ！ランクを問わず、でございますね」

「何にせよ、こちらを充実させる他あるまい。後顧の憂いなど、無い方がいい」

しかし、言いる前にドスランポス二体が目を剥き、東方を睨み鋭く吼えた。

「ギユオツ！ギユオツ！」

「ギユアアツ！ギユアアツ！」

「襲撃でござる！」

気分を切り替える間もない襲撃であるが、そもそも大して動じていない者は即座に動いた。

「お先に失礼」

目にも止まらぬ速さで飛び出し、番外席次が疾走する。それに匹敵する速度でドスランポスが、やや遅れて森の賢王が地を蹴り、迎撃広場まで走る。モモンガたちは《転移門^{ゲート}》の魔法で急ぎ直行した先では、丁度門が吹き飛ばされ、作業ゴーレムの一部を粉碎しながら、今回の襲撃者たちが転がり込んできたところであった。

(なんだ、この状況は)

「ルアオ………ルグアアアオツ！」

躍りかかるのは、傷だらけの金色の牙竜。龍の力の残滓で赤く輝くのみならず、甲殻諸共肉まで抉れ、鮮血を零す傷を数多持つヌシたる牙竜は、毒々しく染まる牙竜へと組み付き、仕留める為ではなく、足を止める為に奮闘する。その牙は甲殻に突き立たず、角も爪も砕け、

最早雷光を纏う余力すら無い牙竜の決死の行動の中、小さな影たちが
ゴーレムの隙間を掻い潜り、奥へ奥へと駆けていく。

「あれ、あのモンスターの子供じゃない!?」

「え、どこだ!?」

「あそこ、ゴーレムの足元!もふもふしてるやつ!」

碧の甲殻、金色の角と、それらの大部分を覆い隠す程の白毛を持つ、
小さなモンスターたち。

怯えるように駆ける彼らは、拠点広場から脱するにはどうすればい
いのか、も判らぬまま、ただただ必死に駆けている。時折振り返れば、
その度に金色の雷狼竜が威圧するように吼え、彼らを逃がそうとす
る。

「ギュアオオオオオッ!!!」

しかし、満身創痍のヌシがそう長く全力を維持できる筈もなく、
毒々しく染まった同族はそれを振り解き、金色の竜を大地へと叩きつ
ける。剛力が地を砕き、弱り果てたヌシはより痛烈な衝撃に動きを止
めるも、その身に宿った強大な力を以て護るべきものを護らんと、力
を籠め

「ルアツ、グル」

「オオオオオオ………ッ!」

しかし、その首へと蒼光を纏う紫黒が振り下ろされ、頸椎を粉碎。
ヌシは力及ばず絶命。

続けて、狂気を宿す赤い瞳が、小さな竜たちを捉えた。

(………モンスターだろうと、子供だから、な)

特に、深い意味がある訳ではない。だが、きつと………『彼ら』な
らば、そうしただろうから。

「ルグルアアアアアアアオッ!!!」

狂い、その果てへと達した雷狼竜——『極限状態』の魔手が、小
さな竜たちへと迫り

「うおおおおおおおおおおおおおッ!!!」

純白の鎧を纏い、死の支配者は二枚の大盾で剛腕を防いだ。

パーフエクト・ウオリア

戦士化の魔法に、咄嗟に使えるだけの筋力バフを重ねたが、魔法職

の細腕は軋みを上げ、苦痛を訴える。だが、その背後の命は確かに救われており、胸の内を達成感がじわじわと満たしていく。その成果を無碍にしない為にも、彼は叫ぶ。

「シャルティア！このモンスターたちの回収を！アルベドはこちらを手伝え！」

「ッ、はい！」

「承知いたしました！」

かつての仲間、ぶくぶく茶釜の二枚盾を隔て、紅の狂光が、眼光が交錯する。

「悪いけど、たちさんと茶釜さんの装備を借りてるんだ。この子たちは、やらせないぞ」

37―鳴神狂奔

雷光を纏う尖爪が大地を抉り、強靱な尻尾がその質量に速度を乗せ振り抜かれる。

「ぐ、ううううー！」

「こいつ、重い……………」

モモンガが軽々吹き飛び、アルベドが構えた盾が支えきれずに弾かれる。

無双とすら謳われる、起伏の激しい地形を好む狩人は、理性を失おうとも強敵に違いは無し。極限状態へと至った事で底上げされた身体能力から、寧ろこちらの方が凶悪まであった。縦横無尽にして、一撃一撃が砦蟹に次ぐほどに重く、そこに蒼雷が加わることで、有効打を持つ者たちは、攻勢に回ることに難儀させられている。

「はあああああッー！」

「ルウツ、ガルアアアアアアアッ!!！」

空を取るシャルティアが放つ『清浄投擲槍』は、悍ましく反響する咆哮と共に解き放つ、過剰な雷光が掻き消す。大地が焼け焦げ、耳をつんざく轟音を伴う程の攻撃から、すかさず身を翻し跳躍。紅の戦乙女が舞う空へと踏み込んだ牙竜は、不安定な姿勢の中で大きく前足を振りかぶり、シャルティアを捉えんと雷光を纏い振り下ろす。

飛行能力を持つ吸血鬼が余裕を以て回避すれば、雷狼竜はそのまま落下の加速を乗せ地上に前足を叩きつけ、強靱な肉体と落下の加速、莫大な電力の解放とを合わせた高範囲攻撃を実行。大地が捲れ、雷音が空気を引き裂き、漆黒のナニカが散るように広がる中、戦力足り得る地上の二人は完全に逃れることは叶わず、その身を電流に晒す事となった。

「があああああッ!?!」

「ぐ、ああああ……………」

高い電気耐性を持つモモンガですら苦悶の声を上げ、三層鎧『ヘルメス・トリスメギストス』へとダメージを逃しても尚、アルベドが苦悶を隠せぬ程に増大した電流は、本来ならばジンオウガ自身の肉体も

焼いていただろう。だが不気味な赤の輝きを纏う紫黒に染まった肉体は、この場の殆どの者たちからの攻撃を完全に遮断している上、自身の肉体にかかる負荷すらも完全に相殺している。

そう、殆どの者たち。この中で、極限状態となった竜に対抗できているのは、ごく僅かだ。

マキシマイズマジック
メテオフオール
「魔法最強化、《隕石落下》ッ！」

デミウルゴスが放つ魔法の隕石を、雷狼竜は真っ向から粉碎。受け止めるのではなく、破壊することによる無力化を選んだ相手の、その僅かな間にデミウルゴスはより高高度へと脱し、常に流れる冷や汗を拭う。戦闘能力が低い部類である彼には、一挙手一投足が尋常でない破壊力を秘める牙竜の存在は大敵そのもの。

その上、空に居ても安心できない事に――
「っ、また来ますか！」

飛来するのは、赤い雷光を纏うナニカ。高速で飛翔するソレから逃れるべく、空中を複雑な軌道を描き飛び回れば、そうしている内に雷光が爆ぜ、余波だけでも肉体が痛みにも似た微かな痺れを訴える程の電撃を解き放つ。完全耐性が無ければ、或いは直撃していれば、ただでは済まなかっただろうことは確実だ。

シャルティア程豊富な防御手段もない彼では、援護一つすら命懸けだ。

「お願いしますよ、パンドラズ・アクター……………」

小さな竜をナザリツクに送り、その足で他国に赴いている二人を迎えに行つた者の名を口にし、忌々しいという感情を隠さず地上を睨む。一部の攻撃と共に地上に生じ、時間と共に霧散する黒いナニカは、幸か不幸か二人に悪影響を及ぼしてはいない様子だが、その存在が悪影響を及ぼす可能性と併せて心身に負荷を与えていく。正確な情報が不足しているせいで、迂闊に動くことも出来ない。

「クソッ！あれ以上近付けさせるな！」

「バリスタ、撃てええええええッ！」

「天使隊、突撃準備！一瞬でもいい、時間を稼ぐんだ！」

そんな中、出来ることをやろうとするのが、現地の者たちだ。

バリスタが速度の乗った矢を放ち、一撃で容易く滅ぼされるだけの天使が、二人に生じる致命的な隙をカバー。矢は雷狼竜に直撃すると共に、呆気なく砕け散る程に脆いものであり、注意を逸らす程度の効果しか無いが、それでも攻撃の手を緩めさせる、或いは二人が立て直す隙を作るには充分。

無論、そんな真似をしていれば、相応の報復として雷球が撃ち込まれもする。だが

「させぬでござるー！」

「早いけど、それだけッ！」

森の賢王、及び番外席次の二人の前では、無意味。そして、あちら以上に前線の四人の方が脅威であると判断した雷狼竜は、そちらに直接手を下すことをせず、戦い続ける。否、彼の竜にとつて、これは戦いではない。狂気にも似た闘争心に塗り潰された本能の残滓が訴える、己を明確に脅かし得る存在を亡ぼす為の、蹂躪だ。

「グギャルアアアアアアッ!!!」

「どんな喉してるんだよ、その声ッ！」

悍ましく反響する咆哮と共に飛び掛かる巨軀を回避し、覚束ない狙いで弓を引く。

その叫びに大分素が混じっていたのは、気を張る余裕が消えてきたからか。

(俺も援護に回りたいけど、そうすれば確実に……………！)

実のところ、モモンガのHPはどうに半分を切るどころか、三分の一にまで食い込んでいる。

桁外れの膂力から繰り出される猛攻は、己が身を焼き壊す程の激雷が、防御の上からも彼を傷付けているのだ。電気への完全耐性こそ持たないながら、純粋な防御能力においてはモモンガを超えるアルベドでさえ、これまでの戦いで最外層である黒鎧を喪っており、その身に叩き込まれ続けた攻撃の苛烈さを物語っている。

「本当に……………とんでもないな、こいつはッ！」

爆炎が甲殻を、その下の肉を焼く。それでも尚、狂える竜は止まらない。

肉体に適応した狂竜の力を、『世界の守り』を有する者は貫ける。だが、狂気に飲まれ失われた肉体機能にまでは、その力が及ぶことは無い。肉体を焼かれる痛みには疎むことは無く、その違和は激情と殺意を燃やす燃料にしかかなり得ず、心臓を握ろうが、持ち前の状態異常系魔法を幾ら叩き込もうが、それが力を発揮することは無いのだ。

それでいて、相手の攻撃は鍛え抜かれた肉体と、それに付随する蒼雷。どちらも、極限化の恩恵を十全に享受している上、相手は起伏の激しい地形で活発に活動し、その肉体と雷光を以て名だたる竜たちに並ぶ『無双の狩人』。最大の武器を伸ばしている上、それと真正面から相対せざるを得ないからには、苦戦は必至であった。

「このままでは、少々不味いですね……………」

攻撃は苛烈で、反撃の際に乏しい。激化した雷鳴は余波だけでもその身を焼き、その膂力を防ごうとすれば、その上から肉体が軋むような衝撃が襲い、着実に体力を奪われる。彼女たちが弱いのではなく、この雷狼竜が強かったのが、極限化で更に強化された結果であり、通常の雷狼竜ではあり得ない、通常なら肉体が自壊する程の高出力を継続して発揮でき、更には本来弱点でもある、そう強固でない堅殻が狂竜の力で補強されているからこそ、だ。

デミウルゴスは割り込めない。シャルティアは、強みを最大限生かすためにも、空を捨てることが出来ない。アルベド単独では、恐らく空からの攻撃を完全に無視して潰しにかかれ、そこで終わるだろう。モモンガもかなり厳しい状況ではあるが、豊富な手札で強引に踏み止まり、注意を奪うことは出来ている。最悪、外部に出ている三人を呼び戻せば、劣勢を覆すくらいは叶うだろう。

『『中位アンデッド創造』——頼むぞ、死の騎士よ！』

（これで、今日使える分はラスト……………！）

耐久に優れるアンデッドといえど、怒涛の連撃を得意とする雷狼竜相手には、稼げる時間は一瞬が精々。剛腕により盾諸共半身を潰され、奔る雷光が残る命火を消し飛ばすが、中位アンデッドは自己のスキルでそれに耐える。反撃の雄叫びの瞬間、完全にその身を破壊されるが、その僅かに稼いだ時間で立て直せるくらいには、モモンガも

熟練のプレイヤーだ。そもそも、その一瞬の時間稼ぎができるからこそ、このアンデッドは多くの死霊術師に使われてきたのだ。
「魔法最強化、《大致死》！」

シャルティアの放つ負属性魔法が、モモンガを癒す。防壁際にて立て直しているアルベドには、決死の覚悟でギリギリまで前に出た神官たちが回復魔法を放ち、傷を癒している。一回一回は微量であるが、多数の人間が、使える限界まで魔法を行使し続けたことで、十分な量を回復。無意識レベルで人間への評価をプラスに傾けながら、こちらに疾駆する牙竜を目掛け、アルベドも跳びだした。

「ギュガルアアアアアアアアッ!!!」
「うお、らあッ!」

剛腕をすり抜け、激雷に身を焼かれながらも、渾身の力で頭を攻撃。攻撃能力にこそ乏しい得物を用いた一撃であるが、その剛腕と破壊不可の強度から繰り出されるだけでも、一撃の重さは充分。その尖角から鈍い音が響けば、さしもの狂狼とて危険を察知し、大きく身を翻す。
「ルグツ、グルガアアアアッ!!!」

耳をつんざく雷鳴を轟かせ、背負う蒼光が激化する。絶えず空気を裂く音を轟かせ、禍々しい紫黒に、赤い金属質な光沢を纏う碧の肉体が蒼く照らされ、不気味な姿を一層悍ましく演出する中、悍ましい竜は四肢で大地を踏み締め、大きく息を吸い込み、雄々しく吼えた。
「ルオオオオオオオオオオオオッ!!!」

そこに在るは、『森の王』とも称される『無双の狩人』。狂気に囚われ、その威厳が損なわれようと、実力を支える身体能力は向上。それが、激化した雷光により更に活性化し、たえず空気を軋ませる。その一撃を受ければ、どうなるか——アルベドの、モモンガの背を、冷たいものが伝う、ような錯覚が襲った、次の瞬間。

「グルガアアアアアアアアッ!!!」
「っ、しま」

轟音と共に大地が弾け、アルベドが宙を舞う。赤く染まったその目に、宙を舞う全身鎧の淫魔の姿が収まるや否や、激烈な猛攻が始まる。鮮烈なる蒼光が空を奔る度、地上が大きく変形し、スーツァーマーを

似て非なるエネルギーが狂える竜を飲み込み、アルベドの体を吹き飛ばし、破壊の暴威を振り撒く。

「グルツ、ギユアアアアアアアアアアアアッ?!?!」

竜の肉体を飲み込む、ドラゴン殺しの奔流。己が身すら潰さん雷撃を放った牙竜の外殻を焼き、砕いたソレが、過剰な電流により傷付いた体内を駆け巡り、破壊していく。狂竜の力、即ち龍の力と対等な、ワールドアイテム世界の力、その最大出力を受けた竜は、文字通りの致命傷をその身に刻み込まれることとなった。

トリプレットマキシマイズマジック リアリティ・スラッシュ
「魔法三重最強化《現断》」

静かな憎悪と憤怒を湛えた三つの斬撃が、残された命火を刈り取る。

かくして、狂竜の極致に至った牙竜は討たれた。だが、代償はあまりに重い。

「……………」

「モモンガ、さま……………」

歯を食い縛り苦痛に耐え、シャルティアがモモンガの体を支える。先の雷光に巻き込まれただけのシャルティアはまだマシだが、地上で奮戦していた二人は重傷もいどころ。モモンガは貴重な蘇生アイテムをまた一つ消費し、アルベドに至っては生きてるのが不思議な程であった。

「俺はいい。それより、アルベドを」

ぴくりとも動かないアルベドを指さし、モモンガは素の声色で告げる。目を剥くシャルティアであるが、それも一瞬ですぐに頷き、彼女のもとへと駆け、その治療にあたる。遅れて到着したデミウルゴスの肩を借り起き上がった彼は、自身の手を見下ろし、沈黙。

(レベル消費、最大でも仕留め切れなかった……………かなり効いてたが、辛いなあ)

現在、モモンガのレベルは95……………先のワールドアイテムで、限界まで経験値を注ぎ込みその力を最大限解放した、代償だった。それが意味するのは、彼が抱えていた最大の切札の喪失であり、職業獲得条件は満たしていても、それに必要な最後の一手、獲得クエストが

存在しないこの世界では、もう二度とエクリプスの力を振うことが出来ないのだ。

虫の息という事もあり、先の三発で仕損じていれば、そこで終わりであったギリギリの綱渡り。被害は甚大極まりなく、対策は不可欠を通り越し急務であるが、ワールドアイテムが無ければ攻撃自体がほぼ通らないと、どこからどうすればいいのかも不明瞭と、その思考を延々ネガティブなものが黒く染め上げていく。

「貴方たちは一端戻りなさい」

「次は、某らが頑張る番にごさる。貴殿らは今一度、療養なされよ」

そこに降り立った番外席次、森の賢王が声をかける一方、冒険者たちが別口から雪崩れ込む。

「モモンガ殿、こちらへ！」

「アルベド殿に意識は？………：ポーション持ってこい！ありったけ使おうぞー！」

「ここは我らにお任せを。少々荒っぽくなりますが、フロートイング・ボード 浮遊板を使います」

「ならば、我々はこちらを警戒する。頼んだぞ」

「モモンガ様たちをお願いします。申し訳ございません、私はこちらに残らせて頂きます」

皆が最大の功労者たちの為尽力し、その身を戦場跡から移動させる。デミウルゴスは、彼らなら主と仲間を任せるに足ると判断し、殿を買って出た者たちに助力するべく残留を宣言。その成長を喜ぶように笑みを浮かべ、優しい声で任せる、と言い残し、彼は部下たちと共に広場を後にした。

38―恐れぬ者、恐れる者

死の支配者は、その象徴とすら言える力を手放した――
その事実を、龍たちは本能で知覚していた。

「……………」

銀盤の貴人は、静かに彼方を睨む。大敵たる銀龍もまた目を細める中、同時にその原因たる強大な力の解放を知覚し、より強烈な警戒と、敵意を剥き出す龍の存在も知覚していた。この辺境の地で、竜王たちに睨みを利かせる程の猛者たちにしてみれば、痛手ではあるが十分対応できる範囲にある力。しかし、比較的未熟な対の龍には脅威そのものの力が振われた事で、彼の龍たちは子々孫々の繁栄の為にと、より躊躇いなく猛威を振るうだろう。

そうなれば、成熟が進み『龍』へと近づいた竜の力が、風雷と共に撒き散らされることとなる。

「ッ!!」

翼を広げ、力強く飛び立つ。大気を蒼く染め上げる程の冷気が急速に失われ、真冬より更に強烈な寒気に包まれていたグランセル一帯が、凍王の力の余波による寒気のみにも包まれた状態へと戻る中、銀刃纏う龍は大きく跳びあがり、卓越した流体金属の操作能力を応用し地面へと泳ぐように潜航。一時的にはあるが、アーグランド評議国最大の大敵が、姿を消す事となった。

*

荒れ狂う嵐の真下、プレアデスは絶体絶命の窮地に立たされていた。

「ああもう！なんなのよ、これ!?!」

「なが、され……………ッ、飛べ、ない……………!」

赤雷走る狂颯が木々を巻き上げ、《飛行》^{フライ}の魔法では姿勢の維持すらままならない。

「ギユアアアアアアアアアアッ!!」

赤雷球が無数に放たれ、暴風が激化。禍々しき風神の咆哮の中を、紫炎の爆裂が、漆黒の翼が、力強く突き進む。対し、その目を激情で

赤く染め上げ、龍殺し……龍属性エネルギーの活性化により体の随所を赤く発光させる龍は、荒々しく吠えたてる。その暴風の只中を、空気を引き裂く轟音と共に雷光が奔り、二体の竜を打ち落とす。

「つべ、こつち来るつすー！」

「違う、あれは——」

シズが語気鋭く否定する中で、怨虎竜は爆発により、黒蝕竜は翼によりその体勢を立て直す。

地に落ちることなく舞い上がった二体の竜は、方や狂気に飲まれても尚損なわれぬ底なしの食欲のままに。片や、己が帰郷を邪魔だてした、忌わしき怨敵たちへの怨嗟のままに、繁栄を求める龍へと牙を剥くのだ。その身に蓄えた養分を求め、或いは己の旅路を妨げた者の野望を挫く為、あくまで我欲のままに、強大なる怪物たちへと牙を剥くのだ。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

「っ、わわあ!？」

「地面が、浮いて………ツ、シズ！」

稲光が爆ぜ、大地の一部が浮き上がる。雷を操る力、その一端として有する電磁場操作の力が、大地の一部を引き上げたのだ。浮き上がった大質量を、荒れ狂う風が力任せに射出することにより、簡潔な質量兵器が出来上がり、空中という不安定な場にある二体の竜を狙う。狂竜の極限たる肉体に対し、ダメージを与えるに足るものではないが、当たれば撃ち落すくらいは可能なソレを、二体の竜は逆に足場へと変え、逆に高高度へと向かう手段としたのだ。

そんな中、打ち上げられた地面に飛び乗っていたシズは、外部の観測手段としてソレを使った。

(思ってた以上に、距離が無い)

東方と西の境界を隔てる、巨壁とその麓の堀。

(それに、進行速度の上昇……間違いなく、何かある)

そして、彼女らが接敵してしまった、最大の原因——移動速度が、急に上がったのだ。

「ここからじゃ、声も届かない、から——？」

光届かぬ曇天の下、黒き翼を広げる竜の姿が目に入る。重殻が、厚鱗が所々破碎されたその体軀に目を凝らせば、肉ではなく金にも見える純白の鱗と甲殻が煌く。発光が大分落ち着いた触覚に入る亀裂の隙間からは、黒く強固な鈍い輝きを持ち、その下の頭部に刻まれた裂創の合間からは……………

(赤い、目——ツ!?)

本当に僅かながら、赤い光が覗く。『目が合った』と知覚した瞬間、彼女は飛び降りた。

(今の寒気、あの時より格段に弱いけど——同じだった!)
「シズ!」

「撤回する!…このままだと、時間が足りなくなる!」

切羽詰まった叫び。だが、どうしようもない事実でもあった。

「なら、急ぐわよ」

「ナーちゃん?」

「一番わかってるのは、シズだからねえ」

エントマが空を見上げ、続けて末妹を争う仲間へと目を向ける。

「危険?」

「モンスターと遭遇出来なかったのが、その証明だと思う」

活性化した古龍、より逃げ惑う竜たち、そしてそれに挑みかかる怪物たち。

遁走する竜が向かえる場所を思えば、寧ろ遅くすらあった。

「ナーベラルは先に転移で戻って、このことを報せて」

「……………」

「それが最善ね。大丈夫、私たちは自力で戻るから」

シズの意見に、ユリの決定に、ナーベラルは異議を唱えない。

それが最善だと、この情報を一番早く届けられる自分がやるしかない、と、理解しているから。

「信じてます」

《転移》で姿を消した姉妹を見届け、戦闘メイドは空を見上げる。

「それで、問題はどうか逃げるかよね」

「下手に逃げると、モンスタアの群れと鉢合わせるけど……………」

「それなら、多分何とかなるから任せて」

曖昧な物言いであるが、声は真剣なエントマに、彼女たちは一様に頷く。

「なら、急いで暴風圏を抜けるつす。何をするにも、この風じゃ、ねえ？」

「そうね。正直、体が崩れないようにするだけでも一苦労よ」

暴風で絶えず波打つソリュシャンに、一同から苦笑が向けられる。

「……………私も、これじゃ戦えないわね」

自身の首をしつかり抱き抱えるユリの嘆息を合図に、揃って踵を返し、脱兎のごとく駆け出す。

幸いにも、黒蝕竜から変わりつつある者以外、彼女たちを知覚すらしていない。知覚している龍も、彼女たちに構う暇などないお陰で、暴風域を逃れることに集中していれば、どうにでもなるのだ。ソリュシャンの体が所々スライムに戻り千切れ飛び、ユリが何度か頭を持っていかれかけながらも暴風域を抜ければ、そこからは体力勝負。

幸いにも、暴風域は即ち古龍の領域ともなるお陰で、龍を恐れる他のモンスターは居ない。脇目も振らず、警戒など投げ捨てた全力疾走であろうと、何ら心配はいらない。警戒すべき大敵から逃げる者たちに、彼女たちのような小さく、弱い者たちに構う余裕など有りはしないのだから。

「ていうか、モンスターいねえつすね!？」

「あれに突っ込みたいと思う?」

「アテが外れたあ〜!」

ソリュシャンのツツコミにルプスレギナが真顔になる中、エントマは何故か泣き言を零す。

「アテって?」

「モンスターがいたら、利用して足にするつもりだったの〜!」

その意図が掴めぬ姉たちが困惑する中、シズだけは腰に増えた謎の籠に気付いていた。

「……………発見、あつたんだね」

「ふふん!」

モモンガたちが死力を尽くし、何とか打倒した存在と同じ——それが、三体も。

「ここを捨てて逃げろッ！」

召喚モンスターにデバフを撒く、或いはヘイトを高める者を多く混ぜてはいるが、時間との勝負でしかない。そんな絶望的な戦いに臨んでいたデミウルゴスは、突如響いた声に振り替える。明らかに尋常ではない空気を纏う白金鎧は、集まる注目に構うことなく、必死に叫ぶ。「グランセルの龍が発った！しかも、恐ろしいスピードでこちらに……!!？」

言葉に詰まった理由は、誰もが理解した。狂える者たちすら、その足を止め、空を睨んだ。

「早すぎる……世界移動を使つたんだぞ!!」

急速に生まれた分厚い雲が、日の光を覆い隠す。空気が真冬の如く冷え込み、その急激な冷却により生じた風が、一つの音色を奏でる。まるで、降臨を称えるかのように響くその音と共に、空中に青く染まった空間が生じ、急速に膨張。

「——キュアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

そして、世界が青く染まる。真冬と形容することすら鳥澁がましい絶対零度を生み出し、銀盤の貴人は大地へと降り立つ。龍でありながら、その佇まいは貴族どころか王族ですら真似できぬであろう程に優雅で、優美で——高貴であった。

「シャアアアアア………ッ！」

電竜が翼で大地を抉り、静かに唸る。空舞う黒炎王は降り立ち、轟竜はあぎとを鳴らす。

「………あれが、あれが古龍ですって?」

剛種とは、文字通り格が違った。佇まいも、纏う圧も……秘めたる力も。

「オオオオオオオオオオツ!!!」

狂えるトロールが動けば、氷龍は無言で尻尾を薙ぐ。その先端から伸びるように氷刃が形成されれば、その一閃により数多のトロールが両断され、瞬く間に凍結し、地に落ち粉碎。続けてその口から水流に

も似たプレスを地上、空中と立て続けに薙ぎ払うように放ち、地上のトロールは疎か、極限状態の飛竜に紛れていた狂竜化モンスターたちをも氷漬けにし、空から落ちる無数の氷塊がそれらを跡形もなく破碎。

「ギュルアアアアアアアッ!!!」

「キシャアアアアアアッ!!!」

轟竜の突進を、電竜の飛来を、瞬く間に生じた氷の壁が阻む。ただ阻むだけではなく、激突した二体のモンスターへと追撃するように、氷龍が内側から攻撃し、破碎したその欠片は、狂竜の力により強化された外殻を呆気なく砕き、肉は疎か骨にまで達するであろう深い傷を刻んでいく。

その間、黒炎王が放つ業火は、一切届かない。極低温に支配された空間で、その熱量を維持できない炎は減衰し、古龍へと届く前に消えてしまっているのだ。通常のリオレウスを凌駕する熱量を、いとも容易く減衰、無力化せしめる極低温の世界の只中、氷の鎧を纏う龍は即座に狙いを切り替え、二体の狂竜を軽々一蹴し、飛翔する。

「ッ、ギュルアアアアアアアッ!!!」

威嚇の咆哮は意味をなさず、高い飛行能力ですら、彼我の距離を広げることは叶わない。

狂える黒炎王をあつという間に追い抜き、身を翻した氷龍は無数の氷柱を空中に出現。それらを一齐に射出すると、黒炎王の堅牢な外殻を粉碎し、強靱な翼を引き裂き、狂竜の力を極限まで引き出した肉体を呆気なく絶命へと至らしめる。狂竜に侵された亜人の、モンスターの群れごと壊滅へと至らしめたその攻撃に、さしもの極限状態の飛竜といえど怯えた様子を見せ、

「キユアアアアアアアアア——ッ!!!」

そこに、地を洗い流さんばかりの奔流。地に打ち付けられ、瞬く間に凍結していく水流は、幾重にも重なり、下から上へと打ち上げる氷の刃として、狂える轟竜の肉体を引き裂き、その命を奪う。ギリギリで空に逃れた電竜は、しかし氷龍から逃れることは叶わず、四肢により大地へと叩きつけられ、氷槍を持って心臓を穿たれる。

「…………冗談、でしょう…………？」

かくして、ナザリック最高戦力の一端たちが、死力を尽くし辛勝を掴み取った怪物、それも三体を同時に相手取り、北地の龍は圧倒的、という言葉も生温い虐殺を見せつけた。歴戦王という、文字通りの最高峰の存在である、という事実など、何の慰めにもなりはしない。

彼らの命運は超越者の気分次第である、という現実を、堂々と見せつけられたのだから。

「……………」

その超越者は、慄く知恵者などどうでもいいとばかりに、東の彼方を睨む。

決戦のときは、近い。

39―覚悟の時

パンドラたちが独自に奔走していた頃――

「……………オーレオール」

「オーレオール・オメガ、御身の前へ」

巫女服風メイド服に身を包む大和撫子、オーレオール・オメガが跪く。

それを見下ろし、モモンガは一つの決断を告げる。

「一時、ナザリックを空ける――文字通りの、総力戦だ」

文字通りの。その一言で、彼女はすべてを察した。

「畏まりました」

「今決断はするな。お前が考え、決断するんだ」

「考えて、ですか……………」

難しい顔をするオーレオールは、少し考えこみ、口を開く

「では……………私が出て、よろしいのですか？」

『自身が抜ければ、ナザリックは一時機能停止することになる』と言外に問い。

「ああ」

モモンガは躊躇いなく答えた

仲間たちであつても、同じ決断をしたであろう。彼ら、彼女ら程優れていない、と自負する彼が躊躇う理由はない。最悪のパターンではあるが、資金不足にしても、得られたモンスタ―素材を武器に回さず、エクステンジ・ボックスで換金してしまえば解決することも容易いだろう。バハルス帝国に思い入れがある訳でもないが、短時間ながら肩を並べた者たちは皆好感が持てる者たちであり、その覚悟、決意に報いるためにも、手を尽くさねばならない。

そう考えられる程に、彼の……………鈴木悟の精神は、アンデッドの精神と拮抗していた。

『『これら』もすべて動員する。これは、決定事項だな』

そつと顔を上げ、かつて1500人を虐殺したものをたちを眺める。それでも、不安は残る。ステータス的な相性の関係もあるが、アル

ベッドを一方的に叩き伏せる事ができるモンスターが、恐れ、逃げんとする怪物が四体もいる以上、これだけの戦力であろうとも、相性次第ではあつという間に撃破されかねない。故に、防衛線に回すことを決定したのだが、その判断は臆病だったのか、と何度も自問自答を重ねていた。

だが、臆病になるのも仕方あるまい。かつて、数体損傷しただけで、それはもう吐きたくなる程の莫大なユグドラシル金貨が消費されてしまい、一時ギルドの資金がとんでもないことになっていたのだ。メンバー総出で何とか回復したものの、仮に全損することがあれば、最悪私物をすべてエクステンジ・ボックスに放り込む羽目になりかねないのだ。むしろ、臆病にならない方が危険なレベルである。

『モモンガ様。プレアデスの回収を終え、只今戻りました』

「よくやった、パンドラ」

『セバス、コキュートス、序でにセバスが同行していた聖獣連合の部隊を回収、現在表層です』

「シャルティアも戻ったか。では、すまないが連合の方々を前線に案内してくれ。お前が帰還してから、皆を表層に集める。そこで、改めてお前たちの決定を聞こう」

《伝言》^{メッセージ}を切り、モモンガは改めてオーレオールに告げる。

「今、言った通りだ。私の命令だから従う、というのはナシだ。お前自身で考え、決めてくれ」

これは、ナザリックの意識改革の一環。

モモンガの胃に優しい環境にしたい、のではなく、今後即断即決が必要になる可能性が高いことから、皆がその場で決断し、動けるようにするために必要なのだ。それこそ、完全初見では階層守護者ですら窮地に追い込まれるような存在がゴロゴロしているのだから、判断の遅れはそのまま最悪の結末に繋がりがかねない。最悪を回避する意味でも、この意識改革は急務だ。

(ギルド武器は、一応常にアイテムボックスにある。今回、出し惜しみは無理だろうな)

指輪の力で私室に戻り、モモンガは法国の者に依頼した、法国上層

部以外に伏せられている情報や、他国のトップやアダマンタイト級含む最上位の実力者たちのみ知られている情報等をまとめた、極秘資料を手にする。プレイヤーと縁深い国であるお陰か、日本語で記されたそれを一通り流し読みして、今回動き得る怪物たちの情報を頭に叩き込んだ。

(この情報も、極秘だろう事項を除いて共有しておくべきだろうな)

大陸中央方面から飛来した歴戦王、辿異種、そして覇種。問題は、来襲する龍たちの情報が皆無であることだが、内一体は一度討伐できている分、まだマシか。幸い、プレアデスが帰っていることから、今頃パンドラとアルベドの二人が断片的な情報から推察を始めていることだろう。

そして、モモンガの読みは的中。彼が資料を編纂している一方で、二人も優れた頭脳をフル回転させていた。半端に理解している気になるのは問題だが、その能力を解明できるだけでも、十分に勝算はある、と判断したのだろう。手元にインクで真っ黒になったノートを幾つも並べ、険しい目付きで情報を精査し合っていた。

「比較的小柄な方は、風で空に浮かんでいた、ということですか……………」

歴戦王襲来の現場に居るデミウルゴスを抜きに、二人は険しい顔で結論を纏めていく。

「加えて、電気力で浮くとなると、恐らく電磁力……………高度から考えて、相当高出力で使える、と考えるべきでしょう。モモンガ様は電気耐性が極めて高いとはいえ、そう楽観視するわけにもいかないでしょう。そして、それ以上に問題なのが——」

二人の顔が、プレアデスへと向けられる。

「黒蝕竜、でしたか」

「随分と面白いネーミングね。黒く蝕む力を放つ竜、だなんて……………でも、少し変よ」

アルベドがその瞳を細め、シズが記した名の一点を指す。

「古龍と見ている存在なのに、龍とは書かないのね」

「……………今はまだ、龍とは思えません」

「どういうこと？あの力は、どう考えても」

「実際に会ってわかりましたが、今のあのモンスターは不完全です。あの黒い鱗が剥がれ始めて、その下に赤い目があることもわかりました。その雰囲気は、どちらかという竜に近いものでしたが、あの目が放つ威圧感は、間違いなく龍のそれで……だから、推測ですけど」

シズは一拍置いて、自身の推論を口にします。

「あの竜は、完全な成熟を目前にした、幼体ではないかと思われます」

「…………アルベド様」

「警戒レベルを更に上げる必要があるわね。本当に、天井知らずもいところよ」

二人が頭を抱える一方、更にろくでもない情報を容赦なく口にします。というか、ここで容赦してしまつては最悪全滅もあり得るため、どんなに頭を抱えたくなるようなものであろうと、情報として落とさざるを得ないのだ。情報さえあれば、今後の動きを変えることができるのだから。

「あと、もう一体のモンスター…………あれだけど、前に倒した奴より、各段に強い」

「うわあ、うわあ、うわあ……………」

「最悪ね…………あの機動力もそうだけど、あの色は間違いなく、あのモンスターと同じじゃない」

二人の顔色が、真っ青通り越して真っ白に。

「ただ、金色の方を執拗に狙っていたから、それを利用できるかもしれない」

「あ、それはいい情報ですね。うまく使うことができれば、大幅に戦力を削げます」

「黒蝕竜はどつちも狙つてたけど、大体敵対してるとみていいかも」

事実、関係はかなり険悪だ。怨虎竜は二体を餌と見做しているだけだが、黒蝕竜にとっては怨敵とも言える存在であり、新天地への到達を阻んだ二体を特に強く敵視している。怨虎竜は最悪、黒蝕竜をも喰らおうとしているが、黒蝕竜にしてみれば『どうでもいい』の一言で片が付く存在であり、そこをうまく利用すれば、戦局を楽に運べるだ

ろう。

「となると、問題は暴風域で満足に活動する方法、でしようか」

「聞いた話だけでも、鋼龍の比ではなさそうですね。《飛行》^{フライ}も使えない程となると、空で戦う術が無いも同然ですもの………シャルティアでも、どこまでやれるか」

「制空権を握られるとなると、頭が痛いことになりますね」

二人が頭を抱える中、ノックの音と共に、返答を待たず一般メイドが踏み入る。

「失礼いたします。モモンガ様より、すべてのシモベに召集命令が出ました」

「承知したわ。では、玉座の間に」

「いえ、ナザリック表層に集まるよう、とのことですよ」

「………そう。わかったわ、貴女たちも準備しなさい」

「わかってはいましたが、いざ指示を下されると、緊張感も格別ですね」

予想していた二人だが、足取りは非常に重い。

「これが終わったら、暫く休みたいですねえ」

「そうですね………モモンガ様に、ご褒美をいただきたいわ」

「デートの取り成しくらいはしますよ」

尚、精神的疲労を理由に『休みたい』と感じるのは、ナザリックの総意である。というよりも、精神的な疲労を身を以て感じた知恵者たちが、事態がひと段落次第、率先して主含む仲間たちを休ませにかかるところ。精神的な疲労までは、マジックアイテムでも完全に解消できない以上、その蓄積による惨事を回避する意味でも、休息は必要不可欠なのだから。

仮に『休むとか嫌です！働かせてください！』なんて抜かす者が現れれば、それこそ知恵者たちプラスアルファによる、それはそれは有難い説教をいただくことになるだろう。皆、この極度のストレス環境下で精神的疲労の重さを理解している以上、まず休息を取らないなんて馬鹿者が出た瞬間、全力ですつ飛んでくること確定だ。

「では、私たちも失礼します」

「ええ——生きて、帰ってきましょうね」

不穩、とは言うまい。

この先に待つ戦場を思えば、生きて帰ることができる保証など、ありはしないのだから。

*

竜王国——今回の事態において、ある意味一番歯痒い思いをしている国だろう。

「よっし、竜を引けい！……つて、連れて来とらんかったな」

「不明瞭な点多すぎますからね。最悪、我々も暫く帰らない方がいいでしょう」

「あー、ヤダヤダー！回復魔法も通じない未知の病とか、じゃあどうしろって話じゃん！」

竜王国女王、ドラウデイロンを乗せた船が、空を征く。

「元々は『砂海より空のが安全じゃね？』で研究されていたが、こう使うことになるとはなあ」

それは、『飛行船』だった。巨大な船に、更に巨大な気嚢を複数繋げ、空を浮く船だ。

「ですね。三隻だけではありませんが、陸路より多く物資を運べます」

「耐久試験も、失敗に失敗を重ねた折り紙つきですからね……来年の予算、大丈夫かなあ」

ビーストマンの宰相が積み荷を軽く叩き、人間の宰相が胃のあたりを軽く撫でる。その姿を豪快に笑い飛ばし、ドラウデイロンは彼方の帝都へと視線を向ける。その意味を察した腹心たちが苦笑を浮かべる中、彼女は背後に続く二隻へと目を向ける。

「角竜の突進にも耐え、火竜のブレスなら数発受けても無事な代物だ。ま、墮とされることになったら、船大工どもに大目玉くらうわ、来年の予算が死ぬわと、まあ笑い話にもならんだろうな。が、災害つてのはそういうものと、割り切るしかあるまいよ」

スレインで調達した物資を、陸路より早く、大量に届ける。場合によつては、そのまま防衛戦に加わることが、彼女たちの目的だ。こと弩岩竜という特大災害にさらされ、当時のスレイン法国最強のおかげ

で救われた国の末であることもあり、他国への支援は惜しまない質なのだ。

「先に断っておくが……私の身に何かあった時には任せたぞ、お前たち」

そして、彼女はそんな国の長。魂の力を使う『始原の魔法』を惜しみなく使うリスクを承知の上で、文字通り死力を尽くす腹積もりでいるのだ。そして、ここにいるのはその覚悟を汲み、水を差すことなく職務を遂行できる、選りすぐりたち。他の船に乗るのは、彼女たちが直々に選抜した、竜王国きつての実力者たちだ。

「ご安心を。ぶっちゃけ、私と陛下抜きでも国は回りますから。念のため、引継ぎもしてますし」

「求心力は失うでしょうが……そうなたなら、国政の形を変えるだけです。幸いにも、貴族制はとつくの昔に廃れておりますし、都市船長たちも人望で選ばれる形ですからね。無論、陛下ばかりにいい顔はさせられない以上、私が生き残れる確証もありませんが」

旗艦『黒鱗』には、スレインでの突貫工事ながら、複数の対竜迎撃設備を搭載している。

この船は輸送を済ませ次第、前線に飛び込む予定なのだ。皆、死ぬ覚悟は済んでいる。

「馬鹿どもが」

「陛下にだけは言われたくありませんな」

「いや、まったく」

最高に楽しそうに笑い合い、竜王国女王はその目の金色を禍々しいものに変える。

「北方の国からの大恩に、今こそ報いる時だ。無駄死には許さんが、死ぬ気でいくぞー！」

先祖返り、と形容することすら生温い、絶大な力の活性化。竜王たちがその余波を感じ取り驚愕を浮かべる中、ツアインドルクスを含む古き竜王たちは、驚愕より先に恐怖を呼び起こされた。その詳細までは掴めないながら、ツアアが諸々の手続き、及び議会の説得を、珍しく強硬手段で蹴飛ばしすつ飛んでいったことで、評議国が別の意味で

荒れることとなった。
決戦の時は、近い。

40―集結の時

ナザリック地下大墳墓、表層――

「こうして招集に応じてくれたこと、心より感謝する」

一部の領域守護者を除く、すべてのシモベが跪く。

「まず最初に、一時ナザリックが機能を停止することを宣言させてもらおう」

モモンガの言葉に、多くの者が目を剥く。同時に、半数が納得を示した。

彼の背後に従えられた、ナザリックが有する真正正銘の奥の手、究極の切り札の数々が並ぶ様は、その正体を知らぬ者であろうとも、不転転の覚悟であることを理解できる程。加えて、最前列に並ぶ者たちの中には、桜花聖域守護者のオーレオール姿もある。切り札の数々の指揮官にして、ナザリックの転移機能を司る人物である以上、彼女が表に出たからには、転移機能を含め機能停止するのが道理であった。

「そして、お前たちにはこの日を以て、シモベであることをやめて貰おうと思う」

真意を知る者たちが、言葉選びの悪さに苦笑を浮かべる。が、それ以外はそれどころではない。

「そ、そんな!? わたくしたちに、何か至らぬことが!?!」

「お、お許してください、モモンガ様! どうか、どうか見捨てる事だけは!」

「――静まりなさい。それと、モモンガ様。少々言葉選びが意地悪かと」

シモベたちを一喝し、しかしその姿に同情も示すアルベドは、主にそう苦情を申し立てる。

「ですね。では、私から説明させていただきますましょう」

不在のデミウルゴスに代わり、パンドラが姿勢を正す。

「まず、モモンガ様から我々への命令は、今後大きく減ることとなりま

引き攣るような悲鳴を上げたのは、誰だったか。少なくとも、外部での活動が増えた一般メイドたちではなかったが、彼女たちの顔色もよろしくはない。捨てられるのではないか、という不安が拭えないのは、彼女たちも同じなのだろう。

「理由は簡単で、わたしたちが命令を遵守するように動いては、不測の事態への対応が難しくなるから、でありんす。お前たちは率先して戦うこともそうないでありんしょうが、万一の時に指示を待つことになれば、最悪その瞬間にお前たちは殺されてしまいんすからねえ。それを防ぐために、わたしたちを含めて、自己判断で動くように、ということでありんす」

「絶対服従のシモベであることは許されない、ということね」

シャルティアから驚くほどスムーズに理由を語られ、アルベドもそれを肯定。

そこに至り、オーレオールはモモンガの『考えて決断しろ』という言葉の真意を理解した。

「故に、最後に問おう——この先、かつてのナザリック防衛戦を超える死闘となる」

端的に事実を述べ、眼窩の紅炎を燃え上がらせる。

「お前たちは、どうする?……命令はしない。お前たち自身が、どうしたいかを判断せよ」

沈黙が流れる間もなく、最初にアルベドが口を開く。

「我が命に代えても、御身をお守りいたしましょう」

「それは、それがお前の役割だからか?」

「いいえ。モモンガ様を愛しているからこそ、にございます」

対抗するように動くかと思われたシャルティアは、しかし冷静に宣言する。

「わたしも、モモンガ様と共に戦いましょう。我が力、存分に使ってくださいませ」

「頼りにさせてもらうぞ、シャルティア……では、少々ズルいかもしれないが」

その手に小さな石のお守りを乗せ、差し出す。

「お前の力を高めてくれるだろう。お前が発見したものだ、お前が使える」

「は……………はいっ!」

シャルティアに一層の気迫が満ちる中、少しの思考を挟み、コキユートスが顔をあげる。

「我ハ、前線ニテ刃ヲ振ルイタク思イマス」

「そうか。だが、相手は空に舞う存在だぞ」

「ナラバ、墮トセバヨイノデス。モモンガ様トシャルティアナラバ、或イハ可能デシヨウ」

「ふっ……………言ってくれる。だそうだぞ、シャルティア。私たちも頑張らねばな」

少しばかり気安くなったコキユートスに、モモンガは嬉しそうに応じる。

その姿を視界の端に収め、セバスは難しい顔で考え込み……………

「私は、後方に回らせていただきたく思います」

「ほう?」

「確かに、強大な龍を相手取る戦力も必要でしょう。しかし、殿を預かる者も必要でしょう」

「その通りだな」

「それに、デミウルゴス様は直接戦闘向きではありません。護衛の一人二人は必要でしょう」

(ああ、なんだかんだ言ってたつちさんの子だなあ……………)

セバスの決断を嬉しく思う中、パンドラは言う必要もない、とばかりに直立不動。

そして、アウラとマーレが決断するより先に口を開いたのは、予想外の人物だった。

「どうか、私たち一同に、ナザリツクに残る許可をいただきたい!」

「……………エクレアか」

驚いた様子のもモンガだが、ペンギン使用人は、背後の者たちは動かない。

「皆様方がお帰りになられるときに、出迎える者がいなくては、寂しい

ではありませんか」

その言葉が、モモンガの心に深く突き刺さる。

見送るばかりで、ただ一人残された彼の心を、強烈な感情の波が揺さぶるのだ。

「いいだろう。どうやら、勝って帰る理由が増えてしまったようだな！」

抑制し切れぬ感激に声が震える中、一般メイドたちが逡巡した様子を見せる。やがて、彼女たちは二手に分かれ、それぞれの代表者が一歩前が出る形で、自分たちの決断をモモンガへと告げていく。その目は、外界と触れたお陰もあるのだろうが、確かな決意に満ちていた。「エトワルほか17名、エクレア様と共に、モモンガ様のお帰りのため、尽力したく思います」

「シクススほか22名、モモンガ様たちのご助力のため、前線に出たく思います」

「…………お前たち…………」

帰りを信じ、ナザリックの維持を申し出る者たちがいた。

主たちの勝率を上げるため、脆弱な体を押し役に出とうとする者たちがいた。

「アウラ・ベラ・フィオーラ、モモンガ様のお手伝いをしたく思います！」

「マール・ベロ・フィオーレ、モモンガ様のお手伝いのため、頑張ります！」

具体案は浮かばない。浮かばないなりに、二人は主の身を案じ、共に戦うことを決意した。

「…………私は、前に出ます。一番あのモンスターたちを知っているのは、私です」

シズの言葉に、姉妹たちは安易に追従することなく、自身の決断を口にする。

「私は後ろに控え、人間たちと共に戦います」

「あたしもです。腕つぶしは劣りますが、回復魔法はいっぱい使えますので」

「私はデミウルゴス様の補佐をできればと。目が多いほど、指揮もやりやすいでしょう」

「…………微力ながら、モモンガ様たちと共に戦うことをお許しいたできたく思います」

「頑張ります！」

皆が考え、考え、己の意思で決定を下していく。その度に、モモンガの声が喜色に満ちていく。

「オーレオール・オメガ、全力を尽くすことを誓いましょう」

「同じくルベド、御身の敵を討ち滅ぼすことを誓います」

二人が宣言したところで、一部以外の視線がパンドラへと集まる。

「パンドラズ・アクター、モモンガ様のお望みのため、尽力することを誓いましょう」

そこに含まれる多重の意味を全て読み解けたのは、果たしてどれだけ居るのか。

「では、オーレオール。手間をかけるが、彼らを第九階層まで送り届けてほしい」

「あ、エクレア！あの子たちの世話、お願いね！」

「遊び相手というより、遊び道具として見られてる気がするんですねえ、私」

最後になるかもしれない会話を数度交わして、待機を決めた者たちがナザリツクに戻る。

それを責めはしない。なにせ、ナザリツクのNPCの大部分は趣味優先で、ユグドラシル基準では、戦闘の役に立たないどころではない程低レベルの者が殆どだ。だが、彼らの選択は臆病風に吹かれた、などではなく、彼らの勝利を願い、祝う準備をするためにと、敢えて守りが失われるこの地に残ると、そう宣言したのだ。

そして、彼らが必要とするもう一つの勢力が、この地を守るために到着する。

「ピュイアアアッ！」

「キュアオオオオッ！」

「…………ピプノックと、ホロロホルルだったか」

モモンガが名を呼んだ鳥竜に続き、他にも数多のモンスターが、ナザリック周辺に集まる。

森の賢王は最前線に出ているが、本能に抗い切れぬ者たちの多くが、こうして同盟者の拠点防衛のために集まったのだ。個々の力はそう高いものでもないが、彼らは数の利と、それを効率的に使い強大な個を磨り潰す戦術を理解している。

これは激励だ。『必ず勝て』、そして『生きて帰ってこい』という、この地の命からの。

「まったく……退路を断つのが上手いな、本当に」

（元々、退路なんてないけどな。しくじれば、森どころかナザリックも危ういんだから）

赤い眼光を一際強く輝かせ、《転移門^{ゲート}》の魔法を発動。先は、決まっている。

「——行こうか」

ローブを翻す。死地へと赴く背中へと、異形の軍団が付き従う。

残ると決意した者たちを孤独にしないためにと、強固な決意を宿す、精強なる軍団だ。

「お待ちしておりました、モモンガ様」

モモンガの腹心が跪き、肩を並べ戦う战士们と共に出迎える。

リ・エステイーズ王国、バハルス帝国、スレイン法国、アベリオン聖獣連合……近隣の国家のほぼ全てから、戦力が派遣されているのだ。無論、帝国以外は自国内の脅威への備えも必要である以上、総力を集結こそできていないが、およそ考え得る最高戦力を、惜しげもなく投入していることに違いはない。

「コノ、寒気ハ……」

「氷龍の影響だね」

そう零すツアインドルクスを除くと、皆武具の上から分厚い防寒着を纏っている。中でも、特に辛い思いをしているのは、スレイン法国から貸与されたワールドアイテムに身を包む、カルカであろう。その美貌を引き立たせる、深いスリットの入ったチャイナドレス【傾城傾国】であるが、ボデイラインを際立たせるほど薄いそれに、防寒効果

などある筈もない。

「時間は無きそうだ」

「無いでしょうね。あと、三日も残されていないんじゃないかしら」
番外席次の言葉に、しかし誰も動じはしない。

『いつか』が、『すぐ』になっただけだ。予想外は数多くあったが、残された猶予が少ない程度のことを気に留めはしない。もとより、いつ死ぬかも判らぬ仕事を生業とする者たちだ。命惜しさではなく、未知の脅威を未知のままにしないために生存を選ぶことこそあれ、死ぬことを恐れるような者は皆無。何より、未知と幾度となく対峙したおかげで、そういうものであると心構えが出来上がっていることが、大きかった。

「……………理解しているだろうが、近いうちに決戦となるだろう。砦蟹のそれとは、異なる決戦に」

ガゼフが険しい顔で頷き、王国、法国の者が一斉に姿勢を正す。法国側の戦力派遣は聖典部隊が主でこそあるが、情報の共有ははっきりされている。それとは異なる、と前置きこそされているが、決戦という響き、そして砦蟹を比較と挙げられたことで、その意味の重さを噛み締めるのだ。

「で、あろうな。数以上に、黒く染まる現象が広がる可能性を考えれば……………」

「ああ。私と、私の部下数名……………そして、スレイン法国の精鋭とで、前に出る。我々が古龍たちを抑え込む間、皆にはこちらに逃げ込んでくるであろう、モンスターたちへの対処を頼みたい。無論、我々にできることならば、幾らでも手を貸そう。そのための備えはしている」
モモンガの背後では、こちらに出向いた非戦闘系のシモベが動き始める。彼らの戦いを支える為にと、ナザリツクから持ち出したものを惜しげ無く使い、文字通りできることに全力を尽くしていく。戦えぬながらも、こうして主のためにと前に出た者たちは、事態の重大さを肌で感じたことで、心の内の嫌悪、侮蔑を完全に投げ捨て、全力を尽さなければ、と持てる力を存分に振るうのだ。

「……………かたじけない」

「代わりに、こちらは任せるぞ。私たちでも、古龍級四体を相手にする
ので手いっぱいだ」

「そこは安心していただきたい。我らの命に代えても、守り抜いて見
せましよう！」

対古龍の戦闘には参加しないながら、間違いなく精鋭に位置する者
たちが力強く首を縦に振る。

そこから次の話題に移らんとしたところで、転移魔法により『蒼の
薔薇』が現れる。

「すまない、遅くなった！まったく、一番早いのが私だからって、あい
つらは！」

「い、イビルアイ、落ち着いて……………」

「おう、貴族様方と、あと陛下たちからの贈り物だ！」

その背後には、よくグレート・テレポーション《上》位 転 移》一回で運べたな、と感心する

ほどに、支援のための品々が山積みになされた荷車が。その数も相当な
ものだが、イビルアイが再び転移魔法を使おうとしたところで、デミ
ウルゴスが待ったをかけ、慌てて彼女に追従。数回に分けて、支援物
資の山を運び込んだ。

「すまない、助かった……………この寒さは、氷龍か」

「その通りだね。幸い、今は奴だけだけ……………」

ツアーが言葉を失い、空を見上げる。何事か、と他の者たちも空を
見上げ、少ししてその元凶が現れてから、揃って言葉を失った。船と
は本来、水上を移動するものであり、竜王国という特殊な環境でこそ、
砂上を走るといふ非常識でも許容は出来ていた。だが、だが――

「……………そんなのありかよ」

空を飛ぶ船、なんてものは、誰一人として、考えたことすらなかつ
ただろう。

「おいおい、なんだありやあ……………これ、あそこに向かえばいいんだよ
な？」

そして、そんな非常識を頼りに、個人として最強に近い男もまた、
同じ場所を目指した。

41—破滅への抵抗

黒き龍が、体を起こす。

「……………ッ！」

その体を、蒼白の炎が包み込む。灰白色の龍鱗は漆黒に変貌し、その胸から青白い光が零れる。

その頭には新たな角が生え、増大した力に呼応するように空が闇に閉ざされ、禍々しい光を放つエネルギー球……………巨大な、恒星の如きソレが生じ、大地を照らす。その絶大な力の発露に、それをも超える潜在能力を有する『白』は動じることなく、しかしその行動の理由に、感嘆の吐息を零した。

「そこまで深く共鳴したか。まったく、難儀な性質を持っているな、あの娘は」

白き祖が笑う。

黒龍の変貌に、ではなく、その遠因となった、どこまでも純粹なこの世界の存在に。伝説の黒龍を相手に、魂に近いレベルで共鳴反応を引き起こし、断片的ながらその力を引き出すまでに至った、100%この世界に由来する、ヒトと竜の混血児を。その事実にも容易く辿り着かれまいと、わざわざ八欲王にすら見せていない、最強の姿を露わにした、禁忌の存在を。

「これでは『黒鱗』ではなく、『黒龍』ではないか」

「それでは、少々ユーモアに欠けるのではないか？」

ひとしきり笑うその姿に、赤衣の男が水を差す。

「せっかくだ、彼の龍の力、その忌み名にちなみ——」

『破滅の竜王』、などいかがだろうか？

破滅の詩を残し、邪龍の巫女とも呼べる資質を持つ少女の生誕を言祝いだ存在は、静かに笑う。

フェイタリスの名と共に、その偉業を称えるように。

その名を与えた者の、彼女が肩を並べる者たちの、勝利を確信するよう。

*

ないながら、元の空気を取り戻していく。しかし、その時間も長続きはせず、監視に出ていた森の賢王が全速力で戻ってきたことにより、一瞬で最高レベルの緊張を取り戻す羽目になった。

「っ、何事ですか!？」

「こつちに何者か、とんでもないのが接近中でござる!」

「私か？私が悪いのか？」

「いや、そちらの御仁ではなく——ッ!!!」

身構え、睨んだ先へと、皆の目が向けられる。そして

「ッ、ブレイン・アングラウス!？」

「アングラウスか!」

その名を呼ばれた男は、何の変哲もない人間だった。強いて違うところを挙げるとすれば、雑な手入れの青髪と無精髭、その腰に収まる丁寧な手入れをされた刀と、背に担ぐ風化したナニカ。一目で鍛えられていると判る肉体のあちこちに、傷跡が残されていることから、その戦歴が判ることだろう。

「え、アングラウスって、人間だったの?!」

モモンガが目を剥き、守護者たちも唾然とする中、漆黒聖典の隊長は「あー」と間の抜けた声を零す。少しばかり責めるような視線が、同部隊員たちから突き刺さる中、番外席次が一人ブレイン・アングラウスと呼ばれた青髪の青年へと歩み寄り、

「——ッ!」

ウォーサイス

戦鎌で斬り掛かり、カウンターとして叩き込まれる斬撃をギリギリの紙一重で回避。大きく後方へと跳び退き、自らの鎧に刻まれた筋を指先でなぞる。白と黒のオッドアイは、彼の手中にある、ありふれた無銘の一太刀へと注がれる。手入れも最低限であろう、質としては一般的な冒険者が使うものの中でも下から数えた方が早い部類のそれで、仮にも神の遺産である鎧に傷を穿ったのだ。

「……………こういうこと。実際、モンスターと言っても過言じゃないと思うけど」

「いきなり斬りかかっておいて、随分な言い草だなあ」

うんざりした様子のブレインだが、やったことはそれだけのこと

だ。

「えーつと……参考までに、今までどちらに？」

「一人で修業さ。まだまだ、目指すところは遠いがね」

「気負う、わけではなく、どこか遠くを見つめるように、険しい顔で零す。」

「では、何故ここまで？」

その理由を知るガゼフは、過度に深入りさせまいと、話題を変える。「ヤバい気配を感じてな。まあ、森で銀色のに絡まれて、順調に遅れちまったわけだが」

銀色の、というのが気になりはしたものの、今は重要でないと、話題には上げない。

「では、アングラウス殿」

「ブレインでいい」

「……ブレインは、私たちと共に戦ってくれる、と？」

「いや、そもそも何が起きてるのかも知らねえんだけどな？第一、なんだよあの山」

あまりにごもつともな発言に、場の空気が緩む。

「あー……まあ、それをせざるを得ない事情があつてだな」

モモンガが大雑把に説明すれば、ブレインには驚き、というより呆れの色が強く表れる。

「いや、確かにそれならあつた方が便利だろうが……マジで作るか？」

「だって、作れたし……お陰で、こうして戦力の一点集中ができてるしな」

でたらめ具合に呆れるブレインであるが、恩恵が大きいのも事実。何より、わかりやすい拠点が完成したおかげで、どこに向かえばいいかも判つたのだから、有り難い話だ。流星に完全に全方位をカバーはし切れておらず、特にカルサナス方面では、少なくとも襲撃が起きてこそいるが、それでも帝国程の物量はない。

おかげで、躊躇いなく戦力の集中ができているのだが。

「だな。それじゃ、俺はあんたらと戦えばいい、と」

「ああ。今を見せられて、腕を疑うこともあるまい」

(あの装備のランクからして、そんな鈍らじや切れない筈だけど……うん、バケモンだこいつ)

ナチュラルにやってのけた芸当の次元の違いから、疑う者などいるはずもない。

この中でもモモンガらに次ぐ上質な武具を、駆け出しも駆け出しの、中型モンスターを相手取るのが精々の脆弱な武器で傷つけるその技量は、素人であろうとも理解できる程に高度なものだ。何より、高い地位にある実力者は皆、その化物染みた実力をよく知っている。特に、王国の、農村出身の者であればあるほど、その過去も含めよく知っている。

「あのアングラウス殿が……こりや、心強いつてもんじやねえな」
「ですが、油断は禁物です。全戦力を一点に集中できるわけでは、ありませんからね」

今回の決戦において、無視できない難点は、戦力の分散を強いられることだ。

モモンガ筆頭の、超越者と呼べる実力者たちは、最前線を超え古龍と対峙。これは、想定される相手が二体存在しているということと、これと交戦する古龍級の存在二体、そして直接これを狙う古龍級モンスターの可能性という数多の不安要素から、被害を抑えるうえでも不可欠なことだ。相手は砦蟹と異なり、ただ地を揺らす、では済まない災禍を引き起こす存在であるのだから、仕方のないことだ。

問題は、それらの戦力の多くが欠落した状態で、古龍から逃げるモンスターを抑える必要があるということだ。数が厄介であることもそうだが、問題は彼らに狂竜化、或いは極限化している個体が混入している、ということだ。更には、ことと次第では一時共闘もできるとはいえ、龍の力の影響により強化されたヌシ級も存在している、というのだから、泣くに泣けない。

「これは、戦力の細分化が必要かもしれないな」

「それと、最後の防衛体制も」

音もなく現れたのは、三人の忍び。金髪、赤目の共通点を持つ三姉

妹だ。

「イジヤニーヤ」

バハルス帝国が抱える諜報部隊。その情報精度は、スレイン法国の聖典部隊に次ぐ。

何よりその『足』は、諜報系聖典部隊の誰よりも優れた者が、集団単位で存在している。

「まずいことになった。嵐が強まって、接近速度が上がってる」

「古龍に怯えてたモンスターたちだけど、徐々に動いてる。今夜中には、確実に」

「最後の仕上げは、昼間に終わらせないと不味い」

端的ながら、的確な情報を放り込む。が、そこでデミウルゴスが少しばかり渋い顔をして

「……………実は、この寒気で紅蓮がやられてまして」

「ああ、あいつスライムだもんな……………物理には滅法強いけど、冷気はダメなんだよなあ」

イヴェルカーナの来襲による、まさかの番狂わせ。更に悪いことに、堀を満たす海水の大部分が凍ってしまい、水による陸路の遮断自体が根本的に不可能となっているのだ。デミウルゴスが事前に、大型モンスターが十体二十体乗った程度で割れる程薄いものでないことは確認済みであり、それも交えて報告。

流石のトップ陣も、揃って頭を抱えた。

「陸路がそのままでは、勢いを削ぐこともままなりませんね」

「えつと、これの力は確か、古龍には通じないのですよね？」

「ええ。ケイ・セケ・コウクでは、古龍は支配できません」

「絶対にやめようね？それやると普通に滅ぼされるからね？」

ツアーがガチトーンで警告すれば、皆頷くほかなくなる。氷龍の戦鬪力を最も知る竜王の言葉は重く、そこに異を唱えることができるのは、よほどの素人くらいなもの。そうでなくとも、真冬以上の厳冬を引き起こした龍に対する無謀が、どのような報いを齎すのかは、容易に想像できた。

「……………こうなると、手は限られてしまうな」

紅蓮という、地上の敵に対する最大級の戦力が封じられてしまうア
クシデントこそあれ、突発的アクシデントの一つや二つは想定の内。
モモンガの赤い眼光を向けられたパンドラ、アルベドが領き、更に三
人の視線がマーレへと注がれる。突然のことに驚いた彼の肩にデミ
ウルゴスが手を置き、一度頷いてから、モモンガへと顔を向ける。
「そのプランですが、私からも幾つか提案させていただきたく思いま
す」

「元より、そのつもりだとも。それに、今回は我々の存亡をかけた戦い
だ」

その目が、集まった戦士たちへと向けられる。地位も、国も、所属
も関係なく、ただ一つの目的のため、肩を並べる勇士たち。その気迫
は凄烈で、それでいてどこまでも透き通った純粹なもので、実に心地
いい。死を覚悟し、それをいとわぬ決意を秘めたその目は、何よりも
美しく見えた。

モモンガたちの生きる世界で、誰もが失った命の輝き。その究極形
が、そこにはあった。

「ウチの船も含めて、好きなように使え。足は遅いが、足場くらいにや
なれる」

「それと、積んだ最新装備もですね。拠点防衛用の転用なので、使い勝
手は保証できませんが」

残された僅かな猶予の中、皆が真剣に頭を悩ませ、次々防衛線構築
の案を出していく。

*

深夜——荒れ狂う嵐が、木々を巻き上げる。叢雲薙ぐ烈風か
ら、大地を喰らう轟雷から、竜たちが、森で密かに逃げ延びていた亜
人たちが逃げ惑い、その末に二分化された勢力の激突を起こしなが
ら、唯一の道へと雪崩れ込まんとする。

片や、ごく普通のモンスターたちと、それを庇うように立ち回る、
禍々しい赤に輝く傷跡を持つモンスターたち。幸運にも、黒き竜の力
を逃れた者たちと、絶大な龍殺しの力……龍属性エネルギーに適応
した結果、短期間で急速に変化を遂げ、龍の力に耐性を得たヌシたち。

数多の脅威からの逃避が、彼らに在り得ざる秩序を齎し、理性的にも見える行動を可能としていた。

そして、もう一方は禍々しい黒の一団。誰もがその眼光を赤く染め、肉体を蝕む狂竜の力に身を任せ暴れ狂う、狂気の現身。毒々しく染まった紫血をまき散らす彼らに秩序はなく、同じ道を使わんと荒れ狂いながら、同じ集団の中でさえ、殺し合いを続ける。

その中で、一際禍々しい赤い輝きを帯びた、極限化モンスターたち。他の猛攻を歯牙にもかけぬ怪物たちは、牙？く者、逃げ惑う者問わずに惨殺し、その身を紫血で染め上げ、漆黒の鱗粉をまき散らし、暴走する。狂いながらも、彼らの根底は本能的恐怖に支配され、後方の龍二体ではなく、前の龍一体に挑む無謀を強いられたのだ。

「さて、と」

その軍勢を、金色の瞳が捉える。瞬間、竜たちは一斉に怯み、僅かながら動きを止めた。

「生憎と、私はあちらに合流しなければならなくてな」

魂の力を使う究極の魔法、《ワイルドマジック始原の魔法》。

しかして、解き放たれるのは竜の魔法ではなく、龍の力の一端。彼女が深く、深く共鳴している存在の力であり、未だ一度として解き放たれていない、黒焰の力だ。無論、オリジナルと比べてしまえば、それこそ第六位階魔法と第一位階魔法並の格差があるが、絶大であることに違いはなく

「景気づけだ、一発いっとけッー！」

禍々しい星が、夜を照らす。そして、絶大なエネルギーを秘めた星は、静かに地に落ちた。

42―龍群、激突

始原の魔法が、空中における足場となる飛行船を転移させる。

その数、二。

(まさか、こんなことになるとは、ね)

ツアインドルクスⅡヴァイシオンは、古き竜王において、最強と呼ばれる存在だ。

世界が歪められる以前、八欲王の時代に多くが滅ぼされた竜王の一角であり、世界の変成を体感した世代でもある。黒き龍によるプレイヤーの塵殺を目の当たりにし、多くの竜王が滅ぼされ、空白となった地を龍が作り替え、竜が満ちた様子を、それに抗う民を見続けた。竜である彼は、過度に肩入れすることなく、亜人たちをまとめ上げた評議国へと籠り続けていた。

だが、同時に彼らを………辺境の人間を、見守り続けてもいた。

彼らがおか過てば、すぐに見放す程度の関心でしかなかった。だのではなく、自らの力で生存圏を広げていった。竜王たちが敗戦の傷、或いはそれを言い訳にした自己保身で保守的に立ち回っていた間に、人類は弱いモンスターたちを利用し、時に迷い込んだプレイヤーと手を結び、強かに立ち回り続けてきたのだ。

「………今更、異物として排することができ、とは思っていないさ」

八欲王をはじめとするプレイヤー以上に、上の際限が無い龍たちを排除することは、不可能だ。

キュアアイリムが用いた《滅魂の吐息》は滅尽龍に通じず、その体躯とゾンビの鎧を以てしても短時間の生存が精々と、上位に位置する存在はトコトンまでに強大で、凶悪なのだ。ツアー自身、多くの竜王が集う評議国周辺の監視を行う古龍たちのお陰で、反抗心なんてものはとつくに折れている。

だが、全てに反抗するつもりは無くとも。

「彼らは、私の友たちが守った民だ」

使える始原の魔法から、ありつただけの強化を仲間たちに施す。

「ならば、私が、彼らを見捨てる訳にはいかないだろう」

もし、スレインが神に選ばれた国と驕り、増長しているようであれば、肥沃な地の王国が、腐敗の限りを尽くしているようであれば、ここまで強い思い入れを抱くことはなかっただろう。だが、彼らはツァインドルクスⅡヴァイシオンの、最強の竜王の琴線に触れたその輝きを損なうことなく、多くの脅威に抗い続け、生存圏を勝ち取り続けたのだ。

「装填、出来ました！」

「シズ様から、あちらも準備できたと報告がありました！」

「では、開戦の合図だ。着弾次第、我々も出るぞ」

ナザリツクのメイドたちが船の武装の準備完了を報告し、モモンガが指示を下す。

「…………改めて目にするると、モンスターが逃げ惑うのも納得がいくな」

木々が根元から引き抜かれ、暴風の中を土砂と共に舞い。荒れ狂う轟雷が木々を貫き、土砂の塊を破壊し、どす黒い風壁を漆黒の鱗粉がより深い黒へと染め上げる。その中では、赤と金の稲光と共に紫の爆炎が閃き、現実離れた光景を作り出している。が、飛行船が姿勢を保つのに苦勞するほどの暴風が、それに揺られる不安定な足場が、否応なしに現実だと突き付けてくる。

「ハアッ！」

ツァーの始原の魔法が、暴風の壁に穴を穿つ。

「今ッー！」

「撃えっ！」

そこを通し放たれる、設置型兵装による攻撃。荒れ狂う稲妻により撃ち落されるものも見られるが、天災を掻い潜った砲撃は空を舞う龍たちへと飛来し、赤い爆炎の花を咲かせる。機動力の高い黒蝕竜、怨虎竜は見事に離脱して見せたが、対の龍はその巨軀から完全に逃れることはできず、その身に強烈な爆発を浴びることとなった。

「——ッ!?!」

「効果は薄い、か。だが、怯ませることはできた」

《ライフ・エッセンス生命の精髓》による変化の確認はできなかったが、反応一つでも十

「オ任せ下サイ！」

飛翔し、暴風圏に突入。その凄烈さは魔法で到底抗えぬ域であり、皆思うように動けず、流されている。空中戦など夢のまた夢に思われたが、モモンガを除く三人は上手く風に乗り、浮かぶ岩塊や氷塊をうまく利用している。戦士として歴戦である二人はとにかく、シャルティアがそこまで動けるようになっていたというのは、嬉しい誤算であった。

(ペロロンさん。貴方のNPCは今、立派に戦ってますよ)

魔法攻撃で二体の龍の気を引くシャルティアは、『死せる勇者の魂』をその特異な色彩により隠れ潜ませ先行させている。そして、生気のない分身騎士が風の流れに乗り、その中核となる風神龍へと肉薄、その身に鋭槍を叩き込んだ。

「……………」

「ッ、オオオオオオオオオオッ!!!」

不気味な感触に分身が動きを止める中、風神龍の放つ赤雷が荒れ狂う。咄嗟の回避が間に合わず被弾する分身は、次の瞬間に雷神龍の放つ轟雷を浴び、数秒としない内に消滅する。が、その一瞬の反応から異質なナニカがあると察知したシャルティアは、魔法による転移で二体の龍の死角に回る。

「シィッ!!!」

スポイトランスを突き立てれば、その違和感に気付く。

(ゴムを突いてるような……………ッ)

そう、ゴム。似ている、とだけだが、斬撃武器では難儀させられるだろう手応えだ。

「オオオオオオオオオオオオッ!!!」

「《力フォース・サンクチュアリの聖域》ッ！」

龍殺しの雷を纏う暴風を魔法で一瞬停滞させ、転移により離脱。その先は、対龍の上だ。

『清浄投擲槍』——ッ！」

追尾能力を付加した、龍たちが耐性を持たない神聖属性の攻撃。理不尽にも近い圧倒的な能力差から来る、属性を帯びた攻撃によりあつ

さりと叩き落されてしまうが、注意がわずかに彼女に向けば、その間に他の者たちも動きやすくなる。事実として、ツアーは大きく距離を詰めていた。

「——ッ！」

が、その周囲に浮かぶ武器は、古龍に向かうことなく、地上へと放たれる。

「グギャオツ!？」

「……………奴はボクが引き付ける。悪いけど、そちらは任せるよ！」

極限化した怨虎竜。ワールドアイテム、或いはそれに準ずる力を有する者でなければ、文字通り刃が立たない怪物を相手に、始原の魔法の使い手として最強の竜王が立ち向かう。更に言えば、肉体無き鎧の戦士と、底なしの食欲を以て生ある者を喰らう餓竜とは、ある意味相性がいい。

「ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

それと入れ違いに来襲するのは、病禍を巻き散らす黒き竜。その発達した翼腕を広げ飛来した竜と、雷神龍の間へと風神龍が割り込む。荒れ狂う暴風、赤雷をその身に浴びながら、しかし驚くほどに通用している様子を見せぬ黒き竜は、その剛惨爪を突き立て、至近距離から漆黒のブレスを叩き込む。

双方の格差を示すかの如き激突の中、ブレスの爆発により距離を取った一瞬の間に。雷神龍より放たれる雷が黒蝕竜を襲い、漆黒の厚鱗を、厚殻を一層どす黒く焼き焦がす。その一瞬の間に、暴風のブレスによりその身を吹き飛ばされた黒き竜が、暴風の壁を突き破り飛行船の甲板上へと墜落する。

「きゃあああああああっ?!?!」

「被害状況！」

「航行能力には影響ありません！」

怒号が飛び交う船の上、身構える守護者すら意に介さず、黒き竜は翼脚を広げ立ち上がる。

「グルウウウ……………ッ！」

その身に走る光が、急速に変わっていく。淡い青紫が、毒々しい紫

起こした。

「オオオオオオオオオオオオオツ!!!」

「ギユアアアアアアアアアツ!!!」

更に、氷龍と司銀龍がその力を存分に使い、全方位攻撃。

「ぬあつ!?!」

「ツ、『不浄衝撃盾』ツ!」

「く……………っ!」

それぞれが防護を行う中、外敵もいいところである二体の龍、黒蝕竜にも銀刃が、氷槍が飛翔。黒蝕竜が結晶の壁により攻撃を逸らす、或いは減衰させることでダメージを抑える中、対である神龍は完全な回避も叶わず、その身に深い傷を刻まれていく。

「……………これが、古龍という存在か」

「歴戦王と迥異種って、上澄みも上澄みだから参考にしない方がいいわよ?」

暴風に乗り合流した番外席次がそう零す中、魂まで凍り付かんばかりの恐怖が沸き起こる。

「……………ひッ!?!」

「……………」
奔る悪寒に番外席次が悲鳴を零す中、モモンガは声すら上げられない。

『鈴木悟』が必死に叫ぶ。『逃げろ』『勝てない』——『バケモノが来る』、と。

「ギユウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」
圧倒的とすら言える巨軀を誇る対なる龍が、恐怖に引き攣った声を零した。

黒蝕竜が地上へと急降下し、全方位を警戒した。

歴戦の猛者中の猛者が、異を辿り超越に至った古龍が、初めて動揺を見せた。

「な、なに!?!なんなの!?!」

「二体、何が……………ツ」

43―邪棘降り立つ防衛線

爆炎が舞い、砕けた大地が舞い、鮮血と肉片が舞う。

「ク、ソがああああああッ！」

「熱くなるな！待っ」

狂える竜が、獣が、命を喰い散らかす。

その中でも一際異彩を放つのが、山岳が如き巨軀を誇る獣竜。

「ギエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエッ!!!」

「並んで、狙って……撃ってッ！」

!!!

槌が如き発達した尾、山の如き苔むした巨軀。悍ましい漆黒に包まれたソレを目掛け、数多の爆炎が、鋼鉄の矢が飛来する。その堅殻が焼け爛れ、貫かれる中、しかしその巨軀の持ち主、尾槌竜は動じない。その巨体故、生中な攻撃では決定的なダメージを与えるに至れないのだ。

「冗談でしょう……！」

そして、その巨体が暴れば、それだけで立派な武器となるのだ。多くの者が接近すままならぬ中で、幾つかの影が颯爽と駆け抜ける。直撃すれば即死、或いは致命傷は免れないであろう巨大質量を掻い潜る彼らは、精鋭中の最精鋭。現地において、最上位の実力者たちだ。

「ふんッ！」

「はあああああッ！」

ガゼフが、レメディオスが剣を振り抜き、強固な外殻を割り、肉を切り裂く。

「グオオオオオオッ!!!」

「何か来ます！」

叫び、一斉に散開。大きく強固に発達した尻尾を使い、高速で回転する姿は滑稽ながら、それに巻き込まれ、甲殻ごと骨肉を挽き潰される竜たちを目の当たりにすれば、恐怖の方が遙かに勝る。そして、その回転による加速を存分に駆使し、巨大獣竜が行うのは……跳躍。

「っ、全力で逃げなさいッ！死にますよ！」

漆黒聖典隊長の叫びを受け、逃げられる者は全速力で逃げる。足の遅い重装の者は、陽光聖典が召喚した天使たちにより運ばれるが、特大質量の落下と、それによる衝撃、破壊がどれほどの規模になるかは、誰でも想像がつく。

「総員、衝撃に備えてください！」

その怒号の中、ただ一人動かない者が

「アレが一番の武器、となりや………」

巨塊が迫る。人間は疎か、竜の命すら容易く奪えるだろう、戦槌が振り下ろされ――

「――ふッ！」

大地を砕くことなく、宙を舞った。

「ギアアアアアアアアアアアッ?!?!」

「やるじゃん、アングラウス?!?!」

地面スレスレの前傾姿勢で全力疾走する『疾風走破』が、宙を舞う尾甲を足場に跳び、巨竜の背を蹴る。狙うのは、憤怒に呼応するかのように蒸気を噴出する、巨大なコブ。『急所感知』で探ろうにも、それが可能な距離ではそもそも視界に入ってくれないソレを、彼女は見逃していなかった。

「ソコが、一番脆いんだろッ！」

六大神の遺産である双刃が閃き、分厚い皮の下に蓄えられた脂肪の塊を切り裂く。激痛、そして本能的危機感から尾槌竜がその身を揺らす中、彼女は主力武器とは別に愛用しているステイレットを腰から引き抜き、逆手に構え深々と突き刺す。そして、《^{ファイヤーボール}火球》の魔法を発動。弱点を内側から破壊した。?!?!?!?!

「ギアアアアアアアアアッ」

「っしー！」

「我々も、敗けてはいられんな！」

ガゼフ・ストロノーフが。リ・エステイーズ王国が誇る最強が、力強く剣を握る。

「その通りだな。このまま、ただ突っ立っているだけの木偶の坊扱いはごめん被る」

瞬間、召喚天使たちが総出で戦士の避難を行い、危険を察知した正常なモンスターたちもそれに続く。難色を示す顔もあったが、それらは指揮官格の人物たちに黙殺され、パンドラの転移魔法による穴が、空へと穿たれる。そこから奔流として流れ出すのは、溶岩同然の性質を持つ巨大奈落スライム、紅蓮。^{アヒサル}

その灼熱に、大質量に飲まれ、中型以下の飛行できないモンスターは外部の堀まで押し出され、飛行できるモンスターであろうと、飛んだところを遠距離攻撃に晒される。致命傷には及ばないながら、墜落によるダメージが入るモンスターたちに、紅蓮に飲まれ窒息、或いは焼死するモンスターたち、更には堀が復活したことによる陸路の妨害が加わり、ドラウデイロンの攻撃により逃げたモンスターたちの存在と併せ、大分勢力は抑え込めるだろう。

「——ッ、何か来るでござる！前から、後ろからも！」

微かに緩んだ空気をぶち壊す、森の賢王の叫びが響く。

「総員、体勢を整えなさい！クアイエツセ、索敵を！」

「もうやっています——ああ、なんてことだ！」

空を見上げ、クアイエツセが叫ぶ。

「全員、全力で逃げなさい！」

続けて、低く響く咆哮。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ——ッ！！！！」

空を見上げれば、大きな翼を広げ滑空する、飛竜の姿。そして、地上へと落下するナニカ。

「ぼっ」

「爆鱗竜だど!？」

丸みを帯びたフォルムに対し、下部に見える異様な凹凸。「爆鱗竜」の名を与えられた飛竜は、その名の由来である体液由来の、赤熱した爆鱗をばらまきながら、禍々しい赤い輝きを纏う巨軀と共に飛来する。地に落ちた爆鱗は即座に爆発し、モンスターの強固な外殻を粉砕し、肉を抉り、更には一目で危険と判る漆黒の粉塵をその場に残す。それは尾槌竜も例外ではなく、あれほどの威容を誇った巨軀は爆撃に包まれた末、見るも無残な屍となり地に沈む。

その規模は、まさしく絨毯爆撃。陽光聖典が召喚天使を空爆からの盾に使うが、それでも完全に防ぐことは到底不可能。軽装戦士は疎か、重装戦士ですら一瞬で跡形もなく消し飛ばす程の破壊の嵐をばら撒きながら、爆鱗竜の体は絶え間なく爆鱗を再生成、投下し続け、決戦の地を焦土へと変えていく。

無差別、無軌道な爆撃から全員が逃れることは出来ず、陽光聖典の奮戦も虚しく一人、また一人と爆発に飲まれ、蘇生に不可欠な肉体を残すことすら許されず、この世から消し去られる。大地を蹂躪する気高き非道は、その狂気に染まった瞳で、空に浮かぶ『餌』たちを捉えている。

「っ、逃げてー！」

アウラの悲鳴染みた叫びの中、極限化した『爆鱗竜』バゼルギウスがテイミングモンスターへと喰らい付き、地に引きずり落とす。墜落と同時に爆鱗の爆発に飲まれたモンスターは、見るも無残な姿へと変わり果て、爆発によりぐちゃぐちゃになった肉を貪り喰われる。シヨック以上の怒りが沸き起こる中、彼女が感情任せに指示を下すより早く、デミウルゴスが口を開く。

「アウラはモンスターを退かせなさい！マーレは奴の捕縛を！」

「ッ、復唱します！アウラ様はモンスターの退避を、マーレ様は乱入者の捕縛を！」

純粋な指揮官であるオーレオールが復唱すれば、それはスキルを乗せた指示として、彼女たちの行動にプラスの補正を加える。二重の指示が二人に冷静さを取り戻させる中、大地に降り立つ強力な飛竜の前に、戦士たちは隠し切れぬ恐怖を滲ませている。

「マジ、かよ……………」

「ここに、更に西方から何かが来るとは——ッ」

「爆鱗竜から離れなさい！早くッ！」

しかし、それだけでは終わらない。

「グルオアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

飛来したのは、瑞々しさと、それ以上の毒々しさを併せ持つ緑。悍ましく発達した禍々しい紫の極絶角が爆鱗竜を貫いたかと思えば、全

ての爆鱗が一斉に炸裂。その衝撃で周囲の者たちが吹き飛ばされ、焼け焦げた大地を転がる中、悍ましい漆黒の煙を突き破り、元の色彩へと戻った爆鱗竜の亡骸が放り出される。

その理由を知る聖典部隊は、一斉に顔を蒼白に変える。

「嘘だろおい……………！撤収！戦士は全員撤収しろ！」

「待て、クレマンティーヌ！勝手な指示は」

「アレと肩並べろってのか?!何人無駄死させる気だよ！」

不死者以外一切を絶命せしめる、血の一滴までもが致死毒と化した怪物。

荊棘を纏う邪毒の飛竜は、鮮血に塗れた角を振り払い、大地へと踏み出す。その発達した極絶角から滲む毒素だけでも、空間を満たしていた狂竜ウイルスが急速に力を失い、汚染されていた紫の血は赤く変わる。他ならぬ棘竜自身が独自の抗体を体内で生成しなければ、生命維持すらままならぬほどの劇毒は、古龍の力であろうと完全に死滅せしめていた。

そう、完全に死滅しているのだ。それ故に、狂竜ウイルスはその肉体を侵すことが無い。強大な竜すらも蝕む病魔だが、流れる鮮血の一滴までもが邪毒である棘竜の身を侵すには、あまりに脆弱。直に体内へと侵入したところで、数秒と保てば奇跡だろう程に、その毒素は激烈であった。

「グルルツ、ルアアアアアアアアツ!!!」

毒血が激しく巡り、血管の痕跡が厚緑殻に禍々しく浮かび上がる。一際激しく毒血が巡る胸部、そして翼膜の根本がより濃い紫色に染まる中、その口からは吸い込まずとも即死できるだけの超高濃度の毒素が漏れ出し、鋭い眼光が狂える竜たちを射抜く。

「前線組にや悪いけど、ここは一旦完全退避した方が賢明ね」

「……………そういうことです。申し訳ありませんが、ここは一時放棄するべきかと」

「しかし、それでは……………！」

「なんとか、この高台にでも残れないのか?!」

そんな指揮官格たちの喧騒を置き去りに、邪毒の飛竜は大地を踏み

抜き、派手に破碎し疾駆。命の危機を本能的に察知した紅蓮が身を引けば、文字通り致死毒を宿す飛竜は森へと駆け抜け、狂竜たちの蹂躪を開始。幸いにも、その毒の被害は最低限以下に収まったが、迂闊に降りることが出来ないことに違いはない。

苦しむ間もなく即死する程に凶悪な毒素故、ナザリックの者の一部が降りようとするのを、法国の精鋭たちが必死に静止している。皆が基本として毒無効のマジックアイテムを有しているが、相手はユグドラシルにおける毒無効を容易く貫き、アンデッド以外を問答無用で死に至らしめる邪毒。幸い、全貌を説明する前にデミウルゴスとパンドラが制止してくれたが、この認識の齟齬を改めねば、と隊長たちは心一つにしたという。

「そもそも、あの爆鱗竜とやらの状態は、モモンガ様とアルベドを瀕死に追いやった竜と同じものでした。それを一方的に叩き伏せるどころか、あの数秒で完全に絶命させた毒が、我々の常識の範疇に在ると考える方が早計でしょう」

「いや、本当に。あんな一瞬で色が戻るとか、ワールドアイテムか何かなんじゃないですか？」

竜たちの世界においてすら、迪異種となった棘竜、或いはまだ知られぬ竜が体内で生成する特殊な抗体以外に治癒手段が存在しないもの。そう、治癒すらままならない程に凶悪な毒なのだ。それこそ、自身の体内で抗体を生成しなければ、生命維持もままならない程に。

それだけの毒を、主要生成器官にして最大の武器である極絶角から、直に撃ち込まれた以上は、並の生物ならば普通に即死。どころか、歴戦王や迪異種の古龍であろうと、致命傷どころでは済まないほどの痛手となる。禁忌の域に在る存在以外では、まず受けたくない一撃だ。

「詳細は省きますが、本当に危険な存在です……怒らせた場合、です」

あんな凶悪無比、危険の塊のようなモンスターだが、隊長が言う通り普段は温厚なのだ。

何せ、平時はスレインが有するいかなる武器でも傷を穿てぬほど強

固な外殻と、全身を覆う紅毒棘、そこから滲む劇毒と、わざわざ攻撃するまでもない程に、理不尽染みた存在なのだ。言い換えれば、それが自らの意思で立ち上がる今回の事態と、そんな温厚な竜を激昂させたかつてのエルフ王の愚かしさが、どれだけ頭抜けているのかがわかる。

「モモンガ様、大丈夫でしょうか……」

「今は、前の事に専念しますよ。ここを守り抜けねば、モモンガ様の頑張りも水の泡です」

響く悲鳴と咆哮をBGMに、臨戦態勢を崩さない戦士たち。

その遙か彼方では、空が漆黒に染まっていた。

44—龍を喰らい、闇は光に転ず

暗天の下。虫の息の風神へ向け、金色の雷神が飛翔する。

「ギユツ、ルアアアアアアアアツ!!!」

「ツ！」

「っ、ぐおおお!!」

無差別に放たれる稲妻が、滅尽龍のみならずモモンガたちを、飛行船をも襲う。

「退避——ツ！」

「さっ、せるかあああああああツ!!!」

黒焰の《始原ワールド・マジックの魔法》——龍殺しと炎を凝縮した漆黒が二隻の船周辺を飲み込み、必殺の雷鳴を相殺する。が、それだけの広範囲に、古龍渾身の攻撃を相殺できるだけの力を行使したドラウディロンは膝を着き、荒い息を零し目、鼻、口端から溢れ出す血を拭う。

「ぜえ、ぜえ………っ」

黒龍と共鳴し、その力を引き出せようと、その身は龍に遠く及ばず。出力を高めれば高める程、その肉体への負荷は爆発的に増大する。そもそも話、真なる竜王たちをも凌ぐ災厄の化身たる古龍の中でも、始まりに最も近い格別の存在の力。始原の魔法の規格へと落とし込み、行使できていること自体が、本来奇跡に等しいのだ。

如何に黒龍とて、その力の源泉は担保できても、肉体への負荷まではどうしようもない。加えて相手は、後先を考えず全力で電撃を放っており、完全に防ぐには相当な出力を要求されていた。単純に攻撃するより、その力による防御を行う方が格段に難しいこともあり、当然の負荷だろう。

「グルルウ………ギユオアアアアアアアアアツ!!!」

その威力は滅尽龍を退かせる程であり、巻き込まれた風神龍にも多大なダメージを与える。

が、どちらにせよ、風神龍はもう長くない。風袋による浮遊もできず、龍殺しの力を振うことも叶わず、電磁力操作を取りやめ急降下する雷神龍を見上げるのみ。その体を無理に動かそうとはせず、何かを

「キミは休んでいるんだ!」

「ぐ、あああああああッ!!!!!!」

「ク、ソが……………ッ」

ドラウディロンに変わり、鎧の大部分が砕け散り、原形を留めぬツアーが始原の魔法による船の防護を行う中、空に居る他の者たちも各々の手段で防護。だが、その出力は先の全力以上に高まっており、番外席次は武技により受け流し切れなかったエネルギーに焼かれ、シャルティアは『不浄衝撃盾』フォース・サンクチュアリ《力の聖域》を貫く雷撃による大打撃を受け、一時飛行能力を喪失。

「シャル、ティア……………!」

そして、それはモモンガも同様。極めて高い耐性を以てしても、それだけのダメージを受ける程の力を解き放った金色の雷神は、より禍々しき姿へと変貌を遂げていた。金の鱗には群青が混じり、触手上的の器官は禍々しくも美しい紫へと発光。何より、その身に溢れる絶大なエネルギーが、光としてその巨体を包んでいるのだ。

「モモンガ様!」

「アルベド様、そちらをお願いします!」

アルベド、そしてシズが船を飛び出し、片やモモンガを、片やシャルティアを抱き止める。

「っ、待て!シズに、飛行スキルは……………っ!」

そして、落下ダメージを恐れるモモンガの視界の先で。

「っと!」

シャルティアを抱き止め、平然と着地するシズの姿。

「……………はっ」

「ギシャアアアアアアアアアアアッ!!!」

啞然とする中で、ボロボロの黒蝕竜が大地を駆る。翼腕をも駆使した六足による疾駆により瞬く間に距離を詰める、黒鱗が?げ白の割合が増えた竜へと襲い掛かるのは、風神とでも呼ぶべき絶大な能力を受け継いだ、雷操る古龍。荒れ狂う狂嵐はその歩みを阻み、後から襲来する雷電がその身を焼き、黒き竜を大きく吹き飛ばす。

「ギ、シャアアアアアアアッ!」

吹き飛ぶ黒蝕竜に目もくれず、三体の超越者は眼前の存在へと攻撃を開始。

氷槍、銀刃がその身を切り裂く中、その類まれな臂力を以て頂点へと至った龍が躍りかかるも、雷神龍はそちらの攻撃を避けることに注力。しかし、大地を薄氷の如く容易に粉碎する剛腕は、その衝撃で強引に折った金剛棘を空へとばら撒き、龍の巨体に無数の穴を穿つ。

そこへと疾走し、怯んだ一瞬の間に喰らい付く二つの影。

「ッ、オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!」

紫電が奔り、焼け焦げる大地を怨虎竜が声も無く転がる一方。黒蝕竜はその身に纏う狂竜結晶が焼け焦げ、熔ける中で翼腕の爪を腹部に突き立て、腹部の雷袋を——発電器官にして、彼女らの卵を収めるソレを、引き裂いた。

「ギユアアアアアアアアアアアアアアアアッ」

「ギユオオッ!」

悲鳴を上げ暴れ狂う雷神龍の腹から、卵が零れ落ちる。全てではないそれらは、地に落ち、或いは黒蝕竜の翼腕に攫われる。黒蝕竜がそれらを貪り食う一方、地上に落ちた卵へと突撃した怨虎竜は、滅尽龍に目障りとはかりに襲い掛かれ、一撃でその重殻ごと脊髄、心肺を破壊され即死。

「……………グルルルル……………ッ」

対なる龍と、黒蝕竜と渡り合い続けた怪物の呆気ない最期に見向きもしない滅尽龍は、眼前のご馳走より先に、新たに絶大な力を放った存在へと目を向ける。ボロボロの黒鱗の隙間から覗く白が生命の輝きを強める中、狂竜結晶による棘を纏う竜は、静かに身震いする。

「あれ、は……………?」

「……………バカ、な……………そんな馬鹿な!?」

半狂乱で叫ぶモモンガの目に映るのは、魔力、生命力の高まり。黒い鱗が、甲殻が崩壊するようにボロボロと剥がれ落ち、その下の純白が露わになる。光を侵蝕するかの如き漆黒から転じたその神々しい純白は、淡い虹の輝きを纏う翼から漏れ出す漆黒を纏い、その身に新たな色彩を加えていく。

その力の変化が信じられないのは、二人の竜王。全種族中、最高峰の知覚を有する者たちだ。

「そんな、在り得ない……………あの竜は、さつきまで！」

「竜が、龍に……………有り得ないけど、この力の高まりは、否定しようがない」

前方に突き出す角は、澄んだ紫の結晶を纏う龍晶角と化し。質感の変化した紫のナニカを放つ純白の翼膜は、光の加減により美しい紫の輝きを纏う。金色にも見える白の龍鱗は、立ち並ぶ紫水晶が如き鋭棘が立ち並び、黒き姿から一転した神々しさを纏う。

「……………目、が」

そして、最大の変化は『目』。黒き鱗の下で密かに成熟した赤い瞳が、初めて世界を映した。

自身の帰郷を阻んだ怨敵を、自身へと敵意を向ける存在を、初めて視認した。

「四足が地を蹴り、白き龍が空を舞う。天を廻り、肉体の調子を確かめる。」

それが終われば、あとは簡単だ。何せ、今の龍にとって、怨敵たる龍は、取るに足らない。

「—————キュオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

咆哮と共に広がるのは、変質した狂竜ウイルス。空を染める雲は漆黒から透明感の強い紫に変化し、陽光は禍々しくも神々しく、龍の転生を照らす。高まりに高まった、『百竜ノ淵源』とでも呼ぶべき雷神龍の力をも容易く覆すその力の持ち主は、紫の空から無数の狂竜結晶塊を降り注がせた。

「うわあ……………っ」

その大きさは、先程とは比べ物にならず。

しかし、モモンガらは脅威と見做していないのか、余波に気を付ける必要こそあれ、まだ安全な部類であった。無論、巻き込まれれば一撃で致命傷に至ること確実なだけの威力はあるのだが、その悉くが龍たちを重点的に狙ったものとなり、その場を離れていれば、微弱な余

の強度を持つ為利用されている素材が、地面すら引き剥がす程の力に囚われているのだ。が、そこで狼狽えずに次の手を打てるのが、この世界で生き延びた者たち。

「ならいつそぶん投げろー！あとは私がきつついの一発、かましてやるから！」

と、ドラウデイロンの指示が伝播し、砲座付近の砲弾がどんどん放り出される。それらは雷神龍自身の力の強さが仇となり、どんどん加速して飛翔。そこへと手をかざし、竜王国女王はその金色の瞳を大きく開く。邪龍の忌み名を持つ龍と、魔法的に最も強く繋がる個人だが、その鋭い感覚が、異なる存在の到来を感知する。

「なん……………っ!?総員、対シヨック姿勢！急げ！」

攻撃より部下たちの安全を選び、すぐさま指示を飛ばす。

少し遅れて、空中に生じた赤と青の煌きが、雷神龍周辺の砲弾を一斉に起爆させた。

「ッ、オアアアアアアアアアアアアアアアアアッ」

「ギユウウウウ——ッ！」

!?!?!?!?!

「キシユオツ!?!」

雷神龍と、それに接近していた龍たちが怯む中、黒煙すらも焼き払う灼熱の輝きが空に満ちる。

「……………美シイ」

船上の蟲ヴァーミンロード王が感嘆の息を零す、赤と青の交わり。

「ひ——っ!?!」

総合力最強の吸血鬼のトラウマを刺激する輝きは、次の瞬間に紅炎と蒼炎の竜巻となり、天高くまで伸びる。陽光を淡い紫へと変えていた狂竜ウィルスの紫雲が瞬く間に焼き払われ、微細な粒子であるそれが粉塵爆発を幾重にも引き起こす中、赤と青の火球が大地へと急降下。墜落した雷神龍を、四肢で地を踏み締める龍たちを見下ろすように、炎国の王妃は翼を広げた。

「ルアオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ」

「覇種たる炎王、歴戦王たる炎妃。」

!!!!!!!

苛烈にして強大なる、相性という意味でこの場で滅尽龍以外に優位

を取れる、熔山帯の支配者が降り立つ。目的の根幹を喪失した侵略者を、怨嗟のままに災厄の種をばら撒く部外者を、食欲のままに来襲した暴食者を睥睨し、二体はその力を開放。

「ッ、不味——」

大地を薙ぎ払う、王妃の絆を示す二色の炎。その余波が、小さき者たちへと牙を剥く——

45―終わりへと向かう

凄烈な爆風に揉まれ、その体が塵のように吹き飛ばされる。

「ぐ、げほっ、ぐほっ！出鱈目が過ぎるだろ！」

モモンガが素の口調で声を荒げる中、番の炎龍は雄々しく咆哮を上げる。

「ああ、クソ……………まだ目がチカチカする……………！」

戦闘に支障が出るレベルではないにせよ、赤と青の強烈な発光により、大分視覚をやられている。

「つつ……………？」

鈍い痛みに呻く彼は、ふと気づく。

灼熱が荒れ狂った後にしては、妙に涼しいな、と。

「間に合ったか！遅ればせながら加勢するぞ、ヴァイシオン！」

氷に近い質感の、和を感じさせる鋭利な蒼白鎧。モモンガたちの世界で言うなまはげ、或いは鬼を思わせる氷の鎧を、それを操る者の名を、白金の竜王は知っている。

「オラサーダルク!?何故」

「最強の竜王たる貴様が出たのだ。真なる竜王として、加勢せずしてなんとする！」

威勢よく叫ぶ竜王は、真の敵である雷神龍、そして天廻龍へと、その頭を向ける。若輩の身で、過去の真なる竜王に並ぶ程に鍛えたドラゴンは、その鎧越しに強烈無比なる龍の力を感じ取り、遙か彼方の地で冷や汗を浮かべながらも笑みを零す。竜王の名を得るに至った、強大なドラゴンに相応しい、余裕に満ちた笑みを。

「凄まじい圧であるな……………だが、我らが大敵たる龍には及ばぬわー！」

『エタニティ・ドラゴンロード永凍の竜王』の名を得た若き真なる竜王は、評議国南方にて若手最強と目されるドラゴンは臆することなく、鋭利な氷鎧から吼え叫ぶ。気配を察知しながら、しかし認めたくなかったドラウディロンは恐る恐る顔を覗かせ、その蒼白の鎧を目撃するや否や、全力で顔を顰めた。

「げえっ!?あんのバーサーカー来やがった！」

「アノ者……フム」

冷氣属性の使い手としてか、或いは別のシンパシーを感じてか、コキユートスが零す中。

雷神龍は怒り狂い、暴風と雷鳴を激化させる。それに対し、竜王が操る鎧は一切ガードすることなく、災厄そのものへと身を投じる。それは自滅行為そのものであり、素性を知らぬ者からすれば、何を考えているのかも理解不能。多くの者が言葉を失う中、しかし若輩の身で真なる竜王となり、強大な異名を得たドラゴンの始原の魔法が、その力を示した。

「……………はいいつ?」

氷が形作る武者鎧が、砕けた傍から再生される。原形を損なう程に壊れる前にその損傷を完全に修復するのは、鎧を形作る強烈な冷氣によるもの。『永凍』^{エタニテイ}の名に相応しい力を秘めていたそれを改良し、組み上げた始原の魔法の力は、自身の肉体以上に強固な分身を作り上げている。

「ぐ、ぬおおおおおお!!」

が、風そのものに逆らうには力が足りず、大きく吹き飛ばされる。

「いや考えなしかよ!?」

視覚化されていないだけで、冷風による加速もしているのだが、如何せん出力が足りなかった。

「ああ、うん……………やっぱりオラサーダルクだ」

間違いなくポテンシャルはあるのだが、絶妙に相手が悪い。若手最強であることに違いはなく、しかし霜^{フロスト・ドラゴン}の竜の得意とする属性と、それを極限まで特化させた始原の魔法は強力ながら、寒冷地体と化した評議国周辺では、致命的なまでに相性が悪い。それでいて尚、多くの防衛戦に加わり、始原の魔法抜き^フの地力で多くのモンスターを退け、打倒しているからこそ、若手最強と謳われるのだが。

「うむ、無理だな!我一人ではあの風を貫けん!任せたぞ!」

「潔いね、相変わらず」

「可、不可を割り切れねば、無為に死ぬだけよ」

豪快に笑い飛ばした武者鎧は、改めて腕を組む。

「さて、如何にして奴を打倒する?」

「……………奴は、随分と弱っている。俺たちもかなりやられたがな」

モモンガが立ち上がる中、高度を上げるだけの余力も無い雷神が唸る。

あれだけの灼炎に晒されながら、多量の氷、或いは流体金属で身を包み何とか凌いだ者と、狂竜結晶で凌ぎ切れずその身に深い傷を負った者。純然たる素のフィジカルのみで、その尋常ならざる再生能力で完治する程度にとどめた怪物とに比べれば、格の違いは一目瞭然だ。「問題は、古龍の攻撃に巻き込まれないようにする必要がある、つてことか」

「ならば、我が援護に回ろう。貴様らは存分に戦え」

「それなら安心だ。モモンガたちも、気にせずいこう。最優先目標は、あの巨龍だ!」

武器を浮かべ、ツアーが鋭く叫ぶ。純白の龍も危険ではあるが、先の炎王の降臨に伴い、その力の源と思しき物はほぼ焼き払われ、更には弱点でもある炎攻撃を受けたことで、その力は先程までより格段に弱まっている。それこそ、翼に甚大なダメージが入ったのか、全くと言っていい程に漆黒のナニカが放出されていない。

ならば、戦場そのものを牛耳ることが可能、且つ比較的弱い相手から倒すのが一番だ。

「……………安心していいの?」

「さっきの爆炎を大幅に減衰させたのが、彼の魔法だ」

番外席次の問いに対する答えは簡潔で、それだけで十分だった。

「オツケー。なら、まずはアレを仕留めましょう」

「気軽に言ってくれる、けど……………まあ、他の連中と比較すれば、各段に弱いからな」

情報系魔法のお陰で、モモンガは特に多くの情報を得ていた。

そのお陰か、随分と肩の荷が下りている。何せ、他の古龍と比べ、一番勝算があるのだから。

「アルベド、及びコキュートス、御身の前へ——どうか、共に戦うことをお許してください」

「地上二近イ今ナラバ、我ガ刃モ届キマシヨウ」

新たな戦力の参戦に、威嚇の咆哮を上げんとした雷神龍へと、砲弾が降り注ぐ。

「アアアアアアアアアアアアッ?!?!?!」

「ハッ、こつちを気にする余裕も無しか!そら、再装填だ!奴が隙を晒し次第、叩き込むぞ!」

「「「おおおおおおお!!!」」」

主力となる者たちの士気を、ドラウデイロンの威勢が伝達し、船の者たちに広がる。

「…………ツ!」

そんな中、古龍——超越者中の超越者たちが、一斉に身構える。

滅尽龍は狂猛な笑みを浮かべ飛翔し、他の龍たちはそれに続くように、新たな脅威を足止めするべく飛翔。純白の龍はそれから危険を察知し、その翼を広げ、南西へと逃げるように飛び立つ。唯一、接近する存在の、臃げな気配から恐怖を思い出したツアーであるが、飛翔していく面々の強さをよく知るお陰で、理性により本能を一時ねじ伏せることが出来た。

「どうやら、龍たちは奴らの退路を断つようだ。なら、彼らの仕事を減らさないかね」

「……………そうだな」

気になる点はあれ、今それを問う必要もない。だから、気にしない。

「では、先鋒はわたしが!」

「貴女一人にいい顔をさせるとでも?」

「……………まあ、いいさ。今は守りを考えるより、一気に攻める方が確実だ」

駆け出す二人に呆れつつ、モモンガは使える支援魔法を二人にかける。随分とMPを消費した為、今後のMP管理に気を付けよう——そう思考を巡らせたモモンガの体を、魔力が満たしていく。突然のことに驚き振り返れば、蒼白の武者鎧が何でもないように声を響かせる。

「我らの始原の魔法は、魔力を用いぬ。我に不要な力だ、貴様が存分に

「使え」

あまりにも堂々と口にした彼は、その力を解き放とうと溜めに入る龍へと、静かに手をかざす。

「温いな。司銀龍であれば、その数秒で千の精鋭を滅ぼすぞ！」

大地より突き出す、堅氷の剛槍。攻撃動作に入った瞬間を狙い、死角から叩き込まれたソレが力を暴発させ、龍自身に自傷ダメージを負わせる中、防御、回避の必要を無くした戦士たちが全速力で突撃し、その身へと攻撃を叩き込む。ユグドラシル最高クラスの武器ともあれば、単純な個体としての質で剛種に及ばぬ龍の肉体は、相応の傷を負う。

激昂し、指向性も制御も放棄した力を解き放つも、二人を即座に分厚い氷壁が守り、撤退を可能とするだけの時間を稼ぐ。対司銀龍では呆気なく貫かれ、術者本体が瀕死の重傷を負わされる結果を幾度と重ねてきた防御だが、相手が悪すぎるだけで、積み重ねた修練により得た物理的強度はかなりのもの。

「……………つつよ」

「フン。強くなくば生きられぬのなら、果てを求めるは当然のことよ」「キミ、何度死にかけたんだっけ？」

「生きていればよい。死なねば安いものよ」

その姿と言葉遣いに反し、その支援は的確の一言。それほどまでに、彼の技量は見事だった。

攻撃を遮る盾としても、行動の補助をする足場としても、相手のペースを乱す攻撃としても。

「常々思うのだけど、キミは支援に専念してみてはどうかかな？」

「我が目指すのは、一角の戦士なのだが」

「ナラバ、共ニ征コウデハナイカ。竜王ノ強者ヨ」

戦意溢れるコキユートスの申し出に、若き竜王は闘志を滲ませる。

「実に嬉しい誘いだな、異邦の戦士よ」

「それなら、さっさと仕留めるわよ」

「お供します」

番外席次が戦鎌を構え疾駆するのにつき、シズもまた駆ける。それ

を合図に、地上組が一斉に、勝利のために動き出す。モモンガは魔法職として後方に位置する中、他の者たちが上手く散開し、空を舞う龍を墜とすべく、確実に仕留めるべく、その力を、技術を駆使するのだ。(時間停止は使えない——それで?)

「ふ——ッ！」

「ぬうんッ！」

「ハアアアアッ!!!」

一息の合間に放つ、無数の斬撃で。その手中に作り出した、絶対零度の大剣で。心より慕う創造主より賜った、究極の一振りりで、龍の肉体を切り裂く。自傷によるダメージ箇所を狙った攻撃に絶叫する龍へと、重弩を抱えるシズもまた疾駆する。

「アルベド様！」

「アルベド！」

短く名を呼んだだけだが、不思議とその意図が読めてしまう。躊躇する彼女へ、シャルティアの叱責が飛べば、その躊躇を飲み込み、己の得物を力いっぱい振り回す。最低限の配慮として、刃を向けぬよう振り抜いたソレを足場に、シズは巨大な神龍へと一気に急接近——

「ッ！」

その強靱な肉体にナイフを突き立て、強引に停止。肩が外れる、では済まないであろう、強烈な負荷がかかるも、不思議とその体は平然と耐えて見せ、すかさず重弩をその背に突き付け、至近距離から弾丸を叩き込む。強度が大きく上昇したその龍鱗は、他ならぬ自身の力で傷ついて尚、その弾丸の威力を大きく減衰させるが、背部に注意を向けるだけでいいのだ。

「待ってた………ッ！」

力尽くで振り払われた彼女は宙を舞い、確実に仕留めんと大口を開けた龍へと笑みを向け

「その口の中まで、強固な訳ないよね」

「そら、持ってけッ！」

「マキシマイズ、マジック
魔法最強化ッ！」

シャルティアの、モモンガの放つ強力な魔法が口内で炸裂し、龍が絶叫を上げる。

「よしっ！……………」

(今のやり方を続けるなら……………もしかして)

モモンガに渡されたマジックアイテムと、その中に収めた武器を思い出し、暫し思考を回す。

「ッ、皆下がれ！」

後方から俯瞰していたモモンガが叫ぶ中、雷光を束ねた光線を、光輪を無数に解き放つ。

「チイツ！この数では氷壁も役に立たん！可能な限り逃げよ！それと、油断はするなよ！」

視界を阻む氷壁は可能な限り使わず、退避を促す。司銀龍との対峙で、幾度となく瀕死の重傷を負い磨き上げられた竜王の直感の通り、生半な魔法防御は数秒で貫かれ、雷神龍の名に違わぬソレを回避した彼らだが、相手は一息吐く間も与えない。

「オオオオオオオオオオオオオオッ！！！」

大地を割り屹立する、幾多もの岩柱と岩塊。電磁力で引き上げたソレを、風神龍の力で射出し、雷光を束ねた光線、光輪の数々で、文字通り隙間なく追撃する。逃げ場を失った彼らは、しかし魔法防御で容易く防げる岩の飛来する場所へと適切に逃げ、防御していく。

それすらも、相手にとっては下準備に過ぎないのだが。

「……………なんだ、あれは」

少しばかり高く舞い上がった龍が、その口から小さな、小さな蒼光を零す。

聖域の守護者の、最大の攻撃にも似たそれを知る者は無くとも、誰もが危険を察知した。

「クソッ！」

「貴様らは動くな！ええい、この鎧もここまでか！」

鎧に宿す力の全てを使い、オラサーダルクが龍を囲うように極低温の結界を形成する。

蒼光の雫が地に落ちた瞬間、それは炸裂し、強烈な紫電の光を奔ら

せる。

「ぬ、おおおおおおおおおッ!!!!!!」

鎧に宿した全ての力を使い、竜王が吼える。暴れ狂う紫電が大地を融かし、始原の魔法による防壁を内側から貫かんと激しく閃く中、彼はありつたけの力で冷気を増幅し、冷風で紫電を誘導することで、力と技のゴリ押しでそれらを防ぐ。完全な相殺など叶う筈も無い程に出力は隔絶していたが、極大の電流を強引に上方へと逸らしたことで、地上の者たちに被害は及ばない。

「す、凄いな……………助かったぞ、オラサーダルク殿！」

感謝の言葉に、返事は無い。そこにあるのは、無数の氷の欠片だった。

「その言葉、私から伝えておこう……………その氷は、もう、ただの抜け殻だからね」

竜王の意識は、そこには無い。維持する力も、意識を繋ぎ止める術も失った氷片は、そこに居た痕跡として、大地に染み込んでいく。炎龍の力を減衰させた上で、先の攻撃を大きく減衰させたのだから、その消耗度合いはツアーの比ではない。寧ろ、あれだけの大技を立て続けにここまで減衰させた分、鎧に宿した力の総量はツアーを超えている、とも言えるだろう。

「……………本当に、逞しい後進が育ってくれたものだよ」

渾身の力を振り絞り、神龍は随分と疲弊している様子。対し、受け得た大打撃を回避した彼らには、随分と余裕がある。ある者は眼前のチャンスを逃すまいと、またある者は一人の戦士の全力で生まれたチャンスを逃すまいと、各々武器を持つ手に力を籠める。

「モモンガ様」

「判っているや」

言葉は、それだけで十分。

吼える龍へと向け、全ての影が疾駆した。

46―淵源に挑む『英雄』

風が、雷が勢力を落とす中、疲弊した雷神龍へと攻撃が殺到する。荒れ狂う雷光と共に、束ねられた稲妻が、赤光纏う暴風が大地を薙ぐが、その力も落ちていく。

「――ふんッ！」

強力なノックバック効果を付与した武器の数々が突き刺さり、更に始原の魔法による爆撃。物理的な衝撃まではシャットアウトできない雷神龍が墜落すれば、そこへと『武器戦闘最強』の、攻撃特化ビルドであるコキュートスが迫る。その四本腕全てに、用意できる最強の武器群を携えた彼が放つスキル攻撃の威力は、ナザリックのNPCでもトップクラス。

そこに加わるのは、アルベドと番外席次の攻撃。筋力に物を言わせただけの乱打と、武器の質も手数も劣る攻撃であるが、双方ともに確かな能力を有しており、傷ついた嵐鱗を砕き、裂き、その下の肉へと確かな傷を穿っていく。

「ギューアアアアアアアアアアアアアアアアッ?!?!」

「ぜっ、あああああああああッ!!!!?!?!」

そして、『総合力最強』シャルティアのスキルが、宙に浮かぶツアアの操る武器が、モモンガの魔法が、狙いやすい腹部――裂かれ、産み育むべき卵を喪失した発電器官へと集中。そのまま最大の弱点でもある部位への攻撃に絶叫し、しかし雷神と呼ぶべき力で、亡き番よりに受け取った力で地下の岩石を浮遊、射出し、迎撃を図る。

「ヌ、グウッ?!」

「小賢しい真似を……………!」

空中に打ち上げられた二人が零す中、周囲から人が消えたことで、ドラウデイロンが号令。

「撃え――ッ!」

飛来する砲弾が激突し、灼熱と破片でその身を傷付ける。傷から響く激痛に呻くも、既に冷静さを取り戻した龍は電磁力、風力を使い浮かび上がる。風の力を使うことで地上への牽制も兼ねるがその風で

舞い上がる岩、木々の残骸を足場として、駆ける者が。

「ふっ！」

シズがその体に降り立つと共に、腹部の雷袋へと金獅子の角を有する重弩を突き付け

「これなら、絶対外れない」

ありつたけを込めた弾丸——徹甲榴弾、拡散弾を、強烈な反動を受けながらも撃ち込む。至近距離であるお陰で多少のズレは意味を成さず、裂かれた外膜から内部へと侵入した弾丸は、その破壊力を余すことなく重要な内臓器官へと叩き込み、雷神龍はその激痛と、能力の一端となる器官への甚大なダメージにより大きく体勢を崩す。

が、風神龍の力で強引にその巨体を支え、それどころかバレルロールのような挙動でシズを振り払い、そのまま強靱な尻尾を叩きつける。瞬間、込められた電気エネルギーが爆裂を引き起こし、華奢な体が盛大な土煙と共に地へと叩きつけられる。

「シズッ!？」

「生きて、ます、から………ッ！」

間一髪でガードが間に合ったシズが声も絶え絶えに叫べば、皆は優先順位を間違えることなく、眼前の大敵へと意識を向ける。手負いの獣程恐ろしいというが、相手は生命力溢れる古龍種モンスター。モモングの目に映る体力は、最初と比べれば間違いなく瀕死に近いとすら言えるほどに追い込んでいるが、それでも恐ろしい程に多い。

「……………本当に、恐ろしいな」

幸いにも、先の数秒で一割強から二割ギリギリは削れたため、まだ希望はある。が、これをこの場に集まった者たちだけでやれたか、と訊かれれば、まず間違いなくノーだ。皆が皆攻撃に特化している訳でないこともそうだが、相手の物理、魔法耐性に、攻撃属性と手段、弱点はどこかなど、兎にも角にも情報が足りな過ぎる。

モモンガ自身、緻密な対策と卑怯とすら言われる程念入りなトラップ、心理戦も含め勝利を掴んで来たタイプのプレイヤーであり、それが出来ない戦いで勝率は低い。また、手札が豊富な分一発一発の威力は一般的なビルドに劣る上、相手は高い知能を持つも、対人やAI

相手のセオリーが通じない野生の生物であり、そういう意味でも相性は悪いのだ。

が、不運と幸運、どちらの比率が高いかと言われれば、やはり幸運の方が多いだろう。

(ここまで追い込めた……なら、後は倒すだけだ)

難しいだろうが、十分可能な範疇。であるならば、可能な限り冷静に、対応していけばいい。

「……………なら」

一通りの強化魔法を仲間に向け、モモンガ自身は一旦降り立つ。MP管理のためだ。

そうして一時戦線を離れた彼は、先程シズが墜落した場所まで駆ける。

「シズ！」

「だい、じょうぶ……じゃ、ありませんね」

あちこちの電撃の傷跡が残り、ところどころ焼け焦げている彼女は、まず移動することを最優先としたのか、随分と土で汚れている。腕は一目で使えないだろうと判る程に無残な状態であり、立ち上がることなど到底不可能。そんな体で、必死に這って移動していたのだから当然ではあるのだが、その様子にモモンガは心を痛め、最上位のポーションを一本その身に向け、他数本をポーチに突っ込む。

「これを使え」

「ありがとうございます……っ!?」

彼女が感謝を言い終える前に、彼はその華奢な体を抱き上げ、《^ゲ転移門》を発動。

「シズを頼む！」

「任せろ。そちらこそ、頼んだぞ！」

「ああ！」

やり取り短く、飛行船に彼女を預け、モモンガは再び大地へと降り立つ。

「さて……………《^{パーフェクト・ウォリアー}完璧なる戦士》」

戦士化の魔法を発動し、予め持ち込んでいた武器をショートカット

装備。MPは回復こそしないものの、モモンガの自然回復速度であれば減少もしない。何より、この状態であれば、攻撃支援も十分にできる。そう考え、手頃な武器は無いかと、武器を詰め込んで来たインフィニティ・ハヴァサツ無限の背負い袋を漁り……………

「——ようっ」

パンドラが急ピッチでモンスター素材を消費し作製した、武器の数々。

それぞれ異なる重みを秘めたそれを握り締め、静かに頷く。

「さあ、最終ラウンドだ！」

地を蹴り、『禍ツ槌ノ幽鬼グラージ』——怨虎竜の素材を用いた戦槌を、その頭へ叩き込む。怨虎竜の操る鬼火と同様の性質のエネルギーが、強烈な爆発で追撃を与え、巨龍の頭を軽くかち上げる。頭蓋を砕くことは疎か、罅を入れることすら叶わないながら、その脳を揺らし行動に数瞬の遅延を生むことに成功。そしてその『鬱陶しい』で済ませるには少々強力な攻撃が、そのまま相手の注意を引くことに繋がる。

「モモンガ様!？」

「心配なら、さっさと仕留めるわよ！」

「そういうこと！…こいつが生きてるんじや、守るだけ徒労でありんすえ！」

多少のダメージならば、スポイトランスの効果で回復……………シャルティア自身のビルドの完成度も然ることながら、数々の危機で磨かれた直感、積み重ねた経験が加わることで、豊富な手札が存分に活用されている。有効打となる高位階属性魔法を習得していないことを抜きにしても、その手数と職業スキルによる火力ブーストとは、確実に効果を発揮している。

そして、アルベドの心配を二人が両断したように、ここで一時守りに回っても、手数が減り戦局が不利になるだけである。寧ろ、彼女の豊富なヘイト集中スキル、防御スキルを活用して注意を引き、得意のカウンターを叩き込めばいいのだ。それに気付いてはいるのだが、それをすれば強力なダメージディーラーであるコキュートスが攻撃す

る機会を奪ってしまおう、となまじ頭がいいせいで、ドツボに嵌っているのだ。

「……………よし」

そして、眼下の戦場を睨んでいたシズが、傷が癒えたことを確認し、声を零す。

彼女を即死級の攻撃から守った金獅子砲は、表面が大分焦げてはいるが、健在だ。

「行くのか」

「それは無理。けど、休んでもいられないから」

戦局は依然不利寄り。無理は禁物だが、かといって、何もせずにいられる程の余裕はない。

「……………砲弾は？」

「装填済みだ。報告も上がってる」

「それなら、あそこに撃ち込んで。タイミングは、私が合図したら」

彼女の指先が示すのは、アルベドがいる周辺。より注意を散らす為、それぞれの立ち位置に最大限の注意を払っている為、巻き込まれる心配はない、と言いたいところだが、アルベドが如何に頑丈であろうと、巻き込み消耗させるのは下策もいいところ。

「だが、それでは彼女に」

「大丈夫。アルベド様なら、十全以上の結果を出せるから」

そう口にした彼女は、ブレの少ないカホウに持ち替え、構えると共に意識を集中させる。

(大丈夫、アルベド様なら気付いてくれる——！)

スナイパー職のスキルで弾道を導き出し、間隔を開けて三度、立て続けに引き金を引く。

「ッー」

飛来するソレに気付いたアルベドは、反射的にスキルを発動。

魔力を帯びない飛び道具による攻撃を弾き、龍の体軀へと叩き込めば、そこから毒々しい紫の煙が立ち昇る。三発連続で、しかし間隔をあけて飛来したそれが、何の意味も無いとは思えず、アルベドが暫し思索する中、シズは反動が強烈な弾丸へと切り替え、再度狙いを定め、

引き金を引く。

「爆発したら撃ってッ！」

全身を使い跳ね上がった重弩を抑え込むシズの叫びに続けて、アルベドが拡散弾を弾き、龍の体から立て続けに爆発が起こる。それを合図に、二隻の飛行船に積まれた全砲が火を噴き、ぎっしりと火薬を詰め込んだ砲弾の数々が高速で飛翔する。着弾と共に爆発し、衝撃と灼熱で龍の注意を引く中、本体を外れたそれらが殺到する光景を前に、アルベドはその意図を理解。

『「カウンターアロー」『ミサイルパリー』——ッ！』

彼女のスキルで弾かれ、威力を増した砲弾の数々がより深々とその身に突き刺さり、炸裂。悲鳴を上げる雷神龍の、怒りで赤く染まった目がアルベドへと向けば、確実に彼女を、彼女たち、小さき者たちを滅ぼさんと雷光を束ね、龍雷纏う暴風を引き起こし、大地を砕き数多の岩弾、岩柱を引き上げ、一気に撃ち出す。

「チィッ！」

(今仕掛けるか?.....いや、アルベドが何か)

「うおらアッ！」

飛来する岩弾も岩槍も、風で撃ち出しているだけのもの。

ならば、彼女のスキルで撃ち返すことは容易い。彼女が選んだのは、雷撃と風は自力で耐え切ることに期待し、ダメージソースとなり得る大質量を撃ち返すこと。高い知能を有する古龍とて、それくらいは予想しており、しっかりと撃ち返された岩弾を相殺する攻撃を叩き込んでいる——が

「ぜっ、りゃああああああ!!!」

「——ッ!?!」

僅かなズレ。点で飛来する岩槍を完全に相殺する為の攻撃の僅かなズレが、双方に致命的な結末を齎す。本来多少外殻を抉る程度で済んだ筈の大質量が、龍の腹へと突き刺さり、鱗を砕き、肉を潰し、内蔵に届く程に食い込む。自身が与えた加速と、岩槍自体の質量が生み出す破壊力をそのままに、アルベドの持つスキルの一部が乗ったソレは、砕けながらも龍へと決定的な一撃を撃ち込んで見せた。

「が、ふ……………」

だが、それはアルベドも同様。完全には修復できていなかった鎧は遂に全損し、最後の一撃まで攻撃のため使い続けた防御スキルは、最も致命的な一撃を前に使用回数が尽き、相手への決定打と引き換えに自身の防衛能力を喪失。加速の乗った大質量に腹を潰され、辛うじて上下が繋がっているだけの状態で、地面に縫い付けられる。防御寄りビルド故の高HPが辛うじて死を回避したものの、他の者の救援を求めていられる事態でもない。

「名付ける、なら、撃龍槍、かしら……………？いい、気味、だわ……………」
肉片混じりの血反吐を吐き、あちこち焼け爛れ、裂け、見るも無残な姿となった淫魔が嗤う。

「アルベド……………」

彼女の決死の一撃で、雷神龍の残り体力はごっそり削れた。相当重要な器官にまで届いたのか、その動きは更に精彩を欠き、これまでより明らかに行動に支障を来している。もし、岩ではなく鋼鉄の、或いはそれより強度のある物体であったなら、今程度のダメージでは済まなかっただろうと確信できる程に、その弱り具合は目を見張るものであった。

そして、だからこそか。

「ギユ、アアアアアアアアアアアッ!!!」

瀕死手前の龍は、瀕死の淫魔へ顎を向ける。秘める力は強大で、それでいて今は死の淵にある者だからこそ、龍にとって手早く、手軽なエネルギー補給手段となる。コキュートスでは間に合わず、それ以外では止めることが叶わぬその暴拳を前に、モモンガは久しくアンデッドであることに感謝した。

「……………冷静になれる、つてのは、強みだな」

課金アイテム『チエンジリングドール』を一つ落とし、アルベドの下へと転移。急ぎ彼女にもう一つを握らせて効果を発動すれば、モモンガが先程までいた場所の人形と彼女の居場所とが入れ替わり、雷神龍の眼前には白骨の支配者のみ、という状況に。

最早後に引けぬ龍が選んだのは、眼前の屍を、その腹に収まる宝玉

を喰らうこと。

「が、ぐ……………ッ!」

その体の大部分が大顎に収まり、細い骨が幾つも折れ、太い物にも罅が入る。

「この距離であれば、貴様も逃げられまい……………!」

(消費は……………いや、ケチって仕損じたら元も子もない。最初から全力だ!)

竜殺しの性質故、一部以外の古龍相手に減衰されることなく通じる力。

同じワールドアイテムの一つを使い回復させたレベルを喰らい、紅玉が再び猛威を振るう。

「……………ッ!!!」

「っ、お……………!」

そうはさせまいと、顎に力が籠る。亀裂が入っていた骨が幾らか砕ける中、彼の手中に、脈打つ幻影が生じる。人の手で握り潰すことなど到底できないだろうサイズの筈の物は、お誂え向きに人の手に収まる程に縮小されており、彼の手はそれを確かに握り締めた。

「……………ッ!?!」

龍の心臓を、不気味な感覚が襲う。その不自然で、不快極まる感触は、彼女の動きを止め

「終わりだ」

竜殺しの力の奔流が、荒ぶる雷神の体内を駆け巡る。破滅的なエネルギーが、内側からその肉体を破壊し、瞬く間に命火を掻き消さんと荒れ狂う。最早モモンガを噛み砕く、どころでなくなった雷神龍は、浮遊に必要な力すら失い、大地に墜ち悶え苦しむ。制御を失った風と雷がその身を傷付け、体内という逃げ場のない空間を満たす竜殺しの力、それも古龍たちのそれと同質のエネルギーが、その傷を抉り。

「オオオオオオ……………ッ」

発散されず、許容量をオーバーしたエネルギーが暴発し、遂に雷神龍はその命を終えた。

47―決着のその後

――死闘から、早一か月。

「まったく……………皆、心配し過ぎだ」

「人徳が成せるもの、であろうな」

「羨ましい話だな。私のところでは、爺……………フルーダが少々、なあ」

「あ……………あの魔法キチ、さぞ無念だろうとは思ってたが、そこまでか」

「確かに、モモンガの部下たち、皆高位階の魔法をバンバン使ってたしねえ」

「もう面倒になったから、東方要塞の再整備に放り込んでいる」

遠い目をするジルクニフは、依然手元の書類に目を通している。

というより、この場に居る面々の内、モモンガと番外席次以外、全員書類の山を抱えていた。

「先の防衛戦で、対古龍で出張ってたウチらとはとにかく、他の被害がどでかかったからなあ」

「うむ。我が国も、精鋭兵団と戦士団共に半壊……………ガゼフも、頑張ってくれたのだが」

「陽光も頑張ってくれてたけど、それでも限界はあるものね」

「ウチも船一隻使い潰して、部下も六割が戦死だ。おたくはどうだったけ？」

「ナザミは片腕で済んだが、バジウッド含めかなり出たな。本当に、神官様様だ」

蘇生魔法は原則、ある程度死体が残っていなければ使えない。

あれだけの乱戦の中、全員が全員死体が残っている、ということは、まずありえない。蘇生可能であった者は皆蘇生出来たが、不可能だったものも相応に多いのだ。

「……………帰ってよろしいでしょうか？」

「折角親睦を深めるために集まったんだぞ。そう言うなよ、若いの」

「……………帰りたい……………」

真顔で零すのは、キスタとカルカの二人。どちらも、未だ忙殺気味の指導者だ。

「我々も暇ではないのですが?」

「部下が仕事させてくれないんですよ……一番死にかけてたアルベドはバリバリ働いてるのに」

「ウチは神官長たちの仕事だからね。私は私で静養を言い渡されて、何も出来てないけど」

古龍を討伐したからと言って、全てが丸く収まった訳ではない。

一時肩を並べることが出来た竜たちは、大部分が森林地帯に生息していた、ということから、森の賢王が独断でトブの大森林へと受け入れた。変に分散されるよりはマシ、として王国、帝国もその場で受け入れはしたが、やはり縄張り争いに負けた個体の流出は起きており、そちらへの対応に駆られる者も多く出ているのが現状だ。が、スレインはどこかへ飛び去った純白の龍——『天廻龍』シャガルマガラと命名した古龍の行方を調査するのに人員を割いている為、助力にも期待できないのだ。

「あの白い龍……確か、天廻龍と命名されたんだったか。そっちの方は大丈夫なのか?」

「幸い、エイヴアーシャーに変化はありません。何かあれば、すぐ判りますから」

「まあ、そうだな……あの竜が一番傷を負ってないんだったか」

「そうなのか?こっちに来た龍は、皆転移魔法で帰っていたから、よく判らないんだ」

「うぐ……強力な上、転移魔法で自在に移動する古龍など、悪夢ではないぞ」

ランポツサが自棄気味に、並ぶ摘みを口に放り込む中、ジルクニフはそちらの思考を放棄。

「そちらは一旦置いておくぞ。それより先に、この一か月で表面化した、カツツエ平野の件だ」

その名が挙がり、死活問題となるドラウデイロン、ランポツサの目の色が変わった。

「恐暴竜がいなくなったせいで、アンデッドで溢れ返ったあそこか」
「まさか、奴があそこまで役に立ってたとはなあ……いや、今後はこっちで対策せにやならんのだから、笑ってもいられないけどさ。あそこ、ウチ含む四か国の境のど真ん中だからなあ」

カツツエ平野とは、近隣最大規模のアンデッド多発地帯だ。

かつては、ある程度出現しても恐暴竜が平らげていたのだが、その恐暴竜が古龍から逃げるべくエ・ランテルを強襲し、討伐されたことで、定期的に人の手で間引く必要が生じたのだ。これを放置したとして、生じるアンデッドが強くなるデメリット以上に、それを餌と見做す、或いはそれらが縄張りを侵すなどして、周囲のモンスターを刺激する方が厄介だ。

正直なところ、スケリトル・ドラゴン骨の竜くらいならば銀級チームくらいでも余裕で討伐でき、デス・ナイト死の騎士だろうと、大型飛竜を相手にするより格段に簡単なのだから、それら自体は大事ではないのだ。問題は、それらが大型飛竜を呼び寄せる可能性があること。

恐暴竜の存在は、そういった大型飛竜への圧にもなっていたのだ。

「致命的じゃないか」

「致命的だぞ。まあ、ウチはワンチャン、飛行船が量産できれば」

「その話なんだが、我々からの共同出資の見返りとして、技術提供を頼めないか？」

そして、竜王国が披露した最新技術は、そんな現状に対するある種の打開策ともなり得る。

「おう、いいぞいいぞ。金払いさえよけりゃ、幾らでも手え貸してやるわ！」

「現金ねえ」

「一隻墮とした上、先の戦いでアイデアとか課題とかが山盛り出たんでな。金も資材も、あってもあっても全然足りんのよ。特にあれだな、アルベド殿が『雷神龍』ナルハタタヒメにぶち込んだアレ！拠点防衛用の決戦兵器としちゃ、バリスタ大砲どころじゃない威力になるぞ」

「ああ、あれを再現するとなると、確かにとんでもない額がぶつ飛ぶな

……」

モモンガが金額を想像し身震いする中、ドラウデイロンは真顔でジョツキを傾ける。

辺境諸国の首脳陣を集めた会談……という体のゆるい集まり故、それを咎める者は無い。政治的な話も交えはするが、精神的な疲労を抑える為にも、あまり堅苦しい空気にならないよう、皆基本的に軽く振る舞う。ドラウデイロンの先代から続く、辺境という厳しい環境の中で、胃を痛め続ける指導者たちなりの精神的防衛術である。

「ぶはあくっ！ま、技師の件は承知した。私から話を通しておくよ」「かたじけない」

「となると、北部の技師の選出からだな。ああ、後は予算案の再修正と……」

「しかし、空か。いずれ、東方や南方の調査に赴く、というのも、悪くないかもしれない」

(……まあ、俺は無理なんだけど)

どこか憧憬の籠った声の裏で、モモンガは密かに悲嘆に暮れる。

………実のところ、特大の爆弾が消え失せた時点で、彼を縛る枷は消えているのだが。知る術が無い、というのも、中々に残酷なこと。幸いにも、その悲嘆を感じ取ったドラウデイロンは発言内容に突っ込みまず、無言で肩をポンと叩く。

が、その言葉に喰い付く者たちもまた、確かに存在している。

「……ランポッサ殿」

「うむ、悪くはない話だ。国家からの依頼として、冒険者組合に出すべきだろう」

「しかし、まだ先の戦いの爪痕も深く残っている状態です。せめて、告知に留めるべきでは？」

「それと、冒険者以外からも募集するべきかもね。食事の質の為の料理人、武具の整備をより確実にこなして貰う為の鍛冶師、薬剤類の不足に備えた錬金術師………挙げればキリがないわね」

「どちらにせよ、我らが全面的に支援するべきでしょう」

——この世界の冒険者とは、かつて外部に現状打破の手段を求め

んとした者たちだった。

今も昔も、外部に気安く手を回す余裕が無いことに違いはないが、東方からの大襲撃を受けて、そうも言っていられなくなった。『世界の守り』が無ければ相対すら叶わぬ、文字通りの怪物と化したモンスタ―が現れたことで、外部への見識を広げることの重要性が格段に増したのだ。

未知とは恐ろしいもの。未知の強敵が多数紛れていたからこそ、多くの命が失われたのだ。

「…………その事業、私たちも支援させて貰いたい。それと、一つ提案したいのだが——」

しかし現在、ほぼ全ての国が先の被害からの立て直しに奔走している。悪い言い方ではあるが、非常に好都合でもあった。彼が率先して動くことが出来ない、という（モモンガ主観での）制約こそあれ、先の戦いで多くのNPCが自主性を見せ、シャルティアを始めとする、激戦に身を置いた面々は更に数段予想を超える活躍を見せていた。

そんな彼女たちの、更なる自立を促すのもってこいではないか。そう考えたのだ。

*

「完成です…………ええ、完成ですツ！」

パンドラズ・アクターが叫ぶ。デミウルゴスはセバスと共に喜び、アルベドは大きく頷き、双子のダークエルフはその威容に目を奪われ、シャルティアとコキュートスもまた、その武器の放つ力を感じ取り、この武器ならば、と確信していた。

「これなら、モモンガ様の御力となつてくれる筈よ」

「ウム。素晴らし出来栄エダ、パンドラズ・アクター」

鋭利な尖角を、碧棘をふんだんに用いた禍々しくも神々しい杖に眼球の如く配され、輝くのは、世界級に匹敵し得る絶大な力を秘めた龍玉。散りばめた嵐鱗に宿る力を吸い上げ、再び輝きを取り戻したソレは、全盛には及ばないながら、確かな力を装備者に齎すであろう。

「竜殺しの力が弱いのは少々残念ですが、それ抜きにしても凄まじい性能ですよ」

「多くの魔法を扱うモモンガ様でも、竜殺しの魔法は無いものね」

「でも、これでその欠点を補うことが出来る、つてことでありんすね」
モモンガのワールドアイテムの効果は、確かに強力。だが、代償としてレベルを奪われるというのは、決して無視できない弱点だ。『強欲と無欲』の経験値ストックは既に尽き、そもそもユグドラシルにおける高位職取得の前提クエストが無いなどの事情から、既にエクリップス職の喪失を経ている以上、更なる弱体化は看過できない。

その一心で、彼らは主に可能な限り休んで貰い、密かに武器作成までしていたのだ。

「ところで、スレインからの依頼の品は？」

「あの紫の……『怨虎竜』マガイマガドの亡骸から作った物ですね。といつても、拠点を襲った個体と比べ数段上の個体でしたので、武器の質もかなりのものとなりました。正直、これほどの怪物がいたとは、とぞつとしたものです」

彼が手にしたのは、『和』を強く感じさせる、禍々しい太刀だった。

「こちらを後日、届ける予定です」

「と、いうことは、アルベドの装備に取り掛かることも可能ですか？」
「そちらは現在、調整中ですね。スキルを自由に、とはいかないもので」

鎧を喪失したアルベドは当分の間、実質的に内務以外を禁じられている。

別に悪意がある訳ではなく、それだけ彼女の装備とビルドが噛み合っていた、ということだ。

「むう……」

「仕方ありません。当面は、今回の戦果として正式に譲り受けた分を用いた戦力拡充と、依頼分の武器の作成と納品を重点的に行いましょう。人との繋がりがそのまま生命線に直結する状況であるからには、最大限の貢献を以て、その線を強固にする必要がありますからね」

「ウム。好き者タチノ為ナラバ、助力ヲ惜シム必要モアルマイ」

「ただ、わたしたちの武器は炎や竜殺しを多めにするべきでありんしょうねえ」

戦力の『質』において、ナザリックは最高峰。故に、絶大な力を持つ者との対峙を請け負うことが多い。そして現在、元々辺境に居た个体とは別に、最も警戒せねばならないモンスターが存在しており、先の戦いでその弱点が竜殺し、或いは炎である可能性が高いからこそ、の提言だ。

「天廻龍、ですね。南方に逃れたとの話でしたが……………」

「ローブルはあり得ないけど、高い場所に逃れている可能性が高いわ。あの力でモンスターの狂暴化を引き起こしていたとして、あの粒子状のものを効率よく散布するのであれば、高い場所が一番ですもの。そして、南西で該当する場所は、ローブルとエイヴァーシャー奥地の二か所」

「アベリオン周辺で不穏な動きが見られていませんし、恐らく奥地の方なのでしようね」

恐るべき龍の存在を浮かべ、守護者たちは険しい顔で虚空を睥む。

——それが、無用な心配であるとも知らずに。

「オオオオ——」

『死の森』——白いような、黄色いような瘴気に包まれた、南部の魔境。

そこを悠然と闊歩するのは、屍と多量の菌を身に纏う、禍々しい白き龍。命無き屍の兵を率いる彼の龍の生息域の内、その影響が辛うじて届かない高度のある山の頂で、天廻龍と名付けられた龍は傷を癒している。単純な戦闘力で上回る天廻龍だが、その身は深く傷付いている上、戦闘に特化した変異を遂げた結果、それ以外……………狂竜ウイルス本来の役割としての能力が低下してしまっており、ウイルスが生存できない程濃密な瘴気の内では戦うのは不利。殴り合いであれば容易く勝てるが、能力的な相性はかなり悪いのだ。

そして、もう一つの理由から、天廻龍は傷が癒え次第、南方に飛ぶことを決めている。

「アアア……………」

「オアアア……………」

「……………キュアオアアアアアアアアアアアッ!!!!!!」

瘴気を抜けて現れる、モンスターの屍……動死^{ゾンビ}体だ。

この地の支配者たる龍は、死したモンスターを、身に着けた魔法で支配下に置いているのだ。

本来より知能が落ち、弱体化しているモンスターを軽々殲滅し、白き龍は再び身を休める。

屍が相手では、その力も本懐も果たされない。故にこそ、留まる理由もない。

「……………グルウ」

不快だ、とばかりに唸り、天廻龍は再び眠りに就く。

『死の森』と呼ばれるのは、瘴気に包まれ命の気配を感じぬから。

だが、その実態はもつとおぞましく、『屍套龍』死を纏うヴァルハザクが支配するアンデッドが蔓延る森であり、その能力と併せた彼の龍の領域。本来ならばエイヴアーシャーを容易く飲み込み、アベリオンスレイン共に滅ぼせる程の兵力と力を有するが、エイヴアーシャーに住み着く棘竜、その首魁たる邪毒の竜の存在があるからこそ、この死の世界が広がることは無い。

だが、忘れてはならない。明確な意思を以て支配域拡大を狙う龍は、間近に存在しているのだ。

48—ナザリツクの変化

二か月——モモンガに休息を押し付けたナザリツクは、見事なまでに様変わりしていた。

「「お帰りなさいませ、モモンガ様」」

「……………」

まず、一般メイドたち。皆その顔付きから大きく変わり、儂い空気をそのままに、力強さを兼ね備えたものとなっている。そして最大の違いとして、あまりに自然な空気で物々しい武器を携えており、有事となれば即座にそれを手に取れるよう、携行する位置まで細心の注意を払っている。

「このような出迎えとなつてしまい、申し訳ありません」

「え？ああいや……………え？」

次いで、出迎えに現れたシズと、ナーベラルの装備。

どちらも鎧姿であるが、シズは暗い赤と黒の竜鱗で彩られた『黒炎王』の鎧を、ナーベラルの体は、青みが強い黒と鮮烈な青で彩られた『青電主』の鎧を纏っている。前者は対古龍戦での功績で、後者は防衛戦において、最前線に立ち最後まで生き残り、戦い続けた実力を評価され与えられた代物であり、その質は神器級ゴツズに次ぐ伝説級レジェンドの中でも最上位と遜色ない程だ。

「……………凄いな」

「デミウルゴス様とパンドラ様のご厚意です」

「今後の有事において、より一層の働きが叶うよう、と、姉様たちからも強く勧められました」

（もしかして、読んだたのか？あいつら、本当に優秀過ぎないか？）

彼らにとつて、大したメリットとまらない狂竜結晶を、念のためのストックを除いて換金して、先の戦いで『あれら』が負った損壊の修復費等により、がつつり減ったギルド維持費を補充。モモンガに『十分に働いた、働き過ぎていた』と休暇を出しながら、彼の心労を減らすべくこのようなことまで計画し、二か月という短期間でここまで形にして。

更には、読まれているのかと思う程の察しの良さ。嬉しい以上に、申し訳なく思えてくる。

「……………差し出がましいようで申し訳ございませんが、その」「判っている。ユリたちにも、活躍のチャンスは与えるとも」

（そもそも、あの戦場に立つてくれてただけで万々歳なんだから……………それに）

ユリ、ルプスレギナ、ソリュシャン……………紅蓮とセバス、一般メイドたちと、多くのNPCが戦死を遂げた中で、明確な異変があった。まず、紅蓮とセバスだが、彼らのみ、ナザリックの備蓄を消費してのシステム的な蘇生を行うこととなった。死亡前後の記憶がすっかり残っていたのは幸いだが、それ自体に問題は無い。

問題は、プレアデスと一般メイドたち。彼女たちは死体が残っていた者はその場で蘇生が出来たのだが、セバスと紅蓮は死体がある場で消失したというのだから、随分と違いが大きい。ペストーニャが主導となり多くの人間、亜人の蘇生を行っていたが、手応えに差が無かったという証言と、後の確認で判明した、マスターソースの変化から、何かが起きていることは确实。

（シズは名前以外閲覧不可になっていて、オーレオール以外のプレアデスも、情報がかなり希薄になっていた。その場で蘇生した組は、それに加えてレベルダウンまで起きていた訳だから、確実に何かがある。シャルティアとパンドラも変化が大きい点から見ると、現地環境での活動時間か？）

一人思案する間に、玉座の間に到達。並び跪くNPCたちの前を通り、最奥の玉座へと腰を下ろす。

その目を、毒々しいドレスメイルを纏うエントマに向けてから、意を決する。

「……………まずは、この二か月のお前たちの働きに、最大限の称賛を」
その空気に飲まれながらも、モモンガはそう口に出すことに成功する。

「積もる話もあるだろうが、まずはお前たちの成果を見せて欲しい」
（焦って順序を間違えるな。何事も、こっちの状態を確認してからだ）

無論、モモンガとて何もしていなかった訳ではない。方々との打ち合わせや、各種調整に奔走、高位の転移魔法を活用した緊急時の移動支援、その他ナザリックの蔵書等の知識などを現地に還元するなど、地道に働いていた。その中には、先の会談に、強引に手続きを蹴っ飛ばしたツケで忙殺されていたツアーと、彼の属する評議国とのパイプ構築も含まれているなど、外部での活動は確かな実りを見せている。「それでは僭越ながら、私から報告を」

一歩前に出たパンドラが指を鳴らすと、控えていたメイドたちが台車をモモンガの前まで運ぶ。彼女たちがかけられた幕を引けば、蒼白を基調とした禍々しくも神々しい、絶大な力を秘めた杖が露わとなる。その力に覚えがあるモモンガが息を飲む中、玉座の傍らに控えていたアルベドがそれを手に取り、恭しく献上する姿勢を取る。

「こちら、パンドラズ・アクターが手ずから作成した『神淵の風繰り』となります」

「神淵の……………」

『風神龍』イブシマキヒコの素材の力を、『雷神龍』ナルハタタヒメの素材で高めたモノとなります。モモンガ様の秘めたる究極の力には遠く及ばないながら、竜殺しの力を秘めた逸品として、お使い頂ければと」

「……………お前……………」

感激に打ち震える主の姿に、多くの者が強烈な喜びを覚えるも、それを必死に堪え、続ける。

「んんっ！続けて、私から報告を」

「あ、ああ。許可しよう、アルベド」

その視線を受けたアルベドが深く頭を下げ、報告を行う。

「モモンガ様の武器の作成完了後、各国との交渉で得たモンスターの素材を用い、シモベの武具を刷新いたしました。中でも、先の戦いで生存したシズ、ナーベラル兩名には、彼らが『二つ名持ち』として強く危険視するモンスターの素材を用いた装備を与え、今後の活動の軸となつて貰うことも検討しております」

「うむ。では、話を遮るようで申し訳ないが、私からも一つ報告してお

こう」

「ここがちょうどいいと判断し、モモンガが温めていたプランを投下する。」

「正式な発表は今から一か月後となるが、我々と辺境諸国の共同で、飛行船を用い大規模な『外』の調査隊を編成することが決定した。が、肝心な飛行船の数が現状は少なく、人員もすぐには集まらないだろう」
一息入れて区切れば、既に多くの者は次を理解している様子。弾んだ声が、その心情を語る。

「そこで、ナザリックの人員による飛行船の試験運用、並びに試験調査を行うことを決定した。行先はアークランド評議国であり、司銀龍の縄張りを避ける為、海を経由して、安全な移動ルートを探索することを目的とする」

ナザリックの人員による——その言葉に、メイドたちが身を強張らせる。

「選出は後に行くが、今回は守護者たちを除いた面々で編成することを考えている」

危険です、などという異議は無い。守護者級ですら、事前情報なしでは最悪殺されかねない過酷な環境で、あまりに今更過ぎる言葉であり、その程度の覚悟すらない者はここに居ない。寧ろ、レベルという意味ではあまりに隔絶していたメイドたちがある程度やれるようになっていいる現状、更なるスキルアップの機会として、ハイリスクハイリターンな賭けでもあるのだ。

「……………さて、では一度、お前たちからの報告に戻ろう」

「それじゃあ、あたしから！」

そして意外なことに、アウラから報告が上がる。

「賢王の許可が下りたので、トブの農場を拡大しました！」

「ふむ」

「湖にも生簀を追加して……………あと、あの子たちも農場で育ててます！」

（あの子……………まさか、雷狼竜か!?）

『雷狼竜』ジンオウガ……………彼らが保護したその子供を、あの場所で

育てているという。

「すつごく可愛い上、最近は元々森に居たモンスターの子供たちも集まって！エントマが見つけてきた虫たちも増えて、とつても賑やかになりました！」

「えつと、あと、深いところの森を木材にしたら、浅いところの樹より凄くて、それで」

「あ、そうそう！木材として優秀とかで、魔法で増産できないかを調整してるんです！マーレが」

その報告は、中々に驚きのもの。それほど優れているのなら、幅広く使えるだろう。

「その木材を用いた装備も作成しております。量産体制が整い、メイドたちに行き渡り次第、その流通、販売を事業とすることも視野に入れております。ただ、デザイン面が少々……」

「デザインが？」

「和風寄りです」

「あ………性能の方は？」

「普通に強いです。攻撃力、クリティカル確率、回避補正と武器性能の、命中のプラス補正と」

(つつよ?!)

「ただ、樹の成長度合いにより変わるようで、若い樹だとクリティカル確率と回避補正だけです」

「随分落ちたな………んっ！そこの采配はお前たちに任せよう」

細かな採算は部下に任せ、モモンガは口を閉じる。

「最後に。既にお察しかと思われませんが、一般メイドたちにも戦闘訓練を施しました」

「やはりか。悪いとは言わん、が」

その意図を察した知恵者たちは沈黙し、同じ疑問を有することを肯定。

「彼女たちについては、モモンガ様が仰られた調査隊編成まで、引き続き農場の業務を任せます」

「ソレト、訓練モ忘レズニ、継続サセル予定デス」

その言葉に頷き、モモンガは複数の議題を持ち上げる。

「では、私からも幾つか」

彼がまず持ち出したのは、カツツエ平野について。

「まず、カツツエ平野のアンデッドだが……ただただ、弱い。ユグドラシル相当と思えばいい」

アンデッドを支配下に置くだけなら、とにかく簡単だ。

が、ハツキリ言って、弱すぎる。それこそ、旨味が皆無と言えるほどに弱いのだ。

「そこで、だ。仮に支配するとして、お前たちならばどう活用する？」
(ぶっちゃけ、労働力としてもなあ……)

事実、カツツエ平野のアンデッド増加で困るのは、モンスターの誘引程度なのだ。

それこそ、村娘ですら死者の大魔法使い級以下なら普通に倒せるレベル。

「……ええっと、それは」

「うむ。正直言つて、あまりに旨味が無いのだ」

アンデッドを使うような労働も無ければ、そもそもそれを必要とする環境もない。

壁として使えるのも、精々死デス・ナイトの騎士程度であり、そもそもその場のぎ程度であれば、モモンガなら簡単に生み出せる。戦力としても、壁としても、アンデッドモンスターをわざわざ使う理由が無いのだ。

「……いっそ、滅ぼしては？」

「私も考えたのだが、原因不明というのがなあ」

そう、原因不明——それ故に、不用意に手を出したくない、というのが本音だ。

「申し訳ごいませんが、ユグドラシル基準の低レベルアンデッドとなると、使い道が……」

「労働力として見るとして、現地の人員との差は」

「スケルトンを使うくらいなら、そこらの村人を雇った方が数倍効率的だろうな」

「……素直に滅ぼしましょう。序に、そこに都市でも築いては如何

でしょう」

「それは考えていた。カツツエ平野を平定し、飛行船の中継基地としてどうか、とな」

飛行船の建造技術が広まれば、その恩恵は計り知れないものとなる。無論、陸路と異なる課題は生じるが、迎撃兵器を積み込み易く、その分有事の備えもやりやすくなっていることだろう。竜王国の、砂海での生存のため発達した造船技術により得られた強度は生半可な攻撃をものともしない分、陸路を征くより安全面では上だろう。

その利便性は言うまでもなく、モモンガの案には知恵者たちも同意を示す。

「商船の補給地と共に、彼らが商いを行う商業都市とする、ということですか」

「素晴らしい提案かと。そのような形で運用できれば、我々の商業活動も容易になります」

「各国からの距離も考慮すれば、人員の休憩にも適しているかと思われます」

と、そこまで好意的な意見が上がる中、最大の問題が残される。

カツツエ平野への、対処だ。

「超位魔法では範囲が足りず、かといってワールドアイテムを使うのは……………」

「そもそも、そう簡単に解決する問題なんでありんしょうか？」

(それは思うんだよなあ)

真相を知らぬ者たちからすれば、不思議な土地。だが、真実を知るには、何もかもが足りない。

「それについては、ツアーたちと相談するか……………では、次にだが」

一難去って随分と余裕を持った彼らだが、決して油断することなく、自分たちの活動域の安全の確保に向け、出来得る限りの尽力を行う。それは奇しくも、『悪のギルド』として名を馳せたアインズ・ウール・ゴウンではなく、その前身である、対異形種狩りクランであり、たっち・みーの理念を形にした、ナインズ・オウン・ゴールに近い姿勢であると言えよう。

その在り方は、主であるモモンガからしても、喜ばしいものであった。

「――流石に不運……いえ、幸運の連鎖も、一旦打ち止めかしら」

そして、その変化を喜ぶ者は、他にも。

「邪悪な者たちは、この世界を知り、その悪性を薄れさせる」

邪龍の忌み名を持つ龍が、不機嫌そうに喉を鳴らす。

どうしようもなく邪悪な、人間の負の側面の具現であった八人を思い出して。

「強大な竜たちとの戦いで、忌むべき力は失われ、龍たちの忌避も薄れた。妄信を是とする気質は失せ、彼らは意思無き被造物から、意志ある命へと転じた……何れ、彼の願いも叶うかもね」

白き者は笑う。多くの死と隣り合わせの過酷さこそが、彼ら最大の幸運なのだ。

「今なら、黄金郷の主も歓迎してくれるかもしれないわね」

滅尽龍は南へ飛び、強大なる龍たちに足止めされた黒き竜は、再び行方を晦ませた。

辺境の竜王を睨む龍たちが、この世界に根付いた強者たちが忌む力が消えた今、彼らが犯しうる過ちといえば、八欲王の二の舞程度。それとて、あの地で『上』の強大さを見せつけられたのだから、そういう欲をかけるものでもない。

「それにしても……ふふ。飛行船だなんて、かつてのあの世界みたくになつてきたわね」

彼女たちが生きた世界。龍は疎か、竜の居場所も消えつつあった、懐かしき世界。

侵略にも近い形で居場所を広げたモンスターたち、全ての祖は、過去を偲び微笑む。

「貴方たちなら、また見せてくれるかしら?……彼らのような、生命の力を」

たった一人で、猛る角竜を討ち果たした英雄がいた。

彼の、彼らの偉業を機に、数多の英雄が現れ、人々が未知を切り拓

いた時代。

そして…………己に挑む勇者たちを生んだ、生きる力に満ち溢れていた時代。

「…………生ける屍に求めるなんて、随分な皮肉だけど、ね」

神と呼ばれし龍は、その再来を、密かに渴望していた。

49―白からの祝福

災厄から、三か月。

「つたく、俺にやこういう場合は合わねえんだけどな」

「それは俺も同じさ。だが、相応の立場である以上、ある程度は割り切らねばならん」

農村出身者同士、ガゼフとブレインの会話は随分と気安い。

「立場、立場ねえ……人死に出してる俺に、そんな場所に立つ権利があんのかね」

「自惚れるなよ、アングラウス。どれほど強かろうと、個人の力なんてそんなものだ」

「……だからって、簡単に受け入れられる訳ねえだろ」

憤怒、悔恨を滲ませる彼に対し、ガゼフは厳しい顔で静かに首を横に振る。

「だとしても、生きているからには、前に進まなければならぬんだ。お前はあの村と、あの戦いを背負い、俺は師匠、俺を生かそうとしてくれた仲間、部下、救えなかった民……多くの命を背負って、前に進むんだ。それが、生き残った俺たちの責務だからな」

鎧の下、自身の肩に手を置くガゼフの隣で、ブレインは歯を食い縛り、床を見下ろす。

「……説教臭くなってしまったな。まあ、要は前向きに、ということだ」

「前向き、か」

「ああ。その悔しさをバネにしろ、と言えばわかるか？」

「……んなもん、言われなくてもわかってるさ」

目を閉ざせば、炎に包まれる村の光景が浮かんでくる。

……どうしても、被害を未然に、完全に防ぐことは不可能。彼が味わったのも、それ故の絶望であり、悲嘆であり、それ故に俗世を離れ、妄執が如く強さを求め……その内に、驕っていたのかもしれない。碎竜一体を単独で打倒出来たところで、それが束になってかかって来れば、大して意味が無いというのに。

「さ、行くぞ。我々が遅れては、陛下の顔に泥を塗ってしまうからな」
「俺は王国側じゃねえけどな」

勇ましい轟竜の鎧を纏う戦士に続き、この地で確認されていなかった『雷狼竜』の鎧を纏う戦士も兜を被り、新たな刀を片手に歩を進める。そこでブレインとガゼフは別れ、ガゼフは王のもとへ、ブレインは一人別行動としてその場を去る。

彼らが次に集うのは、多くの発表の場を兼ねた式典の場。

「――まずは、先の戦いで散った者たちに、黙祷を」

音頭を取るのには、スレイン法国の最高神官長。ランポツサ王を超える老齢にして、辺境最強国家の長の座に着く者は、失われた多くの命を悼み、祈りを捧げる。老王も、若き皇帝も、竜の血を引く女王も。そして骸の支配者も、等しく口を閉ざし、先の戦いで散った者たちへと祈る。

この瞬間、帝都アーウィンタールから、一切の音が消え去った。

「先の災厄において、未知のモンスターが数多く現れた」

災厄の元凶たる『風神龍』『雷神龍』、並びに『天廻龍』と、その前身たる『黒蝕竜』。

『怨虎竜』、『雷狼竜』『重甲虫』『徹甲虫』『影蜘蛛』『青熊獣』『尾槌竜』と、多くの新種が確認された災厄。そして、多くの新種を告げれば告げる程、ある者は自身の生存を喜び、またある者は犠牲となった者たちが『少ない』と驚愕し。疑問、そして畏敬の目が、不死者たちを射抜いた。

「そして。未知の中に、想像を絶する災厄が存在していた」

「重い言葉の中、生還した者たちが立ち上がる。

強大なるモンスターたちを打ち倒した証たる、全く新しい武具を纏う者たちが。

「まずは、その厄災に挑み、この地を守り抜いた英雄たちに、感謝の意を」

その言葉に続けて、万雷の喝采が降り注ぐ。

ある者は驚愕と共にその賞賛を噛み締め、またある者は驕ることなく瞑目し。彼らの謝意を受け止める者たちは、静かに民へと応じた。

モンスターたちの活動が未だ沈静化している為、広く民が集まったこの式典に集う、彼らが守りたかった者たちの笑顔に、皆その顔が綻んでいた。

「……だが、この度の厄災において、彼らの尽力がありながら、多くの命を失った。二度とこの惨事を繰り返さぬためにも、我らは見聞を広める必要がある。未知を既知に変え、より磐石な備えをしなければならぬのだ」

最高神官長はその言葉を最後に下がり、立役者の一人——不死者の王が、交代で立つ。

「そう、未知を既知に。多くを知り、多くに備えねばならないのだ」
不死者の眼窩の光が、強く燃え盛る。かつての憧憬を、渴望を思い起こすように。

「故に、我々は外に踏み出す——だが、我々だけでは、それは叶わない。先の戦いの傷は深く、未だどの国も、完全に立ち直ることは叶っていないのだからな。何より、陸路では危険があまりに大きい……：：：：：
そう、陸路では、な」

含みのある言い方で一度切り、大きくアクションを起こす。

空の配下が魔法を解くのに合わせ、ローブを大きく翻し、力強く手を伸ばす。

「だが！竜王国が生み出した新たな手段により、空という新天地の開拓が可能となった！」

どの支配者とも異なる、彼独自のカリスマ性が、この場では最もよく響く。

「そして、国が動けずとも、支援することは出来る。そして、それを受ける者たちは——」

その目が向いた先で、多くの者たちが胸を高鳴らせる。

農村の防衛を始めとする諸事情により、戦いに参加しなかった冒険者やワーカーが、まさかと息を飲む中、モモンガは力強く宣言する。
国に属さないが故の、起こり得る軋轢を極限まで回避できる人員である、という建前は頭から抜け、その声にはどこまでも強い羨望と、期待があった。

「冒険者！そしてワーカー！彼らを軸に人員を集め、この大陸を調査——否、冒険するのだ！」

かつて——辺境の人々の中に、活路を外部に求めた者たちがいたという。

武器を取り、心身を鍛え上げた猛者たちは、未開の地へと踏み入り、その先を目指し、しかしその多くが、そのまま帰らぬ者となった。始まりの理想は、過酷になっていく環境の中で叶わぬものとなり、彼らが立ち上げた名は、いつしか未知の活路を求める者から、内部で広く活動する者の名へと変わった。

その失われた理想が、今再び、燃え盛ろうとしているのだ。

「そして。その冒険に諸君らが加わることも、可能だ」

複数国家の合同プロジェクトへの参加となれば、相応の報酬が確約される。

それだけでなく、全く新しい世界を視ることもできる、という事実が、多くの人々の心を掴む。

「冒険者たちは万能ではない。彼らを、諸君らが支えるのだ」

その演説の中、浮かぶ飛行船に待機しているシャルティアたちは、空を舞う蒼光に気付く。

「て、敵襲!？」

「……………敵意は感じんせん。それに、あれは……………」

空が、一層明るくなる。その異変に気付いた者たちの前へと向け、飛行船より更に高い空を飛ぶ光輝は、急激に地上へと接近する。そこに、不思議と危険を感じる事が出来ず、飛行船の者たちは美しい輝きを目に焼き付けている。

そして、快晴の空がいつそう明るくなった瞬間に、目を剥き感激する者が一人。

「お、おおおおお……………」

空を見上げ、フールーダが感嘆の声と共に打ち震える。

空を見上げた者たちは、迫る輝影を目の当たりにし、伝承を知る者たちは一瞬で理解した。

「ゼルレウス……………」

『烈種』モンスターが、何故!？」

牙を剥く気などない竜は、明るく暖かな光で大地を照らす。皇城に降り立った純白の竜は、その紅眼で地上の者たちを睥睨し、満足したように咆哮すると、それだけで再び飛び去る。真意を解することは非常に難しいながら、過去に彼の竜と遭遇し、その威光を目の当たりにした老翁は一人、その意を読み取っていた。

「は、ハハハハ………激励でしような、これは!」

——異世界の伝承に曰く、『白き飛竜に出会いし者は大願が成就する』……と。

或いは、『白き飛竜に出会いし者には災いが訪れる』とも伝わるが、フルーダの思うように、この度の出現が意味するのは、激励。彼が監視を担当する地に住まう、強き命を認めたことの証左に他ならない。

彼も、彼ら極みに在る者たちも、求めているのだ。

かつて、己と相對した人間たち………彼らと同じ、生命の輝きに満ちた者の再来を。

「いいだろう、白き竜よ!」

憤怒、悔恨、恐怖………そして憧憬を胸に生きた老翁が叫ぶ。

魔神を滅ぼした絶対なる白き竜への憧憬が、他の多くを凌駕していた。

「儂らもまた、貴様らの高みへ!その強大なる力と対等の域まで、至ってみせようぞ!」

それこそが、フルーダ・パラダインの、原点の一つ。

魔道を極めれば、彼の竜に並び得ると願い。そして、その域に至れば、至った者を数多生み出せば、かつて目の前で起きた、数多くの悲劇を防げると願い、果ての見えぬ探求へと身を投じたのだ。

「………まったく、とんだサプライズゲストが来たものだ!」

完全にスイッチが入ったフルーダ、そして伝説上の存在とされていた竜の降臨に沸き立つ民衆と、完全に場の空気を持っていかれたジルクニフが溜息を吐く。が、彼らも輝界竜への悪感情は無く、その意図は読めないながら、こちらに好意的であるとまでは理解できてい

た。

この瞬間、大衆は彼を、聖なる竜として見ていた。

「……………あの時の礼、言いそびれたな」

快晴の昼空より、更に明るく空の下。又シたる紅兜率いるモンスタ―たちを退けた、蒼の光線を思い出し、モモンガは無念そうに零す。その際の、異様に明るい空と同じ状況であることから、その正体であると察したのだ。ここまで敵意のない行動を取られ、天候という状況証拠が揃っては、誰でもそう考えるだろう。

異質な盛り上がりの中、肝心な試験飛行の告知が出来ないまま、式典が終わることになった。

*

式典から程なくして、幾つかのニュースが新たな話題をかつさう。

「グランセルを避けて、評議国までの海上空路を模索……………試運用への参加者募集、であるか」

「空！凄いですね、それは……………私たちには、遠い世界ですが」

「噂じゃ、竜王国が総力を挙げて完成させたらしいぜ。それに、海に出られるって！」

「けど、ボクたちじゃ難しいんじゃないか……………」

「あ、けどここ、雑用って枠が」

ある者たちは、未知に手を伸ばせないかと、和気藹々と酒場で語り。

「それもだけど、カツツエ平野に飛行船の中継都市を建設って、これ大丈夫か？」

「けど、実現できるなら、この募集の山にも納得がいくよな」

「そういえば、カルネ村で研究してた薬師連中はどうするんだろうな、これ」

またある者は、新たに造られるという都市に関するチラシを見て、他愛もない話で盛り上がる。

「ヒトも変わるものでござるなあ……………」

「ギユアアツ」

「ギユオウ」

その一方、チラシを傍らに、広がった農場の隅で、森の賢王は湖を見つめる。

「賑わってござるな」

彼女が招いた多くのモンスターが、彼女の支配域と異なる領域に根付いた。

龍の猛威への危惧と、狂竜の力の残留への懸念からの提案であったが、アウラを挟んでの交渉のお陰でか、彼女の領域への被害は極めて少ない。そもそも、彼女が率いる者たちと敵対するだけの旨味が無い、というのが一番なのだろう。

事実、この森の中で彼女を相手にするのは、如何に強力な竜が揃おうとも自殺行為に近い。更には、先の戦いで多くの着想を得た彼女は、恐ろしいことに更なる魔法やトラップを編み出し続けている。一見呆けているように見える現状でさえ、その頭の中では数多の新魔法が組み上げられているのだ。

「しかし、空とは……ヒトとは、わからぬものにござるな」

静かに配下へと語り掛け、その目で夜空を見上げる。

先の戦いを生き抜いた猛者であるが、彼女は本来弱者側。生存の理由も、アウラと共に普通の竜たちの司令塔として動いていたことが大きく、個体としての弱さを知恵で補っているに過ぎない。その集大成こそが、南の森に住まう竜たちの統率であり、彼らの力を駆使したゲリラ戦術。

言い換えれば、それらの通じない環境において、彼女たちは一転被食者側に逆戻りだ。

「キュアツ！キュアツ！」

「キュオオツ！」

「……………この農場も、いつの間にか託児所になってござるし」

そんな彼女の支配域内にある、農場……………彼女の支配域にあり、更にはナザリックの者が定期的に現れることもあり、森の南部域でも特に安全であるこの一帯は、いつの間にかモンスターたちの第二の巣に近い場所となり、卵や幼い子を預ける場となっていた。これには、外

部のモンスターたちが主に北西、並びに東部地域に居を構えたのに対し、そのエリアは生存競争も相応に熾烈であることも一因だろう。

「小屋の組み方は覚えたいし、幾つか新設すべきでござらうか？」
「でしたら、私もお手伝いいたしますよ」

そこに声をかけるのは、彼女に一目置くナザリックの知恵者。

新たな領域への挑戦に当たり、磐石の備えを求める者は、この未知の世界有数の知恵者の元へと足を運ぶ。未だ一年にも満たない時間しか過ごしていない者たちからしてみれば、二百年という歳月を生きて、人間との交流無しで多くを生み出した者との交流程、多くを得られる機会もないだろう。

「それと、幾つか相談なのですが――」

50―変化した従者たち

凄烈な黒焰の奔流が大地を破壊し、その熱を余波となる風が伝える。

「いやあ、恐暴竜がいなくなるだけで、こうも楽になるとはなあ」

「あの食欲の権化を縛る必要が消える、というのは、中々に大きな収穫だね」

始原の魔法により、カツツエ平野を消し飛ばしたドラウデIRONが豪快に笑い、ツアーがしみじみと呟く。食欲の権化の呼び名の通り、放っておけば最上位捕食者として、ろくでもない事態ばかりを引き起こす疫病神だったモンスターを縛っていた土地は、その疫病神自体が消えたことで用済みとなった。

だから、こうして始原の魔法という極大火力により、丸ごと薙ぎ払ったのだ。

多大な不確定要素に対し、始原の魔法という理外の力……より厳密には、始原の魔法という型に強引に当て嵌めた、黒龍の力の一端を以て、強引に解決することを選んだ。事実、アンデッド大量発生の原因となっている物をユグドラシルの手段で取り除くことは困難を極めても、取り除いた後の地上を作り替えるのであれば、実に簡単。

そして、ドラウデIRONの力は、黒龍の力。ユグドラシルの残滓を消す程度、造作もない。

「さて、と……では、数日様子見だな」

「ま、流石にこの状態じゃあ、何も確認できんからな」

「それでは、僕も一旦失礼しよう。あまり長時間抜け出すと、後が怖いからね」

「ウチは一応、今後にまつわる公務って形に出来てるぞ？そっちは融通利かんなあ」

「大体、僕が強引に救援に出たせいだからね。あとは、各方面との調整とか」

モモンガが申し訳なさそうに目を伏せる中、ツアーは軽く首を横に振り、彼の責任を否定。

他の評議員や有力商人の公募で集まった、建築業に従事する者、ここに志望する者などの幅広い人材の選出や、そうした人材の派遣により生じる穴をどう埋めるか。また、それらの人員の送迎の為の軍の派遣をどうするかなど、過酷な常冬の国では生じる問題も多い上、先の強引な救援への出立の責任として、それらがツアー一人に丸投げされているのだ。

本来ならば、もつと重い処罰が下されるところを、飛行船という希望のお陰でそこまで軽減して貰えたと考えれば、そう悪い話でもない。正規に踏むべき手続きが煩雑であるのも、彼ら永久評議員、スヴェリアー・マイロンシルクを除く者たちが重大な戦力であることに起因しているのだから、非常時だからこそ余計に、処罰が重くなる危険が大きかったのだ。

「早ければ、来月にでも人員を派遣できると思う」

「なら、七彩は引き続き、いつもの場所に停泊だな。人数が決まり次第報せてくれれば、顔パスで通せるよう、手続きしておくぞ。ああ、モモンガの方はもう顔パス状態だから大丈夫だ」

「そこまで気にしなくても」

「いや、調整のために飛び回ってんだし、イチイチ手続き挟むとあつちの手間が増えるんだよ」

「……………あー」

すっかりそこに思い至ってなかったモモンガが気の抜けた声を零す。

「あとは、木材の融通やら、色々と世話になる礼だな」

「そこまで気にしなくても……………」

「ウチの国知ってるだろ？評議国が可愛く見えるレベルで不毛だからな？」

「植林とか、ほぼ無理だからね、竜王国は」

「そ。その上、どの国の木材より頑丈ときたお陰で、造船業での需要爆上がりよ。家屋の方にも、使えないことは無いんだろうが、今のところは要になり得る飛行船に全ツツパだろうな。ランポツサも言ってたが、一か所に供給を頼ってる以上、民間への転用は可能な限り抑え

ることになる」

非情とも取れる判断であるが、民間への流通を増やすより、重要拠点の補強や今後多くの事業の要となり得る飛行船の材料としての運用を重視するのは、国としてそう間違っている訳ではない。もっと言えば、そこに頼り切り過ぎると、万一供給量が減った際、民間への悪影響が拡大する危険性が高いからこそその判断であり、特定の何かに依存してはならない、という彼らなりの思慮の下の判断だ。

「……………げ、もうか。すまんが、一旦戻らせて貰うぞ」

「そうだね。こちらも細々と仕事をしていたけど、そろそろ戻らないと大目玉を喰らいそうだ」

「それじゃあ、また後日ということだ」

その会話を最後に、三人はそれぞれの手段で一度帰還する。

「……………さて」

モモンガが転移した先は、ナザリックの大農場……………トブの大森林にある、巨大な領地だ。

(現状推し進めているのは、ユグドラシルに無い植物、魚介類、虫の生産と……………)

カルネ村含む複数地域での実験の結果、大森林奥地が最も生育状況がいいことが判明しており、第六階層は基本ナザリックNPCの訓練場として運用することを決定している。その為、こちらはこちらでナザリックに次ぐ重要拠点と化しており、またこちらで長期間活動していたメイドへの変化からか、より積極的に内部の者が訪れるようになっていた。

「あ、モモンガ様！」

「私のことはあまり気にしないでくれて構わん……………と、いい装備だな。似合っているぞ」

「っ、ありがとうございますー！」

パンドラ曰く、『ユクモ』と言うらしい、和装姿を前にすると、メイドとは、と疑問を抱く。

が、メイド服と比べると、防御性能は雲泥の差があり、付加される効果も優秀な部類だ。本来、頭装備として三度笠も加わるのだが、そ

れ以前に作成していた武具で発見した技術で、頭装備と胴装備の実質的な一体化に成功。頭分の装備枠も消費する代わり、性能を損なうことなく統合できたという。お陰で、遠目からも誰が誰かの判別が容易であるなど、増えた利点も多い。

（確か、マーレが長い時間をかけて育てた樹ほど、優秀な武具になるんだっけか）

ナザリックのメイドたちの装備は、マーレに多大な苦勞を強いて育て上げた大樹を加工した代物であり、その性能は攻撃力、クリティカル率、回避へのプラス補正に加えて、近接武器ならば基礎性能の底上げ、遠距離武器ならば命中率へのプラス補正と適正距離でのダメージ増加と、非常に優秀な出来。手段は未だ不明ながら拡張性も高い上、強化も可能と至れり尽くせりな代物であり、汎用性も防御性能も高く、更には同一性能を容易に量産可能であるお陰で、メイドたちの基本装備として採用されている。

が、外部に販売する代物は、若干若い樹を加工した、クリティカル率と回避への補正のみ、拡張性も程々の装備である。これは、各国首脳陣からの要望によるもので、こちらも先の木材の用途同様、ナザリックという強者の存在に過度に依存しないようにするための措置である。

（あつたあつた、と）

畑の片隅に腰を下ろし、育てている薬草を摘む。それを瓶に入れる。続けて茸の栽培所で青い茸を採取し、養蜂箱から採取したハチミツ少量と共に瓶に入れる。しっかりと蓋をしたそれを振れば、それぞれが綺麗に混ざり合い、鮮やかで明るい緑色の薬液が完成する。魔法でその中身を鑑定すれば、しっかりと有用な回復薬である、という結果が出される。

（本当に簡単だな………材料が揃えば、だけど）

その隣では、弓を背負うメイドが赤い茸を採取し、バラバラに裂いてから瓶に詰め、軽く振る。少しの間振り続けていると、それは赤い色の液体に変わり、それが詰まった瓶は彼女のポーチへと収まる。ナザリック所属であることを示す、暗い紫色のポーチに収まる瓶の本数

は50本と多く、過剰ではないか、とモモンガは少しばかり思案しながらも、同じように赤い茸ことニトロダケを手に取り、同じ手順で瓶を作成しようとして

「うん？……うおう!？」

妙な手応えに視線を落とせば、刺激の加え方が悪かったのか、瓶の中が高温で溶けてしまう。

これでは、瓶の再利用も難しい。『やらかした』と一人途方に暮れていると、弓を背負うメイドが駆けて来て、『失礼します』の一言と共に、その瓶を回収し、新しい空き瓶を手渡す。少し驚き、視線を彼女へと向ければ、少々竦んだ様子を見せながらも、しっかりと対応して見せる。

「ええつとですね？この強撃ビンって薬瓶なんですけど、少し振り方にコツが必要で——」

数度実演して見せた彼女のアドバイスに従い、モモンガも同じように薬瓶を作る。曰く、ニトロダケの高熱を発する性質を利用しているらしいのだが、刺激の加え方が悪いと茸の組織どころか瓶が溶ける程の温度になってしまいうらしい。刺激が足りなければ十分な熱が生まれず、強すぎれば瓶が先にダメになる、と中々に難しそうではあるが、いざコツを掴めばかなり簡単であった。

「凄いな……それで、これはどう使うんだ？」

「弓に使うんです」

「……うん？」

「少し見せますけど——」

弓を広げ、とある箇所を示す。そこを確認すると、丁度ビンが収まる程度のスペースが。

「ここに蓋を開けたビンを入れるんです。それで弓を引くと、鏝に薬液が塗布されるんですよ」

「成程……ユグドラシルには無かったものだな」

「そうなんです。パンドラ様も驚かれています」

話が盛り上がるか、と思われたところで、二人は奇妙な音を耳にする。

「ん？この音は？」

「エントマ様ですね。それか、彼女に師事しているメイドたちか……」

「少し見て来よう」

「お供しましょうか？」

「好きにするといい。仕事中だったとしても、息抜きは必要だからな」

メイドの意思に任せ、音のした方に向かえば、小柄な体軀に合わせた長物を振るうエントマの姿が。『影蜘蛛』ネルスキュラの素材を用いた、近未来的なデザインのその武器は、武器そのものを振り空気を取り込むことで音を鳴らす、特殊な虫笛と一体化したもの。その振り方で差異が生じる音を用い、彼女は、自身が発見した虫へと指示を下していた。

「よしよし、っとー」

驚くべき速度で戻ってきた、鋭い角を持つ蛾のような虫、オオシナトを腕に泊めると、エントマは満足げに頷く。彼女から離れた場所では、リーチの長くない武器を手にしたメイドたちが恐る恐るといった様子で虫たちの世話をし、またそこから離れた場所では、長物を背負うメイドたちが虫に蜜を与えるなどしている。

「あれが、猟虫とやらか」

エントマが東の森で発見した、複数種の虫の一部。

猟虫というのは、モモンガが魔法で調査した結果判明した彼らの分類で、与える餌により異なる姿に成長する、という面白い特徴を持つ生物だ。モンスターの組織等を捕食した場合、それが体内で反応、それにより生じた液体を散布することで他者を強化するという、大変に面白い生態を有しており、エントマ主導のもとで、共に戦うという形を取るべく、こうして訓練を進めているのだ。

そんな中、彼の興味はやや離れた場所にある小屋へと向き、そちらに向けて歩を進める。

「かけりむし翔蟲の小屋、か」

エントマが生還できた最大の要因、翔蟲。小さな甲虫ながら、エントマの比でない、どころか、一部のレベル100NPCを凌駕する程

のパワーと、それを十全に活用できるようにするだけの強靱な粘着質の糸を出すのが特徴で、先の戦いではエントマがムシツカイ職のスキルで意思疎通を行い、その力を借りていた相手でもある。

その有用性に目をつけ、育成している、のがこの農場なのだが……

「その子たちの育成はその、まだあまり……」

「環境が違うから、かもしれんな。焦らずじっくりと」

「いえ、エントマ様以外の指示に、あまり従ってくれなくて……」

「ふむ？」

「その関係もあって、エントマ様は先に他の子たちと、猟虫の育成を優先しています」

その言葉を噛み砕き、改めて小屋の中に視線を移す。

「……この小さな蟲が、か」

「吹き飛ばされたエントマ様を糸で引き上げたり、一時的に動けなくなったモンスターに糸を絡み付けて、行動を制限したりと、本当に凄かったです。ただ、やはりエントマ様のようにはいかず……」

「では、用途を限定した代替案を考えるのもいいかもしれんな」

そう零し、差し出した掌に留まった蟲を見下ろす。人によっては生理的にムリ、という可能性も考えられる一方、ある程度の愛嬌もある甲虫は、モモンガが軽く手を振り上げると共に、空へと飛び上がる。軽やかに舞う小さな体に、数匹集まれば大破したガルガンチュアを運べるだけの力を秘めている、とはとても思えず、暫くその姿を目で追ってしまふ。

「……不確定要素も多い以上、無理強いは出来まい。彼女たちに任せろさ」

それだけ口にして、モモンガは小屋を、エントマたちの訓練場を後にする。

(しかし、エントマのあの武器も、使いこなせば強そうだな)

エントマたちが物にした後、『操虫棍』と名付けられる武器を想起し、一人頷く。

同時に、彼女たちの成長を実感し、心地よい喜びが胸を満たす。最

初感じていた、息苦しい程の期待と信奉はすっかり失せ、対応も大分柔らかくなりつつある。世界は過酷で、しかしそこに生きる命は力強く、輝かしくて、自身もかく在りたいと思わせてくれる。飲食も、睡眠も叶わない体ながら、リアルの世界以上に『生きている』と実感できる世界で、彼はほほほ満ち足りていた。

「……………さて。俺も仕事に戻らないとな」

彼の仕事は、部下たちの決定の最終チェックを行い、その責任を持つこと。

如何に彼らが有能であろうと、油断などしてられないのがこの世界。自身が100%正しいことは有り得なくとも、部下たちが絶対に間違えないことも、また在り得ない以上、どんな小さな疑問、引っ掛かりであろうと、その綻びから生じ得る被害を考慮するのなら、とことんまで突き詰めねばならない。

その末の失敗ならば、潔くその全責任を背負う。それが、彼の理想とする長の在り方だ。

51―変化の証たる『街』

更に二か月の時が流れた、辺境南方の大地。

「わあ……………」

「ここが……………」

カツツエ平野……………アンデッド多発地帯であつた場所には、巨大な都市が建てられていた。

「ようこそ、『アインズ・ウール・ゴウン』へ」

城塞都市『アインズ・ウール・ゴウン』——カツツエ平野という、アンデッド多発地帯の根源を排除したことで生じた、広い空き地に建設された都市。どの国家にも属さぬ中立で、全ての国を受け入れる都市であり、竜王国の発明である飛行船の運用を前提として設計された、飛行船運用のための、そしてそれに乗込み、未知を切り拓く冒険者たちの為の、巨大な中継基地。

そして、モモンガたちナザリックが、一つの勢力としてこの地に根付いた証でもある。

運営には多くの守護者が関与しており、同時に現地の知恵を多く取り入れている。ナザリックに蓄えられた知識を、現地の技術、知恵を照らし合わせ、よりハイレベルに昇華させるという工程を、街の中心部たる『港街区』から街を囲う城壁にまで適応したこの都市は、間違はなく辺境最大にして、最も堅牢な都市であると言えよう。

「……………おっし、いいぞー！」

「橋を繋げ！運び込めるモンは運び込むぞー！」

降り立った、様々な改造を施された飛行船『黒鱗』へと、橋を繋げる。

造船所内では、ナザリックから持ち出した諸知識と、竜王国の有する技術とを擦り合わせた成果である、竜王国からしても画期的な設備が、多数稼働している。それらの多くは、ギルメンが最古図書館に残した書物にあるものを参考としているが、後日竜王国は疎か、各国に持ち帰れないかと打診を受ける程に、画期的なものばかり。

竜王国から多数の技術者を呼び、王国、帝国、法国は疎か、アベリ

オンと都市国家連合から多数の工夫の助力を受け、早期完成を実現した都市の心臓部。そこから少し離れば、これまた異なる活気が満ちている。数多くの者が移住したばかりの居住区から、古株の大手商人に始まり、比較的新参の者まで幅広く受け入れる商店街など、完成から一週間と経っていないとは思えぬ程、活気に溢れている。

「おう、悪いな兄ちゃんら。ちよいと横に避けて貰えるか？」

「あ、すみません！」

一見ガラの悪い、スキンヘッドに全身刺青の筋骨隆々の男の声に、五人が退く。その恐ろしい姿に五人が竦む中、当の男は大して気にした様子を見せず、「気をつけろよ」と簡潔に注意して街の奥へと消える。その注意を胸に、銀級冒険者チーム『漆黒の剣』が歩を進めれば、その活気が消えた場所を発見する。

「……………あれ、って」

黒に近いダークブルーの甲殻と、鮮やかな青の高電膜で彩られた鎧と、それが際立たせる色白の肌を持つ美女。背負うダークグリーンを基調とした電竜杖と併せ、知らない者はまずいであろう、有名人。突如現れ、三つの災禍を退けた謎の一団、ナザリックの一員にして、先の大事件の最前線で戦い、生還した英雄の一人だ。

(まだ販売されている武具を手にした様子は無し……………ね)

彼女の目的は、栄えあるギルドの名を冠した、繁栄を約束された都市の視察。

突き詰めれば、更に後に控えた試験運用に参加する可能性が高い者たちの、装備の刷新状況だ。ナザリックが現地に供給した武具は、今までの主流であった武具より格段に高性能な代物で、それは現在、比較的安価で供給されている。彼女が何故そこまで見ているかという点、武具の刷新後、慣らしの期間が必要であることを実感したから。

現在、一時期落ち着いていたモンスターたちの活動が再開されつつあり、トブの大森林とは別の区域に生息する小型、中型の鳥竜種モンスター等の討伐依頼が増えつつある。当然、この街から受注できるように手続きはされており、それらで日銭を稼ぐようにしていれば、自然と慣熟できる。

『早くナザリックの武具に買い替えろ』という思考の根底にあるのは、姉妹や一般のメイドたちも加わる試験運用への懸念。戦力として参加する者であろうとなかろうと、彼女たちの背中を預かるのだから、相応の準備を整えておけ、という苛立ちに近い思いだ。とはいえ、大分分別がつくようになった今、まだそう時間が経っていないことと併せ、様子を見る、という選択が出来ている。

「……………いけませんね。もう少々、気を緩めねば」

「そうつすよ、ナーちゃん。モモンガ様も仰ってたじゃないっすか、切り替えが大事、つて」

そんな彼女に声をかけたのは、ルプスレギナ。オフとして意識を切り替える為か、これまで通りのメイド服姿の彼女は、既に買い物を楽しんだのか、色々なものを抱えている。先の戦いで、自身が生き残った、生き残ってしまった、と負い目を感じているナーベラルの表情が少しばかり曇れば、ルプスレギナはそれを機敏に察知。その手を引いて、雑踏へと消えていく。

「ちよ、ルプー!?!」

「……………行ってしまったのである」

「残念でしたね、セリー。色々、訊きたいことがあったんでしよう?」
「いえ、大丈夫です。それより、先に宿を取らないと」

セリーと呼ばれた、ボーイッシュな少女の言葉に従い、銀級の五人組は宿泊施設の集まる区画を目指し、小走りに。幸い、街中の各所に案内標識、案内板が設置されており、建物の配置も整然としているお陰で、初めての来訪でも迷わず目的の区画まで辿り着ける。

「宿取れたぞー!」

「都市直営だったみたいで、安く済みました」

そして、五人の冒険者は元々、今日一日は冒険者業を休むことを決めていた。

「それじゃ、各自解散つてことぞー!」

「はい。ただ、明日はしっかりと働きますからね」

リーダー、ペテル・モークの声に皆が了承を伝え、一度解散。

「セリーはどこに行くの?」

「巻物スクロールとか見てみようかな、と思ってる。まだ、使える魔法もあまり多くないからね」

その中で、合流した姉妹は商店街へと向かい、目当ての店舗を探す。区画間で迷うことはなくとも、どこにどの店があるかは現状、案内板に自主的に掲載している者を除けば不明な状態。主な活動拠点であったエ・ランテルの街で、買い物に行くより新鮮さは強く、目的の店以外にも顔を出しては、あれがいい、これがいいと買う買わないは別に盛り上がる。

初動が大事、とばかりにどこも奮発しており、見ているだけでも十分に楽しめる。あくまで銀級冒険者チームであり、且つセリーことセシーリア・ベイロンはマジックキャスターということでも出費も多く、財布にそこまで余裕がないのが無念ではあるが、姉妹での時間ということもあつてか、流れる時間は和やかだ。

「出来たばかり、とは思えない活気ね」

「色んな国から来てるみたいだから、楽しいよね」

王国、帝国、法国、竜王国と……どこも、品揃えの傾向が微妙に異なる為、見ている飽きない上、時折掘り出し物も発見出来たりと、エ・ランテルと異なる楽しみがある。じっくり来る武器が見つからず悩んでいたセリーの姉、ツアレニーニャ・ベイロンも随分リラックスできているようで、明るい表情を見せている。

そんな姉の姿を喜びながら、セリーもツアレと共に、本来の目的を忘れ街を回る。

「……………あ、ここに」

ツアレの目が、ある掲示物に留まる。街全域で、大々的に告知されているものであり、よくよく内容を読んでみれば、この街で唯一武器を扱っている店『大工房』の存在と、所在地を示すもの。街の中核たる港街区に存在するというそこに興味を惹かれ、そこまでの簡単な地図を頭に叩き込む。

「お姉ちゃん？」

「この、大工房って場所も見てみようかな、って思ってた」

「それじゃあ、先に行こうよ。ほら、武器以外も取り扱っております」

す、つて書いてあるし、ボクが欲しい巻物スクロールとかも置いてるかもしれないし」

セリーが笑顔でそう伝えたと、ツアレも表情を和らげ、共に同じ場所を目指して歩き出す。

中心部にある港街区の、ごく浅いところに存在する大工房に近づけば、区画の大部分を占める大造船所の設備の音が耳に届く。大規模な設備の稼働音の中、巨大な工房からも負けじと大きな音が響いている。それこそ、踏み入る前から、その熱気と音が伝わる程。

「おっし、そっち行くぞ！道開ける！」

「二丁上がりだ！確認頼むぞ！」

「……………工房、つて、そういうことかあ」

所属国家、種族問わず、鍛冶師たちが行き交う工房と一体化した店だった。

竜王国の技術に、ナザリックの知識が加わり誕生した大型設備を有する工房は、先の戦いの後方支援に参加していなかった鍛冶師たちの修行場としての機能も兼ねており、忙しく動いている。その中で目立つのは、暗い赤の鎧を纏う少女と、執事服を纏う老人の場違いな二人。

「成程、ではそのように手配しておきましょう」

「助かるよ、セバスの旦那」

セバスが割り当てられたのは、この大工房のオーナーという立場。

多くの調整を求められる多忙な立場であるが、同時に強いやりがいを感じていた。この大工房で得られた成果の多くは、ナザリック以上に現地の人々へと還元され、彼らの安全に繋がるのだ。ナザリックの利益以上に、無辜の人々への利益を喜べる辺り、セバス・チャンとして設定された、或いはナザリックのシモベとしての要素を、創造主であるたっち・ミー譲りの気性が凌駕しつつあるのだろう。

「これ、頼まれてた巻物スクロールと弾薬ね」

「おお、助かった！弾薬は兎に角、魔法にや疎いのばっかだなあ」

シズ・デルタが弾薬の詰まった木箱、巻物が詰まった木箱を置き、仕事は終わった、とばかりに踵を返す。そして、そのエメラルドにも似

た瞳が、丁度来訪していた銀級冒険者姉妹を捉えた。セリーが驚き固まる一方、ツアレは彼女より、店内にある武器に目を奪われている様子。

「何か、探してる？」

「え!?……………えつと……………はい」

そう訊かれ、一瞬誤魔化そうかとも考えたツアレは、しかし誤魔化しても意味が無いと判断し、不安そうに肯定。妹に倣い少ないながら魔法を学び、冒険者として今の仲間たちと活動を始めてからは、前衛後衛問わず試すこともしたが、どうも『これ』としつくりくるものが見つからないのだ。

現状、まだ銀級止まりではあるが、今後ランクが上がった後、それが原因で仲間の足を引っ張るのではないか、という不安は拭えない。そして、この店には見覚えのない武器が複数置かれており、そこに希望を見出した彼女は、店内の武具を観察していたのだ。

「その、しつくりくる武器が見つからなくて……………」

「成程。それは大変」

彼女が冒険者であることは、身に着けている金属プレートで一目瞭然。

その悩みが死活問題であることはシズも理解できるし、彼女も彼女で、一般メイドたちの中に、眼前の少女と同じ悩みを抱えていた者と向き合ってきたことから、精神的な重責であることも理解できた。その上で、どうするべきか、とセバスに目を向ける。

彼女たちとて、純粹な慈善事業ではない。武器を選んでも、無償で譲渡、とはいかないのだ。

「失礼ですが、お手持ちのほどは？」

「……………そ、それなりに」

「お姉ちゃん一人で足りないようでしたら、ボクも払います！」

セリーが力強く叫べば、セバスは優しく微笑み

「少々脅してしまいましたか。こちら、どの武具も値段は提示してありますので、ご安心を」

「え?……………あつ」

展示されている武器から、少し視線を下に向ければ、値段を書いたプレートが目に入る。

羞恥と、そこまで不安を抱えていたことに顔を赤くする中、セバスはあえて触れずに続ける。

「足りるようでしたら、幾つか試してみたいかがでしょうか？」

「い、いいんですか？ 売り物、ですよ？」

「試して頂かねば、何もわからないではありませんか。それと、」

セバスの手が、ツアレが注視していた場所の反対を示す。

「あちらの防具も、提供しております。衣服鎧ですが、金属鎧より頑丈な物でございます」

トブの大森林奥地で発見した樹木を加工した装備、ユクモノシリーズを指し示す。

魔法の鎧としての性質を有するお陰で、採寸の必要がない。更には、量産も比較的容易と、販売に向けた代物でありながら、性能はクリティカル率と回避補正の強化と幅広く恩恵を受けられ、それでいてある程度実力をつけると物足りなくなる絶妙な塩梅。その強度と回避補正とで、装備者の生存にも寄与してくれるだろうことも、嬉しい点だ。

「ええっと、お値段は……」

「あちらですが、安価で提供させていただいております。皆様に未知の開拓を期待する立場でありますので、これくらいの便宜は当然のことでございます。それに、将来的には、彼らのような優れた職人が、より優れた武具を提供してくれることでしょうかからね」

「旦那あー！ プレッツシャーー！」

「圧力かけんのも程々で頼みますよー！」

凍りかけた空気を、鍛冶場からの声が適度に和らげる。

「おっと、これは失礼。では、こちらでお試しく下さい」

「は、はいっ！」

試験場へと向かう二人を眺めたシズは、その目をセリーへと向け

「……………何か、買っていく？」

この大工房と関係のない立場ながら、一応売上に貢献しようと、口

を開いた。

52―《竜》の満ちる世界を生きる

人が行き交い、活気が満ちた、街を見下ろす。

「……………いいもんだな、ここのうのもの」

リアルの世界ではあり得なかった光景を、モモンガは穏やかな心持ちで眺めていた。

空気が汚れた世界では、外での立ち話など有り得ず。誰もが搾取され、疲弊していた社会に、活気などは存在していなかった。それに加えて、この平和を自分が、自分たちが勝ち取った、という自覚があるからか、湧き上がる感動も相応に大きい。過酷極まる環境に揉まれたお陰で、彼の在り方がかなり人間寄りであることも、その一因だろう。

「モモンガ様」

「おっと、すまない。今行こう」

都市運営の大部分は、NPCたちが行っている。これは、モモンガ自身の仕事が増え過ぎないように、という配慮以外にも、彼らなりに現地の人々に思い入れを抱いたこともあるのだろう。本来人間を玩具としてしか見ていなかった筈のデミウルゴスは、今や竜王国の造船技術を学びつつ、パンドラと共にタブラ、ガーネットといった面々が電子書籍として保管していた、リアルの工業知識を現地に還元するなどして、時に驚きながらも楽しんでいる。

（大工房といい造船所といい、初めて見る規模だったもんなあ）

都市中に響くのでは、と錯覚するほどの音と、莫大な量の蒸気を噴出する巨大設備。建造に従事した技術者たちが、我先にと故国で再現せん、と熱を入れる最新設備の数々は、リアルで廃れた蒸気機関を用いたもの。リアルでの課題の一部をマジックアイテムによって解決したそれは、これまでを大きく上回る作業効率を叩き出していた。

男心を擽る巨大設備の稼働を、名残惜しく思いつつ視界から外し、執務机に着く。

「さて、私は私で、出来ることをするかな」

それは、ナザリックとして請け負った諸々の業務の整理、分担。

（ドワーフ国の中継基地建設は、こっちで作成した設備の設計図の提

供と、建造に関与した技師の招集は済ませている。一応、二人はスケジュールに余裕は持たせて動いているし、パンドラも新型炉をあつちに作る気だから、そこは問題ないな)

直接都市運営に関与している者たちは、自分である程度スケジュールを管理している。

状況次第ではモモンガから予め要望を入れるが、大抵問題はない。(で、他はまず土地の確保からだから、報告待ちでいいな)

簡潔に現状を纏めて、次へと移る。

「次は……龍脈炭の在庫問題、か」

現状、現地の技術を駆使しても、安定して高い熱量を生む炉の作成は不可能であった。ドワーフたちの坑道で少量が、ローブル熔山帯で多量に得られるマカライト鉱石筆頭の優れた鉱物類を加工可能にするだけの熱量を生むには、龍脈炭が不可欠。一度生じた熱量を長時間維持することが可能でも、やはり一定量を消費せざるを得ず、不安は大きい。

では、その龍脈炭はどこで得られるか、というと、ローブル熔山帯だ。

最も埋蔵量が豊富なのは、かつて熔山龍であり、大地と一体化して火山と化した旧プラートで、そこは炎龍夫妻の住処であるため、まず無理。他にも、莫大無比なる生体エネルギーで変り果てた半島の大部分に点在しており、比較的に近い旧ホバンス近郊等の一部に関しては、パンドラたちの健闘により埋蔵が確認されている。

(現状、安定して大量に掘れる訳じゃないのがキツイな。調査一つも命懸けだし……)

シャルティア指揮の下、一部メイドの实地訓練として、パンドラたちが転移ポイントとして決定した鉱脈の幾つかの採掘と、彼らが比較的安全と判断した場所の調査を行っているが、やはりどうかか負傷率が高い。幸い死者は出ていないが、安全な環境とは程遠い以上、その供給量を安定させることは不可能に近いだろう。一応、幾つかの仮拠点が設営され、その内二割ほどが現在も残っている、とのことだが

……

「大体が大規模な鉱脈から遠い辺り、鉱物食モンスターの縄張りの外、ってことだろうか」

実地調査をもとに完成された地図を見下ろし、静かに零す。

「やはり、現在の成果では不足でしょうか？」

「まさか。お前たちが生還し続けている、というだけでこれ以上ない成果だとも」

それらを、奇跡の一言で片付けはしない。奇跡的でこそあれ、確かに彼女たちの努力が結実した証である以上、陳腐な言葉で片付けはしない。何より、彼女たちの調査で新たに発見された鉱脈や、小規模な鉱脈と近い拠点など、この街で完結する分には十分な量を得られていることに違いはない。ただ、この都市『アインズ・ウール・ゴウン』以外にも発展して貰う必要を考えると、致命的に足りないだけで、それは彼女たちの責任ではない。

かといって、現地を責めることも出来まい。アダマンタイトが産出する中で最も硬い鉱石という環境から、いきなりランクアップを要求されたのだから、仕方がない面もある。いきなり技術革新を迫られて、ナザリックの手助け込みとはいえ、仮定される必要量を大きく減らせたことの方が、ハッキリ言って異常だ。

(ローブルの件は、地道にやるしかない。あとは――)

現地の魔法システムに関しては、モモンガにはさっぱりである以上、変に手は出せない。

他の諸業務を処理するも、量自体は大したことが無く、その多くが割り当ての整理と、最終調整で済む程度。それらを終えた後には、この街においての彼の仕事は無くなり、一個人に戻る。一応、都市長の身分ではあるが、外部とのやり取りの為の便宜上の物に近く、殆どの業務を部下に持っていていかれているのだ。

「失礼します」

「ん？……ああ、入れ」

急を要する報告か、と一瞬身構えていると

「お久し振りです、モモンガさん」

「ラキユース殿か。となると………おや？」

三人かと思つた来客は、まさかの五人。少し驚いていると、イビルアイが苦笑と共に口を開く。

「イジヤニーヤから、実戦経験を積むためにと来た二人だ。紹介しておいた方がいいと思つてな」

「ティナ。よろしく」

「ティア。よろしく」

マイペースな二人がそれぞれ自己紹介したところで、ガガーランが軽く肩を竦める。

「あとは、オレら宛の依頼が大分減つた、つてのもあるな」

「……………似た理由で、番外席次様も入り浸っていますね」

母に名を与えられず、故に敢えて名無しとして活動するハーフェルフを思い出し、メイドたちに苦笑が浮かぶ。もつと言えば、交流こそ少ないが、帝国のアダマンタイト級『銀糸鳥』の姿も商店街等で見られるし、『朱の雫』も同様。現状、彼らまで借り出す必要がある程の大事が起きていない為、全体的に暇なのだ。

「成程。と、いうことは、目的はそちら二人の武器の見繕いか？」

「はい。こちらが、帝国より利用を許可されたモンスター素材のリストになります」

「よろしく」

「なるべく軽いのがいい」

「まあ、忍者なのだし、そうだろうな。では、まず大工房に行こうか」
二人の軽口に気安く応じ、モモンガも腰を上げる。

「いえ、それなら私たちだけでも」

「いや、私が見たいんだよ。彼らの働きぶりを、な」

笑い、彼女たちと共に工房へ。そこには、やや驚きの先客の姿も。

「ええつと、その、変……………じゃ、ない？」

「全然！似合ってるって、ツアレ！」

「けど、本当に私でよかったの？」

「ツアレが一番攻撃を受ける立場であるからな。吾輩たちからの感謝の気持ちである」

「あまり謙遜し過ぎない方がいい。君がいたからこそ、彼らも生還出

来たのだからな」

紫色を基調とした竜皮を用いた、軍服を思わせる装備。それを纏うのは、銀級の少女で……………

(……………うっそだあ)

鋼鉄の銃槍を……………華奢な腕で振るえるとは思えない、厳つい武器を背負っていたのだ。それはもう、見事に度肝を抜かれた。それは背後の『蒼の薔薇』の面々も同じようであり、双子忍者も目を瞬かせている。が、それは相手側も同じよう、来訪者たちに気付くと共に凍り付く。

「……………蒼の、薔薇か」

「……………お久し振りです、ペシユリアン殿。お変わりないようで」

「そちらこそ。メンバーも増えているようだな」

「はい。先の戦いの後、イジヤニーヤから」

「ほう……………」

驚きを始めとする感情をその目に宿し、無愛想な剣士が双子を見つめる。

「ペシユリアン殿は、何故こちらに？」

「稼ぎと、例の試験飛行への参加申請で。彼らとは、依頼帰りに偶然、な」

すっかり委縮している五人へと視線を移せば、より一層縮こまってしまう。

「えっと、あの、その……………」

「ふむ。ところで、素朴な疑問なのだが」

モモンガの興味が、軍服のようにも見える中型鳥竜種モンスターの装備に向く。

「その装備には、どのような効果があるのかね？」

「攻撃力と体力の増強と、炎属性の増強だそうです。そん、それで、店売りの装備よりもツアレに合ってるんじゃないか、って思っ、俺たちで金を出し合っ、加工して貰ったんです。見ての通り、これだけデカイ武器担いでちゃあ、回避するより盾使う方が早いんで」

「成程。いいチームじゃないか」

心からの称賛だった。先程の会話から察するに、彼女がメインタンクとして活躍して、彼らへの被害を食い止めたのだろう。その働きに対し、仲間たちで考え、出来得る限りの形で報いるその姿勢は、人として素晴らしいものであるといえよう。

だが、同時に少々の疑問もあつた。

「ところで、イビルアイ。確か、小型鳥竜の素材は武器に用いられていた、と訊いているが」

「あの質感は、恐らく中型のドスジャギイだな。恐らくだが、お前たちが戦ったのは西部の、王国領内の個体だろう？ ほぼ全員私服であるところを見るに、かなりの手練れだったはずだ」

「そ、そこまでわかるのであるか？」

「中型のドス鳥竜ともなると、群れを率いる関係から危険性が跳ね上がるからな。お前たち銀級の冒険者だけであろうと、小型鳥竜の、特筆すべき能力を持たないジャギイの群れ相手ですこまでの損耗はするまい。となると考えられるのは、それらより数段上の『狗竜』ドスジャギイとの接敵、ということになる」

小型鳥竜の討伐例は豊富でも、中型になると一気に減る。

これは、アダマントタイト級を始めとする上位冒険者たちの多くは、中型鳥竜が確認されない限りはこれらの依頼が回されないことが最大の原因である。駆け出し冒険者たちは、主に小型鳥竜の討伐依頼などで日銭を稼ぐのだが、時折そこに中型鳥竜が混ざり、死者を出す事態に発展してしまう。対し、確認の報告が上がる頃にはその多くが人里離れた場所まで退散しているなどして緊急性が失せ、上位冒険者たちに回すような依頼ではなくなる人が多いのだ。このため、中型鳥竜の討伐に関しては、熟練のワーカーの方が達成しやすいのだ。

「中型鳥竜は群れを率いるせいで、私たちも手を焼かされる。それもあって、ドス鳥竜と呼ぶ群れの長たちの討伐例は大型モンスター並に少なくて、その素材もあまり武具に使われないんだ」

「成程。それでか」

「他にも、上質な鉱物を使えたお陰で、より性能を引き出すことが出来たのかもしれないな」

その言葉と共に現れたのは、大工房のオーナーを務めるセバス。

「しっかりと完成したようで、何よりです」

「あ、ありがとうございます！」

「いえいえ。話は変わりますが、皆様の損傷した武器の方を、本店で取り扱っている武器と交換させていただいてもよろしいでしょうか？修理を依頼されていたようですが、あれでは直すよりその方が安く、且つ早いでしょう」

「ですが、私たちは今、彼女の装備の刷新でお金が……」

「存じ上げております。ですので、交換という形を取らせていただきたく思っております」

躊躇い気味の五人と一人の傍らで、モモンガが助け船を出す。

「もし余っているのなら、の話だが、鳥竜の皮や牙を売ってはどうか？」

「成程。鳥竜の皮は皮紙の、牙は弾薬の素材として、需要が高いものですね」

「っ！……どうしましょう？」

その手があった！とペテルが頷き、仲間たちと顔を合わせる。

「一択である。幸い、どちらもまだそれなりに残っているのである」

「だな。流石に、これ以上便宜を図って貰うのはちよつと心が痛いぜ」
「ボクも結構あるんで、それを買い取って貰いましょう」

と、真剣な会話が繰り広げられる一方、双子忍者がセバスへと、帝国から貰ったリストを片手に話しかける。性的な好みから外れることもあり、割とぞんざいな対応であるが、セバスは大人の対応でそれを受け流し、リストを受け取る。それを流し読みしてから、セバスは展示されているサンプル品を手で示した。

「それでは、先にどの武器種にするかを決めて頂ければと」

「わかった」

「どれがいいんだろ……」

軽い調子の二人がそこを離れる中、ツアレとルクルット・ボルブを除いた『漆黒の剣』の面々は売却できる鳥竜素材を宿から持ち出すべく、一度大工房を離れる。その姿を見送り、王国では名の知れたワー

カー、ペシユリアンは手持ち無沙汰に店内を回ることを選んだ様子。仮にも、王国北部では特に高い知名度を有するワーカーであるからか、財布には余裕があるようだ。

「……………あれ、いいわね」

「ラクユース？」

その一方、ラクユースの目が怪しい光を宿し、改めて銃槍をまじまじと見つめる。

かつての時間を思い出し……………懐かしむ程度に留め、不死者の王は顔を上げる。

(さて、あの忍者たちはどんな装備を選ぶのかな、つと)

「セバスの旦那あ！色々弄ってたら、なんかまた面白……………とんでもないのが出来ちゃった！」

「む!?!」

「おおー!」

驚愕、感嘆と、それぞれが異なる感情と共に、工房内の一点に視線を向けた。

その後――

ATF. 01―課題探しと

広大な空を、船が進む。

「ひええ…………ツ」

「マジか…………マジでこれで行くのか…………！」

戦々恐々、といった様子 of 冒険者たちが、船から下の大地を見下ろす。

「し、試験飛行、って話だけど…………マジかあ」

「多少のリスクを冒さねば、何も試せませんので」

彼らが向かう先は、王都リ・エステーゼ王国北東――険しい山々の存在するエリアである。

近隣に農村一つないその場所は、法国、並びに若き日のランポツサ王らの共同による、死力を尽くしての調査の甲斐あり、生息モンスターがほぼ判明してこそいるが、立ち入ることを固く禁じられ続けた場でもあった。武具の水準が大幅に向上したとはいえ、長年の恐怖には打ち勝てず、尻込みする者も多い。

「それに、ここはまだ既知に近い領域です。アーグランド評議国への道程より、まだ安全では？」

試験を行うのは、三隻の飛行船。同乗している者は、伝えてこそいないが、評議国行き of 調査、試験飛行への参加が内定している者たちでもある。戦力としての参加から、あくまで経験を積ませるため補助として参加させる者まで幅広く載せているが、この調子では、と一部のメイドが内心嘆く。

ここで求められるのは、未知を恐れる者ではなく、恐れて尚、奮起できる者なのだから。

「ワクワクするけど、やっぱちよっと怖いな」

「そんなもんでいいんだよ、坊主ども。怖い、つてのを忘れちゃった時が、一番危ねえんだ」

比較的若い、低ランク冒険者たちの会話に割り込む、モンスターの

入れ墨をした巨漢。恐ろしい風貌ではあるが、王国中部から北部域を主として活動するベテラン、名をゼロというワーカーは、グランセルという危険地帯と隣接し、また水棲モンスターも多い北部で活動していたこともあり、その恐ろしさはよく知っていた。

そして、恐怖に慣れ、それを忘れた頃の。新人から中堅に上がる、といった頃合いの者たち程、その死亡率が高いことをよく知っていた。目の前で死んでいく、或いは一時肩を並べた後進たちがいつの間にか死んでいた、というのを、嫌という程に経験してきたからこそ、言葉の重みだった。

「……………う、うす」

「ま、深追いのしようがない空なら、その心配もねえだろうがな」

双角を有する竜を彫り込んだスキンヘッドをかき、男は空を見やり「……………チツ！」

盛大に、舌打ち。続けて、緊急事態を告げる鐘がけたたましく鳴り響く。

「右舷、バリスタ準備！——火竜が来た！」

「左の二隻に散開指示！アレの相手は我々がします！」

空の王者——その異名を有する飛竜は、かつてから恐怖の象徴であった。

先の防衛戦に参加した者たちであろうと、その認識は変わらない。中型鳥竜をやや上回る体躯を持つ草食種、アプトノスの成体すら軽々運べるほど高い、飛竜種の中でも突出した飛行能力を有し。高位の炎魔法を超える大火力を平然と放つ上、地上でその体躯を支える両脚の爪には、猛毒を宿す。果ては、アダマントイトでさえ深い傷を穿つことが難しい程の、強靱な鱗まで持つのだから、手に負えない。

「引き付けて、引き付けて……………閃光弾、撃ええッ！」

そんな王者を撃墜するのは、南方の森で確たる勢力を築いた賢者の叡智。

光蟲、と呼ばれる虫を宿した特殊弾頭を放ち次第、一部を除く者たちが目を覆う。次の瞬間には閃光が炸裂し、対閃光用の特殊装備を身に着けていた者たちがその発動を報告。続けて、飛竜の悲鳴が木霊

し、目を庇っていた者たちは、赤い飛竜が遙か低空まで落下していくのを視認する。

「レウスが……………マジかよ」

「油断しないで！」

恐るべき飛竜の墜落到に驚嘆するも、油断が許されることはない。

空の王者は程なくして立て直し、敵意を強め空を、縄張りに浮かぶ謎の物体を睨み上げる。空の如き蒼い瞳に凄烈な敵意と殺意を宿した飛竜は、雄々しい咆哮と共に力強く羽搏き、一気に高度を上げる。空の王者の異名に違わぬ飛行能力を前に、飛行船で逃げ切るのは至難の業だ。

「速……………っ、クソが！」

「弾を切り替えて、迎撃準備！」

「戦わねえのはさっさと逃げな！」

飛来する火竜のブレスは、竜王国の技術の粋を集めた飛行船を破壊することは出来ないが、着弾の衝撃は船体を激しく揺らし、不慣れな者たちにたたらを踏ませる。バリスタに着いていた者たちはそれにしがみつきやり過ごせたが、そうでない者にはすっかり怯えてしまった者もあり、船上は混沌とした様相を呈している。

「落ち、落ちる!? 落ちちまうッ！」

「しつかり掴まってる！ 第一、そんなことは最初っから言われてんだろ！」

怯える者の大部分は、比較的低ランクの冒険者。白金級以上の者たちは、改めてこの船旅の危険を再確認し、噛み締め、その上で現状打破のために動く。停滞こそが、最も危険であると知る者たちは、攻撃が届かぬ者はバリスタを使う、或いはバリスタに着く者のカバーの為に動き、遠距離武器を持つ者はそれを広げ、飛来する火竜を睨み返す。

「わ、私たちに、出来ることはありませんか!？」

『漆黒の剣』か。なら、お前と金髪の嬢ちゃんは盾構えろ！ そっちの二人は攻撃に専念で、デカイのは何かあったらすぐ回復魔法だ！ お前から二人は死なねえことを第一に！ いいな！」

『クラルグラ』の長が指示を飛ばし、弓へとピンを叩き込む。

意が完全にこちらから逸れたことを確認。

「はあー……大丈夫です。二体とも、空で取っ組み合っつてこつちを気にしてません」

グロツキー気味の報告が操舵室に届けば、緊急時の備えとして乗っていたナーベラルが指示。

「出力を落としてください。それと、今後安全の観点から、最大出力での運用は控えましょう」

「二」「異議なし」「三」

船内の惨状を想像し、頭痛を覚えるナーベラルだが、やるべきことはまだ山積みだ。

「予定の航行ルートに戻ります。場所は——」

「それなら、ここがいいかと」

「いえ、そこだと——」

複数の意見を取り入れ、より確実に合流を果たすべく、待機地点を決める。

飛行船がゆっくりと動き始める中、内部に避難した者たちは——

「うえっぶ……きつつ」

「吐くなら余所で頼むぞ？マジで」

「ふうー……ちよいと風に当たってくるわ」

先程ので船酔いした者たちは、それぞれ助け合いながら立ち上がり

「リオレウスのブレスに、耐えてたな」

「ああ。すげえわ、こいつは」

「ライゼクスの乱入もあったとはいえ、逃げきれた訳だしな……各国が推す訳だ」

冷静さを取り戻し、船の強度を評価する者。事実、砂上船という、ちよつとした移動要塞を小型化して浮かべているのだから、その強度は折り紙付き。更には、ナザリックが有していたリアルの世界の、この世界と異なり魔法が存在しない分、科学技術が発展した世界の知識が齎されたことで、劇的な変化を遂げているのだ。

洗えば改善点も多く発見されるだろうが、優れていることに違いは無いのだ。

「逃げるにしても迎え撃つにしても、手間取るのが問題か」

「バリスタの扱いなんか、特に重点的に周知しておく必要があるだろうだ」

「あとは、あのアホみたいな加速への対処か」

「あれはダメだ、これだけは直談判するぞ」

「「「異議なし！」」」

またある者たちは、顔を突き合わせ、現状の問題と、自分たちに出る解決策を模索する。

それぞれの振る舞いに、ナザリック側の採点役であるメイドたちが密かに評価を下し、本番での選出に向けて動き始める。傾向としては、やはり過酷な経験をより多く積んだ上位等級の冒険者やワーカーの方が好ましい者が多く、逆に王国外の、金級以上上位等級未満の者ほど、半端な慣れが祟ってか、好ましくない反応の者が多い。

これは、やはり場数がモノを言うのだろう。上位等級冒険者ともなれば、大型飛竜相手の撃退戦や時間稼ぎの経験も出てくるため、常識外れや理解の埒外への耐性もつく。対し、その域には到達していないが、程々に経験を積んだ、程度の者は、常識外れや理解の埒外との遭遇も少なく、実感が薄いのだ。

だから、知識と現実のギャップにやられる。ここで対応できなかった者たちが、死んでいく。

「やはり、大型のモンスターは恐ろしいですね……………」

「だが、ここにはあの街以上の設備がある。なにも出来ねえ、つてことが無いのはいいことだ」

そして、王国の冒険者、ワーカー。砦蟹の討伐戦に参加した者も多く、常識も何も、既に無意味と化している者が多い。中でも、エ・ラントルを中心に活動していた者は、鎧鋼龍の接近による異常気象から恐暴竜の襲撃まで、嫌という程異常な事態を味わっている分、肝の据わり方が段違いなのだ。

「本番は寒冷地、つてなると、もっとおつかねえんだろうなあ……………」

「グランセルは実際おつかねえぞ？浅いところでも、ポポの群れに白いのが混じってたり……………」

北部での活動経験があるワーカーの語りに、南部の若手たちが戦々恐々、熟練も冷や汗を零す。

「……………思っていた以上に、タフですね」

「けど、タフなだけではダメね。そこも含めて、しっかり見極めないと」

そんな彼らの中から、評議国行き試験飛行本番……………つまり、最も身近な未知へと飛び込む者の選定を行うメイドたちは、それらの細かな会話からそれぞれの意欲を探り、加点減点を続ける。司銀龍の存在から調査が難しい地であることもあり、単純な実力、意欲も大事であるが、不測の事態への対応力もまた強く求められるのだ。

「二人ともー…そろそろ外に出るわよー!」

「はーい!」

そんな彼女たちは、同時に飛行船の運行に携わる者でもある。

採点も程々に切り上げ、甲板からの周囲確認を始めとする諸業務に移るべく、武器を背負い駆け出していく。古龍の脅威が失せた今、飛竜たちも再び活動を始めており、油断もしてられない状況にある為、武装メイド——戦闘メイド『プレアデス』に次ぐ立場として、便宜的に名付けられた——たちは、油断なく甲板から外部を注視する。

その様子を知らぬ者の一人は、彼らが何れ至るべき極寒の地にて白い吐息を零す。

「——ソロソロ、テスト空域二到達シテイル頃デシヨウカ」

「心配か?」

アーグランド評議国、南西部——グランセルから離れた場所を、モモンガとコキユートス含む少人数が探索している。これは、飛行船の移動ルートを決定する為の予備調査であり、同時にグランセルを離れたエリアの生態系調査も兼ねている。寒冷環境に強いコキユートスに、メイドから数名と現地の実力者数名など、かなり本格的なメンバーとなっている。

「少々。無論、彼女たちガ弱い、ナドト毎ル気ハゴザイマセヌガ」

「それくらいわかっているさ。それに、心配すること自体は、悪いこと

じゃないぞ」

穏やかな天候の中、辺境三大危険地帯を離れた領域を、事細かに調査する一行の進みは、非常にゆつたりとしている。現地の実力者と共にモモンガ、コキユートスが周囲を警戒し、その間にメイドたちが周辺地形を詳細にメモする。グランセルを迂回する都合、この一帯が飛行船の通行エリアとなることがほぼ確実であるため、その分念入りに調べ、情報を纏めているのだ。

「あれ？この果実はなんでしよう？」

「それは知らないな……だが、なんだ？食い荒されているな」

「このサイズでこの食い荒し方なら虫だろうが……ふむ？」

メイドの一人がとある小さな果実に気付き、それを取る。それを見せられた、評議国のゴブリンが首を傾げ、他の者たちに意見を求める。その中で、比較的無事な果実を一つ採取したメイドは、モモンガへと駆け寄り、それを手渡す。手渡された果実を魔法で調べたモモンガは、そのあまりに簡素な名に苦笑を零す。

「龍殺しの実って、そのまんまだな……」

「……ヴァイシオン様が来られなくて正解でしたね」

評議国有数の実力者、竜騎士が苦笑交じりに零し、他の評議国の者も同意を示す。

「そちらは持ち帰り、モモンガ殿らの側で調べていただきたい」

「承知した。ドラゴンからすれば、そもそも近寄りたくない代物だろうからな」

と、他の無事な実をメイドたちが回収する中で、モモンガは竜皮紙とでも言うべき、烏竜の皮を加工した皮紙を取り出し、龍殺しの実を置く。そのまま、皮紙で包み込むようにして身を潰し、少ししてからもう一度開く。そこにあるのは、特に汚れのない、見たことのない魔法を記した巻物^{スクロール}。

「二応、出来るのか……」

森の賢王らが発見した、全く新しく、簡単な作成手法。その成功に、確かな喜びが胸を満たす。

「もう少し調査を続けてくれ。もしかしたら、他にも同じ実があるか

もしれん」

「はい！」

新たな魔法ということ、数を確保するに越したことはない。その判断の下、寒冷地体の調査は一時の小休止を見せた。

AFT. 02―北国にて

粉雪が舞う中を、二種のモンスター混成による一団が進む。

「巨獣が混ざっている。不用意に近づくなよ」

非常に大きな、反り返った牙を持つ大型の草食種モンスター、ポポの群れ。暗い体毛を持つ草食種の群れに、純白の毛並みを持つモンスターが混ざっているのを確認し、評議国のオーガが手で制す。やや遅れて、見上げるような巨躯を有する牙獣種モンスターが現れ、モモンガらの度肝を抜く。

「でっ、か……………」

『巨獣』ガムートです。縄張り意識が強い奴でして……………急いで離れましょう」

象、或いはマンモスを思わせる巨大牙獣、ガムート。寒冷地に生息するモンスターの中でも指折りの巨躯を有するモンスターであり、その気性の荒さを知る評議国の者たちに促され、認識されないよう、急ぎその場を離れる。寒冷地に生息する、草食モンスターということもあり、その縄張り意識が強いガムートは、評議国内でもよく知られる危険なモンスターだ。

「二目デ、危険ト判リマスナ」

「事実、飢えた奴らはおつかないぞ。酷いときは、村一つ食い散らかされる」

「え、あのモンスター、まさか」

「木造家屋だけだと、本当に何も残らん」

「あ、そっちな」

北地の恐ろしさを実感するモモンガたちは、南へ南へと歩を進めている。

「しかし、飛竜の影があまりないんだな」

「元々、確認されている飛竜も、あまり飛行が得意という訳ではありませんからね」

と、竜騎士が評議国内で流通する小冊子を手渡し、モモンガに読むよう促す。

「ふむ」

マジックアイテムの翻訳を使うことなく、モンスター名に目を通す。何度も何度も目の当たりにしたおかげで、文章となると流石に難しいが、名前くらいならば翻訳抜きでも読めるようになってる。加えて、悪筆や欠損による誤読を避ける為、モンスターごとのアイコンが存在しているのも、こういう時には役に立つ。

「……………ティガレックスに近い骨格の飛竜が多いんだな」

「ええ。そのタイプは得てして、飛行能力より地上での運動能力が高いんです」

空を見上げれば、成程。確かに、飛行するモンスターの姿は殆ど見られない。

そういつた意味では、空路は大分安全にも思える。

「もうすぐ海水域に着くぞ。あそこは下も安心できねえから、気を付けな」

「いや、そろそろ撤収しよう。空路の下見という意味であれば、ここままで十分だろう」

そう口にして、すっかり凍り付いた海岸から先へと赤い瞳を向ける。

「それに、白海竜を倒したという、暴鋸竜とやらも怖いからな」

『双界の覇者』では、『三界の帝王』相手は荷が重すぎますね……………」

空陸海を制するとすら評されるほどの、場所を選ばぬ運動能力に加え、竜殺しの力を有することから、ドラゴンの大敵でもあるモンスター。内陸深くまで現れることは皆無だが、その実力は広く知られており、ガムート諸共ポポの群れを喰らい尽くしたという古い記録まで残っている程だ。

そして、最も恐ろしいのは、暴鋸竜自身が海岸部に陣取っているだけで、別に内陸域での活動に不自由がある訳ではないということ。流石に土や岩盤を潜航できるだけの能力は有していないが、空陸での活動能力の高さだけでも十分過ぎる程に凶悪。更には、その凶暴さも併せ、海岸域に近い地では猛烈に警戒されているモンスターでもある。「承知しました、と言いたいところですが、空路の選定には情報が不足

しているのでは？」

「いや、今回調べたルートでいいだろう。地理的条件も悪くはない筈だ」

「メイドたちの地図作成が終わり次第、転移魔法により一行は評議国内の都市へと戻る。」

粉雪が舞い、分厚い防寒着を纏う亜人たちが闊歩する首都『ドラゴンブレス』。個人の領有地ではなく、国家に帰属する土地であり、その規模はスヴェリアーⅡマイロンシルク領の最大都市『ドラゴンハート』と並ぶ。近頃はモンスター被害が一時落ち着いていたお陰で、随分と活気が戻っている。

「では、我々はこれで」

「今回は助かった。それと、これを」

作成された地図の写しを渡し、現地の者たちと別れるモモンガ一行。

その行先は、今後に関する調整を行うべき相手の集う場所——
——評議会だ。

（現状、確認中の諸事項は——）

打ち合わせに向け、脳内で一通り情報を整理したモモンガは、意を決して評議会へ。

亜人種それぞれから選出された評議員たちと、最高戦力たる永久評議員たち五名。かつて、極寒と化した大地で滅びに瀕した者たちが、手を取り合い生存圏を確立した国ということもあり、種族間の結びつきは強固そのもの。その筆頭たる彼らは、種族の代表であると同時に、一つの国として纏まった者たちすべての命を預かる身でもあるのだ。

「よく来てくれたね、モモンガ」

「……………そちらこそ。まさかとは思いますが、待っていてくれたのか？」

勢揃いの亜人とドラゴンたちに、思わずそう零せば、ツアーが柔和に笑う。

「キミたちが起こし得る変化には、それだけの価値がある、ということさ」

「ああ。漸く外部と繋がりを持てるとなると、私も感慨深いよ」

スヴェリアーの言葉は、この国の大黒柱であることもあり、特に重みを感じさせるもの。

「元より、我らは気軽に動けぬ身の上故な。加えて、他国との往来が転移以外で叶うのであれば、それは民の命を預かる身としても、一個人としても嬉しい限りだ。外の物は、我らにとってもよい刺激となる」
「そう、特に貴殿らが持ち込んだバリスタとやら。あれはいいな」

古龍の監視対象以上に、大柄且つ国家の最大戦力である故、動けぬ竜王の言葉に続き、モモンガたちが格安で販売という形で供与したバリスタを絶賛するのは、ゴブリンの評議員。人間よりは強いといえ、小柄故に戦闘であまり役に立てぬ彼らからすれば、固定兵装ながら高い威力を有するバリスタは、非常にありがたい物なのだ。

「それはよかった。今、他にも様々な発明が続いているんだ、期待していて欲しい」

「それはまた、興味深いな」

四肢も翼もないワーム・ドラゴンの竜王、ザラジルカリアーナへイウントが目を輝かせれば、他の評議員たちから若干の苦笑が零れる。生来の肉体への反抗心から、ツアーたち同様に遠隔操作可能な鎧を生み出すまでに至った真なる竜王は、長く四肢を持たなかつた反動かそういつた物に目が無い様子で、初対面でもわかるであろう程に声を弾ませている。

「いずれは、そちらに行きたいものだが」

「私はいつでも歓迎するさ」

「まずは、領内がある程度安定してから、ですがね」

「そこが一番の問題よなあ」

金剛石の如き美しいドラゴンと、黒曜石に似た輝きを有するドラゴンとが目を伏せ、嘆息。

永久評議員の地位にある真なる竜王たちは、等しく国内に領地を有する。これは、そのまま彼らが庇護すべき領域であり、故にこそ永久評議員の行動には、相応の重責が付きまとう。ツアーの処分が重くなつた原因の一つであり、それだけ重大な立場である証左でもある。

「そこは、私たちの尽力次第だろう」

「同時に、我々次第でもある、と。重責だな」

「君たちならば大丈夫さ」

静かに笑い合うツアーとモモンガだが、すぐに本題へと戻る。

「さて、それで空路開拓の件に関してだが」

「我が領『ドラゴンハート』の港だが、我らなりに、と前置きする必要はあるが、設備も相応の物を用意したつもりだ。余裕があるようであれば、軽くでも目を通して貰いたい。受け入れるからには、最善を尽くしたいのだ」

「承知した。では、この会議が終わってから、回らせて貰おう」

「感謝する」

評議国の柱たる竜王、スヴェリアーが領けば、そこからは各種族の評議員たちとの調整に入る。

調整は滞りなく進み、陽が落ちる前には終了の運びとなる。

終わり次第、モモンガたち一行は、スヴェリアー直轄の都市『ドラゴンハート』へと転移した。

*

身震いと共に、ドラゴンが起き上がる。

その身に纏う、深い青色のクリスタルを振り落とし、大きく翼を広げ、大地から飛び立つのだ。

「……………」

氷龍の飛翔を、広くグランセル氷原を監視していたニグレドが視認する。

「アルベド、急ぎの報告よ——氷龍が飛び去った」

『なんですって!?!』

「追跡するから、詳しくは後で報せる」

淡々と告げ次第、報告を切り上げ、使える全ての手段を使う。

情報系特化の彼女ならば、かつての銀龍のような瞬間的な超加速でもされない限り、追跡自体は可能。事実、彼女は天翔ける氷龍をしっかりと追跡しており、高位階情報系魔法を惜しみなく行使しているお陰で、ただの転移魔法程度で振り切られることなく——高位階の、

情報系の魔法を使える者が少ないためか、そちらの警戒は薄いらしい
——その行先まで特定していた。

「……な、ん……………!?!」

まず目に飛び込むのは、超巨大という他ない水晶のような結晶体の数々。淡い虹色に輝くそれらも衝撃的であるが、その下に広がる光景もまた衝撃的の一言。森林、砂漠に近い荒地、謎の黄色いガスに包まれた地底への道から、灼熱の溶岩が見える洞窟、粉雪が散る極寒地帯と、まずありえないような、異様な光景が狭い領域に広がっているのだ。ナザリック内のように、複数層に別れるでもなければ、何かしらのギルド拠点型ダンジョンであったような名残も見られない、異様という他ない土地だった。

「二体、何が……………つ、しまった!」

そして、驚愕している間に、何故か魔法的な追跡が効果を発揮しなくなり、冰龍を見失う。

どうすることも出来ず、追跡を断念したニグレドは開き直り、未知の土地の調査を選択。

(まずは、あの巨大結晶体を)

シャルティアがいれば、宿る絶大なエネルギーを感知していただろう。その超巨大結晶体の正体とは、即ち古龍の生体エネルギーの凝縮した姿。龍脈炭より更に高純度な『龍結晶』は、この『聖域』の地で熾烈極まる生存競争の果てに、或いはこの世界に招来された龍たちが命を終えたことで大地に還った力の一端。

それが満ちるこの大地に生きる者たちは、実に恐ろしい。

「……………うそ、でしょう……………」

個々が、リ・エスティーゼの肥沃な大地ですら滅多に見られぬ程に、精強に育っている。

エイヴァーシャー、ローブル、グランセルの三大危険地帯でも上位に位置するレベルの存在が、悠然と闊歩する地獄。龍結晶という形で凝縮される過程で流出するエネルギーが、モンスターたちをより強靱に育て上げるこの大地こそ、イビルアイが恐れ慄き、スレインがその動向を強く睨む『歴戦王』たちの故郷。

それこそが、世界の変化の元凶の一角、『古龍の王』が座す、聖域なのだ。

「すこ、少しでも、情報を……………」

メモを用意し、手あたり次第に情報を書き殴る。豊かな水源、瑞々しい森林、荒涼たる大地に、灼熱の溶岩地帯、薄氷舞う極寒地帯、険しい峻嶒地帯。それらと共に乱立する龍結晶の中に、一際小高い、山のように連なり、先端が赫く染まっている結晶があることに気付いたニグレドは、俯瞰視点での調査の為の高度より数倍高いそこを探るべく、視点を上げる。

(この赤色、どこかで……………いえ、そんなまさか)

「……………ツ?!?!」

己の心配を杞憂だと、力なく笑い飛ばしたニグレドは、目の当たりにする。

「あの、時の……………」

「姉さん！」

完全武装のアルベド、ルベドが転がり込むが、ニグレドは構わず手元の皮紙に筆を走らせる。

(銀色、特徴的な翼、フォルム……………間違いない、あの時の！)

大柄なアプトノスの肉を貪り喰らう、銀翼の古龍。彼女たちしか知らない、謎の存在。

(肉食?それに、あの大型モンスターがいるということは……………ここまで持ち運んだの!?)

「姉さん、そいつは」

「後にして」

可能な限り、視覚的に判る情報を集めている内に、食事を終えた銀龍が飛翔する。文字通り一瞬のうちにトツプスピードになった歴戦王古龍は、ニグレドの全能力を賭した追跡すら間に合わぬ程の速度で飛翔し、姿を消した。流石のルベドも、その瞬間的な加速能力には言葉を失い、ニグレドが操作していた魔鏡を呆然と見つめている。

「……………逃がした。けど、少しは情報が増えたわね」

そう口にして、ニグレドは飛翔した影より剥離、落下した物を追う。

地上に到達と共に、盛大に土砂を撒き上げたソレに、背後の二人が身構える。少ししてから、憤怒の咆哮と共に落下物が殴り飛ばされ、どこことなく見覚えがあるような顔のモンスターが怒り狂い、空へと吼え叫ぶ。

「……………ゴーレム?」

この辺境に到来していない牙獣種モンスターは、見るも無残に変わり果てた花畑の只中、悲壮を感じさせる憤怒と怨嗟の咆哮を轟かせる。だが、彼女たちが目を見張ったのは、『剛纏獣』ガランゴルの足元で忙しなく動き回る、小さな影。アウラとマーレどころか、エクレア並に小さな存在だが、真に驚くべきはそこではなく

「獣人!」

「ナザリツクにはいない種族ね……………接触してみたいところ、だけど」
荒々しい咆哮と共に現れるのは、剛纏獣の咆哮で気分を害したらしき轟竜。彼の牙獣の住処を、彼にとって気分の安らぐ花畑を作り上げた可愛らしい獣人を害さんとする外敵に対し、聖域南方に広がる領域の一つ、花畑の主は、欠片も容赦をしない。

「グッ、ルアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

力強く、それでいて足元の獣人を蹴散らさぬよう飛び出した牙獣の剛腕は、たった一撃で轟竜の頭蓋を破碎し、命を刈り取る。そこから続く執拗な攻撃は、その重殻を呆気なく破壊し、肉を潰し、骨を砕き、その身を原形を留めぬ程に損壊。その光景を目の当たりにした三人は、心を一つにして

「……………もうしばらく、様子を見た方がいいでしょうね」

「賛成ね。あのモンスターもよくわからないし」

「けど、存外心優しい……………の、かも」

川へと轟竜だった肉塊を投げ捨てる獣人と、彼らと共に荒れ果てた花畑をどうにかしようとする奮闘する大型モンスターとを見比べ、ルベドがそう零す。外部の、一定の知性が期待できる存在を発見したものの、場所が場所だけに、前途は多難である。

AFT. 03—北国の窮地

緊急会議——ニグレドの招集に、ナザリック全体が応じ、集まっていた。

「まず、氷龍がグランセルを離れました」

成程、緊急事態だ。皆が理解し、表情を険しく変える。

「となると、司銀龍による襲撃が発生するか」

「恐らくハ。心ナシカ、寒気ガ和ライダータ感ジタノハ、ソレガ原因ダツ
タヨウデスナ」

「搭載装備を見直しましょう。それと、輸送する品目も」

「……………そちらも重要ですが、氷龍を追跡したところ、更に重大な発見
がありました」

ニグレドが使える限りの情報対策魔法を用い、先日発見した地を映し出す。

『……………っ』

「なあ!？」

「そんな馬鹿な!？」

あまりに異様な光景——だが、生命に鋭敏なアンデッドたちは、別の意味で愕然となる。

「あの結晶……………いや、この土地全域に!」

「このエネルギー量は、一体……………土地そのものが生きている、とは違
うのだろうか、これは」

大地を満たす、莫大なエネルギー。その恩恵を十全に受け取り生き
る、聖域のモンスターたち。

視認できる限りでも、恐ろしい程に精強な個体が揃う領域に、誰も
が息を飲んだ。

「……………地獄?」

「酷いレベルで釣り合いが取れている、のだろうか」

モンスターたちの激突一つで見ても、かなり違う。単純な力押しで
はなく、時に感嘆の息が出る程に高度な身体技術を交えた戦闘であ
り、それだけ知能が発達していることを示唆する。そして、それだけ

ならばまだしも、更に看過できぬ技術まで用いているのが、この地のモンスター。

「……………今、傷が治ったわね」

「回復魔法……………まさかとは思いますが」

モンスターが、魔法を使う……………ユグドラシルでは普通にあつたことだ。

だというのに、絶望感が凄まじい。

「はっはっはっは……………あ、抑制された」

(いや、傷の程度から見て、恐らくそこまで高位階じゃないしな)

冷静な思考で一旦落ち着き、ニグレドへと目を向ける。

「確かに、これは重大な発見だ。詳細な立地は判るか？」

「いえ、これ以上に重大な報告があるので、先にそちらを」

と、彼女が映像を操作し……………誰もが立ち上がった。

「そんな馬鹿な！」

「あの地獄と同じ場所だろ!?!なんでこんな、ちっこいのが生きてんだよ！」

そう、小さな……………黄色いふわふわな毛並みを持つ、可愛い獣人たち。

「馬鹿な……………これ程の知恵を持ちながら、何故こんな危険な場所に!?!」

「それだけの益があるのか……………はたまた、別の理由か」

映し出されるのは、洞窟での一幕。顔を隠すように毛皮を纏う獣人、ヤマネコに近い特徴を持つ獣人と、物々交換を行う様子が見取れることから、コミュニケーション能力は十分にあると判る。それが判るからこそ、デミウルゴスは危険を冒すことを理解できず、パンドラは何を以てそれを選択したのか、判断材料の不足に呻く。

「この黄色い獣人については、更に驚くべきことがあります」

ニグレドが続けて映し出したのは、昨日荒れ果てた花畑の一角。

「……………なっ」

「成程。あれだけ屈強なモンスターと共生できているのなら、あちらの方が安全でしょうね」

屈強にして巨大な牙獣が、静かに寝息を立てる。獣人、ウルキーたちが添えたと思しき花々との対比が、その尋常でない巨軀を物語り、身を隠さず堂々と休眠を取る姿が、その巨軀に見合う実力の持ち主であることを示す。獣人たちが恐れる様子を見せない辺り、相当長い付き合いなのかもしれない。

「あのモンスターですが、轟竜を容易く屠るだけの力があります」

「まあ、見るからにゴリツゴリのパワータイプでありんしょうねえ」

「ちっちゃいの……可愛い、かも」

「先に断っておきますが、ローブルが可愛いレベルの危険地帯ですからね？」

ニグレドが緊急事態として招集をかけた理由が、それだ。

「成程。旨味は多いだろうが、リスクも群を抜いて絶大、と」

「……………はい」

暫し思案するが、良案も何も浮かびはしない。

「これだけ異様であると、未知の龍が関与している可能性もある。調査については、保留だな」

一番は、未知の龍の関与。それ以外にも、位階魔法を使えるモンスターを相手取るのは、現状の彼らでは少々危ういという判断のもとだ。低く見積もっても危険地帯の上位陣に並ぶであろう戦闘力を有する個体ばかりであることも一因で、まだ危険地帯での安全な活動も難しい彼らを送り込むのは、死ぬと言うようなものだろう。

「当面は監視に留めよ。それと、詳細な立地だが」

「大砂漠の南端より、更に少し先辺りです。周辺ですが、大分離れた場所に幾つか国があります」

「……………竜王国に伝えるべきでしょうか？」

「現状は、首脳陣と共有するに留めるべきかと。それに、未確認の問題も幾つか」

ニグレドが視点を上げ、先程口にした国家を一望できる高度まで上げる。

「まず、大砂漠の流れ。竜王国から直接となりますと、これに逆らう必要が出ます」

「そうならば速度も落ち、危険も増える、か」

「付け加えますと、巨大龍たちとの接触事故のリスクが跳ね上がりま
すね」

彼方の大砂漠が爆ぜ、巨大な、それはそれは巨大な龍が姿を現す。
モモンガが知る霊山龍が可愛く思えるほどに、巨大な峯山龍だっ
た。

「……………うん、飛行船が運用できるようになってからにしよう。衝突
事故じゃ済まされない」

大砂漠の砂流に逆らえば、龍との衝突事故。逆らわねば遠回りと、
陸路は無謀だろう。

「しかし……………よく無事ですね」

「まだ長期的な監視は出来ていませんので、推測となりますが」

無言で促され、ニグレドはごく短い間に実感した事実をもとに立て
た推測を述べる。

「生存競争が熾烈を極めているので、そもそも生きて出られる個体の
方が稀有なのかと」

全員が沈黙する中、聖域の一角で激烈極まる爆発が巻き起こる。桁
違いに広い範囲を揺るがす、その極大爆発が巻き起こした煙から飛び
出す、全身に白棘を纏う見覚えのある古龍の負傷具合を目の当たりに
して、最前線組の顔から表情が消え失せる。かなりの高位階魔法によ
り、丸々消し飛んだ右前脚を再生した古龍は、腹立たしそうに喉を鳴
らし、彼方へと飛び去る。

あくまで同種、と頭の片隅で必死に反芻する彼らが、爆発が起きた
先へと視線をやり

「……………砕竜？それにしても、色が……………」

立ち去る影が、紺藍と呼ぶには少々異なることに気付き、パンドラ
が目を細める。

「ニグレド、監視は頼みましたよ」

「承知しております」

「それと、くれぐれも深入りはしないように」

「……………ハッ」

位階魔法をどの程度習得しているか、ということも警戒対象であるが、万一ニグレドと同レベルの情報系魔法を使えるモンスターが存在しようものなら、それこそ一大事だ。加えらると、攻撃魔法にしても通常攻撃とは異なる物、ユグドラシルに無い物が存在する可能性から、警戒しても足りない、ということはずなない。

そうなると、各国への伝達についても、見直す必要があるだろう。

「とりあえず、あの地については、極秘扱いで首脳陣に通達だな」

極秘扱いなのは、変に不安を煽らないため。大きな節目を迎えつつある現状、尚更だ。

「しかし、周辺国家との接触はよろしいのですか？」

「多くのプロジェクトを動かしている今、遠方に手を伸ばす余裕に乏しい。加えて、転移魔法以外の往復手段がない現状、我々だけで接触するより、他国とも情報を共有してからの接触が最善だろう。特に、あちらの状況はさっぱり判らんだからな」

問題に発展する可能性がある以上、可能な限り出来ることをしておくに越したことはない。

「だが、先も言った通り、この件は極秘とする。いいな」

『ハッ！』

特大の危険であるが、幸いにもまだ直接的な影響は無い。

それ故に、彼らは目先の事態への対処を優先事項と定め、各々が浮かべる最善を提示し合う。

『――』

誰もが魔鏡から目を離れた一瞬。映し出される景色が深淵へと変わり、赤き龍の眼が映る。

今となつては、この広大な大陸のほぼ全てを把握する、歴戦中の歴戦王が、自身の知覚の埒外にある大墳墓の、その内側の一端を視認し、すぐに興味を損なう。かつて、不倶戴天の仇敵と呼ぶに相応しい力を有していた存在への興味があつたようだが、既に力を喪失していることに加えて、それ以外に目を見張るようなモノも無いからか、本当に視線を向けただけで、魔法的な接続の主導権を返還する。

本当に一瞬の出来事に、ニグレドは主導権を奪われたことにすら気

付けない。

「——では、組合を通じ氷龍の不在と、対古龍の防衛戦の可能性を告知します」

評議国に対し、『氷龍』イヴェルカーナの不在による影響は、大きく二つ。

寒気の緩和と、競争相手の消失による迪異種『司銀龍』ハルドメルグによる襲撃の発生だ。

「大工房では、各種迎撃設備の搭載と、弾薬の準備に人員を回したく思っています」

「それと、先の試験で確認された問題点の修正だね。人員の割り振りは任せるよ」

「改修の指揮はデミウルゴス様に一任します。不足があれば、可能な限り早急な連絡を」

「承知しているよ」

迪異種古龍による襲撃発生リスクの激増により、物資支援も含め、幾らか予定を前倒しすることが検討されている。無論、安全第一で、無茶はしないよう念入りに釘は刺したが、過去幾度と繰り返してきたこととはいえ、その戦いが過酷なものであることは疑いようも無い。その負担を軽減できれば、将来的にはより活発な交流も望めるだろうと、彼らも力を入れるのだ。

その交流の先の発展は、ナザリックにとっても莫大な利益となる………というのも一因だが

（最初、見捨てようとしてたのが嘘みたいだな………本当に、皆生き生きとして）

モモンガが笑みの気配を零し、少しして首を横に振り、思考を切り替える。

（さて、評議国はこれまでどう凌いできたのか………ある意味、一番の注目だな）

迪異種古龍のポテンシャルは、嫌という程見せつけられた。

であるならば、それを凌ぎ続けてきた評議国への期待も高まる、というものだ。

「何にせよ、まずは——」

*

アーグランド評議国、南方領のとある都市——
「ッ！」

真なる竜王が目を開き、魔法により戦場となるその地へと転移する。

時を同じくして、地面を覆う石畳が音をたて揺れ動き、まるで水面のように波打つ。

「逃げろ——ッ！」

流体金属が浸透し、液状化した大地を突き破り、強大なる龍が姿を現す。

「ギユオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!!!!」

大地へと浸透した流体金属が、槍となり空高くまで飛翔。それらは再び液状に戻りながら収束、巨大な球体となってから爆散し、街へと降り注ぐ。殺傷より破壊に重点を置いた攻撃は、彼らの個々を敵と見做していないことの証左であり、狙い自体は大雑把であるため、よく見ていれば逃げることは容易い。

「させぬぞッ！」

それに真つ向から対抗するは、エタニティ・ドラゴンロード永凍の竜王が放つ極低温の暴風。液体から固体へと変化させる程の極低温と、粗雑に凝固させたことで脆くなったソレを破碎する程の暴風とが、街を狙った攻撃の大部分を無力化。無数の傷跡を残す、真なる竜王の参戦を受け、司銀龍の目に明確な闘志が宿る。敵と見做すに足る、この世界のドラゴンたちの、頂点の一角——それを知覚した彼の口端が、歓喜を浮かべるように吊り上がる。

「ギユオオオオオオオオオオオオオオッ!!!!!!」

固化し、屑鉄同然となった金属を流体化させ、更には魔法により生み出したソレを収束させる。口元で球状になったソレは、一筋の奔流として解き放たれ、傷だらけの白きドラゴンへと向かう。始原の魔法が引き起こす極低温を収束させたブレスと激突すれば、瞬間的に凝固した金属が砕け、多量の銀片が舞い散る。

「ぬう、あああああああアツ!!!」

体格においては倍以上の差がありながら、出力においては司銀龍が大きく上を行く。

流体金属の凝固より、その奔流が冷気突き抜ける速度が上をいき、オラサーダルクは即迎撃を断念。一際強烈な冷気塊を砲弾の如く撃ち出し、その場を離脱すると共に無数の氷塊を生成、射出。大抵のモンスターに大きなダメージを叩き込めるだけの強度と質量を併せ持つそれらは、しかし流体の刃により切断され、司銀龍を捉えることなく終わる。

「やはり、及ばぬか………ッ!」

体格差という利点を生かそうにも、単純なパワーだけならばとにかく、それ以外にも強大な能力を有する古龍が相手では難しい。特に司銀龍の場合、流体金属を自在に操る性質上、その殺傷能力はピカイチであり、組み伏せたところで即座に息の根を止めねば逆に殺されるのがオチだ。

それを理解しているオラサーダルクの戦い方は、実に巧みだ。

「ギユオオツ、ギユアアアアアアアアツ!!!」

「ええい、そう来るか………!!」

纏う流体金属の量と流速を増し、絶え間なく攪拌することで、冷却速度を減衰させる司銀龍は、同時に大量の流体金属を惜しげもなく攻撃に用いるように。それに対し、オラサーダルクは、凡そ対策無しでは生命活動に支障を来す程の極低温領域を生み出し、流体金属による攻撃を抑制し続けている。急速な無力化が困難な大質量には、強烈な衝撃波を叩き込み炸裂させ、地上は広く分厚い氷で覆い尽くし、不意の強襲に対してもある程度の予兆が判別できるように手を回す。

「………全く、ままならぬものだ」

接近する、共に戦う者たちの気配を感じ、自嘲の笑みを浮かべる。彼単独であれば、ある程度持ち堪えることは出来るが、勝つことは不可能。何より、些細なミス一つで即座に死が確定する程ギリギリの彼に対し、相手は数発貫った程度では到底倒せぬ程のタフネスの持ち主と、とことん不利であることに違いは無い。

仲間が加われば、彼個人の力に制限が加わる反面、ターゲットの分散により死亡率、負傷率は大きく下がる……これまで、集団戦に移行次第真つ先に退場させられてきたせいで、理解は出来ても納得は出来ていない。が、客観的に自身という戦力の重要さを理解している以上、無謀な真似を続ける訳にもいかないと、全力で理性を働かせる。「手間をかけました、ヘイリリアル」

「構わん。だが、やはり格別よな……氷牙竜を下せた我が冷氣でも、このザマよ」

竜騎士が隣に並ぶ中、冷氣が徐々に和らいでいく。司銀龍はどこか白けた様子で分厚くした鎧を解き、苛立ちを隠さず咆哮を轟かせる。大地に浸透した流体金属が激しく沸き立ち、凄烈な爆発を引き起こす。周囲の家屋を消し飛ばしたその一撃を合図に、評議国の戦士たちが大地を蹴った。

AFT. 04―襲撃の銀刃

流れる銀が荒れ狂い、刃となりて万物を引き裂く。

「ギュオオオオオオオオオオオオオオッ!!!」

「させぬわッ!」

局所的な極低温化が銀刃を銀屑へと変えるが、その無駄な精密制御が命取り。

「ヘイリリアルッ!」

「ぐ、お……………っ」

刃の奔流となった流体金属が、瞬間的に展開された冷気の防壁を強引に突破。幾多もの刃が成す奔流は、強靱な鱗を裂き、肉を抉り、巨大なドラゴンへと重傷を叩き込む。複数の臓器に深い損傷を与える凶悪な攻撃は、魔法という理外の治療手段の存在と、相手の生命力を信頼してのもの。一対一の『戦闘』から、不遜にも己の縄張りへと踏み入った矮小な者たちの『蹂躪』へと移り変わった今、対等に戦う上であれば笑い飛ばせた絶対の冷気はただの邪魔でしかない。

「イリススリム、其奴を連れ下がれッ!我が足止めをするッ!」

ザラジルカリアーナーヘイウントの巨軀が迫り、司銀龍のいた大地を大きく破碎。

その肉体は、金剛石の輝きに包まれている。

「私の支援があるからと、迂闊に突っ込むな!」

「言っても無駄であろう!」

ケッセンブルトⅡユークリーリスが始原の魔法により生み出した、黒曜石質の巨大武器の数々へと、オムナードセンスⅡイクルブルスの始原の魔法による強化の輝きが飛来し、包み込む。これが彼らの戦い方であり、個体としてはツアーに及ばぬ力量をカバーしている。ザラジルカリアが切り込み役としての前衛を務め、ケッセンブルトが大質量による攻撃でそれを補助。オムナードセンスは、比較的レアな強化効果の始原の魔法により、両名へと攻防一体のサポートを行うのだ。

「ええい、其奴は我が大敵だというのに……………」

しかし、司銀龍の能力は凶悪無比。薄い守りは容易く裂かれ、強固な守りは幾重もの刃で抉り、削られ、貫かれる。それでいて、本来はある種の制限である流体金属の量を、位階魔法で補うことで文字通り自由自在に攻撃に転用する上、高い知能により魔力切れまで粘ることを許さない。

「……………ッ！」

「こっちだ、司銀龍！」

常に沸き立ち、鋭利な刃となり周囲を切り裂く金属池により、接近は無謀。

取るに足らない低位階魔法であろうと、弓矢であろうと、大操核のある頭への攻撃なら、相応の防護が必要となる。そう、彼にしてみれば、巫人たちは縄張りを侵した外敵であり、同時に視界の邪魔程度の攻撃しかできない癖に、群れるだけ群れ、心躍る闘争の邪魔立てをする。邪魔でしかない、矮小な羽虫同然なのだ。

「ギョルオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！」

「ッ、回避！防御だけはするな！」

！！！！！！

収束した銀色をブレスとして放ち、周囲を薙ぎ払う。非魔法的な防御は容易く、魔法的な防御であろうと弱ければあつという間に貫く流体力の奔流を目晦ましとして、司銀龍は空高くへと飛翔。金属球を生成、炸裂させることで、広範囲に容易く致命傷を与える銀刃をばら撒いたのだ。

「ッ、ええい！」

「させるものかッ！」

ザラジルカリアの始原の魔法による大爆発が、小さな銀刃の雨を吹き飛ばす。同時に、空に在る司銀龍のバランスを崩し、地上の者たちは少々動きを封じられるが、上空の司銀龍に生じた隙を逃す程、真なる竜王は甘くない。

「……………チィッ！」

だが、同時に。司銀龍の知能も極めて高く、その隙を理解しているからこそ、自由落下を選択。

地上への被害から、大規模な攻撃は出来ない。それを理解している

からこそその選択だ。

「そう容易くもいかぬか！」

「だが、侮られたものだ」

遙か上空に現れたのは、ツァインドルクスⅡヴァイシオンの本体。

「精密制御は、何もそちらだけの特権だと思わないことだ」

鎧ではまず使えない程のエネルギーを束ね、大地へと打ち込む。身を翻し回避する司銀龍だが、その進路へと鎧が転移し、その頭へと、始原の魔法を付与した巨槌による一撃を叩き込み、局所的な爆裂により強引に動きを止める。瞬間的に頭部の大操核を守る兜へと纏う金属を集中し、損壊は免れたものの、かなりの量を引き剥がされる。

「ギユオオオ………ッ！」

が、即座に剥がれた分の制御を取り戻し、鎧を破壊。一方で、姿勢制御は間に合わず墜落。

「ハッ！」

その体を、急降下した巨大ドラゴンの強靱な尾が打ち据え、彼方の大地へと叩きつける。続けて始原の魔法で生み出した巨大武器を雨霰の如く、更には先と同じ攻撃を叩き込み、味方に被害が及ばぬ場所ですら特大の爆発を巻き起こす。しかして、命の気配は大して衰えておらず、爆炎が晴れた先に見えるのは、無傷の代わりに金属鎧を喪失した司銀龍。対処法はシンプルで、莫大な量の流体金属を用いて、致命傷となる武器を破壊し、爆発の衝撃を逃し、被害を肩代わりさせたのだ。

「……………大口をたたいてこの結果は、正直しよっぱいなあ」

「いや、だが奴の鎧は剥がれ……………剥が……………」
魔法で生成した金属を纏い、魔力消費を代償とした一時凌ぎの鎧を形成。当然、全身にだ。

「……………魔力は使わせたな」

「流石に複数の同時制御は、まだ実戦で使えるレベルじゃないからねえ……………」

一時とはいえ、角状に発達した大操核を破壊する隙を作った。

その事実には、他ならぬ司銀龍が最も強く歓喜し、同時に残念に思っていた。

「ギユオオ………！」

それほどの存在が、現状取るに足りない者と肩を並べている事実が、何よりも無念だった。

かつて生きてきた世界で、若かりし日に味わった高揚。鍛え抜かれた、個性の塊である戦士たちとの命懸けの駆け引き………生きる力に満ち溢れた時代の、終わりを生きた龍は、その最後の輝きの断片を見出したからこそ、尚更彼らの戦い方を忌避した。技術の発展、普及に伴い画一化され、個性を失った有象無象の集まりとの戦いを想起したことが、その最大の原因だろう。

統率が崩れれば、あつという間に塵殺されるだけの烏合の衆。その程度の存在が、勝ち目のない戦いに果敢に応じ、文字通り命を懸けて自身と相對した者たちにとって代わった事実。それらの手で大地を開拓され、彼にとつての烏合の衆により、竜たちは疎か、若き龍すら滅ぼされていた現実を想起し、「苛立ちを募らせていた。

「ギユオオオオオオオオオッ!!!」

手傷を負わされた事実にははななく、強者たちの戦い方に怒り狂い、鋭く吼え立てる。

その怒りによる視野狭窄の中でも、龍は彼方より飛来する風切り音を察知した。

「ッ！」

尻尾に形成した銀刃が裂いたのは、鋼鉄の矢だった。

「エントマ、助かった」

「ふふん、お礼はお姉ちゃん扱いでいいよお〜」

続けて、声。顔を上げれば、淡く光るようにも見える糸と共に、四つの影が跳び込んでくる。

「ヌウンッ！」

「ッ！」

瞬時に形成した銀刃と、白刃が激突——銀刃が裂かれるや否や、即座に身を翻し、操核を斬られるのを防ぎ、そのまま斬り分かれた刃を炸裂させ、強引に相手にたたらを踏ませる。即座に追撃に転じようとすれば、大操核へと飛来する虫により攻撃の中断を余儀なくさ

れ、斬殺せんと刃を放つも、軽やかに躲される。

「援護します」

続けて、その身を貫く弾丸の感触。懐かしいソレに目を剥き、迪異種古龍は大きく跳び退く。

「……………我ら四名、これより助太刀させていただきます」

「危なくなったら、支援しながら逃げさせて貰うけどね」

「ソノ時ハ、我方殿ヲ務メヨウ」

三人のメイドと、一人の巨蟲。奇しくも、その数は――

「――撃えっ！」

歓喜に水を差す、砲声と風切り音。銀刃と銀槍で全てを叩き落すが、当然苛立ちも募る。

「……………急ぐとは言っていたけど、こうも早いとはね」

「確か、一週間前であつたか……………小都市はいつも通り放棄したとはいえ、見事としか」

空に浮かぶのは、飛行船――急ピッチで微調整を終え、かつ飛ばしてきたのだ。

「ギユオオ……………ツ!？」

驚嘆、同時に憤怒を隠さぬ司銀龍だが、その殺意を一時収めねばならない事態を察知。南方の、自身が住処とする領域より更に南へとその顔を向け、遠目にでもわかる程大規模に発生した雪崩を目の当たりにして、即座に戦闘を中断、飛翔する。

それを目の当たりにしたのは、竜王たちも同様。

「……………そう、か」

「ついに動いたか……………!」

しかし、彼らは既に、あそこに強大な『ナニカ』がいることは知っていた。

「……………知ツテイルノカ?」

「詳細は後程。今は、一度退きましよう」

被害は甚大であり、既に都市機能は無いも同然。それ故の決定だった。

「しかし、司銀龍が退くとなると……………北上しているのかな?」

「縁起でもないことを…………いや、それなら奴が屠ってくれる分、楽ではあるな」

竜王たちが零す中、初めての空路開拓と、評議国への到達を成した飛行船群が高度を下げる。

「一旦、あちらと合流しましょう。何をすることも、現況の擦り合わせをしなければ」

「そうだね。住民たちの足も考えると、避難先についても話し合わねばならない」

幾分か和らいでいるとはいえ、雪が残る寒冷地であることに違いは無い。

寒気に弱い亜人もいる為、彼らの行動は迅速だった。

＊

溶岩が急速に冷え固まり、七色に輝くクリスタルが生じる。

熱に弱いながら、溶岩を身に纏い、それらを急速に冷え固めた龍は、それらの内、余計な重みとなる物を砕き、或いは振り落とす。先の戦い、中でも彼らの領域へと再び踏み入らんと、プレイヤーらを襲撃せんとした黒き飛竜の炎と比べれば、あまりに温いものであるが、それでも完治していない体には辛い熱量であり、氷龍は急ぎ過冷却水を放出し、氷の鎧で熱を遮断する。

「……………」

足音に振り替えば、歪ながらも濃く深い緑の外殻が一部露わになった、巨大な獣竜の姿がその瞳に映る。表層のあちこちが黒く焼け焦げ、広く粘菌を付着させる獰猛な竜と視線が交錯するも、百年以上の付き合いがある戦友ということもあり、交戦には発展せず、用事を済ませた氷龍は声もなく飛び去る。

真なる竜王を監視する龍は、転移魔法で即座に消える。傷付いた体で苦手とする環境に長く身を置きたくない、という思惑を察してか、かつてこの地を巡る戦いで肩を並べた獣竜は、何をすることもなくその姿を見送る。爆熱で焼け焦げた漆黒の下に、桁外れに強力な粘菌により変質し、エメラルドに近い輝きを宿すようになった甲殻を有する存在は、どこか責めるような目でそれを見届けてから、闘争の果てに発

謎の碎竜までを突破する必要がある。そう考え、溶岩以外の調査に移ろうとしたニグレドは、そこに現れた碎竜の一体が岩盤を砕き、その下の粘菌を纏ったことに気付く。

(粘菌？ですが、何故……………っ)

瞬く間に活性化した粘菌が、その身へと移っていく。その意図を完全には理解できないニグレドだったが、粘菌を得た碎竜が歓喜の咆哮を轟かせ、またまばらに現れた他の碎竜も、同様に新たな粘菌を獲得していることから、種にとって重大な意味があるということは察せられる。

「……………ままなりませんね、本当に」

見晴らしがよくなった天井から降りてくる碎竜までいる中、ニグレドは生氣のない声を零す。その光景から逃避するように魔法を発動し、主人へと氷龍が帰路に着いたことを報せるのだった。

AFT. 05 — 未知の先へ

——夢を、見ていた。

鮮血で染まった大地と、屍の山。見覚えのある骸が入り混じるそれを、茫然と見下ろしている。

「……………何を、しているのですか？」

夢であると、即座に理解できた。そうであれば、眼前の惨状に合点がいくからだ。

「なに、って……………デミウルゴスの命令でありんしょう？」

「私の？……………バカな、モモンガ様は何も仰らなかつた?!」

聡明な頭脳は、なまじ多くを知るが故に、この光景に何の意味があるのか、理解できない。

だが、続く言葉を耳にしてしまえば、否応なしに全てが繋がった。

「はあ!? そのモモンガ様をお探しするために、まずはこいつらを使ううって——」

（……………夢にしては異様ですが、成程。そうであるならば、辻褄が合う）

己に与えられた役割を、かつて彼らに向けていた思考を思い出し、冷や汗を零す。

これは、可能性の未来だ。モモンガがいなければ、彼らが外部の異常を知覚するまでかなりのタイムラグが生じる。そうなれば、龍を知る機会がなくなり、同時に現地の人間と手を組む理由もなくなる。必然的に、多くを知る機会を喪失する為、脅威を正確に認識することも出来ず、このような対応を取るのも当然だろう。

彼らの根本には、人間に。ナザリックに属さぬ者すべてに対する、強烈な侮蔑の感情が存在していたのだ。彼らの知恵、力、在り方……………多くを知り、時に支え、時に助けられたことで構築された、確かな信頼関係の土台すらないのであれば、こうなるのは必然と言わざるを得ない。

（……………念入りに罫り殺している辺り、最初にプレアデスを投入したのでしょうね）

人間相手と侮つたのだろうか、種族ステータスがユグドラシルにおけるレベル80以上であるなどと、普通は思いつかない。装備の質が粗末だからと侮り、結果として大打撃を受けたことは容易に想像でき、自分たちの気質から、その報復も兼ねていることも理解できた。「……………本当に、愚かだったのですね。かつての私たちは」

そう、愚か。そう在れと望まれていたとしても、この世界においてその振る舞いは、悪手でしかないというのに。多くを知る機会を自ら潰す結果に至り得た自身の性を嘆き、多くの幸運に恵まれていた、という事実を痛感する。ただ力があるだけでは、ナザリック単独の力だけではどうにもならない、多くの災禍を経たからこそ、現地の人々との友好を有難く感じているのだ。

そして、その思いは、より強いものとして彼の心に刻み込まれることとなる。

『で、デミウルゴスっ！助けっ』

不吉な言葉を残し、アウラの声が途絶える。シャルティアが取り乱す中、デミウルゴスも大きく目を剥き、弾かれたように顔を上げる。今まで感じたことのない、強烈無比なる寒気を感じた彼が指示を下すより早く、シャルティアは独断で転移門ゲートを展開し、独断で撤退。他のシモベたちに簡潔に撤収指示を下し、デミウルゴスも続けば、信じがたい光景が広がっていた。

「……………バカな」

何も無い。

ある筈の地表構造物の一切が存在せず、だだっ広い荒野が広がるのみの大地だった。

「アウラー・マーレ！おい、返事しろ！いるんだろ!?逃げられたんだろっ!」

与えられた口調もかなぐり捨て、シャルティアが悲鳴に近い叫びを響かせる。己を律し、地下のダンジョン部へと続く大穴の下を覗けば、瞬間的に肌の表面が軽く焦げる程の熱気と、目を疑うような光景。それこそ、彼の理性が最悪中の最悪の到来を確実視させる程に、異常な光景だ。

四肢で大地に立つ、巨大な翼をもつ龍。幾重にも折り重なる特徴的な角、そして淡い紫光を零す漆黒の体躯と、それを包み込む逆立つ鱗とが、あまりにも異質であり、存在としての次元の違いを理解させられる。歴戦王古龍すら可愛く思えるその力を、今の彼は過不足なく正確に認識できてしまう。

「っ、デミウルゴス！早く手を貸しなさい！あいつ、わたしたちを歯牙にもかけず——」

「ギュルアアアアアアアアアアアアアアアアアア……ッ」

黒き龍が吼えると共に、超位魔法すら生温い炎が溢れ出し、大地が燃え盛り、融解する。赤黒い雷光の減衰に伴い、抑圧されてきたエネルギーが溢れ出す……『煌黒龍』という器からすれば、大したことのない生理現象の一つに過ぎないが、その規模は絶大無比。それこそ、本来彼の龍が、生命の寄り付かぬ極圏に潜むことを選ぶ程に。

「——」

凄絶なエネルギーが荒れ狂い、声の伝播すらも妨げる。

(違う……これは、きつと黒龍では……っ！)

予め、冷氣攻撃等により炎エネルギーを抑制できていれば。或いは、龍殺しの力で攻撃し、その身に宿すエネルギーを抑圧するのみならず、減衰させる程の域にまで力を高めていれば。しかし、その事情を知らぬ者たちに、そのような対処などできる筈も無い。何より、事前知識なしでは、そもそも龍殺しの力による悪影響までもが牙を剥く以上、高望みもいとこころ。

同時に、理解する。自分たちが勝ち取ったと思っていた平穩は、薄氷の上のものであると。

「——ッ!!!」

その力が解放される寸前で、目が覚める。

「………休憩のつもりが、酷い悪夢を見せられるとは………」

アインズ・ウール・ゴウンに用意された、デミウルゴスの私邸。

睡眠不要のマジックアイテムを外し、休憩等の為の睡眠を取っていた彼にしてみれば、酷い悪夢と言わざるを得ない。何が悪かったのか、と軽く頭を振り、傍らのテーブルに置いていた眼鏡を手を取れば、

自然と視界に入るものが。酷く風化している、今の彼らを困らせる依頼品の姿が視界に収まり、まさか、と眉を顰める。

「……………あの刀が？」

復元する術が浮かばず、多くの者を悩ませた一振り。かくいうデミウルゴスでも、現状その復元手段が浮かんでおらず、仮眠により思考のリセットを図っていた訳だ。その結果が、ろくでもない、という他ない悪夢であったのだから、それはもう嘆く他ないのだが――

「……………龍の力を使え、とぅ……………まさか」

鼻で笑い、しかし完全に無視も出来ない判断し、頭の片隅に。

(アングラウス殿の依頼……………難易度は高そうですが、やってみせねば)

未知の解明への一歩。そして、未知へと備えるために。

評議国に向かわなかった者の一人として、悪魔は立ち上がり、仕事着を身に纏った。

*

重大な案件があつても、全員が全員、関与するわけではない。

評議国への救援に参加しなかった者たちは、皆己の職務を果たしていた。

「なんか見つかつづ!? あつ、あつづう!?」

「え、ちよ、何して……………熱う!」

「待つて待つて!? え、ちよつと待つてて!」

鉱脈から掘り出した途端に発火した石を、どうにか確保しようと悲鳴を上げるメイドたち。

「こつち、パス!」

インフイニティ・ハヴァサツク
無限の背負い袋を広げ、燃え盛る石を確保。

安心したのも束の間、彼女らの居る場所とはびっきりの危険地帯、その中でも格別の場所である以上、騒ぎ過ぎたからには一度身を隠す必要がある。手を火傷している仲間たちと共に急いでその場を離れ、回復薬を彼女たちの手にかけてつつ物陰へ。森の賢王が用いていたものを参考にした外套に揃って包まり、続けて匂い消しの使い捨てマジックアイテムを用い、音以外による知覚を困難にする。

「ギユアアアアオツ!!!」

そんな中、遅れて飛び出したのは、赤熱する岩を身に纏う大型魚竜。

「うっわあく……………危ないところだったあ」

「しっ！アレの相手は危険なんだから、今は静かにして」

溶岩が冷え固まった黒い甲殻を纏う溶岩竜の、亜種個体。常に赤熱する外殻のせいで、冷氣系の攻撃が逆に無効化されてしまう性質に加え、ただでさえ高い身体能力を有する屈強なモンスターの出現に、一斉に警戒レベルを跳ね上げる。なにせ、溶岩が冷え固まった外殻に包まれた肉体を、その脚二本で支えられる程の筋力があるのだ。真つ向勝負など、恐ろしいにも程がある。

「ギユイ？……………ギユオオ」

「……………っ」

周囲をキョロキョロと見回す姿は、可愛らしくも思える……………その敵意が向かなければ、の話であるが。溶岩を泳げる強靱な肉体に、溶岩で形成された頑強な鎧、更には溶岩溢れる火山の只中と、相手に有利な環境で相手をするのは自殺行為に等しい。もつと言えば、その鎧のせいで水も冷気も通じないと、弱点が未解明である為、長期戦を覚悟する必要もある。

そうなれば、それこそ死ぬ。

「……………ギユアアツ、ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオツ」

「ッ、ギユアアアアアアアアアアアアオツ!!!」

!!!!!!!

死を覚悟した矢先、矛先が移ったのは、現れた鮮やかな青の獣竜。鋼鉄の塊たる顎は熱量で淡い赤色を帯び、生物離れた鮮やかな青色の体躯と併せ、異様な印象を受ける獣竜だが、どうやらその餌場であったのか、そう間を置かず双方がぶつかり合う。鋼鉄が岩盤を砕く中、メイドたちの判断は素早いもの。

「逃げるわよー！」

「もう最悪ー！」

「ここ来てるんだから、これくらい覚悟してないとー！」

彼女たちが調査しているのは、U字型の半島であるローブル熔山帯の、北部域。

莫大なエネルギーにより火山活動が爆発的に活性化したことで変化した南部域と異なり、熔山龍が背負っていたモノが大地と一体化し、成立した灼熱地帯だ。その分、南部域と比べ上質な鉱物等が豊富に存在する反面、それを求めるモンスターも多く、と危険度はかなり高まる。更に、中央に接近し過ぎれば、炎龍夫妻にも目を付けられかねない為、活動の度神経をすり減らす場所でもある。

無論、危険相応の見返りが、確かに存在している訳だが。

「最低でも、これは持ち帰らないと……ッ！」

「何かあったら、私たちが盾になるから」

「最低限、キャンプまでは生きて帰りなさいよね！」

確保したアイテムを一人に渡し、残り三人が周囲の警戒に注力しながらも、徐々に速度を落としていき、小走り程度まで減速。死亡による紛失のリスクから、基本装備であるマジックアイテムの多くを外している為、元々が種族レベルのみだった彼女たちは疲労無効等の恩恵を受けることが出来ていないのだ。その為、食分量以外は本当に普通の人間と大差ないのだ。

「あー、疲れた！お腹も減った〜！」

「ハイハイ、ちゃんと生きて帰れば、幾らでも食べられるわよ」

そんな会話に耳を貸さず、メイド四人のうち一人が未完成の地図を広げ、顔を顰める。

「不味いわね……後先考えずに走ったせいで、まだ調査してない場所に来てる」

「……………ッ」

三人の目が死に、来た道へと視線が向く。

「……………最悪」

「せめて、シャルティア様にご同伴願えばよかったわ」

干し肉を噛み千切り、空腹を紛らわせる。ローブル熔山帯北部の、熔山龍が背負っていたモノがそのまま大地と化した地帯は複雑に入り組んでおり、洞窟と化した内部等まで含めると、未知の部分が大半を占める。加えれば、ここには炎龍の縄張りが存在している為、内部をへたに探ることへの抵抗が強かったのも大きいだろう。

少しばかり、欲をかいていたことを自覚し、悔恨が沸き上がる。それを干し肉と共に嚙下して、最新の武器——剣斧を背負うメイドは、地図を睨む。当然、自分たちの居場所を記してくれる、なんて便利な機能は存在していないため、周辺地形等から推察する他ないのだが……

「来た道に戻るか、進んで『上』を目指すか。どっちがいいと思う？」
上、というのは、外界に面した表層エリアのこと。飛竜との遭遇率が上がる反面、ある程は外の景色から周辺把握が行えるため、幾らか行動しやすい。来た道に戻る、という選択肢を提示こそしたものの、彼女たちがどの段階から道を間違えたのかが不明である為、どちらにせよ事態が悪化する可能性が高い。

「進みましょう……なるべく、外周寄りを」

炎龍と遭遇しないために、四人は細心の注意と共に動き出す。

……強い危機感の底に、隠し切れぬ好奇心、探求心を抱いて。

AFT. 06―戦うメイドたち

(評議国との調整は、このまま任せても大丈夫そうだな)

コキュートスが音頭を取る交渉の声に頷き、モモンガは観察をやめる。

「俺の見立ても、随分と甘かったんだな」

真つ直ぐ過ぎるきらいはあるが、その実直さが大いに受ける世界だ。

不可のラインや、過度な依存に直結しかねないラインを間違えているようなら、後日再調整等が必要となってくる。が、そこは経験や知識も要求される為、万一の時は大人しく自分が責任を取ろう、と一人頷き、腰を上げる。部下にして我が子のような存在たちの成長の為に考えれば、それくらい安いものだろう。

(氷龍が戻ったらしいから、たぶん襲撃は一旦打ち止め。暫くは正常な国交になるな)

隔絶された北国が何を齎すか。この辺境諸国との交流がどのような意味を持つか、想像しても、そう意味は無い。想像していたところで、それを上回るモノを見せつけられるのだから、悪い意味ではなく、いい意味で予想するだけ無駄というものだ。特に、モモンガは評議国の細かな特色をそう知らない以上、尚更。

「問題は、グランセルの調査が難しいことか……ああ、けど、寒冷地は他にもあるよな」

グランセルで最も危険なのは、評議国寄りの北部域。南部域の調査についても、既に話題に挙げられているのだが、司銀龍という特大脅威に敵対されることを危惧した知恵者陣により、何度も白紙と化している。その気も判らなくはない、程度の判断であったのだが、先日の戦闘を目の当たりにすれば、否応なしにその判断を評価せざるを得ない。

(あの器用さと判断力……ほぼ物理限定とはいえ火力も範囲もあるとか、ヤバいにも程がある)

文字通り変幻自在の、流体金属の操作。空からの広範囲攻撃に、地

面を液化させ潜航。更には、その攻撃の一つ一つがドラゴンの鱗を容易く貫き、その上で誰を残しておくか厄介かの損得勘定まで出来る程の知能を持つなど、泣きたくなるほどのスペックを兼ね備えている。強いて挙げるなら、物理寄りという弱点はあるのだが、完全耐性が無意味のこの世界では、大した慰めにもなりはしない。

手の内は図れた。が、どう対処するか?となると、ムリゲーと言わざるを得ないのが現状だ。

「寒冷地調査は、あちらの諸々が終わってからだな。となると、出来ることといえば」

本気装備を外し、戦士用装備へと交換。

戦士としての特訓の時間だ。幸いなことに、彼が率先してこなすべき業務もない。

「お、丁度いいところに」

私室を出た彼が最初に遭遇したのは、忙しなく動き回るメイドの集まり。

「あ、モモンガ様。どちらへ?」

「いや、実のところ決めていなくてな。お前たちは?」

「ローブルの調査に行こうかと」

「その調査だが、私が同行しても問題ないか?」

危険は百も承知。トブの大森林ですら、賢王の支配域を脱した時点で危険域に早変わりだ。

「つかぬことを伺いますが、どのような武器を用いるのでしょうか?」

「そちらに合わせるさ。今のところ、どれも練習段階だがね」

メイドたちとの協議の結果、タンクタイプの不在のこともあり、銃槍を使うことを決定。

決定次第、メイドたちが事前に行う手続きを踏み、熔山帯へ。

「……………いや、でつか?!」

そして、彼女たちが現地の仮拠点としている場所……………拠点の外に出ると共に、そのスケールに唾然となる。魔法を習熟したメイドの手で内部に転移した段階では気付かなかったが、時には十数人規模で利用する仮拠点だけあり、それだけの人数が使えるよう、設備も相応に

整っている。

では、それがどこに広がっているか？

「ここ、北部火山に近いので使い勝手がいいんですよ」

「え、いや、このサイズに違和感とか無かったのか?!」

「だって、死んだだけで半島がこうなつたそうじゃないですか。常識で考えるだけ、無駄ですよ」

あまりのド正論であるが、冷静に考えて欲しい。

頭蓋だけで、十数名が使える拠点を構えて余りあるサイズなのだ。

生前はどれ程の巨躯であつたのか、それから逃れたローブルの民はどれ程恐怖したか。考えたくも無ければ、そんな怪物と遭遇しなかつた幸運に、心の底から感謝させられる。剛種岩蟹

の数倍、どころでは済まない程の超巨大モンスターを相手取るなど、まず不可能であろう。生前の姿を知らないのは、幸福なのか、どうか。少なくとも、相手取る必要が無いのは、最高の幸福であろう。

「えっと、モモンガ様は」

「私の都合は考えなくていい。お前たちがやりたいことをやってくれ」

大分盲目的な忠誠が薄れている影響か、彼女たちはすんなり了承し、当初の目的を告げる。

「では、湾内の調査に行きますね。鉱物資源が重視されましたが、あっちも気になるので」

「わかった。では、私が前に出るとしようか」

過酷な環境のお陰で、妄信することの危険性は広く伝わっている。その危機意識が、メイドたち自身に起きた変化を自覚することを防いでいた。シズほど劇的なものではなく、ゆつたりとした変化であるお陰で、精神的な負荷も大してかからず、ごくごく自然に、モモンガが望む関係に近付きつつあるのだ。

「しかし、沿岸域か。何か特徴的なものでもあつたのか？」

「海竜種モンスターが幾らかと、カニに近い見た目のモンスターが」

「カニ？」

「はい、カニです。法国発行のリストに無いので、恐らく新種かと思わ

れます」

さらりと重大情報を告げながら、モモンガ含む六名は灼熱の溶岩地帯から、比較的穏やかな空気の流れるU字半島内側の湾へと向かう。肌を焼くような熱気は大分和らぎ、足場の感覚から、空気の湿気、視界を満たす色彩までもが変わっていく。その変わり様に驚くと共に、モモンガの中にあつた、メイドたちがカニのようなモンスターを見た、というのも、信じられるような気がしてくる。

「クアアアアアアアアツ!!!」

「グオアアアアアアアアツ!!!」

「ギユアオツ、ギユアオオツ!!!」

そんな中、複数の咆哮が響いたことで、六名は即座に物影へ。

「あれは、確か」

「赤甲獣と毒狗竜、毒鳥竜ですね」

どれも、武具の流通に伴い、徐々に狩猟実績が上がっているモンスターだ。

赤甲獣は熔山帯の辺境部でのみ見られるモンスターであるが、毒狗竜は物理的な防御が困難な毒霧ブレスで、毒鳥竜は極めて高い生命力と、液状の毒ブレスで知られており、特に後者二体は帝国領のボウン沼地で見られることから、比較的知名度は高い。無論、悪い方向に。

特に『毒鳥竜』ドスイーオスは、生命力の強いイーオスの頭領だけあり、生命力の強さが尋常でなく、中型鳥竜全体で見ても討伐数が最下位だ。生息環境の都合、目撃例が少ないこともあるにせよ、帝国のオリハルコン級冒険者チームですら仕留め損ねる程なのだから、相当だ。

「どうします?」

「ウォーミングアップの相手としては、どうだ?」

「毒鳥竜以外は悪くないですね」

「ドスイーオス以外は比較的やりやすい相手です。ドスイーオスは少々しぶとすぎますが」

蛇蝎の如く忌避されているが、それだけしぶといのだ、毒鳥竜は。

「そこまでか」

「何度取り逃したことが……!」

「あと、単純に毒が面倒です。毒狗竜のと違って、地面に残留するだけなので余計に」

見えやすい毒霧より、地面に残る毒液の方が面倒、というのが総意のようだ。

「では、どうする?」

「……戦いましょう。見たところ、どの個体もまだマシンな強さのようですし」

(そこまで判るのか……成長しているな、皆)

どう目を凝らしても、その強さをイマイチ理解できないモモンガだが、こればかりは場数が物を言う。特に、自ら過酷な環境に飛び込み、調査を行っているメイドたちからすれば、相手の甲殻等の状態から強さを見極めるのはほぼ必須スキル。それが出来るようになるまでは、常に逃げに徹することを厳命されるレベルだ。

そして、彼女たち五人が司令塔としている操虫棍使いは、それが可能な人物であった。

「では、先陣は私が」

棒高跳びの要領を用い、大きく跳躍したリーダー格が毒鳥竜へと飛び掛かり、その背に乗る。

「ギュアオツ!」

「よ、つとー!」

激しく暴れる毒鳥竜の体の動きに合わせて、全体重を乗せた蹴りを叩き込み大きく跳ぶと共に体勢を崩させ、赤甲獣にぶつける。まさかの所業にモモンガが唾然となる中、フリーの毒狗竜へと向け、軽弩を構えたメイドが数発の弾丸を撃ち込み、爆発。突然のことに怯んだ毒狗竜の頭へと、穿龍棍使いの鋭い乱打が叩き込まれ、大きく距離を離れた毒鳥竜、赤甲獣の相手には剣斧持ちと双剣使いが向かっている。

(ああ、クソツ!)

完全に甘く見ていた、という他あるまい。

種族レベル1のみのNPC、という前提知識があるせいで、無意識

に過小評価していたのだろう。

「グオウ………ッ」

「援護するぞー！」

「あ、ちよ、モモンガ様!？」

盾を構え割り込むモモンガを、毒霧が襲い

「あ、あれっ?」

「それ、物理防御不可能ですー！」

「うええ!？」

より正確には、特殊なスキルが必須であるのだが、それを知る由もない。

幸いなのは、モモンガはアンデッドであるお陰で、毒が無効であることか。

(ヤバい、これ完全に足手纏いだ?!)

「なら、私はノーガードで突っ込める、なッー！」

毒霧をノーガードで突破し、力任せに重量級の武器を叩きつける。細身の体ながら、その重量で致命的損傷を追わない程に頑強な毒狗竜の肉体へと、全弾一斉発射によるフルバースト砲撃を叩き込む。その重い衝撃で相手に生じた僅かな硬直を生かし、再度銃槍を突き付けると共に、太い杭状の砲弾を撃ち込む。

(ラスト、いけるか………ッ)

「喰らえッー！」

放熱が必要になる銃槍の奥の手、竜撃砲を発射。地面を踏み締めても尚、大きく後退を余儀なくされる大反動と、武器への多大な負荷を代償とした、疑似的な飛竜のブレスは毒狗竜を吹き飛ばし、続く竜杭砲の爆発が更なる追撃。その体を地面に叩きつける。

(上手くいった!)

「お見事ですー！」

「私たちも、敗けてはいられませんね！」

目印となる印弾を毒鳥竜の頭に撃ち込み、猟虫を飛ばす。

「グランツビートル、お願い！」

(いや、名前格好いいな!)

飛翔した猟虫が毒烏竜の頭へと激突し、そちらに意識が向いた間に、大斧による重い一撃を叩き込まれる。赤甲獣に対しては、双剣使いと猟虫無しの操虫棍使いの二人で対処している。適宜猟虫を呼び戻し、獲得、精製したエキスによる強化効果を受け、また休息させながらも、一人で実質二役をこなすなど、その活躍には目を見張る他ない。

伊達に、リーダー格という大役を任されていない、ということか。(参ったなあ、これ。嬉しくはあるけど、このまま俺がお荷物つて事態は避けないと)

頼りになるのはいいのだが、仮にも支配者とされている以上、お荷物は避けたい。

実際のところ、マジックキャスターとしては未だ他の追従を許さぬ以上、無用な心配と言えるのだが。それを加味しても、もう少々皆の役に立ちたい、というのが本心なのだろう。戦士としても相応に動けるようになって今、護身の意味でもある程度動けるようになりたい、というのは当然の感情か。

(まずは、ここで勝たないと、な)

放熱中であろうと、銃槍の砲撃機構自体は使える。砲弾、杭弾の装填を行、モモンガの双眸が未だ健在の毒狗竜を捉える。怒りの吐息を零し、鋭く吼え立てた中型烏竜は大きく天を仰ぎ、その喉から圧力の無い分、広く響く咆哮を轟かせる。

「グオオオオオオ——ツ!!!!」

「仲間、呼ばれましたね」

「私が排除します。お二人は、ドスフロギイを」

穿龍棍を握り締めたメイドが疾駆する先から、小型のフロギイたちが現れる。

モモンガと軽弩使いが毒狗竜を睨んでいると、背後から予想外の声。

「そっち、行きますよ!」

「へ?」

「ちよ、本気ですかあ!?!」

振り返れば、背に取り付く彼女を振り落とそうと、我武者羅に暴れる赤甲獣が突っ込んでくる。

「うっそおっ?!」

咄嗟にガードすれば、その重量を受け止めきれず弾かれる。が、それは背後の毒狗竜も同様で、その巨体との激突により大きく吹き飛び、更には岩壁と赤甲獣で挟まれる形で激突したことで、より甚大なダメージを負わされる。赤甲獣自身も見事に目を回しており、暫くは動けないだろう。

「よっし、成功!」

「相変わらず、とんでもないことやりますね……………」

「結構コツいるから難しいのよ?」

「こ、コツとかあるんだ……………」

その芸当に啞然となるモモンガだが、彼女たちが戦っていた側では「あ、ちよ、逃げるな!」

「今そっち行く!」

「いや、こっちからやります!」

軽弩使いが徹甲榴弾を頭に撃ち込み、盛大な爆発を引き起こす。その衝撃で眩暈を起こした中型鳥竜がたたらを踏み、逃走の為の動きが止まる。その好機に変形した剣斧と、双剣の乱舞が叩き込まれるのを目の当たりにして、モモンガたちも背後で伸びているモンスターたちへと視線を移す。

「……………やるか」

「そうですね」

動けない内に、一気に叩く。ゲームだろうと現実だろうと、そこは変わらないのだ。

「あ——」

壁に激突する寸前、急減速、停止を試みた黒轟竜がスリップを起し、暴れる尻尾に巻き込まれかける、仲間の姿。咄嗟に腕で身を庇おうとするが、それで無事で済むものか。腕が折れる程度で済めば幸運も幸運で、生身で強靱な厚鱗に包まれた尻尾と接触すれば、最悪千切られるか、胴体ごと持っていかれる。

「——え？」

「——が、ふ……………ッ！」

仲間の腕を引き位置を入れ替え、ギリギリでバックラーを割り込ませる。不安定な姿勢、当たり方の悪さが重なり、割り込んだメイドは、黒轟竜が激突し、破壊された壁の先へと投げ出される。その飛距離が、轟竜のパワーを物語る。

「……………ッ」

何とか体勢を整え、受け身は取ったものの、背中から落ちた衝撃で一瞬動きが止まる。急ぎ回復薬を取り、飲み干した彼女は、その場から移動を開始する。単独で黒轟竜との対峙など不可能もいところであるし、視認できないとはいえ追跡されない保証もない。他の三人が心配であるが、それより今は我が身を優先するべきだ。

干し肉の残りを口に放り込み、空腹を紛らせながら、付近で比較的高い場所へとよじ登る。

(陸が見える、つてことは……………ここは南側)

冷静に周囲を把握次第、すぐに物陰に身を隠すとともに、外套を羽織る。

自身が吹き飛ばされた先へと視線をやり、《伝言》^{メッセージ}の魔法を発動して——目を剥く。

『つ、よかった！生きて』

「今すぐそこから逃げて！轟竜が向かってる！」

聳え立つ岩壁に剛爪を突き立て、発達した脚力任せに駆け上がる竜の姿。垂直手前のそれを四肢だけで駆け上がれる程の身体能力には、遠目に眺めるだけでも血の気が引く。仲間たちも異音に気付き逃げたはいいが、既に地図も何も判らない領域である以上、合流は絶望的

という他ないだろう。

「そつちは皆でキャンプを目指して。こつちも別口から目指すから」

『……………ちゃんと生きて帰ってきなさいよ!』

『死んだら承知しないから』

『大食い対決、勝ち逃げは許さないから!』

同僚たちの激励に苦笑を浮かべ、了解と短く応答。発見した現地アイテムを持っていない分身軽ではあるが、だからといって死んでいいわけではない。主に怒られるし、仲間たちにも叱られてしまう。故に、生きて帰ることを念頭に置いて動かなければならない。

死を恐れはしないが、無駄死にを容認する気もないのだ。

「だけど、どこを目指せば……………っ」

その視界の端で、灼熱を束ねたレーザーの如き熱線が仄かに閃いた。

「あれは……………!」

遠見の魔法——剣士として学びながら、一部補助魔法にも手を出していたことが、吉と出た。

(炎戈竜……………!)

灼熱の光を纏う、溶岩の鎧。それに身を包むのは、マグマの海を泳ぐ海竜。

アペリオンまで襲撃するようなことは無いが、ナザリックに属する者にとっては、強く警戒するべき竜の一体である、強力なモンスター。岩盤を難なく破壊する、特徴的な碇口とヒレを持つ竜は溶岩竜以上に神出鬼没であり、特に北部火山内部では地面、壁面、天井に溶岩溜まりと、警戒する必要がある場所を挙げればキリがない程。

その戦闘能力は、当然侮れば死ぬ程に高いものだ。

「っ、モモンガ様!」

最悪だ、と唇を噛む。彼が手にする銃槍は、『炎戈竜』アグナコトルと相性が悪い武器だ。

(何人の仲間が焼かれた事か……………!)

片手で数えられる程度だが、死者を出した熱線。体内に溜め込んだマグマを用いたそれは、物理防御不可の性質を持ち、そんな危険な攻

撃を軽々と放つこともまた、炎戈竜が強く警戒される理由の一つ。強力な個体のソレを受け、命を落とした同僚もいれば、瀕死の重傷を負い、そのまま強制送還となった者もいる。

その尊い犠牲のお陰で、『鎧竜』グラビモスの熱線共々物理防御不可と判明しており、熔山帯における最大の警戒対象とされている。特に、神出鬼没で俊敏な分、炎戈竜の方が数段恐れられており、交戦件数も各段に少ない。それと、交戦が行われている、ということは――

「絶対に、不味い……………！」

全力で地面を蹴り、駆ける。特に、モモンガはアンデッド……………炎に弱いことから、尚更だ。

（彼女が気付いていない？在り得ない。となると、逃げられない理由がある）

地形か、或いは別の何かか。そこまで見る余裕はなかったのが痛い。が、仕方がない。

（逃げてたら私も逃げる。逃げれてなければ、時間を稼ぐ）

その心構えと共に、時に自傷も厭わぬ無茶なショートカットを行い、目的の場所へと疾駆。

そして、眼前まで迫った時。時間が経っていないながら、炎戈竜の甲高い声は変わらず響き続ける。

「……………ッ！」

逸る心を抑え込み、一度状況確認の為、物陰から聞き耳を立てる。

「こ、の……………ッ！」

「すまない、だが！」

「判ってるから大丈夫です！私たちの意思ですから、謝罪しないでください！」

周囲を確認し、理解する――船だ。船の、残骸らしきものがあるのだ。

「そういうことですか」

「逃げない訳だ。逃げられない訳だ。」

痕跡の有無にかかわらず、こんな内陸部に在る以上、調べる価値は

十分。ここで逃げれば、それは跡形もなく破壊されてしまうだろう。そうなれば、有用無用は別として、多くの情報が喪失する可能性が高い。それを見過ごすには、この世界は未知の要素が多く、取りこぼした場合が恐ろしくあった。

「————はあああああああッ！」

力強く叫び、躍りかかる。当然、炎戈竜の注意は彼女に向き、強固な碓口が、その身へと迫る。

「ぜっ、りゃあああああああッ！」

「キュアアアアッ!?!」

ズガンツ!と、バツクラーが頭を打ち抜き、続けて逆手に構えた剣を突き立てる。

「つづ……………」

暴れる炎戈竜の頭から一度跳び、鎧から離れた薄い背ビレへと移る。溶岩の熱に焼かれる苦痛の中、彼女は躊躇いなく剣を突き立て続け、炎戈竜は確かな痛みに、不快感に耐え兼ね、必死に暴れる。暴れば暴れる程、溶岩が冷却され固まり、物理防御力が高まっていく。その背の鎧だけは、執拗な刺突によりぐずぐずにされた状態で、だ。

「————モモンガ様、竜杭砲を!」

「……………わかった!」

銃槍との相性は悪いが、一点だけ。砲撃という機構が、最悪の手前で押し留めている。

ぐずぐずの状態で固まった一点を、炸薬を用い撃ち出された杭型砲弾が貫き、堅殻を穿つ。その衝撃で溶岩の鎧は砕け、炎戈竜が微かに怯み、動きが止まる。全身に付着した溶岩は冷え固まり、物理攻撃に對しては滅法強くなっている、^がが。

「ッ、キュアアアアアアアアアッ!?!」

爆裂。固まっていた溶岩が吹き飛び、また爆破の熱に当てられたその欠片は、先程までと同じく高い熱量を秘めた液状となっている。この、炎戈竜の纏う溶岩を再び軟化させることが可能なだけの熱量を秘めているのが、銃槍の砲撃の特徴。その防御を突き崩せる一点が、相性最悪という評価に至ることを阻止していた。

「よしっ！」

「おお！」

「キュアアア……キュアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

怒り、口端から炎を零す炎戈竜が吼える。盾を持つ者たちが一斉にそれを構えれば、襲い掛かる重圧は大きく軽減され、ただ煩いだけの咆哮に変わるが、そうでない者は反射的に耳を抑え、行動が制限されてしまう。しかし、ガードに成功した者たちは、次の行動に移っていた。

「他の箇所も剥がしたいが……」

「砲撃で軟化させてから、竜杭砲を撃ち込めれば」

「そうなる、よな……つ、散開！」

吼え叫んだ炎戈竜が地面を掘り返し、潜航する。岩盤を容易く砕く碇口も、岩盤を引き裂く強靱な特上ヒレも、危険極まる武器である以上、一網打尽を避ける意味でも散開は必至。その強襲に備え、全員が散り散りに広がり、武器を収め回避準備と共に警戒する。潜航中、且つ怒り狂っていないければ、対処法もあつたのだが……それを知らぬ以上、やり様はない。

「キュアアアアアアアツ!!!」

「ぬおおおおおっ!!!」

飛び出し、泳ぎ、潜り。その巨躯はそれだけで高い破壊力を有する上、碇口と特上ヒレの二種の凶器がその殺傷力を更に高め、凶悪な攻撃へと変えている。幸い、火山地帯から離れているお陰で溶岩が飛び散ることは無いが、巻き込まれば命が無いことに違いはない。その上、メイドたちは常に熱線に警戒している為、より余裕がない。

「——キュアアアアアアアツ!!!」

大きく大地を砕き、空高くまで飛び出す海竜。その巨体が大地に降り立てば、軽く大地が揺れるが、幸いその影響が及ぶ周囲にメイドたちはいない。いない、ことこそが、彼女たちに最悪の予感を与え、続くカチカチ、或いはカタカタと嘴を噛み合わせる音が、それを確信に変えるのだが。

「全員、全力で逃げて！」

「何が来るんだ?!」

「熱線！物理防御不可！死者複数！」

「な……………!?!」

メイドが死亡したとの報告は、モモンガも受けている。

（いや、物理防御がダメってだけなら！）

「急いで集まれ！俺が何とかする！」

軽弩を構える者が頭を狙い、操虫棍を使う者が頭目掛け猟虫を飛ばす。その間にも、首を柔軟に動かす炎戈竜の、冷え固まっていた頭と胸部の溶岩が熱を帯び溶け、重胸殻に溜め込んだマグマがレーザー状に放たれる。威力、熱量共に尋常でないソレは、未だ手探りであった頃のメイドたちに死者を出す程の物であり、全員が必死に走り、薙ぎ払われるソレから逃げている。

巻き込まれれば、余程炎耐性を上げていない限り、まず死ぬ。一命を取り留めたとしても、耐性が無ければその熱の余波に身を焼かれ、どちらにせよ落命するのみ。それを知るメイドたちの形相は必死そのものであり、幾多もの補助魔法を重ねるモモンガの心を打つ。（そうだよな。あんなの、受けたくないよな）

幸いにも、守ろうとしていた残骸は地形のお陰で、熱線の直撃は受けない。

だから、守るべき者たちに集中できる。

トリプレットワイデン・マジック
「魔法三重効果範囲拡大化」

ウォール・オブ・スケルトン
《骸骨壁》ツ！」

三重に形成される、白骨の壁。そこに、更に防護魔法による強化を施し、それでも難しいだろうと判断し、際限なく白骨の壁を重ねていく。大型の獣竜種すら大きく突き飛ばす程の破壊力を前に、如何に強化を重ねた骨壁であろうと長くは持たない。が、魔法防御である為、防ぐことは出来る。

そして、発射の反動を用いて薙ぎ払っている炎戈竜は、今更それを一点集中させるなど不可能。

「……………よしー！」

ギリギリではあったが、完全に凌ぎ切る事が出来た。

焼け、抉れた莫大な壁を崩せば、遠くから苛立ち混じりにこちらを

睨む炎戈竜の姿。

「さて、どう来る……………」

身構えるモモンガだが、経験豊富なメイドのうち数名が、小さく『あつ』と零した。

「ん？なにが——あつ」

少しばかり注意深く観察していたモモンガは、炎戈竜目掛け疾駆する巨竜に気付く。

並外れた巨大角を持つ、豊かな体毛に覆われた獣竜。炎戈竜は怒りに囚われ気付いていないが、『猛牛竜』バフバロは怒り心頭とばかりに鼻角、背部の甲殻を展開しており、全速力で突撃している。そして、炎戈竜が気付いた頃には手遅れであり、地面に頭を突き立て、半ばまで潜航した辺りで、その巨大な角が横っ腹に突き刺さり、強引に引き摺り出されるついでに地面を引き摺られていく。

「キュアアアアアアツ?!」

「……………よし！今のうちに船を調べるぞ！」

モモンガは即断し、明らかに異質な、内陸部に鎮座する船と思しき残骸へと向かうよう指示。

随分と朽ち果てたその中を調べて直ぐ、目を見張るべき発見があった。

「これ、は——っ?!」

書物。随分と朽ち果て、欠損も多い、この辺境の物でない文字が刻まれた、本の残骸だった。

AFT. 08―異世界からの遺物

全く未知の文明の、産物――

「本当に、心臓に悪いな……………いや、心臓無いけどさ」

それらを可能な限り回収したモモンガは一人、先んじて街に帰還していた。

他のメイドたちは、はぐれた面々の搜索、救援。後続の指導の為、ローブルに残留している。

(魔法様様だな、本当に)

高位魔法による状態維持を施した書物類から、一つ手に取る。

『今日……………陸古……………団で……………』

翻訳のマジックアイテムを使えば、誰かの日記だったのか、所々で個人名が出てくる。

何かしらの団体に所属していたらしき人物の日記、ということが判り、読み進めていく内にどんどん聞いたこともない名が出てくる。それらを自前のノートに書き出し、断片的な情報から整理していき、全容の把握を目指す。最初に目指したのは、目立つ単語の把握と、それに関する情報の整理からだった。

なにせ、方々への報告や、今後の段取りの調整で、数日は経ってしまっている。既に最古図書館の司書たちも動員した解読と、現地語に置き換えた報告書作りが進められているが、欠損が多い分、慎重に慎重を重ねている都合、どうしてもペースは数段落ちている。

『ハンターズギルド』『新大陸古龍調査団』『ドンドルマ』……………ふむ』

断片の中、類似した語句を繋ぎ合わせ、前半部分を読み進めるうちに判明した情報から、ここと異なる大陸の者、或いは……………『古龍調査団』という単語から、古龍と同じ世界からの遺物ではないか、と判断。そこまで思い至った彼は、書物以外の遺物に思いを馳せる。

すっかり風化したナニカと、風化と損傷は激しい、前腕程度のサイズの残骸に、錆び朽ちた武器と思しき物。数が転がっていたそれらは、既に工房に預けてあり、現在ここに並べられているのは書物類のみだ。欠落と損壊が多い書物の解読は困難を極めるだろう、と密かに

溜息を零した彼は、ぺらぺらと日記らしき物をめくり続ける。

『古龍渡り』『五期団』『龍結晶の地』『導きの地』……………無数の『龍』と……………むう」

欠落が多い。恐ろしく壮大な何かがあることは判っても、その先の解明が困難だった。

だが、その一冊を改めて最初から読み直していく内に、一つの疑念が確信に近づく。

「……………異世界からの漂流物、だろうか」

（魔法について、一切触れられてない……………精々、龍について触れる時くらいだ）

見た限り、かなり大規模な集団の筈だ。なのに、魔法職が存在する気配がないどころか、魔法に関する記述が皆無なのだ。古龍の能力を比喩する上で、魔法のよう、と書かれることはあるが、それだけ。多くの龍が既知と語られており、中には目撃例が稀有なものも在ることが読み取れるのだが……………

「……………化物だろ、この手記の主」

飛竜、獣竜の単身討伐は当たり前。読み解けば、古龍の単独討伐までやっているという。

いや、この日記の主だけではない。それ以外の者も、流石に古龍相手は厳しいようだが、かなりの戦果を叩き出しており、モモンガに精神作用の沈静化が生じる程のメンタルダメージを与えている。成果自体はモモンガたちの方が上だろうが、ほぼ全員が単身、或いは四人以下で、彼らが苦勞して倒すようなモンスターたちを撃破しているのだ。

「うん、間違いなくこの世界じゃない」

こんな者たちがいれば、既にこの辺境に到達している筈だ。

「この世界の人間じゃないとして……………」

一度葉代わりに低ランクの指輪を一つ挟み、最後のページを見る。（しっかりと書き終えてる辺り、不慮の事故の類は無し、と）

そうなると、理由が判らない。

何があって、あの朽ちた船に日記が遺される事態になったのか。

「……………もつとしつかり読み直し」

『モモンガ様!』

「うおおう!」

突然の大声に驚きひっくり返る中、向こう側の声はお構いなし。

『至急、評議国に!——駄目、駄目ですから!コキキュートス、手を貸して!』

「な、ナーベラル?!何があった、ナーベラル!」

悲鳴染みた声を最後に途絶えた魔法に呆然となるも、すぐに変化が。

「——モモンガ様あ!」

「エントマ!?お前、評議国に」

「スクロール巻物で《ゲート転移門》を繋ぎました!時間が無いんです、お願いします!」

あまりに情報が無いが、大人しく頷く他ない。

「判った、判ったから!ちよつと待っていてくれ!」

素が漏れるのも構わず、読み途中の日記を畳み、開いたノートを置き、エントマの元へ。

全力疾走する彼女に並び、転移門に飛び込んだ先では——

「冗談はよしてくれ!?私は絶対に嫌だぞ!」

「しかし、ヴァイシオン様」

「しかし何もあるか!その剣は——」

珍しいことに、感情を剥き出しに叫ぶツアールと、それを必死に抑え込むコキキュートスたち。

恐怖の滲む彼の鎧の視線の先にあるのは……………見上げる程に巨大な、それこそガルガンチュアにしか使えないであろう巨大な剣。そして、アンデッドであるモモンガだからこそ、この中の誰よりも先に知覚出来た。ツアールが抱いたものと異なる、恐怖。シャルティアがいれば、同じ感情を抱いたことだろう。

「生きて、る……………?」

「……………はっ?」

黒い剣だ。黒く、巨大で……………不死者だからこそ判る、禍々しい生

命力に満ちた剣。

「ユグドラシルニモ、ソノヨウナ武具ハアツタカト」

「だが、異質過ぎるんだ。生きている、というより、なんていうんだろ
うな……………」

適切な形容を探り、モモンガは素の声色で続ける。

「……………斬り落とされた体の一部が、そのまま生き続けている、みたい
な」

黒き大剣は、脈動している訳ではない。寧ろ、一目でわかる程に損
壊し、朽ちかけている。

それなのに、生きている。本来その刀身を形成していたモノの大部
分を喪失し、剣として扱えぬ程深い傷を刻まれながら、確かに生きて、
朽ちたなりに再び全盛の姿に戻ろうとしているのだ。恐ろしいとい
う他なく、また悍ましいと評する他ない。救いがあるとすれば、そこ
に意思は無く、刻まれた傷故、完全な復元は不可能ということ。

「悍ましい……………ああ、その言葉で確信できたよ。信じ難い、信じたく
ないことだけど」

しかし、真相を口にすることは出来ない。それより先に、激しい揺
れに襲われた。

「な、ん!？」

「っ、話は後です！一度撤退を！」

「ゴノ剣ハ」

「絶対却下だ！と言いたいが、そもそもどうやって運ぶ？」

「……………お願い！」

エントマの指示に従い、翔蟲たちが飛翔。その糸を大剣の柄に巻き
付け、強引に引き倒す。

「転移先は？」

「ツアーが嫌なようだから、ウチに運び込もう———《転移門》！」

モモンガが繋いだのは、ナザリック表層。ふと視線を挙げれば、純
白の大波が迫る。

「……………雪崩か！」

「崩竜に何が……………いえ、今は撤退です！エントマさんたちはお先に

！」

竜騎士の指示に従い、最初にエントマたちと剣が。続けて他の者たちが転移門に消え、最後に、モモンガとツアーたち、そしてコキュートスが転移門を潜り、魔法を解除。雪崩を逃れた緊張から、多くの者たちが大きく脱力する中、モモンガはその中に、街で見かけた顔が紛れていることに気付いた。

「ところで、皆は何故、あそこに？」

「叶うなら、評議国内で完結したかったのだけどね」

幾らか冷静さを取り戻したツアーが、剣からあからさまに距離を取り、話始める。

「崩竜の活動に異常が見られたから、原因を探りに向かったんだ」

「ほうりゆう？」

『崩竜』ウカムルバス。活動一つで大規模な雪崩を引き起こす、生ける災厄さ。幸い、古龍ではないし、あくまで移動の結果として雪崩が起こる、という訳だから、在るだけで寒波を引き起こす氷龍なんかと比べると、幾らかマシな部類だ。特に、奴は一応、中部域に留まっていたからね」

さざりと告げられる情報に頭痛を覚えつつ、聞き捨てならない情報に切り込む。

「そんなモンスターに、異常？」

「ああ。これまでも、龍の不在と共に活動が活発化することはあったけど、今回は少々長過ぎる。そこに違和感があったのもそうだし、別の違和感もあったから、調べようと考えていたんだ。崩竜の活動で雪崩が生じるのはさつきも言った通りで、変に大移動されようものなら、辺境部が纏めて大規模な雪崩に飲まれかねない。だから、早急に調査する必要があったんだ」

「ふむ……では、評議国以外の者がいるのは」

「崩竜の異変に当てられてか、モンスターに異変が起きてね」

「運がないというか、何というか」

古龍に次ぐ、或いは匹敵する存在を恐れるのは、当然のことなのだろうか。ましてや、活動一つで大規模な雪崩を引き起こすとなれば、尚

更。その異変について調べよう、となれば、優れた者が欲しくなるのは、ある意味当然と言えた。

「最大限、龍の縄張りとなってる領域を迂回してはいたんだけど……いや、飛行船って凄いね」

「あ、船で向かったんだな。って、いや、待て。それ大丈夫なのか？」
「僕たち調査隊が降りた時点で戻って貰っているから、そこは大丈夫な筈だ」

そこで一旦領き、モモンガは改めて巨大剣へと視線を移す。

「それで、これは」

「異変の元凶じゃないかな」

「即答か」

「即答するさ！ああ、忌々しい……！」

口調に反し、滲み出すのは、怨嗟ではなく恐怖。ツアーにしては珍しい反応だ。

「……………おい、まさか」

そこまでのナニカを考え、一つ思い浮かぶ。

異世界から現れ、多くを焼き払った龍。ツァインドルクスが知る、最強最悪のモンスター。

「……………ああ。鎧で接触するまで感知できなかつたけど、間違いない」
ぞわり、と肌が粟立つ錯覚。肌もないのに、生身だった頃と大差ない感覚が襲い掛かる。

『黒龍』……………ミラボレアス」

「恐ろしく薄れているけど、それ以外ありえない」

幸い、他の者は聞き耳を立てていない。それよりも、巨大な剣を、改めて眺めている。

「……………実は、こちら、というより、ローブルでも発見があつてな——」

*

「クロスボウ、の類に似てますが……………ふむ」

大工房。

分解した、朽ち果てたナニカの一つから、その機構を推察したパン

ドラは唸る。

「射出する物は矢の類より大きく……それにこれは」

巻き取る機構の、名残と思しき物。それが、もう一つの射出機構と共に存在していた。

前腕に取り付けられる程度のサイズ故、出力等に疑問が生じるが、かなりの部分が損壊している為、断言はできないし、未知の技術で高い出力を実現していた可能性も捨てきれない。そうになると、今度はその用途について幾つか疑問が浮かび上がるわけだが。

(小型で比較的軽量……まさか、投擲の代替?)

パンドラが目を細める中、工房からは落胆に近い声。

「なんとというか、俺らが作ってるモンとあんま大差ねえような……」

「けど、こいつは俺らも知らねえぞ。ほれ、音が鳴るの」

「こんなでけえ楽器、何に使うってんだ?」

一見風化し、朽ち果てたようなソレは、元の音を残していないながら、確かに音を奏でる機能を有していた。不幸にも、無作為に鳴らすだけのそれが意味のある旋律となることは無く、それ故に誰もその異常性、或いは本質に気付けない中、彼らはその謎の巨大楽器の、風化して尚複雑に噛み合うパーツの分解に取り掛かる。

そんな中、高齢なドワーフの一人が、ポンと手を叩く。

「それ、もしかしてアングラウス殿に依頼されてるアレと同じなんじゃないかね?」

『……』

沈黙が降り、視線が一点に集まる。

「……確か、奇妙な船の残骸から発見されたんだよな?」

「らしいのお……うむ」

「調べ直すぞ!もしかしたら、何かヒントがあるかもしれない!」

「加工の痕跡を探すぞ!それがあるだけで、大分気が楽になる!」

素手で触るのを躊躇うソレを慎重に調べる一方では、『大差ない』とも言われている物の調査が進められており、それを進める者の一人が、退屈な中で抱いた感想の違和感に気付く。その手を止めた彼は難しい顔で思索し、少々の視線を集める。

「……………なんで、俺たちが苦勞して作ったのと同等……………いや、ほぼ同じのが、こんなに？」

そう、ほぼ同じ……………ほぼ大差ない、と感じる程に、酷似しているのだ。

随分と朽ち、風化しているが、それでも判るほどに似ているとなれば、流石に違和感も覚えるというもの。そして、その損壞具合が彼らでも直せる程度に収まっているとなれば、時間と共に疑問は肥大し、拡散していく。彼らだけでは辿り着けなかったであろう技術を、惜しみなく注ぎ込んだものと同質の武器が、何故こうも数多く存在しているのか、と。

（成程。モモンガ様が仰っていた通り、異世界からのものと見るべきでしょう。ですが）

ずば抜けて高い知性が、更に深い場所まで探りにかかる。

（我々の方が、恐らく後発……………つまり、これらと同じものに収束した？何故？）

これらの由来となった世界であれば、画一化された規格であると納得も出来る。

では、何故彼らにまで、その規格が共有されたのか？その理由を考えようとすれば、八欲王由来とされる位階魔法の存在に思い至り、うすら寒い予感が脳裏を過る。世界規模の変化を起こす手段に心当たりがあり、且つ古龍という種がそれに対抗できる力を有している、と知るのだから、その結論は当然の帰結と言えよう。

（……………私たちの想像より、遙かに上の存在がいる？）

寒気を感じた彼は、その結論を一時振り払い、眼前の未知に意識を向けることを選んだ。

AFT. 09—危険地帯に眠るモノ

雪崩で舞い上がった雪の中、白き神は後ろ脚で大きく立ち上がり、彼方を睨む。

忌むべき剣。使い手こそ存在しないが、その脅威は理解できる。故に、破壊せんとした。

「オオオオオオオオオオオオ——ツ!!!!!!」

周囲の雪が吹き飛ぶほどの咆哮に呼応するように、広範囲で雪崩が巻き起こる。

忌むべき剣が、それを持つ者が二度と踏み入らぬよう。そんな意図すら、感じさせて。

*

ナザリックに帰還した迷いメイドたちが、様々な石をテーブルに広げる。

「ふー………よしっ!」

「いやあの、よしじゃないんだけど」

「何日かかったと思ってるの!?!」

「えーつと………えへ」

彼女たち三人が遭難している間に、氷原で発見された巨大剣はナザリック第四階層に撤収。

その他の遺物の解読、調査も進み、モモンガは疎かパンドラ、デミウルゴスに加え、平常時にはナザリックの諸業務を担当しているアルベドすら動員した資料の作成などの真つ最中。龍と同じ世界に由来する、と思しい上、様々な情報の詰まったそれらには、それだけの価値があるという判断だろう。実際、巨大剣を除く物であっても、この世界に有用な情報の宝庫だったのだから。

メイドたちからも手伝いに出ている者がいるが、そうでない者も一定数いる。無論サボっているのではなく、今回発見したものと同種の遺物の搜索や、迷子になった同僚の搜索に加え、グランセル氷原南部域に異変が無いかを調べに向いた者たちが休暇を取っているだけだ。勤労意欲もあるが、過酷な業務を終えた以上、働くわけにもいか

ず、大人しく休息している、というのが、智者たちの一致している見解だ。

「たっだいまー!.....あ、戻ってたんだ」

「お帰.....なにそれ」

氷原の調査に向かっていた者たちが、びしょ濡れで、巨大な貝を抱えて帰還する。見れば、支給された袋の限界まで、つまり合計500キロオーバーまで色々収集したらしく、他の者たちも色々抱えている。思わず呆気にと取られている間に、海産物らしきソレと、限界まで収集物を詰め込んだ革袋をテーブルに置き、氷原組が床に倒れ伏す。

「さつつつむかったあ!」

「寒中水泳、ダメ、絶対.....死ぬかと思った」

「サメカエルに飲まれたときは、本気で死んだかと.....」

「絶対そんな名前じゃないけどね?アレ.....ごめん、ちよつと温まってくる」

「あ、うん」

互いに互いを支え合い、すっかり血の気が失せ、震えている面々が部屋を後にする。

「.....なんであんなったんでしょうね」

「さ、さあ.....飲み込まれた、って言ってたし、それを助けようとして、とか?」

「ああ、有り得そう.....とりあえず、先に軽く見てみましょう」

袋を漁ると、見覚えのない鉱石類などが山盛り。比率は大分落ちるが、中には随分と朽ち果てた様子の骨から、比較的に見覚えのある植物類まで見られる等、手あたり次第感が強く表れている。が、手探りなのは基本的にどこも同じであるのだから、そう悪いスタンスではない。どころか、鉱石類が豊富である点からして、早々に追及すべきだったと言えよう。

「これ、キュウ.....ひゃああ?!なにになになに!」

「え、生きてるの?生き物なの?っていうか、なんなのこれ.....ナマコ?」

「ひゃつ?!え、イカ?っていうか、このスミ、なんかカラフルな.....」

「痛あつ!?え、ちよ、なになにキモいキモいキモい!?」

「……………それにしたつて、見境が無さ過ぎるようだが。」

「げえつ!?あいつら、なんでこうヤバそうな虫を何もせず放り込むの!?!」

「ちよ、あの馬鹿ども呼んできて!あいつら、なんてもの持ち帰ってんの!?!」

クモにも、サソリにも似た、明らかに危険な虫数種を急ぎ適当な箱で抑え込み、怒号を上げる。寒さでネジがぶっ飛んだのか、元々そういうメンバーの集まりだったのかは定かではないが、これはいけない。一瞬、これがあるから『先に見ておいて』等言わなかったのか、と脳裏を過るが、それにしたつて説明不足にも程がある。せめて何か言い残していい、と言いたい。

最低限の報告も忠告も無かった時点で、有罪である。

「あ、じゃああたし、鑑定できる子探してきますね」

「ついでに、出来る限り人手を集めて。馬鹿どもが戻るまで、一旦作業は中止よ」

既に、袋の中身の確認作業は中断されている。

「こっちはこの生き物の飼育用に水槽を……………水どうしよ」

「それならここに、何故か海水が詰まった袋が」

『なんであるのに入れてないの!?!』

本格的に精神衛生が心配になり始める情報が転がり出てくる中、やけに重い革袋を開け

「……………宝つ!?!」

「本当になにがどうなってるの!?!」

そこに詰まる、ナザリックが有するそれらに匹敵する輝きを放つ、宝物の数々を目にした。

「……………これ、多分」

「モモンガ様に報告ね……………多分、あまり意味は無いと思うけど」

海水共々砂利や海藻が入った袋から、海藻と宝物だけ取り出し、生物を放り込む。

「これらがあつたのは多分海中で、しかもあの氷原の海中でしょ?」

「無理ね」

「無理ですね」

「あの子たち、なんで生きてるの?」

改めて、仲間たちの生還の奇跡に驚く、より呆れが先に来てしまう。飲まれた、というメイドが生還できた理由もだが、収集物の問題が先行してしまうのだ。

「……………詳細は、魔法で鑑定できる子が来るまでお預けね」

「色々な意味で、頭が痛い結果になりそうね」

程なくして、非番のメイドたちが集まる。念のためにと、万全の装備を持ち出している者もいれば、過剰火力で部屋を破壊しないようにと、敢えてメイド服姿で来ている者、大雑把な説明に対し、万全の備えとして様々な備品を引つ張り出した者もいるなど、それぞれの性格やスタンスが見て取れる。そこまで警戒されているとはつゆ知らず、大分遅れて湯上がりの一行が現れる。

「弁明はあるかしら?」

「……………え、まさか」

「あ、そういえば、何も言ってなかったっけ」

次の瞬間、飛竜の咆哮を思わせる怒号が轟く。

たつぷり十数分かかった説教が終わると、漸く本格的な調査が始まる。最大500キロまでを収納することが出来る、インフイニティ・ハヴァアサツク無限の背負い袋が複数満杯になる程に収集された、グランセル氷原にて発見された物品の数々の調査は、集まったメイドたちを大きく四つのグループに分けて、それぞれに発見者たちを割り振ったうえで行われる。嚴重が過ぎる警戒態勢に、採取者たちは辟易とした顔になり――

「あれ、その箱は?」

「奇妙な虫を突っ込んでるんだけど」

「あ、そうだった!虫かご、誰か!アレ、噛まれたら死ぬから」

「はあ!」

空気が凍る中、適当な重石で抑え込まれている箱を持ち上げたメイドたちが猛毒を秘めた危険な虫を素手で掴み、大慌てで持ち込まれた籠に放り込む。噛まれないよう、細心の注意を払い蓋を閉じた彼女た

ちが一息吐き、続けて背負い袋の中から、糸を巻き付けた枯れ枝を取り出す。その意図が判らない他の仲間たちにそれを渡した者は、静かに説明を始める。

「これ、結構丈夫なの。だから、何かに使えるかも、と思っただけ」

「それにしたって、先に説明なり注意なりしなさいよ！」

「ごめん、当事者抜きで先にやられてるとは思わなくて」

そこからは、トントン拍子で調査が進む。

胡瓜のような『ウリナマコ』、船にも似た貝殻に守られた『イカダガキ』に始まる、巨大な牡蠣たちと、食用になりそうな生物たち。特定能力を向上させる墨を吐き出す『シラヌイカ』への驚愕から始まり、モンスターの子体であるフルフルベビーに悲鳴が上がり、宝石のように綺麗なだけの『冷寒ヒヤボックリ』『銀嶺氷瑞花』などの美しさに感嘆の息を零し、食用にもなるフキノトウに肩を落とすなど、本当に様々。

「『アイシスメタル』……………これ、どこで手に入れたの?」

「海中の洞窟」

「よく凍死しなかったわね……………」

「回復ポーションがぶ飲みで何とかなるもんですね」

「本当によく生きてるわね!？」

のほほんと振る舞っているが、やっていることはとんでもない、どころではなかった。

「それに、モンスターに飲まれたって」

「お腹の中で、ひたすら徹甲榴弾やら拡散弾を乱射してましたから」

「うわあ……………」

引いたのはその行動にか、それとも行動力にか。

他にも要因はあったのだろうか、深く聞こうとは思わない。聞いたところで、役立てられる者がどれだけ居るのかなど、想像する間でもないからだ。仮にモンスターに丸飲みにされたとして、そこから冷静に体内を攻撃し、自傷覚悟で脱出するとなれば、余程肝が据わっていないければ出来ないし、出来たとしても、生還できるかは運の要素が強いだろうことは、想像に難くない。

他者に心得として教授するには、あまりに不安要素が多く、また

り合っている。

「火山環境で生じる、つてことかしら？」

「けど、他の場所では発見されてませんよ？」

「とにかく、これはモモンガ様に報告で………」

原珠、原石を分け、一度大きく息を吐く。予想外の連続で、思わぬ精神的疲労を負った形だ。

「問題は、燃石炭以上に安定供給が望めそうにないこと、ね」

燃石炭は、深部域以外でも発見できている。が、これらは現状、深部のみ。

供給の難しきは群を抜き、凡そ考え得る有用性から逆算しても、満足に行き渡ることにはほぼほぼ在り得ない。外部に情報として開示したところで、数多く存在している冒険者たちに、満足に行き渡ることはずありえまい。そう考えると、果たして外部に公開していいものか、と悩んでしまうのだ。

無論、辺境を離れば、と考えているところはあるが、そこから先で安定供給があると楽観視も出来ず、かといつて報告を上げない訳にもいかない。貴重な情報として共有して欲しいところであるし、それを原因とした争いもそう起こらないと考えてはいるが、やはりいい気分ではない。

「それなら、各国で情報とサンプルを共有して、複製できないか調査する、とか？」

「その手があったー！」

可能性の多少は別として、試す価値としても、情報開示の理由としても十分だ。

「それじゃあ、他を調べてから——」

「いや、この二つが最優先でしょ」

「他は食材だったりで、優先度は大分下がると思うよ」

メイドたちの議論の末、原珠と原石の優先順位が最高だと判断され、発見したメンバーと数名が報告の為、部屋を出る。要点を脳内で整理しながら進む一行を見送り、室内のメイドたちは再び鑑定作業に移る。低位の鑑定魔法であっても、名称を含め相応の調査は可能であ

り、彼女たちもそれを理解しているからこそ、出来る最善を尽くそうと努力するのだ。

もう、種族レベルのみであった、か弱いメイドたちの姿は無い。そこに在るのは、逞しく成長した一角の戦士たちであり、この世界を生きる命だ。

「ところで、モンスターの襲撃とかは無かったの？」

「全部逃げましたけど？なまはげみたいなモンスターとか、人魚みたいなモンスターとか！」

「あそこ、陸地と海辺との差が意外と小さいのよねー……と、これなんだろ」

「ちよつと貸してねー。ふむふむ、『センシヨク草・黒』で……はあ!？」

そして。彼女たちは再び、一つの大発見をしたのだった。

AFT. 10―拓かれていく世界

多くの発見が齎されても、多くの者は変わることなく、日々を生きる。

「……………変わった、なあ」

だが、その活動が変わらずとも、それによる視覚的な変化は劇的だ。

「先日は、火竜が討伐されたとか」

「耳に入っているさ」

これまでより格段に安全に、安定して、大型のモンスターに対処できるとなった。

また、加工技術も広まり始めたことで、モンスター素材を用いた武器を纏う冒険者が増え、視覚的にも華やかになってきた。まだ冒険者チーム複数がかりが一般的であるが、大型飛竜や大型獣竜の討伐報告も増えており、死傷者は反比例するように減少傾向に。現在では、より迅速な移動を可能とする為、大人数を長距離移動可能な転移マジックアイテムと、小型で高速の飛行船開発が推し進められているほどだ。

「メイドたちも順調に装備の更新を進めているそうだな。いい傾向じゃないか」

個々人の趣向、戦闘スタイルに合わせ、武器も様々なものが使われるようになった。

物理を重視する者から、属性を重視する者。サポートに徹することに主眼を置く者まで、個性が強く現れるようになったことを、モモンガは大層喜んだ。また、彼女たちの調査が実を結びつつあり、既にローブル熔山帯の中でも調査が進んでいる浅いエリア、並びにグランセル氷原の南端部の調査が可能となっている。

その過程で経た戦闘の数々による成果が、メイドたちの装備にも大いに反映されているのだ。

『アインズ・ウール・ゴウン』に栄え在れ、なんてな」

この街の価値は、何時かは貿易の中継都市にまで落ちるだろう。

だが、それでいい。全ての国家が等しく力を持たなければ、先によ

うな災禍に耐えられない。

(ここから外に踏み出す以上、戦力はあつて困らない)

現在、エイヴアーシャー南、並びに帝国東方、大砂漠南方と、辺境から他方に通ずる領域の調査が行われている。加えるなら、これらにはそれぞれの国の精鋭も同行しており、船団も相応規模のものが組まれており、ナザリックの者からも多数参加している。日々の定時報告を书面化し、部下たちをフル活用して関係各所に通達するのが、モモンガたちが請け負っている仕事だ。

「こちら、昼の定時報告の书面化が完了しました」

「うむ。早速目を通そう」

持ち込まれた情報に目を通し、自分用のメモを並行して作成する。

(大砂漠周りは、かなり荒廃している、と………弩岩竜によるものか?)

その恐ろしさを実感しながら、続けて気になる情報に気付く。

「砂塵に紛れて、飛竜を襲っていた古龍らしき影?………冗談だろ?」

信じ難いことに、と前置きされているが、飛竜を仕留めた後、そのままその亡骸を啜えて飛び、南下していったという。また、その影を警戒し、船団は航行速度を大きく落とすとの報告も付け加えられている。それを除けば、一面の大砂漠が続くのみであるようで、特筆すべき情報は見られない。大砂漠外縁部に関しても、やはり砂漠であるからか、生息モンスターに大きな変化はないようだ。

続けて、エイヴアーシャー南部の調査記録に目を通せば、毒々しい霧に包まれた森を脱したとの報せ。古龍の支配域と推定される土地を脱したことに安堵しながら、その先に広がるという水源豊かな土地についての詳細に目を通す。といつても、まだ遭遇間もないとのこと、情報らしい情報はない。

最後に手に取ったのは、東方からの報告書。といつても、あの災禍の影響か、まだ荒廃したままであるようで、最も遠くまで進んでいるようだ。一部、不自然なクレーターや焦土の報告があった以外特筆すべき点は見受けられず、内容は最も薄いと言える。が、同時に最も警戒すべき地のものである以上、油断もしていられないのだが。

「うむ、問題ないな。このまま複製して、方々に提出しておいてくれ」
「畏まりました」

報告書を渡し、複製と各方面への提出を指示。こういった役割では、魔法面で大きく優れた彼らに白羽の矢が立つ。王国魔術師組合、帝国魔法省、竜王国魔導研究所等、高位階魔法への挑戦をしている機関は多いのだが、やはり現状では力不足。数年から数十年は彼らの役割となるだろうこの職務だが、最初に情報が入るといふ立場は悪くない。

事実、最大戦力に最初に重大情報が渡るといふのは、スムーズな初動に繋がる。

（今のところ、異常は無しと……有難い限りだ）

異世界の遺物で、竜たちがかつて相対してきた者の頂を目の当たりにしたものの、この世界では当然その域に至っていない。万一古龍が現れば、規模次第であるが辺境諸国の総力で以て対処に当たる必要が出てくる。そうでなくとも、手を広げる以上は、脅威を発見した場合に相応の対処が必要となる為、何も無いに越したことは無いのだ。（流石に、まだあの規模の大決戦を仕掛けられる余裕はない。そういう意味でも、精鋭を引っ張り出せば何とかなる範囲で済んで欲しいんだよな……古龍辺りは本気で勘弁だし、砦蟹級の超大型モンスターも辛いんだよなあ）

「……気分転換でもしたいな」

そう零したところで、もうメイドたちが取り乱すことは無い。

「それでは、やはり？」

「ああ。部下たちのお陰で得た時間だ、自己研鑽に使うさ」

彼に割り当てられる業務量はそう多くなく、そうした空き時間は基本、自己研鑽に用いている。メイドたち程成長は実感できていないにせよ、戦績は相応のものを重ねており、戦士用の装備も既に作成済み。ついでに言えば、戦場では支配者の地位など意味を成さない、という意味でも、解放感があるのだろう。

そもそも、戦場で地位を持ち出すような人間は、高い地位に就くことが出来ない世界だが。

「それでは、本日の秘書官としてお供させていただきますが、よろしいですね？」

「丁度、頼もうと思っていたところさ」

少し時間を置いて、メイド数名と共に装備を変えたモモンガは、書き置きを残し転移した。

「うへえ………実際に見ると、話以上にヤバい雰囲気だね」

エイヴァーシャー大森林、南端。

空からの情報を踏まえ、実地調査に来た一行が抱いた感想が、それであった。

「これ、生きていんすね………気色悪い」

「え、あれ、霧じゃないの？」

「生命の気配を感じるでありんす。ただの霧じゃないのは確かでありんしょう」

スキルを発動し、シャルティアはアンデッドモンスターを複数召喚。それらをつつませれば、すぐに異常が発生。問題は、その異常が彼女の想定外のものであり、続けて起きた現象もまた、彼女の予想の埒外であったことか。

「なっ、はあ!？」

「ちよつと、今度は何に!？」

「………喰われた」

送り込んだ吸血鬼ヴァンパイア・ウルフの狼も、古種吸血蝙蝠エルダー・ヴァンパイア・バットも、最初に制御を奪取しようとして手を伸ばされた。

当然、レベル100NPCである彼女は自身に対する支配にも、眷属に対する支配権の奪取にも完全な耐性を有しているが、制御できないと判断された次の動きが、完全に想定外。白とも黄色とも取れる、汚いとも悍ましいとも感じられる濃霧の中に踏み入ったアンデッドたちへと、その霧を形成するナニカが一斉に群がったのだ。

「は、はあ!?!そんな大型のモンスターの気配なんて」

「霧でありんす。あの霧、生きているとは思っていませんでしたが、それどころじゃないでありんすね」

起きた現象自体は、微生物による有機物分解に近い。が、その速度が異常であり、魔法的保護を貫き、アンデッドを仕留める程。そして、彼女は察知出来ていないが、この濃霧は微生物と、更に龍と共生する微生物とは別に、菌類の胞子が消え去る前のアンデッドの肉体に根付いていた。先の捕食により得たエネルギーを受け取り、爆発的に繁殖した菌類は、力尽き制御の途切れたアンデッドの器を傀儡として、本能のままに活動を開始。

「ッー」

胞子嚢を複数身に纏う、かつての眷属。濃霧を貫き強襲したそれを、シャルティアは即座に刺し貫く。その肉体が消失すれば、胞子嚢は最期の悪あがきとばかりに胞子を放出し、それを危険と察した彼女は、魔法により一気に焼き払う。

「ちよ、喰われたんじゃないの?!」

「いいから、下がってろー!」

「——ギョオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!」

その事態に最も強い危機感を抱き、行動を起こしたのは、他ならぬエイヴァーシャアの竜。

飛来した、ごく普通の『棘竜』エスピナスは、シャルティアを巻き込むことも厭わず大地を破砕して制動をかけ、致死の毒炎を解き放つ。アンデッドの肉体を炎が焼き払い、続けて飛散する胞子も焼くと同時に、その強力な毒素で僅かな残留も許さない。一瞬、シャルティアに憤りを宿す視線を突き刺すも、すぐ眼前の脅威への対処を優先した彼は、手あたり次第に毒炎を霧の奥に放ち、爆発、大炎上を引き起こす。

「な、嘘!」

「正気でありんすか!」

その炎は、何とエイヴァーシャーにも及び、火災を引き起こす。行動原理はどこまでも単純で、住処たる大森林を守るため。その為に、比較的浅い領域の樹木で胞子が繁殖する危険を排除するべく、根こそぎ毒炎で焼き払うのだ。そのついでに、瘴気に包まれた『死の森』をも焼き払うのは、当然相手の勢力圏を削ぐ為。その大役が叶うの

は、血の一滴まで猛毒の棘竜の、瘴気も胞子も受け付けぬ肉体あつてこそであり、このエイヴァーシャーの主たる辿異種棘竜がどつしり構えているからこそ。

だが、死の森の主とて、やられてばかりで黙っでもいてくれない。

「ギユオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!」

「なんか来た?!」

「気持ち悪いでありんすねえ!」

全身に胞子囊を付着させた、体毛一つない真つ赤な皮膚の牙竜。

のちに『惨爪竜』オドガロンと名付けられるモンスターのゾンビが、胞子囊と瘴気を纏うゾンビモンスターたちと共に濃霧より躍り出て、棘竜へと襲い掛かる。血流増加により強度の落ちている重殻に、六本の鋭爪による傷が刻まれるが、テリトリーを侵され激怒している棘竜は怯みもしない。

「ギユアアアアアアアッ!!!」

「グルオオオオッ?!」

「ギシャアアアアアアッ!!!」

『痺賊竜』ドスギルオスとその配下のギルオスたちが続けて躍りかかるが、鋭利な秘棘を無数に持つ靱尾を叩きつけられ、首根つこに噛み付かれた惨爪竜を救出するどころか、ギルオスたちは一撃で行動不能なほどぐちゃぐちゃにされ、痺賊竜もまた、立つことすらままならない程に肉体を損壊。

アンデッド相手に毒は通じないが、炎はゾンビ系の弱点の一つ。それでいて、身体能力も十分に高い棘竜種を相手取るには、生前より知能も身体能力も低下している『屍套龍』配下のアンデッドモンスターたちはあまりに弱い。周囲が毒炎に包まれていなければ、瘴気と胞子を飛散させる爆弾代わりにもなったのだが……

「《大治癒》!」

浅い傷を癒し、薄く纏わりついていた瘴気と胞子を浄化する魔法。

小さく鼻を鳴らした棘竜の顎が、惨爪竜の頭と体を泣き別れさせれば、続けて放たれる毒炎が、侵略者の一切を焼き尽くす。瘴気は飛散せず、胞子は毒と炎で死滅し、骸は骨も残さず灰燼と化し、灼熱が生

む致死毒混じりの暴風に散らされる。既にシャルティア、アウラ共に空高くへと退避していたお陰で無傷で済んだが、巻き込まれていればアウラの命が危なかっただろう。

「要報告でありんすね。アベリオンとスレインには死活問題でありんしょう」

「うん。あの気持ち悪いモンスターと、あんたの眷属の件併せて、モモンガ様にも伝えないと」

「幾らか職業構成が変わったとはいえ、依然モモンガは死霊術師系のビルドのまま。」

緊急時の非常手段が、事実上封印されてしまう相手の存在を伝えることは、そのまま主の生死に直結する一大問題だ。現状、直接的に戦闘する可能性はあまりなく、また戦闘することになった場合、ほぼ相手のテリトリーで戦うことが確定する為、一見するとそう重要でないように思える。

が、彼女たちは、死を纏う屍套龍が如何なる力を有する存在なのか、死の森の主が如何に特異な存在であるかを知らない。その実力自体が辿異種たる棘竜に大きく劣る個体であること、その反面組織力で大きく差をつけていることも、当然知らない。そして、無知を理解しているからこそ、早急により知恵の回る者たちに伝え、推察なり調査なりをして貰おうと考えたのだ。

「気になるところは幾つかあるけど、今はこの情報を持ち帰るのが最優先でありんすね」

「……………だね。あそこなんか気になるけど、藪をつついて化物を出したくないし」

空高くに浮かぶ二人の視線が向けられるのは、荒廃した湖畔の都市。今は亡きエルフ国の王都に鎮座する、朽ち果てた王城の空を舞う白銀と黄金に、強い警戒心を抱く。その麓に広がる廃都市は小型モンスター住処となり果て、かつて死の湖となった三日月湖も、自然の浄化能力の凄まじさを示すかのように活気を取り戻している。

「あの空を飛んでるのは……………金色の雌火竜と、銀色の火竜？」

「随分とおめでたい色でありんすねえ……………それで生き残ってる分、

「笑えんせんが」

「……………本当に、ね」

強張ったその声を訝しめば、アウラの顔から随分と血の気が失せている。

（あの光、なに？青白く光って……………絶対ヤバいわよね、あれ）

「……………撤収しんす」

アウラの乗る魔獣を掴み、転移魔法でその場を去る。

空を見上げていた棘竜は、先の襲撃の元凶が去ったことを確認次第敵意を収め、毒炎を一度その全身に被る。その身に浴びた孢子、瘴気を毒と炎で除去した後、古龍に並ぶ力を有する飛竜は寢床を目指して飛び立つ。その行動はあまりに手慣れたものであり、先の諍いが日常的に起きていることを物語っていた。

AFT. 11―確たる生存のために

ドワーフ王国にて開かれた、技術者たちの会合――

(基盤を整えはしましたが、予想以上ですね……いやはや、本当に) この世界の者は素晴らしいと、デミウルゴスは口端が緩むのを抑えるのに苦労させられた。

「これらだが、完成した鎧を加工したモンになる」

まずは、ドワーフたちが提示した小さな装飾品。加工元の装備の色が残るソレは、一度装備として完成させる必要がある代わり、素材となった装備の有するスキルを宿することが出来るという。一部の『原珠』『原石』を加工した『珠』『護石』を各国にサンプルとして供与したことによるものだが、『原珠、原石を用いない』という理不尽極まる前提を平然と覆して見せたのだから、驚嘆する他ない。

「それと、現状武器にしか使えんが、ルーンを組み込んだ代物じゃ。ローブルやグランセルの鉱物を使えば、より高性能なモンが作れるようになるな。ただまあ、原形に加工するまでの手間とルーンを刻む手間とで、そう軽々作れるモンじゃないのが、のお」

続けてお出しされたのは、ルーンによる魔化技術を応用した装飾品。流石は、と誰もが感嘆する中で、それに臆せず自国の成果を報告したのは、王国からの使者。

「こちら、魔術師組合が完成させた代物です。森の賢王様の発案された錬成手法に、天廻龍の力に侵されたモンスターから得られた結晶を投入したことによる産物となります。この手法ですと、モンスターの素材の必要量が大きく減少するのが大きなメリットですね」

(あの結晶にそんな力が!?しかし、ナザリックの在庫は………!)

ナザリックが得た狂竜結晶の大部分は、先の大戦で消し飛んだユグドラシル金貨の補充に当てた為、在庫はカツカツ。森の賢王が最初に発見した、モンスターの鱗、皮、爪牙等を素材とした手法では、その消費量の多さが課題の一つでもあったため、その改善が齎す恩恵は計り知れない。

「問題は、結晶の補充が困難であること。それと、運用に細心の注意が

必要なことですね」

王国の代表、ラナーは微笑み、そう話を締めくくる。続けて口を開くのは、帝国の代表だ。

「我が国でも、同様の成果を得られました。が、その欠点を克服するべく、フルーダ様の主導で研究を行っております。現在開発中のものの試作品となるこちらの錬金油、狂竜結晶を直接投入する場合には劣りますが、こちらも素材の必要量を大きく減らすことに成功しています」

飛行船の改良に尽力しているナザリック、竜王国と、各国の支援に尽力する法国を除く各国が、現状の成果を報告する中、毛色が違うのは、アベリオンの持ち出した成果。森の賢王が最初に編み出した錬金技法を参照とした他諸国と異なり、ローブルの地で得られる鉱物資源に独自でアプローチを行い、一つの成果を出していたのだ。

「錬金術による試行の中で生まれた『武器石』を加工した物だ。名の通り、武器の強化ができる」

「といっても、基礎的な性能のみだが、と笑うが、大発見に違いはない。」

「……………我が国では、旧来の魔化と同様の効果を秘めた物の開発に成功しました。が、現状では、必要な素材こそ低ランクのもので済んでいます。その分性能もあまり高くなく」

「この場で、性能の多少は重要ではありませんよ。今回重要なのは、どのような試みが成功して、どのような課題が発見されたか、です。私たちは皆、異なる勢力に身を置いておりますが、求める先は同じなのです。決して恥ずことも、臆する必要もないのですよ」

委縮気味の都市国家連合の代表を、至高なる叡智を持つ悪魔は優しく諭す。

「皆様の得られた結果を報告していただいたところで、次に移りましょう」

司会を務める彼がそう告げれば、続けて王国の使者、ラナーが進行を引き継ぐ。

「そうなりますと、やはり国ごとで動くのは、非効率的かと思われま

ね」

音頭を取るラナーがその頭脳をフル回転させる一方、デミウルゴスもまた、異なる形で超越者の叡智をフル活用。頭脳のレベルで言えば対等な二人だが、基幹となる常識の違いから、その思考にも相応の差異がある。それ故に、ナザリツクの三人もラナーも、互いに知恵者であることを確信するには至れないでいる。

もつと言えば、ラナーは剛種鋼龍の出現、砦蟹の襲撃に、帝国での一大決戦への援助、その後の変化への対応を始め、兄たちや諸貴族の見解を参考に最適解を探るのに忙しく。デミウルゴスたち知恵者もまた、未知なる環境への適応を始めやることが多く、互いに個人まで目を向ける余裕が無かったことも、原因の一つだろう。

「この際、合同研究所でも設立いたしましょうか？」

「そちらについては、陛下も既に考えておられました」

「あら、流石はジルクニフ様ですね」

笑っているラナーにとつては、想定内。寧ろ、相手が人間である分、やりやすくすらあった。

（ああ、気が楽でいい……………予測も予想も出来ない存在を相手にするより、余程）

手掛かりがあるならば、ヒトの行いならば幾らでも予想できる。事実、森の賢王が編み出した、最初の錬金技法が周知された時点で、ラナーはジルクニフが打つだろう手を全て予想していた。その上で、フルルータという王国に無い強力な魔法使いの手腕を計算に入れ、ある種の信頼から、既に根回しを済ませていた。

対するジルクニフも、ラナーに対するある種の信頼から、既に手筈を整えている。

（流通、交通を考慮するのであれば、アインズ・ウール・ゴウンが最善ですが）

「合同の研究所を設立するのであれば、ドワーフ国がよろしいのではないかしら？」

「流通の活性化には、丁度よいかと」

「そりゃあ、願ったり叶ったりだ。こっちもこっちで、手が欲しいとこ

ろだからな」

ドワーフ国は金属流通、武器加工等で大きくリードを取っているが、モンスターの被害が皆無である都合、冒険者等の往来が殆どない。アインズ・ウール・ゴウンに次ぐレベルまで加工技術が高まっていることもあり、これを機に更なる拡大を求めるドワーフ国からしてみれば、人の往来の増加に繋がるものには積極的に手を伸ばしたいところ。

周辺諸国としても、ドワーフ国の拡大に伴う鉱物資源産出量の増加は、全力で支援したい。

「それは、有り難いですね。カルサナスからアインズ・ウール・ゴウンは、少々遠いもので」

「誰もが納得できる提案とは、難しいものだ。が、我としても、異存はない」

最も離れているアベリオンの者が苦笑を浮かべるが、異論を唱えることは無い。この狭い辺境であろうとも、峻嶮な山岳が存在している以上、どこからでも等しく往復しやすい場所、というのはまずない。そういった意味で、平時苦心しているカルサナスの者たちを思いやり、また万一アインズ・ウール・ゴウンに甚大な被害が生じた際に機能停止しないよう、ラナーの提案を飲んだ。

「いい提案です。それでは、こちらからもそのように手配しましょう」
そして、モモンガの御膝元の街を選ばなかったその判断を、デミウルゴスは受け入れた。

（将来的に、我々だけではどうにもならない日が、必ず来る。他方の生存圏と接触を果たすことが出来れば、私たちの届かない場所で行動を起こす必要も出る以上、今の内から重要箇所の分散と、明確な伝達網の構築をしておくべきでしょう）

新たな交易の要所が出来たのはいいが、そこに多くが集中し過ぎるのは問題だ。

万一にも落とされ、その瞬間に多くに支障が出るような環境は、到底容認できないのだから。

*

飛び散る毒液に構うことなく、刀の一撃でゴム質の皮を裂く。

「ギュアアアアアアアアッ?!?!?!」

「お見事です、モモンガ様!」

「いや、建御雷さんなら、もっとうまくやるさー!」

相手は『毒怪鳥』ゲリヨス。危険な毒と、ゴム質の外皮を併せ持つ、近頃では討伐例も増えつつある鳥竜種モンスターであり、ここボウン沼地における厄介者の一種。特に、好奇心旺盛な性格と、沼地以外でも生息可能な生態から、特に商人などへの被害が多いモンスターでもあり、モモンガたちが受けたのも、そういった被害者からの依頼だ。

「流通が滞ると、あたしたちも困るの、よッ!」

「ギュアオオオッ!」

(私情……いや、健全な変化だと思おう)

ナザリック外の、市場の変化に一喜一憂できるようになったメイドの変化を噛み締めつつ、頭に叩き込まれる矢に怯んだ毒怪鳥へと、身の丈ほどの太刀による斬撃を続けて叩き込む。アンデッド基本特性である、毒への無効耐性を盾にした果敢な攻撃は、傍目にはやはり心臓に悪いが、毒と肉弾戦しか攻撃手段のないこのモンスター相手には、非常に有効だ。

(ただ、怪鳥と違って動きが独特過ぎて、な……!)

問題があるとすれば、毒怪鳥の特性の数々。トリツキーで、独特な動きは、慣れるまでは厄介そのものであるし、ゴムの伸縮性を有する尻尾、ゴム質の皮による打撃と電撃への高い耐性といい、中々の曲者。装備が整う以前、特に手札に乏しい駆け出し冒険者が不意に遭遇した場合などに、死者が出ないことがほぼ無いとすら言われるほど、中堅以下には恐れられていた。

今でも厄介者として、或いは若かりし日のトラウマとして、恐れられているが。

「ギュアアアアアアアオッ!」

「つぐ!?!」

そして、モモンガ的に苦手なのは、その伸縮性を活かした尻尾攻撃。読み難いという点も厄介であるが、種族的に殴打攻撃に弱い彼にして

みれば、先端が膨らんだソレはある種の殴打として判定されるのか、突進に巻き込まれるよりも体感的に辛いものがある。加えるなら、威力もそこそこにある為、不意に直撃すると吹っ飛ばされてしまう、というのも痛い。

「やら、せる、かあああああッ!!!」

その隙をカバーするように躍りかかるのは、大剣を手にするメイド。剛刃がその首に叩きこまれれば、毒怪鳥もたまらず悲鳴を上げ怯み、続け弓使いがその頭へと矢を立て続けに叩き込んでいく。弱点である炎属性を宿す攻撃の数々を受け、流石の毒怪鳥も不味いと判断し、これまで数多の新米冒険者を死に、或いは引退に追いやった秘策を披露――

「そいつ、まだ生きてるぞ」

――したものの、生命力を感知できるアンデッド相手に、死に真似は無意味も無意味。

自分から生み出した特大の隙を突かれ、無事一斉攻撃を受け、本当に物言わぬ骸と化した。

「行動させなければ、呆気ないものでしたね」

「私たちの武具が上質だった、ということも大きいのだろうな」

一仕事を終えれば、あとは討伐の証、兼素材の山である、モンスタ―の亡骸を運ぶ作業。

それに取り掛かるべく動く彼らは、気付かない。

「……………キュアアツ」

仄かに漂う薄霧はいつものことであるし、モモンガではそこに含まれる毒に気付けない。

他のメイドたちにしても、微弱な毒素故に、霧による視界不良以上には考えない。沼地に潜む、不可視の龍は静かに翼を広げ、その場から飛び立つ。地上を薄く満たす水が音を立てるものの、それくらいは割とあることの為、既に視界に収まらぬ程高空域に至った龍を捉えることもない。

知られざる龍は、空を舞い本来の住処へと飛翔する。終わりなき迷路が如く深い森の上を越え、金色と白銀の舞う朽ちた王城上空を避

け、地上の様子の見通せぬ深い瘴気に包まれた森を抜ける。瘴気が届かぬ程に広大な河を越えれば、その先に広がるのは碧水に満たされた領域。空に浮かぶ船団が、今まさに遠視の魔法等で調査を進めている地。

豊かな森林、豊富過ぎるミネラルにより緑に乏しい峡谷、大部分が水没した平地と、様々な顔を持つこの地に降り立った龍は、姿を見せぬまま森林へと潜伏。姿を隠すのに適しているその地に潜んだ龍は、そのまま横になり、寝息を立てる。

刃と化した尻尾を持つ二種の獣竜が鎬を削り、漁夫の利を狙う悍ましい蛇の如き海竜は、水域の捕食者の一種である魚竜の如き独特な海竜に尻尾を噛まれ飛び上がり。豊富なミネラルに戦闘能力を支えられた飛竜は空を警戒し、類似したシルエットを持つ漆黒の飛竜は空に構うことなく、上位捕食者の一角として猛威を振るう。

「……………水量だけなら、国一つ二つ分賄えるだろうに、なあ」

空の船から、調査員の一人が愚痴る。

複数の地形が組み合わさった水量豊富な地は、それだけ豊かな生態系を構築しており、水中から陸上、空中まで様々なモンスターが見られる。水資源の量を始めとする諸環境は、人間が住まうにも最高とすら言える環境であるが、それはモンスターにとっても同様であり、構築された生態系がそれを物語っていた。

AFT. 12—齎されたモノ

東方に駆り出した船団は、順調すぎるが為に、ある問題に直面した。「このままじゃ、食糧より先に行きの燃料が尽きるな」

「順調すぎるのも考え物、か。だがなあ……………」

眼下に広がるのは、風神の狂飆が遺した爪痕のみ。狂竜の力が振り撒かれた影響もあるのだろう、他の生物の痕跡があまり見られず、聳え立つ山々も同様。あまりにあまりの惨状は、その猛威を改めて実感させるには十分であり、多くの者に寒気を覚えさせる。

(でも、それにしたって)

あまりにも、生命の気配がない——そこで、メイドの一人が意を決し提案した。

「でしたら、一度船を下ろしましょう」

「正気か？いや、確かにモンスターの気配は皆無だがなあ」

「……………いや、悪くねえ。徒歩で動ける範囲もたかが知れちゃいるが、空から眺めただけより確証を持てる。モンスターがいないならいいで、今のうちに手を出せる場所を探すなり、仮設拠点を立てるなりできるかもしれねえ」

この中ではベテラン格の年長冒険者が肯定すれば、それを合図に船が降下準備を始める。

それと、ほぼ同時期。竜王国では

「パラダイン様から、新作魔法の巻物スクロールが届いたぞ！」

「早っ!?あの爺様、ちゃんと寝てんのか?」

「マジックアイテムを自作できるくらいだし、不要な体にしてんじやねえの?」

「……………陛下に伝えて、皇帝様に言っというもらうか」

資源に乏しい土地柄から発達した加工産業。中でもずば抜けているマジックアイテム製造の分野は、外界への進出を目標としたことで更なる隆盛を見せていた。これまで考えもしなかった斬新な需要への応答、新たな魔法の伝来に加え、帝国魔法省のフルーダを筆頭にそれらの廉価版の開発等に勤しんでいるお陰で、あらゆる面で発展を

遂げつつある。

「うっし、出来たア！……いや、発想は天才的だったが、作る側の身にもなれよなあ！」

「これを、こうして……いや、ここじゃ試しても意味ねえな！表行つてくらあ！」

複数の魔法を組み合わせた、遠隔視用のマジックアイテムを抱え飛び出す職人と入れ替わりに、一人の女性が忍び込む。敢えて他と同様の格好をしているが、基本的に正体はバレバレである。バレバレ、なのだが、基本的に見逃されている。正確には、摘まみ出したところ、魔法で隠れて忍び込んだ前科がある為、最早諦め、或いは無視している。

「んんんー！やっぱり難しいんじやねえかなあ、これ！」

「遠隔交信のマジックアイテムだったか。やっぱ難しいか？」

「既存の魔法でどうこうやってみたが、キツイわ」

六大神の死去により途絶えていた、リアル由来の発想。魔法のお陰で、不可能ではない一方で、モモンガが思い描く便利アイテムを完成させようとする、難易度が跳ね上がる。通信用のアイテムがまさにそれだ。距離の問題や混線など、解決すべき課題も多いのが、それに拍車をかけている。

「とはいえ、モモンガ殿も無理に急がなくていい、つつつてたし」

「確かに、あっちの人員のお陰で連絡にや苦労してねえが、おんぶ抱っこじゃダメだろ」

その言葉に反論する者は無く、誰もが頷く。頷くが、それとこれとは別問題。

「なら、頑張れよ」

「そっちこそ。他のだって、やることは山積みだろ？」

一般生活の利便性向上、生産職の補助、冒険者のサポートから、遠征における課題の解消。

なまじ魔法という便利な物があり、その上で法国で失伝していた高位階魔法や、リアルの知識等による発想など、新たなものが目白押しであることで、これまでのように国の経済を支える、程度で済まない規模になっているのだ。そして、誰もが新たなモノに興奮し、それを

活用できる新作を目標としている。

「うんうん、やる気満々で何より。ボーナス増額してやるかな」

「……………一国の女王がこれって、いいのでしょうか？」

飛行船に採用されているマジックアイテムの買い取りに来たパンドラが零すも、職人たちは内心で頷くのみ。とはいえ、いると判ったからには、手が空いている者が対応に向かう。

「パンドラさんかい。注文のなら、中央第三倉庫にありますよ」

「ありがとうございます。ですが、その前に代金を」

あくまで事務的なやり取りであるが、これは序の口。

「……………」とここで。先程、外に駆け出した者がおりましたが」

「ああ、新たなマジックアイテムの試作品が出来たついで、試しに向かつてんです」

「ほうー！」

目が光る——業務の一環、というお題目がある為、割とやりたい放題である。

「どのような用途の代物でしょうか？」

「遠隔視の魔法で得られた情報を、魔法で映し出して広く共有するために代物ですな」

「ほうほうーそれはまた！」

喜色を隠さぬパンドラが進んでいく一方、ドラウデイロンは静かに工房を離れた。

「流石に、ガチ勢にやっついていけんわ」

*

木々の生い茂る、トブの大農場。

「あ、いい感じかも」

その管理責任者の一人であるマーレは、日頃から農場に赴いている。

成長度合いのチェックや採取物の品質確認、産物の加工も仕事で、今日もまた、その仕事の一環として生簀の確認を行っていたところだ。近頃は釣りの腕前も上がっており、持ち前の腕力と併せて、よく育った大物をも単独で確保できるようになっていた。

「よし………せーつ、のー！」

大きく育った『オオヨロイシダイ』を確保し、満足げに笑う。竜のソレに匹敵する鱗を有する、ヨロイシダイの中でも大きく、精強に育った個体であり、武器として加工すればかなり上質なものが手に入る。それ相応に大きく、力も強いのだが、マーレは特別意に会することもなく、平然としている。

確保したソレを適切に処理して、続けて様々な方面で需要の高い火薬の材料となるチャツカツオとハツカジキ、カクサンデメキンも、適度な大きさの個体を釣り上げていく。火薬類の材料は植物類にもあるのだが、それだけでは賄いきれない程、需要があるのだ。

「ふー………あ」

「キユルツ!?!」

いつものこと——農場に入り浸る、モンスターの子供に気付き声を上げれば、隠れるように、或いは悪戯がバレた子供のように駆けていく。もう一人の管理者であるアウラのテイマー職の影響か、随分と人間慣れしているモンスターたちに呆気に取られ、続けて呆れ混じりの溜息。

特に何かやられたわけでないと思えば、興味を失くしたように視線を外す。

「お仕事、お仕事」

彼の仕事は、主に裏方。精神的に幼い面もある為か、尚のこと己の役目を果たそう、という気概が強く、精力的に取り組んでいる。或いは、他の面々と比べ、あまり目立った成果を上げられていないように感じ、内心で焦っているのか。武器需要が落ち着いても、材木の需要や火薬の需要が落ちることは無く、安定した収入源となっているのだが、男の子らしく華々しい活躍が欲しいのだろう。

「マーレ様、ちよつと相談が」

「どうしたんですか?………あの、本当にどうしたんですか?それ」

弓用の瓶を満たす液体は、これまで見てきたどの薬液とも異なるように見えた。

「えーつとですね?マヒダケとネムリ草を混ぜたら、こんなのが出来

たみたいで……………」

メイドの指さす先には、昏倒している同僚数名。一発で危険とわかる。

「あ、あの人たちは、なんであんなってるんですか？」

「……………どうも、少し吸っただけであんなったみたいで」

「とりあえず、あの人たちの介抱をお願いします。その薬の方は、後で報告しておきます」

危険物として薬品——捕獲用麻酔薬を回収し、しっかりと封をす

る。

「けど、簡単に作れちゃうのか……………んー、どうしよう」

麻痺、睡眠ともに、対大型モンスター戦闘において有用な状態異常の一つだ。それを起こす為の巻物、弾丸等の素材となるマヒダケ、ネムリ草は市場流通量も相応で、万一ということも起こり得るだろう。効果の強さからして、うっかりヒトが多量に摂取しようものなら……………」

そこまで考えて、軽く息を吐く。

「大変だなあ、本当に」

それだけ強力でも、あくまでヒトに対して。彼が最初に目の当たりにした鎧鋼龍を始めとする、古龍に対しどこまで通じるかは当然として、大型の飛竜相手でも、どれだけ通じてくれるのかわからない。彼とモモンガだけが知る、エリュエンティウ跡からこちらを覗いた謎の存在に対しては、恐らく論外だろう。

「マーレ殿、マーレ殿！」

「わ、賢王さん!?!驚かさないでください！」

「これは失礼。いや、丁度探してござったところ故、つい」

そんな彼の善き同僚、森の支配者たる魔獣は、そんな尾も苦しい思考を綺麗に吹き飛ばした。

「丁度、鍊金が終わったところにごさる故、鑑定に同席して貰おうかと」

「わかりました！」

彼の管轄である大農場で、頻度こそ少ないものの行われる『マカ鍊

金』。モモンガをして『最低保証のないクソガチャ』呼ばわりされる代物であるが、その分上振れは大きい。シャルティアが最初に発見し、装備しているものに並ぶ品は現状確認されていないが、あれを上限と見做し、素材が集まり次第、試行錯誤を続けているのだ。

「皆さん、お手伝いをお願いしますー！」

当番のシモベたちに声をかけ、誰もが待ちかねた結果調査の準備を進める。

というのも、研究所で錬金を行う他国と異なり、ナザリックは人員豊富ながら、ナザリックの中で完結する。得られた護石は調査後、スキル等を基準に分類して一旦保管され、ナザリックのシモベたちがそれぞれ目を通すのだ。戦闘に従事するシモベが優先的に目を通し、戦闘を苦手とするシモベが続けて吟味し、最終的に残されたモノが錬金素材として投入される。

護石に付与されるスキルは完全ランダム。その一方、拡張性もランダムである為、有用なら拡張性を考えない者、装飾品の普及後を考え、両立を目指す者など、個々の性格によって回収されるモノも異なる。かくいうマーレが装備している物は、彼だからこそ有用に使えるスキルを有している一方、拡張性がないという欠点も有する代物だ。

「また、いい物が見つかるとういのでござるが」

「ここのお仕事で、これ以上に有用なお守りは、たぶんないんじゃないでしょうか？」

彼の装備する護石の効果は『植生学』と『回復速度』が最高レベル。一方、装飾品を組み込めるスロットは無く、その二つのスキルしか発動しない。が、『回復速度』スキルはHPMP双方の自然回復力の強化、『植生学』はドルイド系による植物類の成長促進等に高い補正を發揮するなど、この仕事内容とよく噛み合っている。

更に戦闘時は、『広範囲殲滅最強』である彼のMP消費を幾らか軽減してくれる他、植物操作魔法やスキル等も強化されるなど、あらゆる面で相性がいい。拡張性ゼロという欠点にしても、装飾品の普及がまだマイチである為、無視できるものだと判断している。

「ホワイトブリム様が仰っていた快感、わかってきた気がするわ

「……………」

「程々にね？ね？ね？」

「けど、昂るのも仕方ないわよ」

誰もが高揚と期待を隠さず集まる中、トブの大農場の管理責任者であるマーレ、賢王主導の下、立ち並ぶマカ錬金壺が開かれ、錬成された護石の数々が取り出されていく。賢王が取り出したソレをマーレが受け取り、鑑定し、スキル内訳とスロット状況をメモした紙と共に並べていく。それに皆しつかりと目を通し、己の防具の長所短所との噛み合い、主力武器との相性などを鑑みて思考し、相談する。

誰からも人気の『攻撃』、装備次第で優先される『見切り』『超会心』等に、生存能力の向上に優位に働く『防御』『ガード性能』『回避性能』に、その発見に多くの者が驚愕した『ガード強化』などがあれば、そちらに注目が集まり。戦闘以外、主に探索等で役立つ『体術』や『地質学』に目を向ける者もいるなど、十人十色。

希少価値の高い有用なスキルは当然として、手数が多い武器の使い手であれば各属性、状態異常攻撃強化スキルにも目を向けられるし、ガードの難しい武器であればガードスキルには見向きもせず、対しガード可能な武器ならば、特に物理防御不可攻撃の多くを防げるようになる『ガード強化』に強く注目する。

「っ、これは?!」

マーレが驚きの声を上げれば、否応なしに注目が集まる。

「……………新発見です。それも、かなり強力な」

スキルの名は『根性』。一定以上の体力を維持できていれば、どんな一撃にも耐える力。

それこそ、未知を拓く者たちには是が非でも欲しいスキルだろう。が、それなりの試行を重ね、尚今回初めて確認できたという辺りから、相当希少な強スキルだろうとわかり、誰もが渋い顔になる。

「これは、報告用として除外しますね」

一つの護石を取り除き、錬成結果の開示を再開。農場に、シモベたちの一喜一憂の声が響いた。

AFT. 13―変わろうとする者

竜王国産の、高級な肉が積み上がり、竜たちの胃袋へと消えていく。「やー、やはり肉というのは、ほんのり焼いたほうが美味でござるなあ〜」

「ギユアウ?」

「ギユアオ」

「キュイイ?」

「お味方、あたししかいないみたいだけどね」

それに軽く火を通して味わうのが、森の賢王。生でムシヤムシヤいくのが、その側近たる二体のドスランポスと、アウラくらい一口で丸呑みに出来るであろう程に巨大な、湖の主。初めて見た時には、腰を抜かすほどに愕然としたが、今となっては一周回って慣れてしまい、特に怯えることもない。タイマーであるお陰か、ある程度意思疎通ができるとわかってからは、余計にだ。

(……………怯えても意味ない、つてのもあるけどさ)

その視線の先には、北方からの襲撃者たる『尾槌竜』……………の、無残極まる亡骸。鼻先から尻尾まで、綺麗に縦真つ二つに両断された獣竜の骸を目の当たりにすれば、誰も逆らおうとは思うまい。飛竜を水底に引き摺り込んだ、とは聞いていたが、この巨躯と凶悪極まる攻撃能力を前にすれば、それどころではないとわかるだろう。

それを抜きにしても、森の賢王と側近のドスランポス二体を相手取る時点で、勝ち目は薄いが。

「しかし、アウラ殿はよろしいのでござるか?」

「いいのいいの。日頃お世話になってるお礼だしさ」

「某らこそ、世話になってるのでござるが」

「ま、まあまあ、いいからいいから」

(こつちがお世話になつてることの方が多いんだし)

相手からすれば、外部の知識を得ることが出来、縄張りを放棄せざるを得ないような大災害へと対処してくれた大恩人なのだろうが、ナザリツクが受けた恩義もまた計り知れない。森の情報を得、新たな知

識を得、安全に使える土地を得て。その上、アウラが身に着けている護石の、革新的な作成手法まで確立するなど、最早ナザリック、ひいては人類圏に無くてはならない存在だ。

そしてアウラにとつては、集団指揮の参考となる存在でもある。

「それで、あいつはどうしようか？」

「キュアオオツ！」

「あ、食べるの？それじゃあ、放っておくわよ」

巨竜の骸は、水竜が食べるらしい。となれば、幾ら利用価値があるうと放置一択。あの亡骸一つと同等以上の量を用意する手間と費用を鑑みると、誰もが同じ判断を下したことだろう。意思疎通ができると言つても、相手を納得させることが出来るかは別であるし、戦力的にはアウラ単独どころか、彼女の従える魔獣全てを動員しても尚勝ち目がないレベルで隔絶しているのだ。敵対する理由がないし、あつても可能な限りしたくはない。

（ていうか、このモンスターがいなくなったら、洒落にならないだろうし）

湖の主、巨大な『水竜』ガノトトスは平然と肉を喰らい、飲み込み続ける。こんな竜の同種が、平然と生息していると考えると、この世界の水辺が一気に恐ろしくなる。事実、北方、西方の沿岸部では、漁村規模の集落は存在せず、都市部でも漁港前に嚴重な防壁を兼ねた堤防と水門を構築している程。尚、そちらに関しても、現在多方からの知識、発想、技術の流入により、順次改修が進められているとか。

そんな水棲モンスター中でも、水竜の危険度は高めに見られている。その最大の理由が、地上においても如何なく発揮される高い身体能力と、物理防衛不可の水プレス。前者の要素が強く発揮されるタツクルは、直撃は当然として、巻き込まれてもほぼ即死であり、後者に至つてはアダマンタイトの鎧は当然として、幾重にも重ねた城壁をも容易く両断する程。それでいて、麻酔性の毒素を牙や翼状の鱗に有し、拳翼も背鱗も並の剣より遥かに鋭利であるなど、文字通りの全身危険物。

幸いなことに、アウラは水竜に関し、そこまで深くは知らないが。

「ところで、他にあなたたちのお仲間とかつていないの?」

それ故に、すぐ話題を切り替える。目的は、彼女なりに有事への備えが欲しいから、だろう。

「某の領域の外のお方々とは、あくまで同盟でござるからなあ」

「キュアオ」

「あー、湖にもいないのね」

尚、トブの大森林に広く散らばった、かつて帝国より東方に根付いていたモンスターたちだが、又シ個体が中心となり一定の勢力圏を築き上げている。彼らに声をかけることが出来れば、その時点で一定の戦力を確保することが出来る。無論、賢王程確たる生存圏の確保が出来ている勢力は少なく、全てが全て馳せ参じることは無いだろうが、普通に十分だろう。

十分だろう、が、そこまで考えられていないのだろう。彼女自身、創造主に与えられた数多の魔獣を率いる存在であり、彼らも強くなれないかと、少しずつであるが、この農場にて自由に活動させるなど試している最中。不測の事態への備えとして、即座に協力を取り付けられる戦力が欲しいのだ。

「そもそも某、これまでこの領域を出たことがないでござる故。防衛戦、特に領域内での指揮には自身がござるが、攻勢の心得はさっぱりでござるからなあ……うむむ、一度学ぶべきでござらうか」

「あ、それなんだけど!」

アウラが取り出したのは、ナザリックから拝借した書物の数々。著者、ぷにと萌え。

「翻訳用のアイテムと一緒に、モモンガ様に借りたの。これなら——」

「ストップでござる、アウラ殿。ここ水辺でござる故、一旦仕舞っておくべきかと」

興奮気味だったダークエルフの少女が凍り付き、耳まで真っ赤にして俯く中、賢王は側近二体と水竜に軽く会釈し、アウラを連れて森の方へと移動。その際、尻尾を器用に使い書物が濡れぬよう回収するのも忘れず、牧場の片隅に落ち着く。

そうすると、アウラに懐いているモンスター幼体たちが駆け寄ってくる。他で仕事中のメイドたちが温かい笑みを浮かべ見守る中、それなりの頻度で餌付け等をされてきた竜たちは可愛らしくじやれつき、ダークエルフの少女の気を紛らせる。野生に帰れるのか、と賢王が一瞬懸念を浮かべるも、彼女ならうまくやるだろうと、信頼とも丸投げとも取れる結論を出す。

「子供とは本来、ああいうものなのでござろうか？」

「ちよつと！誰が子供よ！」

「はっはっは。某からすれば、アウラ殿もモモンガ殿も子供でござるよ」

2000年生きて存在からすれば、己の半分も生きていない者など子供同然。かつてのアウラであれば怒り狂っていただろうが、すっかり丸くなったナザリックの者たちの例に漏れず、事実として噛み締め、うぐぐと唸る。実際、齢を理由に侮る訳でもなく、単なる事実であるし、エルフ系の年齢からしても彼女は十分子供である。

「街じゃ他のエルフとかも『その歳で立派ねえ』みたいな扱いしてくるしきー！」

「実際、立派でござるよ。あの戦場で即興とはいえ狂っていない竜たちを束ねて、狂った竜の群れと渡り合った功績は、言葉で語るなど不可能でござる。あれが無ければ、被害はもつと凄惨なことになった筈でござるよ」

狂ったモンスターはリミッターが外れ、寿命を縮める分、全能力が飛躍的に向上していた。更に危険な、極限状態と化した竜たちは言わずもがな、規格外の防御能力も加わる為、更に危険なのだ。幸いなことに、アウラがヌシをも味方に引き入れたことで、ヌシ複数で極限化一体を仕留めるといふ戦法を取れた他、戦力の釣り合いを大きく改善することが出来た。

誰か一人でも欠けていれば、その時点で成功は有り得なかったのが、あの戦いなのだ。

「少なくとも、某には叶わぬ真似にござった。間違いなく、貴殿は立派にござるよ」

それに加え、安住の地を失ったモンスターたちの誘導。あのままで、最悪この辺境を放浪する羽目になっていただろう竜たちをトブに招き、混乱を最小限に抑えたことも大きな功績だ。基本は賢王の独断であるが、気付き次第アウラも積極的に仲介役として動き、結果として、人類圏への悪影響を大きく抑えることに成功していたのだ。

その縁により、彼女は最大で、ナザリツクと同等以上の戦力を動かせる。龍の力の影響を受けたヌシたるモンスターたちの咆哮が、群れそのものを鼓舞し、ただでさえ強力なモンスターたちを更に強大に変える。それだけでなく、古龍に並ぶほどに高まった力を持つ存在ともなったヌシが、場合によっては複数馳せ参じるのだ。

しかし、それだけの力を抱えても尚、彼女にはいくつかの懸念があった。

「…………けどあたし、あんたほど頭よくないし」

その一つが、用兵技術。デミウルゴスや賢王に、明確に劣ってしまった部分だ。

「それでは、某と共に学んでいこうではござらぬか」

そんな弱音にしっかりと向き合うのは、かつて弱者であり、生存のため必死に頭を使い、数多の策を練り上げた知恵者。隔絶されていたこれまでと異なり、新たな刺激が入ってきたことで、その頭脳はかつての貪欲さを取り戻していた。その上で共に学べる者がいるとなれば、自身と異なる知見を得る意味でも、誘わない手はない。

「判らぬところがござるようなら、某なりに噛み砕いて伝える故」

「そ、そう？それじゃあ、お願い」

牧場の片隅で、勉強会が始まった。

*

『フォレストストーリーカー』であったから、彼は接近する存在を感知できた。

(——ッ！)

振り返る——姿はないが、その直感が叫ぶ。

「船まで逃げろ！」

何かがいる——上ではなく、下に。

「クソが！」

空なら手の出しようもあるが、地中ではどうにもならない。

(正体はなんだ？この地中を進めるモンスターは、一体?!)

ふと背後へと振り返ったイグヴァルジは、地中から顔をのぞかせた竜を視認した。

「蛇……………っ」

そして、それが飛び出す瞬間も。

「海竜か！」

細長い体躯と、二対の足。そこに並ぶヒレと粘液で覆われた体表が、その正体を導き出した。

「グギョオオオオオオオッ!!!」

「なッ、あぶねえッ！」

ソレの口から赤い何かが見えた瞬間、己の直感に従ったイグヴァルジは近くの仲間を巻き込む形で地面を転がり、木々をなぎ倒す一撃を回避。その恐ろしさに冷や汗を零し、改めて異形の襲撃者を真正面から睨む。先の一撃を回避したことで、足で逃げ切るのは不可能となったからだ。

「ご助力します」

「助かるな……………っつっても、倒せるとは考えちやいないがね」

ミスリル級とはいえ、冒険者の中では上位に位置する存在だけあり、彼の分析は正しい。ここで重要なのは、倒すことではなく相手を退かせる、或いは他の地上調査チームが異変を察知することに期待するか、強引に逃げ切る為の隙を作ること。命は惜しくないが、ここで死んでしまい、この謎のモンスターを伝えることが叶わないことが、最も恐ろしい。

「ケッ、気味悪い姿しやがって……………！」

青白い、斑模様の鱗と皮に包まれ、刺々しい鱗を持つ竜。中でも一際特徴的なのは、鋭利な牙を持つ口元から、尻尾の半ばまで続く縫い目のように閉じたナニカ。どこから来たのか、そもそも何故地中で長時間活動できたのか、等々の疑問が浮かぶ中、再びその口が開き、赤く異様な形をした舌が露わになり――

配を睨み、嘆息混じりに零した。

『煉黒の災痕』だけならまだしも……そろそろ、移動して貰いたいのだから』

かつて、巨大龍の移動により沈んだ、大陸の一部。

高かった山の幾つかが辛うじて顔を出すだけのそこには、傷を負った竜が眠っている。

「私の監視か？……それならば、十分間に合っているのだが」

深い、深い傷を負った、『至天』に座す竜。西方三大危険地帯の主たちに加え、『至天』の座に至りつつある滅尽龍と激突したことで、その全能力を解放せざるを得ない程の深手を負った『刻竜』。その寢床には、彼女の外殻を貫いた金剛棘が無数に散らばっている。

その存在により、余計自由に動けない現状を嘆き、真なる竜王は空を見上げた。

AFT. 14 — 『外』へと踏み出すために

調査船団の帰還後

「それでは、早速で申し訳ありませんが、今回の成果と、今後の方針を確認しましょう」

帝都アーウインタールに集まった、各国の重鎮たち。

その手元には、調査船団が得た成果をびっしり書き込んだ、分厚い冊子が置かれている。

「いや、改めて可視化されると、凄いボリュームだな……………」

「正直に言いますが、これ程の収穫があったこと自体、予想外でしたからね」

「本当に、その通りだ。我が国の立地も、別の意味で考え物だな」

肩を竦めたザナツクの言葉に籠る妙な実感に、王国の豊かな土地を知る者たちが真顔になる。

が、その程度で会議が止まることは無く、漆黑聖典の隊長が肅々と音頭を取る。

「今回、皆様から送られた報告を精査した情報は、配布した資料の通りとなります」

国家の枠組みを超え協力する者たちは、既に自国で暗唱できる程に読み通した情報を睨む。

東方の現状、そして南方での新発見……………それらについて、把握できている全てを、だ。

「まず、エイヴァーシャー南方の……………『死の森』」

「エルフ王、破滅の遠因だね」

ツアーの補足に、納得したように頷く者たち。

「やはり、スレインは把握していたか」

「隠匿していたのは、その異常性から、でしょうか？」

「……………それと、ヴァイシオン様の仰った件の存在故、ですね」

「エルフ王、といますと……………あの」

「ええ、迥異種棘竜の暴走の原因と考えられる存在です」

空気が冷え切る中、隊長は語らねばならない、として、重い口を開

く。

「当時のエルフ国の王、デケム・ハウガンが我が国に対する報復として、『死の森』へと何かしらの干渉をしたのでしよう。詳細は不明ですが、当時より行っている監視の結果、あの日を境に瘴気の領域が北上し、ほぼ同時期に辿異種棘竜による暴走が発生しています」

「……………成程。原因不明であるのなら、不用意に触れぬ方がよいな。元より、モモンガ殿らが現れるまで、踏み入ることすら出来ていなかったのだ、知ろうが知るまいがそう変わらんだろう」

好意的、というより自棄気味な言葉を零せば、周囲から苦笑が浮かぶ。特にその色が強いのは、アベリオンの代表であるカルカだ。知らなくてよかった、という精神的な負荷が無かったことへの安堵と、知ったことによる『もしかしたら』という危惧が同時に押し寄せるのだ、その心労は察して余りあるもので、特に原因が正確に判明していないことが、最も痛いところだろう。

いつ爆発するかも判らない爆弾が、枕元にあるも同然なのだから。「アンデッドを喰らう霧、アンデッドモンスターが多発地帯……………故に死の森、か」

「……………アンデッドが喰われる、というのが、一番の驚きだよな」
ツアーの強張った声を皮切りに、自然と話題がそちらに流れる。

「そもそも、何故アンデッドが生じる？普通、そうなる前に喰われるだろう」

「現地の視察に向かったシャルティアたちによると、奇妙なモノが付着していたとか」

「瘴気とやらの影響だろうな。だが、その正体はなんだ？」

「カッツェ平野の霧……………は、違うのでしたね。しかし、そうなる一体？」

「生きている、放ったアンデッドが喰われ、乗っ取られた……………古龍に由来する物か？」

「可能性としては、高いかと。彼の竜は古龍に並ぶ存在である以上、それが警戒するということは、古龍かそれに比肩する存在となります。そこまで可能性を絞り込んだうえで、広範囲に影響を及ぼす存

在、となりますすと、それくらいしか考えられないでしょう」

わかりやすい危険地帯。しかし、手を出した場合のリスクも重大である以上、何をするにも慎重を期す必要があるのだ。特に、万一の際に猛威を振るう存在である『禁忌の邪毒』たる棘竜の長老が有する毒も、その肉体に秘めた膂力も、古龍にとつてすら恐るべきモノ。過去の惨劇の原因がそこに在る以上、迂闊な真似はそのまま我が身を滅ぼす結果に繋がってしまう。

一方で、手をこまねいている訳にもいかない理由が、確かに存在しているのだが。

「しかし、そこを超えなければ、新天地に到達できないわけだ」

「東方は新天地こそありませんでしたが、生存圏を広げるなら今のうちでしょう」

「今後の遠征の中継地という意味でも、嬉しい立地だろう。問題は、龍の進路か」

外界への進出の足掛かりが欲しいというのは、是が非でも欲しいもの。飛行船という移動拠点の積載量や、乗員の精神衛生、転移魔法の中継地という意味でも、どこかしらに新たな拠点を作成する必要があるのだから。そうなった場合、現状最も事を運びやすいのが東方で、非常に困難なのが、大砂漠方面。死の森については、現状では除外している。

「ニグレド殿の観測によると、こちらに来る気配はない、とのことですが？」

「希望的観測も出来んだろう。第一、その立ち去った跡地は綺麗に挟れていたというぞ？」

「接近を早急に把握できる観測網と、対空防御能力が必要……………他とあまり変わらないな」

「いえ、接近されること自体が危険なのですから、他より空への備えを充実せねばなりませんよ」

結果、最も手を伸ばしやすい、東方の森に白羽の矢が立ち、議論がそちらに流れていく。

「そうなる、次は中継拠点建設地の選定か……………早急に事を運ぶ必

「要があるな」

「全面的に同意だな。モンスターが現れてからでは、苦勞することに
なる」

「そうになると、知見に優れた者と、一定の人員を同行させるべきか？」
「いえ、人員の輸送は転移魔法で行いましょう。そこまで大勢手配す
る時間はありません」

「知見が欲しいなら、お抱えのを出せばいいからな。その点では、楽な
もんだ」

どの国も、土地を切り拓き、都市を作り上げてきた実績があり、そ
こに至った知見がしっかりと残されている。無論、それを学び、實際
に都市や開拓村の建設地の選定に携わる者も存在しており、移動都市
の形を取る竜王国、アベリオン丘陵内でやり繰りしている聖獣連合以
外であれば、人材も育っている。

「では、当面は東方の中継拠点建設に注力、という形でよろしいですな
？」

大まかな方針を定めるのは、円滑な物資運用のため。

隊長の音頭により、諸国代表の見解が一致したことで、本格的な議
論に移っていく。

「立地上、管理は我が国が主導する形で構わないか？」

「それでいいだろう。我々からは、物資の提供を主としよう」

「あとは、人員か。ウチの重鎮たちに特別手当を出さなくてはな」

最も近い帝国が管理を主導することに異は無く、話は続く。

「護衛の為、アダマンタイト級冒険者に依頼をしましょう」

「今回ばかりは、高ランクの冒険者や腕の立つワーカー、精鋭兵を出す
べきでしょうね」

（ウチからは……建設関係だとデミウルゴス、パンドラ、戦力的には
シャルティアか？ いっそ、マールレの魔法で森を吹っ飛ばすって手もあ
るけど、それは流石に手荒か……アウラにも仕事をあげたいし、持
ち帰るべきだな）

モモンガも思考を回すが、本人たちの希望を優先することを決め
る。

「……………この場で打ち合わせるより、一度国に戻るべきだろう。急を要するとはいえ、ここで決定できることはそう多くない以上、初動に必要なのがどのような人材であるかが判ったのだからな」

私もこの場で決定できることは多くないし、と内心で零すモモンガだが、それは皆同様。

堅苦しい話は終わりの空気となり、皆が一様に肩の力を抜いた。

「はあー……………古龍がポンポン現れるというのも、考え物だな」

「ごつちに来ないらしいのは有難いんだがな」

「私としては、『死の森』とやらに早急に対処したいところ、なのですが……………」

「詳細が分かりませんし、我々からはなんとも……………排除したいのは、同意ですが」

話題が流れる中、モモンガは一人『死の森』について思索していた。

「……………棘竜が抵抗できるということは、霧は炎、或いは毒に弱いのか？となる」と

彼にあつて現地に無いものに、医学的、生物学的な知識がある。

病気がバッドステータスの一種で、魔法により治癒可能な世界故に、そういった方面が発展していないことで、医学の発展が起きていない。加えて、モンスターの存在に対する研究もまた、この辺境ではあまり進んでおらず、分類も特徴や骨格からの大雑把なものとなっている。

だが、ナザリックには、それらに深い造詣を持つ者が多く、また彼らの遺した書物もある。

「……………炎に弱いアンデッド、或いは毒が有効な生物？駄目だ、情報が足りないな」

（……………両方に該当するのは、植物系くらいだけど……………ちよつと調べてみるか）

アイテムボックスから、最古図書館から引っぱり出したままだった本を出し、開く。

『かつて存在した生態系では、生産者と消費者に、分解者があり、植物は生産者に——』

(分解者……分解?)

引つ掛かりを覚え、分解者について触れている頁を探し出す。

『分解者とは、自然界における動植物の死骸等の有機物を分解し、無機物に――』

(死骸……けど、アンデッドは設定上、厳密には違う筈だ)

ユグドラシルの設定上だと、アンデッドは負のエネルギーで活動する生命体だ。

負属性のエネルギーで守られている為、腐敗しない、という設定まで練られている程だ。

(いや、けど腐敗も分解の一種だっけ? 誰かが言ってたな……とりあえず、調べてみよう)

「……主な分解者は、小さな虫などの他に、細菌類、菌類、カビ……んん?!」

そこにある、一枚の写真に目が留まる。

(確かアウラたち、ふわふわしたものがー、って言ってたけど……まさか、これか!?)

古い時代のものであるが、確かなカビの写真。それを目にして、大いに驚いた。

同時に、納得も出来た。勝手に植物系と判断しているが、その弱点として理解できたからだ。

「……これが正体だとすると……分解されている、ってことか……」

アンデッドが喰われた、と判断されたものが、この腐敗と同様の分解現象であるとするなら。

「……」

「モモンガ、随分と驚いていたようだが……それは?」

「ああ、いや。死の森、とやらについて、考えていたんだ。それで、これは仮定に過ぎないが」

本を流し読み、組み立てた仮説の軽い見直しをして、静かに息を吐く。

(……アンデッドの防護を貫通している訳だもんな。それだけの力

があるってコトは、恐らく)

「死の森とやらは、アンデッド以外であろうと容赦なく食われる可能性がある」

恐ろしくも、納得のいく可能性だった。それならば、領域拡大を忌み、激怒することも当然だ。

「……………恐ろしい話ですね。ですが、どうやってその結論に？」

「あー……………ユグドラシルの時の知識のお陰、だな」

「なんと、そのような知識があつたのですね」

あくまで仮定に過ぎない、と念押しするモモンガだが、霧の正体に迫りつつある中で、新たな疑問もまた芽生える。その霧を古龍が操っているとして、如何な手段で制御しているのかという点と、何故アンデッドが存在できているのか。それ自体は、実に簡単に結論が出る。

「そう考えると、森の主は……………死霊系の魔法使い、ネクロマンサーの可能性があるか」

そうになると、実のところモモンガにも大いに可能性が出てくる。

(……………エクリップスは無くなつたけど、まだほぼ全職死霊系だし。ワ
ンチャン、アンデッドの支配を奪えるか？けど、下手な干渉が危険な
時点で実験の類は控えておきたいからな。やるにしても、ぶつつけ本
番か……………あー、ヤダヤダ)

情報を集め、対策に対策を重ねるモモンガからすれば、泣きたくなる状況だ。

が、手の施しようがある分、まだマシンな部類か。アンデッドの支配を奪えるのであれば、敵から手数を奪うことに繋がり、最悪辿異種棘竜に丸投げも出来るのだ。元凶となる存在さえ打倒出来れば、最悪紅蓮を投入し、丸ごと焼き払うことも出来る。古龍相手には心許ないとはいえ、紅蓮自身が溶岩同然の超高温の奈落スライムである為、霧の正体がカビであれ微生物であれ、まず干渉できないだろうからだ。

(ま、今は東方に注力だ。急いで……………失敗する、的なことも言うし)

決定を覆す程のものではない、として、モモンガは思考を切り替え

る。

現状、最も安全に進めることが可能と思われるプロジェクトだが、重要性は非常に高い。

というのも、主目的が飛行船による外部遠征の中継基地である上、今後モンスターが再度根付くことが予想される森林の中に建設するのだ。完成後の維持は従来の都市より数段難しいだろうことは想像に難くなく、これまでと異なる形となることだろう。

それ故に、パンドラかデミウルゴスを送り出したい、というのが偽らざる本音だ。

(今度、ボーナスでも出すか……どれくらいがいいんだ？ 経営学の本あつたっけかな)

そんなことを考えながらも、有益なものを探し、モモンガは雑談に耳を傾けた。

AFT. 15―最も古き伝承

空路を征く船団は、かつての決戦地より更に東方の森の上空に在った。

「……………あれが、報告にあったクレーター……………隕石が落ちた、とは違うな」

カツツエ平野を超える、どころでは済まない、超大規模なクレーター。

点在していた焦土や、小規模なソレと根本的に異なり、そこだけ綺麗に抉られたか、消し飛んだかのように、凶禍の痕跡を示している。それが、特大のもの一つと、その内側にやや小さくなったものが無数にと、何が起こったかの想像が出来ない。精々、極大規模の戦闘があり、その余波である、というくらいか。

「パンドラさん、あのクレーター、使えませんか？」

「駄目ですね。ここでは、まだ少々近すぎます」

マールの提案を、しっかりとした理由で却下するのは、同行したパンドラ。

「駄目、ですか」

「ですが、発想は悪くありませんでしたよ」

「ああ。マールの魔法なら、似た地形を作ること自体は容易なんだ。次があれば、お前の力を存分に振るい、その発想を役立てるといいいや、次でなくとも、今回の調査でいい立地が見つからなければ、そうして貰うことになるかもしれないな」

モモンガの言う通り、そういった事態も想定されているのが、今回の船団のメンバーだ。

各国が選んだ精鋭の兵と文官に、募った優秀な冒険者により、迅速な土地の発見、確保と護衛を行い、最低限の基盤の建設を目指す。一度基盤を確保できれば、あとは比較的簡単だ。基盤であろうと、拠点が確保できれば防衛もやりやすくなり、緊急時には転移魔法で飛んでいける。

(……………あれを起こした存在って、もしかしてあの戦いのおときに

……)

ありもしない胃が、心臓がキュツと引き締まるような錯覚を覚える中、可能な限りいやな想像を思考の外に追いやり、深い深い森を俯瞰。風神龍、雷神龍の行軍による被害が未だ残る一方で、木々とは別に、草花は抉られた大地に芽吹き、生命の力強さを端的に示している。それでいて、未だモンスター影も形もないことが、先の災禍の凄惨さを際立たせる。

だからこそ、最初の中継拠点建設の目的地として、選ばれた訳だが。「うつわく、ホントになんもない」

「探るまでもなく、モンスターの気配すら感じないというのは、中々に恐ろしいな」

漆黑聖典『疾風走破』が零す隣で、種族柄生命力の知覚に優れるイビルアイが軽く体を震わす。

どちらも、先の災禍の内、古龍から逃げ惑う狂竜の大群と相対した経験を持つ者たちだ。

「他方から流入していないのが不思議なんだが……やはり、東方には詳しくないか？」

「生憎、な……だが、可能性ならある」

吸血鬼の赤い瞳が向けられたのは、先程通り過ぎた巨大クレター。

「あれ程の規模はないが、似たものを知っている。というより、200年前に見た」

「……冗談だろうか？」

『刻竜』……雌火竜とは似て非なる未知の怪物として、リーダーはアンノウンと評していた」

曰く、姿形は漆黒に紅の爪を持つ雌火竜である。

曰く、吐き出す炎は漆黒で、時にそれを束ねた蒼紅の熱線を放つという。

曰く、凶悪無比なる強酸をガスとして放ち、魔神の一体が一瞬で絶命したという。

曰く、傷を負えば負うほどに禍々しく変貌し、集った英雄たちが手

も足も出なくなつたという。

そして——ツアーの渾身の一撃を受けても尚健在で、その目を紅蓮に染め、東に逃げた、と。

「ツアーがギリギリで防いだ一撃の余波が、丁度アレに似たクレーターを作っていたな」

「…………防げた、のか」

「鎧の力をほぼ使い果たして、人型を維持することすら難しくなる程に消耗していたがな」

最後には、彼女たちがリーダーとした者が命懸けで一瞬動きを止め、そこにツアーが渾身の一撃を叩き込んだのだという。それでも尚、仕留めることは叶わなかった、らしい一方で、その一撃で怒り狂うでもなく、漆黒の竜は飛び去つたという。不可解ではあったが、お陰で彼女たちは助かつたのだと。

数多の魔神を滅ぼし、その余波で一つの国が別たれる程の傷跡を刻み付けた、漆黒の竜。

「…………それで刻竜、刻み込む竜か」

素晴らしい命名である、と現実逃避気味に思考する一方、疾風走破は特に気にした様子が無い。

「大丈夫ですよ。いざつてときは、あたしたちが命懸けで時間を稼ぎますから」

「気安く言うがな……………」

「死にたいわけじゃありませんけど、優先順位くらいは弁えていますから」

先の戦いの中、その名に違わぬ疾風の如き勇猛な攻勢を続け、一度死を迎えた女戦士の言葉には重みがあった。幸い、ペストーニャのお陰で蘇生は叶ったが、蘇生出来るだけの死体が残されていた者が少数であったことも含め、間違いなく幸運ではあるのだろう。一方で、それで死に怯えるようなものならば、とつくの昔に戦士を辞めているのが、この世界の住民なのだが。

「そう、か。では、そうならないよう、気を張っておかねばな」

「あはは、それは有難いかもです。兄貴の魔獣だと、流石に高位階魔法

には及びませんから」

背後で項垂れる兄らしい青年がいるが、それも止む無し。

制限なく召喚可能な魔獣であるが、彼らと視界共有をするにしても、距離の制限がある。加えるなら、彼らはユグドラシル基準でも弱いと言わざるを得ないレベルである為、飛竜等に発見されれば一瞬で殺されて終わる。が、それすらも利用したのが『一人師団』の名を受け継いだ青年で、戦闘には致命的に向かない一方、調査、或いは攪乱には滅法向いている。

では、なぜ項垂れているのか……低レベル魔獣の索敵能力の限界故、である。

(……流石に、ウチから装備を渡すのは……いや、そもそも)

無尽蔵に呼び出す、なんて芸当が可能であるのは、精々中堅以下の魔獣くらい。その程度の強さでは、偶然発見した『采配』スキルによる強化も焼け石に水。今思えば、陽光聖典はよく第三位階程度の弱モンスターを使役して、あそこまでやってこれたな、と感心するレベルだ。

召喚系は、最高位の召喚モンスター辺りでなければ役に立つまい。

「大変だなあ」

「調査だとか、敵の居場所の割り出しではすつごい優秀なんですけどねー」

さらりと称賛する一方、本当にさらりとしてある為か、落ち込んでいる兄は気付いた様子が無い。

そうして穏やかな空気が流れるのは、下が平和である証拠。襲撃があらうと、確実に察知できるだろう、静けさの中だからこそその平穏である一方、誰一人として本当の意味で気を抜いていないことが、これまでの積み重ね、歴戦の風格を感じさせる。それは文官一人に至るまで同様であり、油断とは縁遠いことを示す。

雑談に興じる者たちの纏う空気は、特段ピリピリしている訳ではないのだ。訳ではないのだが、PVPで培った程度の対人戦闘経験しかないモモンガでさえ、その状態の誰もが隙だらけという訳ではなく、いざ攻撃すれば最後、即座に最適解の反撃を叩き込まれるだろうと理

解できる程、隙が無い。隙だらけなのに隙が無いと、意味が判らないだろうが、本当にそのような空気なのだ。

(文官系はまた微妙に違うけど……そこは経験の差か)

「しかし、こどもも静かでは、少々味気ないな」

「では、私から少々」

「リーダー、ステイ」

小鳥の囀りも聞こえず、飛行船が発する音と雑談の声、高空を吹く風の音しか、音が無い。

そこで名乗りを上げ、即座に制止されたのは、帝国のアダマンタイト級『銀糸鳥』リーダーの、フレイヴアルツ。吟遊詩人^{バド}として仲間を鼓舞しながらも、戦士として立ちまわることが可能な実力者である一方、どうやらセンスはイマイチ扱いのようだ。

「じゃあ、ちよつとした昔話をしましょう」

くすくすと静かに笑った番外席次に注目が集まれば、彼女はかつて六大神が成した偉業、法国の都市配置にまつわる、ちよつとした昔話。だがそれは、非常に聞き応えのあると同時に、多くの驚きを生み、自然と甲板上にいる全員の興味を奪った。

それは、六大神の降臨間もない頃。食人を是とする亜人を主とした存在に脅かされていた人類を庇護していた彼らが遭遇した、大陸南方から来襲した巨大龍。動く霊峰とでも呼ぶべきそれがただ歩むだけでも、脆弱であった人間たちは疎か、亜人にとっても脅威となり、揃って逃げ惑うこととなった。

そんな中で、六大神の一柱が彼の龍に敵意、害意が無いことを察知し、上手くヒトのいない地に導けないか、と提案したのだという。六大神が総力を尽くしても尚、到底倒せぬ程に強靱な龍を、彼らは当時ヒトのいなかったアゼルリシア方面へと導き……眠りに就かせた、という。

「…………その巨大龍が、老山龍だったのか」

「ええ。あの龍が滅ぼされても尚、伝承は残り続けたわ。最高神官長が言うには、神々が彼の龍を導いた道筋には、決して都市を配さないよう、昔から続いているそうよ。その大通りも、念入りに整備されて

いるから、法国内の人員や物資の輸送が円滑に進むの」

穏やかに笑う一方、気になる点が一つ。

「滅ぼされた、というの？……まさかとは思うが」

「……ええ。最後の六大神、闇の神スルシャーナ様を滅ぼした、八欲王の手によるものよ」

「ここでも、その名が出る、この世界の変化の元凶。尤も忌み嫌われる、強欲と大罪の象徴。」

「制止したスルシャーナ様を滅ぼして、八欲王は欲望のままに、老山龍を手にかけた」

「そう口にした彼女は、しかし少しばかりの嘲笑を浮かべる。」

「けど、国に伝わる伝承によれば、彼らは半月近くかけて、漸くかの龍に勝てたとか」

「半月……八人がかりで、半月……」

「それも、尻尾に巻き込まれたり、踏み潰されたり、倒れた体に潰されたりして、散々死んでいたそうね。当時から生きてるツアーが言うには、『明確な敵意を以て八欲王を殺そうとしていた老山龍の方が恐ろしかった』らしいわ」

想像する。砦蟹級、或いはそれ以上の巨体が、殺意を込めて暴れる様を……

「うん、私なら逃げますね。それはもう、全力で」

「誰でも逃げるだろ。寧ろ、逃げなかった八欲王は馬鹿なのか？」

「馬鹿だから、歴史に名前が残ってるんじゃないんですか？」

「マーレのド直球の言葉に、誰もが『確かに』と頷く。」

「しかし、それでも半月で滅ぼされたのか」

「その頃には八欲王もくたくたで、ツアーは疎か、スルシャーナ様の武器も忘れて帰ったそうよ。それから暫く、国に引きこもって好き放題やってた矢先に……黒龍が現れて、全てを灰塵と化したそうよ」

最も長い歴史を持ち、変化を知るが故に多くを伝え続けてきた、スレインだからこそ残っている情報であった。ツアー個人も記憶には残っているだろうが、伝承を書き記し、残すことが出来たのは、ヒトだからこそ。黒龍の顕現を切欠とした変化を直に体感し、激動の中を

神無しで生き抜いたからこそ、今の神を敬い、しかし妄信することなく、ヒトの手でヒトの未来を形作らんとする、崇高なる国となったのだ。

「……………ふむ、これはいい詩になりそうな予感……………始まりをどうするか、ですね」

「貪欲だな。いや、その貪欲さがあるからこそ、か」

「お褒め頂き、有り難い限りです」

陸の女王の上鱗、堅殻をふんだんに用いた鎧を纏う青年の腰には、同じ素材を用いた細剣。それに加えて、帝国で実験の最中である護石の中から選んだ『演奏』スキルによる演奏バフの強化、『広域化』による効果範囲拡大と、自力で考え、編み出したガチ寄りの装備構成。武器も、殺傷力の低さを補う毒属性を宿すなど、貪欲に強さを求めていることを雄弁に語っている。

『蒼の薔薇』に属するような逸脱者も、『朱の雫』が有するような強大な武器も持たないながら、アダマントタイト級として格落ち扱いされることなくやってこれたのは、慎重ながらも他二チーム以上に貪欲に、自らのスキルアップのチャンスを掴み続けてきたからこそ、だ。「んんー、ですがやはり悩みますね……………その昔話は、スレインで販売しているのですか？」

「いいえ。従属神の暴走以前はあつたそうだけど、あれを機に中止されたそうよ」

一時期、神への不信が強まった時期があつたのは、当然のこと。

彼らより受け継いだ武具を持つ漆黒聖典は兎に角として、他国の者では武具の質の差が大きすぎて、甚大な被害が出るところもあつた。復興支援に出向いた者ほどその傾向が強くなりやすく、それ故に当時の神官長たちは、六大神の功績が疑問視、或いは否定されることを恐れたのだ。

信仰が消えることではなく。救世主であつた者たちが、悪と誹られることを。

「成程な。あれが原因となれば、私が知らないのも無理はないか」

「少し心配性が過ぎる、って思わなくも無いけどね」

軽く肩を竦めた番外席次だが、モモンガには当時の神官長の判断が理解できた。

そして、一人空を見上げ、胸中で呟くのだ。

(……………そうだよな。恩人が悪く言われるのは、絶対に嫌だもんな)

仲間たちは、いない。だからといって、気を抜くつもりは毛頭ない。

死を迎えた後、彼らとあの世で会えた時に、胸を張って顔を合わせる為にも。